THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

大正十四年五月一日發行（毎月一回一日發行）

第四十年　第五號　第四百四十七號



二十分して鏡を御覧
生々した美しい黒髪に染る
赤毛染去らが
ナイス
本舖 大阪 東京 丹平商會藥房
▲全國化粧品店及藥店にあり
ナイスの特長
■タツタ二十分で
■自然の色艶に染まり
■落ちず褪せず、用方簡易
ナイス

ノベル賞金を得たる白耳義文豪マーテルリンク著　文學士栗原古城譯

八版

靈智と運命

▲四六判總布製・定價金貳圓貳拾錢・郵税十錢

人間の運命は果して先天的に豫定せられたるものなりや否や人間は自らの努力によりて其運命を改造し能ふべきや否や、將た又人間の理性は奈邊まで信頼せらるべきものなりや。これ實に全人類の頭腦を惱まし來れる千古の疑團なり、マーテルリンクは、其思索の有らん限りを竭して、遠くは不可思議なる神秘境に其思ひを馳せ、近くは日常生活の一些事をも以て逃さずして所謂『運命』の正體なるものを剔抉解剖して餘蘊無からしむ、靈智の明鏡一度輝いて萬妖悉く其影を潜むるの概あり、求道の士は必ずや空しく本書を看過せざるべきを信ず。

ノベル賞金を得たる白耳義文豪マーテルリンク著　文學士栗原古城譯

二十版

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

定價壹圓九拾錢　郵税十錢

人間の死後は果して如何、絶滅か永生か將た「醒むるなきの睡眠」か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し、而も闇黑の中一道の光明あり泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し將に輪廻轉生の眞理を說かんすと。現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現像に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者、即ち此の書也。譯者は將來世界を震憾すべき心靈運動の曉鐘として本書を提供する者と云へり附錄とせる「交靈術とは何ぞや」に至りては眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして物質萬能の現代社會は之を讀んで將に大なる戰慄と畏怖とを禁じ得ざるべき也。

獨逸　ショーペンハウエル著　増富平藏譯

宇宙及人生

●原名『意志及び心識としての世界』

▼下卷出來全三卷完成

本書はショ氏の私淑者にして譯出に於ても夙に定評ある増富氏が鏤骨の苦心を以て大成した名譯である。

全三卷●總紙數貳千五百貳拾餘頁
四六判ポイント組
總洋布製・函入

▼上卷　價一圓五拾錢
▼中卷　定價四圓
▼下卷　定價四圓
郵税各十八錢

東京本郷西片町　玄黃社　電話小石川一三一九番　振替東京七九九五番

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の效力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の慣は容易に改まるものでない、所が、玆に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き淸涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此效力に驚いてゐるのでわかる。

煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら蛇度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製）（パイプ付）

金參圓五十錢（サツク入象牙製）（パイプ付）

（送料各内地十八錢 臺朝樺四十五錢）（代金引替内地卅錢 臺朝樺五十五錢）

發賣元 東京大森不入斗四五一 振東五二九壹壹 榮川堂

代理店 東京京橋區瀧山町十三 天下堂

整腸消化劑

ビオフェルミン

多年醫界に於て其奏効を確認せられたる
腸疾患の治療及豫防劑！

本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして乳酸菌に依る腸內腐敗制止及整腸作用と糖化菌に依る腸內澱粉消化作用を共營す。

「適應症」急性慢性腸加答兒、下痢、常習便秘、小兒綠便、小兒消化不良、慢性腎臟炎、糖尿病等……

＝粉末及錠劑あり、全國知名藥店に販賣す＝

發賣元
株式會社 武田長兵衞商店
大阪市東區道修町

製造元
株式會社 神戸衞生實驗所
神戸市二宮町

24-148, 215

化粧品

東京銀座資生堂

大阪市東區南久寶寺町四丁目　大阪支店



清新化！
萬象を清新化するは
新緑！　紳士の服裝
を清新化するは……
純品質主義の
純國產品
鷹印帽子
東京大阪
株式會社　高橋製帽所


チユーブ入
クラブ煉歯磨
DENTAL
クラブ煉歯磨
朝ご食後に御用ゐになれば
齲歯を防ぎ歯を強く美しく
し健康を増進せしめます
含嗽用
クラブ水歯磨



虛弱者を強健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは八大醫學博士の御推奨と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血強壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上強力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黄病、腺病及肺結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後快復期姙婦、授乳婦、產後、虛弱孤獨者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

補血強壯榮養增進劑	單味ブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓	大瓶一月分 金三圓
神經性疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓五十錢	大瓶一月分 金三圓八十錢
腺病質特効補血強壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓五十錢	大瓶一月分 金三圓九十錢
健胃補血強壯劑	キナブルトーゼ	小瓶半月分 金二圓三十錢	大瓶一月分 金三圓八十錢
呼吸器系疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶半月分 金三圓六十錢	大瓶一月分 金五圓五十錢

東洋各地藥店

說明書進呈

發賣元 本舖 藤澤友吉商店

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府四小門町四十二

大正十四年

中央公論

五月一日發行

五月號

第四十年 第五號

第四百四十七號

「被衣を取れ！」「覆面を脱げ！」田中政友會新總裁！

高橋是清翁に代つて新たに政友會總裁になつた田中義一男については　僕は殆んど知る所が無い。（彼について知る所が無いと云ふ事は國民としての恥であらうか。少くも僕はちつとも恥とは思はない。）

田中男は長州の出身で、陸軍大將で、長閥軍閥の寵兒で、山縣公の秘藏ッ兒で、軍人中では、政治家的資質と野心とを有し、寺内伯の後繼者ではあるが、伯よりは少し悧巧で、今年六十二歲のお爺さんである位の即ち普通、新聞を讀む程の人の誰でもが知つて知る位の事は僕も知つてはゐた。又ある原敬贔負の政論家から、「政治家的資質」と云つた所が高の知れたもので、所謂「軍人中では」といふ制限的前詞が附き、而かも此「軍人」と云ふ言葉には　時代後れ」「沒常識」「人間の關係を命令と服從としか知らぬ」など云ふ、餘んまり芳ばしからぬ意味しか含まぬのだと云ふことを、わざ〳〵斷はつて、扨てその原敬贔負の政論家の云ふには、「原内閣の時に田中義一が陸相となつたのは、全く山縣公の隱目附け、陸軍庇護の隱れたる、而かも一番大きな役目を有つてゐたのだ、彼ならば原と角力つてもさうはヒケは取るまい。之が山縣の肚であり、彼の自負であつたのだ。ソコデ内閣が出來るや否や原と田中の兩人は土俵の眞中で、カツキと四つに組んだ。田中は一寸寄ろうして見たが、原には少しも通じなかつた。足を飛ばすか、差手を拔いてなにか業をしたいと思つたが、それも出來なかつた。する中、原は平氣な顏をしてヂリ〳〵と寄つて來た。オヤ〳〵と思つてる中に、三尺、二尺、一尺と土俵が詰つて、俵の近くまで寄られてゐた。コレハ〳〵と思つて原の顏を見ると、原は恰も戲談だ云ふやうな顏をしてニコ〳〵笑つてゐた。併し此ニコ〳〵は固より田中に取つて氣持のよいものではなかつた。「コレではいかん」と思つて田中も狼狽て出した。原が强引に寄り出さうとしたら、ヒネつてやらう。浴せ倒しに來たら打棄つてやらうと腰を据ゑて身構へた。所が原は强

引に寄つても來なければ、浴せ倒しにも來ない。相變らず、ヂリ〳〵と寄つてこるナと思つてると、田中の足はもう土俵の外に出てゐた。原は八百長角力でもあるかのやうにニヤ〳〵笑つて、田中に花を持たしてゐたが、田中の皮膚は蒼くなつて、腕の下からは脊汗が流れてゐた。」と語つて、「どうも君何と云つても段が違つたんだよ」と恰かも自分でも勝つたやうに鼻を蠢めかしてゐたのを聞いたことがある。

原の政治家としての遣り口を批評するなら、其批難に値するものは數限りもなくあるだらうが、政治家としての手腕や力量や手練や手管にかけては、サーベル上りの田中などと比べ物にならないだらうことは勿論の話で、何にも特に此原敬贔負の政論家の提灯持ちを要しないに相違ない。

「普選」「貴革」の如き重要問題多く、「樞府」「貴院」の如き嫁いぢめの姑が出裟婆り、多くの問題が殆んど流産、死産に近き大難産にて、辛うじて鳧を附けた第五十議會の幕が閉じると同時に「高橋首相辭任」並に「高橋政友會總裁隱退」と云ふ問題が持ち上り、さうして又それと同時に「田中陸軍大將政友會新總裁に」「田中大將丸裸になつて政界に入る」と云ふ事件が出て來つた。

僕は今茲で、高橋是清論をやる意志もなく、又其暇もない。併し其財政上の意見に於て殆んど北極と南極ほど違うて居る消口ライオン蔵相が、議會に於て、最大級の惡口を放つて居りながら、三派合同で同じ内閣に椅子を並べる以前に於ても、「高橋は人間は面白い」と云つて居つたさうだし、又あの惡口屋の犬養も、之も矢張り同じ内閣に列しない以前に於ても「達磨は人間は面白い」と云つて居つたさうだから、人間の面白いことはもう折紙附と云つてよからう。それに第一黨の首領でありながら組閣の資格なきものと見縊られたのに激して、爵位を抛ち、貴族院議員を辭し、原の地盤から衆議院議員になつて出るなんて、全く面白い「春秋」の筆法を以てすれば

「護憲軍」の大捷し、三派聯合内閣の成立したのは、高橋是清居士の發心を以て根本原因とすと云つてもよいと僕は思つて居る位だ。併し人間として面白いお爺さんでも、政治家として、殊に政黨首領としては大分困つた點もあるらしい。第一、政治家としての經綸と識見に乏しい。積極一點張りの財政政策――周圍の事情も、現在の狀態も、將來の危險も一切お構ひ無しの積極政策――之より外に此翁の意見はないらしい。第二に政治家として餘りに政權に執着が無さ過ぎる。イヤになれば、何時でもヤメル。面倒臭くなれば即刻拋り出す。個人としては恬淡ともいひ、禪味ありともいはれようが、それでは他の黨人が困る。危かしくつて附いて行かれない。其他政治家としてのいろ／＼の資格に缺けて居る爲めに、此翁單獨で、政權に有り附けることは最早や絶望らしい。小泉策太郎など云ふ政權屋が、長州の狸爺三浦觀樹などに說いて、田中を起たしめた最大原因であらう。因に云ふ、小泉策太郎は、今度の高橋、田中黨首すげ換えの張本人と目されてゐる。そして世間にいろ／＼の非難あるを辯解する積りか、「國民」紙上に「高橋翁退隱と最近の政情」なるものを數日に亘つて連載してゐる。之によつて視ると、彼は高橋總裁の高風淸節に感傷して、總裁の爲め、黨の爲めに一肌脫がうと決心した。家屋敷を抵當にして黨の費用に獻上した。と云つて、恰かも浪花節にでも出て來る親分乾分的道德を以て政治道德と心得。政治とは血性男兒が私財を拋つて親分や黨の爲めに一肌脫ぎ、場合によつては生命をも捨てることだと云ふ風に考へて居るやうに書いて居る。――其癖政權の推移の際に附け入つて株の賣買や利權の分前やによつてボロイ儲けをすることなどにおくびにも出してゐない――御當人は男を賣つた積りで「男子の面目にかけて」などと、大變得意になつて居るやうだが、僕等はかう云ふ連中がゐる爲めに、日本の政治が、何時までも封建的氣分と賭博的臭味を脫し切れぬのを痛憤してゐる。）

此種術計畫は昨年の夏頃から初まつて、機は段々熟しつゝあつたのであるが、併し高橋翁の發表は、策士連の

豫定よりは餘程早過ぎたやうである。善意か惡意か故意か偶然か。或は此等椎木の單純直截よりか、議會が經ると直ぐ、他の準備とか都合とかに係らず、サッサと辭表を出し、サッサと發表して了つたやうである。鄕里萩に歸つてゐた田中も、大患から辛うじて一命を繫ぎ留めた熱海の三浦も、政界のあちこちを飛び廻つてゐた小泉も大分面喰つたやうである。

にも拘らず、現に仍高橋の辭意は固い。豫定の事實だ。加藤首相も承知した。政友會幹部も首肯した。田中將軍は急遽東上する。あの軍閥の權化の如く思はれた田中が陸軍大將の軍服を脱ぎ、男爵を抛ち、サーベルをかなぐり捨て、本當の丸腰丸裸となつて、政治界に乘り出すと云ふのだ。全く陸軍と縁を絕つて一個の政治家として君國に御奉公する。「自主的外交」「日支親善」「滿蒙政策」「軍務大臣文官任用」等が政綱の主もなるものだと云ふ。將軍の上京を途中に要した特派記者は、「未だ軍服を脱がざる中は何事も談ずるを得ず」など特電する。翌日の新聞を見れば、軍服を脱ぐにあらずして、現役服を豫備服に代へた丈けだ。辭爵の意志はなしと云ふ。一寸オヤ〳〵と思ふ。又「田中男多分承諾すべし」など云ふ仰々しい見出しがある。自分から「成りたくつて運動して成つた人」に「承諾すべし」もないものだ。其翌くる日は「正式に承諾す」「承諾の回答を與ふ」など大きな文字で、豫定の事實を意外の事の如くに記して居る。田舍者が此芝居を見て「俺らが行つた日にや、判官さんが腹に突つ立てゐるとそこに恰度よく由良之助が馳け込んだよ」とか「勘平が運がよくもお輕の乘つてゐる駕籠にバッタリ往道で出會たのですナ」とか話して居るやうなものだ。

高橋翁は農相商相を辭した。政友會總裁を辭した。田中男は政友會新總裁となつた。そこで內閣側及び憲政會側では、三派協調の趣意に基いて田中總裁の入閣を求めてゐる。田中男は未だ黨務に熟せざるを名として自身

兒に近きまでに醜き姿をして生れ來たのではあるが、兎に角大正十四年三月廿九日午後五時廿八分と云ふに、貴衆兩院の協議會を通過した普通選擧法案は、政界無事平穩なれば三年後、其前に解散でもあればもつと早く實施せられ、從來三百萬人の選擧權者が一躍一千四百萬人（之は若槻内相の見解なるが缺格條項たる「貧困」の解釋によつて多少の減少あるかも知れぬ）となつて從來の約四倍半になつたから、今日の政黨の黨勢には否應なしに多大の變化を來すことは明かである。夫れ故に政黨の現狀や其分野や、其離合を重大視する氣には一層なれないのであるが、田中男が政友會の新總裁になつたについて、僕の關心する問題は只一つあるのである。

それは何かと云ふに、彼が政友會新總裁となつて政界に身を投じたのは、陸軍の味方としてゞあるか、或は敵としてゞあるかと云ふ一點である。軍閥の寵兒たりし彼に、「陸軍の敵」と云ふ敵と云ふ文字を用ふるは、ちと可笑しいけれども、いふ意味は、彼は「國家」の爲めに「軍閥」を犧牲にし得るかどうか。し得れば「軍閥」から見れば「陸軍の敵」と見ゆる、それを指して云ふのである。繰り返して云ふ。彼れ田中義一男の軍服を脫ぎ、政界に入つて來たのは、「陸軍の味方」としてであるか、將た「陸軍の敵」としてであるかと。是れが僕が今度の事件について關心する只一つの點である。

我が陸軍の我が日本國に對する功績の顯著なる何人も疑ふものはない。帝國の威信、帝國の隆盛の今日ある、陸軍の力に負ふ所最も多い事は小學兒童と雖も銘記してゐる。固より「陸軍々人」も「日本國民」から成り立ち、陸軍の軍費を初め、其施設經營萬端、皆「國民全體」の後援若くは支持によつて出來てゐるのであるから、陸軍の功績は國民全體の功績であつて、特に陸軍のみを威張らせる必要がないと云ふ人もあらう。勿論である。併し國家の機關が幾つかに分立してゐる時に、其分立した一課の功績が殊に著しい時に、其一課に特に感謝することは

決して不合理ではない。國民は實に自己の産んだ「陸軍」を我家の名譽とし、秘藏ッ兒として、甘やかせる丈け甘やかせ、崇められる丈け崇め來つた事、日清・日露の戰役後隨分久しきに亙つたのである。そこで「陸軍」は我國に於ける立派なる「驕兒」となり濟まし、「國家」の名を振り翳にして、「政府」の云ふ事も、「國民」の要求する所も、耳にも入れず、鼻であしらふやうになつて了つたのである。其後所謂物換り星移つて、世界大戰爭後は、戰爭及び軍備に對する、國民の觀念も變り、殊に日本陸軍の假想敵たりし大帝國が瓦解したので、老大なる常備陸軍の必要は頓に減少した。にも拘らず、陸軍は——といふよりも寧ろ所謂軍閥は、自己の勢力圏の縮少するのを本能的に忌諱し、いろ〳〵の口實と術策を以て陸軍の縮少を肯んじないのである。ヤレ朝鮮人の陰謀とか、支那四百餘州の不安とか、ヤレ滿洲、蒙古の鎭定とか、いろ〳〵の夢やら幻覺やらを擔ぎ出して、識者を笑はせ、又憤らせる。そして當人は、醫者の病人多きを欲し、坊主の死人多きを望むと同一心理たることに氣附かない。今度の議會に於て、僅かに四個師團の減少の可決を見たけれども、其れと同じ費額を軍機改良費に繰り入れ、陸軍費は依然として海軍費に次ぐの巨額を占めてゐる。今や世界の大勢上、殊に日本の國防上、我が陸軍の過大にして、現在の二分の一若くは三分の一に減少して差支なかるべきことは殆んど定論と云つてもよい。陸軍が、何時までも「國論」若くは「輿論」を全然無視し得ざるに至つたことは衆目の睹る所で、殊に普選實行の曉には、今より一層陸軍縮少論の旺んとなるべきは火を睹るよりも明かである。

こう云ふ時勢に方つて田中義一將軍の政界に出て來たのは何の爲めか。どうせ陸軍は縮少の運命にある。縮少するのが國家の爲めである。併し陸軍に聲望なき人の手ではなか〳〵實行が六つかしい。其中に文官出身の陸相も出來るとする。こう云ふ素人の手でいゝ加減に縮少などされては滅茶〳〵だ。どうせやるなら、自分の如き絶對の威望あるものゝ手で、合理的に縮少したい。若し陸軍が自分に刃向ふなら刃向ふがよい。自分は陸

軍の叛逆兒と呼ばれよう。陸軍の賊と呼ばれよう。口惜しいが國家の爲めなら仕方がない。自分の心事は分る人には分り、分る時には分るだらう。自分の陸軍につらいと見ゆるのは陸軍が可愛いゝからだ。千松を見殺しにする政岡の心だ。陸軍は國防の許す範圍に合理的に縮少して見せる。陸相に文官任用の途をも開く。國家と國民と陸軍と利害のピッタリと合致したものにして見せる。――若し斯う云ふ心掛けで、政界に投じて來たものならば、彼は實に見上げた男であり、彼の政界入りは極めて重大の意義を生ずる。

若し其反對だとする。――國民の陸軍を馬鹿にするにも程がある。日本が大陸に勢を張つたのは誰のお蔭だ。國際舞臺の一有力者となつたのは何の爲めだ。陸軍と云ふものがあつたればこそだ。然るに今の日本國民はどうだ。陸軍を仇敵と思つてゐる。軍人を國賊だと思つてゐる。此輕薄兒め！此忘恩兒め！四個師團減少は目を閉つて、涙を呑んで、妥協した。併し之が最後の妥協だ。之れ以上附け上るな！附け上つて、もう二師團減じろ！半減にしろ！三分の一減にしろ！などといつて見ろ！朝鮮が亂れたらどうする！、支那が騷いだらどうする！滿洲、蒙古はどうなつてもいゝのか！算盤勘定しか知らぬ商人共め！國家の前途を危うするのは彼等だ！個人〳〵が金を持つても國家が弱ければどうする！陸軍が弱ければどうする！こゝに俺がゐる、田中義一がゐる。俺の息の通つてる間は、陸軍にはあと一指もさゝせぬぞ、俺の眼の玉の黑い中は、陸軍の事には口を出すな！――狂人か白痴でない限りはまさかそこ迄はいはぬだらうが、それに似たやうな腹持ちで政界に乘り出して來たのなら、それこそ呆れた馬鹿者で、彼の政界入りは徹頭徹尾、呪ひに値し、嘲りに値ひする。

今日まで新聞に傳へられる所では、彼の發心の眞原因が何れにあるか、まだ分らない。まさか漠然と總理大臣

になつて見たい。山縣や、桂や、寺内などの先輩のやつた所を、俺も一度やつて見たい。――まさかそんなんぢやアないと思ふ。陸軍以外にも抱負があるのかも知れないが、併し彼の活動舞臺を、陸軍中心として觀ることは、さう大して間違なからう。一二の新聞で書かれた、「自主的外交」「日支親善」「滿蒙政策」「軍務大臣文官任用」など云ふ看板を見れば、陸軍擁護のやうでもあり、陸軍開放のやうでもあり、まだどうもハッキリとしない。

僕の希望は其まだハッキリしない所をハッキリさせて欲しいと云ふのだ。彼れの舞臺に出て來た姿を見れば上﨟の被衣を被つて來たお姫樣と、眞黒な覆面頭巾を蒙つてゐる大男とチャンポンに映る。被衣を取れば、美しい姫御前の代りに稚兒髷の少年が出るか、將た口が耳まで割れた靑隈取りの妖怪變化があらはれるか一寸分らない。又覆面を取ると果してダンピラを引き拔く泥棒であるか、或は案外にも忍ぶ戀路の優男であるか、之も一寸分らない。早く被衣を取れ！田中新總裁！早く覆面を脱げ！田中新總裁！君の顏と正體を見屆けた上で、僕は君の行動に對する贊否の態度を極め、祝ひの辭なり呪ひの辭なりを申し述べよう。

田中新總裁よ！聞く君、伊國首相ムッソリーニに私淑すと。人は往々己れと正反對の性情の人に傾倒する。山縣公の家康を愛好せずして秀吉を敬重する、與謝野晶子の淸少納言を推賞せずして紫式部に傾倒する、此傾向の一例とするに足る。君の性情、果してム氏のそれと相一致するか、或は相反撥するか、僕之を知らぬ。併しム氏がサンジカリストよりファシストに變りしを逆に、君は「軍閥」より「人民黨」に改宗せよ。君の政界入りの意味と、君の公人的生命は此一事を外にして斷じてないと僕は信ずる。

――（大正十四年四月十三日病床にてT・T生）――

中央公論



第四十年第五號
五月號
第四百四十七號

新政治意識の發生と無産政黨の前途

大山郁夫

一　普選法に對する民衆の心理狀態

『第五十議會は、普通選擧法の制定に依つて、我國の政治史上に於て永遠に記念されるべき議會だ』といふやうなことは、今日このごろ、市井の大多數の人々の口の端に上つてゐる常套語である。

もとより、彼等が冷靜になつて、その第五十議會で制定された所謂普通選擧法を振り返つて見るときには、彼等の多

くは、それに向つて僅かに衷心の歡聲を擧げるよりは、寧ろまづそれの畸形化を悼む方が正當であることに氣附かないでは居られないであらう。即ちそれは、誰れもが否定出來ない通りに、現内閣に依つて立案された當初から既に、「普選」の名に副はないやうな幾多の缺陷を帶びてゐたものであつたが、更らにそれが樞密院の關門を潜ぐつて居た際に、それの重要部分に深傷を負はせられ、それから衆議院を無事に通過した後、愈々貴族院の手術臺の上に置かれて無殘に切りさいなまれ、紛れもない不具ものにされて、最後に兩院協議會の手に掛つて幾分か原狀に近く恢復したものの、尚ほ全體の上からいへば、矢張り創痍滿身の醜き姿で世間に押し出されなければならない運命を持つて産まれて來たものだからである。

それにも拘らず、寛大なる公衆は、それをすら歡迎しないで居られないやうな衝動を感じてゐる。いふまでもなく、そこには、幾ばくかの傷けられた感情も流れては居る。が、更に彼等の大多數は、普選法案の議會通過の報に接したと同時に、一齊に發作的に歡聲をあげた。そしてその騷ぎは、いまだに鳴りを鎭めないでゐるのである。無論、彼等のかうした態度が、かうした瞬間に於て最も多く輿論を動かす力を示すのを普通とする一般の新聞紙の報道や論調の刺激に負うて居ることの決して少くはなかつたといふことも、拒めない事實である。けれどもそれは、ただそれからばかり來てゐるものでないことも、同樣にたしかな事實である。といふことは、我々には決して不可解なことではない。即ちまづ第一に、新たに制定された所謂普選法は、その前身であつた選擧法改正法案が、大正九年に始めて第四十二議會に提出されて、そして當時の政局を支配してゐた原内閣がそれを切つ掛けに議會を解散した時から約五箇年後の今日に至るまで、餘りにも永き産みの苦しみの裡に置かれてゐたものであつた。で、民衆は、その間を通じて、異常の苛らだたしさを以て、それの出生を待ちあぐんでゐたものである。かくて、彼等の忍耐力が最早その頂點を通り越さうとするばか

りになつてゐた時に當つて、漸く加藤内閣の手に依つて、極めて不滿足な形式に於てでにせよ、兎に角それが決定的に立案されたまではよかつたが、しかしそれは、それから先き刻一刻と益々難産の狀態に陷つて、一時はそれの生命さへも氣遣はれるまでに立ち至りながらも、わづかに最後の一瞬間に於ける局面轉換のために、危ふく死産から救はれたやうな經歴を潜ぐつて來たものである。もとより、それがあゝした畸形になつて産まれ出たよりも、寧ろ全然の死産に終つて、そして民衆がそれを起點として、更らに新たな、より完全な普選法の出現のための努力へ出直ほす機會を持つた方が一層よかつたのではなかつたか、といふやうなことも、たしかに一の疑問となつて殘る餘地がないではなかつた。けれども、他方に於ては、縱しどういふ性質のものにもせよ、兎に角普選法の名のつくものが、萬一この際一旦政界から葬り去られてしまふやうなことになりでもすると、更らに他の新たな普選法が容易に産まれて來ないかもしれないと危惧される理由もあつたし、また縱し假りにそれが産まれて來ることが可能であるにしても、そのためには今後尚ほ相當の年月を要するであらうと懸念される根據もあつた。それに、普選の要求の叫びを現在までつゞけて來たことに依つて今では可なりに疲勞して居る民衆が、この上新たな普選法のための努力に堪へ得る氣力を餘して居るか否かさへも、全然問題にならない譯ではなかつた。否、さうした氣力が尚ほ民衆に殘つてゐるにしても、それは無暗に濫費を強要されるべきものではない。近代人の生活は無限に複雜である。そして政治生活は、決してそれの全部でないどころではなく、たゞそれの一面にすぎないものである。無論、政治生活は、近代人の生活の他のすべての方面に密接に交渉してゐるところの、それの非常に重要な一面を構成してゐるものであるから、時としては、民衆がその主力を擧げて、政治生活の上に集中する必要を持つことがあるばかりでなく、さうした必要が相當の期間に亘つて永續することすらある。普選に對する民衆の努力が、これまで意外に永く持ちこたへられたのも、決して不必要なことでも、無意味なこと

でもなかつた。けれども、如何に必要な努力でも、過度の緊張の下に永久に續けられ得るものではなく、また續けられ得るにしても不當に濫費されるべきものではない。この點からいへば、如何に不滿足な普選法案でも、現在の政治狀態の下に於て、それしか望めないものとすると、この際まづ一應それを成立させて置いた上で、今後更らにそれを改善するための努力に向ふ方が、少くとも民衆の努力の過度の緊張を一種の局面轉換によつて緩和することにもなり、且つまたそれの不當な濫費を防止することにもならうといふやうなことも考へられた。

明白に不滿足な普選案に對する發作的な歡迎――といつたやうな、一種の逆說的な民衆の態度は、その根本に於ては、實にかうした極めてデリケートな、殆んど無意識的に行はれた心理過程の結果として形成されたものであつた。そこへ諸新聞が、普選歡迎の感情を誇張した報道や論調に依つて、唯さへ燃えさかつてゐた薪に油を注いだので、焰は一層高く揚がつた譯である。そして民衆は、諸新聞紙に用ひられた各種の合ひ言葉を反響して、「第五十議會は普選法の制定に依つて記念されるべき議會だ」とか、「普選の成立は我國の政治史上に一新紀元を劃するものだ」とかいつたやうな囃し言葉を口々に高唱したものである。

二　政局の變動を豫想せしめる普選の成立

私が上に述べたことは、兎に角單に普選の成立に對する民衆の態度の一般的傾向を說明してゐるものとして見られる時には、大抵の人々の承認を要求することが出來る筈のものだと言へよう。若しくは、それは少くとも、その言說若しくは行動を通しての示唆に依つて、さうした一般的傾向を方向づける地位にあるサークルの人々の考へ方若しくは態度を指示してゐるものとして見られる時には、恐らく中らずと雖も遠からずといふ程のところには狙ひ當てて居るものだ

と言へるであらう。

と言つて、私は無論、普選案が第五十議會に於て審議されつつあつた際に、市井の一隅から突如として純正普選團の名乘りをあげて、それに向つて反對の勢焰を煽ふるために奔走してゐた一群の人々が現はれたといふやうな、當時多少の劇的興味を挑發した事實を無視しようとしてゐるものではない。私はまた、如何なる根據からも議會行動を否認する立場から、普選法を白眼にかけてせせら笑つてゐるやうな種類の人々が、縱し言ふに足らぬほどの少數に於てにせよ、現在尚ほ全然跡を絶つまでに至つて居ないといふ事實を閑却しようとして居るものでもない。けれども、私は同時に、普選に對して示された斯うした態度は、當時の四圍の狀況から見れば、寧ろ例外的に見えたものであつて、大局の上には差したる影響を與へなかつたのであることを、率直に言はうとしてゐるものである。

しかも尚ほ一歩を進めていへば、普選に對する實際上の反對意見の表明が、あれほどの範圍に止まつたといふことは或る見方からは、寧ろ不思議なことにさへ見られたものであつた。もとより、新らたに制定された選擧法が正當に「普選」の名に値しないものであることを確認してゐる我々と同じ立場を取つて居る人々の側から見れば、それは、明かに不滿足至極のものである。であればこそ我々は、それが制定されたと同時に、既にそれの將來の改正のための論戰に着手することの必要を痛感せしめられたやうな次第であつた。しかしながら、そのことを別にしては、新選擧法が如何に不滿足な性質のものであるにしても、それは兎も角、選擧上の有權者を、僅々三百萬人臺から、一躍して一千萬人臺に增加せしめる結果を招來しようとしてゐるものである。尤も、その精確なる實數は、新選擧法中の所謂缺格條項に關する解釋が公式に決定された後でなければ、未知數に屬するものであることは事實である。がしかし、それにしても、それは、貴族院の例の不遜なる干涉法がなかつた場合のこととして豫測された有權者の概算としての千四百萬人を甚だしく下る

ことがないであらうことは、『普選實施』といふ合ひ言葉が、いまだに當然のこととして、政府及び民間に於て固執されてゐるといふ事實からでも、容易に推斷し得られるのである。だとして見ると、新選擧法が政略の上に惹起すべく豫想し得られる變動は、相當に重大なものでなければならない。それはまさしく、一種の激變であらねばならぬ。かうした激變の襲來を惹起する可能性を有する條件に對しては、必ず頑强に抵抗する既成勢力があるのを普通とするのである。それ故に、問題の普選の場合に於て、それへの否認の聲が今少しく猛烈に擧げられたにしたところで、それは寧ろ當然のこととして迎へられるべき筈のものだつたのである。ところが事實上、一方に於ては、議會行動否認論者たちは、最近殆んど絕對の沈默を守りつづけて來てゐるから、それは毫も問題にはならなかつたし、また他方に於ては、純正普選團の反對運動にしても、それは到底、それ自身の力で大局を制することが出來なかつたのである。といふやうなことは一つには、純正普選團の人々が、議會で普選への反對行動を取つてゐた政友本黨や、貴族院內の多數の人々と同樣に、普選反對の口實として提唱されるには明かに對象錯誤の觀のあつた家族制度維持論などを今更らしく舁ぎ出したことが、流石に一般世人の眼にも、餘りにも淺慮な擧動として映じたためでもあらう。が、大體の上からいへば、それは何よりも殊に普選の思想が、今では最早我國の政治社會の常識となつたまでに普遍化してゐるといふ事實に基因してゐるものでなければならぬ。從つて、純正普選團の必死になつての努力も、大局の上には何等の効果をも齎らさなかつたし、また政友本黨や貴族院の躍起になつての反對も、普選案を徹底的に覆すまでには至らなかつたといふ事實は、却て普選への民衆の共鳴及び支持が、意外に廣く行き渡つてもゐれば、また意外に根柢の深いものになつてもゐるといふことを證明したやうな歸結に導かれたやうな譯になつたのである。

我々は、普選反對者をして急にそれの贊成者に早替りさせることが出來ないと同樣に、無條件に普選の成立を歡迎し

てゐるものの熱情を直ちに冷却せしめることも出來ない。これらのことのいづれを企てるのも、我々には全然無益な仕事である。けれども我々は、前に言つた通りに、不滿足極まる普選をも、現在の狀況の下に於て獲得することが出來る最大限度のものとして甘受して、發作的にでもそれの成立を歡迎したといふのが、新選擧法に對する民衆の態度の最も代表的のものと見做すことを躊躇するものでない。しかのみならず我々は、我々の立場からも、寧ろそれに同情しようとするやうにさへ誘はれることを感じる。少くとも我々は、普選の成立に對するかうした態度が、來るべき最も早き機會に於て新選擧法を眞に『普選』の名に値するやうに改修しようといふ決心に依つて伴はれる限りは、それを一應正當なものとして承認すべき根據を持つてゐるとだけは、腹藏なく主張することが出來るのである。

が、かういふ趣旨を言ひ立てることは、必ずしも、『第五十議會は普選の成立に依つて記念されるべき議會だ』とか、『普選の成立は我國の政治史上に一新紀元を劃するものだ』とかのやうな聲言を、一から十まで、そのまま割引なしに受け容れようとすることを意味するものではない。如何なる意味合ひからでも普選の成立を祝することと、その普選が招來するものと豫想される政局の變動を正當に觀測若しくは評價しようとすることとは、全然別個の範疇に屬する二つの事柄である。そして、少くとも今回の普選の成立を我國の政治過程の自然的進行の上に於ける一段階と見做して、一先づ將來の政治行動の出發點をそこに置いた上で、徐ろにそこから先きの進路を見定めようとしてゐるやうな態度を取つてゐるものに取つては、前者をして後者の上に如何なる影響をも及ぼさしめるやうなことは、絕對的に禁物であらねばならぬ。すなはち、普選の成立への祝意は、どれほどの熱情にまで昂められても、一向差し構ひはない。だがこれに反して、普選の成立に依つて招來されようとしてゐる政局の變動の觀測若しくは評價は、どこまでも冷靜に行はれなければならない。でなければ、それは、それ自身の目的を裏切るやうな結果に陷るのを免かれられないことになるのが、

それの必然の成行であらう。それ故に私は、次に、第五十議會が果して普選法の制定によつて記念されるべき議會であるか、そして若しさうだとすると、それは一體どういふ意味に於てであるかといふ問題、並びに、普選の成立は果して我國の政治史に一新紀元を劃するものであるか、若しさうだとすると、それも一體どういふ意味に於てであるかといふ問題を、出來るだけ一切の偏見を離れた立場から考察してみようと思ふ。

三　第五十議會の功過（上）

——無産階級を嫉視する普選法——

第五十議會は、普選問題以外にもなほ、可なり多くの重要問題を處理した。そのうちでも、貴族院改革問題とか、行財政整理問題とか、師團減縮問題とか、治安維持法問題とかの如きものは、特に最も重大なる政治的意義を有するものとして、一般公衆の注意を極度に緊張せしめたものである。更らにまた、それの會期の進行中に於て、現内閣の手に依つて解決された日露承認問題の如きに至つては、單に我國の國家生活に對して非常に廣い、非常に深い、そして非常に永續的な影響を及ぼすべきものであることが豫知されるばかりでなく、同時に現在から展望し得られる限りの將來へのそれの歸趨點から見て、少くとも國際政局の今後の進展を方向づける可能性のある諸要素中の一つとしての働きをするであらう日が豫言し得られる種類のものである點に於て、それは實に、單に我國の立場から見て國民的意義のある一重大事件として取扱はれるべきものであるばかりでなく、同時にもつと廣い見地からは、一種の世界的意義を——若しくは恐らくは一種の人類的意義をさへも——包藏してゐるものだと言へるやうに考へられるのである。かうした多くの重要問題が、息を繼がせる暇もないばかりに次から次へと現はれ出て、一會期の議會の上に集積したと言つたやうなこ

とは、過去に於て餘りに類例のなかつたことである。で、この點からいへば、第五十議會はたしかに、或る意味に於て記念されるべき議會だつたといへるのである。但し、その『或る意味に於て』といふのは、誰れの眼にも、決して『善き意味に於て』といふことだけを含んでゐるものとして映ずるものとは限らないのであつて、しかも特に我々の眼には、それは寧ろ『甚だ好ましからざる意味に於て』といふ方へ、より多く傾いてゐるものとさへ見られるのである。

そのうち普選問題に關しては既に前に述べた通りに、第五十議會を最後に通過した新選擧法の諸條項中には、我我の意に滿たないものが甚だ多く含まれてゐるにも拘らず、それは兎も角、將來更らにより善き選擧法に到達するまでの道程上の第一關門に當るものとして見ることが出來る。この點から見れば、第五十議會は、或る程度に於て、我國の憲政史上に記念されるべき價値のあるものだと言へないではない。けれども、この場合に於ても、その『或る程度』が一の極めて貧弱な程度に過ぎないものであるがために、少からず我々の感激を殺いだ結果に陷つたことは、我々には遺憾に堪へないことに思はれるのである。

我々はもとより、現在の我國の議會のやうな資本階級專制の一政治機關から、我々が望むやうな選擧法が無雜作に産み出されるであらうことを期待するものではない。が、それにしても、苟くもそれが『普選』の名で呼ばれるものである以上は、縱しそれに婦人參政權や、大選擧區制及び比例代表制やが後日の問題として保留されるのは仕方がないとするにしても、せめては、選擧權及び被選擧權に關する年齡上及び住居上の明かに不當に見られる制限とか、或は選擧費用に締まる諸規定とかの上に於て最も明かに認められるところの、無産者及び薄資者に向つて幾多の不利益を課してゐるやうな諸條件が、何程かは取り除かれる位のことを希望してゐたのである。ところが、實際に於ては、さうした諸條件を撤廢するやうなことはおろか、それらを緩和するやうなことすら、政府と與黨三派との交渉の間から生まれた普選

案に於ては、初めから毫も考慮されて居なかつたのである。それどころか、若しそれに關して幾分でも考慮が費された跡があつたとすると、それは如何にしてさうした諸條件を巧妙な造句に依つて無難に存置するかについてであつた。それさへあるに、樞密院や貴族院の修正は、それらの諸條件の或るものを加重して、しかもまだその上に、政府の原案の中にはなかつた多少の財產上の制限をさへ新たに附け加へたのである。そして、かういふことは皆、普選實施後に於て實現されることが豫想される無產階級の政治的勢力の擡頭を今のうちから極力防遏しようとする意圖から出たものであることは、いふまでもないのである。といふことは、政治家たちのこの問題に關する言動の上に於て、極めて露骨に表明せられてゐたのである。それ故に、新選擧法に對する民衆の歡迎の熱情を幾分でも不純なものにしてしまつたものがあるとすれば、それは新選擧法そのものの中に含まれてゐるこれらの諸條項に外ならないのである。殊に無產階級の側に於ては、今やその點が最も鋭敏に感じられてゐるのである。それは强ち、新選擧法の缺格條項中に、「貧困」といふ言葉が態々目立つやうに挿入されてゐることから來てゐるばかりからではない。否、それは實に、新選擧法の全體に通じて流れてゐる右の精神から來て居るのである。

四　第五十議會の功過（中）

——善惡兩面の性質を帶ぶる若干の處置——

かういふ風に、或る點に於て我々が好意を以て迎へることが出來るやうな朗らかに明るい一面を見せながら、他の一面に於てそれを償うて餘りあるほどの呪はしき暗影を印したやうな問題の取り扱ひ方は、第五十議會に於て、他の若干の案件に關してもまた示された。殊に貴族院改革問題の場合に於ては、それが普選問題の場合に於てと同程度に、或は

より以上の程度に、歴然と現はれたのである。もとより、貴族院改革問題に關してもまた、現内閣から徹底的解決が望めなかつたことは、初めから判り切つてゐたことであつた。少くとも、『護憲内閣』の成立後の臨時議會に於て、加藤首相が貴族院問題に對する『善處』の態度を表明した時から既に、世人はそれについて、現内閣から餘り多くを期待しなかつた。それは、單に、擁政治下に於て憲法の修正が許されないといふことばかりから來て居たことではなく、それに加へて、現内閣が『護憲』三派の寄り合ひ世帶から成り立つて居るといふ弱味からも來て居たことでもあつた。が、そのうち、三派中の政友會が特にこの問題に關して比較的に急進的な態度を示しかけて、そして現内閣が全體として幾分かそれに引摺られて行くやうになつた傾向も見えて來だしたので、貴族院の權限に關しては兎も角、それの組織に關しては、或ひは幾分注意するに足るほどの改革が實現されるかも知れないといふやうな希望が、段々と世間に流布されるやうになつた。ところが、最後に蓋を開けて見ると、これはまた、普選問題の場合に於てよりも、一層世人を呆然とならしめたほども氣の拔けたものであつた。それ故に、假りに若し、民衆の立場からそれよりも幾倍も急を要するものと見られた普選問題が一方に控へて居なかつたものとするならば、この一事だけでも、現内閣の信用がどれほど多く傷けられたかは、測り知れないものがあつたのである。要するに、貴族院改革問題の解決もまた、普選問題の解決と同樣に、善惡兩面の意味に於て解釋されることが出來るものだといふことだけは、動かないところである。

同樣の評言が適用し得らるゝ場合は、前に示唆しておいた通りに、尙ほ他の多くの問題に關しても見られたのであるが、私は今それらに一々當つてゐる餘暇を持たないから、玆では簡單にそれらのうちの二三に觸れることだけに止めようと思ふ。で、たとへば所謂行財政整理問題に關しても、假りに現内閣が聲明してゐる通りに、過去の歷代の内閣に依つて行はれた財政上の放漫なる浪費や、國務上の煩瑣若しくは尨雜な手續とか機構とかがそれによつて幾分なりと救はれた

ものだとすれば、そこに多少の意義が認められるものといへようが、しかし同時に、この兩政整理が資本階級の利害の偏重から行はれたことの結果として、そこに或は顯著なる、或は隱微なる、樣々の惡影響が始されたことは、疑ひやうのない事實だと思はせられる根據が存してゐる。如何にもそれは、現下の財界の行詰まりを打開するために、民間の產業資金の流通を圓滑にするやうな効果を發するやうなことはあらうが、しかしそれは同時に、幾萬の失業者を一時に官界から送り出すことに依つて、この最も不祥な時期に際して、社會的不安の暗影を一層濃厚にしたやうな結果を示さなかつたといへようか？且つまた 國費の節減の如きものは、一般公衆の生活上の平安及び幸福を害しない範圍內に於て行はれてこそ始めて意義があるものであるが、しかしながら、幾多の重要なる公益事業の打切りや繰り延べに依つて纔かに實現された現內閣の財政整理は、この點に於てもまた、可なりに疑問にされるべき餘地があるやうに、私には考へられるのである。

更らにまた、第五十議會の 會期の進行中に於て解決された日露交涉問題 の如きものも、單純に抽象的見地からいへば、相互に境壤を交へてゐる日露兩國間の親交が恢復され、そしてそれに伴れて、多年不自然に抑塞されてゐた兩隣國民の經濟的及び文化的接觸が久し振りに再開され、從つてその親隣感情が深められて行く端緒が得られたものであるから、それは單に或る物質的價値を包含してゐるばかりでなく、更らにそれと共に一種の人道的意義とも言ひ得られるべき或るものを多分に保有してゐるものとさへ見ることが出來るやうに考へられる。が、我國の政府がこの日露交涉を完了した動機は、實はさういふところにあつたのではなくて寧ろ、北樺太に於ける油田及び炭田、並にロシアの他の領土上に於ける森林、漁業、鑛山等の他の各種の產業上の利權とか、或ひはまた通商の再開から豫期し得られる幾多の物質的利益とかに對する着眼だけの上にあつたものではなかつたか？ もとより我々は、たとへ日露協約がさうした原因から出て來たものとしても、それが必ずしも、文化的若しくは人道的意義を伴ふ結果に導かないに限らないことを考へるが

故に、この際兩隣國民が再接觸の機會を得たといふことを衷心から喜ぶことを躊躇するものではない。殊に若しこれが、その上に、縱し偶然にでもせよ、どの國家でもの侵略的帝國主義の自然的終熄の機運の前驅としても見られることが出來るものとするならば、我々は、二重にそれを歡迎する理由のあることを感じる。がしかし、第五十議會の會期中に於て擧げられた政府の業績の眞相及びその眞意義を檢討する際に當つては、我々は、日露交渉問題に關しても、必然的にその明暗兩面に觸れないわけには行かないものである。

また軍縮問題の如きも、今日の我國の四圍の狀況から見れば、第五十議會に於て解決された通りの四個師團減縮以上の點にまで進められることが出來るものであることは、我々は必ずしも考へられないことではない。殊に、この四個師團減縮といふものも、事實上新兵器の布置及び航空機の擴張といふやうなことを代償として行はれたものであることを追想するときには、さうしたこととの當否の問題は兎も角、それの財政上の效果が全然相殺されたものと見えることが出來るのである。それにも拘らず我々は、減師問題といふやうな、從來に於ては殆んど政治家たちの齒が立たないものと考へられた難事業が、第五十議會に於て幾らかでも行はれたといふことは、或る一の新らしき傾向が動きかけたことが、ここに暗示されてゐるものであることを思はせられる。それは少くとも、國防問題がいつまでも軍部當局專屬の問題として殘るのでなくて、一般の國家政治上の問題の一つとして、他の政治問題並みに考慮されるやうにならうとする機勢の來かかつてゐることを、無論極めて微弱な音調に於てではあるが、それとなく物語つてゐるものとすべきではなからうか？

第五十議會の上に去來した諸問題のうちで、上に例示したやうなものは、善惡兩様の性質を同時に併せ帶びてゐたものではあるが、最後に我々は尙ほ、それらの外に、横から見ても縱から見ても、乃至、どこをどう突ツついても、徹頭徹尾

ただ極度の糺彈に値する悪辣性を帶びてゐるだけで、何一つ好感を與へる點を見せてゐないものが、少くとも一つはあつたといふことを注意しないでは居られないのである。――と、これだけ言へば誰でも一も二もなく直感されるであらう通りに、それは實に、例の治安維持法そのものを指してゐるものに外ならないのである。

五　第五十議會の功過（下）

――無産階級に對する挑戰的宣言としての治安維持法――

私は今茲で、治安維持法に對する反對論の全部を、巨細に繰返さうとしてゐるものではない。それは、常々、「民意を代表する」と誇稱してゐる議會政治家たちの殆んど全部に依つて支持されながら、市井の輿論に於て完膚なきまでに攻撃されたものである。それは、政府の強辯にも拘らず、民衆の言論及び思想に對する堪へ難き壓迫を加へようとしてゐる意圖を、餘りにも明白に暴露してゐるものである。それは即ち、專制政治的精神を議會での立法を通じて行はうとしてゐるものである。畢竟それは、一言でいへば、時代錯誤的な警察國家主義を、今日に於て新に強調したものである。が、かうした諸點は、既に世上の反對論に於て言ひつくされてゐることだから、茲に再びそれを持ち出す必要はあるまい。

けれども、私は茲で是非とも、次の一事を附け足しておきたい。それは即ち、右の治安維持法の眼目となつてゐる部分は、無産階級の階級的生存表現のために絶對的に必要な團體的行動の各種の形式の上に、我國の立憲政治の現狀の下に於て許される限りの障碍を置かうとするやうな、悪辣極まる動機から割り出されたものであることが、その法文の表面上の字句からも明かに推斷される、といふ點である。

それに就いては、何よりも殊に、私有財産制度の否認といふことが、同法中に於て苛酷を極むる刑罰の對象とされて居る點に於て、それは無産階級に對するブルジョアジー側からの殺到的壓制の精神を、最も露骨に表明してゐるものと見ることが出來るのである。即ち、それに關する法文に依れば、『私有財産制度を根本より否認することを目的として結社を組織し、または情を知りてそれに加入したるものは、七年以下の懲役又は禁錮に處』せられることになつてゐる（第一條第二項）のみならず、また、同じ目的を以て、『それの目的たる事項の實行を煽動したるものは、五年以下の懲役または禁錮に處』せられる（第三條第二項）ことにもなつてゐるし、更らにまた、矢張り同じ目的を以て、『騷擾、暴行、その他生命、身體、または財産に危害を加ふべき犯罪を煽動したるものは、七年以下の懲役または禁錮に處』せられる（第四條第二項）ことにもなつてゐるのである。

私有財産制度の否認に關するかうした規定は、同法中の國體の變革に關するそれと同樣に、その刑罰の餘りに苛酷なることからして、言論思想の自由の愛護者の側からの最大級の反感を買ふに充分であるといふことの外に、その法文の解釋の餘地が過度に廣汎であり、從つてまた、その適用の範圍が全然豫測出來ないことからしても、言論思想の壓迫上に最も便利な武器を警察官吏の手中に置き、延いて社會思想家及び社會運動家の活動の上に絶大なる威嚇を揭げてゐるものだ、と言へる根據があるのである。しかも我々は殊に、さうした威嚇が私有財産制度の否認に結び附けられてゐるのを見るとき、我々はそれをブルジョアジーのディクテーターシップの現はれの一つとして見ることの、必ずしも不當でないことを思はしめられるのである。

かうした法規の支配の下に於ては、その思想上から如何なる形式の私有財産制度をも絶對的に否認してゐる人々——若しさうした人々があるならば——はもとよりのこと、私有財産制度の根本を認めて居る人々たとへば私有財産制度を

それの社會的職分と兩立する限りに於て肯定してゐると言つたやうな人々——にしたところで、屢々口を噤ぐんで沈默する必要に出會はないわけに行かないであらうことが、極めて當然のこととして考へられるのである。いふまでもなく、現在の社會思想に於て、最も精透な檢討及び最も尖銳な批判の下におかれなければならない諸多の題目の中に於て、私有財産制度の如きは、最も顯著な地位を、占めてゐるものの一つである。若しくは、言葉を換へて言ふと、私有財産制度に對する眞摯な批判が自由に行はれることは、今日の狀態の下に於ては、社會生活の無碍の進歩のための必須條件の一つとして見ても、決して間違ひではないのである。特に我國の場合に於ては、産業生活の上に於て一種の行詰りの狀態が來てゐることは、現内閣の藏相の苦しさうな說明を須つまでもなく判り切つてゐることではあり、且つまた、全國人口に比較して天然の資源が極めて貧弱であるといふことも隱れない事實であるから、眞の國民生活の安定が重要視される限りは、或る遠からざる將來に於て、國家の手に依る産業生活の廣汎なる管理若しくは調節を通じて、秩序ある經營の下に於て生産額の增加を促進し、並に無秩序なる經營の下に於ての各種の生産上の浪費を制御する必要が、最も切實なる問題の一つとして取り扱はれなければならない日が到來するであらうことは、殆んど必至の運命であるかのやうにさへ考へられるのである。さうなつて來ると、縱し私有財産制度の全的否認は問題外だとしても、少くともその調節及び整理は、必ず愼重に考慮されなければならないことになるであらう。若しさうだとすると、今のうちから私有財産制度に對する檢討及び批判を自由にしておくことは、國民生活全體の幸福の上から見て、大に歡迎すべきことでなければならぬ。ところが、新たに制定された治安維持法の如きものが言論思想の上に目を光らしてゐるやうな狀態が續く限りは、さういふことは絕對に望まれないのである。そこでは、主義としては私有財産制度の根本を肯定してゐる人々といへども、苟くもそれの事實上の或る現はれを不當なものと見て居る限りは、彼等はおそらく、心に思ふままのことを

充分に口に述べることを躊躇させられない譯には行くまい。それは何よりも殊にその適用の範圍の不明な『勸誘』とか『煽動』とかのやうな字句がその法文中に傲然と蟠踞してゐるためである。その上に尙ほ、萬一の場合に彼等の上に降りかかつて來ないにも限らない刑罰の苛酷さは、彼等をしてその前に戰慄せしめるに充分だ、とも言はなければならないのである。

衆議院に於て治安維持法案に例外的に反對した少數の代議士たちは、さすがに法文の諸部分の適用の範圍に就いて手きびしい多くの質問を內相、法相、及び政府委員に向けたが、それらに對する政府側の窮餘の答辯は、無論要領を得ないこと夥しいものであつたが、假りにさうした答辯の中にも、何程か明確性を帶びた若干の說明が見出されたにしても、それらは、個々の適用の場合に於て司法官を束縛する力を持つてゐるものではないのである。假りに若し、さうした力を持つてゐるものだとするならば、それは立法者の意志をして司法官の判斷を支配せしめることになるものであつて、從つて或る意味に於て三權分立の原則を破り、延いて立憲政治の基礎を動搖させることにならうといふものである。のみならず、司法官の自由裁量の餘地を過度に局限することは、法律の進化の路筋を阻止する結果に導かないでは已まないものでもある。さうなると、民衆はその時、一方に得たところのものを他方に失ふことになるだけならまだしも、失ふところの方が却て得るところの方より多いかも知れないことになる譯である。

尙ほまた、若し治安維持法中の私有財產制度の否認に關する部分が、その制度に對する自由討議の上に多大の脅威を揭げることに依つて、社會思想の順當なる進步を阻礙することが少くないものとするならば、それが實際の社會運動乃至勞働運動に向つて、程度及び範圍の測られないほどの大打擊を與へる可能性を示してゐるものであることは、更らに一層明白なことである。その點については殊に、それを私が上に引用した同法の第四條第三項に關聯して考へるとき

に、その最も兇暴な威嚇的一面が現はれるのである。かういふ規定が、無產階級に對するブルジョアジー側の挑戰的宣言若しくはそれの共同戰線と見られるのでなければ、何がそれだといへようか！　しかもかうした惡法が、衆議院に於て僅かに十八名だけの反對投票を受けただけで、そのあとの大多數によつてそこを通過せしめられたことを見たとき、それが無產階級の大衆の心理狀態の上に如何なる衝激を與へたかを、誰れか考へないで居られたらうか！

六　時代の轉換の徵候

我國の憲政史上に於て永遠に記念さるべきものだと一部の人々から言ひ囃されてゐる第五十議會の業績も、かう考へて來ると、決して光榮に充ちてゐたものばかりではなかつた。否、それは幾ら善く見ても、明暗二面を示したものであつた。そして我々の立場から見れば、それは寧ろ暗面を、より多く示したものでさへあつた。

が、何は兎もあれ、それは甚だ賑やかな議會ではあつた。私は必ずしも、それの會期中にそこで行はれた度々の紛擾沙汰を回想してさう言つてゐるものではない。如何にもそこでは、年來の常例に漏れず、公衆の劇的興味を挑發するには充分な、紛擾沙汰が繰り返されて、それが遂に議長及び副議長の離黨問題の實現にまで躍進して行つたことは事實である。けれども、それは年々の常例的行事が、今年は幾分か猛烈に行はれたといふほどのものにすぎないのである。私はそれ故に、茲では別にそれを取り立てて批判の俎上におかうとはしてゐない。さういふことよりも、私は寧ろ、前にも言つた通りに、非常に重大意義の含まれた多くの案件が、次から次へと重なり合はんばかりになつて、そこに現はれて來たことを、いま私の意中に描いて居るのである。

さういふ原因からも、第五十議會は、兎に角非常に騒がしかつた議會であつた。そして、この場合少しばかりの時

喩を持ち出すことが私に許されるものとするならば、それは或る一面に於て、闇と嵐との連續のやうな光景を呈した。と、私は言ひたいのである。だが私達は、その闇と嵐との底に、次で來るべき或る曉の氣分を豫感せしめるやうな、仄かな薄明を認めなかつたであらうか？

かうした謎のやうな言ひ方をこの上延長して行くことは、全く無益なわざと思はれるから、私はもつと直接的な言葉で私の立場を述べよう。私は既に、第五十議會の功過に觸れた際に、そこで如何に重要な諸問題が、私達の立場から善惡兩面の意味に解釋されるやうな方法で取扱はれたかを述べた。その場合に言つた通りに、私達は、そこでの普選案の取り扱ひ方には決して滿足して居たものではなかつたが、しかしあのやうな普選でも、あるはなきに優るといふほどの心持で、それを迎へたのである。また私達は、そこでの貴族院改革問題の處理のやうな、殆んど無意味に近かつた施設でも、それが、始めて議會の問題になつたといふことだけでもの上に、或るより善き將來を示唆する或るものが含まれてゐないでもないかのやうに感じた。更らにまた、日露協商を歡迎した私達の熱情も、必ずしも全然無條件的のものではなかつた。が、しかし同時にそれは、決して歡迎でなかつた譯ではなかつたのである。尙ほその他の諸問題についても、同樣のことが際限もなく言へる根據があるのである。かうした意味に於てならば、私達は必ずしも第五十議會は多少とも劃時代的のものだつたといふことに對して、異議を提出しようとしてゐるものではない。但し私達の立場から嚴密に言ふと、若し第五十議會に幾分の新味が加はつてゐたものとするならば、それは寧ろ時代がさせたわざだといふべきものである。從つて、第五十議會を多少とも劃時代的のものだつたといふのは、それが時代を轉換せしめたのだといふ意味に於てではなく、既にいつとはなくそれ自身を形成しつつあつた時代の轉換の趨勢が、比較的濃厚な色彩を以て、それの上に反映されたのだといふ意味に於てゞあることは、無論のことである。

七　既成諸政黨の新政策樹立への努力

第五十議會が終つたばかりの今日に於て、既に早くも普選實施後の政界の變動の豫測が、盛んに世上に流布し始めてゐる。それは、普選は時代が産んだものであると同時に、少くとも政治的には、次の時代へ導く最初の道標だといふことが、一般に認識されてゐるからのことでなければならない。私は本文執筆中、『東京朝日』の夕刊の上に毎日連載されつつある『普選實施後はどうなる』といふ問題に對する諸家の答案を、或る興味を以て讀んで居る。もつとも、それは今までのところでは、まだ二三回分にしかならないし、またその問題に答へてゐる人々の中には實際政治家たちの名も可なり多く見られるので、多少實際上の利害感によつて色づけられてゐる意見がそこに發見されるやうにも思へるが、しかし我々はそれに依つて、將來の政界に關する如何なる問題が、現在最も多くの人々の興味若しくは利害感の標的にされてゐるかを察知することが出來るのである。

ところで、かういふ風に普選實施後の政界を見越して作られてゐる多くの人々の觀測の上に於て、特に最も普遍的に現はれてゐる項目の一つは、既成政黨の分野の上に、果してどういふ動搖が生ずるであらうか？　といふそれであることは、我々が見逃がすことが出來ない一の顯著なる事實である。

また右の最後の項下に於て考慮されてゐることの重心點は、既成諸政黨の各々のものゝ勢力の消長とか、それの地盤の變動の有無とか、所謂諸政黨の分解作用が行はれる可能性の有無とか、從つてまた小黨分立と二大政黨對立とのいづれかが、今後の政界の大勢とならうとしてゐるとか、などといつたやうな點に歸着してゐるのである。

更らに既成諸政黨の勢力の消長に關しては、それを單に既成諸政黨間だけのこととして考へてゐる人々も全然ない譯で

はないが、相當に多數の人々は、既成諸政黨と、近き將來に擡頭するものと豫期されてゐる無產政黨若しくは勞働黨との間の現象として取扱つて居るのである。尤も、無產政黨若しくは勞働黨の成立及び發達の可能性については、或はそれを相當に重大視してゐる人々もあれば、同時にまた、それを極度に輕小視してゐる人々もあるが、兎に角、そのことが可なり手廣く一般公衆の注意を惹きつつある狀況だけは、そこにも如實に反映されてゐるのである。

かういふ譯で、大體の上からいへば、何づれにしても、來るべき政界に於ては、或る程度の變動の起るべきことが必至的のものとして、一般に豫想されてゐることだけは事實であつて、そしてかういふ豫想の根據は主として、新選擧法の實施後に於ては、從前に於て僅々三百萬人臺に留まつてゐた選擧上の有權者が、一擧にして一千萬人臺に膨れ上るべき筈になつてゐて、しかも新たに加へられようとしてゐる有權者の大部分が、無資產者若しくは、無產者の側に屬する人々の群だといふ事實の認識の上に置かれてゐるのである。かういふ狀態の下に於て、無產政黨の擡頭といふことが、兎も角一つの重大なる問題として、如何なる人々もの注意の上に不可抗的に臨みつつあるやうな傾向が見えだして居ることは、決して偶然でないと言はなければならないのである。

既成諸政黨は無論、この事實を無視しては居ない。否、それどころではなく、彼等がそれに氣附いて、或る程度の不安を感じ出したのは、決して昨今に始まつたことではないのである。曾て原內閣の下に、野黨提出の普選案が第四十二議會に現はれて、それの解散の契機となつたときに當つて、時の首相であつた故の原敬氏が議會に於て、「普選は社會組織を脅威するものだ」と言ひ放つたことは、いまだに有名な一事實として記憶されてゐるが、それは必ずしも反對黨を威どしつけるための無內容の虛聲ばかりだつたとは考へられないのである。我々は寧ろ、普選實施後に於て無產階級側の大衆が何等かの形式に於て政治的に擡頭すべき豫想が、多分明敏だつたらうと思はれる彼の政治家的頭腦の裡に、そ

れとなくちらついて居たものと推斷するのが當然だと考へる。いづれにしても、それ以來既成政黨の間に屢々大小の動搖が起つて、分裂とか合同とかの氣勢が絶えず見え隱れに政界の脅威となりつづけて來たが、さうした事實の陰にも、早晩避け難き無產大衆の政治的擡頭の豫想が、少くとも間接的になりと、或る力となつて働いてゐなかつたとは言へないのである。昨年の清浦内閣の成立の際に、舊政友會が今の政友會と政友本黨とに分裂して、そして前者が普選論に早替りしたり、貴族院改革の急進派となつたりなどしたのは、所謂黨界の情實を別にしては、多少とも右の事實に負うてゐたものと見ることが、必ずしも不當でないことのやうに考へられる。かうした時勢の手に無意識的に引摺られつつ、本心からは決して希望もしない普選斷行に餘儀なく指を染めるやうになつた「護憲三派」の内閣及び黨人たちが、その普選案の作成に從事した際にも、彼等が同案の上に無產政黨の出現を防遏するための種々の陷穽を伏せておくことに腐心したことも、今では一般に周知されてゐることである。しかも彼等は、さういふ仕掛けを普選案の上に設けただけでは滿足が出來なくて、無產階級に對する挑戰的宣言であることの標識を餘りにも露骨にその上に帶びてゐる治安維持法案を急拵へに作り上げて、遮二無二それの議會通過に努力したのである。

けれども彼等の不安は、彼等がさうした防禦用の障壁を彼等の周圍に築き上げただけでは、全然取り除かれてゐないやうに見えるのである。今日、普選成立後の政局の上に、一種の底氣味のわるい空氣が、何となく重苦るしく漂つてゐることは、誰れにでも感じられる。そして、かういふ際には、政界の一隅から突如として起つた例の政友會の總裁すげ替へ事件のやうなものでさへも、異常の衝動を世間に與へたのであつたといふやうなことは、必ずしも軍閥の一頭目が政界へ侵入して來たといふことのためばかりから來てゐるものではない。軍閥の一頭目がたとへ表面上だけでも多年住み馴れた界隈を見棄てて、未知の政黨生活へ足を突ッ込んだことは、見やうに依つては、師團減縮問題などと同樣

に、或る新らしき時勢の一方面を象徴してゐるものとすら見ることも出來ないではない。また近來政治的に幾分進步的態度に趣きかけた政友會が、時代錯誤的にも程こそあれ、今更らそれ自身の黨首を軍閥から輸入して來たなどとは、思ひ切つた逆轉のやうにも見えないことではないが、しかしこのことすら、表裏反覆の測るべからざるものがあるのを常とする黨界に起つた一つの出來事として見れば、全然解釋がつかない譯ではない。それよりも寧ろ、この事件がそれほども世間を驚かして、兎角の批難の標的にされたといふことの方が、より多く我々の注意に價する事實だともいへる。それは、一つは時勢が時勢であるためでもあれば、また一つには場合が場合であるためでもある。しかし何れにしても、政友會の黨首すげ替へ事件は、少くとも直接には、單に政友會といふ一政黨に限つての特殊的問題である。が、それに反して、普選實施後の政界を見越しての不安は、既成諸政黨のすべてに通じての一般的問題である。

彼等はしかし、如何にしてこの不安を乘り切らうとしてゐるか？　今や彼等が甚だしくこの問題に惱まされかけて來てゐることは、誰れの眼にもありありと見えて居る。殊に從來は一時的にも『護憲三派』の協調の樣子としての役割りをしてゐた普選及び貴革の二問題が曲りなりにでも片附けられたために、現內閣の基礎そのものまでが甚だ危ぶなかしいものになつて來てゐる今日では、彼等はますます、それぞれに彼等の獨自の立場を固める必要を意識しないわけに行かなくなつてゐるが、かうした情況の下に於て、彼等の注意の焦點は、如何にして一擧にして三四倍に增加した有權者を出來るだけ自黨に引附けるべきかの問題の上におかれるやうになつて來てゐるのである。第五十議會終了後に於て、既成諸政黨の間に、新政策樹立の聲が俄に喧しく擧げられるやうになつたのは、いふまでもなくこの傾向の上に於ける一新現象と見られるべきものである。彼等は最早、『藩閥打破』とか、『憲政擁護』とかの如き舊來の政治上の標語を絕叫するだけでは、民衆の輿望を惹きつけることが出來なくなつて來たことを自覺すべく餘儀なくされてゐる。で彼等は、

そのために民衆の實生活に觸れた政策を掲げなければならないことに氣附くやうになり、またそれを公にするやうにもなつたのである。

新政策の樹立。——それは、現在では、既成諸政黨のすべての努力の對境となりだした。もとより彼等は、今のところでは、また適當な題目を探り當てては居ないが、しかしそれが如何なる方向に求められべきものであるかについては、略ぼ見當をつけてゐるらしいのである。最近になつて、彼等の或るものが頻りに、「產業立國」とか、「社會的立法」とか若しくは「勞働立法」とか、「國民生活の安定」などの標語を數へ立てるやうな傾向に進いたことは、彼等の着眼點がどこに向けられて來だしたかを語るものでなければならないのである。そこにも我々は、時代の轉換期の趨勢がまざまざと反映されてゐるのを見る。

八　既成諸政黨と無產政黨との交渉の豫想

彼等の着眼點は、全然間違つたところにあるとはいへないであらう。けれども、問題は、彼等がその方向に於て豫期の效果を擧げるであらうか否かの點にある。

それに對する答へは、先づ第一段には、何よりも殊に當然のこととして、無產階級側の大衆の、今後に於ける階級的意識の眼ざめの增進の程度の如何の上に繫がつてゐるのである。近年來無產階級側の大衆の階級意識の眼ざめが段々と增進して行く趨勢を示して來たことは、たしかな事實であるには相違ないが、しかし大體の上からいへば、その廣さに於ても、またその深さに於ても、如何なる階級人からも、また相當の點に缺してゐるといへないのである。そこに既成諸政黨が乘じ得べき餘地が、まだ十二分にあることを思はせられる。いふまでもなく、既成諸政黨は、傾向的に持

ち越されて來た頑強な政治的勢力を擁してゐる上に、比較的に豐富な資力を運用することも出來れば、また多年の訓練に依つて各種の政治上の掛け引きにも長じてゐて、殊に無邪氣な民衆を彼等の目的のために利用するために煽動したり籠絡したりすることは、從來彼等が最も得意としたところであつた。そして彼等がこの際俄かにこの奥の手を封じようとは、無論誰れにも想像が出來ないことである。であるから、普選の實施と共に選擧權を得る限りの無産階級の大衆の部分が、初めから全然既成諸政黨に背を向けるやうなことは、到底望み得られないことである。從つて、既成諸政黨は、個々の黨としては、無論その勢力が今後際限もなく消長生滅すべく運命づけられてゐることが明かに見られてゐるにしても、全體としては、さうは容易にその勢力を失墜するやうなことはあるまいとも思はれる。

けれども、既成諸政黨が、縱し全體としてにもせよ、今後比較的にでも永續的に、それの從來の政治的勢力を充分に維持することに依つて、純然たるブルジョアジーのディクテーターシップの機關としての任務を遂行しつづけてゆくことが出來るか否かといふ段になると、問題が自ら別になつて來る。即ちそれは、今しがた言つた通りに、先づ第一には、無産大衆の今後に於ける階級的自覺の增進の程度如何に依つて決せられ、從つて第二には、現在に於て一般から早晩出現すべきものと見られてゐる無産政黨の前途の發達の見込み如何に密接に交渉してゐるものと見なければならないのである。で、私は、この問題は寧ろ、無産政黨の前途の可能性に關する觀測からそれに近寄るのが捷徑だと考へる。

上來述べたことの裡に幾分示唆されてゐる筈である通りに、無産政黨の前途に當つて、非常に重大な難關が控えて居ることは、それの前途を豫測しようとするものに取つて、何よりも先きに注意することを必要とするところのものである。私はこれを幾分でも割引して評價しようとしてゐるものでない。さうしたことは、我々には全然無益なことであ

る。が、その點を充分考慮の中に加へた上でも、我々は少くとも、現在の我國の社會及び政治狀態は、果して無産階級政黨出現のために適當な地盤を提供して居るか否かといふやうな我々が最初に先づ立ち向はなければならない問題に對してならば、これに肯定的に答へることが、必ずしも不當な樂觀に陷つてゐるものとの非難に値するものだとは考へないのである。

それは何故に？　と問はれるならば、私の答へはかうである。先づ第一に、世界大戰後或る意味に於て無産階級の時代が遂に到來したやうに見られることは、世界一般を通じての現象であるが、それが多少の程度上の相違こそあれ、我國の社會狀態の上にもまた反映されて居ないとは言へないのである。現在に於て我國の既成諸政黨の上に臨んで居る無氣味な不安も、つきるところは、これに交渉してゐるものである。彼等がこの頃になつて急に新政黨樹立の必要を叫び出したのも、實は無産大衆の籠絡といふことを、その目標としてゐるものに相違ないのである。これだけのことでも、これまでに曾てなかつたことが新たに生じたのだと思ふと、我々は少くとも、我國にも無産階級の時代が除々にでも近づきかけたことを感じないでは居られないのである。

次に第二には、普選實施の結果として、選擧上の有權者數が激増して、新たに加へられようとする有權者の數が從來のそれよりも三倍に近い位も多くならうとしてゐることは、何と言つても、我國の政治上の一激變として見なければならないものである。それは、新選擧法に對して如何程不滿を感じてゐるものも、率直に認めなければならないことである。そして、かうした目星しき激變が起りつつある瞬間は、舊來の既成諸政黨とは全然その成立條件及び根本主義を異にしても、しかも社會的及び政治的に堂々とその生存表現をなし得る正當なる根據を持つ新政治的勢力の出現のために、最も時期を得たものであるといふことは、少くとも社會心理的基礎から言ひ得られるのである。社會心理的理由の一

般の政治過程の上に極めて重大なる影響を及ぼすものであることは、多くの政治家たちが、各自實感的に會得してゐることである。

私にもとより、普選實施後に於て、無産政黨が一擧にして世人を驚倒せしむるに足るほどの大勢力とならうとしてゐる、といふやうなことを豫言しようとするやうな誘惑に陷つてゐるものではない。けれども、私は同時に、それがために、現在の我國の社會及び政治狀態が、或る程度に於て無産政黨の出現のための好機會を提供してゐることを言ふことを遠慮しようとしてもゐるものではない。それにしても、無産政黨が極めて微弱な勢力から出發しなければならないことは、多くの觀察者らの指摘してゐる通りである。が、それの前途の可能性に對しては、私自身は或る一派の論者たちとは異がつて、可なりの樂觀的態度を取つて居るものである。少くとも私は、それに多大の希望を繋いで居るものである。しかしその點は、今少し先きへ寄つてから言ふことにする。

九　新政治意識の基礎

繰り返していふことになるが、無産政黨の前途の可能性の最初の――そして最大の――條件は、無産大衆の今後に於ける階級意識の増進といふことである。それと共に、彼等の間に於ける無産階級本位の政治的知識の或る程度に於ける普及といふこともまた、この點に關聯して無視することが出來ない要素である。無産大衆が階級意識に眼ざめ、且つそれに加へて無産階級本位の政治的知識を或る程度に於て獲得する以上は、少くとも彼等は、より少く既成諸政黨の甘言に誑ぶらかされる危險に晒らされることになるであらう。それと同時に彼等は、無産大衆の階級的利害の政治的表現を最も忠實に――且つ最も聰明に――遂行し得るものは、本來ブルジョア政黨である既成諸政黨でなくて、無産大衆の中か

ら產れ、且つ無產大衆を成立の基礎とする無產政黨であることを知るやうになるであらう。

かういふことはすべて、現在無產政黨を企畫しつつある當事者たちの側に於て、政治教育を中心とする啓蒙運動を起すことが急務であるといふことを示唆してゐるものである。ところが、第五十議會に於て制定された治安維持法は、從來から旣に幾多の障碍の下におかれてゐたこの種の啓蒙運動に向つて、更らに無限の困難を加重したものである。この點から見ても、無產階級に對するブルジョアジーの共同戰線としての治安維持法の本質が、最も確實に摑み得られるのである。

けれども、治安維持法は、それと同時に無產階級內の樣々の分子の大同團結を促進する効果を示す可能性のあるものであることもまた、我々が無視してはならない一要點である。無產階級側の大衆が階級意識に眼ざめる時には、全體として見たブルジョアジーに對してこそ彼等の共同利害關係を感じる筈であるが、しかし無產階級と一トロに言つても、それは、幾多の特殊の集團的利害關係を持つた諸集團から成立つて居るものであるから、彼等は如何なる場合にも共同の階級的利害感を特殊の集團的利害感の上に置くものとは限つてゐないのである。殊に現在の我國の場合に於て見られる通りに、無產大衆の階級的意識の眼ざめが充分でないばかりでなく、まだその上に都市の工場勞働者とか、官業勞働者とか、農村の勞働者とかの間に樣々の利害感の複雜な交錯が存してゐるやうな狀態の下に於ては、このことから來る障碍が、最も鋭く感じられるのである。けれども、治安維持法は、その表面上に露骨に表はれてゐる右の本質に依つて、無產階級の共同利害感の意識を强めることに依つて、それの大同團結を促進する効果を、決して少い程度に於てでなく示すであらうことが、期待し得られるものである。もとより、無產政黨の企畫者たちは、同法に依つて得るところを以て、それに依つて失ふところを償ふことが出來ないのは無論だが、しかし右の一端は、彼等が注意しておいていいこ

とだといふことだけはたしかである。しかのみならず、言論思想壓迫上の最も便利なる武器として見るべき治安維持法は、本來學藝及び思想の進步といふことに對して比較的に多く關心するのを常とする知識階級側からの反感を買つてゐることも少くないのである。このこともまた、無産政黨の企圖者たちの側に於て、相當に考慮の中に置いて然るべきことである。

最後に、無産政黨の企畫者たちは、一方に於て、無産大衆に向つて政治教育を含む啓蒙運動を行ふ必要に際會してゐると同時に、他方に於ては、一般公衆に向つて無産政黨の道德的存在價値を示す要求にも迫られてゐる。無産階級の政治行動は、純粹に勞働者だけに依つて行はれるそれの經濟行動とは異つて、それが議會を中心としての活動をなすことからの當然の歸結として、無産階級以外社會的諸分子の支持や後援やをも必要とするものである。もとより、無産政黨は無産大衆を以てその成立の基礎とするものであることは、疑ひのない事實であるが、しかしながら、無産政黨は同時に、無産階級以外の社會的諸分子——殊に現在の社會生活上に於て准無産階級的地位を占めて居るとか、或ひは社會進化の過程に於て必然的に純粹の無産階級的地位に趣きつつあることの自覺を强要されてゐるとかの知識階級及び小市民階級など——の側から來る同情的聲援を歡迎する理由を持つてゐるのである。この點からして、無産政黨は、それ自身の道德的存在價値を一般公衆の前に主張する必要に迫られてゐるのである。

既成政治的勢力を代表する政治家たちは、現代に於て既に、道德的根據から無産階級に向つてケチを附けようとしてゐる。それは彼等が、普選實施後に於て、煽動政治家たちが無知の民衆を蠱惑する危險があるといふやうなことを盛んに高唱して居ることに依つても知られる。けれども、無産政黨は、それを恐れる必要はない。といふのは、無産階級の

イデオロギーは、現在段々と民衆の間に湧き起りつつある新道德意識の內容となりつつある傾向が顯著になつて來るからである。無論、無産階級のイデオロギーは、支配階級の道德觀念のやうに天上から持ち下ろされたやうなものでなくて、地上の現實生活の中から滲じみ出たものである。それ故に、支配階級專屬の道學先生たちは、無産階級の主張が常に物質偏重主義に墮してゐることを批難することを常とする。けれども、それは無論彼等の曲解にあらざれば、故意の欺瞞である。いかにも、無産階級のイデオロギーに於て、物質上の財物の分配の公平が熱心に主張されてゐることは事實である。けれども、それはそれ自身の裡に社會倫理的意義を含んでゐるものである。それは、近頃多くの人々の間に唱へられるところの『すべての人々がパンを得なければ一人が菓子を持つべきではない』といふやうな警句に於て、それの精神を示してゐるのである。かうしたことが、漸次一般人の道德意識の中へ浸透しつつあることは、無産政黨がそれ自身の道德的存在價値を主張する場合に、非常に役立つことになるものだといはなければならぬ。

その外、無産階級の現實生活からの必然的産物であるところの多種多樣の生活態度若しくは主張――たとへば非軍國主義的態度とか、教育の民衆化の主張とかの如き――のやうなものも、現在に於ては、段々と新時代の道德意識の內容とならうとしてゐる傾向が見られてゐるのである。殊に、かうした新時代の道德意識が、同時に新時代の政治意識の基礎とならうとする趨勢さへも見えてゐるのである。無産政黨は、それの道德的存在價値の主張を、この基礎の上に築きあげさへすれば、それで充分なのである。

無産政黨の前途に幾多の大難關の横はつてゐることは、誰れから聞かされるまでもなく、私達が充分に知り拔いてゐることである。殊に資力の缺乏といふ一事が、無産政黨の前途の上に、最も踰え難き障壁を置いてゐることも、私達が

無視してゐないことである。それにも拘らず私達は、幾部分は上に述べた理由に依り、——また幾分部は上に述べ切れなかつた多くの理由に依つても——決して無產政黨の前途を悲觀してゐない。少くとも私達は、無產政黨の前途の進展に多大の希望を懸けてゐることにかけては、人後に落ちないつもりでゐる。私は殊にこの事を、新政治意識のためにいふ。

最近國際政治史論三講

——東宮及同妃殿下御前講演稿本——

芦田均

一 世界戰爭勃發前の十日間

前記

老帝ヨセフと皇太子フェルヂナンド

フランツ・ヨセフ老帝の健康が衰へると共に墺洪帝國の統一も次第に歐洲政界の注目を惹くようになつた。皇帝百歳の後にサンテチエンヌの王位は果して萬全であるだらうか、皇太子フエルヂナンド親王は豪邁の士であるが其聲望の足りない點から見てどの程度まで民衆の信任を贏ち得られるであらうか、それは「未來」が解くべき謎として考へられてゐた。墺洪帝國は一九一八年の秋季に瓦解するまで、獨逸人種とマヂヤール人との覇權の下に南スラーヴ人、チエツク人、スロヴアツク人、波蘭人、ルーマニア人、伊太利人等雜多の民族から造り上げられた寄せ木細工の如き帝國であつた。その内でも南方のスラーヴ人種はセルビアと合體して獨立する希望を抱き間接にはロシアを祖宗の國として見做してゐた。之が爲めに年來國内紛爭の原因を導いたのみならず、墺洪國とセルビアとの國交も常に圓滑でなかつた。二十世紀の初頭以來、墺洪國の政策は國内に於てはスラーヴ族の擡頭を抑壓することであり、對外的にはバルカンに於けるロシア勢力に抗爭することであつた。

皇太子フランツ・フェルヂナンドは不人氣であつた。ヨセフ帝は

帝とも仲が悪く、元老政治家エーレンタールとも争つた。實際には涙脆い熱情家で、死を怖れない豪膽な紳士であつたといふが、世間からは冷酷なけちん坊と見られてゐた。

皇太子は宗族の反對を排して一九〇〇年にボヘミヤの貴族の娘と結婚せられた。これが爲めに配偶ホーヘンベルグ大公妃は將來とも皇后たるべき權利なく、其子孫は皇位を嗣ぐべき權利を認められてゐなかつた。これも明かに老帝と皇太子との不和の原因を爲したものである。

サラエウオの悲劇

一九一四年六月廿八日、皇太子フランツ・フェルヂナンドはサラエヴォの町で殺害せられた。下手人は墺太利の國籍をもつセルビア種の青年であつた。

維納及伯林の新聞は犯行の裏面にセルビア政府の伏在するような筆法をもつて嚴重に責任の歸屬を明白にすべしと威嚇的文字を並べた。若しセルビアの臣民が兇行に加擔してゐるならば、墺匈國政府は直ちにセルビア政府に嚴重なる要求を提出するであらうと世間一般に推察してゐたが、扨て如何なる程度の要求を提出するかが最も注意せられた點であつた。然し人心の緊張した狀態に反して、維納、ブダペスト、伯林の官邊からは自由と八方面を壓するやうな空氣が溢れた。墺國外相ベルヒトルド伯が外交官に訓した處も匈牙利の首相チッサ伯の議會の聲明も、人心を沈靜せしめる效果があつた

獨逸皇帝は當時キールのヨット競爭に行幸中であつたが皇太子の親友たるウイルヘルム二世の態度は衆目の中心となつた。凶變の報を受取つた皇帝の顏色はさつと變つて、さてから獨言せられた。

「二十五年以來の自分の生涯の努力は、又始めからやりかへなければならないのか」

丁度その際キールに居合はせた英國大使はこの言句を極めて重大に解釋して皇帝がこれを全獨逸主義に對する犯行であると判斷して恐らく墺匈國と連帶で犯罪の責任を極力彈糾するであらうと推測した。

獨逸皇帝は七月初旬から例年の如く諾威の近海へ巡遊に出られた。獨逸皇帝が斯く悠々と伯林を離れたとはセルビア問題の危機が去つたものと解釋した者は決して尠くなかつた。英國政府も確に其一人であつたといふ證據は當時賜暇歸國中であつた大使に伯林へ歸る命令をも出さなかつたことに依つて明瞭である。

ウイルヘルム二世は北海巡遊中も墺匈國政府及び伯林と不斷に通信を交換してゐて、セルビアに提出せらるべき墺國の最後

通牒も其大使フォン・チルスキーより受取つてゐた。獨逸皇帝の戰爭の決心は、もしキールで定つて居なかつたとしても必ずこの海上航行の間に決せられたに相違ない。六月卅日附のフォン・チルスキーの電報報告は七月四日に皇帝から外務省に下つて來てゐるのであるが、其簡單な電報に對する註譯は當時の皇帝の心事を窺ふに充分である。

フォン・チルスキーは其報告に『維納の空氣は今回こそ徹底的にセルビアとの問題を決濟すべしと主張して居る』と述べてゐるが、ウイルヘルム皇帝は、之に傍註を加へて『今なり、然らずんば時期なし』と書いてゐる。フォン・チルスキーは更に進んで『本使は機會ある毎に靜かに然し眞面目に墺國に對し急激な手段を取ることを戒めつつある』と書いてゐるが、此點に對するウイルヘルムの傍註は可なり激しいものである。

そんな事を誰がせよと頼んだ、馬鹿な事だ、そんな事は彼の知つた事ではない、墺太利が自由に決定すべき事柄である、チルスキーもそういふ馬鹿な眞似を止めたらよからう。セルビア人を徹底的にやつつける必要がある、そして出來る丈け早く。

當時に於ける興味ある文書の一は維納にあるフランスの一書記生が七月十九日に本國政府へ提出した報告の一節である。この報告の内には左の如き事實が載せてある。『墺匈國がセルビアに送る最後通牒が極めて峻嚴なるべきこと、セルビアに回答を與へることをさけるに相違ないから、最後通牒の時間は短くして置いてすぐに軍隊を動かす考であること、一般にはロシアとフランスの準備の出來ない間に獨逸と提携して戰爭をする方が有利なりと信じてゐるが、外相ベルチトールド伯はむしろ墺匈國とセルビアとの戰爭に局限し度い意嚮らしい、然し何が起るか知れない、充分に注意しなければならない。殊に不思議な徴候はサライツォ事件以來電報通信が對セルビアの大小新聞の論調を豐富に供給し始めたことである。今迄は政府筋の新聞の論說位を打つて來たのに過ぎない、かく急に通信を增加したのはセルビアの地方新聞の主戰論を紹介して開戰論に有利なように輿論を導く考に相違ない』と。不幸にして事件はこの報告の筋書通りに進展して來た。

墺太利の最後通牒

サラエヴォ事件は歐洲政局の紛糾の種となるかも知れないと多くの人は思つたが、然しかく思ひ乍らもよもやこの事件の爲に世界戰爭は起るまいとの考が潜んでゐた。

この考にひかされて歐洲の首府に居た外交官は多く暑中休暇に出た。伯林に居る英露兩國大使は歸國するし、佛國大統領

アンカレは首相兼外相のヴィヴィアニを率ゐてペテルスブルグへ露國皇帝を訪問に出かけた。

維納に駐在したロシア大使は七月二十日頃に避暑地に出かけてやつと事件の進行に氣がついて引返して來た。伊太利大使アヴァルナ公丈けは任地に留つてゐたが、然しこの間にも維納に居た英國大使は偶然の事から事件に對する内報を得て、これを七月十六日に本國政府に電報した。それは墺太利のリュッオフ伯が英大使に話した處によると墺國政府は十四日に獨逸から無條件に支持の約束を得たといふ事實であつた。

維納にゐたセルビアの公使は七月二十日に本國へ電報して「墺國政府は何か重大なことを考へてゐるらしい、恐らく露佛が干涉する前に軍隊を動かす積りと思はれる、國境地方で動員の準備をしてゐるのは其證據である」と述べてゐる。墺國は偶然七月二十三日に最後通牒を出した。其内容は左の如くである。

一、セルビアはさきにボスニア、ヘルツエゴヴィナ兩州の墺國に併合せられた事により何等の損傷を受けないことを承認し、從つて從來の反抗敵對の態度をすてゝ墺國と親善の方針をとることを約せるに拘らず、其後この約束を履行しないのみか墺國に對する種々の犯罪行爲を默認した。サラエヴオ事件の犯行はセルビアの官吏より種々の幇助を受けた證跡が明白になつてゐる。夫れ故に墺國政府はセルビアが凡ての犯罪的行爲を抑壓すべきことを誓約を要求す。この公約は壯重に聲明する爲六月二十六日の官報に宣言書を發表することを求める。

二、反墺的出版物の禁止及團體結社の解散、反墺的教育の廢止、墺國より通牒すべき反墺運動に關係ある士官及官吏の罷免を要求する。

三、革命運動鎭壓の爲に墺國官吏の共助を認め、サラエヴオ事件關係者の審理に墺國官吏を立會はしめる

四、サラエヴオ事件關係者の處罰を求める。

最後通牒は七月二十三日の午后六時にベルグラードに於て交付せられ、二十四日にはこの通牒の寫が英、佛、獨、露の諸政府に渡された。墺伺國は佛國大統領がロシア及スカンヂナヴィア旅行中であつて早くも七月二十八日以前には巴里に歸着し得ないことを知つてゐた。墺國はこの不便を知つて巧に之を利用したのである。この最後通牒は近世の外交史に稀に見る峻嚴なものであつた。セルビア自身が承認し得ないと聲明したのみならず、ロシア政府も其内の或條件は全く實行不可能のものであると明言しサー、エドワード、グレーも或條項はセルビアの獨立と相容れないと云つた。此の通牒の内容は獨逸政府と豫め相談の上で定めたものであることは色々の證據に依つて推定せら

れるのであるが獨逸の政治家は徹頭徹尾これを否定して獨逸は通牒の內容を事前に知らなかつたと云つてゐる。フオン、ヤーゴーも外務次官チンメルマンも繰返しこのことを陳辯した。

消息通は墺匈國の政治家が決して獨逸と協議することなくして此種の通牒をセルビアに發送する筈がないと觀測して居た、この通牒の內容は七月五日のポツツダムの最高會議で獨逸內閣及軍部はこの最後通牒に同意を與へたものであらう。でなければ恐らく北海に巡航して居たウイルヘルム二世の親裁を得たものであらう。維納駐在の英國代理大使は獨逸大公使がセルビアに對する通牒の內容を知て居たことを獨逸大使自身の口から聞いたこれは獨逸官邊の揚言が眞實でないことを證明するものである。

七月五日のポツツダム會議の內容に就ては墺國大使とウイルヘルム皇帝との對談やリチノウスキー公の備忘錄に其片鱗を窺ふことが出來る。リチノウスキーは誌していふ

自分の聞込んだ處に依ると七月五日のポツツダム會議に於て議せられた墺國政府の質問に對しては凡ての出席者から最も强硬な意見が提出された、のみならず其結果が假令露國と開戰する如き破目に陷つても害はないといふことに決定された、と。更に在獨大使スツエギエニー伯が墺國政府に報告した文書に依ると獨帝の意中は略ぼ明白に知ることが出來る。

ス伯は「獨逸皇帝の意見として、ロシアは多分敵對の態
示すであらう、然し獨逸は永い間ロシアに對して準備した。
ら墺匈國とロシアとの開戰を見る場合には獨逸はどこ迄も墺匈國を援助する。加之、ロシアは現在戰備を整へて居ない、從つて開戰には餘程躊躇するもの」と誌してゐる。

伯林に居た白耳義大使ベイエンス男爵は七月二十六日にかういふ報告を書いてゐる。

セルビアに對する最後通牒は獨逸と墺太利兩政府で準備された文句であるといふよりも寧ろ獨逸政府が考へて維納で實行されたものである。皇太子の殺害及反墺的宣傳といふのは一種の口實であつて本來の目的はセルビアを殲滅し南スラヴ統一の思想を踏みにじる以外に露佛に對して致命傷を與へる魂膽もある。勿論英國は此際中立を守るものと彼等は期待してゐる。以上の推定を根據あるものとする爲に本使は獨逸參謀本部の意見を指摘しなければならない、その意見によれば獨墺と露佛との戰爭は早晩避け得られないといふのであつてウイルヘルム皇帝も遂に此意見に贊成された。獨逸の軍閥と汎獨主義者とが熱心に希望したこの戰爭は現在極めて獨逸に有利な狀況の下に行はれることになつた。獨逸に取てはこれ以上に有利な條件は[illegible]

とが出來ないだらう。

然しベトマン、ホルウェツヒ其他の獨逸政治家が墺太利に全幅の支持を與へたのは彼等が露佛の態度を見縊つて戰爭を墺塞兩國の間に局限することが出來ると觀測したからであるとも稱せられる。いづれにしても墺匈國の政府がセルビア討伐の固い決心を定めたことは歐洲全體の政局を獨露兩國の軍閥の掌中に投げ込む結果になつた。

伯林の官邊では事件が擴大するや否やは一にロシアの態度で決せられると云ひ（七月二十六日）ロシアでは萬事は伯林の決心一つであると觀測してゐた。歐羅巴をあげて懊惱し茫然としてゐる間事件は刻々に進展して行つた。然し其眞相は外界に餘り知れなかつた。知つてゐるのは極めて限られた一部分の人々であつた。

七月二十五日にセルビアの回答は墺匈國公使に渡された。セルビアは殆んど全部墺國の要求を容れて墺國側の提出した十個の條件は二個の留保をつけた儘之を承認したので、セルビアでは墺太利が之を口實に戰爭をする氣でない限り、此回答に滿足するであらうと聲明して居たが同時に墺國は必ず之に滿足しないものと豫想してゐた。二十五日の午後五時五十八分にセルビアの回答を受取つた墺國公使は豫定の如く六時半の汽車で逸早くセルビアの首府を引揚げセルビア政府も亦墺國軍の侵入を聞して逸早く政府をニッシに移した。

墺國外相は英國政府に説明せしめて曰く、セルビアの屈服したのは唯表面のみであつて、將來に何等の保證をも與へずして歐羅巴を欺かんと企ててゐる。セルビアの手段は見え透いてゐる。即ち諸外國の輿論を緩和する爲に種々の留保をつけて墺太利の要求を受諾して置いて結局之を履行する意思はもつてゐない、と。墺國大使は更に之に附加してセルビアでは二十五日の午后三時即ち回答を交付する前に已に動員令を下したと云つた。

墺太利はセルビアの回答を受取ると直ちに一部の動員を命じ獨逸も亦動員の準備に着手した。

伯林と露都の睨合ひ

かゝる間にも露都に達する報告は、左程に迅速ではなかつた。二十四日の早朝ロシアの外務大臣サゾノフは墺太利の最後通牒の報道を受取つて「さあ、戰爭だ」と云つた。そして直ちに佛國大使と英國大使とに會見して一面には佛國政府の意嚮を確め一面には英國を露佛側に引入れることに盡力した。

二十四日午后露國外相サゾノフ英國大使サー、ジョージ、ブカナン佛國大使パレオローグの三人がペトログラードの佛館西

河岸にある佛國大使館に集つて協議した。ロシア外相は墺太利の行動が如何にも挑戰的であり又不穩當であること、獨逸が謀議に參與しない限り決して此の如き行動に出る筈はないと云ひ、墺太利の要求は到底承諾を與へ難いものであるから切に英國政府が露佛と同一の態度に出んことを求めた。

佛國大使は必要の場合には佛國が露國との同盟より生ずる義務を完全に履行すべき旨を明言した。之に對して英國大使は左の如く述べた、

「余は英國政府の名に於て語ることを得ないが然し個人として考へて見るに此際英國が武力を以て露佛を支持する樣に無條件で約束することは到底出來ないことであると思ふ。英國はセルビアに對して何の利害關係をももつてゐない。從つてセルビアの爲に戰爭することは輿論の認容せざる處である。」

サゾノフ外相は之に答へて「吾々の直面してゐるイツシユーは歐洲問題の全部であつて、セルビア問題は其の一部分に過ぎない。從つて英國は當面の問題に對して無關心であり得ない筈であると陳述した。英國大使は重ねて若し墺太利が三國協約側の意見を須ゐず武力に訴へるならばロシア政府は墺太利に向つて宣戰を布告する意思であるかと尋ねた。サゾノフ外相は此場合ロシアが動員することだけは止むを得ないと思ふが、本日午后閣議を開いて更に問題を討議する筈である。最後の決心は明日の御前會議で決ることになるであらう」と述べた。

英國大使は墺太利をして最後通牒の期限を延期せしめることが目下の急務であると思ふと提議したが佛國大使は之を遮つて墺國は深く心中決する處があらうか、さもなくば山をかけてゐるものと思ふ外はない、どちらにしても戰爭を防止する唯一のチヤンスは三國協商側の剛健な一致の態度にある。墺國に對して最早期限の延長を求める時間はないと云つた。

斯くしてサゾノフ外相と佛國大使とは交々英國大使に對して英國が速に態度を明かにし、露佛を支持する決心をすることが戰爭を防止する唯一の機會であると力說した。

ロシア政府は七月二十五日の御前會議後直ちに聲明して「ロシア政府は墺塞關係の伸展を細心注視してゐる、ロシアは此問題に就て無關心であり得ない」と云つた。そして直ちにキエフ、オデツサ、カザン、モスコー等の軍團に動員準備を命じペテルスブルグ、モスコー兩市に戒嚴令を布告した。

恰も此の時、ウイルヘルム、ストラーセ（伯林外務省の所在地）の高官は主戰務たに當局の經緯を說明してゐた。外務大臣は云ふ、「墺國のセルビアに對する通牒は決して過當の要求になるものではない。之に對するセルビアの回答が不滿足で

た爲に墺太利は動員したのであるから今になつて後に退くのは國の面目にかけて不可能である。問題は既に國の生存の問題に化してゐる。墺匈國はこの機會に南スラーヴの不正な宣傳を絕滅しなければならない。然らされば國內スラーヴ族の反抗は際限ないであらう。李墺國は皇太子殺害の報復として思切つた方法に出る外はない。セルビアは嚴重な敎訓を受くべきである、かかる形勢に於ては墺塞間の戰爭は到底避けることは六ケ敷い。英國は墺露の間に事の起らない樣に共同の措置をとることを提議して來た。勿論獨逸は火事を消し止めるやうに露墺兩國にとりもつことに異存はないが墺太利がセルビアを膺懲するのを引止める譯には行かないと返答した。獨逸は墺匈國に對し若し他國が異議を挿む場合には墺國を支持し幇助することを約束して了つた。故にどこ迄もこの約束を嚴守する外はない。若しロシアが動員すれば獨逸も直ちに動員する、さうなれば歐洲の大戰になるだらう、然し余は斯の如き大戰の避け得られる望をもつてゐる。恐らくロシアをしてセルビアを援助することを思止らしめ得るであらう、墺國はセルビアの領土保全を尊重する決心であるから一旦其要求さへ容れらるればそれで滿足する筈である』と。かくして獨逸の權力階級は凡ての責任をロシア帝國に負はしめ、一旦開戰となる曉には、その戰爭が、專制王ツアールの豫て仕組んだ戰であつて獨逸民族にとつては祖國防衛の爭であると思はしめることに成功したのである。

二十六日夕、ウイルヘルム二世は伯林に歸られた、前以て何人にも知らせず又相談せずに歸られた。此報道は消息通の頭腦に電光の如く或る暗示を與へた。それは外務次官のチムメルマンが英國代理大使に話したやうに獨逸政府の一部分にさへも遺憾の念を以て仰られたのである。大勢は既に決したやうに見へる。

佛蘭西の駐露大使モーリス、パレオローグは『ツアールの露國』と稱する備忘錄に於て七月二十七日の項にかう書いてゐる。

來客と電報とに疲れて、其の上に心が重々しいので夕食前に島へ散歩に出掛た。車を捨ててエラーギンの離宮に沿うた陰の多い靜かな樹立の間へ這つて行つた。時は丁度物思ふにふさはしい。古い大きな樹の細かいそしてきらきらと光る葉を透して絹の樣な光線が流れる。枝をゆるがす程の風も吹かない。唯時あつて植物と水との吐出す新鮮な息の樣に、しつとりとした氣を吸ふ心地がする。

自分は今　行詰つた悲觀論にとつつかれてゐる。どんなに努力して悲觀の蟲と鬪つて見ても結局は常に同じ結論に陷つて了ふ。それは戰爭である。外交の細工を試みたり　懸引や交涉を行ふ時はもう過ぎてゐる。今日の危機を生んだ長い間の、深い

原因に比べたならば數日來の出來事の如きは物の數ではない。最早や斯く動き初めた自動的な機械力に對して個人の思付きや、意志が何にならうぞ、吾々外交官はこの大事件の前に行動を封じられて了つてゐる。吾々の仕事は將來の事變を豫見し、吾政府がこれに適應する措置を取るように切々の言を致すだけのことである。

露西亞對墺太利

墺匈國の外相ベルチトルドはエーレンタール男のバルカン政策を繼承してゐた。エーレンタールはフランツ・ヨセフ皇帝の古稀の祝にボスニア、ヘルツェゴヴィナの兩州を併合してこれを陛下の脚下に捧げた政治家である。然しベルチトルド伯は強く自己の政策を主張する人ではなかつた、そして大事件に直面すれば常に其の決裁に迷ふ人であつた。それでもセルビアとの紛爭に際して墺匈國の威信を保つこの一擧にありと信じた曉には頑強に調停の申出をも斥けた。

ベルチトルド伯の背後にはフォルガツシュ伯と稱する智慧者が潛んでゐた。この人は多年セルビア及露西亞を嫌つた人であつたが、ベルチトルドの挑戰的態度はこの人の意見に負ふ處が多いと云はれてゐる。墺匈國に於ける戰爭責任者はエーレンタールについでフォルガツシュ伯であると云はれる位である。若し更に一人を附加へ得るならば、それは疑もなく當時維納に居た獨逸大使のフォン・チルスキーであることも衆人の許す處である。後に墺國外務大臣であつたオツトー・チエルニン伯の備忘錄によればフォン・チルスキーは本國政府の訓令を越えて墺太利に色々の容喙を試みた。戰爭をするのに今より好き時機はないと云つたり、今ならば獨逸は其の軍隊の力と精神的支持を以て墺太利を援助するが、後の機會に於ては果して如此くなし得るかどうか疑はしいと云つた。チルスキー自身は露佛の戰鬪力を信じて居らず、此機會ならば墺太利も戰爭を決心することを知つて居たから、セルビア問題を利用して墺太利を一か八かの戰爭に引入れようと試みたのであらう。然しこれは彼自身の政策であつて、ベトマン・ホルウエツヒの政策ではなかつた。かうチエルニン伯は説明して居る。

墺太利がセルビアを攻擊する場合にはロシアの輿論は激昂して墺國に宣戰を餘儀なくせしめるに相違ない、故に墺國がセルビアを攻擊する瞬間から調停も仲裁も後のお祭に歸することは明であつた。

墺國の最後通牒の內容が知れると同時に英佛露三國は四十八時間の期限を延期することに全力を盡した。然しその企も無效

に歸した爲めに、三國はセルビア政府をして忍んで墺國の要求を應諾せしめることに努力した。實際セルビアの回答は世間の期待よりもずつと妥協的に出來てゐた。

墺太利がセルビアの回答に不滿足の意を表して二十五日に動員を命じてから列強の政府は墺太利をして暫く軍事行動を差控へさせ、セルビアの回答文を基礎として更に交渉を繼續することを提議した。これは七月二十六日の夕刻にロシアの外相が墺匈國の大使に向つて出した妥協案であつた。同時にロシア及英國はセルビアに對しても極力愼重な態度をとることを勸告した。英伊兩國は獨墺兩國に向つてもセルビアの回答に滿足すべきことを力説せしめたが七月二十八日になつて墺匈國は輿論憤激を名として斷然セルビアの回答を討議の基礎とすることを拒絶した。墺太利はセルビアの領土保全を保證したけれども其の完全な獨立を保證する段に至つて言葉を濁した。墺國は遂に此日を以て正式にセルビアに宣戰したので英佛伊三國政府は遂に塞墺間の衝突に調停の餘地なきものとあきらめる外なかつた。

露國は其の前日に維納に歸任した大使をして若し墺國がセルビアに宣戰するならばロシアも之を傍觀し得ないことを明白に通告せしめた。然し墺國宰相は獨逸宰相と同樣に、もしセルビアの領土保全さへ保證すれば露國は戰爭に訴へないだらうと考へて居た。

露國外相は在維納大使に對する二十八日の訓令に於ても繰返し露墺間に交渉を繼續する希望を申入れしめた。然し二十八日の午后サゾノフ外相は交々獨逸及墺匈國の大使と會見の結果、墺國は到底露國の希望通り調停を入れる意嚮のない事を知り、獨逸大使が「同盟國墺太利を見捨てることは出來ない」との主張を繰返すのを見て戰爭の途に避く可らざることを決心したものと見られる。

二十九日午后三時、獨逸大使プールタレスはサゾノフ外相を訪問して露國が戰備を止めなければ獨逸も動員を命ずると申し出した。この通告に刺戟せられて露國は同夜直ちに(イ)墺匈國に對して策動する爲め十三箇軍團を動員し、(ロ)一方には秘密に總動員を開始する決定をしたのであるが、ニコライ皇帝は總動員を命ずることに堅く反對せられ、陸海軍側の强硬な進言があつたに拘らず、遂に十三箇軍團の動員のみを裁可せられた。露國政府は墺匈國の行動を以つて直接ロシアに對するものと考へたのである。それは若し墺國の要求を容れれば墺國がバルカンの現狀を覆沒して自國の霸權を確立することとなるからである。

獨逸火蓋を切る

廿八日に墺國大使はロシア外相を訪問して「好機は到りつつあると」と云ひ、獨逸大使は「友邦を見捨て去る」と云つた。廿四日から廿八日迄獨逸は極力外國の干渉を斥けて墺國にしたい存分の措置を取らしめる方針であつた。之を裏面から觀察すれば獨逸は表面政局の前途を樂觀しつつも消極的抵抗を續けて凡ての外國の調停を斥け、此の間に時間を過させる策略であつたとも見へる。露佛英三國はやがてベルグラード占領、セルビア屈服と云ふ既成事實の前に泣寢入ると思つたものである。

然しロシアが墺匈國の動員に策應して南の方の軍團を動員したとの報道は獨逸に可なりの印象を與へたものと見へて廿八日の夕刻ベトマン、ホルウエッヒは英國大使に對して獨逸が墺露間の妥協に努力しつつあることを言明したのみならず歐洲戰爭は避けたければならないとの言葉を洩した。

然るに廿九日になつて獨逸側の態度は一變した。廿九日に獨逸はポッダムに最高會議を開いて時局の對策を議した。この日の夜半宰相は英國大使サー、エドワード、ゴッシエンを呼寄せて戰爭が擴大した場合の英國の態度を尋ね、獨逸が佛國の領土保全（但し殖民地を含まず）を尊重し、和蘭の中立と保全とを保證するならば英國は中立を維持するだらうかとの質問を出した。獨逸が白耳義の中立を尊重するかどうかは言明しなかつたが白國が敵に味方さへしなければ領土の保全は間違ない旨をも附加へた。此の態度の急變は如何に説明し得るであらうか。ベイエンス男の記述に依ればウイルヘルム皇帝は廿八日の夕頃以來陸軍を視察せられた、そして軍人側の意見が內閣大臣を壓迫したことは外相ヤーゴーがカムボン大使に洩した言葉によつても伺はれる、從つて皇帝は軍閥の意見に制せられて廿八日にロシアの意嚮が明瞭になると同時に英國の中立を買收せんことを宰相に命じたのであらうと。

ロシアは既に戰を覺悟して居る。卅日の午後三時サゾノフ外相がペーテルゴフの離宮に行つた時ニコライ二世は二十九日夜ウイルヘルム皇帝より送られた親電を外相に示した。この電報は明かに獨逸が脅喝して居るものとしか解せられなかつたのでサゾノフは戰爭の所詮避け難い旨を奏上した。皇帝は其責任の大なることを再三繰返されたが、遂に思ひ切つて總動員令に同意された。

「參謀總長に電話で總動員を命ずると傳へよ」サゾノフは直に電話を以つて命をヤヌスケウイッチ將軍に傳へた、この時は丁度三十日の午後四時であつた。

かかる間にも世間は尚平和の希望を捨てなかつた。事實ロシアは三十日にも三十一日にも墺太利と交渉を續けて居た。廿九

日の夜ロシアは墺國に對して次の樣な妥協案を出した、『墺太利がセルビアの獨立を危くする如き條項を最后通牒から取除くならばロシアは凡ての戰備を停止しやう』と、そして墺太利は之を容れたのである、然し此の時に獨逸は既に總動員に着手して居て卅一日にはローカル、アンツァイガーの號外で動員令が發布せられた。其れでもまた平和の維持には一縷の望があつた、グレー外相が伯林政府に提出した左の意味の調停案を此日になつてロシアはまだ承諾するに躊躇しなかつたのである。

『墺國が其軍隊をセルビアの版圖内に入れることを中止するに同意し、同時にセルビアが墺國に滿足を與へ得べき條件（其は素よりセルビアの獨立と統治權を損傷せざる如き條件であることを要するが）を列强に考究せしめることに同意するならばロシアは暫く形勢を觀望することに異議ない。』

然るに同日の午后十一時獨逸大使プールタレスはサゾノフ外相を往訪して獨逸の最後通牒を手渡した、『若し獨逸が十二時間以内に動員を中止したければ獨逸は總動員を命令するであらう』そう云つて柱時計は丁度十一時廿五分であつたのを眺めて『期限は明日正午に切れる』と云つた。

其からサゾノフに口を開かせる隙もなく、『復員することに御同意なさい！』と三度續けさまに云ひ切つた。

サゾノフ外相は墺太利との交渉が斷絶しない限り露國は獨墺を攻撃しない、然し今動員を中止することはロシアの軍事組織を混亂に陷れる決心をしない限り不可能であつて、獨逸の參謀本部でも、ロシアの主張の正しいことはよく御承知の筈であると答へた。

明けて八月一日、最後通牒の期限は正午に切れたのであるが獨逸大使プールタレスは午后七時になつて、やつと外務大臣を往訪した。顏は上氣して赭く、眼は腫れて、昂憤の餘り息をはづませ乍ら嚴かに宣戰の布告をサゾノフ外相に渡した。

サゾノフ外相は之に答へて云つた、

『獨逸の政策は罪惡である、民の呪が身に降りかかりましようぞ』

プールタレスは『吾々は名譽を防衛するのみです』と云つた。

サゾノフ更に追窮して、

『獨逸の名譽は危殆に瀕しては居ない、獨逸は其の一言で戰爭を封じることが出來たのである、然し其は御希望でなかつた、今日迄吾々は平和を維持する爲めに種々の方法を講じたが獨逸は少しもこれを助けては呉れなかつた、然し神のおさばきがありますよ』

から云ふとプールタレスはかすかな聲で『そうです神のさば

きがある、神の御さばきが！』

と口籠り乍ら冬宮に面した窓際に步寄つて、急にすすり泣きを初めた。サゾノフが寄添うてなだめ乍ら脊をさすると、

『之が私の使命の結末です』。

そう云つて彼は身震ひし乍ら出て行つた。

八月一日ロシアは獨逸に宣戰を布告した。何故に獨逸はかくあはただしく動員を命令したのであらうか、其は專ら軍閥の主張であつて、總理も外相も、外務次官も之れには可なり強い反對を續けた樣に見へる。ベイエンス男の八月一日附の電報にも陸軍の首腦が壓迫を加へて獨逸の總動員を命じた經緯が詳しく記載せられて居る。

英國の態度――調停より參戰へ

獨逸の官邊では戰爭が擴大しても英國は結局中立を守るものと觀測していた。それは愛蘭問題の紛糾と英國內の平和熱とが確實に英國の參戰を防ぎ得ると考へたからである。

この觀測は挑戰者が何人であるかに從つて正當とも見られ當らずとも云ひ得る。獨逸は獨逸が挑戰的態度を示した場合には英國の輿論が大なる衝動をうける事實に考へ及ばなかつた、殊に獨逸近年の海軍擴張に恐怖を抱いた者は英國にも決して少數に止らなかつた。佛蘭西の敗滅、白國中立の侵害に英國識者の多數が默して傍觀し得ない處であつた。夫れにも拘らず獨逸政府は此點に就て熟慮を缺いてゐたから戰爭の前途に對する打算が多く英國の中立を基礎として立てられてゐた。少くともウイルヘルム皇帝が其觀測を誤つたとは七月二十一日にペテルスブルグの獨逸大使から發送した伯林政府宛公文書の旁註及七月二十四日の在英大使リチノウスキーの電報の傍註に表れてゐる。

墺洪國がセルビアに交付した最後通牒の寫を手に入れると同時に英國外相は其內容が餘りに峻嚴であつて、之が爲めに戰爭の危險を作ふことを惧れ取りあへず最後通牒に定めた四十八時間の期間を延長せむことを直接に墺太利に、間接には獨逸政府に申し入れた。然し獨墺側が共にその申入を拒絕したので更にセルビアに對して隱忍自重墺太利と衝突の危險をさけるやうに勸めた。

かかる間にエドワード・グレーは墺塞間の紛爭を大國の調停によつて圓滿に解決する考案を立て、露獨墺塞の政府に協議したが獨逸は主義上之に贊成したに拘らず、獨墺兩國間の事件は嚴に兩國限りの解決に俟つべく、他國の干涉すべき限りでないと回答した、その內に墺太利は二十八日早くもセルビアに對して宣戰を布告し所謂既成事實を以て其地步を有利にしようと力

めた。

然し英國はまだ調停の希望を失はなかつた。露國と墺匈國とを如何にもして妥協せしめようとするのが七月二十六日以後の當面の努力であつた。グレー外相は再びロンドン會議の召集を提案したが、これも獨逸の拒絶にあつて果さなかつた。時は既に七月の二十九日で墺匈軍はベルグラードを砲撃しロシアは一部の動員を命じた日である。又ベルトマン・ホルウェッヒが英國大使の來訪を求めて英國の中立を買はんとした日である。

同日グレー外相は再度リチノウスキー公の來訪を求めて調停和平會議を提案し獨逸の承諾を求めた後、友人として全く内談的に御話し度き節ありと前提して戰爭が露墺の間に局限せられてゐる間は英國に關係はないが、一旦獨佛の間に砲火を交へるような事になれば事態は全然一變するであらう、英國は到底永く中立の地位に傍觀することは出來ないといふ趣旨を語つた。

この談話は英國の決心を示したもので極めて重要なものであつたから直ちに伯林へ電報せられた。然るに此電報の余白にウイルヘルム二世が書入れた註釋（意見）は英國政府を罵詈嘲笑した文字で滿ちてゐて、同皇帝が既に平靜の態度を失つて了つたことを示してゐる。翌三十日在露大使から來た電報の末尾にも皇帝は長々と感想を記入して其中に英國の獨逸包圍政策を攻撃し、死んだエドワード七世は活きてゐるウイルヘルムよりも役者が上である等といふ文句も見える。

カウツキーは之を評して云ふに、「此批評はウイルヘルム二世の氣質をよく示してゐる。墺匈國と共謀して獨逸を斯程の窮境に陥れて置いて、どうしてこの窮地から脱却しようかと云ふ事さへ考へない、ウイルヘルムは戰爭が既に避け難いとの先入觀念に滿ちて居て而もこの戰爭で獨逸が亡びることにまで言及してゐるのは驚く可きことである」と。

歐洲戰爭の勃發するや否やはロシア政府の決心に依ると見られた時期もあつた、次で獨逸の態度如何にかかると見られた時もあつた、然し獨露ともに強硬なりと解つた七月の二十九日から三十日に亘つて佛も露も伊太利も英國政府に對して開戰の場合に於ける態度を明かにせよと迫つた。英國政府は一度公然と歐洲戰爭に露佛を支持すると聲明すれば獨逸の態度は一變するに相違ないと信ぜられてゐたのであるが英國政府は此の如き態度に出ることを躊躇した。

何故に英國は早く態度を明かになし得なかつたか、英國が佛國を支持すべきや否やに就て國内に可否の論のあつたことは勿論であるが、自由黨内閣の内にも開戰論と非戰論とが互角の勢を以て爭つてゐたのである。

首相アスキスは既に天下の知る如く温雅の柔い人である、ステーツマンといふよりもパーリアメンタリアンの分子を多量にもつてゐて容易に意見を明示しない。

藏相ロイド・ジョージは初め態度を不明にしていたが七月三十日に銀行家の訪問をうけて中立論を聽かされて以來それに傾いた、內閣員全體から云へば中立論は決して少數ではなかつた。唯ウインストン・チャーチルのみは明白にフランスを支持すべしと主張した。

グレー外相は平和維持の爲めに極力努力しつつも八方より受取る報告は戰機の刻々に近づきつつあることを知つていた。ポール・カムボンの云つた如く、當時のグレー卿には二つの人格があつて左に相爭つてゐた。外相としての彼は戰のさく可らざるを知つてゐた。理想家としての彼は他日英國を拘束するような言辭を弄して佛國を脅迫することを爲し得なかつた。陸相ハルデーン卿の態度は不明であつたがモーレー卿、ジョン・バーンス及びビーチャム卿は明白に中立論者であつた。然し在野黨たる保守黨のボーナー・ローとランスダウン卿とが英國參戰の場合には政府を支持する旨を進んで申入れたことは政府の決心を速かならしめた一因であつた。

七月二十七日獨逸及墺太利の大使等は英國が參戰したいものと確信してゐた。七月三十一日の閣議が終つてからサー・エドワード・グレーは毫も英國の態度を明白にせず佛國大使に向つて目下英國は獨佛兩國政府に對し白耳義の中立を尊重するや否やを問合せ中であると云ひ、今後狀況が變化すれば改めて佛國との協力問題を討議する筈であると斷言したのみであつた。

此刹那英國の政治家は英國の重大な利益を保護するに如何なる政策をとるべきか又如何にして英國の名譽と威信を保持すべきかについて大に苦慮したのは當然である、八月一日の閣議の後グレー外相は佛國大使に向つて政府は戰爭に參加するような決定をなし得ないと述べた。之に對してカムボンは英佛兩國の海軍協定によつて佛國の北海岸は獨逸の攻撃に暴露せられていることを注意した程であつた。

八月二日の朝英國內閣は再びこの問題を議したが更に決する處はなかつた、然しこの議會に於て外相グレーはもし獨逸が白耳義の中立を侵す場合に尚且つ英國が何等措置を執らないように決定するならば自分は外務省に用のない人間であることをほのめかしたとも傳へられる。八月二日の午後に入つて形勢は著しく變化した。獨逸軍がルクセムブルグ公國に侵入したとは白耳義の中立を尊重するよう確答しなかつた獨逸政府の態度と共に[illegible]して獨逸の野心を推測せしめるのに充分であつたからである。

英國が佛露と共に獨墺に開戰することに就ては凡そ三個の重なる理由があつた、第一は一九一二年のグレー・カムボンの書簡以來佛國に對して負つてゐる海軍協同作戰の義務であつた。第二は勢力均衡の問題であつて英國の外交と軍備は永くこの焦點を離れなかつた。勿論利害關係が世界に擴大するにつれ歐洲大陸にのみ執着するの愚なることを說くものはあつたけれども國論は要するに岐れてゐた。第三は白耳義中立の擁護であつて、この問題の爲めには自由黨内の不干渉論者も戰爭を辭せない空氣に傾いて居た。

グレー外相が獨佛兩國に向つて七月三十一日の朝白耳義の中立を維持する考へなりや否やを質問したことは最も巧妙な政策であつた。この質問に依つて獨逸の包藏する野心はほゞ明瞭になつたのみならず、內閣に於ける外交方針の歸一を助け國論を一致せしめるのに大なる效果があつたからである。

二日の午后に開かれた閣議に於て英國は遂に獨逸が佛國の海岸を攻撃する場合には獨逸に向つて開戰することを決定し、同日夕刻之を佛國大使に通告した。明くる八月三日の英國議會は戰爭の歷史に於て最も重大なる一日であつた。

静かに運命をまつ巴里

佛蘭西大統領ポアンカレは首相兼外相ヴイヴイアニを從へて七月十五日に軍艦フランスに搭乘し、海路露京にツアール訪問の旅に向つた。露國滯在の期間は三日にして又波羅的海に出て七月三十一日に本國へ歸り着く豫定になつてゐた。墺太利のセルビアに對する最後通牒は偶然か故意か、ポアンカレが乘船した二十三日の夕刻にベルグラードに提出せられた。そして獨逸の外相がわざわざ七月二十日に海軍軍令部へポアンカレの旅程を問合した事實は、この二十三日なる日附が偶然に擇ばれたものでないことを示してゐる。カウツキーも其公表した公文集の第九十六に軍令部長の回答文を掲げてカイザー政府の遠謀を證明せんとしてゐる。

ポアンカレ及びヴイヴイアニは波羅的海に於て墺匈國の通牒を知つたが、本國との通信は極めて不完全であつて、軍艦が廿九日に歸着するまで、一切の外交事務は外務次官と政務局長との手で決濟せられる外なかつた。世界戰爭の直前に於ける佛國政府の態度は一方に於て露國との同盟に制せられてゐると同時に他方ではいつか直面すべき運命にあつた大試練が明瞭に顏前に顯れたとの直覺に打れた風情であつた。墺匈國の最後通牒を見た刹那に、佛國の外交官は直ぐに戰爭だと直感したことはモーリス、パレオローグの備忘錄に見ても明かである。佛國が飽まで

露國を支持して同盟に忠實なるべきことは佛蘭西人も露西亞人も疑ふ余地のないことであつた。バルカン戰爭當時露佛兩國は將來墺匈國がバルカン方面に領土を擴張する場合には延いて歐洲大陸の勢力均衡を破り、露佛兩國の利害に重大の干係があるから佛國もロシアと共に軍事行動に出づる事あるべきを豫見してゐる。それは一九一二年十一月四日に時の外相ポアンカレが當時の露國大使イズヴオルスキーに宛てた手紙に明白に誌されてゐることである。

獨逸が戰爭を挑んでゐるとは一九一一年のアガヂール事件以來フランス人の多數が確信してゐた處であつた。獨逸が戰備を整へつつあるとの報道は巴里政府がたへず受取つた情報であつて、佛國の陸海軍は一九一三年の三月及四月に獨逸の戰備に關する一般方略を入手してゐる。

ベトマン、ホルウエツヒの大戰回顧錄（英譯一四五頁）に依れば大戰の主動者はロシヤであつて、佛國は同情ある幇助者であつたと記してある。歐洲戰爭さけ難しと悟つた後の佛國政府の努力は出來得る限り隱忍して開戰の責任を獨逸に負はしめ、かくして英國の參戰を求めることに集注せられた。

「佛國の公衆はセルビアの爲めに戰ひ又は露國の政府に對する野心の爲めに血を流すことを希望してはゐなかつた。極端な國權派はアルサス、ローレンを奪回する爲めに一戰を辭せなかつたかも知れないが、フランスの民衆は決して之に同意しなかつた。佛國人の前記の兩洲に對する怨恨が如何に強いにしても、その感情は決して自發的に獨逸と開戰する程に強いとは思へない。自分の知る限りでは巴里は一九一四年の七月に戰爭反對の示威運動が行はれた唯一の首都である。」これは獨逸宰相ベトマン、ホルウエツヒ自身の告白である。

佛國政府が如何に時局を觀察してゐたかは外務大臣代理ビエタンが大統領歸國の際に之に提出した報告書に依つて明白である。

墺匈國は内部よりの崩壞を惧れて、フランツ、フエルヂナンド大公刺殺の口實の下に將來の保證としてセルビアの軍事上の地點又は其領土を占領せんことを企てた。獨逸は墺國を支持しつつある。平和の維持は露國の手にかかつてゐる。何となれば問題は墺匈國とセルビアとの間に限局せられなければならない。換言すれば墺國はセルビアの過去の政策を膺懲し將來の保證を取り付けるといふことに歸するのである。此見地から獨逸は露國に自重を勸告しようといふ提案をした。然し佛國も英國も之を拒絕した（二十六日）。巴里では獨逸大使フオン・シエーンが獨逸と佛國と共同の措置をもつて露國に

平和維持を勸告しようと努力したが無效であつた。英佛兩國は事の起りが墺匈國のセルビヤに對する過大の要求にあるのであるから、自制を求めるなら寧ろ墺匈國に向つて要求すべきであると答へた。英佛兩國は露國に向つて自制を要求することは出來ない、露國は充分自重の態度を示し殊にセルビアに對してさへも出來る丈け墺國の通牒を承諾するように勸告した。獨逸は表面ロシアに壓迫を加へる意志を捨てて露墺兩國に對し調停の方法を執るように見せてゐるが、同時に問題を永引かせようとしてゐる。獨逸は何等の具體策をも示さずして單に善後會議の提案を斥けつつある。墺國は露國と交渉を續けてはゐるが、これも單に時日を遷延する爲めである。然し墺國は同時に着々行動を進めつゝあるからこのまゝに打捨てて置けば墺國の要求は增大する許りである。グレー外相の提議した調停案に露國が同意することは最も望ましい。さもなくば墺匈國は保證の名義に依つて事實上東歐に於ける領土を變更する結果になるであらう。

佛國首相ヴイヴイアニは二十九日巴里に歸ると直ぐに英國政府に向つて更に調停案を提出することを乞ひ、同時に獨逸大使に對して英國の調停案に同意を求めたがフオン・シエーンは調停又は會議といふ文字は墺匈國が好まないと答へた。同日ヴイヴイアニは露國政府に向つて露國は其同盟國佛蘭西の全き支持を期待し得べき旨を聲明した。

七月卅一日獨逸大使はヴイヴアニを訪問して露國が總動員を命じたことを述べ、露獨交戰の場合に佛國は如何なる態度を取るかと質問した。そして八月一日の午后一時に回答を聞きに來ると述べて立去つた。獨逸政府から獨逸大使に宛てた訓令にはかう書いてある。『佛國政府は露獨戰爭に對して中立を守るか否かを確かめ十八時間以内に回答を求めよ。貴大使が右質問を申入れた時間を折返し電報あれ。右至急取運ばれ度し。』

翌日フオン・シエーンの來訪した時佛國首相は佛蘭西は其利害の要求する處に從つて行動する旨を答へた。『佛國がもし此時に中立を守り得ないと云へば獨逸はこの言葉を援用して佛國が戰爭をしかけたといふ積りだつたらう』とデバの主筆ゴウヴアンが評してゐる。フオン・シエーンは七月卅一日から重要書類の始末を始め、八月三日になつて初めて旅券を請求した。戰爭はかくして歐洲の全般に擴がつたのである。

二　世界戰後に於ける英米獨佛の關係

一、世界戰後の國際政局

世界戰爭は四年四ケ月の日子を費して大正七年の十一月十一日に終熄した。新しい世界を造り上げる爲めの平和公會は翌八年の一月から巴里に開かれて同年六月二十八日に初めて獨逸と聯合國側との平和條約が調印せられた。爾來今日まで殆んど六ケ年を經過したが世界は今尙ほ戰爭の遺した精神的及び物質的打擊から恢復してゐない。

過去十ケ年の歷史に綴られた雜多の事件は恐らくローマ帝國の崩壞以來歷史に比類なき深刻なそして大きな事件であつた。このやうな大悲劇が四ケ年以上に亘つて演ぜられた後には人類社會が先例なき難局に當面することは當然のことであつた。世界が差當つて爲すべきことは歐洲各國の政治生活を改造することと、財政を整理すること、經濟界を立て直すこと、産業の組織を改めること、そして此等凡ての問題に新なる精神を吹込むことであつた。

歐洲戰爭は一千萬の人を殺し、二千萬の人を傷け、有史以來未だ見ざる悽慘な出來事であつたから戰爭の後半期以來、世界の理想政治家及思想家はこの戰爭を以て世界最終の戰爭なりと標榜し、これを一紀元として世界の新しい秩序を確立しやうと考へた。

然し戰爭の終局とともに世界の政治的民主々義は多少顯著な進步を遂げたけれども人類社會改造の理想に就ては全く之を忘却し去つたかの如く各國とも再び戰爭前の思想見解に復歸したやうに見へる。どこの國民も重大な利害に就ては世界平和の名をもつてしても之を犧牲にしようとはしない。其獨立權の一小部分と雖放棄することを肯じない。巴里の平和會議に於ても領權土、殖民地、石油石炭の利權、賠償、戰時債務、海底電線、凡てこれ等の利益の配分に際しては各國政治家とも爭つて其の分前の多からむことに焦慮した。この現象は新らしい世界の進運と甚だ矛盾した如く見へて實は自己の力の外に恃むものなき今日の國家生活に於ては實は止むを得ざる弱點であつた。

ウイルソンは國際聯盟の成立によつて舊い國家主義の害毒から人類を救はうと決心した。然し國際聯盟は政治的の一大勢力

であることに於て疑を容れないものと雖、聯盟は遂に牙のない勢力であるとを全く否定する譯には行かない。聯盟規約と併行して歐洲大陸の平和維持に最も效果あるべしと見へた英米兩國のフランス保障條約も米國上院の批准拒絶に依つて實現を見るに至らずして立枯れて了つた。聯盟による『私心なき協調』も『實力に依る戰禍の防遏』も共に實現の見込なしと見て世界が再び相率ひて十九世紀の思想に復元される傾向に向つたのである。

歐洲大陸の渾沌たる狀態に愛想をつかした英米兩國は逸早く大陸の紛糾から離れて自己固有の天地に立籠る準備を整へた。北米に於ては聯盟加入論が聲を潛めてモンロー主義者が再び米國外交の尖頭に立つやうになつたのも英國の保守黨政治家が特惠關稅と殖民地會議に主力を傾倒するやうになつたのも、共に光榮ある孤立政策の表現であつた。フランスは協調政策の美名を捨て他力本願の政策よりポアンカレの自力宗に乘換へた。これが一九二二年にブリアン内閣の倒潰してポアンカレ内閣の成立した所以であつた。妥協協調の繫累をかなぐり捨てて、フランス獨自の力を以て獨逸に備へ、獨逸を監視し、獨逸を搾取することが佛國々權黨の政策である。

さり乍ら廿世紀は遂に十九世紀ではない。英米兩國が其の絕大の資源を擁して世界に孤立してゐても經濟的政治的に錯綜した諸列國との關係は到底歐洲大陸の紛糾を拱手傍觀することを許さない。歐洲の經濟が復興しない限り英國の産業振興と失業救濟は見込が立たない。大陸と英帝國とが戰前の經濟狀況に歸らない限り米國の繁榮は戰前に回復し得ない。これ即ち英國の政治家が大陸の渾沌たる政局に深入することを避けつゝも、經濟復興や安全保障案に無關心であり得ない理由である。現在の歐洲を世界の癌なりと罵りつゝも米國財界の巨頭が歐洲救濟に腐心する所以であり、前敵國を搾取せんとした英佛が遂に自國の資金を投げ出して獨逸の救濟援助に出掛けた所以である。自力本願の固執したフランスの保守黨も、フランス貨幣の漸落と經濟財政の悲境とを目前にしては倫敦紐育の財力を度外視することが出來なくなつた。歐米は再び國民主義に歸つたと云ひ、反動的精神に燃えてゐると云ひ乍らも、こゝに一脈の新理想主義が各國の平和主義を率ゐて新なる世界への道程を進みつゝあることは否定し得ないように見へる。

二、戰爭終結當時の英佛獨の地位

世界戰爭の結果最大の政治的勝利を收めたものは云ふまでもなく英國であつた。一九一九年の初頭に於ける英國は、獨逸との平和條約成立以前に既に其戰爭の目的を達してゐた。

（イ）獨逸の艦隊は休戰條約によつて聯合國に引渡すことゝな

り、其部分はスカパフローで爆沈して了つた。

(ロ)獨逸の殖民地はアフリカ及太平洋洲にあるものとも、大部分英國の手に歸して了つた。

(ハ)獨逸の優秀な商船は、戰時中に聯合國が潜水艇に依つて失つた船舶の補償として、主に英國に引渡された。

從つて英國が多年競爭國として怖れた海軍國、殖民國、海運國としての獨逸は既に亡びて、平和條約を俟たずして戰爭の目的を達したものである。

佛蘭西はベルサイユ條約の實施が完全に行はれて初めて戰勝國たる利益をかち得る望はあつたが、この條約履行を監視することも自己の獨力をもつては極めて困難な有樣に居た。素より佛蘭西はアルザス・ローレンを奪還した。然し今日まで勝利の果實として現實に手に入れたものはこれ丈である。佛國はこの大戰の結果百卅六萬余の壯丁を失ひ、不具廢疾及負傷者は三百七十萬人に上つてゐる。戰爭の爲め荒廢した土地は北部十縣に亘る最も豐かな工業地である。この間に費した軍事費は千四百三十億法に上り、戰後の復興事業に要する經費もほゞ之に劣らない巨額であつた。然るに獨逸は戰後尚ほ六千萬の人口を有し、戰爭に經驗ある數百萬の壯丁を擁してゐる。英米佛三國間の同盟條約が不成立に歸して以來ライン國境の安全に對しては佛國が獨力防衛の任に當る覺悟をしなければならなかつた。のみならず、戰爭に依つてこうけた損害は獨逸が賠償金の支拂を忠實に履行しない限り、之を受取る見込はなかつた。

獨逸は戰敗に依つてアルザス、ローレンや上部シレジア並に東プロシアの一部を失ひ、殖民地を奪はれ、陸海軍の力を制限せられた。然し戰爭に依つて製造工業を擴張し、農業を奬勵し、商業の組織を改善した點が多いから賠償金の支拂さへ免除せらるれば國力の恢復は最も迅速であつたかも知れない。故に獨逸戰後の外交的努力は、ヴエルサイユ條約の改訂と聯合國の結束を破壞することとであつた。獨逸國民は決して戰爭の責任を執ることを肯んじないのみならず、戰爭に敗れたのは國内革命の爲であつて、軍隊のせいでないと信じてゐた。從つてベルサイユ條約は聯合國が不正を獨逸におしつけたものと今以て考へてゐる。

三、英佛の利害の衝突

平和條約が成立した時、英國は又戰前の國力を取かへしたと考へてゐた、勿論國の面積から云つても、國の聲望から云つても英國は戰後其地位を高めたと云ひ得るのであるが然し英國の政治家は直ぐに戰爭の遺物として近東、小亞細亞に駐兵し、委

任統治國に行政を行ひ、埃及を保持し、所謂帝國政策を行ふことは國庫の負擔に於て容易ならない事を悟つた。加之、戰後に於て英國政治家の當面する重要問題は産業の不振であり、有産階級の疲憊であり、失業勞働者の續出であつた。

戰爭に依つて獨逸の威力が減退した以上、英國が歐洲大陸に求めた處は勢力の均衡と經濟的秩序の恢復である。然し英國は大陸諸國に劣らない經濟的大打擊を受けた。英國は先づ輸入超過と輸出の減退に惱まされた、ついで社會問題就中勞働問題の紛糾は引つづき同盟罷工となつて顯れた。そして一九二〇年以降今日まで失業勞働者の數は二百萬から百萬の間を往來してゐる。

英國の輿論はこの經濟不況を以て世界の不安に基くものとし、産業の復舊、失業の救濟には速に戰前の經濟組織を恢復し世界の安定を圖らねばならないと主張した。殊に平和條約の包含する經濟條項及賠償條項は、經濟學の原理に背いて巨額の支拂を獨逸に求めんとするものであるから、速に平和條約を改訂して、賠償金額を減少しなければならないとの主張は自由黨及勞働黨の裡に有力になつた。

ロイド・ジョージの聯立内閣は聯合國の結束によつて獨逸の條約履行を監督する方針を捨てなかつたが、それでも將來大陸の同盟政策に捲込まれまいとする努力は明白に看取することが出來た。將來國際聯盟を此目的の爲めに活用するのが戰後の凡ての英國内閣に共通な政策であつた。

戰後に於ける佛國の政策は主として對獨政策に於て聯合國の支持を得ることであつた。ロシア問題、近東問題に對する利益の如きは一部分之を犧牲としても獨逸に對する主要問題に於ては平和條約の規定によつて一歩も讓るまいとの堅い決心をもつてゐた。

ヴェルサイユ條約の實施（一九二〇年一月十日）と同時に聯合國と獨逸との間に懸案として殘された重大問題はカイザー處罰（戰爭責任者の引渡）と、軍事條項の履行と、賠償金の決定の問題であつた。此等の諸問題に就ては獨逸に對する政策の相違から絶えず英佛兩政府間に意見の相違を來した。この點は對獨政策を詳說する際に之を讓る。

對露政策に就ても久しい間英佛の見解は隔絶して居つた。英國の對露政策は各種の利害關係から出發して佛國と異る到着點に達した。その第一は英國が印度保全の必要上、永く露國と反目するを不利とすることである。ソヴエートは印度が英國の弱點であることを充分に知つてゐる。第二は英國の貿易政策が永く露國を孤立せしめて置くことを不利とすることである。露國

は麥、石油、バタ、木材等の原料品に富んでゐる。又英國製產品の大きな市場である。從つてロシアが歐亞の諸國と常軌の通商關係を恢復しない限り歐洲の經濟復興が極めて困難であることは英國資本家のよく了解する處である。第三は獨逸と露國との接近が歐洲政局に脅威であるとの見地から露國を獨逸の懷に投ぜしめない爲めに露國を歐洲强調の仲間に入れようとの思想である。第四は他國の內政に干渉することを嫌ふ英國人の自由精神が英國政府をして冷靜にソヴエート政府との通商修交問題を考慮せしめた。

反之フランスが焦慮するところは獨逸勢力に拮抗する露西亞政府を擁立して戰前の勢力均衡政策に歸らうとする點にある。而してソヴエート政府が先天的に親獨派であり、又外債破棄、私有權否認の方針によつてロシアの債權國の利益を顧念しなかつたことは佛國人の反感を高からしめた大なる原因であつた。

土耳其及小亞細亞に於ても英佛の利害は到る處で衝突した。英國の近東政策は十九世紀以來時にトルコを助け、時にトルコを敵とし屢々其相手を變へたけれども、外交方針の根本は常に動かなかつた。英國の眼目とする點は印度に通ずるスエズ運河の航行を確保しジブラルタルとマルタを根據として東地中海の制海權を握り、君府の海峽を抑へて出來得べくんば黑海を英國艦隊の威力の下に置かうとすることである。

佛國の近東政策は年來トルコ領內に扶植した經濟的地位並に文化的勢力を維持し、トルコの勢力を扶けて英國が黑海並に東地中海に優越した力を揮ふことを妨げんことにある。この爭は久しく小亞細亞に於て行はれ又ローザンヌ條約成立に至るまで前後五ケ年に亘る抗爭の種であつた。

對獨政策に關する英佛兩國の見解の相違は一層激しい爭議を惹起した。延いては對波蘭政策、上部シレジアの所屬に就ても相爭ひ、殊に對獨賠償問題に於て最も激しい論爭を惹起した。

波蘭羅馬尼等の小協商國に對する政策に於いて英佛互に相爭つたのは矢張り對露、對獨政策の反映である。英國は波蘭を餘り强大にすることは露獨の利害を共通ならしめ其接近を助ける虞があるとし同時に波蘭や羅馬尼が獨露と相爭ふ種子を遺すのは將來の平和を危くする所以であると考へてゐた。

反之佛國は獨逸の東方に强大な味方を造ることが獨逸を牽制する唯一の方策である。殊にソヴエート露國が親獨的傾向を帶びてゐる以上は獨露の間に介在して兩國の交通を監視する波蘭羅馬尼、チエック等を扶けることが當然の自衞の途であると考へた。それ故に佛國は波蘭其他の小協商國との間に同盟を結んで之に武器と士官を供給し資金を貸與して軍政を整理せしめた。

四、敗戰後の獨逸

獨逸は敗れた、然し軍閥は敗戰の責任を一に國内に於ける社會主義者と平和論者との責に歸して獨逸の軍隊は常勝の兵であると信じてゐる。失望した民衆と勞働階級とは王侯と帝王とを驅逐して大正七年十一月九日に獨逸共和國を建てた。

ヴエルサイユ條約が發表せられた際に獨逸は其條件の過重なのに痛憤して一齊に之に抗議したが四周の狀況は之を受入れる外に方法は無かつた。そして國民はその革命の成果を擁護することよりも聯合國の包圍政策の絏行に悲憤の念を抑へ切れないでゐるやうに見へた。

獨逸保守黨は革命を呪ひ、再びビスマルクに歸る日を期待するやうになつた。勞働階級は革命の鬪が終れば直ちに彼等の運命は拓けるかの如く信じてゐたから、革命政府の政治に對して失望を禁じ得なかつた。自由主義の有產階級は現在の不安と鬪爭とを厭ふて、帝政時代の秩序と繁榮とを追想するに忙しい。一言にして云へば獨逸人民は世界戰爭の教訓を充分に體得してゐないし、獨逸の識者は一般民衆に向つて眞實を語ることを虞れてゐると一九一四年夏の開戰の當時と餘り大差ないやうに思れる。獨逸最近の政界は普佛戰爭直後に於ける巴里の政情に比すべきものである。フランスの共和憲法は僅に數票の差を以て一八七八年に採用せられた、當時の王黨の勢力は動もすれば共和黨を凌ぐ狀況にあつたのみならず爾來フランスの外政はデルカツセやポアンカレの對外硬派とカイヨー一派の對外軟派との不斷の抗爭であつた。獨逸の政界が今尚安定を缺く最大の理由は王黨と共和黨の勢力が互に伯仲の間にあり從つてヴエルサイユ條約の破壞を高調するものと民主主義的平和政策に與するものとが互に爭鬪を續けて讓步を肯んじない點にある。內政的に見れば一九一八の革命を擁護する一派と之に反對して社會主義的制度を撤廢せんとするブルジョアの反動派との爭である。ワイマールとポツツダムとの間に低迷して居る獨逸人は其外交に於ても著しく狐疑逡巡して明白な態度を執り得ず動もすれば論理の末に墮する惑である。從て極右國權黨の復辟政策が今直に獨逸の勞働階級を動かし得る機會が來るとも思はれないが獨逸の政黨は中央の諸黨派と雖共の外交政策に於ては餘程右傾して居ることは著しい現象である。民主黨より右の諸黨派が主張するところは一言にして云へば平和條約の改訂である。然し實際政治の局に當るものは、四圍の狀況に適應して國民の經濟生活を確保する外なかつた。從つて左黨を除く外の中央の諸黨と右黨とは悉く平和條約の履行を標榜して列國の信任を博する政策をと

る方針に出てゐる。

五、賠償問題と英佛獨の三角關係

ヴェルサイユ條約は獨逸の支拂ふべき賠償金の總額を決定しなかつたが、聯合國の政治家はこれを一九二一年の五月一日までに決定して獨逸に通告すべき義務をもつてゐた。一九二一年五月の倫敦會議に於ては、賠償總額を千三百二十億金馬克と定め、向後卅二年間獨逸は毎年廿億金馬克を支拂ひ、其外に輸出貿易額の二割五分に相當する金額を不定額の賠償として支拂ふことに決定せられた。これが倫敦の支拂計畫書と稱するものである。

賠償金の支拂は財政問題であると同時に、經濟問題であつたが間もなく歐洲に於ける最も大なる政治問題と化して來た。この間の經緯は現世紀に於ける歐洲諸國の利害が如何に錯綜してゐるかを示すものであり、同時に現代の國際生活が如何に緊密に世界の各國を經濟的聯帶の鎖に依つて結付けられてゐるかを證據立てるものである。

戰爭の結果三千億フランの國債を負ひ、千億フランの復舊費を要する佛國に取つては、獨逸の賠償金は財政的にみて重要な資源の一である耳ならず、同時に獨逸が戰爭の責任を痛感して佛國に支拂ふ賠償金である。故に之を支拂ふと否とは直ちに將來の平和に對する獨逸人の誠意如何を表徴するものと考へてゐる。

反之、英國の輿論は戰後の經濟悲境の原因を以て世界的不安に基くものとし、次の如き結論に到達した。曰く、歐洲大陸の安定を缺くのは平和條約の規定の内に經濟的原則を無視した多くの條項が存在する爲めである。就中賠償支拂の爲めに獨逸に過重の義務を負はせ歐洲諸國の產業倉庫である獨逸の經濟市場を全然攪亂したことが其大原因である。故に英國の產業振興には歐洲の復興を先決問題とし、歐洲の復興には賠償金の輕減を必要とする。此意味に於て、平和條約に定めた莫大な獨逸の賠償債務は歐洲の復興、世界の安定に對する癌腫であると。

賠償問題に對する英國と佛國との意見の相違は平和會議後間もなく表面に現れて來たが一九二一年の末、獨逸が僅に十億馬克の賠償を支拂つた許りで賠償の支拂猶餘を求め、聯合國が賠償問題の善後策を討議するに至つて、意見の扞格は益々甚しくなつた。

一九二一年の五月に倫敦支拂計畫が成立したとき獨逸宰相ヴイルトは四圍の狀況が到底聯合國最高會議の決定に反抗するの不可能であることを看取して一應この賠償總額の決定を承認し

獨逸に條約履行の誠意あることを示すと同時に、獨逸の財政經濟がその支拂に堪へない事實が顯れて來た時を以て改めて賠償額の輕減を求める方策をとつた。

獨逸の政界は平和條約を中心として履行派と非履行派の二つに分れた。素より履行派と云ひ、非履行派と云つても結局は手段に對する意見の相違であつて根本の主義に於て異つてゐるものではない。社會黨は戰後に於ける冒險政策が勞働階級に致命的大打撃を與へんことを怖れ商工業者は經濟取引の利害の打算から平和條約の承認に傾いたものである。反之外國との競爭を意に介しない大企業工業家や農民黨は條約の履行に反對の意見を主張した。

革命以來獨逸の政界は常に中央と左黨の一部とが提携して政局に立つた。夫れ故に議會の多數は多く履行派と稱する政治家に依つて率ゐられた。ウイルトより現在のルーテル內閣に至るまで皆同一の政派に依つて政治が運用せられてゐる。尤もルール占領の當時に於けるクノー內閣は寧ろ右黨に近い主張をもつて消極的抵抗を決行したが、この政策は四五ケ月にして放棄する外なかつた。そして後繼內閣は再び履行政策に立還つた。

英佛協調が獨逸を壓迫する間は獨逸が東方のロシアと握手接近を求めるのは唯一の逃げ途であつた。英佛其他の列强より除外せられたロシアも獨逸と妥協するのが自然の勢である。かくて一九二二年の春、世界各國がゼノアに會議を開いて歐洲の經濟復興を討議してゐる最中に獨逸とロシアはラッパロ條約なるものに調印して了つた。露國は獨逸との親交を誇示して英佛を牽制せんとしたものであり、獨逸は聯合側諸國の結合が依然として獨逸に對峙する形勢に刺激せられて歐洲協調に入ることを拒絕しロシアと結んだものである。

ラッパロ條約は獨逸にとつてもロシアに取つても何等直接の利益を與へるものではなかつたが之が爲めに西歐に於ける獨逸の信用は甚だしく毀損せられた、條約締結後三ケ年を經過した今日に於ても此條約の齎した効果は殆んど之を認めることは出來ない。ロイド・ジョージは賠償問題の解決を企てゝ遂に志を得ずして倒れた政治家の一人であつた。彼の政界に於ける言動に付ては毀譽相半してゐるとは云ふものゝ、戰後の國際政局を双肩に擔つて、妥協互讓の政策により世界安定の爲めに奮闘した努力は之を多としなければならない。不幸にして政治家の努力と熱心とのみを以ては國家の基本的利害の衝突は如何ともすることが出來なかつた。

戰後の佛國が最も熱望してゐた問題は東方國境の安全保證と獨逸の賠償支拂とである。この賠償の支拂を受けずして佛蘭西

は財政整理の見込が立たない状況にあつた。然し英國に取つては、自國の産業不振はより大なる危險であつた。獨逸が財政的に破綻し、政治的混亂に陷ることは賠償の不拂よりも、もつと重大なる危險であつた。佛蘭西が獨逸を壓迫すればする程、英國が佛蘭西の軍國主義を攻擊したのは英國が特に獨逸を好むに非ずして、一は重力の中心を求める權衡政策の結果であり、一は自國の産業政策よりする打算の結果であつた。そして獨逸は英國のこの傾向に期待をもつやうになつた。

英佛の政治家は再三會議して賠償問題の前後策を議した。ブーロレニユ、チエカース、カンヌ、倫敦、巴里と幾度か會議を重ねて、其度毎に佛蘭西は讓歩した形である。フランス人はロイド・ジョージの巧言に乘ぜられて歩一歩其地歩を失つたやうに感じた。ロイド・ジョージの名が全佛國から呪はれたのは此理由に依る。ブリアン內閣の倒れたのも云はば英國との妥協に苦心したブリアンを英國黨なりとして葬らむとするロイド・ジョージに對する面當であつた。

一九二二年の初にポアンカレがブリアンに代つて內閣に成つてから形成は全く一變した。ポアンカレは英國との協商を度外に置いて大陸に同盟を求め、白耳義、チエコ・スロヴァキア、波蘭を同盟に引入れた許りでなく、賠償問題に於ても、佛國の獨力を以て之を解決する決心をした。英國對佛蘭西の仲は此時代に入つて頂點に達した。

ロイド・ジョージは亂世の雄である。群集を率ゐることを知り、機を制する術を知り、大勢に應ずる機略と膽力とをもつてゐた。彼は英佛の協調を維持し、佛國には安全の保障を與へ、獨逸には賠償の輕減に依つて安息を與へ、ロシアを歐洲協調の內へ引出さうと努力した。然し彼の志は達成せられないうちに中途して一九二二年の秋希土戰爭の問題の爲めに倒れた。

之に代つた保守黨內閣は、依然としてポアンカレの强硬政策を引止めることが出來なかつた。獨逸に對して暫く休養の時間を與へ、賠償金額を獨逸の支拂能力に適合するやうに改訂しようとするのは英國の主張である。之に對して佛國の政治家は獨逸は故意に賠償の支拂を怠る惡意の債務者であるから支拂の擔保を差押へて支拂を强制し、自國の破産を免れる主張があると主張した。この主張に出發して一九二三年一月佛白兩國は單獨行動を取つてルール谿谷地方を占領した。

六、ルール占領よりドース案の實施まで

ルール占領には二つの目的があつた、一方には佛白兩國は獨逸の大動脈と稱せられる炭坑地及工業地を押へて獨逸の屈服を

迫ると共に、他方には炭坑や鐵道の管理に依つて直接賠償金を收得しようと企てたものである。

獨逸は上下を擧げて之に反對した。そして所謂消極的反抗と稱する方法をとつた。然し獨逸はこの産業の寶庫を奪はれ又消極的反抗の爲めに莫大の資金を必要とした爲めに年々悪化しつつあつた經濟財政は急轉して破綻の淵に瀕した。マルク紙幣の下落、物價騰貴、紙幣増發はソヴエート露國の轍をふんで、爲めに獨逸の國民的統一さへも危からむとした。

於是、英米の政治家が高調した政策は卵を得んが爲めに雞を殺す勿れといふ叫であつた。ルールより撤兵し、獨逸の財政を立直さなければ賠償の支拂は永久に絶望であるといふ論であつた。獨逸の政治家も亦國家の統一と財政破綻の危急を救ふ爲めに極力妥協互讓の政策に出る外はなかつた。これ等の機運は相合して茲に再び英佛白伊諸國との間に賠償解決の方案が討議せらるることとなつた。

昨年七月より八月に至る倫敦會議はドース案の實施を研究し、之が實行に必要なる條件を討議する爲であつた。この會議に於て利害關係國（英、白、佛、日、羅馬尼、南スラーウ及び獨逸）の間に調印せられた協定は極めて多數であつたがこの協定により賠償委員會は改めてドース案と稱する新しい法案に基いて運用せられることになつた。

ロンドン會議に於て佛國は二個の大なる讓歩をしてゐる。第一は賠償委員會に於ける優越な地位をすてゝ米國委員の參加を求め、賠償委員會を公平な機關として名實相伴ふものとしたことである。第二は實力による制裁の實施を單獨で試みないことを約し、先以て獨逸に不履行ありや否やを公平な審理機關に依つて裁定せしめることとしたことである。

ルール占領撤廢の問題は倫敦會議の日程には上らなかつた。それは政治的問題としてドース委員會の權限外に屬してゐたからである。然しロンドンに於ては英佛獨等の全權の間に非公式に意見を交換し、佛白兩國はドース案が實際誠實に適用せらるるならばルールの占領は最小限一ケ年の期間内に撤廢せらるべき旨を聲明した。

昨年七八月のロンドン會議は國際的協調の爲めに最も幸運な機會に開かれた。昨年一月以來英國の内閣を主宰したマクドーナルドは年來賠償問題の解決に熱心な政治家であり、藏相クラインスは親獨派と稱すべき程に獨逸支持論者である。佛國に於ては五月の總選擧で從來二ケ年間强硬政策を固持したポアンカレが失脚して、新に年少氣鋭のエリオが首相となつた。

勿論國際的利害關係と境遇のきづなとが十重廿重にからむだ

現在の政局に於て、エリオと𦾔全然新規の政策に出ることは極めて難事である。然し彼とポアンカレとの間には一の大きな差違がある、それはポアンカレが足の先から頭の頂上まで實際家であつたのに反してエリオは若い理想家である點である。彼は紛糾した賠償問題を解決する決心を持つて倫敦に行つた。更に必要とあれば伯林にもモスコーにも行く意氣込をもつてゐる。この熱情と理想とはエリオ一派の急進黨政府をして「英佛協商の甦生」、「獨佛の妥協」、「露佛の親交恢復」等の政綱を提唱せしめ倫敦も伯林もモスコーも歡呼して、エリオの執權を迎へた。かうした機會は年來紛糾した賠償問題を解決するに絶好の時期であつた。

倫敦會議は英米の資本家をして獨逸の資金を供給せしめること、これに依つて獨逸自身をして財政の整理を行はしめることに成功した。これは佛國側の勝利であるとも云へよう。同時に佛國は速にルールより撤兵し、後日單獨行動を以て獨逸に制裁を加へることを封じられて了つた。この點は主としてマクドーナルド宰相の成功である。而してロンドン會議は明かに獨逸に精神的勝利の慰安を與へたものと云ひ得るであらう。

ドース案の實行の第一歩として英米佛等はまづ獨逸に外債八億馬克を貸與へた。この計畫の實行は獨逸の國民經濟生活を安定し賠償の支拂を可能ならしめ、延いて世界の經濟安定に貢獻するものとして多大の期待を以て迎へられてゐる。之が爲めに英米獨の金融市場が安心を得たことは今日に於ても歷々指摘することが出來る。さり乍ら賠償問題が純粹の經濟問題に非ずして關係國間の政治問題と化してゐる以上、ドース案の實行亦勢ひ政治的考察により影響せられることのあり得るのは今から豫想せらるる處である。賠償支拂の履行如何が獨佛兩國の親善に大影響を及ぼすこと前述の通りであるが、同時に獨逸の內政が右偏するか左傾するか、佛國の政府が國權黨の手に歸するか、或は妥協派によつて組織せられるかによつて今後ドース案の實行に影響あることも論を俟たない處である。

七、歐洲を安定する問題

賠償問題は倫敦會議に於て解決の曙光を見出し得たが、然し歐洲諸國に取つては尙一つの問題が殘つてゐる。それは安全保障の問題である。巴里の講話會議に於て英米の政治家は國際聯盟規約なるものを提案し、これに依つて世界平和を確保せんとしたが佛國は將來獨逸の復讐戰に備へる爲めに、聯盟規約を以て不充分なりとしライン河左岸を併合することを希望した。然し英米兩國に獨逸領土の割讓に反對し、佛國の要求を斥けたが

將來獨逸が挑戰した場合には兩國は武力を以て佛國を援助するとの約束を與へた。この條約は一九一九年六月二十八日にヴエルサイユで調印せられた英米の佛國保障條約と稱するものである。

然るにこの保障條約は米國議會に於て葬られ、遂に實施せられるに至らなかつた。此條約を以てヴエルサイユ條約と一體不可分であると考へてゐる佛國の輿論はこれを以て米國議會の喰逃であると憤つた。

其後英國政府は歐洲の政局安定の爲めには佛國に國防上の安心を與へ、之をして歐洲復興政策に同意せしめる外ないとの考を以て一九二二年一月に一の覺書を佛國に渡した。其要點は獨逸が直接且つ挑發的の攻撃を佛國に加へる場合には英國が其陸海空軍を以て佛國を援助することである。

然るにこの條約案を受取つたブリアンは一月十二日に辭職して後繼內閣はポアンカレの手に依つて組織せられた。ポアンカレは佛國の輿論が次第に英國に對して硬化しつゝある狀況に鑑み、英國政府に對し大體左の如き修正案を提出した。即ち(一)英佛兩國は各均等の立場に於て相互に其安全を保障することと(二)獨逸が其東方新興國波蘭、チエツクを攻撃する場合にも此條約の適用せられること、併に(三)條約の附屬として別に詳細な軍事協定を作ることであつた。

然し當時の英國政府は他の大陸問題と獨立して此問題を解決することを好まず、佛國も亦多くの犧牲を拂つて英國の援助條約を買ふことを欲せず、問題は此儘進捗せずに終つた。

然し後に述べる平和議定書が聯盟總會で熱心に討議せられたのは佛白其他の大陸諸國が平和の保證を得ることを絕對に必要とすることを示すものであつて、歐洲の强國が何等かの形に於て互に平和を保證しない限り世界は再び勢力均衡政策に立歸つて、同盟條約を求める外ないであらう。

八、國際聯盟と平和議定書

歐洲大陸に於て其國境の安全保持に焦慮するものは必ずしも佛國や白耳義のみでは無かつた、波蘭もチエツコも羅馬尼も其他の國々も同樣に之を危惧してゐる。巴里の平和會議が國際聯盟規約を考案したのも此條約を以て將來國際間の平和を維持しようとの野心に外ならなかつたのである。

聯盟の事業は國際間の紛爭を平和的に解決する方法を採用することと各國の軍備を縮少して之によつて國家間の政治に力の支配を排斥し正義公平の觀念を以てしようと云ふのであつた。之が爲めに一九二二年の第三回聯盟總會は軍備縮少と安全保障

に關するセシル卿の決議案を可決し、特に委員會を設けて其體案を研究せしめたが昨年九月の總會に於て其研究報告を討議することになつた。聯盟總會に於て各國代表は將來國際的紛爭を解決するには强制的仲裁々判の方法に依り、其判決の執行を保障するには聯盟に參加してゐる各國が武力其他の方法を以て互に相援助し、この保障の下に軍備縮少を行ふことを世界各國の政府に勸告することに意見が一致したのである。

於是國際聯盟總會は十月二日出席國四十七ケ國の全會一致を以て十七箇條より成る一の議定書を可決し聯盟規約を改正して一層之を完全なものとすると共にこの基礎の上に本年六月十五日を以て世界の軍備縮少會議を開くことを各國政府に勸告することとした。

英國の勞働黨も佛國の急進黨も共に國際聯盟の支持者であつて之を保守黨内閣やポアンカレの政府に比ぶれば素より熱心な聯盟の信者と云ひ得るものであつた。從つて安全の保障を求める佛國が國際聯盟の議定書に賛成したのは當然のことであり、マクドナルド内閣が正面より之に反對し得ないのも理由のないことではなかつた。

英國宰相マクドーナルドも佛國首相エリオも自ら總會に臨席して其國の態度を表明した。マクドーナルドの演説は歴史的にみても極めて重要なものであつたが然し歐洲大陸諸國の傳統的政策と比べては根本的に異つた思想を含んでゐた。マクドーナルドの主張は將來の國際的紛爭は强制的仲裁々判に依つて之を決定することを强調し現在締結せられてゐる佛國と白耳義及波蘭等の同盟條約に反對し又佛白の安全を保障する爲めに英國が同盟の義務を負ふことにも反對であつた。然しこの思想は必ずしも英國に於て新しいものではなかつた。英國の如く島國にして强大な海軍を擁し歐洲大陸からの脅威を感じない國に於ては何等かの危險の迫らない限り同盟國を求める必要はない、同盟政策は徒らに大陸戰爭の渦中に投ずる虞がある、故に自ら同盟の義務を負ふことを避けるのみならず大陸諸國に向つても自己と同一の政策を採用せんことを勸告する傾向にある。

然し英國と雖大陸諸國の運命に無關心であることは出來ない。大陸の安全は英國産業恢復の爲めに絶對に必要であるから歐洲の平和を維持することは一日も英國の念頭を去り得ない問題である。從つて仲裁々判制度は若し實現し得るならば最少の責任を以て最大の效果をあげ得る方法である。此意味から云つてマクドーナルドの議論は英國の立場を最も明白に直言したものであつた。

大陸諸國の代表者は交々起つて之に反駁を加へた。彼等は皆よ

り國際紛爭を仲裁々判に附することに反對であるのでもなく、獨逸を聯盟に加入せしめることにも大した異存はない。然しこの仲裁の規定を守り、軍備を縮少し、同盟條約を廢棄した曉に、孰れかの強國が他國を攻撃する如きことあらむか、其國の安全は如何にして保障せられることが出來るかといふのが彼等の危惧であつた。

佛國のエリオは佛國が二千年來たへず外敵の侵略の爲めに惱され來れることを語つた。「今日に於ても佛蘭西の最大の苦惱は國防の安全問題である、若し獨逸が一樣に仲裁々判の規定を嚴守することが明白であるならば心配はないが、如何にして何人か之を保障し得るか、條約に忠なるが爲めに侵略を以て酬ゐらるゝが如きことは忍び得るところでない、」これがエリオの議論の眼目であつた。

於是英國と他の大陸諸國との議論の相違は明白であつた。平和議定書の討議に表はれた議論は共に將來に對する危惧から出發してゐる、佛白其他の大陸諸國は獨力を以て防禦し得ない強敵の侵略を恐れてゐるし英國は歐洲大陸の援助の爲めに直接利害關係のない戰爭の渦中に投ぜられることを恐れてゐるのである。故に仲裁々判に加盟せる國が他國の攻撃に遭はないやうに確實な保障を與へることが必要である、これ即ち歐洲大陸諸國が相互援助の方法を必要なりと主張し、英國が相互援助よりも仲裁々判を強調する所以である。

九、米國と歐洲

米國人の多數は英國より移住したアングロサクソン人種であるが四圍の環境の差異によつて兩國人の間には多くの差異を認める程に變化して來た。其思想、習慣及び政治に對する觀念に於てアングロサクソンの二大國は決して同一人種と考へ得られない程に異つてゐる。

米國の獨立戰爭以降英米兩國の關係は決して良好といふことは出來なかつた。歐洲戰爭中に於ても幾度かこの關係は變化してゐる。

世界戰爭の起つた當時は何人も米國の參戰を期待しなかつたから英國も米國の中立を以て滿足してゐた、然し戰爭が長びくにつれて米國の利害關係は次第に英佛側と合致するやうになつて來た。保守的な英國人は米國の參戰の結果、他日戰利品の分前に米國の加入することを怖れてゐた、然るに戰爭の前途が必ずしも樂觀を許さなくなりロシアの力も賴む可からざる頃に至つて米國は遂に獨逸に宣戰して戰爭に參加したので英國民は擧つて米國の參戰を歡迎し、英語國民間の協商の叫は高くなつた。

この好感は平和會議が巴里に開かれるまで變らなかつた。一九一四年より今日まで十年間の英米關係に於て重要な問題は數々あつたけれども概して平和に解決せられた。それは英國の妥協的態度に依つて解決せられたものである。英米兩國間の問題は海軍問題、油田爭奪戰、日英同盟問題、愛蘭自治問題、其他貿易の競爭、軍資金の償還問題等、複雑であつたが近年ますますこの兩國の關係は親善に向つた。

戰爭の當初に於ては英國海軍が敵國及中立國の通商を嚴重に監視した爲めに米國との間に屢々紛議を惹起した。然し獨逸の行動は一層傍若無人であつた爲に米國は永く此戰爭に於て中立の地位に止つてゐることが不可能であつた。ルシタニア號の擊沈以來、多數の米國船が無警告で沈められ、一九一七年二月獨逸は無制限の潜航艇戰を開始した。これは獨逸外交に對する獨逸軍閥の勝利であつて其主唱者はチルピッツ提督である。於是米國の輿論は沸騰して開戰論は國內を壓倒した。

同年二月三日ウィルソンは議會の教書に於て獨逸との交渉の顚末を述べて、國家斷絕を聲明した。ルシタニア號の擊沈以來米國の參戰が到底免ることの出來ない形勢は米國識者の既に覺悟せる處であつたが、ウィルソンは開戰に至る前に隱忍して周到なる思慮を以て極力戰爭の渦中に投ずる事を避けるのに盡力した。

四月二日ウィルソンはその有名なる教書を議會で朗讀した。

この平和の民を驅つて未曾有の悲慘な戰爭に投ずる事は何と、いふ恐しい事であらうか。然れども正義は平和よりも貴い。吾等は吾等の良心の最も愛惜する者の爲めには戰はざるを得ない……吾々の眼前には唯一つの道がある。吾等は剛健の步を步んで國民の神聖たる權利を無視せられ蹂躙せらるる事を忍び得ない。世界はデモクラシーの爲めに保障せらるることを要する。吾等はデモクラシーの爲に戰ふのである。此聖業の爲に吾等はその生命と財産とを捧げ吾等が現在もてる凡ての物を獻げるのである。亞米利加を生んだ主義、亞米利加が愛する幸福と平和との爲に、亞米利加が其の血と力とを費す事は吾等の光榮ある權利である」その日は遂に來た。人々

この教書は合衆國の市民をして血を湧かしめた名文である。然し政治史の上から之を見る時は四月二日の聲明并に其以後の教書や演說は必ずしも文字通りに之を承認する事は困難である。アダムス・ギボンスは皮肉つて曰く、「正義と平和との觀念を高調しデモクラシーの爲めの戰であることを聲明し、小國民を解放し、民族自決權の確立を要求する事は一億二千萬の民衆を率ゐて大戰爭に臨むものの正に提ふべき大題目である。さり

乍ら、此等の原則は千九百十四年の戰爭開始後間もなく歐洲協商側諸國に於て之を聲明し爾來幾度となく之を繰返してゐる。米國が千九百十七年迄戰爭に參加しなかつたのは此等の諸原則が戰爭に參加すべく左程に重用な主義でないと考へたが若しくは千九百十七年の二月迄此原則が戰爭の眞實のイッシューであると氣が付かなかつたであらう」と。

正直に事實を告白すれば米國の參戰は實に歷史の法則に從つて一國の國民は其安全と繁榮とが脅威せられたと悟つた時に戰ふものであつて、それ迄は戰はないといふ原則を要請するものである。

米國は土地多く人口稀に物資に富んでゐた。從つて其貿易の大部分は國内通商であつたから永い間之を保護するための海軍陸軍及び同盟政策を必要としなかつた。そして他の世界に起る事件に就ては全く無關心で過す事が出來たのである。

然し工業の發達は次第に米國を産業資本主義の國に化して來て、殊に一八九三年以來其の利害關係は著しく世界的になつた。一九一四年の頃にはアメリカ人自身の知らない程に外部殊に歐洲との關係が深く且つ密接になつてゐた。一九一七年の獨逸潜航艇戰は米國の安全と繁榮とを脅威し其自尊心と名譽とを蹂躪するものであつた。

一九一七年の一月二十二日にウィルソンは上院に演說して「勝利なき平和」を締結するの必要を力說し之に依り新に歐洲平和の原則を確立する事を主張したのであるが、この演說の後僅に九日にして獨逸は無制限の潜航艇戰を布告した。そこでウヰルソンは新に徹底的勝利の必要を述べて開戰を布告したのである。

米國の參戰は確に聯合側の勝利を決定した大原因であつた。於是歐洲各國は米國の助力に對し滿腔の謝意を表し、米國の威望は世界を壓倒する勢であつた。

然し米國議會は平和條約の批准を拒絕し歐洲の事件から一切手をひくことを決定したから歐洲人の感情は米國に對して惡化したが一九二三年に至つて遂に從來の孤立主義を緩和し、若し歐洲の關係國全部が要求するならば歐洲の經濟復興の爲めに力を添へることを惜まない旨を聲明した。

英米の關係を接近せしめたものは何と云つても英國政府の親米的政策である。この意見の代表的のものとして、**英國自由黨**の有力な機關であるランド・テーブル誌が昨年十二月號に、平和議定書に反對する論を掲げたのを紹介して見よう。同誌の記者は詳細に議定書反對の理由を說明して左の如く云つてゐる。

一、英帝國が平和か戰爭かを決定するには英國の全自治領の意

を一にすることを必要とする、若し協商が反對する場合に英本國のみ賛成することあらばこれは後日に至り許す可らざる不都合を生ずる、何となれば平和議定書は制裁の爲めの戰爭を豫見して居ないからである、

二、英帝國の外交政策は常にワシントン條約の趣旨に副ひ米國との親善を維持し得るものでなければならない、英國は正當な米國の利益と輿論に反する如き行動をとることは出來ない、これには種々の理由がある。

從來各種の戰爭に於て英米兩國が衝突せんとした危險は屢々であつたナポレオン戰爭中に英國が中立國の通商に干渉した場合にその例があるアメリカの南北戰爭の際に於てもトレント號やアラバマ號の事件で同じやうな經驗を得た、世界戰爭の際にも獨逸を封鎖するについて同じく米國との間に危險を感じた、英國の海軍が公海に於ける中立の通商に干渉し殊に米國が調印しない議定書に基きて仲裁の決定を強制せんとする場合には英米兩國の間に紛爭を見る危險がある。

三、英國は華府條約によつて米國と同勢力の海軍を維持し得ることを約束した、同勢力の維持を約束することは兩國が競爭をさけて協調を保つの意味であつて條約の中にも互に隔意なき意見を交換することを規定して居る、これは歴史的に維持せられてゐた海上權力を兩國に分割することを意味するものである。斯の如き境遇に於ては一層外國との條約が華府會議の趣旨に副ふものなりや否やを見ることが必要である。

四、英帝國が平和と戰爭とを決定するには英本國及自治領の凡ての議會に於て一致の決定を得なければならない。

英國の政治家が斯の如き結論に到達したことは決して驚くべきことではない、それは英國の傳統的政策から出たものであつて、今日に於ては英米の利害は對大陸政策に於てよく合致して居るからである。

十、歐洲平和の將來

平和議定書が成立して軍備縮少會議が六月十五日に開かれるには本年五月一日までに常任理事國（日、英、佛、伊）の過半數及び他の十ケ國の批准あることを要するのであるが三月九日から開かれた聯盟理事會に於て、英國は明白に此議定書をこのまゝ採用することを拒み、到底成立の見込ないことが明白になつた。於是、佛白の兩國は平和議定書が不成立に終る場合を見越し新に安全保障を取りつけることを熱心に希望してゐる。之が爲めには差當り英國をしてこの安全を保障せしめることとの外に途はない。これ即フランスが獨逸との間に條約を締結す

望を示してゐる所以である。

他方獨逸は聯盟に加入することにも異存はないが、英佛白等の間に明白に獨逸を目あてとする防禦同盟の出來上ることは此上もない不利益であることを觀て本年二月に一の覺書を英佛伊の諸國に送つて新しい提案を出した。其要旨は

一、現存の平和條約を基本とする現狀の下に於て佛獨英伊の四國政府は米國政府の前に誓つて現狀を維持し、殊にライン河地方に於て平和を維持することを約す

二、領土問題以外の問題は華府の平和議定書に類する協定を爲すことに同意す　此點に就いては右四國以外の國に擴充しても異議なし

獨逸の提議を如何に處分すべきかに就ては英佛兩國の間に意見の交換中であつて、目下明白にその結果を豫想することは出來ない。

概して云へばフランスは獨逸を交へての約束に反對で英佛白の保障條約を希望してゐる、又獨逸を交へるとしてもその同盟國たる波蘭チェックの兩國を除外することが出來ない立場にゐる。英國は獨逸を協調に加入せしめることに贊成し、佛白のみとの協定に難色を示してゐる。殊に獨逸の東方國境に就ては現狀を維持する保障さへも與へることを喜ばない。この問題は將來何等かの解決を下さなければ再びルール問題やライン左岸の守備撤退にも影響することゝなるであらうが、差當り今後の展開を豫斷することは尚早きに失するやうに思はれる。

斯の如くして歐洲は尚惱んでゐる。不安と恐怖の念が今尚ほその空氣を沈滯ならしめてゐるけれども、鬪ひ疲れて平靜と休養とを求め、人類の新しい理想の達成を平和の環境の裡に試みようとする機運は之を否定することが出來ない。軍備縮少も、戰爭防止も痴人一抹のはかない夢なりと云ほど云へ、人類向上の一路は歷史が指し示す不動の針路であつて、之を信ぜざるものは民族の使命を了解しない者であり、世界の進運に取り殘された者である。

三　革命ロシアの國家生活

ロシヤ人

露西亞は吾國と一衣帶水を隔てた大國であつて、我國民にとり重要な利害關係をもつ國である許りでなく、世界の外交上及

經濟上の見地から、見ても決して輕視し得ない重大な要素である。露西亞を除外して、亞西亞及歐羅巴の安定を圖ることが不可能である耳ならず露國の向背が國際政局の上に大影響を及ぼすことは言を俟たない處である。

露西亞といふ名は今日に於ては地理的名稱であつて大正十二年末のソヴェート憲法の改正に依り現在は社會主義ソヴェート共和國聯邦と稱してゐる。この聯邦國家は左の六個の共和國より成立つてゐる。

ロシア社會主義ソヴェート共和國
ウクライナ社會主義ソヴェート共和國
白ロシア社會主義ソヴェート共和國
アルメニア社會主義ソヴェート共和國
ジョルヂヤ社會主義ソヴェート共和國
セーゼルバイジヤン社會主義ソヴェート共和國。

此等の共和國は大體に於て人種を基本として之を區別したもので、それ以外に特に獨立の單位を爲すべき深い理由を認めることは出來ない。ウクライナは小ロシア人を基本とし、ロシア共和國はモスコーを中心とする大ロシア人を基本とするものであつて、この二つの共和國がソヴェート聯邦の根本勢力である。

ソヴェート露西亞の面積は約二千二百萬平方粁で地球面積の七分の一を占め、その人口は約一億三千四百萬である。併帝國の時代には一億八千萬を數へたが、革命後フインランド、ポーランド、バルチック諸洲が獨立しベッサラビアをルーマニアに奪はれ、爲に約五千萬の人口を減少した。露西亞の根本をなす民族はスラヴ人種であるが、併し亞細亞人約二千五百萬を含んでゐる。露國人は單に亞細亞人を征服したのみならず、其血液の中に多量の亞細亞人の血を混へてゐる。諺にも「露西亞人を搔けば韃靼人が出る」と云ふ位である。其他猶太人の五百萬を初めとしてコーカサスのチヨオルジヤ人アルメニヤ人等多數の異人種を含んで居る。

露西亞人の宗教は希臘正教である。紀元第十世紀時代にキエフに君臨して居つたルーリツク王朝のウラジーミルと稱する國王が始めて基督教を露西亞に輸入した。當時露西亞人は偶像教を信仰して居つたが、信仰に關する危機を生じ、如何なる信仰を輸入すべきかに就て議論を生じたのでウラジーミルは諸國に使を遣して宗教の視察を命じた。偶々コンスタンチノープルから歸つて來た使が希臘正教の儀式の壯嚴であるとの報告をした爲に希臘正教を輸入することに決定せられたといふことである。ウラジーミルは希臘教の僧侶と共にドニエプル河岸に立つて經文を誦しつゝキエフの市民を河の中に追込み基督教の洗禮

を受けさせた。希臘正教が露西亞に輸入せられたことは他日露西亞の政治に大なる影響を與へることになつた。羅馬教會に屬してゐる國々では教會を以て國家よりも優越なりとの信念を有し、國王の權力は羅馬法王の威力の下にあるといふ思想であるが希臘正教の教義に依れば、皇帝は地上に於ける神樣の表現者であつてツアールと神は一體であり、生きた法律であるといふのである。此思想は最近に至るまで露西亞の政治を支配した重なる思想であつて、即「一體不可分の國家、官吏と軍隊と牧師に依つて支持せらるゝ王國」といふ觀念は希臘正教がロシアに輸入した思想である。然し專制政治の始まつたのは韃靼人の露西亞征服以後のことであつた。露西亞は一二四三年に韃靼人の侵入を受けて一五五七年までその政權の下に征服して居つたので、此思想が希臘正教の理論と合體して近世の神權政治を産み出したものである。歷史の教ふる所に依ればスラヴ民族は元々民衆的な政治習慣を有つて居つたもので村の首長を選ぶには村民の會合で之を行ひ、又村の代表者が集まつて國王を選ぶ制度を有つて居つたのであるが韃靼の侵入及び希臘正教の影響に依つて次第に近世の專制政治の形に變化しピーター大帝の即位以降には最も鞏固な王權が出來上つて了つた。

露西亞の國民性を簡單に言表すことは極めて困難なる仕事であるが、佛蘭西のグランプレーと言ふ人は「旅順港包圍と題する」書物の中に日露兩國の軍隊の比較論を書いて居る、此批評は比較的正鵠を得たものであるから、露西亞の軍隊に對する批評を茲に引證する。「露西亞人は大きくて、ドツシリト頑丈な人間であるが、然し利發ではない。空想家で時間の値を知らない宿命論的の人間である、恰も露西亞のステツプの樣に沈靜で而も子供らしい歌音に打たれる。健啖で、大酒飲で、能働的と言ふよりは受働的である。上流社會はリフアインされて居るが懷疑的である。下層社會即ち多數農民は迷信家で無學で貧乏で公共心に乏しい、さうして土地の分配ばかりを考へて居る。教育を受けた人間の一部と勞働者とは革命派である。上流社會と下層社會との間には超ゆべからざる間隔があるが、中間にあつて國の基礎たるべきブルジョア階級が存在してゐない。」斯の如く露西亞人の大多數が無教育であり、政治的訓練を有つて居らず、國の中には社會的に不平等な階級が互に對立して居つた。即ち上流社會の行つた政治が腐敗して弊害百出したが上下の意思が疎通してゐなかつた。これが最近の露西亞革命を惹起した最も大きな原因である。

ロシアの革命

露西亞革命の原因は遠因と近因とに分けることが出來るが遠因の第一は時勢に適しない專制政治であつて、皇室を圍繞する保守派の頑迷が之を扶けてゐた。

第十九世紀の初に歐洲に起つた自由主義の政治運動は露西亞にも波及し一八二五年に當時貴族の子弟にして佛蘭西革命の思想の影響を受けた者が徒黨を組んで政治運動を起したが、これは中途に發覺して處刑せられた。其後廿世紀に入つては日露戰爭の當時國内の不安其の極に達し、明治三十八年一月にはペテルスブルグで大同盟罷工が行はれ軍隊の力に依つて各地の暴動を鎮壓したけれども、立憲政體を採用しなければ其の政治運動を鎮靜することと不可能な狀況に陷つたから二月十八日に露西亞憲法が發布せられた。

然し憲法の制定せられたに拘らず、政治の實際は其の以前と殆んど變化なく、政治の實權は從來の官僚派が之を握つて居た。世界戰爭以後に於ても國民が舉つて國難に當つて居るに拘らず、政治の傾向は依然として保守主義であり、議會を無視し、民論を抑壓し立憲政治は有名無實の狀であつた。

露國の神權政治を運用して居たものは貴族と大地主階級であつた、之に附隨する數十萬の官吏は行政官でも裁判官でも腐敗してゐたから人民の之に對する怨嗟は相當に激しいものであつた。如此き原因に依つて國民の多數が權力階級に不平をもつて居た際に、戰爭の狀況は日に不利に赴いた。戰に勝つ見込が乏しくなつた許りでなく、物資は缺乏し、日常の物價が高くなり、中産以下の者が生活が次第に困難になつた。殊に都會地の食糧は甚しく缺乏して其日其日のパンさへも充分に買入れることが出來なかつた。

然るに他方商工業に從事する資本家は戰爭の爲に莫大の利益をあげ奢侈の風は盛んになつた。貴族大地主は種々の緣故によつて戰爭の危險をさけてゐて、命を捨てる者は多く下級の人民である。政府の能率があがらない爲めに戰爭は勝利の見込なく、國内の糧食の補充さへも困難を感じるようになつて、多數民衆の不平が爆發して革命の動機となつた。

第一革命政府の中心は議會であつて、舊政府の覆ると同時にリボフ公爵を首腦とする執行委員會が議會の自由派と穩和社會黨との手に依つて組織せられた、併し革命政府は一面には獨逸墺地利に對して戰爭繼續する大事業を行つて居り、他面には革命を伴ふ政治上經濟上の各種の問題を解決しなければならない大事業を控へて居た。固より革命の爲に露西亞帝國は革命政府に政權を委ねたのであるが、其政治外交の内容實質に於ては急に新なる政策を執ることが出來なかつた。即革命に依り一時總

ての機關が破壊せられて秩序維持が困難となり革命政府の威信漸次に失墜し是が爲に自由派に屬するリボフ公爵及び外相ミリユーコフは同年七月に政府を退いて政府は社會革命黨の權力内に落ちケレンスキーが政府を組織した。然し此内閣も失敗續出した爲めにケレンスキー斃れて十一月七日に政權は勞農政府に移つた。

勞農政府が政權を取るに至つたことは一般人民の無智と、階級間の反目に原因するものである。國民が無智にして政治的訓練に欠けてゐたが故にツアールの專制制度を撤廢しても、又直ちに共産黨の專制政治を受ける外なかつたのである。多數の者は第一革命に多大の希望をもつてたに拘らず一般の生活は依然として改まらない。又土地の分配も實施せられる模樣がないとの不平を抱いた。この不平に乘じてボリシエビキは「即時平和」と「土地分配」と「資本主義の撲滅」を旗印にして無智な民衆を煽動したから、政治教育のないロシアの勞働者は直ちに之に附和雷同した。斯くしてロシアの政權は勞農政府の手に歸し、ケレンスキーは逃亡して了つた。これが今日のソヴエート政府の起原である。

社會共産より新經濟政策へ

勞農政府は政權を取ると直に其標榜する平和促進の爲に交戰國に對して無併合無賠償の基礎の上に休戰を提議し、次で平和を求め翌大正七年三月に入つてブレスト・リトウスクの平和條約に調印してロシアは聯合國から脱退することになつた。勞農政府の第二の政策は農耕地の分配と勞働者委員をして工場の管理を行はしめることであつた。レーニン及び其の一黨の主張は革命に依つて資本主義制度を破壊する事であつた。隨て一切の土地、工業、鑛山、森林、鐵道、銀行等を沒收して之を國有と致した。又國内商業を禁じ外國貿易は總て之を國家の獨占事業とした。

露國の革命は佛蘭西の革命と同じやうに專制政治を排し、教會の力を殺ぎ僧侶を追ひ、貴族を迫害して、その財産を沒收したのであるが、一つの點に於て佛蘭西革命に比し大きな差異があつた。それは露西亞の革命には「無産階級の獨裁」及び「社會共産組織」と云ふ思想を作つて居つたことである。即ち露國の革命は政治的革命であつて同時に經濟組織を社會化せんとする革命である。此觀念を實行する爲にソヴエート政府は階級的政府の形を以て生れたのである。

レーニンの言に從へば社會主義的革命の完成には三つの時代を經過するものである、第一期は主義の宣傳時代、第二期は政

權の獲得及び反革命の抑壓時代、第三期は社會主義的經濟組織の實現時代である。そうして現在のソヴエート露國は未だ社會主義國ではなく總て其理想の實現を圖る爲に暫く無産階級の執權を以て滿足して居る時代であると云つて居る。然るに露西亞革命後に於ける經濟組織の破壞は年と共に甚だしく、工場、鑛山、鐵道の能力が減退したのは勿論、露西亞の主要産業たる農業に於ても其生産が著しく減退して千九百十九年、千九百二十年に亘る悲慘なる饑饉を惹起するに至つた。

勞農政府の政策は農工業等總ての生産及びその分配を國家の手に依つて行はんとする政策であつて、所謂單一經濟政策と稱するものである。其結果農民は國有の土地を耕し其收穫の中自家の消費に充てる部分の外は總て之を國家に納め、國家は農民に對して國有の工場より供給する製造品を分配補給する制度であつた、工場の勞働者は賃銀の一部として食料、被服、住居等の一切の必要品を國家より與へられる。農民は其收穫物を國家に納める代りに農具被服其他の日用品を國家より受取る仕組であつた。之はレーニンの言つた如く各自が其必要に應じて物資の供給を受け、其能力に應じて他人に物を供給する社會となるべき筈であつた。換言すれば都市は田舍を養ひ田舍は都市を養ふ關係に立つことになつたのである。然るに當時輸送機關は破壞せられ、地方の秩序は紊れて都會に糧食を送ることも不充分であつた。大正九年にモスコー市の第一級勞働者が貰つた食料品は最高が八百カロリー（所要の食料は三千カロリーである）であつて、それ以下は殺人的少量であつた。

斯の如き共産社會制度の下に於ては一切の租稅も貨幣も存在しない、農民は一定の土地を耕し其土地から食料を得るのであるが、働く者と働かざる者とに論なく自家用の食料以外は總て政府に納付するのであるから農民の多數は樂んで働かずして自己の食料のみを得る事を考へ初めた。農民は一應土地所有者の如き地位に在つたけれども商業の禁止の爲に農産物を賣捌く事が出來ない、又被服農具等の必要品を政府から受取ることを期待したが、物資の缺乏と交通機關の破壞との爲に之を得る事が出來ない、隨て收穫を密賣して物資と交換する者が次第に增加した。又政府が穀類を徵發するに當つて到る處農民の反抗に遭ひ、南露西亞地方に於ては殊に農民と赤衞軍との戰鬪が絕間ない程になつた。大正十年の初クロンスタットに起つた水兵の叛亂は此共産主義政策の行詰りであつてソヴエート政府は此露西亞の經濟的破綻を救ひ農民の反抗を緩和する爲に同年三月の共産黨大會に於て初めて所謂新經濟政策なるものを採用した。即ち社會共産組織の實行を抛棄して暫く勞農政權の擁護に滿足せ

ざるを得ない事になつたのである。

新經濟政策

新經濟政策の内容は

一、穀物徵收令を撤廢し農民をして其收穫を自由に處分する事を許し、

二、商業の自由を認め、

三、小工業の自營を許し又官營工場の製品を市場に賣出し、

四、食料品の無料配給を廢止し、

五、租稅及び手數料の制度を復舊し、

六、中央銀行及び特殊銀行の設立を許したことである。

故に新經濟政策の重要なる眼目は大工業の國有、外國貿易の國有及び土地の國有の三點であつて、社會共產制と言ふよりも寧ろ國家資本主義制度に近い制度である。又土地の國有に就ては唯理論を表明するに止り、實際勞農政府は土地の分配を公平に行つた譯でもなく農民は從來もつて居た土地を事實上私有して居る。レーニンは彼の實際的なる觀察眼を以て若し農民の歡心を得なければ露西亞共產黨は權力を維持し得ないとを悟つたために、暫く共產主義を棄てて新經濟政策に立戾つたもので、これは明かに資本主義への降伏である。

露西亞の政治組織

露西亞は其名稱の示す如く社會主義ソヴエート共和國聯邦であつて、其根本の制度はソヴエート組織である。露西亞の憲法第一條には『露西亞は勞働、兵卒及び農民代表者のソヴエート共和國である』と書いてある。故に政治に參與する者は全く勞働階級に限るのであつてブルジョア階級を徹底的に驅逐することを方針として居る。ソヴエートと云ふ言葉は評議若くは會議の意味を有つて居るものであるが、今日に於ては此意味が轉じて露國の政治組織或は露國其ものの名稱に用ひられるやうになつた。ソヴエート制度は村、區、郡、縣、市等の地方機關に存在する合議制度であつて、即ち各村には村ソヴエートがあり日本の村會の如くソヴエート委員は村會議員に相當する者である。村ソヴエートは市のソヴエートと共に露國ソヴエート政治の單位をなして居る。村ソヴエート委員は五十名以下の合議體で此の委員の中から五名の執行委員を選び之を常設の機關として行政に當らせてゐる。村ソヴエートの上に在るものを區ソヴエートと稱し、區ソウエートの上に郡ソヴエートがあり其上に縣ソヴエートがあつて直接共和國の中央機關に附屬しこれに對して各々執行委員會を選任する。ソヴエート制度の特徵とする

所は近世の憲法政治が立法、行政及び司法の三權分立にあるに反し、立法、司法、行政の三權が唯一のソヴエートと稱する機關に集中せられて居ることである。此意味に於てソヴエート政治は近世の立憲制度と全く異つた政治形式を有つてゐるのであつて、司法權及び立法權の發動は全く行政部主腦者の容喙干渉を受ける形になつて居る。

ソヴエートの中央機關は『聯邦ソヴエート大會』と稱し、縣及び市より選出された代表者に依つて組織されて居る。ソヴエート大會は露西亞に於ける主權の最高機關であつて、其議長が佛米の大統領に相當する。此大會は毎年一回開かれることに定めてあるが　平常主權を實際に行使する爲に全露中央執行委員會と稱するものを選びソヴエート大會の委員中より最高三百名を選出する。中央執行委員會は露西亞に於ける最高の立法機關であり又行政機關であつて更に政府を監督する大權を有つて居る。中央執行委員會の會員三百名の中から更に最高幹部を選擧し之に最高の權限を與へて『中央執行委員會幹部會』と稱して居る。此幹部の數は現在十七名であるが、其外に中央執行委員會は『人民委員會』なるものを選擧し之をして政府を組織せしめて居る。人民委員會議長と稱するものは日本に於ける總理大臣に相當するものであり、外交委員若くは國防委員と稱するものは日本の外務大臣若くは陸海軍大臣に相當するものである。

ソヴエート委員は總て勞働者、兵卒及び農民に依つて選出される代表者である。露西亞の選擧權被選擧權は宗教、人種又は男女に差別なく十八歳に達した者は一樣に之を有つて居る。但し選擧權を有する者は生産業及び公共的事業に依つて生計を立てる者、工業農業に從事する勞働者又は軍人に限るのであつて、商人資本家、宗教家等は政治に參加する權利を認められて居ない。

斯の如く露西亞の國家機關は總て人民の選擧に依つて之を行ふものであるが、從來中央の重要たる職務に從事した者は例外なく露西亞共産黨幹部の指名に依つて其任に當つたものである。共産黨幹部即ちレーニン、トロツキー、カーメネフ、其他の幹部が選擧以前に總理、各大臣若くは大統領の地位につくべき者の人名を作製し、其推薦する人を選擧せしめたのであつて、今日まで純粹公平な選擧が行はれたことは殆ど例がないと云ふことである。地方殊に村のソヴエート委員を選擧する際にも同じく地方の共産黨委員が指名するので選擧權の公平なる行使は之を見ることが出來なかつた狀況である。是即ちソヴエート政治が露西亞の共産黨の專制政治であると云はれて主なる原因であつた。

ロシア教育及宗教

革命以前に於けるロシアの教育は頗る不完全であつて、第一等國の内で最下位に在つた。日本の農村に行つて最大の建物は小學校である、ロシアに於ては大地主の家に非ずんばウオーツカと稱する火酒の製造場であつた。

勞農政府は當初極めて教育事業に熱心であつた。文部大臣たるルナチヤルスキーは露國に於ても稀に見る立派な政治家であつて、現在ロシアの都市に博物館、美術館、又は記念物が破壊されずに殘つてゐるのは此人に負ふ處が多い。

ロシアの國民教育は統一勞働小學校と稱する初等學校があつて滿九歳から七ケ年の義務教育を授ける。此學校を了れば高等專門學校に入學することが出來る。勞農政府は學校の經費を凡て中央政府の負擔に移して教育を强制した爲め、一時は學校數も兒童數も增加して帝政時代に比し學校は三割、兒童は七割といふ大增加を來したのであるが、其後、財政窮乏の結果、學校の經營を地方費に移した爲め學校數も兒童數も激減して終つた。

露國の學齡兒童八歳より十一歳までの生徒は人口の總數に比べて一割二分、その中で就學してゐる兒童は八分七厘である。

專門職業教育に就ては多數の高等學校が閉鎖された。現在の學校は大學に相當する最高の專門學校九一、實業學校六〇、大學豫科（主として勞働者の爲めにするもの）六〇である。

大正十年より十一年にかけて多數の教育機關が縮少せられた。殊に音樂學校、美術學校を廢止したのは唯物論者の特色を示してゐる。

實業補習學校は五百以上に上り、專門學校を卒業する技師の數は大正十一年に於て千〇四十五名であつた。

共產黨學校は露國特有の制度であつて、共產黨の援助により初等小學校百五十、上級小學校五十、洲立大學三、其外モスコー及ペトログラードに四個の大學を建て共產黨員を教育してゐる。其人員は約三萬である。其他モスコーには新聞記者大學も一校存在してゐるといふことである。

要するにソヴエート政府の眼目は、將來のロシアの智識階級は民衆と合體したものでなければならないといふのであつて、從來のロシアの智識階級は民衆から孤立してゐたといつて攻擊して居る

帝政時代のロシアは祭政一致であつて、皇帝は國の元首であると同時に地上に於ける神の表現者であり、宗教上の首長であつた。國民は國教としてギリシヤ正教を遵奉すべきものとせら

れ、學校教育の中にも其教義を授けたのであるが、ソヴエートの執權以來は政教分離の方針をとり、信教の自由を許すと共に寺院及宗教的組合の財産を凡て沒收して了つた。この政策は寺院とソヴエート政府との間に激しい爭を生じ、大司教チホン僧正も一時死刑に處せられむとした事もあつた。其後共産黨に左袒する僧侶は別に希臘教を脱して所謂「生ける教會」を組織し、次第に勢力を占めるやうになつた。

ソヴエート政府は公々然と、國民の生活がキリストを必要としない社會を建設せんとすることが吾々の目的であると云ひ、神を祠るよりも馬を飼ふことが必要であると云つてゐる。

モスコーの赤廣場へ通ずる門にはナポレオン戰爭以來の有名なキリストの像が掲げてある。其門を通行する者は皆脱帽して、胸で十字架を切るのが慣習であつた。ソヴエート執權以來は此の門に『宗教は國民の爲めに阿片の如し』と貼札をした。それにも拘らず、通行の男女は今日でも一齊に十字架を切つてゐるといふ話は面白い現象であつて、これは政府の政策や一片の布令のみで人民の信仰を奪ふことの困難な事實を示すものである。

露西亞の財政

戰爭前即ち大正二年に於ける露西亞の豫算は歳出入共三十三億留であつたが革命以來三四ケ年間露西亞の貨幣は甚だしく下落し財政の基礎は全く崩れて殆ど豫算を有つて居なかつた。其後次第に國庫豫算の制度を定め昨年の歳出は十七億留に達し、本年の豫算は一層增加して二十二億留に達して居る。然し帝政時代に所有して居た十五億餘留の金貨は革命以來殆ど之を使ひ果し、殘る處は僅に一億にも足りない狀況であるから最近には汲々として金の吸收に努力してゐる。新經濟政策を採用した後大正十二年一月に國立銀行よりチエルオンツと稱する新紙幣（日本の約十圓に相當す）を發行し熱心に幣制改革を行つた結果、昨年三月以降紙幣の相場安定し初めた。於是新に一留、三留、五留の紙幣を發行し、舊留紙幣を回收したから紙幣の信用が增加すると共に次第に通貨も膨脹して、昨年十月には六億二千萬留となり、本年一月には補助貨幣を合せて總計十億留の紙幣及び貨幣が通用して居る。併し之を戰前の通貨總額二十二億留に比べると僅に四割五分に過ぎない狀況である。

露西亞の工業並に貿易

新經濟政策採用以前に於ては工業は凡て政府の國營とし、强制勞働の制度を採用したから生産業は著しく衰へて戰爭前の一

割八分まで減少した。大正十年に新經濟政策を採用し、小工業の民營を許して以來次第に能率を增し最近には約五割まで恢復して居ると傳へられて居る。其中最も恢復の迅速であつたものは石油事業で本年内には略々戰爭前の産額を超える豫定である。織物業も略々五割位の程度に恢復して居るが、金屬工業と石炭の生産は巨額の資本を要する爲め恢復も遲れて僅に戰前の二割内外に達して居るに過ぎない。

露國の戰前の貿易額は二十六億留であつたが、内亂と列國の經濟封鎖に禍されて大正十年には歐洲諸國との貿易高が輸入二億留輸出僅に一千萬留に過ぎなかつた。大正十一年に入り穀物石油木材の輸出を始めると共に輸出總額一億三千三百萬留となり初めて輸出超過三千五百萬留を出したが、この輸出超過は貿易國有の制度に依る計畫的貿易の結果であつて出來るだけ輸入制限すると共に輸出に力を注いだ爲めである。昨年九月末日まで一ケ年間の輸入は二億〇八百萬留、輸出三億四千萬留であつて、合計五億四千八百萬留に達した。輸出品の主なるものは穀物（四千五百萬留）石油（四千三百萬留）木材（三千七百萬留）バター（二千萬留）毛皮（一千七百萬留）麻（一千萬留）。主たる輸入品は綿花（五千萬留）金屬製品（二千三百萬留）機械類（千五百萬留）等である。輸出貿易は英國が第一位に居り、獨逸伊太利佛蘭西の順位を示し、輸入は英、獨、米、瑞典の順位を占めてゐる。

日露國交恢復の曉に於ては兩國の貿易は漸次增進するものと期待せられてゐるけれども日露間の貿易も、ロシアの經濟復興に伴ふものであつて、急激な進歩を望むことは到底不可能である。殊に露國の貿易は國營制度であつて、輸出入とも嚴重なる特許制度の管理を受けなければならないのであるから今日餘り多くを期待することは他日の失望を招く虞があると思はれる。

露西亞の農村問題

露西亞に於ては千八百六十一年アレキサンダー二世が農奴解放を行つた時まで農民の多數は土地に附屬した隷農であつて、農民は、土地の所有權と共に移動して甲の地主から乙の地主へ賣はれて行く狀況であつた。アレキサンダー二世が初めて奴隷を解放し新に大地主の土地を政府に買收して之を農民の共有地として讓渡した。併し革命當時迄露西亞の農耕地の六割は大地主、寺院及皇室の所領であつて露西亞人口の八割を占める農民は僅に全國農耕地の四割を所有して居たに過ぎなかつた、それが爲に二十世紀の初め以來土地を求める農民の運動は全國的に行はれ、農民一揆の起つたことは屢々であつた。

勞農政府は一九一七年十一月に政權をとると直ぐに土地命令なるものを發布し、大地主、皇族、閣員及教會の尨大な所有地を地方土地委員會に引渡すことを命じ、土地委員會は之を農民の間に分配する任務を委託せられた。

農業土地の分配は國内の秩序を維持する爲めにも焦眉の急であつた。中央ロシアの農民は土地問題處分の遲延を憤り、或地方では地主の邸宅を燒き、地主を追放した許りでなく、家畜の掠奪、殺戮等によつて農業資源の破壞せらるゝ危險は刻々に增加した。故に土地委員會が之等の土地の管理を托されると同時に農民を沈靜せしめる效果は著しく表はれたけれども問題の解決は容易のことではなかつた。農民の多數は無智であつて、行政的能力を缺いてゐたから彼等は公領地又は大地主の土地を分割して其の分前を自己の所有地に加へ家畜、農具を分配することにのみ焦慮した。從つて其の分配は地方的であり不公平であつた許りでなく、農業の生産を減退せしめ、土地の少ない地方の農民をして依然窮境に立たしめることゝなつた。

一九一八年一月に開かれた全露ソヴエートの第三回大會に於て土地法が可決せられた。此の土地法の第一條第一項は次の如く記されてゐる。

一、共和國の限界内に在る土地、鑛山、河川、森林及自然力に對する一切の私有財產權は永久に之を廢止する。

二、土地は所有者に對して賠償を與ふることなく、共同利用の爲めに使用さるべく、同國民の所有となる。

露國新憲法は土地が私有の目的たり得ざることを記してゐて、農民に對しては農業に從事することを條件として世襲的に利用せしめることを認め、市民、企業家並に團體に對しては、一定期間又は土地利用の目的たる利益を收得すべき期間のみ一時之を利用せしめることを許してゐる。農民に配分した耕地は約二千萬デシヤーチンであつたから勿論農民の耕地を增加し一九一九年には農民の九割三歩迄耕地を有するやうになつた。農民の大多數が自作農に均しい狀態に置かるゝと共に農民は土地共有制度及一定年限の間に屢々共有地を配分する制度に反對するやうになつた。從來土地配分を希望した農民運動の間に其の境遇により二個の傾向を生じて居た。所謂貧農と稱する階級(土地を有せず又は極めて僅少の土地を有する者)は國有地又は大地主に屬する土地のみならず裕福な農民の土地を分配することを要求し、全般の耕地を新に公平に農民に配分することを主張した。反之裕福な耕地を有する農民は國有地及大地主の土地を配分して自分も其の分配に與らないことを希望したが、農民階級の耕地を平均して分配することに反對した。從つて貧農は土地

、共有制度の賛成者であり、中農は土地私有制度に左袒してゐた。

此二つの傾向は土地配分が一段終了して以來益々激しくなつた。中農は新規分配の請求に反對し、農業革命運動に反對するやうになつて、ボリシエビキ政府も亦政策の變更を餘儀なくせられた。この政策の轉換は又此當時各般の狀況の變化によつて影響せられたことも勿論である。玆に各般の狀況と云ふのは、（イ）各種の團體に依る耕地經營の失敗、（ロ）農民經濟が殆ど原始的生産の形式に歸つたこと（ハ）經濟組織の混亂により都市が農村より孤立したこと（ニ）農村に於ける經濟的水平運動である。

農村に於ては依然フーラツクと稱する中農とビエドノタと稱する貧農とに分れてゐたがソヴエートは『貧農委員會』と稱するものを創設し所謂『フーラツク』が無秩序に大所有地を自分等の手に分割し國有地を掠奪することを防ぐと同時に農耕地の分割を管理し農業を振興し新なる農民自治體を組織せしめる爲めであつた。然しこの制度も餘り成功しなかつた。それは農民の耕地が革命後も著しく增加しなかつたのに見て明瞭である。歐露三十二縣内の統計は革命に依て農民が一割九分の耕地を增加したのに過ないことを示してゐる。

露西亞の農村に於ては既に貧富の懸隔が非常に甚だしくなつて來て居る。又大地主の土地を共有地に引直した結果は農業の收獲が著しく減少して來た。露國に於て戰前多數の穀物を輸出したのは殆ど全部大地主の土地より生ずる收穫であつたが、此土地が小農の共有に歸して以來收穫の減少したことは爭ふことが出來ない。戰前の小麥收穫高は一年平均三十八億ブードを算し豐作には五十億に達したのであるが、最近には一年二十四五億ブードを生産して居る狀況である。

今日のロシアには既に土地を離れた農民が出來てきた。ロシア農村の民衆主義の中心となるべき農民が減少して村には富裕な農民が幅を利かす。この狀況は十一月十四日のカリーニン（ソヴエートの大統領）の演說に依つても窺ふことが出來る。ソヴエートに於ける農民の政治熱が次第に勃興して、各地に於て政治運動に干係する者が增加した。殊に昔の大地主に比すべき階級の人々は腕一本で成り上つたエラ者である。從つてどんな人からも舊帝政の支持者として非難せられる虞はない。このクーラツクを抑へつけるためにソヴエート政府は多大の苦心をして來たのであるが、ソヴエートの頭梁はこれを相手に戰ふことを思切つて、近來はむしろ之に迎合してゐる形である。シノヴイエフは吾々には賢明な獨裁政治が必要である、この獨裁

政治は多數農民が支持するものでなくてはならないと云つたのは明かにこの變化を示すものである

　多數の農民が現在の政治形式に滿足してゐない事も事實であつて昨年十一月の地方ソヴエートの選擧の結果代表委員八千六百九十四名の中に僅に千百〇九名の共產黨員（總數の一二、八パーセント）が選ばれたに過ぎない。從つて農民の不平を滿足する爲めには改めて土地の分配を公平にし、工業を起して物價政策を徹底的に行はなければならない。そうでない限りソヴエートに對する農村の離反は止むを得ざる傾向であると思はれる

ロシアの將來

　ロシアのソヴエートは大正十年の春以來その主張である社會共產制度をすてて、新經濟政策を取つた。レーニンは之を國家資本主義と云つて個人主義的資本制度と區別して居るが、ビスマルク等の早くから注目した國家社會主義の一層完成したものである。ロシアの現制度の特色は工業の國有、外國貿易の國有、土地の國有、交通通信機關の國有と云ふことであるが、其中で土地の國有といふのは名のみで實のない制度である。ソヴエート政府が工業、貿易等を國有にして私有を禁じたは大資本家を作らない爲であつて、大資本家を生ずる時は國內に階級的反感を生じ、延いて平和を紊す虞があると主張して居る。

　然し今日のロシアには既にブルジョア階級が發生して居るが新經濟政策を採つた時は即ちブルジョア狀態を承認したものであつてこれが當然の結果である。故に大統領に相當するカリーニンも總理大臣格のリコフも現在ロシアの田舍に於ては階級の間隔が益々甚しくなつて行くこと、富裕な農民中產農民及土地なき農民の三階級が革命以前と同じく現れて來たことを認めて居る。

　最近ロシアの農村は大體左の如き形勢の下に動いて居る。

（イ）農村には中產の農民富裕な農民が益々政治に興味を感じて來てゐる、

（ロ）貧農は益々貧窮に陷り經濟的にも政治的にも富裕な農民に制せられて居る、

（ハ）ソヴエートのお目付役たる地方の共產黨員が農村に於て次第に勢力を失つて來た、

　ソヴエート制度は勞働者と農民の階級が政治する制度であると稱してゐるが事實に於てはロシア共產黨を中心とする政治であつて僅に七十萬の黨員がソヴエート政府の中心となり之を扶けてゐるものは百五十萬內外の勞働者――殊に革命勞働者であつて、此少數の人々が一億數千萬の農民を支配してゐる。

前述の如くロシア人口の八割以上は農民であり、ロシアの經濟の基本は農業である。從つて農村を豐にし、農民の文化を高め、農民の政治教育を盛んにすることが、新しきロシアを作り出す唯一の方法である。今日の如く、ソヴエート政府が獨裁政治を行つて言論の自由も集會結社の自由も認めてゐない間はロシア人は政治的訓練を受ける餘地はない。然し最近には農民も次第に覺醒し、政治熱も高くなつたのみならず、本年の初以來ソヴエート政府も、農民の希望を滿足せしめ、之と妥協する方針に出た形跡が見えるから今日のソヴエート政府は、形が變らないまでも其內容實質は次第に變化して、實際農民多數の意見が會議の上に現れ、所謂多數政治が行はれる傾向を生じて來るものと思はれる。唯從來民衆政治に必要な訓練をもたない人民であるから完全な自治制度を確立する以前に尚幾多の曲折を經ることであらう。

元來ロシア共產黨及び國際共產黨は、世界の平和は資本主義を倒し、凡ての階級的差別を亡ぼすことに依つてのみ得られるものであると主張した。從つて世界に革命を起し凡ての國に社會共產黨制度を立てソヴエート政治を布くことをその使命なりと考へて居つたのである。然し、今日迄の經驗に依れば、世界に革命を起すことは悉く失敗に歸した許りでなく、從來の方針を固守して世界の國々と爭つてゐてはロシアが國として生活して行くことが困難であることが明白になつた。殊に大正十年に新經濟政策を採用して以來は資本主義國と稱する日英佛米に國交の恢復を求め、此等の國と通商貿易を開き、有無相通じて生活することを希望した。これはソヴエート外交の最も著しい變化であつて、ロシアは生存の必要上當分この方針を變へることが出來ないであらう。これに依つて國の基礎たる經濟力を養ひ、民力を休養しなければロシアの人民は永久にその不幸な地位を脫却することが出來ないことを悟つたのである。如此くしてソヴエート露國は次第に歐洲の諸國と同じ政治制度を有する國となる傾向にあるものと判斷せられるのであるが、唯政治的訓練の不充分なことは民衆的政治を行ふ上に於て一の大なる弱點であるやうに思はれる。

議會の二〇七高地から

石川半山

第五十回帝國議會は、僕等の豫期したるが如く、紛糾の議會で有つた、從て多忙の議會で有つた、各派健鬪の議會で有つた、衆議院に於て、政府黨と反對黨の戰ひの盛なりしのみならず、貴族院に對して、これ迄に例の乏しい程、猛烈なる戰鬪を試みた、

例年議會の爭ひは、一月下旬から始まるのが、この議會の戰ひは、舊臘二十八日から始まり、三月二十五日に會期が盡きると、三回も會期を延長して、戰鬪を續けた。

前半は濱口、後半は若槻

かくて猛烈なる戰鬪の結果、大正十四年度總豫算案の外に、重要なる幾多の議案を議了した、特に多年の宿題たりし普選案を成立せしめたのは、一大成功で有つた、加藤首相は三月二十一日、中央亭の憲政會總會に於て、「此の議會の前半は、濱口藏相の議會であつたが、後半は若槻内相の議會で有つた」と言つた、單に政府の方から考へたならば、そんな氣もするで有らう、行政財政整理を伴ふ豫算案の成立に關して、濱口君の働らきは、なか／＼勇ましい者で有つたが、普選案に對する若槻君の健鬪も、世の注意を惹く者で有つた、然かしながら濱口君と若槻君ばかりが、この議會の俳優ではなかつた。彼等は重なる役者では有つたが、外にも多くの有力なる役者が有つた、中には黑幕の中で、陰謀ばかり畫策したのも有つた、凡そ一個の演劇が、大向ふの喝采を博收して、大當りを取るには、單に舞台の上で躍る役者ばかりで出來る者ではない、大道具小道具を取り扱ふ道具方から、チョボの三味線から、カラリと拍子木を打つ男でも、エライ働きをする者だ、幕を引く役でも、なか／＼六ケしい、今回の第五十回議會の大狂言も、先づ首尾克く、これ迄に運びが附いたのは、それぞれの方面に相當の人物が居てそれぞれに能率を發揮した結果で有る。憲政會總務安達謙藏君が一枚缺けても、此の芝居は打てなかつた。政友會の總務岡崎邦輔君が、

後に物議を生ずる程の專斷果決を行はなくては、此の結果は見られなかつた、貴族院の水野錬太郎君も重要なる役者の一人で有つた。その外にも意外な所に、意外なる働きをした男が、少からず有つたに違ひないが、とに角この議會が、我が憲政史に殘る程の結果を見たのは喜ばしいことだ。

議席番號二〇七番

僕は昨年九月末、老母を亡ひ、悲痛慟哭の餘、少しく健康を害するに至つたが、それでも議會だけは、最初から最終迄一日も缺勤しなかつた、僕の議席は、昨年迄は百七十七番で、中央の所で有つたが、今期議會になつて、二〇七番と云ふ高い所へ上げられた、此の席は六人一列で、大津淳一郎、加藤政之助の兩元老と、齋藤隆夫、八並武治、山田助作の新進諸氏と僕で占めて居る、僕の一段後方には、永井柳太郎君が居り、一段前には中野正剛君が居る、議席が高いから、八方が能く見える、演壇には遠いので、低い聲の演説は、聽き取れない事も有るが、活劇は議場の何處に起つても、能く見える、政友本黨の豪傑共が、守衛を叩いたのも、猪野毛利榮君が大に叩かれたのも、僕の議席からは、全く能く見えた、活劇の傍觀席としては、先づ一等棧敷で有る、そこで此の一等棧敷の二〇七高地から、極めて冷靜に、第五十回議會を眺めて、徐ろに其の經過と成績を考へて見ようと思ふ。

第一、貴革決議案

政府と與黨三派は、劈頭二個の難關に接觸した、その一は貴族院改正問題で、其の二は義務教育費國庫負擔増加の問題で有つた。貴族院改革のことは、清浦内閣を攻撃したる以來、終始の問題で、與黨三派の一致する所で有る。故に僕の如きも、昨年六月二十七日政友會本部に開催されたる貴族院改革協議會席上では、憲政會を代表して、一場の演説を試みた程で、此の問題は、誰れも異議のない所だ。而して政友會では劈頭二十七日の議會へ、貴族院改革の決議案を提出せんとした。

政友會の魂膽

政府では既に貴族院令改正の調査に着手し、横田法相や江木翰長が、委員として之に任じて居る際、政友會が特に急いで議會の劈頭にこの決議案を提出せんとするは、果して何故で有る乎、僕等は正直にして、何事も簡單に考へるから、政友會が議會の劈頭に、此の決議案を出すことを少しも怪します、之を通

過すとも不可なしと考へて居たが、そこへ行くと海千山千の政治家の間には、政友會の此の行動に對して、其の裏面の消息を知て、非常に憤慨して居る者が有つた、その說に依ると、政友會は本來普選が嫌ひで有る、憲革兩派に引きづられて、心ならずも贊成はして居るが、其の本心は、其の實現を望まない、蓋し普選の實現は、憲革兩派の大成功であるが、政友會に取ては、敵に降參した形にもなる、故に普選以外の大旗幟たる貴革の方へ、力を入れたので有る、この政略が中りて、貴革が行はれるなら、政友會の大成功で有る、而して萬一貴革が實行されないにしても、この決議案で、貴族院の反感を煽れば、貴族院が政友會の望まざる普選を阻止するかも知れない。これ第五十議會の劈頭へ、これを持ち出して來た所以である、僕等は政友會の人々の間に、それ程の悪るい魂膽が有らうとは思はなかつた。實は今日でも未だ之を信じないけれど、政界の情僞に通ずる連中は、皆此の如く看破して居た、甚しきは之れで憲政會を苦しめる機會に、政本合同を行はんとする陰謀さへ有て、政友會の貴革決議案が議場に現はれ憲政會が反對したならば、政友本黨は忽ち政友會案に贊成すべしと傳唱せられた。

終日ぶら／＼する

十二月二十七日の議會の日程は、第一全院委員長の選擧、第二常任委員の選擧で、午前十時開議だから、午前中に議會を濟まして、此の午後の列車か、遲くも夜行列車で歸鄕しようと期して居た地方の代議士が多かつた、往復劵を買ふたる代議士は、何十名で有つた乎、然るに開會すると、粕谷議長は諸般の報告だけを終り、『これから奉答文捧呈の爲めに參內しなくてはならぬが、小泉副議長神經痛のために議長席に着く能はざるが故に暫時休憩』と宣告した、而して午後一時半迄、何の沙汰もない、午前中に粕谷議長は宮中から歸つて居る、歸らないでも小泉君の神經痛は、職務の取れない程のことではない、變なことだと思つて居ると、實は政府が強く出て、本日政友會の貴革決議案の提出に、絕對の反對をしたので、高橋、横田兩相も止むを得ず、不提出に同意して、黨員を鎮撫する事となり、政友會の控室は、大騷ぎであつた、此の朝迄貴革熱心の武藤金吉君や山口政二君が、急に鎮撫を始めたので、硬派や院外團から罵しられて居る、議會は一時半に再開したから、いよ／＼日程に入るかと思ふと、粕谷議長は奉答文を朗讀したばかりで、『議事の都合に依り休憩』と宣告した、議事の都合ではない、實は政友會の都合である、これから日の暮れる迄僕等はブラ／＼して居た、戰ひか何時始まるかも知れぬから、外出も出來ず、院內で

ブラ／＼して居たが、政友會は大騒動で有つた、政友本黨では政友會と憲政會が此の問題で分裂すると見たから、頗る得意に見えたが、政友會内は硬論が強くて大騒動で有つた、これは其の筈だ、自動車を急阪へ落下した様な者で、急にブレーキをかけても、なか／＼止まる者ではない、然かし横田千之助と云ふブレーキは、なか／＼有力な者で有つた、『政友會が今日この問題で三派協調を破ぶるの責任は取れない』といふ理由で、マア／＼と抑さへた、同會内の各地方團體が、各別にそれ／＼に說き附けられた、調和力の強大なる野田卯太郎氏は『何もかも乃公どもに任かして呉れるタイ』と云つて廻はつて居た、其の結局、横田法相から、貴革案を今期議會へ提出の聲明と云ふ所で、折合ひが附いた、而して六時二十五分に開會し、先づ全員委員長の選擧を行ふて、三たび休憩した、此の休憩の間に、各部で常任委員の選擧を行ふことにしたのだ、それから八時三十八分に開會して、政友本黨から此の日の失態を責める發議も有つたが、最後に山本悌二郎君と横田法相の貴革に關する八百長問答が有つて、散會は九時を過ぎた。

山悌君が演壇に立つた時、政友本黨はその豫定の策の適中せざりし口惜しまぎれか、盛なる罵詈を浴せかけ、そのために山悌君の演說は、殆んど聽きとれなかつた、横田君が蒼白な顔をして、貴族院令改正案は、必ず今期議會に提出すると云ふ聲明をした時、此の一日の苦勞は、確かに彼れの生命を縮めた事と思はれた、又この時に政友本黨から、横田、山本兩君に對して發したる猛烈なる罵詈は、確かに當分の內、政本合同を困難に陷らしめたらうと思はれた。

第二、義務教育費問題

義務教育費國庫負擔の增加は、與黨三派の政綱の一である、昨年五月の總選擧に、誰れも彼れも之を高唱した所だ。故に加藤內閣が成立した以上は、必ず之を實行すべき義務があつたのだ、濱口藏相は政黨員として、閣議に於て、熱心に之を主張したが、岡田文相はそれよりも師範教育改善案を重しとした、長閥の寵兒で有る岡田文相の眼中には、政黨の公約なく、終に濱口藏相は其の主張を貫き得なかつた、これが抑も騷動の原因で有る。

更新會の決議

憲政會代議士の多くは、豫算案を見る迄、義務教育費の增加が行はれて居らないとは思はなかつた、然るにいよ／＼十四年度

の豫算案を見ると、それがないので騒ぎ出した、特に新代議士の團體更新會が沸騰した、憲政會の代議士は、百六十名あるが、其の半數は新代議士である、古るい代議士は、情弊の渦中に在るから、時として公正に措置することが出來ないことが有るが、新代議士には何等の情弊の纒綿する者がないので、頗る活潑で有る、昨年夏から更新會と云ふ一團體を組織し、僕の如きも、其の世話人の一人である、これが十一月二十三日中央亭に集り、喧嘩の間に、左の決議をした。

『義務教育費國庫負擔の増加は、我黨多年の主張なり、故に吾人は大正十四年度に於て、之が實現を期す』

此の決議文は僕が書いたので、決議をなす迄には、多少の議論も有つたが、結局全會一致で可決し、實行委員として、世話人の外に、座長を加へた、此の協議をなす時の座長は、年長者中野寅君で有つた。彼れは武富時敏君が『後進の道を開く』と稱して、昨春候補を辭退したる後任として、始めて議會へ出て來つた男で有るが、武富君は安政二年、彼れは安政元年生れで一年々長の後進で有る、年齢は已でに七十歳で有るが、其の意氣は、如何にも後進の名に負かざる潑剌たる者で、此の議事中座長席を離るゝこと三度、兩手を振りながら、佐賀辯丸出しで、決議案に贊成の演說をなした、而して翌二十四日は議會の召集日だから、院内に於て、實行委員會を開き、之を代議士會に於て附議したる代議士總會へ持ち出した。

幹部は勿論之を總會へ持ち出すことに反對したが、僕等は此の懇談に應ぜずして、無遠慮に提案した、此の日は加藤首相も總裁として出席して居たので、會が終りて後、幹部室に於て僕に向ひ『餘り煽動してはいかぬぞ』と言はれた、僕は昨夜の新代議士の集會の光景から、現に代議士多數の意向を述べ、本案實行の必要を說くと、首相は『財源が無い』と言はれた、僕は乃ち財源ありとして、剩除金其他の事を語ると、首相は顏色を和らげ『それでは石川君を大藏大臣に推薦する外は有るまい』と言つて笑はれた。

翌二十四日の代議士總會には、濱口藏相が來て、三時間ばかり、本問題の經過に付て、熱心に演說した、彼れが閣議に於て苦心したる所を述べたる時、誰れも彼れも感激した、熱誠が人を動かした者で有る、結局委員を設けて、來年へ持ち越す事となり、僕も亦其の委員の一人となつた。

政友本黨と中正

憲政會の内部に於て、此の問題の火の手が燃え出したのを見て、政友本黨が二千萬圓増額と云ふ旗を振りかざして、之を議

會へ提出した、義務教育費は凡そ一億二千萬圓入用だが、目下四千萬圓は國庫の負擔となつて居る、此上に二千萬圓增加すれば、約半額の國庫負擔で有る、若しも財政の都合で十四年度に於ては一千萬圓增加とし、十五年度から二千萬圓增加とすれば、各代議士が選擧區民への申わけは立つのだ、然るに政府が一文も增さない所へ、政友本黨は二千萬圓增加の法律改正案を提出して來た、それへ中正俱樂部が急に同額二千萬圓增加案を提出して來た、此の一點に於ては本黨と中正とが、提携の姿となり、其のお蔭で三派との協定で全院委員長に推されたる中正の佐々木平次郎君は、本黨の投票をも得て大變な多數で當選した、其の人物は、北海道に於て、餘り評判の良くない人で、北海道選出の三派の人は、協定如何に拘らず、彼れに投票しなかつた位だ、が、偶然のことで大多數となつた。

結局濱口藏相の聲明

憲政會の更新會が騷いだ程には、猛烈ではなかつたかも知れぬが、政友會の内部も、此の問題で相當に騷いだ、革新俱樂部は大口喜六君が、之に對する財源を捻出し、これで大正十四年度から決行すべきを主張したが、濱口藏相は頑として應じなかつた、與黨三派の幹部は、外には本黨と中正の聯合で、二千萬圓說を以て攻め立てる有り、内には更新會を始め、頑强に十四年度から實行すべしとの論に迫られ、板挾みとなつて、苦しみたる結局、濱口藏相が十五年度から二千萬圓增額を考慮すると云ふ聲明を、議會に於て行ふことに落ち着いたが、此の結局を見る迄には、幾度も集會あり、交涉あり、激論あり、紛糾ありて、隨分騷がしいことで有つた。

實を云へば、こんな問題で騷いだのは、誠に愚策で有つた、僅かに二千萬圓で有る、出來ないと云へば、出來ないかも知れぬが、苟くも之を作らんと思へば、十五億圓の豫算から、何とでもなることだ、濱口藏相が頑として之に應じなかつたのは、數字以外に理由が有つたかも知れぬ、鐵道で既定の豫算を動かされ、又この問題で動かされては、面目が潰れると考へた爲めだとの說も有る、岡田文相が師範教育費を取て置けば、義務教育費の方は、政黨が騷いで、自然に來ると狡猾に策したことが、ライオンの鼻を曲げしめたとの說も有る、その外種々の說も有るが、何れにしても政府の愚策で有つた、三派は之が爲めに、天下の信望を損し、どれ位損失をしたか分らぬ。

第三、豫算案

大正十四年度の總豫算案は、衆議院に於て鵜呑みにされた、何しろ十五億二千四百萬圓と云ふ大金額の大豫算だが、それが政府の提出したる通り、一錢一厘の削除もなく、何等の修正もなく、其の儘無事に通過したので有る、一月二十二日衆議院へ提出されてから、二月十二日に通過する迄、二十日間も豫算委員會で、愼重に審査し、各分科會を開いて、多くの人が、多くの款項に付て、一々何か理屈を述べ立てゝ居るから、何れかに缺點を發見して、何等かの修正でも有るかと思ふたら、二十日間も種々の難關をくぐり拔けて來た大金額の大豫算が、依然たる二十日前の者で、全く何の疵も附かず、其の儘貴族院へ送り込まれた。

行政財政整理

加藤首相は此の豫算案を提出した日に、施政の方針に付て演說し、『行政財政の整理で、二億五千六百萬圓を節約した』と云ふ所へ、馬鹿に力を入れて聲を張り上げ、其の緊張した顏には「どんなもんだい」と自慢の氣が溢れて居た、既に二億五千萬圓以上の節約をした位なら、かねて天下に公約したる廢減稅でも行ふべきで有らうに、それが無いのでは、餘り鼻を高くする理由たない筈で有る、僕等は聊か首相の誇る所に共鳴しかねて居ると、濱口藏相は其の明快なる論鋒を揮うて、『若しも此の政府が、今日に於て、此の節約をしないならば、政府は增稅の外なき運命で有つた』と威嚇した、增稅と廢減稅とは、アベコベで、話に大變な距離が有る、大正十三年度の實行豫算は、十六億を超過して居る、此の際此の內閣が、斷乎として此の節約を行ふて、始めて國民が增稅を免かれたから、その上に廢減稅までも望むのは、慾が深過ぎると云ふのが、濱口君の見解で有つた。

濱口藏相は又非募債方針の効能に付て、遺憾なく說明した、近日株式市場が、段々景氣を恢復して來るのも、全く非募債方針のお蔭で有る樣に說いた、然るに一方に於て、日本の對外爲替が、段々惡るくなつて來たのはドウだと、政友本黨其他から突つ込むと、濱口君は辯疏した者で、爲替下落の原因を詳說して、大震火災を最大原因となし、其の他に政友本黨が援助したる前內閣の責任の如くに逆襲した、金解禁問題で濱口君が在野の時の說を、藏相となつて實行せざるを責められた際も、彼れは大震火災を振り廻はして、巧みに切り拔けたが、今の政治家で、議論の際巧みに大震火災を利用すること、濱口藏相に及ぶ者はない。

政友本黨の無方針

政友本黨には豫算通と云ふ者が無い、吉植君は巧みに數字を並べ、如何にも財政通でも有かるの如く裝ふて居るが、實は彼れは多くのイカサマ事業に手を出して、其の方面の數字を、聊か心得て居るのみだ、一寸人の揚足を取る位の藝當は出來るが大藏省で成人して、財政の化物の如き濱口君の向ふに立つだけの力はない、其の外は松田源治、鳩山一郎、高見之通、何れも雄辯家で、舌は能く廻はるが、數字は分らない、其の演說の多くは、見當違ひで、時々滿場を噴飯せしむるのみだ、全體、政友本黨には對豫算案の方針と云ふ者が、立てゝなかつた、最初から其の方針の無いばかりでなく、いよ／＼委員會の手を離れて、本會議に入つた十二日の最終日迄、方針が確立しなかつた、先づ吉植庄一郎君が修正案を提出して、其の說明をすると稱して、盛に內閣攻擊を始めた、豫算案に關係のない方面へ、脫線又脫線して、屢々議長の注意を受けても、平然として種々の問題を持ち出し、何でも物價調節論の中途で、議長から問題外として發言を禁止せられた、彼れは最初から之れを豫期して、惡罵を續けて居たので有らうが、苟くも一黨を代表して、重要なれる豫算案に修正の動議を提出した者が、脫線して發言を禁止さとは、前例のないことだ、途方もない無茶なことをやつたものだ。

そこで誰れか相當の者が、彼れに代て、修正案を維持するかと思ふと、今度は鳩山一郎君が飛び出して、修正ではなく豫算案返附の動議を持ち出した、政友本黨が對豫算案の無方針は、これに依て、悉く暴露した、同じ黨派の同じ人物が、修正案を撤回せずして、返附案を提出するは許す可らざる所だから、議場忽ち紛糾して、一應休憩となり、結局修正案を撤回して、返附案で採決したが、多數で否決された。

政友本黨が眞に政黨らしい態度を取て、豫算案を眞面目に研究し、其の急所を突き込むなら、濱口藏相の雄辯も、之を防禦するに苦しむ所も有り、若しも假に於て失敗しても、天下の公論の同情を博收する道も有つたらうが、何分にも黨內には、之に任ずべき適材なく、從て無方針で、修正案を出して、又返附案を出すと云ふ滑稽を演じたから、與黨三派が多數で、盲目的に十五億の大豫算を鵜呑みにしても、誰れも之を怪しむ者はなかつた。

八百萬圓の差

唯玆に特記すべき一事が有る、それは委員長町田忠治君の正

直た報告で有る、加藤首相は行政財政の整理額、二億五千六百萬圓に達したと云ふので、大に鼻を高くして居る、濱口藏相も『二億五千六百萬圓とは能くやつた者だ』と一般から頌賛されて居るが、豫算委員會に於て、能く調べて見ると、實は其の中に、一般會計と特別會計と重複になつて居た者が有て、其の額八百餘萬圓に達した、それを差引くと、實際の節約額は、二億四千七百萬圓で有つたのだ、町田委員長は正直に之を本會議へ報告した。

八百萬圓と云へば、決して少ない數ではないが、昔から嘘八百と云ふ諺が有て、嘘にはやはり八百が附く者と見える、一錢一厘をも苟くも苟さる樣に見ゆる濱口藏相の數字にさへも、八百萬圓の嘘値が有るのだから、政府の事には、決して油斷はならぬ。

第四、朝鮮鐵道案

鳩山君が豫算案討議の中途に於て、豫算返附の動議を出したのは、朝鮮の鐵道工事費に於て、大正十三年度に三百四十萬圓支拂ふて居る者を、十四年度の豫算に計上して有つたから、此の豫算は、憲法違反で有ると云ふのだ、これは尤もの事で有る、政府が十三年度に咸鏡線の工事に於て、豫算以上を進め、其の金を十四年度の豫算案に計上したのは良くないことだ、これは政府がこれ迄、能くやることで、海軍の如きも、軍艦の注文をする時、前に金をやつてから、それを豫算に計上した者が多い、然かしそれでは豫算とは言はれない、鳩山君が之を理由としての豫算返附論は、政府の急所を突いた者だから、若しも修正案を撤回して置いて、堂々たる陣を張て攻撃したら、多少世の注意を惹いたで有らうが、其の前後の措置が、宜しきを得なかつた。

此の豫算面に缺點のあることは、實は朝鮮鐵道案の委員會に於て發見せられたのだ、政府は今回朝鮮鐵道と南滿鐵道と分離することにした、大正六年寺內々閣の時から、朝鮮鐵道は南滿鐵道の管理になつて居たが、八年間の經驗に於て、其の不可を知り、今回之を切り離し、朝鮮鐵道は之を朝鮮總督府へ取り戻す事となつた、南滿鐵道も管理をしてゐて、餘り利益がないから、之に同意したのだ、而して之を實現する爲めに、政府は朝鮮鐵道用品資金會計法案と朝鮮私設鐵道補助法中改正案とを提出した、世間では餘り注意しなかつた樣だが、滿鮮に取つては誠に重要な變革だ、僕は其の特別委員に選ばれたので、出席して見ると、八方から種々の質問が現はれた、咸鏡線の工事費の前

拂ひも、此の質問で辯解したので、下岡政務總監はあらゆる質問に於て、叮嚀に之を說明し、結局全會一致で兩案を可決した、但し此の時政友本黨の委員の態度が、頗る奇怪で有つた、彼等は賛成と云ひながら、何だか怪しい條件附の賛成で有つた、僕は憲政會を代表して、委員會に於て、賛成の演說をなし、本會議に於ても、必要が有れば、賛成演說をなし、其の序に南滿鐵道と政友本黨の關係に付て、一擊を加へてやらうかと思ふて居たら、政友本黨の代表は、本會議に於て反對をせず、簡單に賛成演說をすると云ふので、僕は演說をしないことにした、然るにいよ／＼代表が現はれると、希望附賛成と云ふ怪しい立場で、成鏡線問題を持ち出し、政府攻擊をやつたが、議場騷然で能く徹底しなかつた、全體、賛成演說として通告して置て、突然反對演說を始めるのは、政友本黨の新らしい政略で、第四十九議會にもそんなことが有つた、甚だ卑怯なやり方で有る、この成鏡線問題の如きも、堂々と男らしくやれば、一問題にもなつたのだけれど、すべてが卑怯なやり方だから、共鳴者を得ることが出來なかつた、尤も其の責任を問ふことになると、本黨の支持した清浦內閣の頭上に落下するのだ、本黨としては所謂脛に疵を持つて居るから餘り強いことも言はれなかつたので有らう。

第五、普選案

普選案は我日本政界に於ける多年の一大宿題である。僕が同志と共に普通選擧期成同盟會を組織し、其の幹事に任じて、東西に奔走した時からでも既に二十餘年になる。犬養毅、尾崎行雄兩先輩の如きも、僕等が熱心に普選を運動した頃は、普選反對の頑冥者流で有つた。然るに時勢の進運は、犬養、尾崎諸氏は勿論、とても彼等の一生涯に、普選に賛成すべしとも思はれなかつた所の加藤高明氏や高橋是清氏迄が、普選の實行者となつた、いや人間は長生すべき者で、世の中は案外變る者だ。

とに角普選が行はれさへすれば、僕等はありがたいので、總べて行懸りなどはどうでも良いのだ、又案の枝葉末節は之を問はないのである。政府は昨年から選擧法改正案の作成に從事し、三派の協調で漸く出來た者を、樞密院へ廻はすと、此處は名にし負ふ頑冥不靈の本場で有る。守舊黨の本城で有る。閥族の殘黨、之に據つて政黨に一泡吹かすべく待ち構へて居る所だ、審査だの精査だのと稱して、二箇月之に費やし、尙數箇條の修正を加へて來た、政府が之に反抗すれば、第五十議會の間に合はなくなるので、直ちに修正に同意し、早速改訂して、急

いで衆議院へ提出したのは、二月二十日であつた。衆議院は之を受取て、三十六名の特別委員に附託したが、僕も其の委員の一人になつて居た。何でも普選案の委員は各派共に大競爭であつて、憲政會の委員係へ申込んだのばかりでも二十四名あつたさうだが、僕は超然主義で、何の申込みもしないのに、委員に選ばれて居た。敢て他人と競爭してまでも、委員になりたいとも思はないけれど、選まれて見れば、其の責任だけは果さねばならぬので、毎日午前十時から登院して、其の一席に坐して居た。

本黨の鬪將

政友本黨普選案の委員中、鬪將とも目すべき者は、松田源治、鳩山一郎、高見之通、清水市太郎の諸辯護士で有る、凡そ辯護士と云ふ者は、依頼されると原告にもなれば、被告にもなり、それ〳〵に理屈を見出して、鷺を鴉と言ひくろめる者た、西洋にはプロス、エンド、コンスと云ふ書が有る、問題に付て、贊成論と反對論が書いて有るから、自分の立場に依て、其の何れの理屈でも參考になる、政友本黨も今日は大分窮して居る、政府攻擊の問題が乏しいのに窮するばかりでなく、人物拂底に窮して居る、松田君の如きは、多藝なる俳優の如く、早變りの藝當を演じて、種々の扮裝を凝らして居る、此の普選案攻擊に際しては、本案が日本固有の家族制度を破壞するとか、國體に背反するとか、『政府が歐米かぶれとなりて、個人主義を取るは不都合なり』などと、大變な守舊論者となつた、何れかの山の奥の神官でも言ひさうなことを臆面もなく吐き出し、其の頭上にチョム髷でも有りはしないかと疑はれるばかりだ、これが兩三年前に、歐米巡遊から歸つて、盛に歐米を振り廻はした松田君と同一人とは思はれぬ、イヤ今でも本會議では、時々歐米通を振り廻はして居るから、彼れの口から『歐米かぶれ』などと云ふ語を聞くのは、チャンチャラ可笑しくて、聞いては居られない、本會議ではハイカラの歐米通となり、委員會ではチョム髷の忠君愛國者となり濟ます所は、流石に器用な男だ、實川延若の早變り程に巧妙ではないが、以て田舍者を瞞着するに足るで有らう。鳩山君に至ては、聲と調子の甘つたるい所だけは、先代和夫先生に似て居るが、先代は普選期成同盟會の評議員で有つた、定めし地下で不肖の子の言論に、御不滿で有らうと思ふ、鳩山君は往年大隈老公の演説を妨害するために、演壇に上つて、其の原稿を引き裂いたと云ふことだが、普選委員會でも加藤首相に向て『アナタの頭は粗雜だから、私の言ふ事が分かるまい』と放言した、それが彼れの多くの發言中の、醇粹

に印象を與へた唯一の言で有つた、彼れの顔と云ひ、風采と云ひ、上品で愛嬌が有て、亂暴をしたり妄言を吐く樣な人とは思はれないが、時々意外の事件が起る所を見ると、人は見かけに依らぬものだ。

高見之通君は人間は好人物の樣だが、能くシヤベりたがる男で有る、時間も場所も、お構ひなく、無茶苦茶にシヤベり立てる、或る時藤澤委員長が、散會を宣告した後にも、尚何かシヤベつて居るので、僕は『モウ散會だよ』と注意したことが有る、清水市太郎君も亦シヤベり出すと、夢中になる癖が有る人と見えて、『歐米には普選の實行を後悔して居る者が有る』と言ふに至つた、僕も度々歐米に赴き、常に歐米の言論に注意して居るが、『普選を後悔』などと云ふことは曾て見聞したことがない、世界に於て、苟くも憲法あり議會ある所皆普選ならざるは莫いが、清水君は妙なことを言ふた者だ。

愚問愚答の一週間

普選委員會は二月二十二日の月曜日から始つて、三月一日迄續いた、毎日々々愚問愚答だ、僕が感服したのは、政府委員の塚本君や湯君の根氣よく同じことを繰り返へして答へたことだ、それよりも尚感服したのは、委員長の藤澤幾之輔君だ、長い時間に、愚問愚答を聞て、少しも倦む所を知らなかつた、本年六十七歲の長老にしては、實に強い根氣を有するものだ、或る日、委員係から僕に『何か御質問が有りますか』と問ふて來た、僕は之に答へて、『此の普選案の文章は、極めて拙劣で有る、然し讀んで分らない程ではない、從て質問すべきこともない』と言ひ、更らに其所に居合せたる人々に向て、『全部此の法案に對する質疑を、三日も四日もくり返へし、同じことを同じ人に向て、聞ふても、尚分らないと云ふのは、餘程頭腦の低級愚劣な者でなければ、何か惡意を持つ者に相違ない、質問に依つて何か國務大臣の失言を捕へるとか、或は之に依て、審査の日を延ばして、貴族院へ廻附の日を遲延せしめ、以て、本案を不成立に終らしめんとするのかも知れない』と言つたことが有る。

政友會の修正

本案に付て、政友會は多くの修正意見を持つて居た、實を言へば、僕も決して本案に滿足するものではない、修正したい箇條は多かつた、然し憲政會幹部の恐るゝ所は、衆議院の修正が、貴族院に大修正の口實を與へて、終に本案不成立に終ることだ、僕等は普選のためには三十年苦勞をして來た者だ、何で

もかでも成立させたいのだ、幹部と特別委員の懇合會に於て、僕が加藤政之助、中野正剛兩氏と共に、無修正の鵜呑論に贊成したのは、此の機會を取り逃がすと、又普選の實現が遲延することを恐れたからだ。

然かし政友會は頑強で有つた、無修正では折合はなかつた、高橋農相は病氣で臥床中、横田君は死んだし、小川法相一人の腕力では、とても纏まらない、止むを得ず、今度は政府が折れて、政友會の修正意見四箇條を入れて、三月二日には目出度衆議院を通過した。

公休日と選擧人名簿

僕は納税資格を撤廢して、千四百萬人に參政權を與へると云ふだけで、全く多年の宿望を達し得た心地になつて、大に之を喜んだが、案其者を巨細に讀むと、餘りにコセ〳〵して居る、如何にもウルさい様な所が多い、然かし要するに枝葉末節で、僕はどうでも良いと思ふた、それで何も言はなかつたが、若し僕の一二の希望を述べしむれば、第一は選擧日を公休とすることだ、これは昨年憲政會の政務調査會に於て、述べて置いた所だが、委員會で松本君平君も同じ希望を述べた、第二は選擧人名簿を公費で作つて、之を候補者に頒附することだ、これは委員會に於ける僕の唯一の發言で有つた、政友會の修正中、外の三件は、僕も同意だが、華族の戸主に、選擧權と被選擧權を與へることは、僕の同意する能はざる所だ、然かしそんなことは枝葉末節で、どうでも良い、又次の改正の時に問題とするばかりだ。

第六、治安維持法

治安維持法案が衆議院へ現はれた時、何人も目を認めぬはなかつた、これは往年床次竹二郎君が內相の時に、提案した者と同じ性質の者で有るからだ、床次案の時には憲政會も革新俱樂部も、熱心に反對したのに、何故に現內閣が、之を提案しなければならぬので有るか。

僕は誰れから聞いたのでもないが、蓋しこれは天降りの案で有る、樞密院から普選と日露條約批准に附帶せしめた條件に相違ない、さうすると誠に困まつた者だ、衆議院が之を潰せば、それが貴族院の普選通過に影響を及ぼす恐れが有る。

僕は或る人々と協議して、第一案として、委員會で時日を引き延ばすことを考へた、然かし閉會迄、尚多大の日子が有るのもてと、で床次案の時の如くに、之を潰すことは出來まい、然

らば第二策として、大に修正を加ふることだ、中野正剛君は修正案を作つて、之を幹部へ持ち込んで居た、然るに其の結果は、聊かの修正で、之を通過する事となつた、如何にも不愉快なことだが、普選案のためには止むを得ない、あらゆる犧牲を忍んでも、新に一千萬人に參政權を與ふる大事業のためには、大なる忍耐を要する、之を忍ばずして、閥族の殘黨のために、又もや普選案を阻止されては、永い間の勞苦が、又もや水泡に歸するであらう、普選案一たび通過し、新代議士に依て、新議會が成立するならば、あらゆる惡法の改廢は、何でもないことではない乎。

第七、雄辯

每日多くの人が、演壇に現はれる、それを二〇七高地に坐して、自ら雄辯試驗委員の積りで聽いて居ると、大部分は落第で有る、然かし第五十回議會にも、相當に賞讃すべき雄辯が現はれた。

第一は牧野良三君の懲罰辯護の演說だ、此の人の雄辯は、第四十九に議會於ても、僕の心を引き附けたが、今回のは又格別の出來で有つた、多數の野次の飛ぶ前で、暴行代議士五名のために辯護することは、とても容易な業ではないが、彼れの熱烈なる辯舌に、情味あり精彩あり、以て滿堂を謹聽せしめたのは、政友本黨中の出色の雄辯家で有る、少しく落ち着きは乏しいかも知れないが、それは年齡の少壯なためで、此の人は將來恐るべき者だ。

第二は齋藤隆夫君の普選演說だ、滔々として二時間に渉つたが、論旨と云ひ、其の演說の組立方と云ひ、豐富なる資料と云ひ、實に堂々たる者で有つた、態度も十分に有て、能く滿場に徹底し、さながら水を打つたる如くで有つた。

第三には床次竹二郎君の普選演說で有る、莊重にして氣品あり、流石に一黨の統率者たる威嚴を具へて居た、それ故に野次も、餘り多く飛ばなかつた、外の事は知らぬが、演說だけでは確かに原敬君以上である。

其の外望月小太郎君の對露決議の演說も、雄辯で有つた、武藤山治君の演說は、昨夏の議會よりも大に進步し、その或る者は滿堂を傾聽せしめた。

濱口君と若槻君

國務大臣中の雄辯を求むれば、第一は濱口君、第二は若槻君で有る、或る人は、若槻君の方が、濱口君の方よりも雄辯であ

ると云ふて居る、此の兩君は、加藤内閣の二個の柱石で有る、彼等が其の所管の事務に付て、説明する時、確かに滿場を滿足せしむる者が有る、八方から來る攻撃的質問に對しても、能くこれ〳〵に切抜けて、何等の失言を殘さゞるは、局長や次官の時から、多年政府委員席に在て、議會答辯術の練習に於て、優れたる經驗を有するが爲めかも知れぬが、實に巧妙を極めた者だ。

木堂先生の大雄辯

其の外、能く考へて見たら、誰れかの雄辯を聽いたのを忘れて居るかも知れぬが、其の總べてを壓倒せる大雄辯、即ち今期議會の最大の雄辯は、犬養遞相の木下謙次郎君の彈劾的質問に對する答辯で有る。

答辯は極めて短かつた。多くの人には、其の大雄辯たりし事さへ、氣が附かなかつたらうが、僕は或る意味に於て、雄辯の典型となすべき大雄辯で有つたと思ふ。

時は二月二十三日、木下謙次郎君は多くの問題に付て問ふた、彼れの演説は、彼れが庖刀を執て、スッポンを料理する程に巧妙ではなかつた、然かしとにも角にも、三十年政界を驅逐して來た古闘士で有る、其の古鉄の鋭どい部分か、時々政府の急所に出ることが有る、此の日も種々の問題を持ち出した中に、遞相官邸買收問題をも、議政壇に持ち出した、木内重四郎君の私邸を、大金を出して、遞相官邸に買收したのは、民間では相當に、物議の種子となつて居る、それは木内君が、加藤首相と同じく三菱の女婿で有るからだ、僕は此の質問に對して、犬養遞相が如何なる態度を以て、如何に答へる乎を、多大の興味を以て待つて居た。

木下君が頗り各種の質問を出した者だから、各國務大臣が代る〳〵出て丶之に答へ、時間は大分遲くなつた、仙石鐵相の現はれた頃、日は暮れて、議場はダレ切つて居つた、而して木堂先生は、最後の答辯者として殘つて居た。

いよ〳〵其の番が來ると、先生は普通の歩調で、演壇に出てたが、ヅヅ一歩を進めて、全身を政友本黨の方へ向けて、一睨した、ハテナ、何事か言ひ出したかと思ふと、一睨みしたばかりで、忽ち正面に向きなほり、馬が何か嫌ふた者の有つた時に、横を向いた樣な顔附きで、中央の憲政會から政友會、更らに革新、中正、無所屬迄、ヅラリと睨み廻はした。そこで議場がシーンとなつた。ダン切つて居た議場が、忽ち彼れ一人の威作用で、緊張して來た、犬養君が何を言ひ出す乎、と、片唾を飲んだ、其の時に彼れは再び政友本黨の方へ向て一歩を進

め、低いけれど、極めて滑澄な聲で、「木下さん」と呼びかけた。全領木下君は、永く國民黨に居り、先生の配下であつた、「オイ木下」と呼び捨てにしたことも有つたらう、何か用事でも云ひ附ける時に「木下君」と言つたことは有らうが、それが今や改まつて、「木下さん」と來た、あの有名な口の惡るい人から此の最高の敬語を拂はれては、木の謙君、それだけで忽ち參つて仕舞ふわけだ。それから何を言ふかと思へば、「いろ／＼御心配下されて、御親切はありがたう」と來た。これは驚いた、木の謙君は彼れに一本切り附けた積りだ、錆びたる矢では有るが彼れの胸をねらつて放つた者だ、これが豫期の如く中れば、犬養君の生命をも取らうと云ふ惡意を持つたる彈劾の質問である、それを極めて輕るく受けて、「犬養遞相が多年の清節を汚がさんことを恐る」と云ふ皮肉なる言葉の有つた所を馬鹿の如くになつて、其儘に受取り、「御心配下されて、御親切はありがたう」と禮を言ひ、さて極めて平易なる句調で、家庭に於ける雜談の如く、「私邸は狹まくて、客が來た時に困まるから、應接室の多い家が欲しい、小學校の古いのでも良いと尋ねたが、震災後で家がない、偶まあの家が見附かつて讓て吳れると云ふので、話が出來たばかりだ」と說いた後、「何も私の別莊にするわけではない、内閣が更迭すれば、私の後任で、私邸の挾まい者は這入るで有らう」と、何く迄も人を喰ふたことを云ひ、ここで一寸聲を少しく凛として「かやうなことで、私を疑ふ者にない、斷乎としてないと信ずる」と言て、與黨三派に一番喝采させた「私を疑ふ者も有るまい、加藤君を疑ふ者もあるまい」と、序に首相をも擁護し、「木下さん、御親切はありがたいが、どうぞ御心配下さるな、どうぞ御安心下さい」と、苟くも取扱ひが惡ければ、多くの人をも傷くべき爆烈彈を、確かに大風呂敷に包み込んで、これを提げて、悠々として去つた所は、天下一品、地下の團十郎の腹藝を、久し振りで見る樣な面白さであつた。

僕は感激の餘り、思はず手を拍いたが、前の中野正剛君に向て、ドウだと問ふと、「うまいなア」と感嘆の聲を放つた。小泉副議長に同じ問ひを發したら、「憎くい程うまいなア」と言つた。木堂先生、年齡は七十歲になるが、イザとなると頭髮の先きから、足の爪先き迄緊張して、一點の隙もない。その精神は、少しも老いて居ない。

第八、騷擾と暴力

相變らず、議會が騷がしいので、議會に對する攻撃は、頗る

猛烈な樣で有る。然るに此の騷ぎの原因を考へて見ると、大半は虛榮病から來て居る。賣名病が最大原因で有る。どうせ數萬圓の運動費を出し、數千人の有權者の前に叩頭百拜して迄、代議士の一席を得たと云ふ連中だから、多少の虛榮心、賣名病のない者は有るまいが、近來はそれが猛甚になつた。各黨派の院內分の役員の競爭が激烈で有る。常任委員でも豫算委員の如きは、大競爭で有る、選に漏れた人は、中途で外の人に辭して貰らうて、委員になるのが有る。演說の上手でない連中が、頻りに演壇に立ち度がる、質問だ、議事進行だと云ふて、途方もない長い演說をやる。無用なる法律案や建議案の多いのも、演說をやりたいための者が多い。一たび演壇に立つと、一句でも多く言ひ、一分でも長くシヤベりたがる、大根役者が其の台詞を、一行でも多く望むと同じ心理作用だ、抑も議會の條件は、國家の事務で有て、之に關する演說は、極めて簡潔を要することだ。成るべく短かい時間に、多くの事務を取扱ふべきで、長演說や無用の賣名演說は禁物で有るが、虛榮病賣名病の徒輩は、それが分らなくて、何でもシヤベつて、新聞に其の名を賣らんことを望むので、其の結果、野次も飛べば、懲罰沙汰をも起る、殴ぐられて半殺しに逢ふても、何日分の名さへ、新聞に現はれるなら、滿足して居る男も有るさうだ。

普通の野次位では、新聞が大きく書いて吳れないので、演壇に驅け上り、殴ぐり合ひを演ずる。甚いのに至しては懲罰だから、無抵抗主義の守衛を殴ぐるなどは、守衛こそ迷惑な話だ、而して懲罰に附せられると、同僚は之を祝福するのだ。或る時僕が廊下で、懲罰に附せられたる某代議士と話して居ると、其の友人が『おめでたう』と聲をかけた。如何なる理由かと云ふと、懲罰の事が新聞に出でたる爲めに、其の代議士は次の總選擧に、少くも得票が三百票は增加すると云ふのだ。これは從來の經驗から歸納されたる統計で有るさうだ。選擧民の愚劣、代議士の賣名病、これが我が立憲政體の根柢に横はる病根だ、苟くも先覺者を以て自任する者は、我が議會政治を完成するために、更らに一段の努力を盡することだ。

第九、新聞紙法改正案

現行の新聞紙法は、舊新聞紙條例を明治四十二年に改正したる者で、それは桂內閣の時で有つた、爾來十六年の經過で、良くない所が多いので、新聞社の代表と、新聞關係の代議士が協議をして、茲に改正案を作成した、僕が右案提出の理由を述べる時、加藤首相に質て東京日日新聞の[illegible]者の、[illegible]

裁は、曾て東京毎夕新聞社長で有つたから、共に現行法の不都合なことを體驗して居られる筈だ」と言つた、然るに政府は、出版法を改正して、其の中へ、第一新聞、第二雑誌、第三書籍と云ふ風に包含し、現行法の如く、單獨に新聞紙法を存置することを止めたいと望んで居るので、僕等の改正案に贊成しなかつた、委員會では司法省から熊谷次官、内務省から鈴木參與官が出席して、質問應答が有つたが、委員會は結局之を可決し、本會議でも通過したけれど、貴族院に於て、握り潰しとなつた、何れ第五十一議會には、政府から出版法改正案として現はれて來るで有らうから、次の議會の一問題で有る

第十、婦人デー

この議會は開會の當初から、婦人の傍聽者が多かつた、特に三月十日は、世間で婦人デーと云つた程の大入りで、婦人席だけでは收容し切れなかつた程で有る、公報に依ると、此日の傍聽人總數千六百十一名の内、婦人は二百九十名で有つた、蓋し此の日は婦人に關する問題が多かつた爲めで有る、

1 治安警察法中改正法律案
2 女子の高等教育に關する建議案
3 婦人の參政權に關する建議案
4 市制及町村制改正建議案

第一は婦人が政治上の結社に加入するの制限を撤廢する者で、山口政二君が説明した、第二は内ヶ崎作三郎君、第三は松本君平君が説明し、第四は市町村制に於て、婦人にも公民權を與へようと云ふので、高橋熊次郎君が説明した、多數の婦人が傍聽して居るので、演説に力を入れた者と見え、四君共に外の問題に對する演説よりも、出來が良かつた、特に内ヶ崎君は、「總べての男子は女子から生れ來た」などと言つて、大に滿場を笑はせた。

第十一、兩武藤の爭ひ

綿絲輸入關税撤廢に關する建議案が、衆議院の卓上に置かれた時、武藤山治君と武藤金吉君の激烈なる討論が有つた、僕は之を聽いた時にこれは單に兩武藤のみの爭ひでないと思ふた、昨年の總選擧に、武藤金吉君の競爭者として、武藤七郎が實業同志會の候補者として起ち、此の武藤七郎君の背後には、御大將武藤山治君が居たのだ、而して武藤七郎君落選の後も、思ひ切れず、武藤金吉君の選擧違反を訴へて、これは尚裁判の繋爭中で有る、

それ故に此の關係は、決して單に綿絲ばかりの問題ではない、單純なる關稅論でもない、武ト金君は紡績業者を攻擊するが如くにして、武ト山君を猛烈に打つた、鐘淵紡績の五割から七割の配當をしたことも、引合に出した、武ト山君は紡績の利害に關するもので、關稅撤廢に反對したが、その理論は兎に角、武ト金君の大きな聲で、猛烈に打つた方が、喝采を博した、僕は彼等の爭論の間に、三武藤の三角關係が、意外な所へ發展したことを思ふて、覺えず一笑を禁じ得なかつた。

第十二、院外からの運動

議會に現はれたる諸問題に關して、院外から議員に對する運動は、隨分盛に來た、普選案とか普革案とか、國家的問題に對しては、勿論盛なデモンスツレーションも行はれたが、その外に、取引所の限月問題は、大分猛烈に來た、此の種の問題は、現金醜聞が起り易いから、僕はこの問題に關しての來訪者は、一切面會を謝絶したが、各地方から電報やら印刷物やら決議文やら、澤山に來た、僕はその煩に苦しんで居たから、本問題が即決否決となつたのは、僕の喜ぶ所で有つた、三土農商務次官が限月延期に反對したる演說は、頗る明快で有つた、然かし或る政黨の幹部の間には、一方に此の限月延期運動を擁護して、それが否決となる間に、相場を試みて、巨利を博收したと云ふことだ。

限月問題と同じ程度の運動は、藥劑師法案と藥品法案の二案に對して起つた、これは醫師と藥劑師との爭ひで、各國の藥劑師と醫師の兩團體から、盛に印刷物が來た、三月十七日に此法案が議會に現はれた時、中原德太郎、加藤鐐五郎、宮島幹之助、土屋清三郎諸君が、醫師側の意見を代表して、本案に反對の氣焰を揚げ、若槻內相、片岡次官が之に應戰したが、結局藥劑師法案だけ成立して、藥品法案は次回への宿題となつた。

第十三、尾崎氏の議長攻擊

尾崎行雄君は昨夏第四十九議會には、全く沈默して居た、僕等は此の一代の雄辯家が、議會の一席に坐しながら、何等の發言がなかつたことを、甚だ物足らず感じた、今期議會に於ても、尾崎君は三月中旬迄、何の發言もなかつた、今期も亦無言で經過する積りかと思ふて居たら、三月十四日に至て、粕谷議長を攻擊する質問演說が有つた、相變らず雄辯で、如何なる反對の人々も、之を傾聽せさるを得なかつた、その論旨は、必ず

しも恭く同意すべき者ではなかつた、又その飛沫は、憐れなべき書記官の頭に迄も及んだので、尾崎君ほどの大人物が、餘りに小さい事に迄も論及したとの非難も有つたが、何しろ雄辯の點に於ては、恐れ入つた者で有る、やはり議會の第一人者と云ふ價値は十分に發揮せられた。然かし他日尾崎君の雄辯史が編纂される時は、こんな者は、多分省略されるで有らう、僕は聽かなかつたが、此の後モウ一度演壇に立ちて、金解禁論の演説が有つたさうだが、それは議長攻撃よりも遙かに劣つて居たさうだ、それは其の筈だ、凡そ人には本領の有る者だ、尾崎君の議長攻撃は、決して彼れの本領ではない、粕谷議長は尾崎君に比すれば、遙かに後進の士である、それに其の人格が溫厚の君子人で、たとひ眞に過失が有つても、彼れを責めるのは、氣の毒で有る、剩んや議場の混亂は、決して粕谷君の罪ではない、どんな人が議長になつて居ても、あの騷ぎは免れない、恐らくは尾崎君が自ら議長席に居て、彼れの言ふ如く卓勵風發の氣を鼓吹したならば、それこそ更らに激しい混亂を生じたで有らう、されば尾崎君が雄辯を揮て、後進の君子人たる粕谷議長を攻撃しても、滿場餘り風情がない、尾崎君が大雄辯を以て、强敵と見るべき床次とか桂太郎に向ふた時、始めて彼れの本領は發揮されるのだ、粕谷君が尾崎君の質問に對して、堂々として信用したのは、寧ろ同情を惹いた所で、彼は強い鳥と戰ふべき者だ、せめては鷹でも追ひかけるが良い、鳩や雀に向ふのは、却て同情を失はざるを得ない、議長攻撃すらも、少しく問題が良くなかつたのに、剩んや金解禁と來ては、益々彼れの本領に遠い者だ、失敗は當然である、何故にそんな問題で、あの雄辯力を濫費したかは分らないが、僕の想像では、多分武藤山治君が同志の先輩たる尾崎君を動かして、一席辯じてもらうた者で有らう

第十四、教育と鐵道

この議會に於て、最も多くの議案が出でたのは、教育と鐵道だ、鐵道は代議士が選擧區民への忠勤振りで、某町と某市とを連結する鐵道の建議案と云ふ者が、山の如く積まれた、教育案に至ては、議員の中に、教育關係の人が多い爲めかも知れぬが、種々の問題が、次から次へと現はれた、鐵道に關しては、僕は朝鮮鐵道獨立案の委員になつたばかりだが、教育の方は、教育の機會均等に關する建議案の委員になると、此の委員に併託して來た者が十餘件も有つた、外にも武道普及に關する建議案の委員へ併託十餘件あり、教育上の案件は、なか〱多かつた、委員會へ出席して見ると、山桝儀重、樋口秀雄、内ケ崎作

三郎、菊池謙次郎、松山常次郎諸君が、盛に名論卓說を吐き出し、河上參與官と應答を重ねること連日で有る、種々の問題で文部當局から調査資料をもらひ、諸先生の講義で、、大分學問をしたが、中には感服し難い者もあつた、然し松山君が、文部省の國語調査會を攻撃したる一節などは、最も耳を傾くべき者で有つた。

第十五、震災地營業稅免除案

震災地の營業稅を免除せよと云ふ要求は、東京、横濱を始め、被害地の代議士から、議會へ提出された、然るに憲政會の代議士中には、政府の意向を慮り、之に反對する者が五十名も有つた、特に委員長小池仁郎君が反對の態度を取つたので、政務調査會では大議論が起つた、結局衆議院を通過して、貴族院へ往て否決されたが、議會の會期が延長になつた頃、貴族院が尚本案の可否を決しないので、被害地の代議士十餘名が、打揃うて、先づ片岡内務次官を訪問し、彼れが貴族院に於ける說明の宜しからざる者あるを責め、それから貴族院へ押しかけた、僕もその一人で有つた。貴族院議員の中には、普選案の示威運動に來た者と早合點をして、目色を變へた男、被害地の免稅運動と聞て、漸く落ち着いたらしかつた。而して貴族院が最後の日に本案を否決したのは、良くないことだ、否決する程なら、寧ろ未了にして置いて吳れべきではない乎。

第十六、對貴族院

加藤内閣は昨年貴族院内閣を倒して出現した者で有る、貴族院の感情の良くないことは、この内閣に同情を有する者の均しく心配した所で有る、然るに樂天的な男は、徒らに樂觀說を述べ立てた、「貴族院の操縱に任する者槻は、若内相と江木翰長で有る、この兩君に任して置けば、大丈夫だ、それに岡田文相も若槻、江木兩君と共に、貴族院議員で有て、相當の勢力が有る、加藤首相も貴族院に一席を持つて居る、高橋農相も昨年迄、貴族院議員で有つた、かた〳〵決して案ずるに及ばぬ」と云ふ說で有つた、然かし僕等は此の說を信じなかつた、諸種の情報を綜合すると、本年貴族院の空氣は、頗る險惡に見えた、而して會期の切迫するに從て、その暗雲は、一層濃厚になり、先づ豫算案に於て、大に修正を加へんとして來た、その修正の斧鉞を向けた所が、仙石鐵相と岡田文相の所管なりしは意外で有つた、特に岡田君は貴族院を操縱する人で有らうと考へて居た

ら、却て最も攻撃さるゝ人で、文部省の費用削減は、最後迄貴族院が譲歩しない程で有つた、然かしとに角その修正は、僅かに九十七萬圓で有つたから、衆議院で同意して、豫算案だけは成立した、それから貴族院令の改革案も、何とか妥協の道は有るべしと思はれたが、一番困つたのは普選案で有る、貴族院はこの最も大切な議案を最後に廻はし、三月二十四日に委員會を終了した。それも衆議院案に修正を加へた者で有る、僕等は此の貴族院の數箇條の修正案は、之を鵜呑みにして、是非共此の議會に於て普選案を成立せしむべしと主張したが、憲政會の内にも、貴族院の修正案に反對する者あり、政友會の反對は、一層倔強かつたので、なか〳〵空氣は險惡になつた、且つ貴族院では外の議事を、先きに進めて、普選案を會期の最終日なる二十五日の日程に上し、委員長渡邊千冬君が委員會の經過を報告すること二時間餘を費やした時、既に日は暮れて、九時を過ぎて居た、そこで、政府は一日の會期延長をやつた、多分二十六日の一日で、圓滿に解決するで有らうと期して居たのだ、然るに二十六日に至て、討論に入り、第一陣和田彦次郎君は二時間餘、第二陣土方寧君は五時間半を費やし、夜に入つて、尚討議は盡きなかつた、而して結局貴族院は其の修正案を解決したが、それでは衆議院と協議會を開くの外はない、政府は乃ち更らに二日の會期延長を奏請したが、二十七日と二十八日の兩日で、協議會が容易に妥協點を見出し得ず、更らに二日の會期延長で、終に妥協點を發見した、貴族院をしてかく迄に執拗ならしめたのは、政府の手腕の鈍ぶいためだと云ふ説も有るが、とに角最後に圓滿なる解決を見たのは、先づ以て成功で有つた。

第十七、不信任案

政友本黨には種々の策戰が有つた樣だ、貴族院と提携して、政府を苦しめ、普選案を不成立に終らしめて、内閣の瓦解を來さしめんとの策戰も有つた樣だ、然るに貴族院が妥協に出でたので、最後の一撃を内閣に加へんとして、會期延長二回を責むるの内閣不信任案を提出した、元田肇君が之を說明し、例に依て『畏れ多い』〳〵を連發した、彼れは詔勅の濫發を奏請したから畏れ多いと云ふのだ、彼れは伊藤公や桂公が政略上から大詔を濫發した時と同じ罪過として、攻撃したのだが、會期延長と伊藤公や桂公の大詔とは、少しく違ふ樣だ、元田君に對して、憲政會から箕浦勝人君が出でた、共に第一期以來の老長で、又共に大分縣代議士で有る、何だか古るい大分縣會が現はれた樣で、議場は全く緊張を缺いて居た、凡そ内閣不信任案

で、この位落ちつかない空氣の中に、否決された者は少いで有らう、政友本黨は其の慣用手段たる記名投票のドウ／＼廻はりを要求する勇氣もなく、單に起立に問ふて、それで濟んだ、こんなことなら、寧ろ提出しない方が良かつたらう、

第十八、最後の萬歳

要するに、第五十回議會は、歴史に殘るべき普選案の成立を見たばかりでなく、行政財政整理、特に四個師團の減少、それから貴族院令改正等の大問題を解決した議會で有つたが、その議會に列席して居る間は、愉快な日は少かつた、會期延長で貴族院の議決を待つ間、朝早くから夜遲く迄、議院内をブラ／＼して居た時などは、戰爭の時の塹壕内の兵士の生活もかくやと思はれた、然かし最後に普選案の成立を見て、萬歳の聲を高めた時は、會期を通じて忍耐したる不愉快を一掃したるが如き快感を覺えた、特に此の普選のために、三十餘年奮鬪したる僕に取ては、この上もない愉快で有つた。

松島宗衛著（朝比奈知泉序）新刊出來

清朝末路秘史

菊判三百九十頁函入本製釘
定價參圓 内地送料廿四錢

之れ文書調査の記録に非ず著者自身渦中に在て目睹し遭遇し把握したる秘中の秘北京宮廷を中心に湧起せる暗流狂濤を闡明す

著者は日露戰爭當初より十餘年間北京に駐在し清朝大官政客と親しく交を訂し北京宮廷の内部に精通して各皇族の日常生活をも知悉した政界の僞情は勿論各國使臣の暗中飛躍支那官吏の行動等また掌をさすが如きものがある、愛親覺羅氏三百年の帝業は如何にして亡べるか其の眞相を知ること著者の如きは稀であらうと信ずる。

日露戰役當初からの日露支折衝の裏面・北京宮廷の秘密と列强の外交戰・日支間の勝手口外交・英傑袁世凱を中心とせる許多の陰謀・皇帝西大后の怪死等、未だ曾て世人の知らざる幾多の事實を詳述す其間内田康哉氏以下多數邦人の活躍等眞に大映畫に接する感がある此著今初めて公刊せられたのである支那を知り日本を知らんとする憂國の士に切に一讀を勸める

東京市外長崎村 **大星社** 電話小石川三八七九 振替東京七一二六七番

研究會解散論

日本の貴族政治沒落の過程

長谷川如是閑

政治上の權力は元來少數的のものであつて、多數的のものではない。政治現象は權力が少數の手に歸した場合の現象である。社會が少數者の意識によつて統御されずに一般的の意識によつて統制される場合には、政治現象は起らない。それは所謂社會的感覺が支配するのであつて、組織の作用で統制されてゐるのである。それが或る少數者の意識目的による統御に移つて行つた場合に、所謂政治的權力が發生する。例へば家族が家族全體の關係で圓滿に統御されてゐる場合には、そこに政治的權力はない、ところがその中の年長者が、その特權を構成する——一般の關係以外に年長者の利害に基く關係を設定する——場合に政治的權力が起る。所謂家長權の發生である。つまり力が少數者の手に歸した時政治現象が起る。

然らば『多數の政治』といふのはどういふ意味かといふに、この政治現象における少數者の特權が、過度に一般の社會關係を阻害するやうな經過を取つた場合に、一般の生存が脅かされることが必然であるが、その場合に多數者は自分達の生存を脅す少數者の特權に反抗して、政治關係を一般社會關係に引き戾さうとする。その運動が所謂多數者の政治となつて現はれる。それは一つの社會運動であるが、この運動が政治化するとやはり政治運動特有の機構をもたねばならぬ。即ち政治は社會化される過程を取るが、政治そのものは少數者の利害に支配される。デモクラシイは右のやうな過程を取つたが、結局少數者の利害關係を中心とする運動となつてしまつた。故に政治的デモクラシイはやはり政治現象の特徴を持つてゐるが爲めに[illegible]と

しての意識に乏しいことになる。そこで産業上のデモクラシイが持ち來たされねばならないといふ主張を生ずる。

日本の政黨もデモクラシイの産物であるが、それは少數者のカラクリに過ぎないことは、所謂政黨の幹部といふやうなものが、一方で多數の勢力を利用しながら、それを利用して組立てる自己の權力は、多數者の生活とは沒交渉に所謂政治階級の機構によつてゐるのである。その、多數を利用して擁護するところの利害關係は個人的であり、少くとも階級的である。故にその政黨の首領のやうなものも、今日は最も平民的な高橋氏であるかと思へば、明日は田中陸軍大將といふ軍閥を戴くことが出來るのである。それは彼等が利用してゐる民衆には何等の交渉なくして行はれてゐる事柄である。政友會を支持した民衆が、軍閥の首領を戴く運動をした譯では決してない。要するにかやうなことは、政治的權力は多數者を利用するが決して多數者のものではない、といふことを示してゐるのである。

政治的權力が少數者の力であるにしても、それには多少の進化がある。政治が『家族的』である時代には、丁度家族關係に於ける權力者のやうに、純個人的の事情が支配する。即ち首長の個人的感情や、それを中心とする家族的の朋黨が政治上の爭ひの單位となる。何々家といふやうなものが、今日の何々黨といふやうなものと同じ政治的作用をもつてゐる。無論その何々家は一般家族關係を政治運動の意識目的の動機としてゐるのではなく、全く何々家の利害、若しくは何々家の中の一部族の利害又は一個人の利害を中心とする動機である。

然るにさういふ家族的の政治は、一般民衆の間に起る或は武力的の、或は經濟力的の勢力によつて打ち負かされる。そこで政治的權力も、其武力を中心とする、又は經濟勢力を中心とする政治に移る。其場合にそれ等の進化を導き出すものは、一般社會的生活者の生活狀態であるが、然しさうして組立てられた政治的權力は決して一般社會生活者の利害を中心動機としてゐるのではない。即ち或ひは武力階級、又或ひは經濟的優越階級の利害を中心として、政治的權力が作用するのである。

今日は經濟的優越階級が政治的權力の中心動機を自己の階級の利害に置いてゐる時代である。即ち政治的權力の支持者である政黨は、經濟的優越階級の政黨である。されば此の事情が極度に發達してゐる國に於いては、軍人や貴族はもはや軍人若しくは貴族としては政治的權力の保持者乃至支持者であることは出來ない。これ等のものも經濟的優越階級と結び着いて、その政治的機構であるところの政黨を利用することによつ

て政治的權力を操ることを得るのである。故に政治的にはもはや軍人と貴族とは過去の偶像になつてしまつてゐる。これ等のものは各國共今日尙ほ社會的にその因習的勢力を保つてゐて、經濟的優越階級も或る程度までは、その過去の傳統を利用せざるを得ないのである。日本やイギリスや獨逸の實業家が、富裕の貴族又は貧乏貴族を有效に利用してゐるのは、社會的にそんな傳統が殘存してゐるからである。

　けれども政治的權力は、多くの文明國に於ては貴族の手からは離れてしまつてゐる。イギリスの貴族黨であつた保守黨も、今は確實に商人の手に落ちてゐる。イギリスでは自由黨が商人の政黨であつたが、初めこの自由黨によつて貴族に對抗したイギリスの商人は、最近一方では貴族が沒落して經濟的優越階級即ち商人に降服すると同時に、他方では勞働黨が擡頭して、商人がそれと對抗する必要上、今まで貴族に對抗する爲めに勞働黨と結んだ關係を破棄せねばならなくなつたので、自由黨は極端に保守黨化し、遂にその存立の意義を失つたのである。而して商人は今や保守黨に立籠ることによつて、その政治的權力を支持する外はないのである。されば貴族はもはや商人に對し特別の政治的地位を要求する根據も實力もなくなつてゐるのである。イギリスで貴族が政治的權力を得ようとすれば、彼等は貴族の一員としてではなく、經濟的優越階級の一員、即ち商人としてでなければならぬ。

　政治的權力が近代的政黨の手に移つた國に於ては、貴族は平民の政黨以外に特別の政治的根據地を求めることは出來なくなつてゐるのであるが、日本のやうにさういふ近代的政黨へ移る過渡期に在る國に於ては、貴族は一種特別の政治的地位を占めることが有り得る。殊に政治的傳統の上に古代の貴族的政治の傾向を殘してゐる場合には、政治的權力は、近代的機構に全然移り切るに多くの年代を要する。つまり近代的機構で解釋されない政治的機構が或る期間保存されるのである。日露戰爭以前のロシアに所謂太公政治が成立つてゐたやうに、日本にも元老政治なるものが成立つてゐた。これを動もすれば元老の個人的意識目的によつて出來た制度のやうに考へるものもあるが、實はさうでなく、政治的權力が組立てられた原始的事情が一種の社會的傳統をなして現代に働いてゐる結果である。元老個人はこの傳統を利用して自己の利害關係を支持してゐるのであるが、この傳統が失はれれば、自らその個人的勢力もなくなるのである。個人そのものは何等の發動力を持つてゐないものでも、この傳統のうちに置かれる爲めに、動もすれば有力であるが如

く、又事實有力に作用するのである。今の西園寺公の如きもその一例である。日本の貴族はこの社會的因習を生命として、今日までその特殊な政治的勢力を支持してゐたのである。

日本の議院制度は特にこの因習を支持するやうに組立てられたのである。即ち貴族階級が地主や商人としてではなく、これ等のものに降服することなしに、貴族として政治的根據地を保持することが出來るやうに、議院制度を組立てやうとしたのである。日本の二院制度は遲れて出來ただけ、どういふ制度がさういふ因習の支持に最も好く役立つかを研究するとが出來たのである。即ちイギリス流の二院制度はこの因習を保持する上に於て餘り有力でないことが認められてゐたので、日本の議院制度はそれに倣ふことをしなかつた。無論貴族院の傳統を何處までも支持しやうとするやうな人爲的な組立てが現代政治の上で權威的に可能で有り得るといふことは、事實の上で證明されてゐない。が當時はまださういふ事實上の發展が十分でなかつた時代であつた爲めに、人爲的の制度が貴族の舊傳統を何處までも支持し得ると考へたのである。貴族と云ふ階級を何處までも市民に降服せずに、昔ながらの貴族で保存さるべきものと考へた。イギリスで商人が貴族よりも有力になつたのは同國の議院制度が惡いためだ解釋したのである。獨逸のやうな制度にすれば、貴族階級の政治的地位は強固に保持されると思つたのである。從つて日本の貴族院は、この貴族的特權を支持する階級から構成され而して上院の權力を衆議院に對し十分牽制作用を有つものとして組立てたのである。

これは日本のやうに商人階級が有力に發展するに至つた國家の制度としては、變な人爲的方法で日本の政治的發達を牽制しようとした企となつたのである。この企はイギリスに於て成立たなかつたやうに、日本に於ても成立たないのであるが、然し或る程度までその人爲的の組立てが役立つたのである。貴族はこの議院制度を利用して、現代政治の權力關係とは沒交渉な權力を今日まで支持することを得た。近代政治の權力關係とは即ち經濟的優越に基く關係である。貴族も近代政治に於て權力をたらうとすれば、この關係に這入り込まねばならぬが、日本の貴族は昔ながらの貧乏貴族として倘ほ且つ一定の政治的權力を保持したのである。貴族院は日本の貴族が市民に降服せずに、昔ながらの貴族的特權を保持する機關だつたのである。それは日本の議院制度が市民の議院を有力に牽制する機關として構成されたからである。今日までの政府は多くの場合この牽制機關の力で破壞され、又組織されたのである。貧乏貴族と官僚と大地主と、この三つの結合が、時には人民を利用したが、大抵は人民の

傾向とに後交渉に政府を破壊し、又政府を作つたのである。

貴族院改革案は即ちこの貴族院を組成する貧乏貴族を市民に降服せしめようとする企である。即ち資本主義化した貴族を政黨關係に取込み、貧乏貴族を職業政治家に歸化せしめ、貴族院を實質的に市民に從屬する二重機關たらしめようとするのである。貴族はそれによつて、貴族としての特權的地位を奪はれ、平民の政黨の機關に加擔する將卒とならねばならぬのである。

が、さういふ企が成就するまでは、日本の貴族は一種の貴族院的特權によつて政黨に對抗するのである。この貴族院的勢力の特徴は、政黨が多數を利用するに對し、全くその貴族的權利に基く人爲的組立てを利用するに止まる點に在る。貴族院の團體は、その院内の機構の外に何等權力の根據を有つてゐるのではない。人民の内にはもはや傳統的に貴族に隨喜する信仰はない。又貴族自身も貴族院を離れて政治上の權力を組立てる根據をこの傳統的信仰の上に有つてゐるのではない。日本特有の議院制度のカラクリだけが貴族の權力を支持してゐるのである。故にこのカラクリを破壊されれば、貴族は政治的に無力になると同時に、社會的に無力であることが暴露される。有力にならうとすれば、市民に降服して、政黨人に歸化せねばならぬ。

日本の貴族の現在の地位は、それ故に、彼等自身の傳統によつてゐるものでも何でもない。そんな傳統を有たない出來星貴族の類が、貴族院的職業政治家として活躍してゐるのである。さうなると、貴族院は近代政治の上に於ては全く無意義な妨害物になる。貴族院の政治家は、貴族の傳統を權力の根據とする政治家でもなく、市民的利害の根據に立つ政治家でもない。云はば貴族の爲めにも平民の爲めにもならない政治家である。ただ日本の議院制度の人爲的構成によつて、丁度昔の御殿女中が幕府の政治に妨害をなしたと同じやうな作用に基いて、その政治的權力を働かして行くのである。それは日本の貴族に云はしてもいいこととは云はない。現に最も貴族的な日本の貴族は、この種の貴族院的政治家を好んではゐない。市民に降服することを肯じない貴族でも——さういふ貴族ならば一層——これ等の貴族院的職業政治家を承認することをしない。つまり今日の貴族院は、貴族の機關ではなく、貴族院的職業政治家の機關である。貴族院を衆議院に降服せしむるには反對する貴族も、貴族院的職業政治家の手に貴族院を委ねて置くことを好まない。從つて貴族院改革が或る程度まで貴族の意思である。

併し乍ら傳統的貴族が考へるやうに、貴族院から彼等の所謂劣等な職業政治家を排斥することによつて、貴族院を貴族の傳統的勢力を支持する機關たらしめることが出來るかどうかは、

無論問題である。貴族院をどう改造したところで、貴族そのものは社會的に市民に降服しなければならない運命に在るものである。イギリスでは外形上自由黨が保守黨に降服したやうな形になり、市民が貴族に歸化したやうに見えるが、實際は貴族が市民に降服した爲めに、市民が特に自由黨といふやうな特別の根據を有つ必要がなくなつて、貴族と共同戰線を守る實際上の便宜に從つたのである。然しそれでもイギリスでは幾分この事情の爲に、國民の間に貴族の傳統が今尚ほ有力に殘存してゐるとも解釋される。ところが日本では貴族の多くはイギリスの貴族のやうな鞏固な傳統を支持する資格を有つてゐない。教化の上から云つても、社會上の地位から云つても、經濟上の有力さから云つても、日本の貴族はイギリスの貴族に比べて根柢が頗る薄弱である。市民は今尚ほ貴族を利用してゐるが、それも今は市民階級の間に時代後れの傾向として、それをしてゐるものが却つて侮辱されてゐる。要するに日本の貴族は、社會的にその傳統の力を支持することが出來なくなつてゐる。政治的權力の根柢に、そんな力を計算に入れることは日本ではもう出來ない。恐らく日本の貴族は、前に云つた如く、議院制度の人爲的な組立てで今日辛くも政治的權力に食ひ入つてゐるに止まるのである。而かもそれは一部の貴族院的職業政治家の仕事である。傳統的の貴族は却つてそれに反感を有つてゐる。果して然らば日本の貴族政治は今日までその殘壘を保つて來ても、それが更新されて、より有力に保存されるといふ可能性が有り得ない。何を根據としてさういふ事が可能であるかが見出されない。やはり一般デモクラシイの政治的進化を追ふて、貴族は市民階級と共同戰線を張ることによつて、勞働階級の擡頭に對抗することになるであらう。

けれども日本の政治はまだ市民政治と貴族政治との對抗狀態に在ること、丁度イギリスの自由、保守兩黨の對抗時代と同じである。從つて貴族院はその人爲的組織に依賴して、平民の政府に對抗しようとするであらう。けれども、またそれをする貴族は貴族院内の職業政治家であるから、その戰ひの結果、貴族が或る時代のイギリスの保守黨のやうな有力な貴族政府を組織する見込みもない。要するにこれ等の職業政治家が個人的に時々の政府に自分を賣込む位の程度に止まる。寧ろ有力に市民の政黨に對抗するものは、所謂官僚の徒黨である。これ等の人々はやはり貴族院の人爲的組立てに依賴して、國民の傾向とは沒交渉に政治的權力を握らうとするのであるが、貴族に較ぶれば、個人的に有能者が多いので、或る時期の間、政治的勢力を保持することは出來るであらう。貴族の職業政治家は、今後も前のやうにこの官僚と結び着くことをするであらうが、中心勢力としては決して有力になる見込みはない。

不良の研究會

石川半山

第五十回帝國議會が三月二十五日で會期が盡きる所を、一日延長し、更らに二日延長、又更らに二日の延長を餘儀なくしたのは、全く貴族院が、國民大多數の要求たる普選案に對して、惡戯を試みたる結果で有る、これに依て、貴族院の不良なることは、よく國民に分つたが、そこで貴族院の分子を分析して見ると、その中の大勢力たる研究會と云ふ一團體が、最も不良で有るのだ、此の研究會さへ打ち碎けば、貴族院の惡性は、餘程拔けるので有る。

中堅は子爵議員

研究會の歴史を考へて見ると、其の中堅は最初から子爵議員で有つた、子爵議員の團體は、昔は二個有つた、一方には閥族に盲從する連中と、他方には谷干城、曾我祐準などと云ふ侃々諤々黨を選出する連中と有つたが、それが合して一團體となつたのが、研究會の中堅となつたのだ、而して最初に此の團體の勢力を利用して國務大臣の地位を獲得したのは堀田正養子で有つた、西園寺公が日露戰爭の後に、内閣を組織した時、松田正久、原敬の政友會の頭目を中堅に入れ、更らに元老との意思を疏通するために、山縣伊三郎公を遞相に入れ、井上侯の人選で、阪谷芳郎男を藏相に任じた所が、中途で山縣公と阪谷男が、大なる爭ひを生じ、喧嘩兩成敗となり、其の後任を選ぶ時に、貴族院から二人を取つた、その頃貴族院の大團體は、研究會と木曜會で有つたから、研究會から、堀田氏を取り、木曜會から千家尊福男を擧げた、即ち堀田子は山縣公の後任として遞相となり、それ迄司法大臣の松田氏を大藏省へ轉じて、千家男を法相に任じたので有る。

次は三島子

堀田子が研究會を利用して、遞相の任に就いた時、研究會内には三島彌太郎子が居て、堀田子の此の行動に關して、餘り面

白く感じなかつた、それ故に『研究會は決して政黨の如き行動を執つてはならぬ』と云ふ意見を高唱して、『研究會は堀田子一人の意の如くになる者でない』と云ふ意味を明かにした、然るに三島子の勢力が、會內に伸張するや、彼れは橫濱正金銀行の頭取に推されて、次で日本銀行總裁の地位に就いた、彼れの人物其者が、此等の地位に就くべき十分の資格は有つたにしても、彼れの背後に、研究會が有つたことは、政府が彼れを推擧したる重もなる原因で有る、彼れは堀田子が研究會を利用して、國務大臣になつたことを非難しながら、自分は又平然として財界の有力なる地位に坐し、若し適當の機會が有れば、大藏大臣に任じて、財政上にその抱負を發揮したいと望んで居たが、不幸にして大正八年に永眠した。

原敬氏と研究會

研究會は子爵議員が中堅で有るが、それへ伯爵團が參加した、これでその數が大分多くなつた所へ、木曜會が破れて、男爵團からも參加した、さらに公侯爵の中からも參加する者が現はれた、そこへ原敬氏が盛に勅選議員を投げ込んだので、研究會は其の數量に於て、貴族院を左右する大勢力となつた、原內閣は大木遠吉伯を閣僚に迎へたのみならず、研究會の有力者へ種々の利權を與へた、靑木信光子を日本銀行の監事にしたのを筆頭に、多くの特殊銀行の重役に推薦したのも有れば、研究會の有力者の關係したる會社には、特別の便宜を與へた、前田利定子が多くの會社に推されて、社長となつたのも、政府との連絡上に、多大の便宜を得た爲めで有る、銀行や會社の地位を以て、征服する能はざる者は、內務、農商務、遞信、鐵道各省の囑託にして、之を懷柔した、何等の仕事もせずして、唯だ月俸給だけを取る研究會所屬の貴族院議員が、各省に囑託された、かくて研究會と云ふ者は、最も巧妙に原氏に操縱されて、原內閣の熱心なる擁護者となつた、原氏は衆議院に於て、政友會の絕對多數を擧げ、貴族院に於ては、その直參の交友俱樂部と、大政黨の研究會を携へて、三年半その政權を掌握して居たので有る。

加藤內閣は研究會內閣

實を云へば、大木伯が唯一人原內閣の閣僚となつた時、彼れに對する嫉妬は、研究會內に燃えかゝつて居た、彼は危ふく往年の堀田正養子の二の舞となる所で有つた、多くの人は、彼れが研究會から反感を以つて見られるだらうと期して居た、然るに原氏の貴族院懷柔力は、西園寺公のそれに優り、研究會員へ

總花を蒔いて、さしも強硬なりし同會を自由にした、原氏兇刃に斃れ、高橋内閣は元田、中橋兩相の反對で、ゴタ〱の中に倒れた時、加藤友三郎氏は貴族院内閣を作つた、閣内に一人の衆議院議員を有せず、首相と海軍大臣を除く外は、悉く貴族院議員で有つた、唯其の人選は、原内閣を支持したる研究會と交友俱樂部兩派のみから取り、特に研究會は大木遠吉、前田利定、市來乙彥、荒井賢太郎の四君を入れたので、彼等は之を研究會の内閣の如くに考へて居た、今の加藤内閣でも、純粹の憲政會出身大臣は、首相の外若槻、濱口、仙石の三氏のみなるに、憲政會員は何れも之を『我黨内閣』と稱して居る所を見れば、研究會員が加藤友三郎内閣を『研究會内閣』の如く思惟したのは、無理もないことだ、而して一たび政權の甘味を覺えたる研究會は、全く一種の政黨の如く化して仕舞つた。

綱紀紊亂

抑も政治家が國家のために盡すのは、一身一家の利害を忘れて、公利公益のために犧牲となる覺悟がなくてはならぬ、然るに研究會は原敬の懐柔力に魅せられ、利權を以て誘惑され、貴族院に於ける一票の勢力を惡用して、私利私福を企圖するの武器とした、當時衆議院の政友會も利權を貪ぼる集團で有つたが、政治の何者たるを理解せざる貴族は、この風潮に感染し、『政治は利權なり』と思ひ、苟くも政權を取て、國務大臣となつた以上は、その權力を利用して、大に私利私福を企圖すべしと考へた、政友會員が原内閣時代に、我黨内閣の權威を笠に着て、横暴を極めたる如く、加藤友三郎内閣の時代には　研究會員が傍若無人の事をした、その事蹟は、現に中央地方の物議の種となつて居る、足一たび北海道へ入る時は、既に到る處に、研究會員の非行を發見するが、樺太に至ると、更らに甚しいと云ふことだ、綱紀の紊亂は、原内閣から始まつて、加藤友三郎の貴族内閣に至つて、其の極度に達した、天が彼等を戒しむべく、大震火災を降下したのも、決して偶然ではない。

山本内閣と研究會

震災の煙火の中から生れたる山本内閣も、衆議院議員は唯犬養毅氏が一人で、貴族院に對しては、後藤、田、岡野、山之内諸氏が居た、然かし政權の甘味を嘗めて、未だ之を咀嚼せざる研究會が、果して此の内閣に對して如何なる態度を試みるべきやは、多くの有識者の注視する所で有つた、山本内閣は虎の門事變のために崩壞し、未だ貴族院と接觸せざる内に倒れたので、その試練に會しなかつたが、若し大正十三年の春の議會に於

て、山本內閣が貴族院に對したならば、或は研究會から現加藤內閣と同じ様な虐待を受けたかも知れぬ。

淸浦內閣は研究會內閣

山本內閣が虎の門事變の責任を負ふて倒れた時、いよ〳〵公然貴族院內閣が現はれた、首相に淸浦奎吾子を推戴したばかりで、研究會は四人の國務大臣を出した、即ち前田利定、鈴木喜三郎、勝田主計、小松謙次郎の四氏が入閣し、大木伯は閣外に在ても、此の內閣の總顧問を以て自認し、彼等は全く『研究會內閣』の積りで揚々として居た、それが衆議院の護憲三派の聯合を促進し、忽ちにして政友會の分裂となり、政界の大變化を惹起して、議會解散、三派の勝利、內閣更迭、僅かの歲月の間に、目の廻はる程、忙がしい芝居を續出せしめた。

第五十議會

研究會は昨年の臨時議會に於て、現內閣に反對すべき考慮を持つて居た、然かし何分にも內閣が臨時議會へ提出したる豫算案その他は、多く淸浦內閣の編成したる案であつたから、反對すべき口實がなかつた、依て第五十回議會に於て、加藤內閣を苦しめ、之を倒壞せんことは彼等の期した所で、十分に準備をして待つて居た

彼等は先づ豫算案に於て、政府を叩き附けた、鐵道問題で仙石鐵相の面皮を剝ぎ、教育問題で岡田文相を苦しめた、岡田文相は政黨員でもなく、現に貴族院に一席を有する人だから、彼れは貴族院を緩和する人かと思ふてゐたら、豈圖らんや、研究會員の眼には、彼れが恰も叛逆者の如くに映じて居たと見えて、最も甚しく叩かれた、彼れの所管から九十七萬圓の削除をされた爲めに、豫算は衆議員に廻附さるゝに至つた、その費額が百萬圓に足らないのと、それが政黨に關係のない岡田文相の所管で有るのと、それからこの豫算案で戰ふて居ると、外の大問題を逸する恐れも有るので、衆議院はその儘同意して、豫算案は成立したが、貴族院令の改正と普選案では、彼等の力の及ぶ限り、政府を苦しめた。

連記排斥と委任投票禁止

今やこの貴族院の大勢力たる研究會を打ち碎くべき方策如何は、種々の方面に於て研究されて居る、第一は互選規則を改正し、その連記制を廢止して、單記制となすことだ、これは公正會の男爵議員が、大に苦しむ所で、伯爵や子爵は餘り苦しまないと云つて居るが、それは彼等の宣傳に過ぎない、苦しまない

者も有るかも知れぬが、大に苦しむ者も有る、とに角現行制の如く、連記で黨與ばかり選出せしむるものは良くない、第二は委任投票を禁止することだ、現行の如く遠隔の地に在る有權者から、委任狀を集めて、ラクに當選する方法は良くない、必ず自分で投票せしむることに改めたい、此の二個の改正を決行したる後、政府が來る七月の選擧に臨んで、研究會の數[illegible]を減少すべき方法を廻らしたなら、相當にその目的を達するで有らうと思ふ

研究會の幹部

堀田正養子は種々の非難も有つたが、研究會の一人物であつた、三島彌太郎子は薩派の七人組の一人で有つた、七人組とは財部彪、伊集院彦吉、山之內一次、床次竹二郎、押川則吉、松方幸次郎諸氏と三島子で、黒田、西郷兩元老の沒落後、薩派の勢力が、とかく長州の伊藤、山縣、井上諸老に壓迫されるのを憤り、大に提携して頽勢を挽回せんと誓ふた連中で有る、僕は三島子の將來に付ては、頗る屬目して居たが、大正八年の春、僕が巴里に居た頃、訃電がその令息の所へ來た、若しもこの三島子が健在で有つたなら、今の研究會の幹部に、頭を上げさせないで有らうし、又研究會を打ち碎く方から云へば、困難で有るかも知れぬが、現在の研究會幹部は、必ずしも偉大なる人物ばかりではない樣だ。

青木信光子は溫厚な華族らしい人である、そんなに意地の惡るいことを企畫するとは思はれない、水野直子は舊領結城の城內に、怪事が有ると云つて、騷がれた爲めに、一時は狂人の如くに思はれた程の人である、僕等は水野子が大政治家で有るとは受取れない、前田利定子は始めて國務大臣となられた時、先づ鄕里に歸られて、舊領の舊臣からの祝賀を受け、氏神へ奉告されたと云ふ位だ、世間では平民以上に、拔け目がなくて、惡事を企畫する智慧が秀れて居ると云ふ者も有るが、僕は前田子をそんなに惡るい人とは思はぬ、やはり大名らしい所が有つて、海千山千の政黨の幹部が、恐れる程の人とは思はぬ。

そこで研究會を見渡した所、先づ大木伯と渡邊千冬子は傑出したる人物で有る、大木伯は、先代が蓄積したる巨萬の財產を蕩盡した所で、器宇廣大の人望を博收した、それに交つて見ると、ドコやら大人物の樣な性格が有る、時々大木內閣の噂が起ると、一度はやらせて見たい樣な氣がする、渡邊子は實父は前宮相渡邊千秋子で、養父は前藏相無邊俠禪渡邊國武子で、決して尋常の貴公子ではない、學問も有り、識見も有り、經綸も有り、手腕も有る、補缺選擧に當選して、研究會に入るや、忽

幹部の一人となり、今回も普選委員長として、大分その能力を發揮したが、然かし大木伯にしても、渡邊子にしても性格は上品で有る、政府がその諒解を求むるに道を以てしたならば、決して意地の悪るいことをする人々ではない

對研究會策

研究會の大多數を打ち碎くには、先づ會内の男爵議員を引き離すべしと論ずる者が有る、それも實現すべき方略が有る樣だ、これが第一策で有る、次には會内の勅選を無勢力たらしむる方策の必要を說く者が有る、鈴木喜三郎、勝田主計、市來乙彥、荒井賢太郎諸氏が、種々の指導をすると、大多數が彼等に從て行動する樣になるから、この人々の會内に於ける勢力を無くすることが必要だとの說も有る、これが第二策だ、然かし此等の四君の如きは、何れも國務大臣になつた人々で、その個人の勢力が、多數を吸引する力が有るから、此の方策が行はれるや否や分らない、第三策として會内の伯爵を獨立せしむべしと云ふのだ、これも大木伯等が居る間は六ケしいで有らう。

要するに研究會の橫暴は、現内閣は勿論、貴族院の他の各派の持て餘して居る所で、之を分裂すべき方略は、種々の方面に於て議せられて居るけれど、昨年政友會が分裂したるが如く、これが分裂すべき機運に達して居るや否や分らない、唯來る七月の選擧に於て、成るべく有爵議員中の研究會員を排斥し、それに地方の多額納稅議員中へ、民衆のために氣を吐く所の荒武者を加味して、以て貴族院の空氣を一新するの外は有るまい。

甘やかされ過ぎた研究會

文學博士　三宅雪嶺

帝國憲法が欽定であつて、起草が明かになつて居るのは、欽定が如何はしく感ぜられると同時に、起草當時の事情を知り得る便益がある。教育勅語の起草は知るものが知るとも、世間一般に知る所ないが、憲法は紀念館を保存し、伊藤公を初め、關

係者が歴歴と知られて居る。固より聖斷を仰いだものの、何の事情に於てしたかを察するに難くない。伊藤が如何に聰明とて、後に意見の變じたのを以ても聰明に限りあるを知るに足る。起草に苦心した頃、自由黨が既に變遷しながら、一院論だの、主權在民說だのを唱へ、福島事件とか、加波山事件とか、過激な行動と知られたのがある。實は噂ほどの事でなく、探偵が關係した事あるにしても、要路者が心配しただけの事があり、保安條令を執行したりした。其の間に起草の進行した憲法は、條文其者こそ愼重審議、國民の遵奉すべきものなれ、運用を考ふるに至り、眼前の勢に動かされた所がいろいろある。其の形が「憲法義解」に現はれて居る。如何にして衆議院の横暴を防ぐべきかに苦心し、兩院對等にて、貴族院で之れを食ひ止めやうとし、寧ろ難攻不落の形を具へしめた。何でも上から定め、高飛車に強制しようとする所がある。一度び民衆の侮を受けては、結果の頗る恐るべきものあるとした。貴族院を確乎不拔のものにして置けば、衆議院で有象無象が暴れたとて、始末が着かうとした。自ら議長となつて之を指導するにも努めた。

然し勢は必ずしも伊藤の豫想した如く進行せず、政黨が統率次第で相應に整備し、政黨内閣も強ち空想でないと分つた。山縣公が之を危んでも、伊藤公は十分に希望があるとし、隈板二伯に大命下り、憲政黨内閣を組織するに斡旋し、其の分裂後、自ら政友會を組織するに盡力した。其處でも事の志と違つた所あるにせよ、憲法制定當時といくらか、見解が違ひ、重きを政黨に置くに傾き、貴族院を一方に偏せしむるの弊害を歎じ、貴族院に就て失敗した事を明言する暇はなかつた。一度び驕放した貴族院風は、後に改めようとして改め難く、伊藤の意に背いて、到るべき所に到らうとする。貴族院では伊藤より山縣がよいとし、實は或る一派が山縣を擔いで多數を制し、延いては衆議院の向ふを張らうとして居る。伊藤公は超然内閣說を捨て、政黨發達の必要を認めたけれど、尚ほ政黨といふを好まず、之を會と稱するの適當なるを覺え、自ら組織する所を政友會と命名した。それが先例となり桂公が新政黨を組織する時同じく會名をつけて同志會とした。元老の周圍には政黨に反感を抱き、黨では困るとする事情がある。支那でも朋黨論があり、黨人といへばよい意味に解せない。それで重要なる政黨が、名稱を會に變じ、表面上政黨と違ふかにも解せらる。

貴族院では初めから政黨に關係すべきものでないとし、社交團體を造り、概ね何會と稱し、是を是とし、非を非とすべきを明言しながら、賛否を決する場合、政黨を選ぶ事なく、時機に政綱を發表するが如き事なく、臨時に決定するといふ事になつ

て居る。中でも研究會が横力に近づき、多數を糾合し、院内の運命を制するを期し、又屢々之を制して居る。政黨内閣が成立する毎に、研究會と妥協するの慣しがあり、研究會が反對せば内閣が立地に立往生すると見え、愈よ力を恃み、貴族院内閣と衆議院内閣と交替すべしと考へるのがある。高橋首相の下に政友會が瓦解してより、政黨恃むに足らず、貴族院内閣を組織すべしとし、清浦内閣を造るに至つた。清浦子は違憲といふが如きに考へ及ばず、從來の慣例に隨ひ、研究會の煽てに乘り、福相職を棒に振つたほどであつて、可哀相とすべきであるが、老練なる人が可哀相な立場に陷るを察しなかつたまでに貴族院が勢力を逞しくし來り、早く言へば研究會が增長して自ら其の非を知らなくなつたのである。研究會幹部以の眼には、政黨は何うでもよく、頗る與し易いと見えた。政友會と云ひ、憲政會と云ひ、何れも會と稱する事、政黨でやり切れず貴族院の眞似して居ると見縊るに及んだ。一概に其の人を責むべきでなく、境遇に慣れ、いつしか他から增長したと思はれるのであるにせよ、增長したとせば隨分增長したのであつて、三派協調して、貴族院改革案を持ち出したのは、他に何の事情あらうとも、貴族院の增長が招いたものとせねばならぬ

改革案は頗逸し、尚ほ貴族院の力あるを示すも、最早や前ほど力を恃み難く、貴族院内閣を造らうとするならば、これこそ大騒ぎになるべきを覺悟するを要する

考へて見れば、貴族院は甘やかされ過ぎて來た。其の運命を制する研究會が仕度い放題をするやうに甘やかされた。研究會に相應の人物があり、煮ても燒いても食へぬのが居つても、つまり人並みの弱點があり、調子に乘つて乘り過ぎるを免かれぬ。若し貴族院に解散なく、衆議院に對して難攻不落の位置を占め、矢でも鐵砲でも持つて來いと言ひ得るを知り、其處で驕りに力を濫用すべきでなく、衆議院の多數が無理を働くを責め、敢て利權を貪らなんだなら、衆議院が亂雜に流れて、信用を失ふに反比例し、貴族院が國家の柱石であるかのやうに考へられ、貴族院改革は必要と認められなかつたらう。衆議院の多數の横暴を責めるどころか、之れと結托して利權の分け取りするに及んで、何とも話にならなくなつた。伊藤公は斯く成り果てると知つたか何うか。或は議員の内情を察し、隨分淺間しいのがあると知つたらうが、衆議院の有象無象と伍し行けなく、妥協の衝に當つ品振るだけ根性の野卑なるを疑ひ得ぬでない。た者は、下卑切に呆れて物が言へぬと譲したのがある。之を怪しむのが間違つて居るのであつて、始めから知れ切つた事であり、貴族院に立派な人が澤山居りやうがないでないかと云ふが

さう云へば云へぬでない。それならば上品か下品か、或る面を被つて、人知れず陰謀を巡らすよりも、公然政黨に加はる者は加はり、加はらぬ者は加はらぬ事にしたならば何うか。

貴族院にも「憲法義解」の文字通りに心得て居るのがある。別段に利權を求めず、是を是とし、非を非とし、國政に貢獻しようと努めて居る。小さな會にも種々の人物が居り、一様に言へぬけれど、事情の已むを得ぬ所もあらう、理義を重んじて利權を貪らうとせず、貪ぼつても言ふほどの事はない。研究會が多數を糾合したのは、同氣相求むと言はば云へ、多數を以て貴族院の運命を制し、それで利權を得やうとするところあると稱する者に對し、能く反駁するを得るか。反駁しても、能く事實を打消す事が出來るか。社交團體を造るのはよい。いろいろ話する便利があらう。多數團結の力を借るに到り、政黨より主義政綱を除いた物と同じく、公黨たるを避け私黨になつたのに外ならない。

何故に研究會は多數を糾合するか。他の小數派と同じく、幾個の小數派に別れては何うか。政黨の心得になるならば、貴族院に閉ぢ籠るべきでなく、廣く民衆の選出する衆議院と共にすべきである。團體を造つて衆議院に對抗するは、「憲法義解」を造つた者が考へなかつた所に属する。考へたかも知れぬが、文字の上に表はれて居らぬ。解散なき貴族院に特權を占め、それで衆議院に對抗しようとするは、今尚ほ出來得るとし、次第に出來なくなるに定まつて居る。

普選が實施され、選擧人が四倍するに伴ひ、特權階級がいよいよ權衡を失ひ、片隅に雌伏するを餘儀なくせられねばならぬ。民衆の我儘勝手を防がねばならぬとて、肘を張つて力氣むのは勇とすべきか、沒分曉漢(わからずや)とすべきか。それで防ぎ得れば、暫く其の儘にして置くもよく、一時防ぎ止めて、畢竟何の効能あるか。何處でも憲政の歴史に上下兩院の衝突があり、上院の初め強く頑張り、漸く屈服するのを見る。穩健著實の英國でも其の傾向が明かになつて居る。我が貴族院議員中之を知る者が少くなけれど、多數が特權的習慣に養はれ、勢の向ふべき所を見る事が出來ない。捨てて置いても流れるものは流れるけれども、餘計な事して人を騒がすのは、誰れの利益にもならない。研究會員中にも自ら悟つたのがあらうが、多數が集まれば、一種の群集心理で、氣が強くなり、國家の爲めに千萬人と雖も我れ往かんと豪語したりする。

百年後より顧みて、貴族院が何の状態になるかを想像する氣がないか。兩院對立して以來、政黨が貴族院に氣兼ねし、黨名をさへ會と變じたが、清浦内閣を絶頂とし、政黨の力が力を增

すと見える。清浦内閣と關係ついた政友會分離組が政友本黨と稱し、黨名を恢復し、第二黨として立つ所、偶然ながら政黨の勢を增すを暗示するでないか。

貴族院議員が利權を求めるならば、政黨に加はるべきであり、それを好まぬならば、及ばぬながらも獨立の位置に立ち、侃々諤々、是を是とし、非を非とすべきである。研究會が政黨でなくて多數を要し、或る政黨と妥協して利權を得やうとするは、貴族院の面目を損ね、特權階級をして民衆の怨の的とならしむるものである。今に於いて深く悟り、大いに改める所あらば、獨り研究會員の幸のみでない。

貴族院將來の運命

安部磯雄

今になつて見れば我國に憲法が生れた當時、貴族院が設けられたことは日本のために大なる不幸であつた。維新の際に貴族制度が全廢されて四民は平等の上に立つたが、當時の精神を持つて今日まで進んで來たならば政治上にも、社會上にも如何なる好い結果を齎したか知れぬ。少くとも現在の社會問題なども今日程に激しいものではなかつたであらう。**貴族制度が存在し**て居たゝめに我國の政治は無駄な方面に精力を注がなければならなかつた。譬えば政治の主力は官僚打破とか、藩閥打破といふ方面に費され勝ちであつた。之れを要するに我國はデモクラシイの精神が徹底して居なかつたゝめに政治的にも、社會的にも大きな損をして來た。

伊藤博文が外國の模倣をして我國に貴族院の制度を設けたことが今日大なる弊害となつてゐるが、其制度を作つた當時の伊藤の精神は決して悪くはなかつた。**國家を組織する以上人民を代表する衆議院が存在しなければならないが、衆議院は必しも民意を代表して正しい途を歩むものではない。**輿論は必しも正當ではない。此場合衆議院の歩む途を正しきに導く矯正機關が必要であるが、此意味に於けるコレクチブ、オーガンとしての

貴族院の制度が設けられたことは其趣意に於て是認され得る。若し伊藤の考へたやうに貴族院が矯正機關としての職責を果すことが出來るならば、單にそれ丈けで、さういふ職務もあつていゝと考へられる。然らば貴族院が矯正機關としての作用を働く場合には、冷靜なる頭と公平なる判斷に依つて其職責を盡さなければならぬ筈である。或意味に於て貴族院は衆議院の監督者であり、後見人でもあるが、其職責を十分に果して居るならば、我々は強ひて貴族院に反對する者ではない。貴族院の組織に就いても伊藤は隨分考慮を致したであらうが、貴族階級でも純粹の貴族、即ち公卿大名の如き傳統的の貴族が果して能く矯正機關としての職責を全うし得るかどうか甚だ疑問でなければならなかつた。正直に云つて大名公卿の中にさう卓越した人物が居るとは思はれない。少くとも大名華族や公卿華族は其人格は第二としても、見識に缺けて居る點に於て到底衆議院の後見人たることを望むことが出來ない。そこで伊藤は勅選議員といふものを考へ出したが、それは社會的に功勞のある者や、學者、政治家の中から相當の人物を選んで勅選する制度を設けることであつた。之れは確かに大名公卿華族の缺點を補ふために、貴族院に異つた分子を入れやうとしたものであつた。併し此勅選議員なる者が果して伊藤の考へたやうな働きを爲し得たかといふことも亦疑問である。大體に於て勅選議員は、其經歴から見ても、見識から云つても大名華族などと比較して優秀な人物が多い事は事實である。乍併人間の心理は境遇の如何に依つて變化するものであるが故に、貴族院といふ境遇は、其處に入つて行く勅選議員をして彼等も亦特權階級の一人たらしめる。以前には年も若く、進歩的な思想の持主と云はれ、革新家と呼ばれて居た者も、一度勅選議員となつて貴族院に籍を置くことになると、前とは打つて變つて保守的な人物となつて了ふことは珍らしくない。だから勅選議員も亦矯正機關の一員として其職責を十分に果し得るかどうかといふことが甚だ危ぶまれる。論より證據で、國會開設以來の貴族院の態度は、當初の豫期に反して、矯正機關としての作用を十分に働き得ずに、多くの場合、常に衆議院のやる事に反對して、寧ろ妨害機關として存在してゐるかの如き觀がある。貴族院制度の立案者である伊藤自らも亦貴族院のために悩まされて來た。恐らくは彼も後に彼自らの立案を後悔したに相違ない。伊藤以後の歴代の内閣の重要たる仕事は貴族院の操縱であつた。政治家は、政治其物のために眞剣なる努力をするといふよりは、如何にせば貴族院を手馴づけて自分達の仕事を無事に爲し遂げ得るかを先づ第一に考へなければならなかつた。

貴族院といふ制度は不思議なる制度である。權利と義務は常に並行しなければならないものであつて、權利のある處には必ず義務が生ずる。然るに貴族院は權利を持つて居るが責任がない。衆議院は權利を持つと同時に責任を負はされて居る。されば責任を果し得ない時には解散をするといふ一の懲罰の形式があるのである。貴族院には解散がない故に、貴族院を反省せしめる懲罰の方法がない。世に始末の惡いものは權利のみを持つて居て其責任を果さないものであるが、貴族院の態度は恰も金持や、華族の我儘息子の如く、單に我儘を振舞ふことに依つて三太夫共を惱まして居るのと同一である。貴族院は前に云つた如く、當然、後見人、監督者の位置に在つて、一段高い所に居るべき筈であるが、自ら衆議院と對立して爭を求め現在に於ては上下兩院對立の形勢となつて居る。一概に貴族院といふが、それが黨化して來たことは、云ふまでもなく研究會に大なる責任がある。元來貴族院に黨派があるといふことが甚だ不都合である。衆議院には政黨があつて、それに依つて政治上の問題が議せられるのであるが、貴族院は本來それに對して監督者の位置にあるべき筈のものが、自ら政黨を組織するのは不合理である。常に冷靜なる立場から公平なる判斷を下さねばならぬ監督者の地位に在る貴族院が、其中に黨派を作つて爭ふことは、それ丈けで既に監督者の資格を失つたものである。研究會の從來の態度は言語道斷である。其處には監督者としての、矯正機關としての責任觀念を毫も認めることが出來ない。其爲す所は只其時の政府に對して難題を持かけ、衆議院を困まらせること丈けである。茲に於て國民の反感は研究會に對して集るのは當然である。我々の眼に映ずる研究會は一の野心家の集團に過ぎない。彼等は單に權力を貪る者であるばかりでなく、利權をも漁る者であるかのやうに見られて居る。北海道に土地を獲得したる者があるといふことは、單にそれが風說であるとしても、さういふことが噂に上るのは遺憾である。唯だ明白なる一事は政權に對する彼等の野心である。昨年清浦を擔いで貴族院內閣を組織したことは猶國民の記憶に新なる處である。衆議院の監督をすべき後見人である貴族院が、後見人たるの職を忘れて、自ら內閣を組織するに至つたことは既に沙汰の限りであるが、斯くの如き事實を以て見ても、貴族院は全く矯正機關としての本來の存在の意義を沒却するものであることの非難を免れることは出來ない。研究會に對する反感は、今日では機會さへあれば此團體に對して何等かの制裁を加へねばならぬといふことが輿論となつてゐるが、衆議院の政黨の中にも研究會の橫暴に憤慨してこれを膺懲すべしと唱へる者がある位であつて、誰れしもそ

れに對して同感を惜む者ではない。乍然現在の制度の下に於ては、研究會を膺懲するといふも、單にそれに對して勸告することに依つて其解散を迫るより他に途はないのであつて、而も暴力に依つてこれをどうするといふことも出來ないのであるから、研究會が聞かねば止むを得ないといふことに止まり、今日では彼等を反省せしめる適當な方法はない。止むを得ずんば議會を解散するといふ一途があるが、一度位の解散に依つて研究會の連中が反省するかどうかは疑問である。若し議會を解散することが有効なる方法であるならば、現内閣は普選案が貴族院に於て修正された時に既に斷乎として解散すべきであつた。それが出來なかつたのは現内閣が無力であるにも依るが、それは必しも憲政會が弱いと云ふ理由のためのみではない。政友會にしても同樣である。假りに一度位の解散ならばやつて出來ないことはないが、二度、三度と解散を繰返すことに依つて研究會に反省せしめる態度をとることは現在の政黨に對して望むことは出來ない。絶對多數を擁する護憲三派の强力を以てしてそれは容易であるらしく見えて、實はこれが不可能であるのは、現在の政黨に節操のないといふこと、換言すれば立憲政治に對して政黨が眞實でないといふことが、反つて研究會に對して裏から握手を求め、内通を計る者を生じて、あわよくば研究會と提携して内閣を組織したい野心を持つに至らしめるは尚其害大なる原因となつて居るのである。之れは獨り政友本黨のことのみではない。護憲三派に對しても同樣の懸念があるのである。屢々解散を繰返して居る中に、裏切者が生じて研究會と結ぶに至る懼れがあるならば、解散は政府の思ひ切つて爲し得る處ではない。斯くの如く考へれば、結局我々は研究會の態度に憤慨するのみで、而も之れを膺懲する方法を見出すことが出來ないのであるが、茲に於て問題は更に政黨の現狀に立ちかへつて觀察しなければならぬ。若し政黨にして强力であるならば研究會も恐るるに足らないのであつて、之れを一擧に粉碎することも敢て難しとしないのである。併し將來の政黨にはそれを望むことが出來るかも知れないが、現在の既成政黨はさういふ力はない。だから貴族院改革をやつてもろくな改革は出來ないのであつて、それをするには普選後に强力なる政黨がなければならないのであるが、今後に賭けられ得る唯一の希望は普選後に生ずる政黨である。其時には多數の民衆を根柢として成立する政黨は今日の如く研究會の横暴を許しては置くまい。假りに將來日本に於てプロレタリアの政黨が生れ、それが次第に議會に於て勢力を持つやうになつた曉には、貴族院改革の如きは極めて容易なる問題となるであらう。其場合にプロレタリアの[illegible]

べき途は二つしかない。其一は日本の貴族院を英國のそれの如く改革することであつて、つまり貴族院は衆議院に對して、矯正、監督の機關として存在するのではなく、單に貴族院は衆議院の意志に從ふものであつて、時々衆議院に對して忠告を試みる位のことは出來るが、衆議院の議決を否決するが如き權力を持たせぬやうにすることである。一口に云へば貴族院を飾り物にして了ふことである。而も猶貴族院にしてそれに反抗するならば、プロレタリア政黨の執る第二の途は貴族院全廢の斷行といふことにならう。今日斯ういふことを云ふと或は突飛に聞えるために實行不可能と思はれるかも知れぬが、併し時代は間斷なく進歩して居るのである。今から二十年前に、松本君平氏などが主唱者となつて大に運動した結果普選案が衆議院を通過したことがあつた。其時の政黨は普選などは通過しないものと多寡を括つて自由問題としたゝめに意外にも通過したのであつたが、然るに貴族院に於ては忽ち否決されて了つた。其時貴族院の一員は豪語して斯う云つたのである。普選案は再び貴族院の門を入るを許さぬといふ高札を建てねばならぬと。當時の貴族院の大多數は今も絶對に普選案を通さぬといふ意氣込みを持つて居たのであるが、然るに事實は今日それを貴族院の門に通さねばならぬ時代となつたのである。此事を考へれば、日本の貴族院も亦當然二十年後には英國の貴族院の如くなるか、或は研究會の如き頑迷なる連中が猶些かも反省せず今日の狀態を押し通さうとするならば、遂には貴族院は全廢の運命に逢着することを保し難いであらう。それらの問題は一に懸かつて普選實施後の新政黨の力が何處まで發達するかに依つて決せらるゝ問題であると思ふ。

根本問題の華族議員數の削減

前山蓮山

貴族院と衆議院の多數黨との衝突――私は貴族院と衆議院との衝突とは言はぬ。貴族院と衆議院の多數黨との衝突と云ふのである。尤も一體としての(as a whole)衆議院は其の中の多數黨によりて代表されるわけで、貴族院と衆議院の多數黨との衝突は即ち貴族院と衆議院との衝突と言つてもよいのであるが、其れは少數黨が多數黨に眞に服從し、一體として他に對することであらねばならぬ。然るに今日まで、衆議院の貴族院に對する態度を見ると、少數黨は多數黨と共に一體として貴族院に對することなく、常に貴族院に泣き付く態度を取つて來たのである。

例へば第一次山本內閣が貴族院から潰された時には、時の反對黨たる同志會は双手を擧げて貴族院に贊成した。又た大隈內閣の時、反對黨たる政友會は貴族院と呼應して內閣を倒さうと努めた。西園寺內閣時代も、少數黨の態度は常に斯う云ふ調子だつた。故に貴族院と衆議院との衝突ではなくて、貴族院と衆議院の多數黨との衝突と言ふのである。

扨て此の貴族院と衆議院の多數黨との衝突の歷史を見ると、先づ第一回の衝突は明治三十一年憲政黨內閣の時、貴族院議員等が尾崎文相の共和演說なるものを攻擊した時である。尤も當時の衝突は院內の問題となる前に尾崎文相が辭職してケリが付いたが、當時自由黨は進步黨と聯立內閣を組織して居たにも拘はらず、貴族院議員や樞密顧問官に、文相攻擊を賴み廻はつたと云ふ有樣だつた。

第二回の衝突は第四次伊藤內閣即ち第一次政友會內閣の時で、貴族院が衆議院決定の豫算に反對し、伊藤首相は七重の膝を八重に折て、貴族院に哀訴歎願したが、何うしても貴族院の容るゝ所とならず、遂に詔勅降下で納まつた。而して第一回の衝突も第二回の衝突も、貴族院の中心となつたのは山縣系の官僚派だつた。

第三回の衝突は(主なるものだけを擧げる)第一次西園寺內閣の時、原內相の郡制廢止案に對して、貴族院が反對したことである。當時も反對の中心となつたのは官僚派であつて、少數黨たる憲政本黨は官僚派が反對することに內定したと云ふので、之に呼應するために、前議會では衆議院一致で郡制廢止案の建議案を可決して居たに拘はらず、俄かに該案に反對したものである。

第四回の衝突は第一次山本內閣の時の其れで、大隈內閣の時には、アワヤ衝突とならうとしたが、僅かに正面衝突だけは免れ得た。以上の衝突は凡て官僚派が中心となり、常に貴族院議員は彼

等に驅使されたに過ぎなかつたので、貴族院攻擊と言へば官僚派攻擊の意味だつた。貴族院と言へば官僚派と云ふのと殆んど同意味に思はれて居たのである。

二

併し是れは無論官僚派の數が多かつた結果ではなく彼等が華族議員を自由に驅使し得たからであつた。當時の華族議員の團體たる木曜會（男爵團）と研究會（子爵團）は官僚派を擁護することを貴族院の任務たるかの如く心得て居たのである。そこで原敬氏は華族を官僚から引き離さうと企て、郡制廢止案の爭ひ當時から華族に手をつけたが、豫想以上に手答へがあつたので、更に計畫を進めて木曜會の首領千家尊福男と研究會の首領堀田正養子を入閣せしめ、アワヤ官僚の踏臺は引拔かれさうになつた。

此の形勢を見た官僚派の驚愕狼狽一方ならず、早速華族議員引戾しの大運動、實に一生懸命の大運動をやつた結果、男爵團體は分裂し、研究會は首領の堀田を追ひ出して官僚派に誠忠を誓ひ、原氏の計畫は遂に煙と消へた。此の戰ひによりて、研究會の結束が固いのは、連記投票制の結果であると云ふことが發見されたので、爾來貴族院改革を唱ふる者は、先づ第一に互選規則の改正であらねばならぬと論ずるやうになつたのである。

實は正面の敵は官僚派であるわけだけれども、將を獲んとせば先づ其の馬を射よで、貴族院を攻擊する者は先づ研究會打破に鉾を向けたのである。馬こそ災難と言はなければならぬが、併し野に悠遊する馬なら格別、人を乘せて走り廻はり、行人を蹄にかける以上は、馬にも罪なしとは言はれぬのだ。

其れでも單に馬であつた頃はまだ可かつた。近來は其の馬が增長して人間の眞似をやり出したのである。原敬氏は華族切崩し失敗後、一切彼等に手をつけないことにして居たが、大正七年內閣を組織するに及び、再び手を入れ始めた。原氏は英國流の兩院縱斷を理想として居たのである。即ち二院制度を一院的に運用しようと云ふのだ。

スチユアート、ミルは衆議院と貴族院との關係を數と質との關係と考へ、貴族院の存在を必要したが、之を事實に驗せよ。衆議院と貴族院とが數と質との關係を示して居る國が何處にあらう。英國の前首相マクドナルドは、二院制度は理論に基礎を有するものではなく歷史と傳統の產物である。大戰後の新國でも大概二院制度を採用したが、此等も理論から割出したわけではなく、英佛などの先進國が皆な二院制であるから、先づ以て二院制が間違ひがなからうと云ふ、御多分主義に過ぎないのであると言つて居るが、私も其の通りだと承知して居る。

英國憲政の初期に於ては下院は上院の出店と言つた姿で、下院議員の大部分は、貴族の指名により選出された者や、貴族の子弟であつたが、貴族は演説討論が下手であつたに反し。下院には段々有爲の青壯年議員が增加した結果、貴族は下院に居る乾兒や子弟をして討論に當らしめるようになり、遂には貴族自身が上院をお留守にして下院を政治の中心たらさしめ、下院だけの勝敗で滿足するようになつたもので、千九百十一年の議會法改正まで二百年の間、上院は下院に殆んど反對しなかつたのである。千九百十一年の議會法は此の二百年の慣習法を成文法に改めたまでの話だ。

三

原氏は此の英國の例に倣つて、歷史的存在としての二院制を一院的に運用しやうと考へて居つたのである。即ち原氏は貴族院の有力者野心家を政黨に引入れることによりて、貴族院を有名無實にしやうと思つて居た。世間には桂、西園寺の交代のやうに、原氏が貴族院內閣と交代に內閣を組織しやうとでも考へて居たかのように誤解して居た者もあるようだが、決して然うではなく、貴族院議員を政黨に入れることによりて、貴族院を政爭の外に置かう。即ち政爭は衆議院限りに止めようと云ふ精神であつたと云ふことは私が直接原氏から聞いたことである。

原氏が生きて居れば大木伯などはモウ既に政友會に入つて居るだらう。其の他段々政黨に引込まれる者があつたであらう。所が華族の小才子輩は原氏の眞意を誤解し、貴族院は桂、西園寺時代の桂の代はりになり得るかのような期待を持つて居た者もあるらしかつた。其れは多少華族等の羽翼が延びた結果でもあつた。即ち近年段々と華族社會に有能な人物（華族としては が現はれ、久しき間、官僚の馬となつて居たことを馬鹿々々しいと考へ出した一方に、官僚派の人物は段々と凋落し、官僚派の最後の人物とも見るべき――實に取つて置きの人物だつた寺內伯が、內閣を組織した樣子を見ると全く原氏の支持を得てヤツト支持して居ると云ふ姿で、後藤新平子にしろ田健次郎男にしろ、思つた程の手腕はなく、原氏の一喝に會へば縮み上る位の程度で、山縣御大と雖も、原氏に對しては口出しができぬと云ふ有樣になつた。

そこで華族の新人物――と言つても高が知れて居るが――は官僚派中、誰れを援助しようにも援助し甲斐のある人物は居ないと云ふことを見拔いてしまつた。彼等の間には田健次郎に出來ることなら俺にも出來る。後藤新平に出來ることなら吾輩にも出來る。有松英義や岡田良平輩が大臣になる位なら、俺達が

なるのが早わかりだ。何時まで官僚輩の食ひ物になつて居られるものかと云ふ空氣がみなぎつて來た。

斯くて大正八年中、川健次郎男を首領分として居た男爵議員連が、先づ幸倶樂部から獨立して公正會を作り、次で研究會は伯爵團と合併して紀州德川侯を擔き出し、之を首相として原氏の支持の下に内閣を組織しようなどと云ふ野心を出した。淸浦内閣の出現は獨り研究會の增長ばかりではない。男爵團の公正會もまた同様であつて、要するに華族議員を中心とする内閣であつたのである。そこで今度は官僚派も衆議員の多數黨と一所になつて研究會を攻擊し出した。

華族議員を斯くまで增長さしたのは政友會も責任を負はねばならぬ。高橋内閣瓦解の際、彼等は研究會に泣き付いて後繼内閣を作つて貰つたのである。研究會内閣と云ふものは政友會が研究會に嘆願して作つて貰つたのだ。英國の貴族は選擧費を負擔し、政黨を指導し、而かも上院の權力は自ら之を使用しなかつたが、日本の貴族は民衆には寄り付かず、選擧は他國のことかのように傍觀し、懐手をして待合や料理屋に遊んで居ながら、大臣にだけはならうとする。利權を取つては三太夫に持ち出せぬ遊蕩費を支拂はうとする。即ち特權を利用して利益を納めやうとするのだ。實に不埒千萬なる國家の穀潰しである。

此の禍は加藤友三郎内閣から起つたのである。政友會は研究會が高橋總裁を無視して、淸浦内閣を計畫したとて怒り出したが、其れは政友會の自業自得である。自ら蔑つて人を之を蔑ると云ふものだ。

四

私は華族議員を存置しなければならぬと云ふ理由を發見し得ないのであるが、併し憲法を改正するのは容易なことでないのみならず、憲法は成るべく變更しないで、實際運用の方面を改革して行くのがよろしいと信ずるが故に、差し當り華族議員を貴族院全員の三分の一以下に減ずるがよいと考へて居る。憲政會の案が三分の一だと云ふことであつたから、私は大體該案を歡迎して居たのであつたが、政府案が意外にも二分の一となつて、たいで失望した次第である。

併し實際問題となると、三分の一案には貴族院が到底承認しないであらうから、先づ事勿れ主義で半數の程度に止めたとすれば、其れも餘儀ないことゝ諦めるとして、今度は更に他の方面から、華族議員の勢力を殺ぐ方法があるか何うか。

政友會は互選規則を改正して單記制にすべしと主張して居るが（田中男が總裁となつた結果、此の先何う變するか知らぬ

けれども）政府は制限連記制に改めるらしいと云ふ說もある。是れは清浦内閣が衆議院を小黨分立の狀態として之を操縱する目的を以て、大選擧區單記制を採用したのと同一精神であるが、僅か千戸足らずの狹い範圍内から互選される議員だ。有力な野心家があつて之を綜めようとすれば、第二の研究會、公正會が出現し得ないとは限らぬ。又た華族議員を幾個の小團體として、政府が之を操縱するとなれば、其の弊害は現在よりも甚だしくなるかも知れぬ。

元來、憲法制定當時の精神は、英國の貴族院の如く、華族全部に、議席を與ふるのを本旨とし、議場の都合上、伯子男だけは代表者を出すと云ふことになつたのであらう。即ち華族議員の互選は、選良と云ふ意味ではないから、抽籤でもよいわけのものである。實際に於て千戸足らずの華族の内から、議員としての有能力を選んで見た所で高が知れて居るではないか。選良と云ふ意味ならば、わざ〳〵千戸足らずの華族の範圍内から選ばなければならぬ道理はない。華族議員の議員たる所以は其の爵書にある。即ち特權階級と稱せらるゝ所以である。

故に互選規則を何う改革しようとも、國民から見れば何んでもないことであつて、馬鹿囃の代りに阿呆囃が出て來るからと云ふまでの話だ。私は全體としての華族、即ち華族階級に何等の期待も持つて居ないから、互選規則などは何うでもよい。唯だ定員を三分の一に減ずることが必要だと思ふのである。

五

單記制は華族社會に於ける各種の意見を貴族院に反映せしむると云ふことに就て長所がある。即ち意見を同ふする者が四五人あれば一人の代表者を貴族院に入れ得るのであるが、國民は夫れ程に華族等の意見を尊重しなければならぬ必要はない。又た勿論其の價値もないのだ。唯だ憲法の條章を尊重する意味に於て、全體としての華族の代表、即ち華族階級の代表を、貴族院全體の邪魔にならぬ範圍に於て、五十人なり八十人なりに議席を與へればよいのである。而して全體としての華族の代表としては連記法によるのが合理的である。

連記法は右の意味に於て合理的であるが、制限連記にする位ならば、何故今一歩進んで單記にしないのか。制限連記を初めて試みたのは英國であつて、千八百六十八年の總選擧に定員三名以上の選擧區に之を適用したが、其の時、バーミンガム自由黨の書記長ハリスの新案發明で、三人共自由黨で占領したことがある。

其の方法は自由黨の選擧人を三組に分ち、一組はAとBに、

一組はAとCに、一組はBとCに投票することにしたのであつた。例へば定員三人の選擧區に於て、甲黨は九人の選擧人を有し乙は五人の選擧人を有するとすれば、制限連記法の本旨は、此の五人の少數者にも一人の代表者を出さしむることに存するのであるが、若し甲黨がハリスの方法によつて、三人づつ三組に分れて投票したとすれば、甲黨の候補者ABCの三人は各六票を得、乙黨の候補者Dは五票となるわけで、即ち三人共多數黨たる甲黨に占領されるのである。故に若し現在の研究會幹部の勢力が子爵の七八部を占めて居るとすれば、制限連記法を行つても、依然研究會が子爵議員の全部を占領することが出來るのである。

斯ような次第で、互選規則の改正などは、枝葉末節に過ぎない。根本問題は何うしても華族議員の數を減ずることだ。併しながら其れが何うしても實行出來ないとあれば、單記投票制に改むるのも一の手段である。

單記投票制に改むれば、研究會や公正會の如き華族の既成團體は小さくなるかも知れぬが、其れには弊害も伴ふのであるから、結局英國流に兩院を縱斷し、貴族院の野心家を政黨に入れて、貴族院では政爭をやらぬことになれば、憲法を改正しなくとも憲政の運用は圓滿に行くわけであるが、政黨に入つて金を使ひ、國民を指導する如き面倒は見たくない。其れでも有識者振つて政治はやつて見たいと云ふ貴族院の現狀であるから始末に行かぬのである。

所が又た、兩院縱斷即ち歷史の産物たる二院制を一院的に運用することに反對する者も少からずある。即ちミル流に數的勢力たる衆議院を制肘する質的貴族院の存在を必要とする者もあるが、併し斯ような質的の貴族院議員に對して、實際政治を斷念せよと云ふのは無理であり、實際政治を斷念しないなら貴族院には入るなと云ふなら、質的と云ふことゝ矛盾するのだ。假りに立派な人物が實際政治を斷念して貴族院に入つたとしても、民衆から全然獨立して衆議院の誤りを正さうとする時に、其の誤りか否かは水かけ論であつて、政策の可否の標準が客觀的に存在して居ない限り、貴族院の修正が圓滿に國民に承認さるゝ筈がない。米國の大統領の如く四年間の任期を有する國では、米國上院の如きものも運用されるのであるが、總理大臣に任期なく、何時でも議會が總理大臣を辭職せしめ得る國に於て、貴族院の如き政府が解散を命じ得ない機會が、自由に政府案を修正し得るとしたならば、責任政治を行ふことは出來ないのである。

六

憲政會が研究會を憎み始めた最近の動機は、研究會が原內閣に反對しなかつた。即ち多數黨內閣に盲從したのは、貴族院の本分に背くと云ふのであつて、此の旨趣に於て彼等は貴族院內の官僚派と步調を一致したのである。然るに政友會が研究會を攻擊し始めたのは、研究會が多數黨を無視したと云ふのであつて、同じく研究會攻擊でも動機は正反對であつたのである。斯ようなことでは貴族院改革は出來ない。

先づ大所高所より、(一)衆議院を制肘する貴族院の存在を必要とするか否か、(二)必要とするなら其の組織如何、(三)必要としないたら憲法を改正するか、(四)憲法を改正しない範圍で貴族院の權限を縮小するには如何にすべきか(或は制度上或は實際運用上。)斯う云ふ風に順序を立てゝ研究すべきである。

(完)

喧嘩から裁判へ

杉森孝次郎

單にわが現在の衆議院とわが現在の貴族院とを比較して見る限りに於ては、制度に於ける明白なる多少の差別以外、人物、識見、政治の質の上に、一方を肯定するためには他方を否定しなくてはなら、といふほどの反對をも、對照をも、われらは、兩者の間に發見しえない。

わが現在の衆議院議員の多くの人の志は、多少無意識的ながらに、わが現在の貴族院議員の多くの人に、かれらのやうに、自分がなることを必要とする性質のものであるとさへ看做される。

衆議院、貴族院といふては、餘りに制度的に響く。本黨と貴院、本黨と研究會では、出發點としての對照的効果がなさすぎるから、政府及び政府黨と貴院、または、內閣、憲

政會、政友會、革新クラブと研究會、貴院とを、現實の代表的人物及び成員の人物と志行についてくらべて見る。さうする時に、なに人かその兩者の間に、つひに徹底的に相爭はざるべからざる、即ちそのいづれたりともの一方、例へば衆議院中の與黨及び政府からいふならばつひに他方を折伏せざるをえない、主義、理想の名をあたひする深い知識上の差別を發見するごとが出來やうぞ。

憲政會首及び内閣主長としての加藤氏の從來の言動に察しても、犬養氏の最近に於てさへもの言動、例へば氏の、新聞に傳へられた世襲議員制觀の如きに察しても、また政友會に至つては、それの最も最近の新黨首事件に察しても、要するにかれらは、研究會あたりと、單なる外的事情を多少異にするだけであつて、内的になんら特異の存在でないことはあきらかだ。

政治は社會經營としての實行だから、それであるべきだから、常に多少、時あつてか非常程度に、いはゆる妥協、心にもない順應を必要とすることはいふまでもない。しかし、現在の政府者や政府黨が貴院方面に對して、殊に勿論研究會方面に對して示し來たつたそれの如きは、眼高手低質のものであつたとは、畢竟するに見られない。

また加藤氏、犬養氏、及び政友會の場合について注意した前記のやうな現象 ―加藤氏の場合としては、氏がなほ在野であつた、しかし最近に屬する、當時の對露意見の如きも例外には屬しない ―が、通則的、原則的でなく、例外的、單たる事情的のものであつたならば、問題とするに足らないが、事實上、さうではなかつたと推想される。

比較的に年壯頭新の人々も、例へばかれらの長上者、統率者の言動や心志に對して、どれほどの批判を抱きながらかれらの幕下に精勤しこゐる者であるかは、すくなくとも多少疑問だ。多くはかれらが意識する功名のため、便利のために、苦もなく枉げうる程度の、淺い、はかない政治意志の持ちぬしなのではないか。人の本志は、いはゆる都合のためにさうたやすく曲折されうるものではない。さうされうる本志は、水準に於て、その都合よりも高いものでは、すくなくとも特にいふに足る程度に於ては、そもそもありえない。

例へば治安維持法にしても、あれを全部絕對に非認するわけでは決してないが、衆議院の、また政府の、あれの通ほしかた、また持ちだしかたは、かれらは決して根本的に、即ちかれら自身の利害からでなく、國家の本質從のために、研究會あたりを攻擊しうる柄でないことを、ただの一例ながら、示す。かれらが氣づいた點は、そして變ひた點は、研究會あたりの人々でも

さうしえただらうと想はれる點だ。研究會あたりによつては氣づかれなかつた、すくなくとも充分に憂ひともされなかつたにちがひないと想はれる點がそこにも多少あつたが、それは、かれらによつてもさうされえなかつた點だ。

どうも、いまの政府者や政府黨は、比較される時代と、ものの次第で、比較的に進んだ政治家、政黨だとはいへるが、現代日本の政治的必要の、すこし根本的な、大策的な、原則的な、深いところからいうと、貴院や、研究會あたりと、無識、無憂を無意識的に協力しつつ、意識的に競爭しつつあるものにすぎない觀がある。

事情や行きがかりに主としてもとづく限り、頑冥固陋も、進歩改新も、はたから見て、また公心から考へて、必ずしも單純に、底深く熱くなれるほどの價値別をば意味しない。

これは多少臆說的、象徵的、間接論理的にいふことだが、一體、いまの日本に於て、新華族制——勿論研究會は直接にその關係者ではない——の如きものを、今後の方針として、全然廢棄しないことなどは、いかにもなげかはしい事だと考へる。國家、社會にどんなに功勞があらうと、その當人を、男爵にしたり、その上のなに爵にしたりすることは、國家としてかれらの功勞に對する最も適當な方法では決してない。かれらとしても、甘んじて、或ひは求めてそれを受けることは、餘りに低い名譽心でもあれば、愛國心、愛社會心でもあない。役位は必要、したがつて役名も必要だが、單なる「榮爵」に至つては、百の弊があつて一の利がない。單なる名譽の如きは、各の功勞が、おのづからこれを見いだし、おのづからこれを産む。そして、最も自由なかたちに於て行はれるそれにまかせて置くことが、當人のためにも、國家、社會のためにも、最も賢明であるのだ。

いまのいはゆる研究會あたりは、有爵議員とか、子爵團とか呼ばれることもある通りに、すくなくとも境遇から見て、廣い意味の華族のなかの一現象だといふ關係をも持つてゐる。そして、いまの政府者や政黨者も、自分がなれさへしたら、例へば男爵にしても、子、伯爵にしても、わるいものではない位に考へうるらしい人々で、すくなくともその多くは、あるやうに察せられる。華族がいゝとか、わるいとか、自分がそれになりたいとか、なりたくないとかは、それ自身としては、國家から見て、至つて小さい問題だが、すくなくとも新華族制を制度として惡視しない心は、現代日本の政治家の心としては、それだけで不徹底の、もつと肝要な點を總括的に見限らしめるに足る一徴候あるものだと考へる。

概ね華族でない團體及び個人が、概ね華族である團體及び個人に對して、制度としての、すくなくとも新華族制が關する限りのそれとしての、華族を根本的に否定する道德的愛國心もなしに、當面の問題についてのみ抗爭するやうな心には、一見無關係のやうなその一點からしても、われらは、敵に對する味方を見いだした、深い尊敬と信賴を寄せることに困難するな。

かうはいふものの、實行は容易でない。われらは、いまの政府や、政黨や、或政治的團體及び個人が最近になした實行だけに對しても、深い感謝と讃仰とをば拂ふ。ただ、それはそれとして、心だけについていふならば、現代の日本の、或ひは現瞬間に於けるわが國の、比較的に最も進步的な政治的團體及び個人にむかつてさへも、それが一見進步的であらうと、一見保守的であらうとにかゝはらず、もつと深く、全く開智されたものであつてほしいと考へる。


マツダランプの
無線電話受信機サイモホンA2型
無線用真空管サイモトロン
一、サイモホンA－2型　金九拾圓
一、高聲器　金八拾五圓
一、Aバツテリー　金五圓四拾錢
一、Rバツテリー　金六圓五拾錢
一、受話器　金拾六圓
一、空中線(アンテナ)一式　金五圓七拾錢
一、サイモトロン
專賣特許
特許番號
一八九六一
二〇八九四
二六五三二
二七一八五
三三二〇一
二二二〇二
四五六四二
六一三六五
纖條　ヴォルト　アンペア
一九九 型式證明(第二三號) 檢波、增幅　三　〇、〇六　金拾圓
二〇〇 檢波　五　一　金七圓
二〇一 (第二二號) 檢波、增幅　五　一　金七圓
二〇一－A 檢波、增幅　五　〇、二五　金拾圓
此真空管サイモトロンはその受信機にも使へます。
神奈川縣川崎市
東京電氣株式會社
型式證明
〒
NO.9-2
サイモトロン

滋養強壯劑

坪井博士發見

活力素

學理と其効果

本劑は、人間の老衰疾病の原因たる人体細胞中プラスマの減損を補給し有害菌を殺す白血球を増加し其働きを旺盛ならしむる爲め身体諸機能に對し抵抗力を強めて疾病老衰を未然に防ぎ且つ病氣の進行を弱めて恢復の期を速めしむ。疲勞倦怠は直ちに挽回し、假令年老ゆるも老衰せず、皮膚頭髮の枯衰を止め、視力又減退せず、元氣旺盛に筋肉強健若返る等、疾病と老衰を根絶せしむる、人体の根本劑なり。

發見者の實驗

神經衰弱、不眠症、記憶力減退、腦力消耗、胃腸病、食慾不振、貧血、糖尿病、腎臟病、心臟病、脚氣、リウマチス、神經痛、産前産後の營養又は諸症、病後の營養補給、小兒の發育不全の營養老衰者の精力補給等

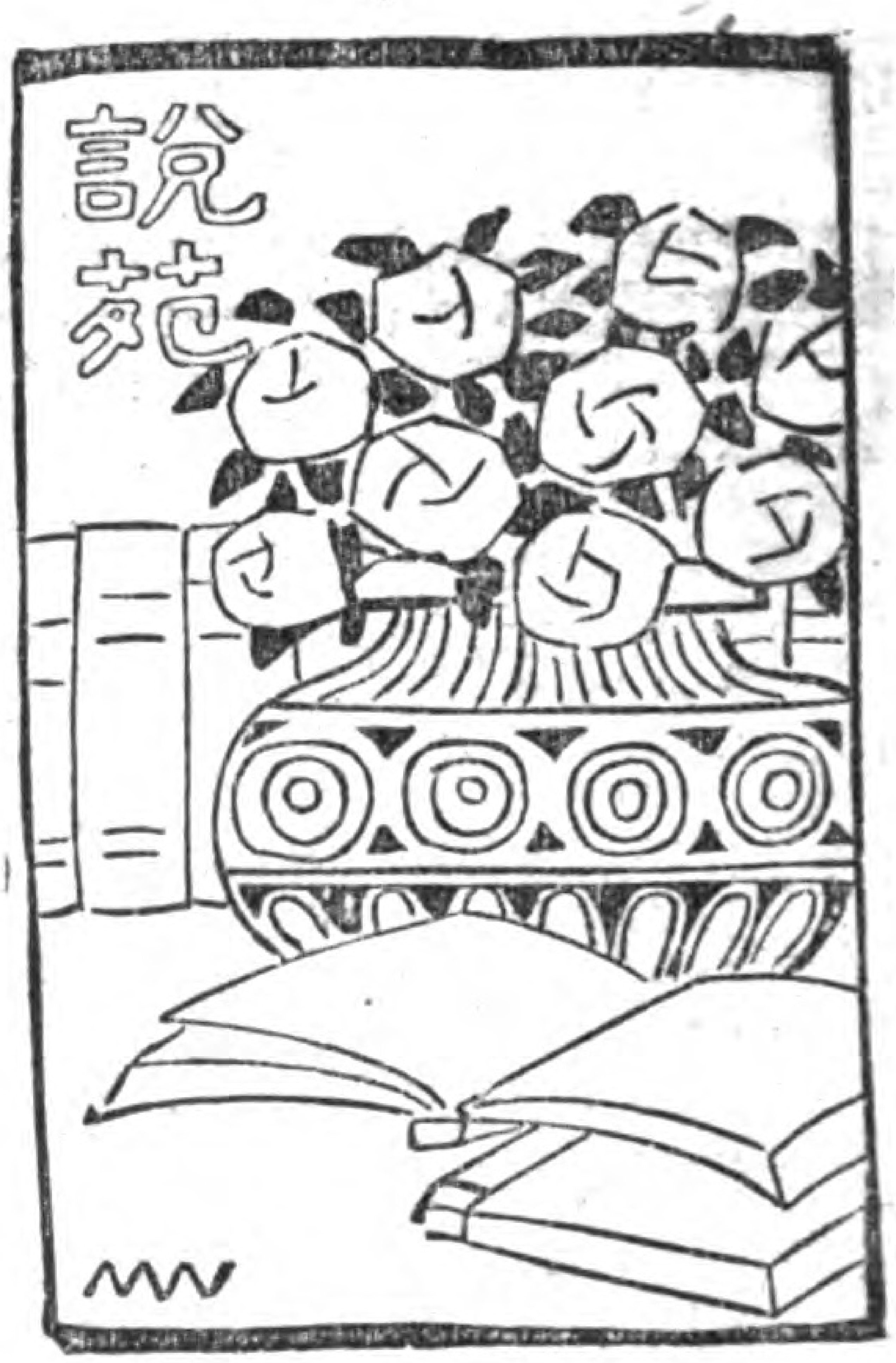


全國有名藥店にあり

説明書贈呈

三〇瓦（約一月分） 二圓 内地送料十二錢
二二五瓦入 十三圓 内地送料廿七錢
四五〇瓦 二十五圓 内地送料卅六錢

東京京橋五郎兵衛町一
活力商會
電話銀座五八一七番
振替東京二〇二八六



飛鳥と大原

岡田信一郎

秋の旅の話を春書くやうになつて仕舞つた。それでもあの時分の強い印象は、はつきりとまだ抜け切らずに居る。十一月十一日は昨日に引きかへて快晴だ、碧い空と、黄い森、大和の天地はうらゝかな秋光に浸つて、私達は蠢爾として其中にうごめいたのであつた。早朝奈良停車場に、宇治を經て京都に向はせらるゝ山階宮殿下を奉送して、私達は櫻井を經て王寺へ向ふ小さい汽車に乘つた。汽車は名だけでも床かしい多くの舊蹟を通る故、私達は車窓からの注意を怠る譯に行かない。中でも三輪の山は舊い傳說と美しい姿とを持つ神秘の山だ。山は柔かい圓い山腹となだらかに引いた山の裾とで美しい姿だ。全山を蔽ふ青黒い杉の木立は、周圍の黄紅に色づく秋の山からは、際立つて見える。此の美しい姿は後ろに、左右に、控える山々から切り離して、特殊な感を此の山に與へる。畝傍、香久、耳成の三山も、之と同じやうに附近の山々とは違つた、特殊の柔かい、大和繪に見るやうな山姿をして居る。私等の祖先達は、此等の山に神性を否人性を與へて考へた。峻嶮な山を物恐ろしく考へ、或は山神を祀つたりする心では無い、山其の物を崇め又愛した。三輪山は大神神社と稱されて、大神大物主命を祀り、今官幣大社で、社殿は山の西麓に建つが、拜殿だけで、全山を神體として本殿はない。其處に立つ鳥居は三輪鳥居と稱されて、大きい鳥居を中にして、兩脇に小さいのが附いた、獨特の形をして居る。此の鳥居を視、此の山に額づく事も、希望ではあつた

けれど、今日の深山すぎる、プログラムには、其れさへ出世せればならなかつた。私は先年參拜した時の記憶を、委さに妻に話した。

三輪の大神神社の近くに、緒環塚がある。傳説の緒環を再び繰り戻すと、糸の先端は、神武天皇の大后、姫蹈鞴五十鈴姫命の御母、活玉依姫と、三輪大神との神話に達する。古事記に記される。「活玉依毘賣其容姿端正かりき。於是神壯夫有りて、其形姿威儀時に比無きが夜半之時に倏忽來つ。故相感でて共婚供住之間に、幾時もあらねば其の美人妊身みぬ。爾に父母其の妊身める事を怪しみて其の女に「汝は自ら妊めり、夫無きに何由してか妊身める」と問へば、答へけらく、「麗美しき壯夫の其の姓名も知らぬが、夕毎に來て供住之間に、自然懷妊みぬ」といふ。是を以て、其の父母其の人を知らまく欲りて、其女に誨へつらくは、「赤土を床前に散し、閇蘇紡麻を針に貫きて、其の衣の襴に刺せ」とをしふ。故教へし如くして旦時に見れば、針著けたりし麻は戸の鉤穴より出でし狀を知りて、糸のまにまに尋ね行きしかば、美和山に至りて、神社に留まりにき。故其の神の子なりとは知りぬ。故其の麻の三勾遺れるに因りてなも、其地を美和とは謂ひける。」神壯夫は三輪の大神、大物主神である。此神話の緒環と三輪の名はやがて近松半二に借りられて、

妹背山婦人庭訓の道行に使はれる。苧環を追ふ求女、求女を慕ふお三輪と、紅白の小田巻の糸にもつれて、美しい舞臺面が現出する。私は小さい汚ない汽車の中で、今私が建てつゝある歌舞伎座の新しい舞臺で、花道から斷れた赤い小田巻をもつて、熱狂的に驅け出る福助のお三輪を想像した。

此傳説の緒環塚は活玉依姫の墳墓とも云傳へられる。活玉依姫には又別の神話が、同じ古事記に談られて居る。神武天皇、大后と爲む美人を求ぎたまふ時に、大久米命の曰さく、「此間に神の御子なりと謂す媛女有り。其を神の御子なりと謂す所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比賣、其容姿麗美かりければ、美和の大物主神見感でて、其の美人の爲大便れる時に、丹塗矢に化りて、其爲大便の溝流下より、其の美人の富登を突きたまひき、爾其の美人驚きて、立ち走り伊須須岐伎。乃て其の矢を將ち來て床の邊に置きしかば、忽ち麗しき壯夫に成りて、即ち其の美人に娶ひて生みませる御子、名は富登多多良伊須須岐比賣命、亦の名は比賣多多良伊須氣余理比賣と謂す。故是を以て神の御子とは謂すなり。」此れ姫蹈鞴五十鈴姫命である。歴史家は云ふ、元來大三輪けは出雲系の大和の豪族であつて、今此の姫が入内して、神武天皇の大后となられた事は、天孫系と出雲系との融合を示す、歴史上注意す可き事蹟であると。古い大和

の地方は至る所に斯うした傳說や、歷史の香い事蹟がひそんで居る。

汽車は櫻井で右折して西に曲る。此の邊一帶は古の磐余の地である。右の車窓には耳成山が、左には間もなく香具山が、畝傍山が、而して其の後には飛鳥。藤原の古京の地方が連る。畝傍驛の次は高田である。私達は此處で下車して、小さい二人乘の自動車を借して當麻に向ふ。小さいがた〳〵な自動車も田舍道には却つて都合がよい。廣からぬ街道をまつしぐらに進む事が出來る。中部大和の西を劃する葛城山脈の突つ端が、特殊の形を爲してに聳える所が二上山である。目差す當麻は其東麓になる。二上山は萬葉の歌人　懷風藻の詩人として有名な、大津皇子の墳墓がある。萬葉の歌が千數百年もへだてた、私達の心を强く牽く所以は、格高い古調にもよらう　豪宕な歌辭にもよるだらう。併し主としては其率直な心の叫びのためである。大津の皇子が死に引かるゝに臨んで、磐余池の堤上で、悲しむで詠まれた歌、「つぬさはふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隱りなむ」を誦すると、多感多恨の皇子の最後の悲痛が、直ちに私達の心を刺し通す。皇子の死を賜はれたのは朱鳥元年冬十月と云へば、恰度今頃の季節ででもある。「經もなく緯もさだめずをとめらが織れる黃葉に霜な降りそね」今私達の見る山々の黃葉を死に臨んだ皇子は同じく見そなはしたのであらう。皇子の死を聞いて伊勢の齋宮より馳せ登つた大伯皇女の「見まくほり吾がする君もまさなくに何しか來けむ馬疲るゝに」を讀むと跳躍して悲慨する萬葉の皇女の姿が彷彿する「うつそみの人なる吾れやあすよりは二上山を吾が兄と吾が見む」今私達の立つ此邊よりからも、皇女は二上山を望見して滂沱たる淚にくれられたのであらう。大和の山川は今に變らず昔もなだらかであつたのだらう。併し此の麗しい山川の懷に、私達の祖先の喜も悲も、にじみ込むで居るのである。想へば中將姫も此の爪先上りの路を踏んで、ひたすらに當麻の寺へ急がれたのであつたらう。其の當麻の寺の塔はもう目近に見える、私達は寺の眞つ直の道路に來て居る。

二上山の下に小さい麻呂古山がある。其の麓の小高い處に當麻寺は建つ。而して其双塔は猶一段小高い所にある故に、先づ遠くから參詣者の目を捉える。當麻寺の自然の懷に抱かれた麗はしい遠望は、此等の一の特徵である。大きい二上山を屛障として、小さい麻呂古山の懷に浮き出た堂塔は、自然と工作との麗はしい協調を見せて吳れる。秋には特に色彩が麗はしい。寺の門前は左右に立ち並ぶ人家で、時としては參詣人の多い事も思はせる。遠望の美しい此寺も、境內にはいると、亂雜な堂塔の配置で、却つて落付いた天平の古寺の感を殺がれて仕舞ふ。今

の參道は堂塔の配置からは其の腹部を中斷して、東から西に通ずる。東の樓門を入ると、左右に寺坊が立ち並んで、正面に床の高い本堂が見える。其の前に左右に金堂と講堂がある、しかし金堂は背を見せて居る。金堂の前面に立ち並ぶ五重塔などは、ほんの飾物のやうに片隅に立つ關係になる。地勢から見たら今の東を正面とするのは自然であるが、配置の古制からは側面が今の正面になつたのである。

二上山當麻寺は推古天皇の二十年に聖德太子の命によりて麻呂子皇子（太子の弟）の創設にかゝり、もとは二上山の西麓河内國交野郡山田郷に建てられ、萬法藏院と號した。其を麻呂子王の皇孫當麻の國見が白鳳二年今の所二上山の東麓に移遷したと云はれる。今の場所は又役の小角の宅跡とも傳へられて居る。中將姫で名高い當麻寺は、建築的には白鳳期と天平期とを繫ぐ此寺の双塔によつて著名である。

推古朝の七堂伽藍では、塔婆は金堂と同じ重要さを持つて、或は法隆寺に見るやうに相對して建ち、又は四天王寺の遺制に見るやうに相前後して建つた。併し其後に於ては塔は双塔として金堂の前に並び立つて、七堂伽藍均齊の威容を增した。藥師寺でも、東大寺でも、其遺制は明かであるが、双塔共に完備して今に傳はるものは、もつと新しい時代のものと雖全くない。唯此の當麻の双塔が東西に對峙して、日のあたりに此古制を見せて呉れる。又此塔は天平の初期和銅前後のものとして、斗拱や構架の制の發達の經路を示す貴重の材料である。且三重の其風姿は落付いた美しいものである。其古なる小高い位置から山麓の裾野を俯瞰して、景觀に畫のやうな趣を添えて居る。

此双塔は寺傳では白鳳年間に、當寺遷造のものと稱するが、建築家達は其手法樣式から判じて和銅前後のものと認めて居る。東西の塔は共に三間三重で大體相似して居るけれど、其建造の時期にも多少の前後があり、其意匠にも出來、不出來がある。東塔は總格好も細部も遙に優れて居ていつも代表的に論ぜられる。東塔は方三間弱、高七十六尺七寸、西塔はそれより僅に高い。深い軒の出と緩かに流れる屋根の勾配、長い九輪（此處では數は八輪しかない）等とで美しい姿が作り出される。斗組は藥師寺東塔等よりは一歩進んで三手先の制が殆ど完成された、而して軒に支輪の部分が加はつた。此の力強い組物で深く出た二重垂木の軒を支へて居る。多少不恰好にも見える割合に丈高い卷斗等も、斗組全體として此軒を受ける力強さには必要な形とも感心させられる。此等の細部から、手法の確りした感じが出て來るのかとも思はれる。軒の隅を受ける鬼斗の出來た事も、建築の技術の日に〳〵進んで行く有樣を想はせるものだ

ある。併し私達が最も刺激されるのは、總體の意匠で、下段初層は方三間、中層上層を通じて方二間で、上層に行くに從つて、狹く混雜して來る斗拱の煩瑣をさけて、のんびりした、雄大な氣分を與へて居る。此東塔と、下から上まで、各層共に方三間である西塔とを並べて見ると、其効果は一目瞭然である。此創造に急かしかつた時代定まつた型に墮らなかつた時代を見て、私達は鑑戒と爲なければならない。此の時代の工匠達は規矩の末や、前例や、型には捉はれなかつた。想ふまゝにぐんぐんと組立てたのである。工匠達に此意氣、此の用意、此の手腕あればこそ、天平盛期の壯大な建築が形成されたのである。花開く前にふくらな蕾の勢は強い。

今の本堂は、舊の千手堂で又曼荼羅堂とも稱される。云ふまでもなく有名な、中將姫の感得した、曼荼羅を安置したからである。而して、今では參詣するものは皆此の曼荼羅を拜して、金堂の本尊は、却つて顧みられない。從つて曼荼羅堂が本堂のやうになつて仕舞つた。此堂は、桁行七間、梁間六間、單層四注の建築で寺傳では白鳳の移建にかゝるものと云ふが、建築の手法樣式からは、鎌倉時代の初期のものと認められて居る。外部は高い床の廻り緣を周らし勾欄をつけて居る。内部は三間を外陣とし、殘りを内陣として、内陣には大きい須彌壇が設けられ、上に曼荼羅を納める大厨子がある。此處では外陣よりも此兩者が見ものである。須彌壇は黑漆で螺鈿の寶相花を嵌込んだ大規模のもので勾欄を設け、鍍金の金具を飾つて居る。光堂の須彌壇のやうに精巧壯麗なものではないが蓮華唐草を彫つた其金具にも、勾欄にも鎌倉時代の特徴を示して居る。壇の右側に「奉貝鏤了寛元元年云々」の銘がある。厨子は高一丈六尺四寸、間口一丈六尺で左右に、三面の大扉がついて、一面に開いて大曼荼羅を開扉する。所謂鎌倉塗で壯重古雅な趣がある。銘によつて見れば、仁治三年源賴朝の遺願に依つて將軍賴經の造營する所である。扉には金銀蓮華の鎌倉蒔繪が施されて、美術工藝の有數な作品でも、參考品でもある。

此中に掲げられるのが、觀經曼陀羅で、俗に中將姫蓮糸の曼荼羅と傳へられるものである。併し本物の藕糸曼荼羅は天平時代の作で、時代の磨滅損傷甚だしくて、今は殆んど形象髣髴も辨ぜられない、其織物の纖維の何だかも不分明ださうだが、勿論綴子でない事だけは確かだ。之は今寶庫に納められてあるとの事である。而して今此本堂の厨子の中に安置されてあるのは文龜曼荼羅と稱される絹本の彩畫で、繪所法橋興殿の筆で、文龜三年後柏原天皇が御斤の爲めに、御文勅語ありしと傳へられて居る。本歎の第三番目の模寫であると云ふ。第一の模寫は旅

失し、第四は貞享年間に模寫されて今は寶庫に納められて居ると云ふ。此蔓茶羅の傳說は名高いが、今の蔓茶羅はあまり興味を牽くものではない。阿彌陀如來を中心にして、彌陀淨土を現出した彩畫で、佛畫としてもつまらないものである。

私の知る中將姬は傳說と稗史の中の人である。一番よく耳にするのは、淨瑠璃の雲雀山古跡之松の、中將姬雪責の段である。美聲を以て聞こえた攝津大椽は、之を得意の語物にした。

「あらいたはしの中將姬、七日七夜は泣明し、明る八日の朝の雪、我を責苦の種と成、身もひへかへゐ其上に、素足に雪の氷路、劍を踏むが如くにて、よどめば行けと打擲く、梢の雪が一つもり、背に打かゝればどふとふし、起ればたゝく割竹に、手足もしびれ身もちぢみ、命も息もたへ〳〵に」と痛しいふつくりした聲で、攝津が語る中將姬は、苦腦みながらも如何にも高家の姬君にふさはしかつた。冴えた透き徹る美聲の南部大夫は、肩をすぼめ、首をのばして姬の哀怨なる苦志を訴えた。美しい聲の呂昇は、雪に轉ぶ美しい姬の繪圖を展げて見せた。併し幾度も聞いた淨瑠璃では遂に一度も、求道に熱心な、信仰深い中將姬は髣髴しなかつた。而して私達の想起する中將姬は、繼母にいじめられた、いたいけな、麗はしい處女である。朧氣に知るのは容姿も、才能も、格段に勝れた貴族の姬君が、此當麻寺に入つて、信仰の功德によつて、觀世音の援助で蓮糸で曼茶羅を織り、現在阿彌陀佛を拜したと云ふ事である。而してまことらしく知るのは、たゞ聖武、孝謙、淳仁の諸朝に歷仕した、藤原氏の長者、豐成公の息女と云ふだけである。豐成は藤原不比等の嫡孫で、所謂南家の總領であつた。孝謙天皇の朝には、橘諸兄の左大臣に對して、豐成は右大臣になつた。性質溫厚篤實であつたが其弟のために大宰員外帥に貶された。彼の弟は孝謙天皇の寵を得て、淳仁天皇の朝には、太保、太師の榮位に進んで、惠美押勝の姓名まで賜はつた仲麻呂である。其最後を完うしなかつた事も人の知る處である。豐成は其父武智麻呂の冥福を祈る爲、大和の榮山寺に八角の圓堂を建立したが、之は今に遺つて、其の內部の天井や柱の美しい彩色は、天平の裝飾の一標本となつて居る。併し肝心の中將姬に關しては私は其の正傳を知らない。稗史の作り事ではあるが、繼母にいぢめられたと言ふ事が、感傷的な、安價な、同情を呼んで、何が無しに女人の禮讚を受けて、一般に知られてゐる。さればこそ婦人病の賣藥の名にまで冠せられる。淸淨な處女中將姬に對して、之れは又何と云ふ殘酷な侮辱であらう。中將姬が正身の阿彌陀を拜し藕糸の曼茶羅を感得した事の傳說は、古くは古今著聞集に誌されて居る。

「曼荼羅の出現は、當時建立の後、百五十二年をへて、大炊天皇（淳仁天皇）の御時、横佩の大臣と云ふ賢智の臣侍りけり。かの大臣に鍾愛の女あり、その性いさぎよくして、偏に人間の榮耀をかろしめて、たゞ山林幽閑をしのび、遂に當寺の蘭若をしめて、彌陀の淨刹をのぞむ、天平寶字七年六月十五日、蒼美をおろして、いよ〳〵往生淨土のつとめねんごろなり、誓願を發していはく「我もし生身の彌陀を見奉らずば、永く伽藍の門閫を出でじ」と、七日祈念の間、同月二十日酉の刻に、一人の比丘尼、忽然として來りていはく「汝九品の教主を見奉らんと思はゞ、百駄の蓮莖をまうくべし、佛種縁より生ずる故なり」といふ、本願禪尼歡喜身にあまりて、化人の告を記るして公家に奏聞す、叡感をたれて宣旨を下されにけり。忍海勅命をうけたまりて、近國の内に蓮の莖をもよほしめぐらすに、僅に一兩日の程に、九十餘駄出で來にけり、化人みづから蓮の莖をもて糸をくり出す。糸すでに調りて初めて淸井を得るに、水出でて糸をそむるに、その色五色なり　皆人嗟嘆せずといふ事なし。同二十三日の夕、又化人の女忽に來りて、化尼に「糸すでに調れりや」と問ふ。即ち調へるよしを答ふ、その時、かの糸をこの化女にさずけ給ふ。女人藁一把を油一升にひたして、燈火としてこの道場の乾の隅にして、戌の終より寅の始に至るまでに、一丈五尺の曼陀羅を織りあらはして、一よ竹を軸にして、捧げもちて、化尼と願主との中にかけ奉りて、かの女人はかきけす如くにうせて、行方しらずなりぬ。その曼陀羅のやう、丹青色を交じへて、金玉の光をあらそふ。南のはしには一經教起の序分、北のはしは三昧正受の旨趣、下のかたは上中下品來迎の儀、中臺は四十八願莊嚴の地なり。これ觀經一部の誠文、釋尊誠諦の金言なり」而して化尼は姫に問はれて答へていはく「われはこの極樂世界の教主なり、織姫は、わが左のわきの弟子觀世音なり、本願を以ての故に、來りて汝が心を安慰するなり、云々」と告げたとある。姫は後二十四年をへて寶龜六年四月宿願にまかせて、遂に聖衆の來迎にあづかつたとある。

今も此の堂の西北隅に四疊半ばかりの間があつて、此處で曼荼羅を織つた、織殿であると云ふ。案内の梵妻も氣になると見えて、此の狹い處で大きい曼荼羅を織つたのは、全く、法力であると說明する。私は直ぐに石山寺の紫式部の源氏の間を見た事を思ひ出した。聖武、孝謙、淳仁、稱德の治下は、稀れなる佛法隆盛の時代であつたけれど、時めく大臣の美しい息女が、身を捨てゝ剃髮する事は、時人を驚かした珍らしい出來事でもあつたのだらう　而して姫の熱心な信仰は時人に感動を與へたのでもあらう　橫佩を父とする、淑德すぐれて美しい姫の出家

勤業、之れだけでいろいろの話の種になるのには充分である。

當麻の寺は麗はしい中將姫の奇蹟に對し、神怪な役の行者の傳説をも持つて居る。硬軟と云はうか、あまりに違つた對比である。之も古今著聞集に載る。當麻の寺は「建立の後六十一年をへて、親王夢想によりて、本の伽藍の地を改めて、役の行者練行の地にうつされにけり。金堂の丈六の彌勒の御身の中に、金同一搩手半の孔雀明王の像一體をこめ奉る。この像は行者の多年の本尊なり。又行者祈願力により、四天王の像で來り給ひて、金堂におはします。堂前に一つの礎石あり、昔行者孔雀明王の法を勤修の時、一言主明神來りて、この石に座し給へり。天武天皇の御宇白鳳十四年に、高麗國の惠觀僧正を導師として供養をとげらる。その日天衆降臨し、さまざまの瑞相あり、行者金峯山より法會の場に來りて、私領の山林田畠等、數百町を施入せられけり。」とある。今の金堂にある彌勒の座像が傳説の夫れである。天平時代の作で、高八尺の塑造乾漆混用の像で、壯嚴な、落付いた本尊である。美しい曼草文様の彫刻のついた台座は、像よりも却つて私達の興味を牽く。著聞集に飛來したと傳へらるゝ四天王は木心乾漆像である。多分天一體を缺いて、之れだけは木彫で、鎌倉時代に補作された。渡來の傳説の起るのも、もつともと思はれるやうな、鬚髯のある風變りの像である。金堂の堂字は、鎌倉時代の建立で、五間四面單層入母屋で、高すぎる石壇の上に建つて居る。金堂南面の正面に立つて居る小さい石燈籠は所謂當麻形の燈籠で、今に遺る最古の石燈籠と目されて居る。其形の美しさと、蒼古の時代とは、數奇者の讃嘆を惜しまぬものである。天沼博士の復古設計（レストレーション）なる新しい燈籠が、別に樓門の附近に立つて居るが、歳月の苔色と、風雪の磨滅とが無いので、數奇者の氣には入るまいが、其の形は簡勁でやつぱり美しい。金堂の北に講堂が建つて居る。講堂は同じく鎌倉時代の建立で七間四面單層四注である。本尊は木彫の阿彌陀如來の座像で、其他に吉祥天や、觀世音や、地藏尊や、妙幢菩薩等のとりどりに面白い。國寶佛がある。寺の西背面には奥の院があつて、此處には法然上人の繪卷を藏する筈だが　私達は其處へは寄しなかつた。

當麻からの歸り途は、下り坂であるだけにがたがたの車も滑かに走る。高田の町を通り抜けて、一氣に八木まで走らせた。八木で大軌電車へ乗つて、一つ先の驛で降りる、即畝傍陵前である。私達は謹んで神武御陵を拜した。陵丘を繞る松林も、秋ながら鬱蒼として、滑らかな、塵もない陵域は、人をして自から肅然らしめる。柴野栗山の神武陵の詩に「遺陵纔問路人求。半死孤松半畝丘」と言ふのがある。幕府時代には各所の御陵は

全く荒廢したのであつて、此御陵の如きも、一旦は其地さへ詳かでなかつたのである。戸田大和守が山陵奉行となつて、諸陵を調査した時、土俗に神武田、又は「ミサンザイ」と呼んだ處を、其舊址と定めあてたのだと言ふ事である。記に云ふ畝火山の北の方の白檮尾上にありとは此處の事である。私達は續いて橿原神宮に參詣した。神宮は畝傍山の東南麓にある。社殿は明治二十三年の創建で、京都內裡の內侍所を移して神殿とし、同じく神嘉殿を拜殿として、神武天皇と皇后姬蹈五十鈴媛命を奉祀して居る。社殿の建物は共に白木造檜皮葺の素朴なもので、さして宏壯ではないけれど、玉砂利を敷つめた廣い境域の、淸淨に掃き淸められたのは、なかなかに神さびて見える。私達は正門前で洗嗽して、恭しく參入し神前に拜跪した。拜殿の廣前の敷砂利の上に立てば、麗かな秋光は灑ぐが如くに照して、今は恰度正午だ、仰ぐと目の前に木立の繁つた畝傍山が立つて居る。境內は神官も何處に居るかわからぬ位、寂然として人一人居ない。何となく森嚴な氣分になる。中の鳥居の石段に腰をかけて靜かに休んだ。思ふとはなしに、國初を思ふ、神武天皇を想ふ。私の想ひ出す神武天皇は、異様な武具を胴だけよろつて、弓を突いて立たれる偉丈夫である。私達の小供の時分、教科書の挿繪や、繪本で教へられたそれである。遠い日向國から此の地方まで遠征して、土賊共を征服して、此處に初めて都を奠められたのは、想へば遠い古である。天皇の東征は決して易い事業ではなかつた。日向からの水路も、宇沙から、筑紫の岡田宮に一年、阿岐の多祁理宮に七年、吉備の高島宮に八年と永い月日に、從つて少からぬ困難の伴つた事であらう。浪速へついてからは、强敵に直面して皇軍の困難は一層ました。日下之蓼津の敗軍、皇兄五瀨の命の負傷。遂に退軍して紀伊を迂廻されても困難は減じなかつた。皇兄の薨去や、他の皇兄稻飯命、三毛入野命の入水。不幸はつぎつぎに來た。併し不撓の天皇は此の逆境に奮闘された。熊野に上陸され、熊野川の溪谷に沿ふてすゝまれた、八咫烏の教導で、十津川に沿ふて險しい山坂を越えて、吉野川から、始めて大和へ出られたのは宇陀の地方である。其處の兄宇加斯を誅し、進んで土雲、八十健を殺し、兄磯城其他を伐ち．而してとうとう强敵長髓彦を征して、此の磐余の地に居を定め．畝火の白檮原宮に座しまして天下を治めた。山深い吉野や宇陀から、治めて此の大和の平原に出て其南方の山裾の地、此の處に居を定められた事は、今の私達から考へても當然な撰擇であつたやうに思はれる。其以後永い間私達の祖先は此地方に占據した。而して其間に我國礎が固く築かれたのである。遠い昔の事とて歷史は詳かには傳へ遺されては居ないけれ

ど、此間に於ける私達の祖先の偉業は、讃へられねばならない。
鹿島香取の兩神の事を以てしても、阿波の忌部の名から安房と、名づけられた事や、總國、結城等の地名等を以てしても、皇化の夙く東國にまで及んだ事が想像される。四道將軍の派遣や、日本武尊の西東の征伐等を見ても、國內の統一されて行く有樣が見える。國造、縣主等の制も統治の證左である。朝鮮半島との交通は、古くからあつたが、神功皇后の征伐以後は一層我國の勢力が扶殖された。此時分には詳しい記錄こそ殘らないが、豐太閤の朝鮮の役にも增して、勇敢な働や、悲壯の出來事があつたのだらう。斯る祖先達の不斷の努力の下に我國勢は次第に增した。史家は或は應神、仁德の治下を、我國王朝時代の最盛時とも想像する。或は又聖武の朝を以て最盛期とも考へる。蓋し此の應神、仁德から、奈良朝へかけての時代には、國土も隆盛に赴き、文化も進んで、遂に光輝燦然たる奈良時代を現出したのであらう。此の國本の培養される時代には、此の畿內の地方が、多く國の中心であつた。難波の高津宮や、大津の志賀宮のやうに、遠く都が遷つた事も、幾度かあつたが、其他は轉々しても、多く此附近であつた。元明の朝和銅三年平城へ遷都する迄、千三百七十年の永い間、此地方附近が國の中心であつた。千三百年と云へば、平城遷都から今日迄の時間に比敵する。其の永い時代の中心の地方に今私達は立つのである。私達は萬世一系の天皇を戴く國體を誇るけれども、之れは四面の水で大陸と懸絕した環境からの、偶然の幸と云ふやうな事ではない。之れには皇室と臣下、國民との不斷精進の努力がある。其努力の汗の滴りが、永くしみ込んだ地方に今私達は立つのである。感慨と云はうか、追想と云はうか、不思議な感情に打たれながら、私はたゞ靜かに思ひふけつた。

神宮の前には、大軌電車の大きな停車場がある。時には大勢の參詣者が、混み合ふ事もあると見えるが、今は國初のやうに長閑である。二臺の人力車はあるが挽子は影もない。私達の賴みに、やりかけた仕事を捨てゝ、支度をして挽子が出て來た。之を賃して之れから白橿、飛鳥を巡遊する。久米寺はすぐ町餘の所だ。聖德太子の御弟來目皇子の創建と傳へられて居る。皇子が眼病平癒を祈つて、推古天皇の二年に、金堂を建てられ、藥師佛を置かれたとも傳へらるゝが確ではない。今の本堂にも藥師如來が祀つてある。養老二年善無畏和尙來朝して、當寺に寄寓する事三年、其間に天竺、唐土、日本の三國の土砂にて塑造したと云ふ塔がある。境內には猶萬治三年に京都の仁和寺から移建した多寶塔がある。而して其の周圍に、天慶五年雷火で燒けたと云ふ此塔の前身の大塔の礎石が殘つて居る。佛像は見

るに足るものとてはなく、僅に觀音堂に十一面觀世音像があるのみである。境内は今はさびれて廢寺のやうに亂雜に荒れて居る。併し此寺は寧ろ久米の仙人の傳說で有名である。だれでも久米寺と云へば、何よりも其仙人を想起する。支那の仙人と違つて此仙人は、人間味のある面白い男だ。今昔物語に面白い話が載つて居る。

「今昔、大和國吉野郡龍門寺ト云寺有リ、寺ニ二ノ人籠居テ仙ノ法ヲ行ヒケリ、其仙人ノ名ヲハ一人ヲアツミト云フ、一人ヲハ久米ト云フ、然ルニアツミハ前ニ行ヒ得テ、既ニ仙ニ成テ飛テ空ニ昇ニケリ、後ニ久米モ既ニ仙ニ成テ、空ニ昇テ飛テ渡ル間、吉野河ノ邊ニ若キ女衣ヲ洗キ立テリ、衣ヲ洗フトテ女ノ脛マテ衣ヲ搔上タルニ、脛ノ白カリケルヲ見テ久米心穢レテ其女ノ前ニ落ヌ、其後其女ヲ妻トシテ有リ、(中略)其久米ノ仙只人ニ成ニケルニ、馬ヲ賣ケル渡シ文ニ、前ノ仙久米トソ書テ渡シケル、然ル間久米ノ仙、其女ト夫妻トシテ有ル間、天皇其國ノ高市ノ郡ニ都ヲ造リ給フニ、國ノ内ニ夫ヲ催シテ其役トス、然ルニ久米其夫ニ被催出ヌ、餘ノ夫共久米ヲ仙人々々ト呼ブ、行事官ノ輩有テ是ヲ聞テ問テ云ク、汝等何ニ依テ彼レヲ仙人ト呼フソト、夫共答テ云ク、」此處で人夫共は久米の女の脛を見て失敗した話をした。「然レハ其レニ依テ仙人トハ呼フ也、行事官等是ヲ聞テ、然テ止事無カリケル者ニコソ有ナレ、本仙ノ法ヲ行テ既ニ仙人ニ成ニケル者也、其行ノ德、定テ不失給、然レハ此ノ材木多ク自ラ持運ハムヨリハ仙ノ力ヲ以テ空ヨリ令飛メヨカシト戯レノ言ニ云ヒ合ヘルヲ、久米聞テ云ク、我レ仙ノ法ヲ忘レテ年來ニ成ヌ、今ハ只人ニテ侍ル身也、然許ノ靈驗ヲ不可施ト云テ、心ノ内ニ思ハク、我レ仙ノ法ヲ行ヒ得タリキト云ヘトモ、凡夫ノ愛欲ニ依テ女人ニ心ヲ穢シテ、仙人ニ成ル事コソ無カラメ、年來行ヒタル法也、本尊何カ助ケ給フ事無カラムト思テ、行事官等ニ向テ云リ、然ラハ若ヤト祈リ試ムト、行事官是ヲ聞テ嗚呼ノ事ヲモ云フ奴カナト乍思、極テ貴カリナムト答フ、其後久米一ノ靜ナル道場ニ籠リ居テ身心淸淨ニシテ食ヲ斷テ、七日七夜不斷ニ禮拜恭敬シテ、心ヲ至シテ此事ヲ祈ル、而ル間七日既ニ過ヌ、行事官等久米カ不見ル事ヲ且ハ咲ヒ且ハ疑フ、然ルニ八日ト云フ朝ニ、俄ニ空陰リ暗夜ノ如ク也、雷鳴リ雨降テ隣物不見エ是ヲ怪ヒ思フ間、暫計有テ雷止ミ空晴ヌ、其時ニ見レハ、大中小の若干の材木併テ南ノ山邊ナル杣ヨリ空ヲ飛テ、都ヲ被造ル所ニ來ニケリ、其時ニ多ノ行事官ノ輩敬ヲ貴ヒテ久米ヲ拜ス、其後此事ヲ天皇ニ奏ス、天皇是ヲ聞キ給テ貴ヒ敬ヒテ、忽ニ免田卅町ヲ以テ久米ニ施シ給ヒツ、久米喜テ此ノ田ヲ以テ、其郡ニ一ノ伽藍ヲ建テタリ、久米寺ト云フ是也」と元享

禪寺にも當寺を久米仙人の開基としてある。

見瀨を通つて橘寺へ行く、路はなだらかに傾斜して、僅かに登り氣味だ。時雨の雨間なくしふれば眞木の葉も爭ひかねて色つきにけり（萬葉）、大和の山々は黃葉して、所々鮮かな紅葉を織り込んで、野趣にみちた景觀をひろげる。少しく西に廻つた秋の日を負ふて行くと、車上は小春のやうに溫かい。うつらうつら太古の長閑な生活を羨ましくも思ふ。

橘寺の少し手前、路の左側に川原寺の舊趾がある。今は弘福寺と云ふ。門前の畠中に塔址があり、又寺內には大きな白い大理石の礎石、が二十四も處狹く遺つて居て、昔の大伽藍を想像させる。寺では之を白瑪瑙と稱して居る。當寺の創立は敏達天皇の十三年とも、又齊明天皇の元年とも云ふ、いづれにしても昔時は堂々たる莊觀をもつて居た事であらう。私は此の大きな白大理石が、當時何處から發掘されて、此處まで運搬されたかを思ひ惑つた。

橘寺は小高い形勝の處にある。用明天皇の別宮のあつた所、聖德太子誕生の地に、創立されたと言はれて居る。四天王寺、法隆寺、中宮寺、蜂丘寺、池後寺、葛城寺、等と共に、聖德太子建立の七ヶ寺の一である。創建當初には、七堂伽藍坊舍數十棟に及んで、盛觀を極めたとの事だが、今は其一つだに遺らないのみか、今建つ堂塔は、何れも見るべきものはない。寺運中世に一時廢絕して、元治元年に再興したとの事で、今の本寺には全く古寺の面影はない。境內には太子に纏つはる色々の傳說や、俗話に基く名蹟が多い。太子が勝鬘經講讚の際に、寶冠に日月星の三光が顯はれ、其れが照映したと云ふ三光石だとか、其時蓮華が虛空から降つた蓮華塚だとか、其他之に類する色々な所がある。其の爲彌々俗寺のやうな感を深くする。併し此の小高い境內からの眺望は、美しい景觀の一つだ。遠くに葛城山の一帶を望み、西北に白橿、北に飛鳥の地方が、なだらかな勾配に下つて見える。畝傍、香久、耳成の大和三山は、其中にこんもりと尖つて立つて居る。此の穩やかな風光と、懷古の情緒と相結んで、他所では得られない感興を惹く。寺寶には觀音堂の本尊木彫の如意輪觀世音、地藏菩薩像及天平時代の獵太鼓等がある。中で最も面白い日羅上人の像は、今は奈良博物館に出陳されて此處にはない、庫裡の庭にある石燈籠は、橘形と稱されて古雅な趣がある。

橘寺から岡寺へ行く途中で、飛鳥川を渡る。飛鳥の古都は此の下流である。萬葉の歌人に屢々歌はれたり、淵瀨定めなきを以て、人事の無常に譬へらるゝ有名な川だが、源近い小さな川である。岡寺は岡町の東、山の中腹にあるので、車を棄てゝ行く

登らなければならない。けさから稲野ばかりを通つて居たので、木立の繁つた阪路をあえいで登るのも、變つた風情ではある。

岡寺は東光山龍蓋寺と呼ぶ。義淵僧正の開基で、天智天皇の二年、岡本宮を改めて寺としたといはるれが岡本の宮の所在は此處ではないらしい、僧正が法力を以て、大石に阿字を書いて悪龍を池に封じたので、龍蓋池と呼び、從つて龍蓋寺と稱する、等と傳へられる。如意輪觀世音を祀るので今は西國第七番の札所として參詣者が多いが、それだけ又俗化して居る。西國札所の順番は那智の青岸渡寺を振出しとして、紀三井寺を二番とし、粉河寺を三番として進む、六番は淨瑠璃で寧ろ有名になつた壺坂の南法華寺である。壺坂は此處の南方、高取山の下にある「岩をたて水をたゝへて壺坂の庭の「いさごも淨土なるらん」と御詠歌を唱つて、巡禮の人達は、其所から北へ下つて高取の町を經て、猶北へ三里ばかりで此處へ來る。此處で彼等は、「けさ見れば露岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光なりけり」と詠ずる。而して此處から初瀨へ出て、第八番の長谷寺へ詣ずる。長谷から奈良、宇治、醍醐と、觀音の靈場を廻つて、彼等の旅はまた長く續く。三十三ケ所を巡歴する彼等の旅と、私達の古寺の旅とは、時とすると或る場所では重り合ふ、其の時いつも私達は、彼等の信仰の爲に、古寺があまりに今様に俗化される事を惜む。併し寺は遊歴や鑑賞の對稱ではないから、私達の不滿は自らたしなまねばならならないのだらう。岡寺も其一つである。

初夏はつゝじが美しいと案内の車夫が云ふ。庭につゝじの大きな株が、どつさりある、併し其の盛期に來なつかつた事を却つて仕合せに思ふ。

巡禮の人達の拜む佛を、私達も拜む、丈六の如意輪觀世音座像で、弘法大師が日本支那天竺の三國の土を錬つて捏造したと傳へらるゝ。莊重な弘仁佛である、正しく塑像で、それとしては最も大きな作であらう。本尊は唐の稽首勛が閻浮檀金を以て作つたと稱する。半跏の銅像如意輪觀世音で、丈は一尺二寸ばかり、後に之を胎内佛として、先の丈六の如意輪を造つたと言ふのである。豐滿な美しい顏と、くびれた胴と、やゝ古風な衣紋つきの此本尊は、今は奈良博物館にある。木彫の釋迦涅槃像、不動の像其他の諸物が並陳されて居るが、此の寺の最も誇りとするのは、開山義淵僧正の像であらう。之は乾漆の像で、大きさ約等身、寫生的の手法は天平の肖像的彫刻として法隆寺東院の行信像などと同じく、最も勝れたものゝ一つである。少しさがつた大きな眼と垂れ下つた耳をもつた、皺だらけの顏、肋もあらはな胸を出した姿には、固い信念と特異な性質を持つ高僧の個性が、強く表はれて居る。私達鑑賞家にとつてもつと

興味のあるのは、此の寺の持つ、天人の薄肉彫のある瓦磚である。之れも今は博物館の明るい陳列棚の中にあつて、見るものには却つて都合がよい。大さ一尺三寸角、素燒の瓦で、跪座した天人の像が浮き上つて居る。其肉取りの美しさ、翻る天衣の美しい曲率は當代工藝の傑作である。之は岡本宮の腰瓦に用ひられたものと傳へらるゝが、確ではない、併し岡本宮址から發掘された事は或は事實かとも考へられて居る、岡本の宮は舒明天皇の皇宮で、飛鳥の岡の下にあつて此名があるとも說かれて居る。此の傳の用途は不明だが、文様の天女は玉蟲厨子の飛天などに似て居るので作は白鳳初期のものだらうと考察されて居る此れに似た磚が壺坂寺にもある　但し文様は鳳凰で此れは白鳳末か天平時代のものと認められて居る。此處の建築は本堂を初め方丈、開山堂、奥院等皆普通のもので、寺傳で岡本宮のものだ等と勿體をつけられる樓門や足利時代の山門も共に見るに足る程のものではない。猶義淵僧正の墓の他に、僧正や大師に關する色々の古蹟の觀音札所にふさはしいものがある。

岡から飛鳥へは下り坂である。飛鳥の町へ入る前に飛鳥の安居院に立寄る。此處は俗に飛鳥大佛と呼ばれて、法興寺の遺跡である。法興寺は聖德太子と蘇我馬子の創立と言はれる。崇峻天皇四年に着手して、推古天皇の四年十一月に成就したと云ふ。此造營に就ては朝鮮からも大勢の工匠達が來たやうに言はれる。法興寺は後に元興寺と稱し、奈良に遷つて所謂七大寺の一となる。蘇我氏の建てた此寺は、又彼等の一族を亡ぼすにも役立つた。入鹿の暴逆は幼ない兒心を強く刺激したと見えて、私は小供の時分の讀本の挿繪や、記事を今も明瞭に覺えて居る。中臣の鎌足が蹴鞠の遊びの時、皇子の脫げた靴を捧げて、中大兄皇子と交を結ぶの端緒を得たと言ふ話は、此寺に於てゞある。又皇極天皇の四年六月三韓から貢進の機に、皇子自ら入鹿を刺した後、人心不安の中に、中大兄皇子は此法興寺の中に入つて備を立てた。諸王及群臣悉く之に從つて、大勢が定まつたとも傳へられる。此由緒ある寺も、此歷史上有名な古跡も、今は一物をも遺さない。昔の寺の一部が安居院と稱され、それも荒廢して、今は寺と云はんよりは、小屋とも云ふべき堂の中に、破滅した不具者のやうな大きな佛がある。之れこそ有名な止利佛師作の、金銅釋迦如來像のなれの果てと言はれるけれど、あまりの意外に呆れる他はない。歷史には推古の十三年四月詔があつて、皇太子（聖德太子）大臣、諸王と共に發願して、丈六の巨像を造らしめ給うた。即ち鞍作の鳥（止利佛師）に命じて之れが工事に當らしめた。高麗王も之を聞いて金品を貢進したとある。此銅像に用ひた銅は二萬三千二百斤、黃金七

百五十九兩であつたと云はれる。斯くて此佛像を法興寺の金堂に安置しようとするに、堂の戸に支へて入れる事が出來なかつたが、鳥佛師の智慧で納め得た等との話もある。之れに續いて翌十五年詔して出來たのが、法隆寺の藥師三尊である。左すれば此の丈六の佛像は由緣ある最も古い像と云ふ事になる。夫れが度々の火災などで、佛體も破滅し去り、其補習もあまり亂暴で、顏面の一部などに多少推古佛の面影が殘るとも見られるが、あまりの慘しさに、目を背けざるを得ない。而して昔の面影をさぐる勇氣も出ない程である。此の堂の後に陋い方丈があり、其の亂雜な庭の中に、所謂飛鳥型と稱する古燈籠がある。燈籠は佛像とは違ひ、破れたり、磨損したりして、苔色鮮かに、彌々其の古色を發揮してゐる。

飛鳥の明日香の里は、古く允恭天皇の時、越えて又顯宗天皇の時、都を置かれた。然し我國の歷史上最も重大なはたらきをしたのは、推古天皇が、此處の小墾田に御代しろしめしてからである。次で舒明、皇極、齊明、天智と引續き宮居された。天智天皇は一度近江の志賀の都に遷られたが、天武天皇は再び此處の淨見原の宮に統治され、持統天皇に及んだ、持統天皇のとき、此處のわきの藤原に遷り、元明天皇の和銅三年平城に遷都された。飛ぶ鳥の明日香の里をおきて去なば君があたりは見えずかもあらむ（元明天皇）其後都は再び此處には歸つて來たかつた。此の此處の都の間に、我國の建築、美術、工藝は大成されたのであつた。又我國の統治の制度も完成され、文化の基礎も固まつたのである。

三韓との交渉は夙くから開けたが、文化の上に大きい刺激を受けて、興奮的に躍進したのは、何と言つても佛教の渡來と關する。佛教の始めて傳はつたのは、繼體天皇の朝と歷史には記される。欽明天皇の時、百濟王の獻じた佛像經論は蘇我、物部兩族の爭鬪を刺激した。續いて其の流れ込む勢は徐々强くなつた。而して佛教の興隆に伴つて、建築と美術が急激に發達した。其時代敏達、用明、崇峻の都は此處ではないが、やはり此近くである。特に用明天皇の池邊の宮はすぐ近くの阿倍である。我國の數多の大寺の出來たのは、推古の朝、聖德太子の指導の下にであつた。而して今法隆寺に、最よく遺されるやうに、堂塔も佛像も、諸調度も、大規模の立派なものが出來上つた。其時分の中心地は此處である。大勢の工匠や佛師や繪師達が此處で働いたのである。建築は其場所場所で仕事されたであらうけれど、諸美術、諸工藝はやはり此の都で作られたのであらう。從つて其時分には、一面工匠の町を現出したのである。其中には遠く朝鮮や支那から、海を越えて來た人達もあつたら

う。斯くして所謂飛鳥朝の藝術が出來上つた天武天皇が再び此處に戻られてからも、建築や美術は盛大であつた。今奈良の西の京に建つ藥師寺の東塔も、元は持統天皇の御世に工を起し、文武の初年、此處の近くの白橿に建てられたものを、後養老年間に移建したのである。所謂白鳳の藝術は、やはり此處に生れた。南部に美しく開いた藝術の花は、推古白鳳の時代を通して、此處に培はれ、此處に先づ蕾を破つたのであつた。遺された、美しい佛像や、工藝や、建築を見て、或は韓、或は隋或は唐の影響の相違と、批評家達は論じ上げるが、内から見れば、やはり此處の飛鳥の土になじんで、自然日本人の血が、佛の中にも流れ込んで行つたのである。此のなだらかな山河に育ち、自由な萬葉の戀をした人達の手なればこそ、中宮寺の觀音のやうな美しいものも作り出せたのである。

飛鳥は必しも美術、工藝だけの都ではなかつた。我國の政治上の諸制度、律令の確立されたのも此處でであつた。大化の改革も此處で行はれた。大寶律令の制定も此處で出來た。斯くして我國の文化が次第に組織的になつたのは歴史の示す通りである。飛鳥は又文藝の都でもあつた。今に傳はる我國最古の記錄、古事記三卷は、天武天皇が舍人稗田阿禮に、帝王の舊辭を記憶暗誦せしめ給ひしに始まる。又歌聖と云はるゝ柿本人麿を初め、萬葉の歌人達のあるものは、此處に住んだ。萬葉は大伴家持の編纂にかゝると言はれて、奈良の歌人の多くが載せられるが、中では飛鳥の歌人の素朴な歌が、反つて私達の心を牽く。其の歌調の勁健と、吐露する眞實とは、巧みな奈良の人達の歌よりも反つて強く心を捉える。斯くして今は片田舍に過ぎない此町で、我日本の文化の基礎が出來たのである。

併し今の飛鳥の町には、往昔を語るものは何一つも遺つては居ない。堂塔も、佛像も唯の一つも無い。私達は唯此の土を踏んで、昔を偲ぶばかりである。車夫は案内して難波の池、豐浦宮趾、元善光寺等を見せて呉れた。往昔稻目と尾輿の爭ひのために、佛像を投げ込んだと、歴史にある難波の堀江の跡と稱するのも、小さな水溜に過ぎないので、歴史地理に精くない私には、之れが夫れとも遽に信じられない程である。豐浦の宮は推古天皇が小墾田の宮を營む前に一時宮居された所である。元善光寺は蘇我の稻目が、百濟から獻じた佛像を給はり、向原の家を棄てゝ寺として奉安したとある其の向原寺の跡であると云ふ。今は今樣の寺に過ぎない。志貴皇子が「たわやめの袖ふきかへす」と詠まれた飛鳥風も、秋の夕暮には旅人の袂を掃つて、蕭颯と寒い。私達は畠中の野路を車を驅つて、孝元天皇の陵側を抜けて、再び橿原神宮前に戻つた。

歸りは大軌電車で一路奈良に向ふ。畝傍、八木の驛の次は新ノ口である。近松の名文に魅せられて、實在の事のやうに考へながら、此處かととかう見ると、驛前の廣告にペンキ繪の忠兵衞と梅川とが描かれて居た。南部太夫や呂昇の美聲で謠はれる戀飛脚大和往來の梅川と忠兵衞とは美しい一對であるが、夫れを偲ぶにはあまり殺風景の環境である。奈良に着いたのは薄暮であつた。今宵は昨の禮心に新納氏を招じて旅亭松利に夜食した。家は舊都にふさはしい古い普請であつた。客の新納氏は又奈良にふさはしい人である。氏は古彫刻の大家で、岡倉覺三氏が美術院を創設した時代から、奈良に設けられた美術院を引受けて、長く古社寺の保存に關係し、古佛體の研究と修理とに沒頭して居る。其の薩摩なまりの朴訥な語調で話し出す談は、聞く者を遠い昔の時代に連れて行く。氏は又各地の邊陬の寺々まで佛像を取調べに行くので、面白い地方地方の話を聞かせる。私達は又居ながらに遠い所に連れて行かれる。昨夜と言ひ今宵と言ひ、面白い趣味ある話を聞き明かして初冬の夜長の旅愁をも感ぜずに過す事が出來た。

食後新納氏に案內されて奈良の夜の街を步いた。舊舖古梅園ではもう既に大戶をおろして居たが、わざ／＼開けて貰つた。紅花墨を買ふためと、「夫唱婦隨」の銘ある墨を購ふためであつた。若い時第一高等學校で、今は亡き小島憲之先生から初めて製圖を敎へられた時、製圖には紅花墨が宜いと言はれたが元で、其後二十五年の久しい間私は引き續き製圖に此の墨を使用して居る。製圖には宿墨を忌むので不精の私ですら常に硯を洗ふ事を怠らない。每日の使用は僅かだが不斷にする墨の量は決して尠くはない。昨年震災であらゆるものが燒けて絕えた時、折よく見舞はれた新納氏に托して奈良から此の墨を送つて貰らつた。墨の良否は知らないが、製圖には都合のよい實用的の墨である。

「夫唱婦隨」の墨は私の用途ではない　此旅行に携へた德富蘇峯先生の烟霞勝遊記の參拜遊記の中で、ふと此墨の小話を見た、先生は次のやうに書かれてゐる。「市中にて見物旁、諸舖を徙見し、偶々古梅園支店にて、「夫唱婦隨」の銘ある墨を尋ねたるも纔に一挺あるのみ　試みに電話にて本店に問合せたるも、無しと云ふ。予は聊か思ふ所あり、親緣知友の家庭に、此墨を贈らんと企てたれども、無き物は致方なし。然も或物は皆無に候る。乃ち一挺を購ひ、取り敢へず京都にある、或る新家庭に與へたり。敢て諷刺の意を寓するにあらざる也　予等の青年時代には、「夫唱婦隨」「上和下睦」の銘ある墨は、隨處に此れありき今は日本第一の老舖たる、奈良の古梅園さへも、餘り多く之を

依らぬとすれば、斯る舊式思想の欲求は、當代には流行せぬものと知る可き歟。」と此の記事を見て私も思ひ出したが、私が小學校時代、父の硯函の中にやはり此銘のある墨があつた　其時分は高價な墨と思つて手も觸れなかつたものだ。試に問ふたらば幸に有つた。併し蘇峯先生が書かれて居るやうに、やはり今は流行せぬものと見えて、番頭達は其の價格を即答する事が出來なかつた。先生へよき土産物と思つて其數挺をもとめた。奈良の狹斜の衢とも云ふやうな、夜明るい街を拔けて、薄暗い裏門からホテルへ歸り着いた

奈良附近で行きたい所、見たい古社寺も、まだ數々あるが、所用と遊樂とを兼ねて、京都へも立寄りたいと思ふので、十一月十二日奈良を發つ。奈良線で木津を過ぎ大和を越して、暫くすると、もう景觀がすつかり變る。山城の山川は大和繪である　景色までが藤原式になる　山川境土が藝術を造り出す事は、確に事實である。今の自然を拒絶した都市の中に、育まれる建築が、濕のないものに成り易いのも止むを得ない。夫れにしても振り返つて、昔の飛鳥、奈良の工匠達を羨しく思ふ。

今の東海道の汽車は、大津から長いトンネルを通つて、忽然京都へ着く、あんまりの不意打である。舊東海道線は、大谷、山科、いなり、を經て、遠くに東寺の五重塔を望んだり、次第に本願寺の大きな屋根が見え出したりして、徐々に京都へ近付いた。期待する古い都へはいる感は、之れでなければならない。今日は奈良線で、久し振に此感を味ふ事が出來た。驛につくと早速旅宿に荷物を置いて、若狹街道を叡山の西麓に向ふ。今日の目的は、修學院離宮の拜觀と、大原の三千院　寂光院を訪ふ事で、言ふまでもなく今眞つ盛の紅葉見物である。同行は高木博士未亡人と美術學校の某氏と余等夫妻とである。

修學院の離宮は比叡山の西麓の小高い處にある。叡山への近道、雲母坂への路は、直ぐ此の東を沿ふて通る。八萬五千坪の廣大な構内に上、中、下、の三ヶ所に別々の庭劃がある。下のお茶屋は後水尾天皇の御別莊で、幕府が旨を奉じて造營したものだが、其建築も、庭園も上皇御自身の御指圖で出來たと云はれる。庭門を入ると、今を眞盛りの紅葉が照り映えて、まぼしいばかりである。お茶屋の地盤が、高く石垣に支へられて居る。其處に纒繞した、蔦の紅葉は比類なく美しい。私は此んな美しい色彩を自然でも、繪畫でもまだ見た事が無かつた。蔦の大きな葉が、眞紅のも、黄から紅にぼかされたのも、まだ淡く色ついて僅の青味を殘すのもあつて、一枚とつて同じものがない。其上水々しい色澤を持て居る。此の色の變化と色澤とは、自然の領域で到底人間業では及びもつかない美しさである。嚴めし

い服裝に似合はず、案内の警手は其美しい散り葉を一つ拾つて、妻に與へた。彼女は喜んで懷紙の間に納めた。其美しい蔦紅葉や又續いて拾つた二三枚の美しい楓の紅葉や、黃葉は、此の旅の紀念として、此記を書き綴る今も、手帳の間から、其時の美しい景觀を再現する。

下のお茶屋の庭園はさして廣くは無いけれど、樹林築石の配置は高雅である。況て美しく彩られた、秋の景觀は優れたものである。此處の一木一石は皆後水尾上皇の御指圖と聞けば、上皇の御嗜趣に富み給ひし事を恐察する事が出來る。上皇は又書も畫も美事に遊ばされた。此の英邁の君主が、幕府の暴逆と壓迫に御宸怒あつて、俄に御讓位の後、悠々たる閑日月を送られた事を思ふと、此の林泉も幾度か叡慮を慰め奉つた事であらう。「葦原やしげらばしげれおのがまゝとても道ある世とも思はず」「世の中はなにゝたとへん水鳥のはしふる露にやとる月かげ」(御製)、花に月に又今日のやうな紅葉にも、御不滿をまぎらせられた事であらう。

壽月觀の扁額を掲げた、此の茶屋は、藏六庵と稱して、景觀にふさはしい輕い建築である東南に開いて御居間が出來て居る。御質素は恐れ多い程だが、あまりに意匠を凝らさず、自然に作られた所に、却つて趣きが深い。住宅の建築でも、近頃のものはあまり奇巧を弄し過ぎて反つて落付いた趣を失なふ事が多い。料理屋などは其れも宜からうが、朝夕の家居には如何かと思はれる。私が學校を卒て間もない時分、趣味ある建築家で、特に日本風の住居建築には、一隻眼を有たれた先輩某氏が、訓へられた言葉を今も記憶する。「面白い意匠がしてあると、氣がつくやうな座敷は、見飽きがする。何處に如何なる特徴があるとも、遽かに氣付かぬやうな座敷で、居心地よきものを上々とする」と言はれた。私は其後、斯の言を服膺して居る。而して爾來、夙い德川時代頃の住居建築を見る度に其感を深くする。今此處でも其の所信を固めた。然し斯くして成効する事は、私達凡手では中々むづかしい事である。日本の座しきは、其庭園と併せて、始めて一の完全な組織を形成する。障子を開け放げて、庭と融合する時に、兩者相協つて、一の藝術品となるのである。此處の座しきと庭園とは、此點から完全な成効を得たと評する事が出來よう。

中のお茶屋に行くには、畠や田の中の阪道を登らなければならない。麗かな秋光に浴して、離宮の構内俗圏を離れた、靜寂の境地を逍遙すると、泥池から清流に出たら、此んなかと思ふやうに清々しくなる。中のお茶屋は下のに比べると、一層巧緻である。而して下の閑雅に對して、中は優美である。之は承應

年間、幕府が同じく後水尾上皇の爲に造營したのだが、主として東福門院（秀忠の女、後水尾上皇の后）の爲に作られたと云ふ。御指圖はやはり上皇御自身との事である。女院の爲か、林泉も建築も共に優美で女性的である。池をたゝえ、遣水を呼び、石組の間に面白い樹木を配して、江戸時代初期の美しい庭園が出來上つて居る。此處の建築は今御成御殿と稱されて、下のお茶屋と比べると、御殿風で、立派である。此の座敷には桂離宮の、有名な桂棚と對稱される、美しい複雜な棚構へがある。其の地袋の鴨河原の友禪染を描いた繪襖など有名である。此座敷の裝飾は、總て女性的で、多少うるさい意匠ではあるが、其の見地からは面白い出來榮えである。此棚を始め此御殿には、千網の意匠になる緣側の勾欄や、納戸の水玉の透し文樣等、建築家が好んで參考にするものが多い。長押の釘隱・襖の引手なども桂離宮の亞流で、此時代の好みを現し、それ〴〵參考にされる。杉戸や襖の美しく描かれた繪も、名畫ではないが、裝飾的の面白味はある。總じて德川初期の特徵と、特殊の趣味を持て居る。中のお茶屋は近く迄は、隣の林丘寺に同構內であつた。後水尾上皇の皇女緋宮內親王が、禪に歸依して御遁世あり、上皇此地を內親王に給はり、聖明山林丘寺の勅額も給はつた。其後も靈元天皇の皇女、桃園天皇の御猶子が入寺せられて、高貴の尼寺であつたのである。夫れを明治に再び此離宮と、林丘寺とに分つたのである。林丘寺は今此お茶屋の東北構內に直ぐ接して建つて居る。恰度雲母阪の下で、京洛を遠望して風光も絕佳である。

中のお茶屋を出て、上のお茶屋を仰ぐと、其門脇の楓の老樹は、周圍の樹林を壓して、帝王のやうに堂々と聳えて、紅葉の王樣を敷いて居るやうだ。掃き淸められた門前には、紅葉だけが散り敷いて風情が深い。上のお茶屋の御庭は、中及下の小庭園式に對して、之は大規模の公園式のものである。廣い庭園の中心大部分が大きな池となつて、淸らかな水が湛えられて、後に大比叡の山麓をなす丘陵が聳えて相對する。池――浴龍池と名付けられる――その中には大小の島がある。庭の東、山寄りの方に二三のお茶屋、待合が配置される。其中に苑路をとつて、池の周圍をめぐり、中の島へも遊ぶ事が出來る。曾て此處を拜觀したとき、兩三回共、案內の警手は山寄りのお茶屋、鄰雲亭から漸次庭の東側を北に向つて進み池を一周して案內した。今日の案內は、逆に門から下の方、池の西側に先づ出て庭を一周して、最後に山上のお茶屋の方へと案內した。此の紅葉の庭では是は全く心ある案內であつた。池畔の紅葉の美しさはまた格別である。後の山は赤松が林立して常盤の綠を誇る、夫れを背景にして紅葉黃

の樹葉が囁く、池水に映つて風情はいよ／＼深い。仙境と云はうか、樂園と云はうか辭を撰むに困まる程だ。

上のお庭は造られた庭園として、必しも巧な出來榮えではない。全園の設計は多少統一を缺き、緊縮しない所がある。併し此の間の拔けた處に、此園の長所もある。此庭の大特色は叡山を負ふて、西南に京洛の平野を見下す大景觀である。一乘寺の詩仙堂より見る景觀と同樣で、一層杳邃の趣がある。瀧井枯山君の名園記に、此の庭園の西部傾斜地一帶を、雜木林の密林とし、其を大きな刈込みにした事を、一大特色として賞揚されたが、此見地には全然贊成である。上のお茶屋から京洛を望むとき、又は下から此の離宮を仰ぐ時、人工の庭と、環境の自然とを渾然連絡する點に於て、大効果がある。園内の建築物は、中及び下のお茶屋に比して、一層簡單であるが、中に窮邃軒の建物は、西南を廣く解放して、大まかな意匠に、此雄大な景觀と軌を一にするものがある、庭中の最高の場所にあつて眺望最佳しい。園中最も力を勞して、然かも最も風致を害するものは、中島に渡る千歳橋である、此の廊橋は、所司代内藤信敦が文政中に建造する所と言はれる。私達は修學院の離宮で、心おきなく、折からの紅葉を拜觀する事が出來た。曩に青葉の時分拜觀して、秋の美しさを豫想したが、今其の希望を滿し得た。淸寂たる、廣い構内は塵もなく淸掃されて、一二三の落葉が風情を增すのみだ、拜觀者も稀で、此樂園を私達だけで僻に拜觀するのをもつたいないと思つた。

昔は遲く山端の平八で中食した。高野川に臨んだ一室で、淸流に映る紅葉を肴にして、細鱗と野趣とを併せて飽喫した。山端から先は、いよいよ叡山の麓近く、左右に迫る峯續きの間を流るゝ、高野川に沿ふて溯る。山愈々深くして景益々佳、雜木の葉迄色付いた山村の秋は、紅葉の美しさより却つて雅味がある。美の瀨橋を過ぎ、花尻橋を渡ると、道は二つに岐れる。右は三千院、左は寂光院の道である。車は右を十數町で三千院の下に達する。

停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花、杜牧の此の句は人口に膾炙して有名だ。又屢々文人畫の畫題とも、畫讃ともなつて、紅褐色の楓林の上に達筆に書き下される。今の此の三千院前の老楓一帶の紅は、折からの夕陽に映えて、全く花にも見られない鮮な色である。但し停められた車は、殺風景な自働車である事を遺憾とする。此の色付いた老楓の枝は地を蔽ふて、恰然紅葉の屋蓋を架ける。夕日にすき透つて濁のない鮮な紅を見せる。地の遠隔であるためか觀客も少なく、此處でも此仙境を私達だけで獨占する。

三千院の附近は魚山とも云はれる。支那の天台山に模して、猶色々に名付けられて居る院の左右の小さい渓流を呂川、律川と稱する。三千院前の楓下を、眞つ直ぐに進んで、律川を跨いで渡ると、後鳥羽、順德二帝の御陵がある。後鳥羽の皇子尊快法親王、順德の皇子尊覺法親王が、相繼いで三千院の門主となられた關係で、隱岐と佐渡から、此處に歸葬しまひらせたのである。承久の事變に就て、北條氏の逆無道を憤らないものはあるまい。御墓前に拜跪して、「我こそは新島守よ」の御詠を思ひ出し、覺えずも淚を浮かべる。御陵前を北に眞つ直に突當る所が、廢場になつて、正面に勝林院がある。證據の阿彌陀と、俗稱される丈六の彌陀佛が祀られる。引き返して三千院に詣る。

三千院は延曆時の別院で、宗祖傳教大師の開基である。宮中の御懺法講を修むる光榮を有し、天台三門跡の一とし、代々皇族相承の制で、由緖ある梶井宮門跡である。其本堂は往生極樂院と云ひ、花山天皇の勅願によつて、惠心僧都の建立したものと言はれる阿彌陀堂である。今保護建造物である。三間、四面、單層入母屋柿葺で、小さな向拜がついて居る。其の異つた平面と、所謂舟底天井に特徵がある。間取は常行三昧堂として、內陣を中心に周圍を廻廊のやうにして、廻行に便にしてある。小さい堂に大きな丈六の阿彌陀佛を奉安したので　光背は天井に剩る。天井は其爲であらう。舟を伏せたやうに、穹窿狀になつて居る。堂內には欄間に二十五菩薩を描き、內陣背壁に兩界曼陀羅を描き、須彌壇は螺鈿を飾つて、光彩陸離なる、藤原風の美しいものであつたらうが、今は剝落して僅かに餘影を遺すだけだ。本尊阿彌陀三尊は、惠心僧都作と寺傳する。脇侍觀音王の跪座した形は、見慣れぬ姿である。此本堂は今の寺門からはいると、方丈の庭の奧の方に建つ關係になる。此の庭が又閑寂である。二段からなり、下の方丈前を聚碧、上を有淸と稱する。池泉柴石の布置の美よりも、滿地を掩ふ靑苔と、老櫻壯楓の霜葉の美しさが、私達を惹きつける。此處の方丈の襖は京都現代の巨匠達の彩筆で飾られて、寺僧は得意に案內したが、山寺の秋にふさはしいものでは無かつた。

三千院から寂光院へは、間の廣い谷を橫ぎる。此邊大原の山村である。山村の秋は今正に闌だ。秋の雨は草を染め、木の葉を染め、大地の髓までにじみ込んで萬物を彩る。黃紫紅褐、パレットの上では到底調合出來ないやうな色が現はれる。人間の言語では表はし得ないやうな、豐かな變化を見せる。楓や雜木の色付くのに不思議はないが、常綠を誇る松や杉の木立まで色付いて來る。土でさえ、巖でさへ色付く。時代のふるびの付いた古銅器のやうに、土中から掘り出された、漢唐の銀綠のさび

の浮んだ古陶のやうに、風情が増して來る。窯の中の神秘の火加減から生ずる。陶磁の窯變のやうに、自然は巧まない神腕で、巧智に驕る人間達をあつと言はせる。天地を籠めて粛然たる秋の氣は、此處に立つ私達の腹の中まで浸み込んで來るやうだ。秋山の懷に抱かれて、外界と斷たれた大原の山村は、今何から何まで秋だ、私達は此の秋の眞中を進む。

大原の寂光院は、推古天皇の朝、聖德太子が、御母の爲に創立せられたとも言ふが確ではない。此寺が有名なのは、平家の末路に、建禮門院が、一旦海に沈ませられた御命をながらへて、遁世された深山住ひの舊蹟であるからである。平家物語の傳ふる所は、誠に哀艷を極める。美しい筆つきの物語の中でも此灌頂の卷は、特に麗はしく書かれて居る。而して文治二年初夏、御鳥羽法皇が、女院を尋ねて、此幽居に御幸ありし始終は、世に大原御幸と稱されて、今は謠曲の一段ともなつて、大方の紳士に口づさまれる。山路の春秋共に麗はしいので、杖を曳く人も少くないが、舊蹟として、勝地として、興味があるので、建築はつまらないもののみだ。然し紅葉は美しい。寂光院は小高い處にある。其石燈を兩側から蔽うて、紅葉のトンネルが形成される。「緑蘿の垣」は秋は紅蘿に色付き、「翠黛の山」は錦繡して居るが、「村にかくとも錦にも及びがたき」事だけは變りがない。一字の御堂はあれど、甍も依然として檐も朽く、「諸不斷の香を焚き」「月常住の燈火をかゝぐる」にはあまりに改まつた體裁である。今の本堂は豐臣秀頼の再興で「寂光院御再興黄門秀頼卿御杖儀 淺井備前守息女 爲二世安樂」と云ふ額が懸つては居るが、其割に小規模のもので、或は大阪陣の爲めに其所願を果さなかつたのかも知れない。新建ちの庫裡も、寺庭の容子も、閑寂の趣を失ふ事が多い。裏門を出ると杉林のあなたに、女院御庵居の跡が指される。荒れはてた山林に今は夫れとも分ち難い。山路を上ると門院に供奉した、局達の小塔四基淋しく並んで立つて居る。

華かなりし平家一門の榮耀の夢から、一度は西海の波を潜られ、今は此の山奥に、先帝を始め一門の人々の、成等正覺に念ぜさるゝ、女院の御生涯は、哀れに悼ましい。平家物語の書き遺す所では、女院は先づ吉田の邊に閑居され、其處で落飾されて、文治元年九月の末に寂光院へ遷られたとある「山里は物の淋しき事こそあんなれども、世の憂きよりは住み好かんなるものを」と思し召して立たせ給ひけりとある。而して此處寂光院の傍に方丈なる御庵室を結びて、勤業されたとある。供奉の一人大納言の佐の局の歌「岩根踏み誰れかは訪はむ楢の葉の戰ぐは鹿の渡るなりけり」は充分に御幽居の容子を表はして居る。

傾く日影に紅葉はいよ〱紅い。寂かに散る一片の木の葉にも哀れはこもる。私が先年此處に參詣したのは若葉の頃で、大原御幸は文治二年卯月廿日とあれば、恰度その季節と同じ時分であつた。其新綠の爽かさを今も忘れ得ない。遊樂には初夏もよい、晩秋もよい。然し此處に庵居常住して、雲居の月をよそに見られた、女院の御日常はいかにも淋しい事であつた。山は寂光に包まれて永久に靜かである。

夜は東山の裾、下河原の漱石先生に因緣ある梅垣に宿る。宵は初冬の月が美しく京洛を照した。三十六峰は銀光に浴して、夢のやうに淡く、丸山公園の高みから見下す市街には美しく電光が燦めいた。私達は丸山公園から眞葛、八阪をかけて逍遙した。

翌十三日今日も晴れだ。朝は西陣の川島織物工場へ行く。今竣工を急いで居る歌舞伎座の、裝飾用の織物を此處で製作中であるので、其成蹟を見、其意匠を相談し、其色彩を定めるためだ。日本風に建築され、裝飾される歌舞伎座では、其の椅子張も、壁張も、カーテンも、多くの裂地は日本風に、別に織り出さるゝを要する。法隆寺唐櫃の螺鈿鳳紋は、今歌舞伎座の紋章となつて居る。之れを隨所に應用して、美しい日本風の織物が此工場で造られて居る。又音響上の注意から、天井や周壁を、金糸を織り込んだ裂地で張る事としたが、夫れも此分工場で織出されて居る。私は工場を隈なく巡覽して滿足する事が出來た。私の拙い設計考案に基づいて、大勢の工人達が、或は建築場で、或はかゝる工場内で、孜々として力を協せて成就して呉れる事を染々有り難いと思ふ。想へば幾萬人の力が集まつて、此一つの建築が完成されるのであらう。私は自分の責任と光榮とに思ひ惑つた。川島工場の一部では、又來春巴里工藝博覽會に出陳せらるゝ綴錦が織り出されつゝあつた。其處では工人の汗と血とが、一筬づつ織り込まれて行く、工藝品の貴さを感ぜざるを得なかつた。參考室には、和漢洋の珍らしい裂が陳列してあつた。正倉院や、法隆寺で見て來たやうな古代裂もあつた。嘗て今泉也軒先生の講話に聞いた名物裂もあつた。支那、埃及、波斯、西歐、各國各時代の裂片が、とりどりの美しさを以て陳列されて居た。之れは先々代川島甚兵衞氏の蒐集する處で、寔に稀觀の好參考品である。川島店を辭してから、二三の俗用を果して、晝は陋い大市で名物の「すつぽん」に舌鼓を打つた。

午後又所用を了へてから、時間は遲すぎたけれど、誘はるゝまゝに高雄へ行く。高雄への道は、「御室、宇多野、平岡を經て、緩るい傾斜で車も樂である。もう夕暮近い事とて、歸路を

急ぐ紅葉の客の群を、分けて進まねばならなかつた。高雄では刻々せまる夕暮に、落付いても居られず氣ぜはしく逍遙した。紅葉の美しさは、昨の修學院、大原のと又別趣である。老楓喬亭として楓林の大觀をなす所は之にある。紅黄を織り交ぜた楓葉の大毛氈を敷いた景觀は之れにある。紅楓樹下に觀客雜踏して、男女其歡をつくさんとする、賑かな世態は之れにある。先づ山階を下つて河邊に近づく時、折からの落陽は最後の光を放つて、私達は葉越しの秋光に照らされて、醉客のやうな顏付になつた。流れも名も共に美しい清瀧川は、滿山の紅紫黄に照り映えて、曾遊の昔に變らないが、赤く彩られた高雄橋、橋畔の老樹數株、枯死し又枯死に近いのには驚いた。丸山四條の繪に描き出された高雄の景觀は、多く此の橋畔に老楓の參差する所である。實の所老楓の紅葉其のものは、老いたる血が濁るかして若い楓のやうに鮮かな紅色を呈さない。併し葉隱れに見せる、槃桓たる、蜿蜒たる、老樹の姿態には蒼古の貴さがある。私はつくづくと亡び行くものを惜しんだ。

石段の路を二丁程登ると、樓門の建つ廣場に出る。門には仁和寺宮覺信法親王の筆になる。神護國祚眞言寺の大額が掲げてある。神護寺は、紅葉と、和氣清麿と、文覺上人とを以て名高い。紅葉の高雄山は此寺の境域である。當寺は和氣清麿の建立で、もと神願寺と稱したと傳へらるゝ。公を祀る護法善神社は、舊く山門内の方丈の西に在つたが、明治の御代に別格官幣社となり、護王神社の名を給はつて、今は京都御所の近くに移された。其舊社址の傍の路を北に登ると清麿の墓がある。當寺は又一時弘法大師が此處に住し、結縁灌頂を執行したので名がある。其灌頂記は大師眞筆の證左として貴重されて居る。爾後寺運衰頽したが、仁安年中文覺上人當寺に入るに及んで、壽永元年再興する事が出來た。文覺は後白河法皇並に源賴朝の信賴を受けたので、從つて寺運も拓けた。此山より續く愛宕道の際に、上人の墓もあると言ふ。永仁五年御宇の性仁法親王當山に移られてから、高雄御室の名が出來た。今山門内北側にある方丈は、嘗て高雄御所と稱された玩玉院の跡である。

寺内の建築は金堂と講堂及大師堂が遺る。皆南面して、前二者は相前後して、大師堂と講堂は金堂の西南に接して建つて居る。賑かな紅葉の客は講堂の後を眞つ直ぐに地藏院の茶へ拔けて、本寺に參拜せぬものも多い。金堂、講堂、山門は共に元和九年の再建と言はれる金堂の本尊は國寶の藥師佛で、講堂は又五大堂と稱して、五大尊、五大虛空藏を安置する。大師堂は元弘法大師の住房跡と曰はれ、仁安三年の建立と云ふ寺傳だが、桃山の大修補と見られて居る。此の寺には寺寶割合に多く、佛體

の他に繪畫や文書の貴重のものが藏されて居る。但し薄暮の參詣で、之を拜觀する時間は勿論無かつた。

五大堂の後方を、又谷を降りて登ると、地藏院の廣場である。淸瀧川は大きく灣曲して、遙かに此の高臺の下を周る、其の山腹は眞紅に燃えて、當寺滿山の紅葉の中で、此處が一番の景觀と稱される。定に夕陽はもう山陰に隱れても、燃えるやうな赤楓に消えやらぬ夕映えの色鮮かである。觀客は此の高い山頂から、小さい土器を投げて戲れる。片鱗として岩燕の如く、飛行機の如く、落葉の如く、空中に愉快なカーブを構へ其運動は面白い。薄暮は次第に谷合から湧き上つて、將に全山を包まうとして來る。遊客はもう散じて、殘るは私達だけだ。夫れももう歸らねばならなくなつた。歸路山門の前、大師の硯岩と稱する邊から、見返しの紅葉を俯瞰する時分は、全く薄暮の世界であつた。紅葉は紫黑に黝んで黃葉のみ殘光に映りはえて夕靄の罩める、黝黑の樹木に、螺鈿の如くにかゞやく風情も、餘韻の深いものである。川嶋氏の別莊が、淸瀧川の東岸、高雄道の入口の傍にある。其處に小憩して紙燭の下に茗茗をすゝつた。窓外には高雄山は、夕靄に腰以下をぼかされて、黑い固りとなつて、目前に突つ立ち、前栽の芝生のみ湖の如くに薄く光つた。遊客全く散じ盡くして、靜寂の氣深沈として迫まる。下には暗中摸索

たる淸瀧川の水聲が聞える。私は東坡が司馬溫公の獨樂園を詠んだ詩に、靑山在屋上、流水在屋下。中有五畝園、花竹秀而野。と云ふ句のあるのを思ひ浮べた。

高雄を出る時には日は全く暮れた。輝く双燈と喇笛とに、僅かに山路の暗を破つて、車は京へ向けて、直走りに走つた。下河原の宿にあはてゝ行李を整へて、夜の汽車に乘つた。汽車の寢臺の夢は、絹のゝ如く、圓かではなかつた。覺むれば曉。一點の浮雲もなく、富士は山頂より山麓まで、其全身を裸出して車窓に溢れた。十八日の殘月は僅かに下端を缺いて中空に掛り、十四日の旭光は爽かに山頂に匂つた。幾回か通る東海道の線路でも、斯く完全に富士を見る事は全く稀らしい仕合である。私達の弟を送つた旅も仕合せに畢つた。

中林竹洞と山本梅逸

——本朝畫人傳の十一、十二——

村松梢風

一

安永の頃、名古屋杉之町通桑名町邊に、中林玄棟といふ產科醫者があつた。此の人は醫者にしては學識があり、禪の修養を得て、頗る人事に通じてゐたが、肝心の醫業は餘り流行らなかつたと見えて、家政甚だ困難の中に一子を擧げた。安永五年のことで、其の子は通稱大助、字は伯明と呼んだ。安永五年と云ふと、かの大雅堂の歿した年である、大助は幼い時から非常に多病で、七歲の時に一度は死にかけたくらゐの大病みをしたが、其の後は比較的無事に成長した。が、玄棟は、到頭醫者の門戶も張り切れなくなつて一時何處かへ轉退することゝなつたので、十一歲の悴大助をば、自分の姉の緣付いてゐる枇杷島の山形屋某といふ者の所へ預けることになつた。大助はこの伯母の手許で數年間養はれた。

大助は生れながらに繪が好きだつた。ある夜、月の冴えてゐる夜だつた。大助は枇杷島の橋へ出て、ありあふ消炭（けしずみ）をもつて橋板に辨慶の繪をかいた。なか〳〵小兒の腕とは思はれぬので、見る人々を驚かせたことがあつた。師に就くといふことはなかつたが、畫手本ぐらゐを見て勝手にかいてゐた。父は素より、伯母の家でも、此の子に好む道をやらせる考へだつたので爲すがまゝに捨てゝ置いた。大助は十四歲になつた。

或る日大助は本町を通ると東壁堂といふ書林があつた。店へはいり込んで繪手本を買はうと思つて撰り眺めてゐると、其處に二人の客が居たが、一人の客が大助に聲を掛けて

「そなたは繪手本を買うて何にする」と云つた。

「繪を習ふのです」

するど客はしげしげ大助の顏を眺めてゐたが

「さてはそなたは餘程繪が好きと見えるの。だが然し、繪を習ふならば、こんな摺物では上手にはなれないよ。儂は繪師だから、繪をかくすべを教へて遣らう。儂は山田宮常といふ者で京町に住んでゐるから、そなた若し本統に繪を習ふ氣があるなら儂の所へおいで」

もう一人の客も口を添へて云つた。

「繪を稽古するなら良い先生に就かねば駄目ちや、宮常先生なら申し分ないお方ちや。そなた早くお弟子にして貰ふて習ひなさるがよい」

大助は突然のことなのでハッキリした返辭も出來なかつたが、然し子供心にも非常に嬉しく思つた。二人の客にお辭儀をして繪手本は買はずに家に歸つて、かう／＼と話しをすると、家でも無論異存はないので、其の翌日宮常の宅を訪ねて行つて、師弟の契りを結んだのだつた。山田宮常は字は吉夫、通稱平藏、咄々齋堂、雲嶂と號した。京都の人で、名古屋へ來て住んでゐた。專ら山水動物を畫き、古畫の臨摹に長じ、中京の南宗畫家と交遊して其の盟主として押されてゐた。張月樵の如きも、宮常に私淑して畫技を進めたと云はれてゐる。大助は一年ばかり雲嶂の教を受けてゐた。が雲嶂は、彼を行末賴もしき少年と見たらしかつた。大助が十五の時、彼は雲嶂に伴はれて初めて神谷天遊の家に行つた。

天遊は俗稱傳右衛門、諱は元等、字は齊卿、天遊と號し、名古屋赤塚町の富豪で、家業は初め質商だつたが後は味噌溜油醸造を業とし、永樂屋と云つた。通稱永傳で通つてゐた。天遊は頗る學識があり、且つ古書畫の收藏家として知られて居り、旁ら刀劍古器名香等を好んで多く風流高雅の士と交遊してゐた。彼自らは殆んど畫かなかつたが、博く書を讀んで古人の論ずるところを審かにし、畫に對しては一家の識見を有し、後進を誘掖することに於て常に力を盡した人だつた。雲嶂は自分の弟子の大助を天遊に托して、其の薫陶を受けさせる積りだつたので、其の事を賴むと、天遊は快く承諾して大助を自分の家に引取つて教育することになつた。爾來大助は同家の所藏の古畫を臨摹し、或ひは天遊より畫論を聽き、或ひは古人の用筆用墨の法を教へられたりして、始めて南宗の奧旨を窺ふことが出來た。手腕は日に日に進歩した。

すると、大助より數年遅れて天遊の門に入つた少年があつた。それは名古屋大道町に住んでゐる彫刻師山本友右衛門といふ者の悴で、幼名を卯年吉と呼ぶ少年だつた。卯年吉は大助より七つ年下で、天明三卯年の十月二十日に生れたので、さう名

附けられたのだつた。父の友右衛門は元尾藩の組同心だつたが、仔細あつて浪人した後は彫刻を以て糊口としてゐるのだつた。元來組同心などといふものは俸祿と云つても僅かなので、各自手內職があつて一家の糊口を補つてゐた。だから浪人しなくても小祿の者は必ず內職をもつてゐるのが普通だつた。卯年吉は長男で、弟があつたが夭死した。妹が一人あつた。さういふわけだから生活は豐かな道理はなかつた。卯年吉は幼い時から父の家業を見習つて草花や鳥獸の形を畫いて喜んでゐた。父は自分の業を嗣がせる積りだつたらうが、然し其の子は彫刻よりも繪を描くことが好きだつた。卯年吉が十ばかりの時、父の友右衛門は或る寺の彫刻に雇はれて毎日仕事に行つてゐた。卯年吉は毎日午の割子の辨當を持つて寺へ行つた。或日其の寺で彼が戯れに何か繪をかくと、住職がそれを見て不思議がつて、

「これはどうも不思議な子供だ」

と云つて、試しに庫裡の襖四本へ松の繪を描かせて見た。卯年吉はそれへ見事に一幹の老松を描いた。人々は舌を卷いた。

卯年吉は十二の時不幸にも父を失つた。それ以來彼は母の手一つで育てられた。彼の母は和歌の嗜みがあり、女としては相當に學問があつたので、父の歿後はわけても貧乏な中で、讀書や手習を母から教はつた。母は此の子を綺麗にしようと考へて最初山本蘭亭に就いて學ばせた。蘭亭は名は直秋、有秀齋と號し、初めは狩野友竹に學んだが、後駒新の門に入つて專ら浮世繪を描いた。駒新は名は鉦甫、通稱新兵衛、家號を駒屋と云ふので、略して駒新と號したのだが、艶麗の筆を揮つて劇場の看板などを描いて名を知られてゐた。馬琴の「羈旅漫錄」にも名古屋名物の一つに算へられた人だつた。

卯年吉の絶倫の天才は間もなく蘭亭を驚倒させてしまつた。蘭亭は永く此少年は已れの手に留めて置くべき者ではないと思つたので、神谷天遊に師事させて支那上代の畫を學ばせることにしたのだつた。

或時天遊は大助と卯年吉の二人を伴れて門前町の萬松寺へ詣つて、其の寺の什物になつてゐる元の李息齋筆墨竹と王元章筆墨梅とを拜觀させた。これは當時世に隱れなき名幅だつた。兩人は此の名畫を見て、其の筆致用墨の高妙なるに心醉して恍惚として歸つて來た。家に歸ると天遊は二人を側へ呼んで

「さて、お前達はあの畫を見てどう感じたか」と質問した。

すると大助は

「わたくしは墨竹の筆格に驚きました」と答へた。

卯年吉は

「わたくしは梅の繪の高妙なのに[illegible]しました」と答へた。

さうして兩人共溜め息をついてゐた。

「よし、よし、二人共今の氣持を永久に肝に銘じて決して忘れてはならないぞ。では儂がそなた達に今から雅號を附けて遣らう」

天遊はかう云つて、大助に竹洞、卯年吉に梅逸といふ號を與へた。

二

大晦日のことだつた。天遊は竹洞を膝下へ呼んで

「さて、そなたも今年十九の齡が暮れようとしてゐる。明日からは二十の春を迎へて丁年になるのだ。もはや一人前の男ぢや。今後は獨立して、一家を成さなければならぬ」と云つて、成昌といふ名を與へた。

かうして竹洞は廿の春を迎へる早々天遊の家から暇を取つて獨立した。とは云つても家を持つ力はないので、懇意な寺の座敷を借りて自炊をしながら相變らず畫の研究に沒頭してゐた。

此の年の七月京都では應擧が歿した。寛政七年であつた。秋には、神谷天遊、山川墨湖、中村綠泉、內田蘭渚等中京の南宗畫家が蓬瀛勝會といふを組織して、七ツ寺で書畫會を開いた。そして名古屋近郷の名蹟數百幅を展覽した。當時遊歴に來てゐた十時梅厓も其の社盟に加はつた。

當時既に竹洞の手腕は優に一家を成すに足るものがあつたが、無名の青年のことだから畫の依賴もなく、生活は可成り困難だつた。彼は親讓りで學問を好んだが、殊に師天遊の感化を受けて熱心に書を讀んだ。父の玄棟は嘗て竹洞を諭へて「學問は文字ではない、書籍は糟粕に過ぎぬ」と云つた。讀書をし乍らも常に其の言葉が腦裡から去らなかつた。そこで彼は或時總見寺の卓洲和尚に謁して禪の指導を受けることになつた。卓洲和尚は有名な碩學で且つ畫もかいた。竹洞の學殖は畫と共に進歩した。

享和元年、竹洞は廿六歲だつた。其の年の冬十一月「竹洞畫稿」を脫稿した。同時に着手してゐた彼の著述「畫道金剛稱」も其の翌月脫稿した。

翌享和二年の三月には、昨年の稿畫道金剛稱が發刊された。同時に「竹道畫論」を脫稿した。畫道金剛稱に於て彼は堂々として古今の繪畫を評論し、或ひは畫の心髓を說き、或ひは當代の惡風を痛論した。特に彼は此の頃流行してゐる畫道の俳氣を排斥した。彼は最も蕪村の俳畫の影響を惡しと云つて、蕪村は俳畫の一名手なれど、南宗正派の眼より見る時には畫格正しからぬものなりと云ひ、また大雅の畫風も、高遠豁達の趣は得た

れども正統の畫に非ずとして、畢竟大雅蕪村は學んで益なき畫なりと論斷した。

竹洞が新進氣銳を以て、堂々と鼓を鳴らして、世上の妖畫を排斥し、南宗正派の規格を教へて、自分から一代の師表たらんことを期してゐるかのやうな態度は、たしかに人の注目に値する事柄だつた。

其の頃になると、弟分の梅逸も畫道が頗る上達した。梅逸の畫は全く天稟だつた。うまさに於て彼に匹敵しうる畫師は既に無からうとさへ思はれるくらゐだつた。梅逸が初めて天遊に謁した時は彼はまだいたいけな少年だつたが、天遊は其の少年に畫をかゝせて見て、内心甚だしく恐れをなした。そこで彼は少年に向つてから云つた。

「人を師として流を測るといふ事は道理であるが、師を眞似てはいけない。たとへ鷄口となるとも牛後となる勿れと昔の人も戒めてゐる。ましてやありふれた師に隨つてゐると、あたら一生を牛後となつて終らなければならない。そちは師を求めずして自分で勉强するがいゝ。さうしたならばそちの流は美しく名が高く上つて、其の功績は永世傳はるだらう。そも〳〵唐土には畫に南宗北宗の兩派がある。是れが畫道の濫觴である。然るに北宗は早く日本に傳はつて今の狩野派となつた。が南宗はまだ開けて淺い。大雅蕪村等といふ人が出たが、これは未だ芽生えである。花鳥畫も、沈南蘋や僧高泉等が渡來したが、どれも末流枝葉のみ傳へて、本宗の畫の傳はらぬのは慨かはしいことだ。併し幸ひ儂の家には南宗の古畫が數十本あるから、そなたはこれを基にして自身の力で道を拓くがよい」

梅逸は喜んで天遊の教を奉じて、それより後は專心元明諸大家の遺跡を臨摹することを勉めて、次第に南宗の筆格畫法をさとるやうになつたのだつた。

其の頃、或る書肆に舶來の芥子園畫傳があつた。當時はまだ日本で模刻した物が無い時代だつたので、非常に高價だつた。梅逸はそれを見て欲しくて堪まらなかつたが、貧生の身では到底手が出せなかつた。そこで書肆の主人に向つて事情を話して借りて來て、一晩中に此の畫譜を寫してしまつた。

享和二年の五月、恩師神谷天遊が歿した。享年八十一歳だつた。竹洞梅逸の愁傷落膽はいかばかりであつたか。竹洞は廿七、梅逸は二十であつた。

或日竹洞は梅逸に向つて

「先生が亡くなられてしまつたから俺達はもう名古屋に居ても詰まらない。俺は京都へ出て勉强しやうと思ふが、伴も一緒に行く氣はないか」と云つた。

勿論梅逸は大賛成だつた。身輕の兩人は直樣旅支度をした。
名古屋に内田蘭渚といふ好事家があつた。神谷天遊の友で、竹洞も交りが深かつた。蘭渚は竹洞に向つて
「君が京都で書畫の名幅を見たならば必ずそれを臨模して送つて貰ひ度い」と云つた。
蘭渚の心では、若い二人が京都へ行つても、必ず生活の資に窮するに違ひない、で名畫を臨摹させて、其の報酬を生活費に送つて遣らうと考へてゐたのだつた。
兩人は道を急いで京都へ向つた。
「竹洞さん、あんたは誰か京都に知つてる人がありますか」と梅逸は云つた。
「否、別に知人といふのもないが、鳩居堂の主人熊谷直孝といふ人から俺は手紙を貰つたことがある。其の手紙に京都へ來てはどうかと云つてあつたから、先づ鳩居堂を訪ねて見る積りだ。行けば惡くは扱ふまいと思ふ」
「さうですか、それなら安心です」
京都へはいる日は合憎雨が降つてゐた。兩人は旅に日を重ねて、身に垢じみた着物をまとひ、おまけに雨にそぼ濡れて見窶らしい姿をして、日の暮れ方に鳩居堂の店先きへ立つた。
竹洞は店の内へはいつて行つて
「私は名古屋の中林竹洞といふ者です。今日名古屋から出て參りました。御主人にお目に掛り度いからお執次ぎを願ひ度い」
店の者は見ると乞食見たやうな風采で、門口にはもう一人同じやうなのが立つてゐる。大抵物貰ひだらうと思ふので馬鹿にして執り次いで呉れない。
「何の御用か知りませんが、主人は夜は人にお目に掛りませんから、用があるなら今夜は何處ぞで宿をお取りになつて、又明日お出でになつては如何ですか」と冷淡に突つぱねた。
竹洞は憤然とした。彼の意中では、鳩居堂と云へば、文人墨客往來の絶えぬ老舖だ、まして主人から書面も貰つてあるのだから、竹洞と名乘つて行けば下へも置かず歡迎して呉れるやうに思つて來たのが大いに當てが外れてしまつた。非常に腹が立つたけれども、併し店の者などを相手にして兎や角云つて見ても仕方がない。是非共主人に會つた上で腹をきめなければならないと思つたので、
「私は當家の御主人から書面を以て招かれたので、かうして道を急いで出て參つたわけです。宿をとるくらゐなら爰から直ぐ樣國表へ引き返します」と云つて動かなかつた。
店の者も持て扱つて主人の直孝に此の事を告げた。此の鳩居堂といふ家は、京都寺町姉小路角にあつて、薫香、筆墨を商つ

てゐる老舗で、其の先祖は熊谷直實から出てゐる。直實の末裔直心なる者が京都へ來て醫を業とし、鳩居堂と號した。其の子が藥種屋を業とし、三代目から匂ひ香を賣り出し、五代目の直性の時から筆墨を兼業としたのだつた。直孝は六代目で、伯爾と號し、彼の代に至つて一層盛大となつて頗る富んでゐた。直孝は風雅の人で、文人墨客との交際が廣く、賴山陽等も屢々此の家に來た。傳說に依ると、竹洞が京都へ上つたのは、賴山陽や田能村竹田等が、尾張に竹洞のあることを聞いて、鳩居堂の主熊谷氏と謀り、書面を遣つて竹洞を招いたと云はれてゐる。併し、山陽が上京して初めて王城の地に旗幟を立てたのは文化八年のことで、竹洞が京へ上つたよりも更に九年の後である。山陽は此の時はまだ廿三歲で、故鄕廣島に幽居中の身の上だつた。竹田の最初の上京も文化二年であつたから、これまた竹洞の上京とは何等の因緣も有たないのである。

直孝は、竹洞の著述を讀んで敬服して態々書面を送つて上京を勸誘したことがあつた。がそれから餘程經つてゐるのですつかり忘れてしまつてゐた。彼は今執り次ぎの言葉を聞くと直ぐ其の事を思ひ出して、さては竹洞が來たのかと

「其の人なればよう知つてゐる疎忽をしては成らん」

と云ひ付けて、直ぐ樣自身で店先き迄出迎へた。

「これは〳〵中林竹洞先生ですか。只今は店の者が存ぜぬので失禮を申し上げました、さあ〳〵お通り下さい」

と鄭重に請じ入れた。竹洞は初對面の挨拶の後梅逸を紹介した。主は酒食を還して互ひに雜談を交換して見ると、果して竹洞の學說の深いのに直孝は感心して、其の日から隱宅へ留めて置くことになつた。が、竹洞も梅逸も永く京都に住ふ積りだつたので、間もなく木屋町三條上ル露地内に小さな借家をもとめて引き移つた。直孝が自身で借家の請人になつて呉れた。

二人とも名を揚げるには江戶か京都でなければいけないと思つて出て來たのだつた。そして、多少の金は支度して來たけれども、借家や何や彼やで大概使つてしまつた。畫を賣らうとしたところでそれは勿論無理だつた。が、鳩居堂の世話で扇子の繪位は描いて多少の收入はあつた、兩人は隔日替り番に飯を炊くことにした。そして扇の繪を描いたり、暇があると諸方の寺院を廻つて名畫を模寫したりした。これは約束に依つて故鄕の内田蘭渚の所へ送つてやつた。すると蘭渚から若干か宛の金を寄越した。かういふ生活だから貧乏は極端だつた。食物は命を繫いでゐればよいといふ程度で、たつた一枚の帷子も縫ひ直さないから行が抜けてしまふといふ有樣だつた。併し、ふたりともそんなことは苦勞にならなかつた。

すると、其の翌年の夏の終り頃、竹洞の父玄棟が大病の赴きを報らせて來た。驚いて歸省することになつたが、さうなると梅逸も獨りで此處には居られないのでこれは遊歴に出ることになつた、鍋釜などは知り合ひの家に預けて、竹洞は名古屋へ急行した。梅逸も江州迄一緒に來て其處で別れた。玄棟の病氣は遂によくならずに、八月六日に歿した。名古屋の梅屋寺といふ寺へ葬つた。

竹洞はひとり子だつたので、父なき後は彼の手で母を奉養しなければならなくなつた。そんな事情から京都へ再遊も當分覺束なくなつた。間もなく彼は結婚した。妻は村上氏といふ家の出だつた。

三

一方竹洞と袂を別つた梅逸は、江州、攝津、播州、四國、周防と足の向くが儘に遊歴した。既に無類の筆力を有する梅逸は、遊歴に出ると反つて困難しなかつた。廻り廻つて越前鯖江に遊び、越後から越中を經て加賀へも遊んだ。

加賀の或る處で揮毫をした時、或人から明皇吹笛の圖を望まれたが、梅逸は其の故事を知らなかつたためにいたく赤面しなければならなかつた。それ迄彼は畫の手腕を自負してゐたが、畫師たるものは讀書をしなければならぬといふことを此の時痛感したのだつた。

金澤には久しく滯留した。すると其の宿の主人が多少繪心のある者だつたので、梅逸が若年ながら絶倫の手腕を有することを知つて大いに嘆賞してゐた。偶々金澤に書畫會の催しがあつた。此の日は特に藩侯も臨席されて席畫を見られることになつたので、列席の畫師は皆御繪師の格式で、普通の者は猥りに出入さへ許されなかつた。が宿屋の主人は中に懇意な御繪師があつたので其の人に梅逸を紹介して、席畫の列に加へて貰ふことになつた。梅逸はやがて藩侯の御前で揮毫を命ぜられると、謹んで筆をとつて、さかさまに地に下りてゐる雁を頭から描き始めて最後に足を描き、補景まで添へた。それが實に見事な筆力だつたので藩侯も其の妙筆を嘆賞され、傍觀の御繪師達も彼の手腕に驚いてしまつた。それから梅逸の名は忽ち城下に喧傳された。

梅逸は數年を遊歴に費した後名古屋へ歸つて來た。竹洞も名古屋で暮してゐた。

梅逸には妹が一人あつて、うたと云つた。うたは天道町の寺井半左衛門といふ者の所へ嫁した。寺井家は相應に暮してゐた。梅逸は此の妹の家に寄食して其の離れ座敷を借りて寢起き

をしてゐた。彼は明け暮れ繪筆を握つてゐて他の事は顧みなかつた。元來彼は非常に無頓着な人間で、なりふりは少しも構はなかつた。妹が新らしい着物を買つて着せて遣ると、やがてそれが破れて、膝頭が露はれようが、裾に襤褸を引き摺つてゐようが替へるといふことはなかつた。夜寝る時も其の儘で、只、帶の結び目をグルッと前へ廻すばかりだつた。そして朝起きると後へ廻した。垢が付かうが破れようが頓着なかつた。偶に妹が世話を焼いて

「兄さんそれでは餘り見苦しい」と云ふと、梅逸は

「俺はさうは思はんが、お前が見苦しいと思はゞ新しい着物を買うて呉れ」

梅逸は少年の頃から横笛を稽古して上手に吹いた。後には東儀近江守に就いて大極の秘曲を許された程だつた。すると、尾張藩に大道寺某といふ大身の武士があつたが、此の人は雨田と號して畫もかき、また笛を吹いて樂みにしてゐた。此の事から梅逸は大道寺と殊に親しく交はつてゐた。大道寺は梅逸が獨身で居るので妻を持たせようと思つて、丁度自分の家に上女中に置いてゐるあいといふ女は、よしある者の娘で、人柄も温和だから、梅逸の妻には至極宜からうと考へたので双方の心をきいて見ると異存がないので、自身で媒酌をしてあいを梅逸の所へ嫁入りさせた。妻が出來て後も妹の家の離室を借りて暮してゐた。あいは餘所眼では云ひ分のない女だつた。處が、どういふわけだか夫婦の生活は圓滑にいかなかつた。一二年經つとあいは離縁になつた。離縁になつたあいは其の後は再嫁せず落髪して尼寺へはいつてしまつた。どういふ理由が其の間にあつたのかといふことは不明であつた。其の後梅逸はさる人々の媒介で清洲から二度目の妻を迎へた。妻の名はてつと云つた。今度の妻は賤しい身分の者で、其の上性質も温和しくはなかつたが、不思議なことに夫婦仲は至極圓滿に納まつてゐた。

其の頃は梅逸の畫名もまだ一般には知られなかつた。或る年清洲に百姓一揆があつた。丁度其の時梅逸は清洲へ行つてゐたので、其の狀況を目撃して繪にかいた。此の繪に非常に評判になつた。さうかうするうち、名古屋でも梅逸の右に出る畫師はないと云はれるやうになつた。

すると爰に端なくも彼の開運の機會が到來した。それは、加賀の金澤城の新御殿が落成したに就いて、江戸から文晁を招いて襖の畫をかゝせることになつたが、いま一人をと物色した結果名古屋から梅逸を招くことになつた。花鳥畫家としての梅逸の技倆が稍々一般的に認められて來てゐたのと、いま一つ他の理由は、時の加賀侯の簾中は尾州家の姫君であつたので、其の

縁故を以て特に名古屋の繪師を呼ぶことになつたのだつた。

さういふ次第で梅逸は金澤へ行つて、文晁と肩を並べて畫作をした。文晁も梅逸の手腕に敬服して隔てなく交際したが、仕事もほゞ終りを告げようとする頃になつて、文晁は或る日梅逸に向つて

「貴君はそれ程の腕があるのに何時迄も田舍に居つては駄目だ。私が後援して上げるから江戸へ來て見てはどうか」と云つた。

梅逸は喜んで、仕事が終ると其の足で文晁と一緒に江戸へ行つた。文晁は梅逸の爲めに斡旋して浮世小路の八百善で書畫會を開いて遣つたが、其の會は、可成り盛會だつた。お蔭で梅逸は一時に江戸の人々から名を知られて、名流と交際を結ぶやうになつた。中にも大窪詩佛は特に梅逸に對して好意を寄せて引き立てゝ與れた。

當時は文晁の全盛時代で、門人數百に上り、其の生活は萬石以上の大名に匹敵すると云はれたくらゐだつた。或る日梅逸が寫山樓を訪問すると、折柄文晁は揮毫最中だつた。畫室へ通つて揮毫するところを見てゐると、文晁は頻りに刷毛を使つて描いてゐた。畫の法から云ふと刷毛を使ふのは變例だつた。そこで梅逸は訝しさうに

「先生は刷毛をお使ひになるのですか」と遠慮もなく云つた。

すると文晁は一寸恥ぢたやうな顔をして

「刷毛を使ふことは畫の法ではないが、今はかういふ時世で、それに便利なので近年刷毛を使つてゐます」と答へた。

文化文政時代の文人墨客にして酒を愛せざるものはなかつた。苟も酒を嗜まされば詩人や畫家の仲間入りは出來なかつた。處が梅逸は生れつき酒が嫌ひだつた。或時大窪詩佛の紹介で、有馬侯に謁して詩酒の宴に侍つたことがあつた。詩佛は有名なる酒家だつた。其の時侯は大杯をとつて梅逸に賜つた、が梅逸は前述の通り下戸なので

「私は御酒は頂けませぬ」と云つて辭退して杯を手に取らなかつた。

悲しいかな梅逸は田舍育ちであるために貴顯に對する交際の作法を知らなかつた。彼は頻りに辭退して杯を受けず「私は性來下戸で御座りまする」と云つてどうしても飲まなかつた。詩佛は側に居て背に冷汗を流したけれどもどうすることも出來なかつた。宴が終り暇を告げて邸を出るか否や詩佛は梅逸の不作法を叱り付けた。

「でも私は飲めないのだから」

「飲めても飲めなくても飲むんだよ。杯を受けないなんて無禮

千萬な話だ。どうも貴公は田舍漢で困る。第一、酒も飲み得ないやうな奴に詩だの繪だのやれやうがないのさ」

上戸黨の詩佛は小言を云ひ乍ら大いに酒焔を吐いた。

其の後梅逸は又もや詩佛に伴はれて、詩佛の主君佐竹侯の宴に侍つたが、今度は前のことがあるので、杯を受けて苦しい思ひをして呑んだ。かういふことが度び重なつたので終ひには梅逸も一と通りの酒家となつた。彼は江戸には永く留まらずして再び名古屋へ歸つたが、詩佛との交際は終生變らなかつた。後年梅逸が京住居をするやうになつてから、詩佛が京都へ遊歷した。二人は大いに舊交を温め、淀川の舟中にて、梅逸が畫を作れば詩佛がこれに讃し、詩佛が畫けば梅逸が讃し、兩々相俟つて絶妙であつたといふことが五山堂詩話に載つてゐる。詩佛が歿して後も、梅逸は杯を擧げるごとに詩佛のことを追懷して、別に一盞に酒を盛つて詩佛の靈に供へるのだつた。

四

竹洞は數年間郷里で暮した後、文化十二年に再度の上京をした。今度は母を奉じ、妻を携へて上つた。それより三年前文化九年に竹洞畫稿を上梓した。此の頃は最早彼の名聲も廣まり、畫家としての地位も定まりかけてゐた。

彼の妻は、名古屋に居る時一女を產んだが、これは夭死した。そして、京都へ出た翌年初の男の子を產んだ。其の子は余吾と名づけた。處が、妻は產後の肥立ちが惡しく其の年遂に歿してしまつた。老母と乳吞兒とを抱えて如何ともしがたかつた。間も無く彼は二度目の妻を迎へた。

其の頃から竹洞は佐野少進の門に入つて經義を尋ねてゐた。處が、幾許もなくして少進は歿したので、其の後は若槻幾齋に就いて問ふてゐた。畫を需める者があつても容易に筆を執らなくて大概讀書に時間を費してしまつた。或人がそれを批難して

「貴君は畫が本業なのか、それとも今から儒者になるつもりなのか」

と云つた。竹洞が近來儒學に專心するの餘り丹青に不熱心だといふ譏りは既に度び〲彼の耳にも入つてゐた。竹洞も迷つた。彼は儒者を志すわけでもなく、勿論、畫筆を捨つる考は毛頭ないのである。自分が讀書に沒頭してゐるために本業がおろそかになつては全く仕方のないことだ。今後は學問を廢して純粹の繪筆の人とならうかしら……と彼は考へて、幾齋の門人で莫逆の交のある摩嶋松南に書を送つて、自己の心事を云つてやつた。松南はこれを讀んで非常に驚いた。直ちに返事を書いて、諄々言を極めて竹洞の謬見を說破して寄越した。竹洞も忽

ち迷霧が晴れ、自から愧ぢて其の後は益々學事に熱心した。

かういふ傾向であつたから、他は世間の畫人の氣質を喜ばず、平常餘り畫家と交際しないで、多く儒家や禪門に出入してゐた。當時の文人畫家の多くが、口に風流を唱へて内實は名利に奔走し、心腹陋劣なるに彼は憤慨して、それらの徒に向つては固く門戸を閉ぢてゐた。

併し、彼が門戸を鎖せば鎖す程、其の名聲は彌々高くなつた。彼の畫は、青年時代も、中年以後も、晩年も、殆んど變化はなかつた。たゞ壯年の頃から次第に筆墨圓熟し、老境に至つていよ／＼高妙の域に達したのを見るばかりだつた。それは何故かと云ふに、彼は幼年の時から師谷文晁の家に居て其の薫陶を受け、多くの古畫を臨摹して、畫法を十分に修得し、出發點が既に南宗の甚だ高い處にあつたからだつた。だから、青年時代から畫の規矩が既に定まつて、生涯其の大道を離れなかつた。青年時代に彼が古畫の模寫をしたことは夥しいものだつた。京都で唐畫の名幅を見る度びに縮寫して郷友内田南渚の處へ送つた物ばかりでも、其の數が百二十六點に及んだ。

竹洞は山水を最も得意とした。殊に米法を得意とした。然しこれは容易に描かなかつた。

「米法は最も六ケ敷いものだが、人が其の苦心を知らない。だから特に乞はれた場合のほかは描かないことにしてゐる」と彼は常に云つてゐた。

青緑山水にも彼は少なからぬ苦心をした。或時山陽を訪問すると、山陽は丁度揮毫最中だつたが、非常に骨を折つて楷書をかいてゐるのを見て竹洞は、

「楷書は六ケ敷いですな」と云つた。

「全く六ケ敷い」と山陽が顔に血を漲らせ乍ら答へると、

「畫家の楷書は畫家の青緑のやうなものだ。作者が苦心する程に觀る人は賞めて呉れない。仕方がないからまあ、たゞコツ／＼やるんだね」

「さうだ、コツ／＼やるんだ」

山陽はカラリ筆を抛つて、竹洞と顔を見合つて哄笑した。

竹洞の京都に於ける雅友は、山陽、海屋、春琴、一惠齋、星巖等が主なる者だつたが、竹洞は自身の方から交際を求めるといふことはなかつたから、自然に氣持の合ふ人とだけ交際つてゐた。併し、山陽とは特別親交があつた。山陽は竹洞を評して「我交遊中第一人物」と云つてゐた。山陽の母の梅颸女史が京都へ出て來た時などは、山陽母子に、春琴、笠山夫婦、細香女史等と共に高尾の紅葉見物に行つたりした。

或時竹洞は鳩居堂の爲めに、北苑以下十二家を仿へる畫冊を

作つた。鳩居堂が是れに對する題詩を山陽に囑すると、山陽は其の畫を見て鳩居堂に書を送つて曰つた。

竹洞山人倣十二家畫帖は、さて〳〵乾度致したる御道具に御座候。箇様に骨折候もの未見候是なれば別て題詩別々之人にては不面白候。且又乍廣言是に題すべき詩にても文にても、海内に無覺束候。小子共人と申にては無之候へ共、一キバリ可仕候。此方にも相樂候事に御座候。やはり絹十二葉御切御越被成候敗、金箋なども可然候、御考可被成候。乾度唐に可相成候、仕立なども大事に候。面白き物に可相成候也、草々頓首。

やがて山陽は十二の題詩を作つた。春琴が其の帖に題して「霞鶩齋飛」と銘した。

竹洞は常に夏鹿毛のごく強い筆で描いてゐた。或時鳩居堂主人に向つて

「從來の絹は滑過ぎて、水墨着色共に引立たないが、絢絹を改良する方はないでせうか」

と云つたので、鳩居堂は西陣の橋居長兵衛に命じて特に地質の重厚なるものを織らせて見た。竹洞は大いに喜んで以後は此の絹ばかりを使つた。それは二挺梭の絹で、後には此の絹のことを竹洞絹と云ふやうになつた。梅逸も夏鹿毛の強い筆を使つて描いた。彼も此の絹を見て大に賞讃したが、花鳥を描くには少しく重厚に過ぎたので同じく二挺梭でやゝ柔かに織らせたのを使つてゐた。

竹洞の生れた安永五年は大雅堂の歿した年だつた。それかあらぬか竹洞の容貌風采から談笑の音聲まで大雅に酷似してゐたので、世人は竹洞のことを「大雅堂の生れ變りだらう」などゝ云つて評判したくらゐだつた。併し、容貌はそのやうに似てゐたけれども、竹洞と大雅との性質は甚だ相違してゐた。大雅は磊落粗放の人だつたが、竹洞は物を云へば訥辯で、非常に無口だつた。居常方正厳格で當時の畫家中獨り異彩を放つてゐた。山陽は嘗て竹洞の畫冊に題して「竹洞温雅貞樸、爲二我交遊中第一人物一、訥二於言一、而敏二於畫一」と曰つた。

文化年間、禁裡御造營の事があり、勅して天下の名手を徴し、襖畫の御用を命ぜられることになつたので、在京の畫家は皆其の撰に預からんとして爭つて出願したが、獨り竹洞ばかりはさういふ運動をしなかつた。彼はどんな場合でも、先方から其の道を以て需められるに非ざれば決して筆を執らなかつた。此の時も知人が頻りに出願のことを勸めたけれども彼は頑然として聞かなかつた。其の後特に竹洞に對して内命さへ下つたにも係らず、彼は飽く迄も辭退してしまつた。

其の後天保十三年禁裡御造營の際は、特に竹洞に御襖揮毫の命が下つた。此度は竹洞も謹で御受けをしたが、やがて下圖を奉れといふ命があつたので、彼は拒んで從はなかつた。

「自分の畫は筆をとつて初めて胸中の雲烟も紙上に迸出するのである。何で下圖を奉ることが出來やう」

と云つて彼は辭して畫かなかつた。

或る日有力なる諸侯が他所で竹洞の畫を見て大いに賞して、侍臣を遣はして曩きに見た物と同じ圖を作るやうに命じると、竹洞は曰く

「畫は元來其の時々の氣持のもので、筆の行くにまかせて描くものだから、同じ畫を再び作ることは出來ません」

とすげなく謝絶してしまつた。晩年になつて、畫名が高くなればなる程世の交りが厭はしくなつて、或時畫業を廢さうかとまで思ひ立つたくらゐだつた。船居堂とさへも一時は絶交のやうになつてゐた。

江州瀬田の磯田清左衛門といふ人は竹洞の無二の知己だつた。其の家は醫業の旁ら藥種を商つてゐたが、當主清左衛門は文雅の士で、深く竹洞の人となりを崇拜してゐたので、竹洞も瀬田へ遊んで數年間其の家に寄寓してゐた程だつた。磯田が竹洞の内政を助けたことも少くなかつた。其の緣故から山陽梅逸等も屢々磯田家へ來た。現今でも磯田家には、竹洞の大作から小品を合せて四百幅以上遺つてゐる。

五

文政年間のこと、名古屋へ一頭の豹を護送して來て、見世物に出した者があつた。梅逸は直ぐに行つてそれを寫生した。すると其のことを藩侯が聞かれて、梅逸に命じて更にこれを絹本巾三尺五寸竪六尺の大幅に畫かせ、與儒者奧田鶯谷をして其の上に題せしめた。此の豹の畫は實に精細を極め、猛獸の威容眞に逼るの概があり、近世動物畫に一新規軸を出したとまで推されるる傑作だつた。此の畫は後に尾張侯から近衛相侯に贈られた。

竹洞より數年後れて梅逸も上京した。其の上京の前には旅費を得る爲めに二百畫會を催し、前津の醉雪樓で莚を開いた。尺二幅で一口一分だつた。其の時彼が人々に贈つた留別の詩に曰く、

留別故園諸友人

携レ家去レ國入二京師一、爲レ愛二山川景色宜一、

臨レ別向レ人無二別語一、先期花白葉紅時。

京都へ出て先づ第一に竹洞を訪問すると、竹洞は非常に喜ん

で、こんな狂歌をよんで梅逸に示した。

けふよりは都の花と見はやせん
　わがふるさとの山本の梅

當分の間梅逸は室町通り三條下ル和泉式部の寺といふの座敷を借りて住まつてゐた　此の寺は本來は誠心寺といふのだが、和泉式部の石塔がある爲めに有名になつて、普通和泉式部の寺で通つてゐた　其の石塔の旁らに古木の梅があり、之れを軒端の梅と云つた　餘程の大寺で、晝間は境内に小芝居だの、軍書讀みだの、壽司屋だのうどん屋だのが店を出してゐて、非常な盛り場だつた　併し方丈の方は頗る閑靜で座敷も廣かつたのでかき物をするには都合が宜かつた。

梅逸の畫名は疾くより京都の人にも知られてゐたので、彼は忽ち一代の流行兒となつてしまつた。山陽、春琴、海屋等を初めとして、篠崎小竹、大鹽中齋、柳川星巖、小石元瑞、藤本鐵石は皆親しい交友だつた。

竹洞とは昔も今も變らぬ交情を續けてゐた。此の兩人は互ひに相許し合うてゐた。竹洞が梅逸の花鳥を賞讃すれば、梅逸は竹洞の山水を推賞した。竹洞の所へ來て花鳥畫を依頼する者があると「花鳥なら梅逸に頼め」と云つた　梅逸に山水を頼むと「山水なら竹洞の處へ行け」といふ具合だつた

併し、竹洞と梅逸とは性格畫風倶に全然相反してゐた　竹洞が隱遁的であるのに對して梅逸は社交的だつた。竹洞は質樸で梅逸は派手だつた。畫風も兩者の其の氣象を表はしてゐた。竹洞は專ら畫の氣品を重んじて筆墨の末に係はらぬ風があつたが梅逸はそれと反對に寫生を重んじた、彼は常に、今世の文人畫家と稱する者が徒らに氣韻を主として、實相を究めず、是を以て往々木劍帷帽の譏を免れざるを慨嘆してゐた。當時は未だ大雅や蕪村の末流を汲む者や、若しくは舶來の畫を見て直ちにそれを模倣し、物の實相を輕んじて疎笨粗落の畫を作つて敢て之を以て氣韻ありと稱し、道を誤り世を惑はす者が少なくなかつた、梅逸はかゝる風潮を斥けてひたすら寫生を修めたのだつた。

梅逸は、物事に非常に無頓着な性で、世間の畫家のやうに畫室を飾るなどといふことは少しもなかつた。畫をかく下には古びた一枚の毛氈を敷いてあつたが、毎夜寢る時には筆や硯やいろんな物を載せた儘でクル／＼と卷きおさめ、朝起きると又其の毛氈を卷きかへして畫をかいた。毛氈の上の塵はいつが日にも拂ふといふことはなかつたから、筆硯器具はいづれも塵まれだつたが、さて描き上げた繪は艶麗人目を驚かすやうなものだつた。彼の畫は頗る世人の嗜好に投じて、揮毫をこふ者が常に門前に市をなした。

竹洞は反對で、晩年は東山のほとりに隱退して、平日門を閉ぢて客を謝し、書を讀み、或ひは著述の筆をとつた。畫は滅多に作らなかつた。偶々揮毫する時は、先づ別室に入つて筆洗の水を新たにし、机を拂ひ、硯を滌めて、而して後嚴然に正座して毫を揮つた。

竹洞は修養の人で、梅逸は才の人だつた。梅逸の畫才は有り餘る程だつた。構想奔溢、筆端縱横に飛動して、些の凝滯の痕を露はさず、決して柳炭を施さずして立どころに畫となつた。山水を重畳し、或ひは花卉翎毛を錯雜するも、其の位置軍かも亂れず、隹々精妙にして設色濃淡共に靈妙の極に達してゐた。

其の頃、尾州から伊豆原麻谷が上京した。竹洞梅逸の兩人は大いに喜んで麻谷を迎へて「茲に既に梅竹があるのだから、君が來て松を名乘るならば、是れこそ誠の歳寒三友と云へるだらう。君は今から松谷と改めたまへ、我々三友相携へて畫界に雄飛しよう」といふので、麻谷は松谷と號して世に披露した。

麻谷の出生は三河國加茂郡三好村で、大工の伜だつた。家は素より貧乏で、十歳の時名古屋の禪寺町の某寺へ入つて徒弟となつたが、幼少より繪が好きで、日々讀經の餘暇に繪をかいて娯んでゐた。麻谷の師の僧も多少繪をやる人だつたので、或日麻谷に向つてから云つた。

「貴様は繪ばかりかいてゐてお經を怠けるのはよくないことだ。併し、納はまだそちの繪を見たことがないが、若し納のかくやうな繪がそちにもかけたら、繪をかくことを許して遣らう」

そこで師僧は試みに四君子を描いて「さあ此の通り描いて見ろ」と云つた。麻谷は直ぐに描いた。處が、其の繪は師僧の繪よりも數等うまかつたので、師僧は舌を卷いてしまつた。

「小僧、貴様は坊主を廢めて繪かきになれ」

其の後麻谷は寺を出て、京都へ來て畫の修業をした。それから二十の時長崎へ行き、淸人の方西園や費晴湖に就いて八九年間學んだ。そして、三十の時に再び京都へ來たのだつた。

麻谷の畫は、所謂長崎風で純然たる支那だつた。彼の畫論も亦支那人の直傳で、耳新らしい言說を吐いた。けれ共其の畫は未だ梅竹二家と對比すると遜色があつたので、京都では餘り行はれなかつた。其の後麻谷は京都を去り、大阪に行き、順次に各地を漫遊して晩年再び名古屋へ歸つて門戶を張つた。

或る時、楊文驄の山水幅を賣る者があつて、梅逸の處へ持つて來て見せた。價は五十金だと云つた。梅逸はこれを見て垂涎措く能はず、是非共手に入れ度いと思つたが、まだ其の頃の梅逸の身分では五十金の調達は容易ならぬことだつた。が、到頭彼は意を決して、有らゆる家財道具を賣り拂つて其の軸を自分

の物にした。

すると、賴山陽がこの事を聞いて、どうか其の幅を一覽したいと云つて寄越した。梅逸は承知して或る日楊文驄の幅を携へて山陽を訪問すると、山陽は麻裃を着用して出迎へた。客室へ通り一禮に及んで後梅逸が些か得意の體で

「誠に鄭重なる御出迎ひで恐縮致します」

と云ふと、山陽は笑つて、

「僕が禮服で迎へたのは、あながち貴所に敬意を表するといふ次第ではないのです。實は楊文驄の名幅を迎へる爲めなのです」

と云つた。そして恭々しく其の幅を展覽して驚くこと限りなかつた。

「まことに是れは天下の名品である。これ程の幅が如何して貴所の手に入つたのです」

と山陽は訝り乍ら尋ねた。

梅逸は、實はしか〳〵と金策の次第まで話したので、山陽はいよ〳〵嘆稱して、筆を執り詞を題して、梅逸に贈つた。其の後柳川星巖も之れを見て更に嘆稱して、詩を賦して贈つた。此の幅は梅逸の歿後美濃の門人片野南陽の有となつたが、後轉々して明治の末頃數萬圓で大阪の某家へ入つた。

梅逸は、甚だしく古書畫を愛し、鑑定に長けて、藏幅の數も多かつた。だから自然それの保存のことにも並み〳〵ならぬ注意を拂つてゐた。彼はいつも人に向つて「書畫のある處には必ず其の邊に毛氈を四五枚用意して置くものだ。近火の時など急場の持ち出しにはこれ以上のものはない、書畫を愛する者は此の事を一日も忘れてはならん」と云つた。

六

梅逸の妻お鐵は前にも云つたやうに賤しい身分の出で人柄も餘り宜くなかつたが、勝氣な女で、無頓着な梅逸を扶けて家政を一切きり廻してゐるので、其の方では梅逸も女房には頭が上らなかつた。此の女房の鞭撻があるので自然畫も怠けずに描かなければならなかつた。從つて收入も多かつた。

梅逸は貪慾で畫料をむさぼるといふやうな惡評も一部にはあつた。けれども之れはあながち貪るといふ言葉は當らなかつたが、依頼のあるにまかせて寸縑尺紙も潤筆料を受けるといふやり方だつたので、當時の文人氣質から云ふと内實はとにかく、餘りに利慾に走り過ぎるといふので評判が惡かつた。併し是れとても多くは彼の妻の計ひから出ることで、梅逸自身はたゞ明け暮れ筆をとつて畫を作るばかり、世の毀譽褒貶などにも氣つ

付くやうな性ではなかつた。お鐵は餘程根性が惡かつたらしいが、梅逸は門人等に對しても温情の濃やかな人だつた。さういふ事柄になると、あながちお鐵に盲從してはゐなかつた。尾州の者で桃逸といふ門人がゐたが、或日桃逸は師匠の細君の云ひ付けで何とかいふ魚を煮て先生の午飯の膳に附けた、其の日梅逸は午時迄外出して歸つて來て食膳に向ひ、何心なく其の魚に箸をつけると、之は如何に、鱗も取らず煮付けてあつた。梅逸は不思議に思つて妻に向つて

「此の魚の煮やうはどうしたのだ」と云つた。

お鐵もそれを見て驚いたが

「まあ！あの桃逸は何て馬鹿でせう、妾が忙しかつたものだからあれに煮させたんですが、鱗付きで煮るなんてなんぼなんでも呆れ返つた男だ」

お鐵は直ぐ樣門人を呼び付けて、肝癪聲をあげて

「お前、この魚はどうして煮たんだへ」と云つた。桃逸は

「はい、只煮ましたのです」と答へた。

「只煮ると云つたつてお前、魚は鱗をとるもんだくらゐのことは三つ兒だつて知つてゐるぢやないか。お前さんお魚を食べたことはないのかへ」

お鐵は口汚く罵つた。すると今度は梅逸が彼女を叱り付けた。

「桃逸は繪を習つてゐるのだ、料理の事は知らんのが當り前だ。大體お前が道でない道を命けるのが間違ひだ。今後門人にそんな用事を命けると俺が承知しないぞ」

さう云つて梅逸は懇々と妻を誡めるのだつた。或る年、名古屋の若宮八幡社の山車黑船の幕が大破に及んだので、新調の幕の下繪を梅逸に依賴しようといふことになつて、町代の者が二名で京都へ出掛けて來た。尤も、梅逸は其以前名古屋の日の出町に住んでゐて同じく氏子の緣故もあり、且つ古い幕の下繪も其の昔梅逸が描いた物だつた。さういふ關係だから梅逸も快く承知して、町代の者が滯在中に揮毫することになつた。併し乍ら當時は梅逸の聲價が並み／＼でなく、潤筆料の相場も最も高い時だつたが、昔馴染のことだからと云つて、金十五兩を包んで水引を掛け、うや／＼しく梅逸の前へ差し出すと、梅逸はやがてちらと見遣つて

「これは御丁寧なる御土産金を賜はつて、誠に有難く存じます、さて潤筆料の儀ですが、これは他所よりの依賴ならば金百兩申し受ける處ですが、私にとつても氏神のことですから、是れは私から奉納することに致します。決して別に御配慮には及びません」

「と云つて其の一封を納めるのだつた。かういふ智慧もお鐵の方寸から出たものだらうと云はれてゐる。かの岸駒が東寺の天井の蟠龍を寄進について話と好一對の話柄である。此の紫の下繪といふのは、波浪の圖で、花色羅紗へ金絲にて縫ひ取つた。其の肉筆の下繪は一双の屛風にして保存された。又別に二枚折半双の物に、船の舳へ浪の打ち寄する圖をかいて、總代として京都へ來た丸屋儀兵衛といふ者に土産として與へた。

　梅逸が全盛の時代には、四方から畫を乞ふ者が引きもきらず、依頼者は互ひに多額の金を贈つて先きに描いて貰はうとするので、彼の家には毎日金がうなる程轉がり込んだ。梅逸は此の金の貯藏の方法に苦しんで、或日例の桃逸といふ門人に向つて「何かよい方法はないだらうか」と云つて相談した。すると桃逸は一法を案出して、町へ行つて太い青竹を買つて來て、管に切つて節を拔き、押入の緣下に穴をあけて其の竹をさし込み潤筆料がはいる度びに其の竹筒の中へ投げ込み／＼してゐると、間もなく一杯になつたので、又もや町へ行つて竹を買て來て緣下に据へるのだつた。

　梅逸には子がなかつた。そこで初め美濃長良の人で、牧野鈍石と云ふ者を養子にしたが、素行が修まらなかつたので離緣して、其の後門人の梅屋といふ者を養子と定めたところ、これも亦何かの事情で離緣し、更に後越後五條の人で梅所と云ふのを入れて養嗣子として、お鐵の姪のもとゝ配せた。

七

　竹洞は、後妻を入れて後三女二男を擧げた。初めの妻の産んだ長男の金吾は天稟の畫才を有つてゐたが、幼少の時から手の付けられぬ、腕白者で、竹洞も此の子の教育に就いては一と通りならず苦心をした。竹洞は勿論儒教主義なのでたゞ／＼嚴格一方の教育をしようとした。竹洞は金吾に讀書を命じて置いて、自身は寒竹の笞を持つて其の背後に立つてゐて、少しでも怠たると容赦なく打ち据へた。さういふ遣り方だつた。金吾は稍長じて竹溪と號し、畫に於てはおさ／＼父をも凌ぐ才能を現はしたが、行狀はます／＼放逸に走つて、今では到底父の手では御し難くなつてしまつた。或時も梅逸に向つて、ほと／＼持て餘した話をすると、

「あなたは少々やかまし過ぎるから、御子息が反つて橫へ走らうとするのでせう。何んなら私が預かつてお世話をして上げても宜ろしい」

　と梅逸が云ふので、竹洞は非常に喜んで、竹溪をば梅逸に托して教育して貰ふことになつた。竹溪は梅逸の家に居て其の薫

陶を受けたが、放縦の性は矢張り止まなかつた。是れが爲めに竹洞の心痛は一と方でなかつた。或る時などは悴の事に就いて梅逸に餘計なことを云つたゝめに、ひどく梅逸から小言を喰らつて、あやまり手紙を出したりした。流石の竹洞だが我子の爲めには、弟分の梅逸にすら頭が上らないことになつた。其の上に竹渓は、何しろ其の性行なので、梅逸の妻との折り合ひも非常に惡るかつた。最後に矢張りお鐵と大衝突をして飛び出してしまつた。

そんなことの爲めに、竹洞と梅逸との間の感情も多少疎隔して來た。そこへ持つて來て、當人同士はさうでもないが、双方の後援者同士の間で反つて餘計なことを云ひ合つたりする爲めに、しまひには兩者の交情も昔日とは一變してしまつた。

竹渓は卅五の年に妻を持つた。竹洞はこれを機會として竹渓に家督を讓つて、自分は小さい子供を二人作れて、岡崎村の眞如堂の前に隱居した。二度目の妻も先年彼に先立つて歿したのだつた。竹洞は六十五歳だつた。

三女の邦といふのが繪を習ひ度いと云ふので手本を畫いて與へると、思つたより素性がよかつたので竹洞は娯みにして教へてゐた。そして此の娘に淸淑といふ名を付けて讓り、自身で刀を執つて中林三淸と刻した印を與へた。

竹洞は此の娘を相手にごく靜かな生活をしてゐた。畫作をする時の外は大概讀書をしてゐたが、夜は娘を相手に道義を談じたり畫論を聞かせたりして夜の更けるのも忘れてゐた。

竹洞は青年時代から身體が虚弱だつたので旅行といふ者は殆んどしなかつた。名古屋と京都の間を往復する以外に、旅行らしい旅行をしたのは、壯年時代に渡邊淸を誘つて駿河淺富士を見に行つたのと、天保年間になつて大和に遊び笠置山邊の風景を探つた時位のものだつた。前の時のことは彼の富士日記といふ紀行文に書いてある。これに依ると、名古屋を立つたのが文化甲子の年の九月の九日の夜だつた。十四日に藤枝へ着いて荷溪といふ人の家に宿り、これから駿府在の曲金村といふ處のなにがしの家を尋ねて行つたが、其の前から竹洞は慣れぬ旅で足を痛めてゐた上に持病まで起つたので、其の家に數日滯在してしまつた。竹洞は望郷の念が頻りに起つて心細さに堪へなかつた。淸が府中迄藥を買ひに行つたりした。それでも十八日には由井迄行つたが、終夜怒濤の音に膽を冷したので、竹洞は最早此の上先きへ進む勇氣はなく、せめて原までと淸がすゝめて見たけれども、竹洞は西へ歸り度いと云ふので、淸も諦めて其處から後へ引き返してしまつた。此の旅は前後二週間餘りの日子を費して、竹洞に取つては生涯の大旅行だつた。そんな風で引

き亂つてばかり暮したが、畫の依賴は多くて生活には可成り餘裕があり、下婢も常に三人位は置いてゐた。

晩年を慰める唯一の相手は邦子だが、其の娘も既に二十過ぎにもなつた。娘を片付けなければならぬが、さうすると自分が不便でもあり淋しくもある。親の身としては竹洞もいろ〳〵心配してゐた。

或日竹溪が來て、父親に向つて、

「時にお邦のことですが、彼ももう年頃ですからそろ〳〵何處かへ片付けた方がいいと私は思ひますが、どうでせうか」と云つた。

「それは俺も相當な處があれば片付けようと考へてゐる」

竹溪は携へて來た一枚の花鳥畫を父の前に展べて見せて

「此の繪をかいた男ですが、是れならば私も知つてゐるが極く確實な人物です、お邦の亭主にしても宜からうかと思ふのですが」と云つて其の人物の說明をして歸つた。

其の後で竹洞は娘を呼んで、竹溪が置いて行つた例の繪を出して見せて

「邦、お前は此の繪をどう思ふ？」と云つた。

娘は疾くも父の心を見拔いてゐた。

「左樣でございますね。大層綺麗にかけては居りますが、妾は平常お父樣の繪を見慣れてゐるせいか、かういふ畫風は餘り好みません、それに妾はお父樣の御在世中はお側で孝行をして、お父樣が百年の後は教へて頂いた繪で渡世を致す決心で御座います。先刻の兄樣のお話が若しや妾の身の上の事でございましたら、兄樣の方へは程よくお斷り遊ばして、今後は其のやうな事は御心配なくお暮らし遊ばして頂きたうございます」

とお邦は答へた。

竹洞は娘の健氣な心を聞いて、漸う安心した、それから人にあふとよく

「老後に持つべきは女の子です」としみじみ云ひ〳〵した。

お邦は父の死後に、父の門人湘雲と結婚した。

竹洞は、和歌を初め小澤蘆庵の門人堀田梅藩に問ふたが、京都へ出た後は前波默軒に添刪を乞ふた。和歌に關しては「歌道五家論」の著があつた。

彼の生涯の著述は全部で二十三種の多きに上つた。彼の著書は大抵自筆の板行だつた。上梓する前には必ず春琴や梅逸のやうな雅友に示し、或ひは山陽や猪飼敬所のやうな學者にも示して過誤を正して貰つた。上梓した著書は大部分家に藏つて置いた。そして、自畫の箱書付など頼みに來る者があると、謝禮の代りに著書を一冊宛買はせるのだつた。

竹洞は京住居をするやうになつて後は、毎朝起きると東北の方を望んで禮拜した。或人が怪しんで、何の神佛を拜むのかと糺すと、竹洞は襟を正して

「私の郷里には恩師神谷天遊先生の墳墓がある。私の今日あるのは偏へに先生のお蔭だから其の恩を忘却しないためです」と云つた。

さうして彼は晩年岡崎村神樂岡に隱棲して後、眞如堂の内に双親の碑を立て、碑面に法號を錄し、其の裏面には自分の筆で四君子の畫を刻して忌日毎に參拜を勤めとした。また、同じ園内に思德追遠之碑を建て、自から碑文を撰して、幼時師と頼んだ神谷天遊の德を頌した。これも碑陰に竹を刻し、小詩を題した。

一揮寫高節。吾筆即翁心。
解籜成陰日。園林雨露深。

此の碑については後日譚がある。それは竹洞の歿後のこと何かの故障で此の碑は取り除かれ久しく邸内の一隅に横たはつてゐたが、明治廿三年の頃、富岡鐵齋、石川柳汀の二人が竹洞の墳墓を尋ねた折、端なくも此の思德追遠之碑は、其の頃河原町に住んでゐた蒔師服部某の家に在るといふことが判明したので、直ぐに其の事を警察へ告訴すると、服部は大いに驚いて其の夜のうちに碑面を磨滅してしまつた。惜しいことをしてしまつたと足ずりして口惜んでも詮なかつた。處が、後で段々調べて見ると、其の碑は、竹洞の末子の喜久之助といふ者から某へ賣つたのだといふことも判つて來たので告訴も取り下げられた。今でも其の石摺は鳩居堂と、名古屋の神谷天遊の家とに傳はつてゐるさうである。

竹洞は嘉永六年に京都で歿した。三月二十日が其の忌日である。享年七十八、骨は父母の寺名古屋の梅屋寺に葬られた。法名を融齋仲濟居士と云ふ。

八

東山の翠微の影を寫して流れる鴨川に架けた四條の橋の上は南と北の顔見世狂言が始まるといふので、往來旁午として織るが如く、贔屓々々から贈つた紅や紫の幟が、澄み切つた青空を賑やかに彩つてゐる。橋の東の芝居前は猶さら老若男女で一杯になつて、看板の俳優の名前などに見とれてゐるので見動きもならない雜鬧である。

其の中を、浪人かと見えるが、風體卑しからぬ黒羽二重の着附に、白献上の博多の帶をしめ、立派な大小を帶し、蒔繪の印籠を下げ、深編笠に顔を隱して悠々と人波をわけて行く若侍

がある。丁度其の時、其の侍とは、反對の方から破落戸風の男が酒氣を帶びて爰へ來掛つたのであるが、件の侍に突き當ると直ぐ樣二言三言口論が始まつた　ソリヤこそ喧嘩だと、ぐるりと人垣を作つて見物が取り卷くと、侍は物をも云はず打つて掛る破落戸の利き腕を取つて引つ擔ぎ、物も見事に投げ付けた見物は驚き乍らもヤンヤと喝采をする。破落戸はコソ〳〵と逃げ出した　若い女などは、其の風采と云ひ力量と云ひ、芝居を實地に見てゐるやうなので、惚れ〳〵した眼で眺めてゐる中を、侍は悠々として立ち去つてしまつた

江戸とちがつて喧嘩を珍らしがる京都のことだから、見物人の口から喧傳されて、此の騷動は忽ち洛中の大評判となつた處が、其の後また、同じ風采の侍と、同じ破落戸とのその喧嘩の具合から投げられる具合など、すべて同じ型の喧嘩が、地恩院にも清水にもあつた。やがて祇園にも先斗町にもあつたので、さすがに長閑な京都の人も、これは作り事のお芝居だといふことに氣が付いた其の後土地を變へて嵐山や御室などへ行つてやつて見ても、又例のかと云つた風で、一向見むきもしなくなつた

此の惡戲をして喜んでゐた主人公こそ、中林竹洞の一子竹渓だつた竹渓は甚だしい變りものだつた。さうして親に似ぬ鬼ツ子だつた。子供の時から仕末に終へぬ腕白者だつたのが、成長するに從つて益々放縱狂逸に馳り、終身善行が修まらなかつた。謹嚴な竹洞の子にどうして彼のやうな亂暴な子が出來たのか甚だ不思議であるが、嚴格一方の竹洞の儒教々育が却つて其の子を反對の方向に馳らせたのか、それとも竹渓の天性か、又は別に原因となるやうな家庭の事情でもあつたのか、何れとも判斷は出來ないが、彼を生んだ母は彼を生むと間もなく死んで、彼は乳呑子のうちから繼母の手に育てられた上に、父の竹洞はそのやうな人だつたから、家庭に溫味が不足してゐたことはたしかであらう。

竹渓の妻は、歌子と云つて、吉田神社の社家の家中の娘で、中林家へ嫁いだのは十八九の時だつたが、頗る才色兼美の婦人だつた。だから夫婦仲は頗る睦しく人も羨むばかりで、放蕩無賴だつた竹渓も妻帶以來急におとなしくなつて、專心繪畫の研究に耽るやうになつた。竹渓の業の進歩を遂げたについては、妻の力が大いに與つてゐた。それにも係はらず、竹渓の性格は、永く圓滿な家庭の人たることが出來なかつた。やがて別居索居の日が來て、後半生は閨門頗る修まらなかつた。

竹渓は奇癖を有つて、常に古英雄を慕ふの餘り、家居の構造や座敷の裝飾を英雄が隱遁してゐる體にして、書室には金屏風を立て廻し、鎧太刀を飾り、熊の皮の敷物をしき、道服を着て

其の上に座つてゐた。外出する時には、太身の大小に角鍔を掛けたるを常として、鐵扇を手にし、編笠を冠つて武士の如く裝ふた。旅行をする時こそ大變で、箙を付け、弓を袋に入れて從者に持たせ、宛然戰國時代の人だつた。又好んで虛無僧と交り、常に尺八を吹いて、虛無僧に扮して市中を歩いたりした。平常髮を結ばずして散髮してゐた。人が笑はふが譏らうが平氣だつた。前の喧嘩の狂言の如きも、彼の此の愛すべき英雄癖の一端であつた。

但し　彼の畫はなか〳〵勝れてゐた彼は父に學び、更に又梅逸に學んだが、そればかりにつひに滿足せず、古土佐の門に入つて其の粉本を熱心に摹した。吉川公均が畫の巧みなのを慕ふて親しく交つてゐた。彼が畫に對して熱心だつたといふ逸話が二三ある。

或時　柳陰避暑とも題すべき畫を描いてゐる時、門人の某が來たのでそれを見せて　此の畫はどうかと聞くと　門人は結構な見事なことでと云ふ。其の外によい處はないかと反問して見たが、門人は只結構でとばかりで要領を得ない。そこで竹溪の云ふには

「自分は此の高樹の陰で、處士が袋を寛ろげて　涼風の中で蝉の聲を聞いて　怡然として樂しんでゐる態を寫した筈であつたが、畫を學んでゐるお前にさへ其の意味が通らないやうでは、一素人には猶更分明るまい。俺ももつと勉強して腕を磨かなければならない」とてつく〲嘆息するのだつた。

竹溪は馬を描くことを得意としてゐた。それだけに馬を研究してゐた。人から一頭の野馬を借りて來て　庭に放つて　日夕それを寫生してゐた。本來彼は南宗派の家であるに係はらず、寫生を重んじ、西洋畫を好んで蘭畫の風を加味してゐた。父とは全然畫風を異にしてゐた。それで馬の骨肉を現はすに陰翳を用ゐ、立髮などの描寫は微に入り細を盡くしてゐた。それから又、木や泥で馬の形を製作して、それをモデルにして、寫してゐたこともあつた。

或時ある人が竹溪に向つて

「先生の馬の繪は、矢張り趙子昂あたりに私淑せられて　描いてゐられるのですか」と尋ねると。

「否、左樣ではありません。私はたゞ馬が好きだから寫生をしてゐるので、私の馬は趙子昂より巧いと思つてゐる。私は樣に依つて胡盧を描くことは嫌ひです」と竹溪は答へた。

竹溪は、長谷川玉峰とも親交があつた。玉峰は四條派で、森川曾文の師であつた。或人が　竹溪は馬の繪が上手だから　同じ動物ならよからうと思つて鹿の繪を依賴した。彼は度び〱

草稿を作つて見たが 氣に入つたものが、一枚も出來なかつた。そこで是れを玉峰に相談した。玉峰は鹿を得意としてゐた人だつたので、立どころに木炭で、頸の細いところや 後足などの特徴を描いて示してくれた。竹溪はそれを參考にして鹿を描いた。

さういふ風に彼は寫生好きだつたけれども、どういふわけか應擧は好まなかつた。常に應擧を攻擊して「今時應擧は繪といふものを知らない」と云つてゐた。

竹溪は寧ろ父に勝る手腕を有してゐたが 不羈狷介で世に合はない爲めに、畫人仲間は多く彼を疎外して 多少氣ちがひ扱ひしてゐたくらゐだつた。彼の處へ畫を頼む者があると 商人などからは潤筆料を澤山取るが 神官僧侶とか、貧しい者からは金を取らなかつた。

備前某藩の士人が或時竹溪を訪ねて來て、畫を依賴した後で

「先生は風流を樂しんで居られるとのことですから、歸國の後、何か珍らしい物産でもお送りして御禮とすることに致しませう」と云ふと、竹溪は言下に

「否や、私は繪をかくのは商賣で、一向風流とは思ひません。名産を頂戴しても何の足しにもなりません、金なれば自分の思ふ物が求められるから、金で謝儀を頂くのが何よりです」

と答へたので、士人は一言もなかつた、後で竹溪は側にゐた者に向つて

「あんな奴は癖になるから、あゝ云つて遣つたんだよ」と云つて笑つた。

大道寺雨川は、尾藩の大身で、梅逸と深く交り、笛をよく吹き、頗る風雅の士だつた。雨川が或る時突然竹溪の家を訪問した。丁度夏の日盛りのことで、竹溪は素裸體で繪をかいてゐた。家人が出て見ると、供廻りを隨へ、威儀堂々たる武士だから驚いて、かくと竹溪に告げると、竹溪は騷ぐ氣色もなく、

「今日の暑さは裸體でなくては凌ぎ兼ねる、私は處士の身だから禮儀に嫻はない、裸體でも苦しからずばお迎へ申す、無禮とおらば此の儘お歸りを願ふ」

と執り次ぎを以て云はせた。

「いや〳〵、裸體は一向差支へない、寬ろがれた儘で拜顏しよう」

雨川は少しも咎めず、主人と對座して清談に時を移した。

森寬齋とも竹溪は親交があつた。それは竹溪の晩年に近い頃で、其の頃は天下騷亂の直後で繪畫などを顧る者なく何れも甚だしい窮迫の生活をしてゐた。竹溪と寬齋は絶えず往復して畫論を闘はせてゐたが、或晩も寬齋の宅へ竹溪がやつて來て、例

に依つて夜半まで打ち興じて話してゐたが、歸る時竹溪は提灯の蠟燭がなくなつてゐたので、蠟燭を借りてつけて歸つた。其の後に又竹溪はやつて來たが、話し半ばに急に改まつて
「先夜君の處から蠟燭を借りて行つたので、今日返さうと思つたが、家に蠟燭がなかつた。で金でお返し申すが、あの蠟燭は半分とぼしかけだつたから、一挺の半分の代金だけお返し申す」
と云つて、一文錢を五ツ爐の上へ並べて置いた。蠟燭一挺は十文だつた。
「これはどうも、いや確かに受け取りました」
と云つて寬齋もそれを納めた。
幕末、天下の諸侯が京都に會同して、政務の餘暇には大概知名の畫家を聘して揮毫を見て娯むのが一つの風習のやうになつてゐた。當時竹溪と日根對山とは、松平春嶽、山内容堂、鍋島閑叟の諸侯から、特に眷顧を蒙つてゐた。
對山と竹溪とは、其の人物、性格、技倆、何れも相匹敵して、水魚の交はりがあつた。對山が畫を作る時は必ず竹溪に相談して可否を諮つた。竹溪もまた家にある粉本を惜しまずに貸して遣つた。かうして、互ひに相たすけ合うてゐた。
對山も非常なる奇行家だつた。彼は泉州堺の人で、後京都に住し、畫名頗る高く、星巖海屋等とも交つた。初め岡田半江の門に入り、後長崎に遊んで、舶來諸人の畫を研究した。
對山は性豪放、常に淋漓酒を被つて一世を睥睨した。當時貫名海屋は書畫を以て名聲一代を壓してゐた。一日對山は沈醉して海屋の家に行つて、罵言すらく、
「先生の畫は甚だ結構だが、惜むらくは腕力が軟弱である。こんな畫は、私なら肱に石臼を附けてもかいて見せる」
と傍若無人の言を吐き、呵々として大笑した。
海屋は笑つてゐたが、彼の門人達は大いに對山の過言を憤つて、其の翌日數名して對山の宅へ押し掛けて行つて、
「足下は昨日我れ〱の先生に向つて侮辱の言を吐かれたが、よもや酒の上で知らぬとは申されまい」と談判に及んだ。
對山は平然たるもので、
「私は何程醉ふても、未だ嘗て本心を忘れたおぼへはない」
「然らば、足下が昨日放言された通り、肱に石臼を付けて畫いて見られよ、我れ〱拜見致し度い」
「それはお易い事です、お望みとあればやつてお目にかけませう」
對山は笑つてさう答へて、まづ〱と云ふので酒を逬いて縱横に快談しながら、其の場に紙を展べ、石臼を腕に縛し付けて、

筆を持つや否や、一點一拂、矢聲を掛けて墨竹を畫いた。老幹磊砢、敷葉蕭疎たるの圖で、筆力勁健にして毫も澁滯の態がない。門人連も是れを見て驚嘆してしまつたといふ話がある。

元治元年甲子の冬、島津久光が京都に滯留した。たま〳〵薩摩の歌人八田知紀が上京した時、京都の文人墨客を招き、櫻木町なる近衞家の邸に於て宴を開いた。對山も此の席に招かれてゐたが、酒を呑むこと長鯨の百川を吸ふが如く、遂に泥醉して貴人の前をも恐れず、ごろりと横になつて小歌を唄つてゐた。折しも窓外はしきりに雪が降つてゐて、眺望頗る意にかなつたので、對山は興に乘じて劉玄德が雪中臥龍を訪ふの圖を作つた。筆意瀟洒として、古英雄の風丰紙上に躍然たるものがあるので、一座嘆賞しないものはなかつた。すると、其の席に、香川景樹の子景常といふ歌人がゐたが、對山の畫を見て吟懷俄かに動き、筆をとつて一首の歌を其の上に題した、對山はこれを見るや、忽ち眼を瞋らせ、聲を勵まして

「貴公は怪しからんことをする、何故無斷で拙者の畫を汚したのだ。元來貴公などは俺の畫に題する筆ではない、」

と云つて、頻りに痛罵して止まなかつた。座にある人々が百方景常のために謝して漸く無事に取り鎭めた。薩州公と云へば當時威權並びなき大名である。其の宴席に於て人を叱咤して怖れる色がなかつた、對山の豪放は概ねかういふ風だつた。

鐵翁は、對山を評して「對山は當時南畫各流の中に於て、氣節尤も高く、筆力甚だ自在を得てゐる。たゞ惜らくは畫を以て生業となすが故に、運筆に意匠を費さず、往々輕忽に點苔を施すものがある。抑も點苔に意を注せざるは邦人一般の弊風にて、漢土諸大家の決して之れなき處である。然し、自分が曾て京師に遊んだ時、京師の諸子の我が門に入つて畫法を聞くもの多かりきと雖も、一を聞いて十を知る者は獨り對山のみであつた。彼の畫は時々に依つて其の細致が均しくない點もあれど、非凡絕群のもの多く、其の沈着なる物に至つては清朝中葉以來匹敵する者殆んど稀れである。若し自分が今より十年前に在つて、彼の胸中を醫することを知らしめたならんには、清朝中葉以來彼に當る者をなからしめたであらうが、自分は已に老いて、之を如何ともすることが出來ぬ。」と云つてゐる。

對山は以上のやうな人物であつたから、竹溪と肝膽相照したのも當然だつた。處が、後に至ると竹溪は、寫生に馳り、或ひは古土佐を窺ひ、畫風が著しく變化したゝめに、兩人は繪畫の上から激烈な論爭をやるやうになり、延いて私交も昔日の如くでなくなつた。双方共に劣らぬ感情家であるから、さうなると兩々相罵倒して止まなかつた。其の極、或る時酒の上から、到

頭二條磧で決闘をするといふ運びにまでなつた。對山は素より腕自慢の男、竹溪はこれまた古英雄を以て自から任じてゐるのだから溜まらない。時刻を期して二條磧で出會ひをしたが、いざ眞劍勝負となると、對山も石臼を振り廻したやうな具合にはいかないし、竹溪の方も、日當を與へて破落戸を投げたやうなわけにはいかない。双方刀は拔いたが、拔いた刀を持て餘して、遠く離れて「やア、やア」とやつてゐる處へ、いゝあんばいに仲裁人が驅けつけて來て呉れたので、お蔭でどちらも蚊にくわれた程の血も見ずに落着した。

此の奇聞は忽ち世上に喧傳して、こんな落首が貼り出された。

對山望臨竹溪斜、白刃閃處有淫家、云々其の頃流行唄があつた。花柳界で盛んに絃に上せた。

白綸羽織と竹溪居士は、後の出世が見えすける、日根の對山唐棧更紗、チヤツタ小紋を人がすく。

竹溪は素行修らざりし爲めか嗣子も得られなかつた。其の上、家父が遺した財産もあらかた蕩盡して、慶應三年四月二十二日京都で歿した。年五十二だつた。

九

或る時梅逸の處へ畫を頼みに來た者があつた。重掛を作るのだと云つて、白縮緬へ揮毫をこふた。謝儀も十分に持つて來た。

梅逸は何心なくそれへ得意の墨梅を畫いて與へた。

それから數日の後、さる人の招待で祇園の中村樓へ行つた。宴酣の頃、一名の藝妓が立つて、頗る猥褻な踊りをやつた。袖を翻へし、やがて裳をかゝげて下の衣を露はすのを見ると、こはいかに、女の腰卷にしてゐるのは、先日梅逸が畫いて與へた白縮緬の墨梅だつた。

一座の者は手をうつて哄笑した。

梅逸は蒼白の顏を見せて石のやうに座つてゐた。

此の評判は忽ち京都中に廣まつた。

「梅逸は根が名古屋者の守錢奴だ。彼は金さへ出せば女の腰卷にも畫いて恥としない。醜陋極まる人間にして風流文雅の士の共に齒すべき者でない」

と、盛んに惡聲を放つ者があつた。梅逸は已れの畫の流行するにまかせて遠慮なく潤料を取つてゐた。それが暗々裡に人々に反感を抱かせてゐた。かういふ場合彼の爲めに立つて大いに辯護する者はゐなかつた。

梅逸は遂に失脚したのだつた。彼の聲價は頓みに落ちてしま

つた。梅逸自身も之れを恥として、間もなく一家を擧げて名古屋へ歸つてしまつた。

右の話は果して眞であるか否かは保證が出來ない。が、文人や畫家の間に裏面の暗鬪が行はれ、互ひに相排斥し、陷穽を設けて之れを陷るゝといふやうな陋劣な運動も强ち稀らしいことではない。梅逸も其の畏にかゝつたものとも見ることも出來る。

とにかく梅逸は、安政元年に京都を引き上げて名古屋へ歸つた。それは竹洞の歿した翌年だつた。故鄕の住居は二十三年振りで、梅逸は七十二歲の老年だつた。

併し、名古屋には彼の知己が多かつた。故鄕の人々は、京都のやうに冷たい眼で彼を見る者はなく、一代に名をなした老畫家をば、自分達の生れた土地の名譽であるとして皆喜んで迎へるのだつた。

其の前に門人の青木湳堂は、梅逸の爲めに御園町一丁目の西側に一つの邸を求め、普請までして、そして後梅逸を迎へた。其の後梅逸は別に裏座敷を建てゝ畫室とした。

歸鄕後の梅逸は畫壇の耆宿として誰よりも重んじられてゐたけれども、もはや老境に入つてゐるので餘り筆はとらなかつた。それでも年收二百兩は下らなかつた。

間もなく梅逸は藩侯より御繪師の格に進められ、御用人支配となつて、帶刀を許され、拜謁も叶つて十分に取り立てられ、屢々城中に召されて、席上揮毫をなし、又は寶物の描寫を許され、或ひは杉戸衝立等の畫もかいた。此の杉戸衝立を畫いた時、御小納戸の役人から畫料の問合せがあつたのに對して、梅逸は、金二百兩かゝつたと申し出た。役人は其の大金に聊か驚いたと見えて、同じく繪師の木田華堂が出頭した時、「かくも大金のかゝるものなるや」と尋ねると、華堂は梅逸の畫を一覽して「成程是れでは二百兩かゝりませう」と答へたといふことである。

名古屋に於ける梅逸の畫友は、田中訥言、渡邊清、伊豆原麻谷等であつたが、梅逸は、訥言の外は餘り眼中に置いてゐなかつた。

或る時青木湳堂の姉の江崖といふ者が清を訪ねると、清はたまたま飛瀑を畫きつゝあつたが江崖を顧みて

「私は今瀑を畫かんとしてゐると、身うちが涼しくなつて、水音がたうたうとして耳のはたに聞えてゐる」と云つた。

江崖は感心して歸つて、其の後梅逸に此の話をすると、梅逸は笑つて

「それは水の音ではないだらう。清が絹に屈托して耳が鳴り出

したのだらう」と云つた。

また或人が、芥子園に所謂、無畢無箪とあるは如何なる事かと梅逸に尋ねると

「さやう、口でははつきり云へないが、たとへば應介の畫のやうなものだらう」と梅逸は皮肉に答へた。

其の梅逸も、訥言の畫だけは口を極めて稱揚した。併し、淸と梅逸とは昔からの友だつた。

渡邊淸は通稱を大助と云ひ、寶曆元年の生れで、父は利平と云つて名古屋本町八丁目に住つて縫箔を業としてゐた。淸は生れて穎悟、眉目秀麗で、幼より畫を好んで、十四にして初めて狩野英信の門に入り、英信の歿後其の子義信に從つた。

淸は幼少の頃から、竹洞、梅逸と仲のいゝ友達だつた。或る日竹洞と梅逸の二人が淸の家に遊びに行つた時、二人は淸に向つて頻りに、土佐派を研究することを勸めた。其の議論は、方今の土佐派は狩野の爲めに壓倒せられて萎微衰頽して少しも振はないけれども、元來本邦先哲の筆格を傳へたる純粹の日本畫は土佐をおいて他にはない。我れ〳〵のやうに漢學を專らとする者は漢畫を學ぶの外はないが、足下は我れ〳〵とは立場も異ひ、狩野派の素養もあるのだから、更に土佐を學んで其の長所を求めて潤色するならば、必ず一代に名を成すに相違ない――

――といふ意見だつた。

すると淸は歎息して

實は僕も多年其の志を抱いてゐるのだ、然し、名古屋には土佐派の良い先生はないから、土佐を學ばふと思へば勢ひ京都へ行かなければならない。然るに僕には母があつて而も年取つてゐる。僕が家を出て遠くへ遊學したならば母を奉養してくれる者がない、それゆへ未だに志を果さないのだ」と自分の意中を打ち明けた。

淸の母は別室にゐて其の談話を漏れ聞いて、其の場へ出て來て泪を流して我が子に向つて云つた、

「荷も藝道に志を立てる程の者が、親の身を案じて家を離れ得ぬやうなことで、どうして立派な人間になり得やう。家は幸ひ暮らしには困らないから母のことは心配するには及ばない。お前は京都へ行つて、お友達のすゝめに從つて勉强して世の中に名前を擧げておくれ」

と母は我が子を鞭撻した。側から梅逸も頻りにすゝめた。玆に於て淸は意を決して、京都へ行つて土佐光貞の門に入り、初めて畫院の生徒となつた。

其の時、同門の先輩に、同じく名古屋の出身の田中訥言がゐた。訥言は初め比叡山に登つて延暦寺の僧となり、修法の傍ら

石田幽汀に就いて狩野派の筆法を學んだが、後還俗して、伏見街道に住まつて畫を以て業とするに至つた。同じく幽汀の門に圓山應擧があつた。訥言は、應擧の畫才が常に己れの上に在るのを知つて奮勵努力して彼に勝らうと欲したが、遂ひに及ばなかつた。そこで、去つて土佐光貞の門に入つたのだつた。

訥言は、藤原信實、土佐光長、鳥羽僧正の三名家の筆蹟を慕ふて、日本古畫の風格を詳かにし、之れを祖述して、更に一新機軸を出し、多くは濃厚の傅彩を捨て、淡泊の水墨を用ゐて、雄健巧妙の筆を以て畫いて、遂に古土佐復興の第一人者となり、其の門から、清、宇喜多一惠齋等の名手を出した。土佐光貞が歿して後、訥言は光貞の幼子光孚を扶けて後見となり、法橋に任ぜられ、土佐派普及の爲めに身命を賭して働いた。彼は資性剛毅、一言も苟くしなかつた。言へば必ず行つた。

嘗て訥言は人に向つてかう云つたことがあつた。

「畫工が若し明を失へば、武士が戰場に於て武器を失つたやうなものだ。武器を失へる武士はいさぎよく死すべきである、畫工が失明した場合も同じ道理である」

處が、如何なる因緣か、後年彼は眼病に罹つて失明してしまつた。彼は憤悶して食を斷つこと數日に及んだが、未だ死ぬことが出來なかつた。そこで、終に舌を嚙んで死んでしまつた。文政六年三月廿一日のことで、年四十を出でたるばかりだつた。

清は訥言の指導を受け、成業の後名古屋へ歸つた。母は未だに健在だつた。

清は居を長者町一丁目にトし、母を養ひ、專ら畫を以て業とした。其の秀麗の筆致、巧妙の彩色、卓拔なる意匠は、忽ち遠近に喧傳して、揮毫を乞ふ者が常に門に充つるに至つた。名古屋の人は彼を目して長者町先生と云つた。此の時藩主源僖公は、愛知郡水野村定光寺なる藩祖の廟宗を修繕し、清に命じて樓殿壁房の著色施彩をなさしめた。清は畫友梅逸を推薦して補助たらしめて獨特の快筆を揮つた。それは梅逸の上京前のことだつた。藩主は更に清に命じて城中の襖障子、或ひは畫帖及び器具の紋樣を畫かしめ、其の褒賞として宗門自分一札を許可せられ、更に用人支配、帶刀熨斗目行衣着用を許され、士格を以て待遇された。

彼は平常酒も飲ます烟草も吸はず、身體強健にして、常に正宗の名刀を腰間に帶びてゐた。精神を純潔にし、意氣を莊嚴ならしむる爲めであつた。そして彼は尤も親孝行をもつて知られてゐた。

清は、畫に名款を記さずして、大幅でも小幅でもいつも口

」といふ銅印一顆を捺すばかりだつた。彼が淸といふ名を付けたに付いては面白い傳說がある、彼は、京都遊學の頃までは周溪と名乗つてゐたが、元來彼は書が下手で落欵が甚だ醜いので自身も之れを愧ぢてゐた。すると、或る時淸水觀音に詣でゝ歸途、一顆の銅印を拾つた。大和古印體で「淸」の一字を鐫り出し、古色蒼然たる物だつた。淸は大に喜んで其時思ふのに、渡邊氏は古來一字名を稱するのが常である。されば淸といふ字は自分の名として最も適したものだ。これは自分の畫風の改良と共に名を淸と改めよとの觀音の示現に相違ない――と、そこで以來改名して其の印を捺したのだと云れてゐるけれ共、彼が落欵を記さないのは、事實は字が拙いからではなかつた。稀れに見る彼の字は沈着にして雄渾なる書だつた。たゞ彼は、世の徒らに拙書惡詩を題して畫の風韻價値を損ずる者の多いを歎いて、已れは印のみを捺して、畫面を傷けざる用意をなしたのであつた。

淸の畫には、訥言のやうな豪宕不羈の氣はなかつたけれども、よく纖細の筆を以て巧妙の畫を作り、畫趣に氣品があり、特に彩色に獨特の長所を有してゐた。

十

名古屋には梅逸の下繪になる山車の幕が現今も澤山殘つてゐる。中須賀町の山車の大幕は、猩々緋に四神の圖を縫ひ取り、其の下繪は梅逸の筆である。大久保見町の山車の水引は、門人梅山の下繪で、白羅紗に群鶴の縫ひ出しだが、其の押への金物蝙蝠の圖は梅逸の下繪である。其外、黑船町の猩々緋に浪に鯱を金糸縫にしたもの、中市場町の白羅紗に金絲で四神の圖を縫ひ取りたるものも。何れも梅逸の下繪である。山車の幕に梅逸の下繪を求め得た町内は大いに誇りとするのだつた。

其の頃の話に、或る時田舍者らしい男が梅逸を訪ねて來て、紙を出して山水を畫いて貰ひ度いと云つて、懷中から金二朱を取り出してうや〱しく梅逸の前に差し出して

「私は貧乏人のことで澤山の御禮も差し上げられませんが、何卒之れをお納め下さいまするやう」と云つた。

梅逸は餘りのことに、一度は謝絶らうとも思つたが、何分相手が田舍漢だからと我慢して、早々に筆を走らせ略畫山水を作つて「さあお持ちなさい」と云ふと、其の男はさも物足らぬげに見てゐたが、又もや懷中から金二朱を取り出して

どうかもう是れだけ山をかき足して頂き度う御坐ります」と云つた。

或る年梅逸は藩侯から、東照宮祭車の圖を描くことを命ぜら

れた　謹んで承諾すると、使者の曰く、然らば何日を以て其の山車を飾つて置きませうか。梅逸が曰く、私は前年それを見てありますから、再覧の必要はありません　併し使者はあやぶんで云つた

「併し先生、若し熟覧せずして筆を下されたならば、或ひはまちがひがないとも限りますまい」

　すると梅逸は云つた

「あなたはさう云はれるが、幸ひ祭車であればこそ飾ることも出來るのです　若し畫くものが、古聖先哲か、或ひは麟鳳蛟龍の如きものだつたならば、あなたは如何してそれを見せて下さるおつもりですか」

　梅逸は深い學問はなかつたけれども、風流の嗜みは多方面に有つてゐた　彼は初め漢學を藩儒奥田鶯谷に就いて學び、又和歌を大館高門に就いて學んだ　和歌には秀吟が多かつた。詩は何びとに學んだか不明だが、之れも相應に作り得た。詠梅の詩に、

　茶熟間香夜漏遲、小齋幽獨捲書帷、
　紗窓影淡月初上、正是山人得句時

　横笛は東儀近江守に就いて極意を許された程だつたが、更に彼が最も得意とした技は煎茶式だつた　山本名古屋は茶の土地であるが、彼は藩士深田精一と共に茶式の蘊奥を尋ね、書を著はして茶式を述べたこともあつた　煎茶の詩に

　選レ石安二鼎鐺一、汲レ泉拭二旗槍一、
　林中露座久、　吟向白雲忙。

　京都の町奉行を勤めた淺野梾堂とも茶道の上から親交があつた　梾堂は名は長祚、字は胤郷、また蒔潭とも號し、學識ありて和漢の古書畫器物の鑑識に富み、煎茶の式に詳しく、京都の文人雅客交遊の中心になつてゐた

　梅逸も晩年は書畫骨董の鑑定をもつて名があつた　殊に茶器に詳しかつた。京都に居た頃、某の茶會に古銅の花瓶が出陳されたが、天下の名品といふので世評が高かつた。すると其の頃梅逸の門人で清洲の人竹田柯笛といふ者が上京したので、其の事を物語して、且つ花瓶の圖を記憶に依つて描いて見せると、柯笛はそれを一覽するが否や

「是れは私の家に秘藏する品と同一でございます　形狀も模樣も寸分ちがつて居りませぬ」と云つた

「そんなことはないだらう　是れは天下一品で他に類似の物がある筈はない」

「いゝえ、全く同じ物です、少しも異ひません」

「それは不思議だな　併し全くさうなら、お前の家のを一目だ

け私に貸して下さらぬか　私が自分の茶會に用ゐて皆を駭かせて遣り度いから」

「お易い事です」

と柯笛は快く承知して歸郷した。そして何氣なく其の事を父に話すと、父は

「それは以ての外の事を承知して來たものだ。あの品は門外不出の珍器で、たとひ師の言葉でも滅多にきかれるものではない。早くお斷りをするがよい」と云ふのだつた。

柯笛はひたすら父に頼んで見たが許されなかつた。仕方がないので有のまゝの事情をのべて梅逸に斷りを云ふと、梅逸はことの外腹を立てゝ、其の事から柯笛は破門のやうになつて音信も絶えてゐた。處が、今度彼が歸郷した後柯笛に會つた時は、柯笛の父も歿して、彼も今は一家の主人だつたので、前きの日の約束を實行しても苦しくあるまいと云ふので、やがて借り受けてしばらく愛玩したが、それを返す時箱の蓋の表に「淡獣耳方壺」と書して、其の裏面に次ぎの文を記して返した。

壺所二以貯一レ酒漿脊之類、博古圖載二相似者二四品一、大小精粗不レ同耳、此器青綠朱斑、土華堆起、古色可レ愛、寔漢物也、柯笛兄所レ藏、其實二愛之一。

安政乙卯春二月　梅逸老人亮識

竹洞は、閑居幽獨の時でなければ畫かなかつた。が、梅逸は反對に、衆人環視の中に在つて筆を揮ふ時ほど畫の出來がよかつた。それ程兩者の性格は相反してゐた。竹洞が梅逸を評して「梅逸は健筆なれども運筆卒爾なるは賞すべからず、畫は宜しく沈着ならざるべからず」と云つたことがある。氣韻があつて畫品の高雅なことでは竹洞の方が梅逸の上に出てゐたが、梅逸の健腕縱筆に至つては竹洞のおさ〳〵及ぶ處でなかつた。華山は梅逸と椿山とを評して「今世の除熙は梅逸なり、黄筌は椿山なり」と云つた。梅逸を運筆卒爾と云つた竹洞は、むしろ自重に過ぎてゐた。それについて嘗て山陽がかう云つた。

「岸駒は天下の人々皆目なきものと思へり。竹洞は天下の人々皆目明きなるものと思へり」

流石は山陽でうまいことを云つたものである。

梅逸は繪の具には非常なる注意を拂つてゐたが、名古屋へ歸つて後は、燕脂の色が惡しくて、京都に居た時のやうに美しくならない、是れは名古屋の水質がいけないためだらう、と云つてゐた。筆は蟹爪といふのを用ゐてゐたが、晩年は多く對山堂といふ銘のある眞かき筆を用ゐてゐた。此の筆は當時一本の代價十六文位、百に四五本位買はれた粗筆で、穗先きが短くて細かつたが、之れで山水でも花鳥でも何でも畫いた。

梅逸の大作として世に聞えてゐるのは、京都西村總左衛門藏五尺幅絹本松竹梅群鳥圖、名古屋守隨氏藏三尺五寸絹本豹、武山氏藏春秋嵐山圖絹本六曲屏風極彩色、笹田氏藏金地四季草花、等が主なる物だが、さうかと思ふと、嘗て尾張侯の命に應じて、一寸四方の絹五十三葉に、東海道五十三驛の圖を畫いて、其の精密と運筆の靈妙なるに人目を駭かせたことがあつた。

安政二年の終り頃から梅逸は老病の床に就いた。其の前に彼は自筆の二輛の畫卷を妻のてつに與へて「俺が死んだ後は之れを形見にせよ」と云つた。一卷は山水畫で、一卷は蟲の行列を畫いたものだつた。それから、菩提寺なる伊勢町の洞仙寺中に自分で碑を建て、自筆で梅逸塚と書いた。

熱田の正覺寺の僧某は梅逸と交際があつたので、或日梅逸の病床を見舞ふと、梅逸は病床に在り乍ら二三名の客に接してゐたが、四方山の話をしながらも梅逸は、絶えず指で蒲團の上に何か描いてゐる樣子である。某が、

「老人は何をかいて居られるのです。暫しの御病氣の間も、ものをかくことは止められないのですか」と云ふと、

「左樣、次ぎの世もまた絵かきに生れて來度いものだ」と梅逸は云つた。

年が改つて、正月二日のこと、梅逸は俄かに門人や知己を呼び迎へて、白衣をまとひ、心經を讀んでゐたが、一同に向つて

「今日は、此の世のお別れをする――」

さう云つて、間もなく瞑目した。

行年七十四。伊勢町の洞仙寺に葬り、玉禪院大藥梅逸居士と法名した。

十一

梅逸の養子となつた梅所は、畫は上手だつたが、其のわりに畫は好きでなかつた。當時は黒船渡來以後、世は太平の夢を破られ、上下漸く亂れ、志士は腕を扼して四方に活躍した時代だつたので、青年の梅所は、閉窓にたれこめて彩筆を揮ふに堪へられずして、梅逸の歿後間もなく郷を辭して京師に上り、勤王の志士と交りを結び、盛んに國事に奔走した。梅所は頗る新思想を有し、明治二年に京都で初めての新聞紙を發行し、率先して斷髮し、洋服を着し、妻女にまで洋裝をさせた。或ひは縫工社といふ洋服の裁縫所を設けて、士族の女子を集めて裁縫を教へたりした。梅所はかういふ人だつたから、梅逸の遺產もつひに蕩盡し、名古屋の家もやがて人手に渡してしまつた。そして不遇のうちに在つて、明治五年四十二三歳で歿した。

梅逸の門下には、梅所、青木甫堂、同江庵、前田[illegible]堂、上田

桃逸、梅居、岸上西涯、中野水竹、齋藤竹處、片野南陽、山田訥齋、岡本梅英、小島老鐵、竹田柯笛、上野雲岳、藤堂凌雲、生川九春、竹逸、竹外、柴田東嶺、沼田月齋、三輪可選、増田象江、梅仙、梅岳、等の外にもまだ多數あつた。

其の内、藤堂凌雲、前田暢堂、小島老鐵、等は最も有名であつた。

藤堂凌雲は伊勢津藩の人で、維新頃より東京へ來て淺草新堀端に住み、後東竹町に移つた。凌雲が今戸に住つてゐた時は、高張を灯ける樣な立派な家で、普通の畫家とは異つて、藤堂家などでも別格の待遇をしてゐた。凌雲は曾て長崎に遊んで木下逸雲とも親交があつたので、慶應元年逸雲が江戸に下つた時は凌雲の宅を宿とした。

前田暢堂は名古屋の人で、別號を半田と云ひ、一時大いに流行した。梅逸の養子梅所が彩筆を捨てゝ岐道に走るやうになつた原因は、暢堂の畫名が一時に高く、己れの畫が世に用ゐられぬことに憤慨した結果だといふ説もある。

併し、梅逸門下中畫技に於て最も傑出し、人となりの見るべきものゝあつたのは、小島老鐵だつた。

老鐵は一に釆風外史と稱した。通稱友七郎、寛政五年名古屋に生れた。彼は幼より聰敏で、桑門に就いて學を受け、傍ら總見寺の菖洲禪師に參し、畫は初め吉川義信に就いて狩野派を學んだが、後梅逸に就いた。梅逸の上京前の頃だつた。併し、老鐵は、やがて其の風にもあきたりなくなつた。更に元明諸大家の法を模し、遂に自から一機軸を出して、頗る氣韻の高尚なる畫をかくやうになつた。

大窪詩佛が漫遊して名古屋へ來た時、初めて老鐵を見て大いに其の人物を奇として、慫慂して江戸へ伴れて行つた。是に於て江戸に出でゝ諸大家と交遊すること三年、詩佛の江山詩集中に往々其の名が載つてゐる。其の後仙臺に遊び、期年にして再び名古屋に歸つて門戸を開き、畫を以て業とした。

老鐵は天性の奇人だつた。常に外形を扮飾せず、曠然自適して、些かも名聞を求めなかつた。當時の畫家は皆邊幅を飾り、自から儒門學者を氣取つてゐたが、老鐵は反つて自から職人だと云つてゐた。間々押印に「綺屋友七」といふのを捺したりした。勿論世を戒める考へからだつた。人と畫家と月旦をすると「彼れは名古屋の良工なり。我れは日本の拙工なり」と云つた。

一と頃老鐵は市内長福寺の閻魔堂の側に住んでゐた。娉僕を雇はず、貧を憂へず、室内に塵埃が堆積しても曾て拂ふではなく、悠々自適の生活を營んでゐた。たまく畫を乞ふ者があつ

ても急に描かないので、衣食足らず、赤貧洗ふが如くだつた。勿論彼には妻子はなかつた。硯と筆とが彼の妻子だつた。食ふ物が無くなれば、三度の食を二度にでも、一度にでも減じ、或は終日食はずにでも居るのだつた。屋根は破れて雨が漏り、寝るにも夜具がなく、席の上にごろ寝をしてゐた。

彼は酒が好きで、一瓢の酒を傾け盡すと陶然として、空の瓢をポン／＼と叩き乍ら、

賤が伏屋に月もさす、見やれ葉蘭の花も咲く

と謡ふのだつた。

窓の下の破れた壁に、張月樵の鯉魚の圖が貼つてあつた。門人などが行くと、

「俺の癇氣は窓下の鯉ぢや」

と云つた。それは自分の畫が未だ張月樵に及ばないといふ意味だつた。

同じ境内に稲荷屋といふ料理屋があつた。そこの主人は親切で一寸氣風の變つた人だつたので、折り／＼老鐵の處へ酒や肴を持つて行つて遣つた。が、皿や鉢を一度も返さないので、皿小鉢をどうなされたと尋ねると

「あれは米屋が借金のかたに持つて行つた」と老鐵は答へた。再々のことなので其れには稲荷屋の主人も弱つて今度は何か器の要らない肴を遣らうと考へて、大きな海蟹の茹でたのを縄で吊して持つて行つた。

「是れは好物々々、蟹と來ては、千兩貰つたよりも有難い」老鐵は大喜びで、それからあたりを見廻すと扇が一本あつた。「何ぞ御禮を差し上げたいが、先づそれまでの證據に此の扇を一時お預け申さう。是れは私が門人に頼まれて書いた扇だから、進呈するわけにはいかん。御禮を差し上げる際には必ず戻して頂き度い」

主人は可笑しくて、仕方がないが、其の扇を受け取つて開いて見ると、瘦竹風に戰ぐ圖で頗る良くかけてゐる。

「では確かにお預り申します」と云つて主人は歸つた。

それから數日の後、老鐵は慌たゞしく料理屋の前へやつて來て

「先日は何よりの好物を頂戴して有難かつた。其の節の扇は門人から貰ひ受けたから、あれを御禮に受けて貰ひ度い」と云つて歸つた。

或る頃、閻魔堂の床下へ來て棲んでゐる年の若い乞食があつた。晝間は稼ぎに出て、日が暮れると歸つて來て菰を敷いて寝てゐた。さみだれ頃になると、乞食は毎日寝てばかりゐた。或る日老鐵は乞食の寝てゐる側へ行つて

「これ〳〵乞食、貴様は何故毎日寐てばかり居るのだ」と云つた。

「から雨が降つては稼ぎに出られませぬ」と乞食は云つた。

「それでは定めし食ふ物がないだらう、わしの所で食ひ物を遣はすから來るがよい」

「有難う存じます」

さういふ風で老鐵は乞食と懇意になつて折々貧しい食物を分けて遣つてゐた。或時老鐵は乞食に向つて云つた。

「貴様も何時迄乞食をしてゐても仕方があるまい、眞人間になる氣はないか」

「それは私も眞人間になり度う御座います」

「それなら儂の僕になつてはどうだ、乞食よりはましだらう」

「有難う存じます、どうぞお願ひ致します」

相談がきまつて乞食は老鐵の下僕となつた。

「時に、貴様の名前は何と云ふ」

「越中と申します」

「「越中――?それは乞食の符諜だらう――まて〳〵儂が名前をつけて遣る。こうつと、どうぢや鬼助と云ふのは」

「へえ、どふいふわけで御座いますか!」

「貴様は今日迄閻魔堂の下に居たから鬼助だ」

「成る程、鬼助で」

鬼助は忠實に働いてゐた。老鐵は試みに書を教へて見ると、才氣があつて、忽ちにして腕が出來た。

「鬼助や、貴様もそろ〳〵絹を賣つてもよくなつたから、儂が雅號を考へて置いたぞ」

「有難う存じます、何と申しますので?」

「劍山といふ號だ」

「へえ、どういふ意味で御座いますかな」

「劍山は即ち劍の山ぢや。閻魔の廳の鬼助だから、今度は劍山だ」

「成る程――」

後には劍山も一人前の書家となつた。

或る年の暮、老鐵は貯へも盡き、諸方の借錢を拂ひ難く、いかに奇人でも此の世に生きてゐるからには、金がなくては正月が迎へられない。

「鬼助、金がないな」

「へい、米屋と薪屋が喧しく參ります」

「いや、然し心配するな、己に工夫があるから」

老鐵はどう工面したか絹地を一枚買つて來て、それへ梅逸の贋作を畫いた。圖は山水で、我乍ら梅逸の筆意を寫し得て餘り

あつた。老鐵はそれを持つて知り合ひの富豪を訪れて、「此の梅逸を抵當に入れるから三兩貸して貰ひ度い」と云つた。此の富豪は大變梅逸の畫が好きで、且つ自から鑒識を誇つてゐた。が其の畫を見ると一も二もなく金を貸してくれた。老鐵は借錢拂ひをして安々と正月を迎へることが出來た。

老鐵は、年が改まると豫て人々から依賴されてゐた處の畫を精出して畫き上げ、畫料がはいるとそれを持つて富豪の處へ行つて、借りた金を返し、例の畫を戻して貰ひ度いと云ふと、富豪は些か當てが外れて「金は御返濟に及ばないからあの梅逸は是非私に讓つて頂き度い、金は更に追加しても苦しくない」と云つて容易に返して呉れない。老鐵は困つたが、態と言葉を荒らげて「金を返せば品物は私の物です、あれは何と云はれても賣るわけにはいきません」と云ひ張つて無理に取り戻して歸つて來た。

其の夜、老鐵は富豪の許へ劍山を使に遣つて「些か心祝ひをすることがありますから、是非茅屋に御來臨願ひ度い」と云はせた。富豪は何事かと思つて遣つて來て、座について見ると、例の梅逸の山水畫が床にかゝつてゐる。老鐵は笑つて富豪に向つて云つた。

「實は今だからお話するが、私は昨年越年の金に窮したので、自分で此の畫を描いて貴家に質に入れたのです。其に大金を貸して下すつて誠に御禮の言葉もない。處が、此の頃多少畫料を得たので、永く貴家を欺くに忍びず、今日金を返して此の畫を受け戻したのです。一時の方便とは云ひ乍ら人を欺いた罪は、天地も許さぬでせう、それ故かうあからさまに理由を申し上げた次第です、何卒おゆるしを願ひ度い」

さう云つて、自から一盞を傾けて、杯を富豪に呈した。主人は初めて其の贋作なるを知つて驚き、自身の眼識の足りないことを愧ぢ、且つ老鐵の潔白に敬服して、歡を盡し、雅談に夜の更くるも忘れてゐた。老鐵は更に其の贋作に、之れを作つた理由を書して富豪に贈つた。

老鐵は嘉永五年六月八日、病で富士見の寓居で沒した。享年六十。門前町極樂寺に葬つた。尾藩の儒者深田精一氏が其の墓に「老鐵墓」と三大字を書した。

追記。本篇を畫人傳の十一、十二としたのは、此の中に中心となる二家の傳が語られてゐるからである。讀了されれば了解することゝだが、此の二家は互ひに切り離して見ることのできない人間である。性格、畫風共に全然相背馳して完全なる別物でありながら、それが或る一つの物の兩面であるかのやうな氣持がされる二人である。筆者は最も其の

點に興味を有して本篇を起草した次第である。竹洞、梅逸各々特長があり、何れに優劣も下しがたい、が、それでゐて、何んとなく、どつちの方が果して傑いだらうかと考へさせるやうな對照である。其の判斷は一に讀者諸君の氣持に任せることにする。

主なる引用書。兼松盧門氏著竹洞と梅逸、田部井竹香氏著古今中京畫談。

緑林子問答

平塚　篤

(A)『蒙古などを無暗に旅行して、危險はないものかね』

(B)『危險と云ふと、何う云ふのかな、例の支那一流の源氏車——と云ふと甚だ風流の樣だが、實は蒲鉾形の乞食車——に揺られて、急性腎臓炎を起した人は澤山あるし、ガタリと揺れた拍子に、頭を打突けて夫なりけりに往生した人もあるからね危險と云へば是れも危險の一つ、生水を飲んだら下痢すること請合、踏み外して谿間に落ちた者だつて幾らもある、是れだつて危險だぜ』

(A)『いや例の馬賊さ、大丈夫かい』

(B)『一向大丈夫でないね、内蒙古でも綏東、平泉、林西、開魯邊は奴等の巣窟なのだから、見たいとならば毎日でも見られる、隨分やられる者が澤山ある樣だぜ』

(A)『よく君は何とも無いね』

(B)『ある譯がないじや無いか、此の一文無しを襲つて見た所で何んになるんだい。この邊の馬賊は、日本のコソ泥の樣な、あんな目先の見えない連中とは、憚り乍ら出來が違ふよ、あの男は金を幾ら持つてゐる、阿片を何斤持つてゐると云ふ位な事は丁んと見通しに知り拔いてゐる。だから大丈夫さ、馬賊は貧乏人は決して襲はないからね、旅行するなら朝鮮服を着て行けと云ふ位だ、昔から朝鮮人で馬賊に襲はれた者がないと云

ふのは、貧乏人なるが故さ、』

(A)『全體馬賊つて何んな奴なんだい。君は見た事があるかい』

(B)『あるとも、此邊を旅行した者で恐らく見ない者は無い位だらう。讀んで字の如く、馬に乘つた土匪さ、百人千人と隊を組んだのもあるし、三人五人のコソ泥式のも無論ある。日本人でも襲はれた者が澤山あるが、元來此邊の奴の目的は支那人の金持にあるのだから、よく〳〵の場合でなければ、外國人には手を出さない。第一外國人の旅行者で、金などを持つて居る樣な馬鹿はないからね、そこへ行くと、北韓から露支國境の奴は危險だよ、所謂不逞鮮人なんてのも雜つて居るし、目的物が日本人なんだからね、』

(A)『奴等の間にも相當の訓練や德義があるのか知ら、第一其の親方なる者は何者だい』

(B)『親方かい? 左うさね 早い話が、今でこそ東三省保安總司令なんて納り返つて居る張作霖なんか、押しも押されもせぬ大親分ぢやないか、部下の吳督軍だつて孫督軍だつて、師團長も旅團長も、八九分通りは全部馬賊上りだぜ、○○都統の○○○、副都統の○○○は勿論、赤峰の鎮守使○○○なども、山東生え抜きの馬賊だ、泥的から大名に成り上つた者、世に蜂須賀君のみならんやだ、勝てば官軍と云ふ譯か、文字通りに實現されてゐる所は、見渡した所支那が第一だらうね』

(A)『ぢや、軍隊だか、馬賊だか判らないぢやないか』

(B)『勿論さ、軍隊とか、巡警とか云ふ連中は、馬賊から早替りした者、若くは早替せんとする者の集りに過ぎない。從つて常に密接な連絡を持つて居るさ、第一僕等が旅行する時に、護衞として兵隊か巡警を連れて行けと云はれた時に、なあに入るもんか、大丈夫だなんて威張つて出掛けて見給へ、二三日目には必と馬賊に出喰はす事請合だ。他の旅行者に對する見せし目の爲めにも、態々通知して誘ひ出すんだから堪らないさ、夫れから又、連れて往つた兵隊や巡警には、旅行者が飯を食はせて、先づ一人三日に對して日本貨にすると八十錢位をやる事になつてゐる。所が中には少いと云つて駄々を捏ねたり、宿舍の主人に賴んで、附け掛けをさせたりする。それを旅行者が愚圖愚圖云ふと、そんならと奧の手の馬賊を連れ出すんだ、厄介な連中だよ』

(A)『けれども、支那政府だつて、一々旅行者に護衞を附けるなんて、大變な手數ぢやないか』

(B)『その反り、連れて行かれた間丈は、官の飯を食はないから、夫れ丈でも利益ぢやないか、夫れに主人は、宿舍で御馳走

が食へるんだから、旅行者は書き入れの福の神さ』

（A）『ぢや、護衛さへ連れて居れば、大抵は大丈夫と言ふ譯だね』

（B）『さうだ、元々仲間同志なんだから、幾ら泥棒だつて、仲間の顔を潰す樣な事は、先づ仕ないね、馬賊連中にした所が、頼れでもすれば兎も角、さうでない限りは、金など澤山は持つて居ないと判り切つてゐる、外國人などを襲つて、後で討伐を喰つたり、何かするよりは、ウンと金を持つたり、阿片を携へた支那人を襲つた方が、樂で且つ後祟りがないから、其の邊は考へてゐるさ、勿論臨城事件などは、單なる掠奪と云ふよりは、多少政爭の意味もあつての結果だが、外國人を襲つたりすると、直ぐ喧しい抗議を持ち出される。其の結果としては、形式丈も討伐をやらねばならず、同時に又た二人や三人の犧牲者は出さねばならん、恁うなると、元來が仲間同志なのだから、幾ら支那人でも、一寸情に忍びない處があるらしいね、而已ならず、馬賊自身にした所が、一人や二人の外國人を襲つて、碌な獲物もない癖に、討伐をやられて、折角の繩張りを荒されて了ふから、差引非常な損害だからね、出來星のコソ泥でもなければ、成る可く外國人には、手を出したくないと云ふのが、奴等の本心なんだ』

（A）『住民などは隨分惱されて居るんだらうね』

（B）『多少はやられて居るが、要するに金持に限るのだから太して社會的の騷ぎにもならんのだね、元來内蒙古邊は、兩三年前までは、夫れ程澤山の馬賊は居なかつたのだ、所が大正十一年の夏だつたか、赤峰鎭守使の張將軍が、内蒙各地で馬賊の被害を折々耳にするのと、折柄奉直兩軍睨み合ひの關係上、一人でも澤山の兵を作らうと焦つた結果だね、部下に命を含めて八方に走らせ、盛んに馬賊の懷柔や歸順勸告に努力させた、恁うして投降して來た者斗りで、別働隊を作つたのだが、其兵數は約四營、即ち二千人と云ふのだから豪くぢやないか、所が半年經つか經たぬ間に、軍隊生活の窮屈で、且つ馬鹿々々しいのと、食糧其他の給與が、約束通り行渉らないのに不平を起して、今日も十人、昨日も二十人と、銃器彈藥を持ち逃げして、元の古巢の馬賊生活に逆戻りした者が、凡そ八百餘名、殘りの千餘名は、其後熱河の王都統から嚴命があつたので、止むを得ず因果を含めて、解散したから、待つてましたと斗り、此の連中も大方は手馴れた昔の職業に立歸つた。この時も解散命令の出るのを、早くも嗅ぎ附けた連中は、何うせ追放されるならと斗り、行き掛けの駄賃に、武器彈藥を失敬したのも澤山あつたとかで、この時に少くも壹千挺以上の銃器が、易々と馬賊の手に

入つて了つた譯さ、これが大正十二年三月頃の事だ、内蒙各地の馬賊が新式精鋭な武器を提げて、暴れ出したのは夫れからの事なんだ。而し馬賊にも馬賊道德があつてね、餘り貧乏人は襲はない事になつてゐる。其點に行くと、軍隊とか巡警とかの掠奪は素晴しいものだ相だぜ』

（A）『何んだ、護衛者がやるのか』

（B）『うん、元々仲間同志なんだから仕方がないさ、第一馬賊連中になると、宿賃や食代などは、ちやんと支拂つて行くが、兵士や巡警になると只の一文でも拂はぬ斗りか、多少の小遣まで捲き上げて行くね、そして假りに或る家に馬賊が襲つて、多少の物品を掠つたとするね、家人が其の訴へを軍隊とか警官とかにすると、訴へを受けた奴等は、下らない事を幾度も聞き直したり、態と大袈裟な武裝をしたりして、出來る丈時間を潰す、さうして確實に馬賊連が逃げ去つた頃を見計らつて、其の家に出掛ける、これからが大變だ、調査と稱して、家の中にある目星しい物は片つ端から殘らず、掠奪して了ふ、狽てゝやる馬賊等と違つて、これは落付いてやるのだから、夫れこそ徹底的に掠奪して了ふ、其結果が昔から只一人の馬賊も捕つた例もなければ、盗まれた品物の返つた事もないと定つてゐるのだから、幾ら馬賊に襲はれたつて、訴へ出る樣な馬鹿者は、一人もない譯さ、だから人民に取つて怖しいのは、馬賊よりも、兵士や巡警の方が幾層倍なんだ』

（A）『それぢや、何方(どつち)が馬賊だか、全(まる)で解らないぢやないか』

（B）『だから内輪同志だと云ふんだ。前にも云つた樣に、現在支那の將軍とか、督軍とか云ふ連中の多くは綠林出身なのだから、早い話が、現在の支那では、馬賊と云ふ職業は、決して自分から見て恥ず可き職業でない斗りか、他から見ても卑下すべき連中とは思はれて居らぬらしいんだ。此邊が我々外國人には一寸理解の出來ぬ點さね、現在内蒙古に何の位居るか、判然たる數は勿論判らう筈がないが、先づ二千内外と見たら大差はないだらう、此連中の多くは歐式の軍銃か、又はモーゼル連發拳銃を持つて、少さいので五六名から十名位、大なのは四五百名が一隊となつて、襲擊する。旅人を襲ふのは大抵少いので、掠奪する物がないと、乘用の馬車騾、馬驢の類までも、遠慮なく捲き上げて了ふ。假りに抵抗せぬ限り、生命迄も奪ふと云ふ樣た事は、多くの場合無いと云つて好い、大部隊の連中は、富豪の邸宅を襲つたり、公々然徵發命令を發したりする。元々恥ず可き職業とされて居ないのだから、日本の泥的の樣に、空巣を覗つたり、暗夜でなければ出られぬと云ふ樣に、其んな幽靈見たいな卑怯なものぢや無い。夫れこそ白晝公々然として長安大

道に現れるんだから愉快ぢや無いか』

(A)『餘り愉快でも無いが、無論此の連中の出沒するのだつて、季節とか時間とか、自ら多少の關係があるんだらうね』

(B)『夫りやあるさ、朝早くは出ないと定つてゐる。だから旅行者は、朝は昧爽に出て、夕方成る可く早く切り上げると云ふのか、不文律のやうになつてゐる。夫れから季節だが、何と云つても、秋と年末が書入時だね、秋になると、草木が繁茂するから、身を隱すのに非常な利便がある斗りでなく、西北部內蒙古に於ける阿片の產出は年々夥しい額で、毎年此の時期になると、天津北京は素より、遠く南支方面から、買出しの爲め澤山の阿片商が入り込んで來る。是が最上の鴨で、例の綠林子は、此の買出商や、運搬者の爲めに、ちやん〳〵網を張つてゐるんだ。と云つて商人達だつて、網のある事は先刻御承知なのだから、さう甘々とは引掛らない。必と三五名の護衛巡警を連れて來るから、綠林子も此の時季の出動には緊褌一番、相當の決心して、味方に多少の損害位あるのは覺悟の前でやつて來る。從て瘦旅人を締めるのとは異つて、獲物も相當に大きなものがある譯だ。斯うなると巡警などは意氣地のない者で、眞實目な戰鬪などの出來る者もなし、あつても元々內輪の事だから、成べく怪我のない程度で、よろしくやつて退却するのが常だ。中には全くの他人同志でボン〳〵やるのもあるが、さうなると強弱の問題となる。又た元々馴れ合ひで、後で分配を受けるやうな不埒千萬なのもある。仍へ行くと強いのは蒙兵だ、蒙兵を護衛に連れて往つて、彼等が前面に賊兵ありと氣が附くと、直ぐ下馬して、先づ小便をやる。夫れから馬の腹帶をぐいと締め上げて、さあ來いと斗り、充分の戰鬪準備をする。馬賊も此の連中に逢つては到底敵はないから、退却して了ふのが常だ。小便をするのは何もお呪禁をする譯ぢやない。何の勝負だつて、小便がたまつて居ては、勝ちツこないぢやないか』

(A)『すると富豪などは、襲はれたが百年目で、あつさり財物を進上するんだね、殺されたりしちや耐らんからな』

(B)『さうだよ、多くの場合觀念の目を閉ぢるやうだね、尤も富豪の方だつて、三挺や五挺の銃器は、平常からちやんと準備してあるし、中には高い牆壁に銃眼を切つてあるのさへある位だからね、さう唯々と進上しないのもあるさ、斯うなると生命知らずの我武者羅連中との間に、勢ひ凄慘な修羅場を演出する樣な事も度々ある。一方村民からは手近な官憲に急告する。愈々蒙古駐軍の出動となるのだが、これが又た大變な連中だ。何しろ其の多くは前にも言つた樣に、一ツ鍋の飯を突つき合つた仲間なのだから、働くにした所で、眞面目には働きツこない。

而已ならず、馬賊連は、必と一人が一頭宛の副馬を連れて居て、萬一官兵に追掛けられる樣な事でもあると、正馬と副馬とを、巧みに乘り換へ索き換へ、夫れこそ韋駄天走りに逃げ去るのだから、折角軍隊が目的の場所に行着いた所で、もう馬賊團は影も形も無い譯さ、これから例の搜索とか、調査とか云つて、代り合ひまして軍隊の徹底的大掠奪となるのだが、一方殺軍の引率者たるもの（知事が巡警隊を率ゐて來る時もある）も、上將への手前、をめ〳〵手ぶらでも歸れない。仍で其地附近の間に合せ馬賊と云ふよりは、寧ろ出來合ひ馬賊を二三人引捕へ、たんまり懷中を吸めて意氣揚々と引揚げるんだ。出來合ひ馬賊と云つて、別にそんな者が居る譯ぢや無いが、支那では何所にでもあるが、土百姓の不心得者が、金錢や食糧に困ると、一寸間に合せの馬賊になつて、旅人などを路傍に擁して、一時的の强盜をやるのが幾らもある。この連中は、地方の小役人が、能く知つて居るのだが、平常は知らん顏をして居て、恁う云ふ場合に引捕へるのだ。こうして捕へた出來合ひ連は、型の如く一應の訊問を受けるね、そして軍律に照らすと云ふ名儀の下に、否も應もない、直ぐ銃殺さ』

（A）『隨分大變な軍隊があるもんだな、ほんとうにそんなのが有るのかねえ』

（B）『誰だつて驚くぜ、僕なんかも初めは、話半分位に聞流して居たものだが、扨て實際を見ると、正に話の二倍以上だね、素質の劣惡な事なんかは、全でお話にも何もなつたものぢやない。夫りや兵隊だから、年に一度位は演習の眞似事位はやるがね、その他は練兵するでも無ければ、教練を受けるでもない、毎日營内にゴロ〳〵して居て、一文二文の賭博をやるか、外へ出て無錢飮食をやるの外には、全く用なしなんだ。脫營兵は毎日の樣にあるが、夫れだつて言はゞ當然の結果さ、何しろ粟飯の二食で、手當はもう八ツ月餘りも不渡りなんだから、逃げたくも成らうぢやないか、首腦部とか、隊長とか云はれる連中だつて同樣さ、年が年中賭博を打つか、阿片を吸ふの外には、是れも用なしだ。兵士は白晝街上に出て、公々然と泥棒擬ひをやる、將校は無錢飮食の常習犯だ。内蒙古の北部には、見渡す限り、何所にも樹林と云ふものが無い、從て馬鹿々々しく薪が高いから、地方の百姓などは、漸と掻き集めた雜木の薪や石炭などを、馬車に積んで遙々町に賣りに來る。すると兵士等は之を途中に擁して、車諸共强奪して、二束三文に賣り飛ばして了ふ。この位の亂暴は、彼等に取つては朝食前の小手調し位なものだ。何とも彼とも實際お話にならん手合だよ』

（A）『さうかねえ、驚いたものだねえ』

（B）實際知らない人に話したつて、眞實にしない位だよ、一昨年の冬だつたかね、舊節季に際して、綏東に駐屯する毅軍は、隊を組んで市民に對し、銀四千元の調達を命じ、大袈裟な示威運動をすること、連續三日に及んだ事があつた。隊長の尻押しに依ること云ふ迄も無いが、表面は知らぬ顏の半兵衞、制する所か、制止すらも仕ない。知事だつて同樣だ、何所を風が吹くと云はん斗りの横着振り、流石の市民も呆れ返つて、遂に四千元をうまくせしめられて了つた事がある。連中は此金で、漸く年の節季が越せた譯さ、赤峰でも同樣だつたが、茲は流石に鎭守使の所在地丈に、露骨に兵士が隊を組んで、威脅する樣な事は無かつた。けれども何所も同じ兵士の給料不拂ひで弱り切た鎭守使張將軍は、一再ならず熱河の米副都統や、北京の王都統に、軍費供給方を懇請したが、捗々しく埒の明かう譯がない。斯うなると張將軍も最後の本音を吹かざるを得ない。『何故に軍費を供給して吳れぬのか、判然した返辭を承りたい。若し此上に、不拂給料の幾分でもやらぬと、兵士等は反亂を企てる恐れがある。それでも拂はないか』と眞向から脅し付けた。出身が出身丈に此の脅し文句は相當に睨みが利いた。王都統も散々考へた末であらう。民國十二年の末、大晦日に押詰つてから、漸と返事をした『窮狀は御察しするが、何分錢が無いから送る譯に行かぬ、何とか其地で調達の方法を考へてくれ』こう云ふ文句である。請求の脅し文句も素晴しいものだが、此の返辭が又た頗る振つたものぢやないか、張將軍も斯うなると默つては居られない。夫れならばと云ふので、赤峰の商務總會に對して、いきなり高飛車に大洋二萬元の調達方を命令した。商民に對しては、立派な脅迫だが、背に腹は換へられぬと云ふ寸法だ。摺つた揉んだの揚句の果に、將軍府の名で一萬五千元と、別に商人の連名で一萬五千元を、熱河興業銀行から借り入れて、辛くも年の瀨を渡つたと云ふ實話がある。將軍府の太鼓判など、假令幾枚捺してあつたつて、未來永劫返濟の恐れは絕對に無いと定つてゐるのだから、宜い氣なものぢや無いか』

（A）『毅軍と云ふのは其んな連中かい、所謂直隸派だね』

（B）『さうだ、先年の奉直戰で、奉軍が退却したので、新たに熱河特別區域の守備に任じて居る連中さ、例の日淸戰爭時代の錦繪にあつた、赤いチャン〳〵の樣なのを着て、背中に毅軍と書いた奴だ。まさかに靑龍刀は擔ぎ出さないが、紅黃樣々の大旗は今でも擔ぎ兼ねない。銃と云つても大抵千八百年代のが多いのだから、靑龍刀と大差はない譯だね、それで現在內蒙古では、赤峰、熱河、烏丹、林西、經棚、綏東、開魯、朝陽などに駐屯して居るのだが、各駐屯地間に、電信電話などの設備のあ

る筈がない。一回は傳令だ。何か用事があると、書面を傳令使に持たせてやる、一本の手紙を送るのでも、必と四五人の兵卒が押出すのだし、交通は不便で、汽車も汽船もない田舎道の上に、少くも十五里位の距離があるのだから、幾ら馬を飛しても其日歸りは一寸困難だ、況んや書入れの傳令とあつて、極めて悠々と進行する、日が暮れれば何所でも構はぬ、宜さそうな民家に押込んで宿泊する。威張つたもので、家主に對して有ゆる贅澤な注文を強要する上に、中には豚とか鷄とか、布團でも毛布でも、鍋でも食器でも、眼に付いた欲しいと思ふものは、遠慮なく掠掠つて行く、宿錢の一文も置く樣な、不心得な者は、萬人に一人も有りツこなしだ。だから三日に一度位必と村落を通過する數軍兵の姿を見ると、村落は大騷ぎだ。戶を閉める、家畜を遠く野外へ走らせる、食物を隱して小さくなつて慄へてゐる。一方數軍兵だつてさる者で、大村落や宿舍などには決して宿らない。常得意とするのは三戶か五戶位の小部落で、その内の宜さそうなのを撰んで、否應なしにお御輿を据えて、思ひ存分の猛威を揮ふのだ。つまり相手に寸毫の抵抗力の無いのを知り拔いてゐるからだ。所んな有樣だから、一般民家に取つては、數軍兵と云へば、八郎爲朝や疫病神より未だ〳〵恐ろしいのだ。況んや年々多くて三四回しか來ぬ馬賊をやだ。奉天の張作霖なんかの威張り方を見給へ。外國の元首だつてあんなに大袈裟な威張りは方しないぜ。あの男のお氣に入りの師長だつた人の住家が、一種の質屋をやつてゐるが、門口にはちやんと兵士が二人銃劍を持つて立つてゐるさ、誰れやらが、其家から少しばかり借金して、少しく返濟期間が後れたと思ひ給へ、有無を云はさず引捕へて、獄舍へ放り込んで了つたんだ。さあ大變だと云ふので、百方金策して、元利金耳を揃へて差出したが、横着な奴だと斗り、なか〳〵出獄させて呉れない。致方なく莫大な袖の下を使つて、漸と出して貰つたが、何でも借金よりは、その方が金高だつたと云ふ話だ。怎んな話は珍しくも何ともないよ。赤峰の張將軍だつて、現在住んでゐる家は、ある商人の住家だつたのだが、夫を造作萬端手入れさせて、僅に移轉すると一文だつて拂はない、入つてから最う何年になるかね、幾ら請求したつて、馬の耳に念佛だ。將軍今年七十五歲だが、元氣旺盛たるもので、坐右に七人の妻妾を侍らせ、贅の限りを盡してゐる。副官二人は何れも妾の兄弟だ。この邊は何所までも支那式だね。

（A）「ロシヤで云ふと、所謂パルチザンと云ふ奴だね。」

（B）「賊匪ぢやない。パルチザンなんてものは、怎んな無茶苦茶な連中ぢやないよ。いつか折があつたら、詳しい話を仕たいが、全體日本人は、パルチザンとか、勞農赤軍とか云ふ

と、直ぐ支那の馬賊と同じものゝ様に考へるから、何の交渉をしたつて、談判をしたつて立遅れになるんだ。つまり國民性を能く理解して掛らないからだね、話が少々傍道に外れたが、次には巡警と云ふ、やはり支那人に取つて馬賊以上の厄介な代物が居る。巡警と馬賊の間に、ちやんと連絡がある事は、前にも一寸お話したが、僕の旅行中に恁んな事があつたよ、その時は護衛巡警七名を引連れて居たが、何でも有名な馬賊の巣窟近く進んだ時だ。護衛長がやつて來て『一寸待つて下さい、今通過した村で聞くと、六七十名の馬賊團が、此の先の村に居ると云ふ事だから、自分が出掛けて實否を確めて來ます』こう云つて馬を飛して出掛けて往つた。三四十分もすると奴さん歸つて來たが、曰く『大丈夫です、もう通過して了つた後でした』と、そこで僕等の一行も行進を起して、其村の入口邊に行くと、成る程無數の馬蹄の跡が判然と殘つて、村では各戸盡く戸を閉ぢ、人ッ子一人見えない。すると金持らしい大きな家の高い土塀の内から、數十人の男が首丈け出して、僕等の一行を見物してゐる。夫れが又大變な人相の奴ばかりでね、獰惡一目で馬賊と判る連中だ。のみならず塀の内からは頻りに馬の嘶きが聞える。一目ではゝア連中だなと氣が付いた。一時は隨分氣味が惡かつたが、別に追掛けても來なかつたので、ホッとした事があつた。察するに、前に出掛けた僕の方の巡警が馬賊の視方に談判したものだね『駄目だぞ、今度來た旅鳥は、文無しだから、あんな者に手を出して、後で祟りを喰ふと莫迦らしいから、サア〳〵引込め、引込め』位な言草で、塀の内へ押込んで了つたものらしい。此程度の危險には、僕も三四遍出逢つた事があつた。元々内輪同志だし、お互に何時巡警になるか、又た一方は何時馬賊になるか、一筋道の連中だから、話の判りは手取り早いさ、だから馬賊連の方で、素敵もない上鴨を締めると、其都度多少のおこぼれは巡警や兵隊の方に行くのだと思ふ。いづれにしても、恁ういふ手合の間の義理は却て堅いもんだ、どんな事があつたつて、苟も馬賊道徳に違反する様な行爲は、斷じて仕ないからね、又た面白い所があるよ。僕が出喰した事を今話したが、その晩の事だ、例の護衛長尤もらしい顏付をして、『どうも此邊は少し物騷だから、人數を增して貰ひたい』と來た。僕の間に充分嚇かされて居るのだから、一も二もなく宜しいと承諾する。今度は『困つた事になつた、村の巡警が出掛けて居るので、一兩日は歸らぬさうだ』それまで乞食宿で便々と待つ事の出來ないのは、先刻御承知で、恁んな事を云ふ。致方がないから、幾分の酒手を奥れて『勉強して行け』と云ふと、奴さん二ッ返事で飛んで行く。勿論途中は至極安全、何も居ない。つま

り馬賊の鼻藥要求なのだ』

(A)『幾ら支那だつて、それぢや全で馬賊ばかりぢやないか、支那商人なんか、隨分やられるんだらうね、可哀さうなもんだな、相當に金持も居るんだらうから、耐らんね』

(B)『全くだよ、元々夫れが書入れの鴨なのだからね、翼ばたきして飛んで來る奴を、グイと締めれば占たものさ、夫れに前にも云つた樣に、阿片の出盛る季になると、素敵なものだからね、買出しの商人や、輸送の商人を、片端から締め上げるんだ、何の事はない昔の東海道の雲助のやうなものだね。

(A)『だつて、阿片は國禁物ぢやないか』

(B)『勿論さ、そこが又支那式の面白い所なんだ。元來內蒙古に居る毅軍の兵數なるものは、步騎砲巡防隊を合せて、約壹萬二千內外(步兵十五營、砲兵一營、騎兵十營、直隷巡防隊四營)ある。所で支那中央政府は、お定りの財政難で、即々田舍の毅軍までには、お手が廻りかる狀態、つもりにつもつて俸給の不渡八ケ月、軍餉も甚だ覺束ないと云ふ有樣だ。政府も流石に困り切つた所から、支那一流の辨法で、永年禁止中だつた(其實ちつとも禁止を勵行して居なかつた)罌粟の栽培を、內蒙古に限つて、內密に免許を與へ、地方官と所在軍隊の長官をして、罰金を取立てさせる事にした。政府免許の內密なのだから、公然の事は云ふ迄もなく、罰金と云ふのも、實は稅金なのだ。其の證據には、見渡す限り罌粟畑だが、唯の一軒だつて、內密になんぞ仕て居る者はないのでも解る。此の罰金否な稅金が、即ち軍費になつた譯だ。民國十二年度に於ける稅金總額一百九十餘萬元と云ふのだから鷲くぢや無いか、(內蒙古に於ける十二年度の阿片總收穫量は約二千二百萬兩(テール)だから、一兩(テール)の出產地方相場を、大洋(ダイヤン)一元五角(ケンモー)として、此の總額實に大洋銀三千三百萬元、邦價四千萬圓だ)だから、阿片の收穫期になると、軍隊の首腦部は、軍務などは一切そつち除けで、隊長自ら采配を振つて、部下の兵卒を指揮し、罌粟栽培の畝數調査やら、稅金徵收やら、向ふ鉢卷で奮闘努力大したものだ。中には血眼になつて、賣買のブローカーまで遣る律義者がある位だ。

(A)『あの邊は、罌粟の栽培地として、餘程地味が適して居るのかね』

(B)『隨分莫大に出來る所を見ると、どうも左うらしい。收穫期になつて見給へ、夫りやエライものだぜ、何しろ官吏も軍人も、商人も苦力も、官民一律に阿片賣買で沸返る樣な騷ぎだ。從て色々の悲喜劇があるさ、昨年だつたか、例の鎭守使の○將軍の家族の一婦人と云ふのだから、何れ何か妾でもあらう。所用あつて、北京への御旅立とあつて、馬車五台に積んだ荷

物は、全部阿片だつた。所が之が熱河と直隷の境界たる古北口で、駐屯して居た馮玉祥の兵に發見せられた。何と云つても表面禁制品なのだから、阿片は沒收、荷物のお妾さんは、密輸入者として捕縛すると云ふ騷ぎだ。當方も相當の護衛兵を引連れて居たのだから、オイ夫れと渡す譯がない。喧しい押問答の結果が、遂には武力衝突となつて、パチ〳〵初めて了つた。〇將軍も流石に驚いたと見えて、副官を現場に急派するやら、馮將軍に打電するやら、大騷ぎをやつた結果、幾何かの鼻藥を馮の膝下に獻上して鳧が付いた。こうして五臺の阿片は無事北京に入る事となつたが、夫れから後に何う化けたか、そこまでは聞き洩した。何うせ要路の鼻藥位になつたのだらうよ。

(A)『その邊は飽く迄支那式だね』

(B)『一寸他國では見られない場合だよ、こんな例は幾らもあるさ、これも昨年だか、一昨年だつたかの話だ、この時は十四臺の馬車に滿載した阿片が、矢張り古北口の駐兵の爲めに押へられた。今度の送り主は、實は〇〇の副都統〇將軍だつたのだが、例に依つて、駐兵と護衛兵の大衝突で、十數人の死傷者さへ出した騷ぎだ。結局都統〇將軍の仲裁で、兎も角も沒收だけは免れたが、其の先は何うなつた事やら、我案の限りでないとして、爾來兩將軍の間が、一層親密の度を加へたのは事實だ。馬鹿を見たのは、死傷した兵隊で、これらを眞實の犬死と云ふのだらう、馮の部下も度々うまい味を占めて居るので、古北口の要路丈は嚴重にやつてゐる譯さ、北京の財政が行詰らない事は絕對にないのだから、今年もどうせ旺んな事だらうよ。

(A)『それで禁制品も糞もないもんぢやないか』

(B)『全くだよ、先達で北京に禁煙會議が開かれて、お歷々が絕對禁止と云ふ事に決議した相だが、扨て一萬餘の毅軍の軍費は何うするつもりかね、官吏も巡警も差向き干乾しになること受合ひなんだから、此の遣り繰りが餘程見物だらうと思ふよ、絕對に禁止す、但し內蒙古に限る、てな事で又た稅金だか、罰金だか譯のわからぬ金を取り立てるんぢやないかな、まあその邊が落ちだらう、人道上から云へば、無論禁止すべきが當然だが、今日の支那に、人道を顧る暇があるか何うか頗る疑問だ、毅軍に叛亂でもされたら、夫れこそ人道違反なんかよりも餘程恐いからね、綠林子の話が飛んだ餘興の話になつて了つた。一先づ此邊で切り上げやうか。

(大正十三年四月廿三日內蒙古赤峰の客棧に於て認む)

わが交友録（三）

友五人

山本鼎

世間では、僕を多方面な活動家となし社交家となすも僕は美術以外の事には一指をも染めし事なく、交際は至つて狭き方なり。二十七八歳から三十五六歳に及べるボヘミヤン時代には人懐つこくて、いろ〳〵な知己を有し、猿股を洗濯してあづかりくれる家、山本専用の箸や枕を備へて待つてくれる家庭の三四軒もある――といつた風なりしが、外國から歸りし頃から自然に人際合がおツくうになり、漸次どうも愛嬌のなき人間となり行くやうにてちと心細し。

しかし僕の兩親は「お前は兄弟がなくて寂しいけれどその代り友達運のいゝ人だよ」と申されしが、まことにさようなり。此處にその親友のうちの最も古き處より五人ばかりを紹介する事とせん。

森田恒友――體重十四貫弱、痩軀にして非力なるも、骨太く、腕相撲に於ては木醋と雖勝つ能はず。容貌風采は横山大觀、仁木彈正などに類似し色淺黒くにが味を含み、老ひて禿頭とならずに白頭となる質。健康は、學生時代長生しさうもなく思はれしが、案外ねばり强く、年古し胃病を伴ひ既に總入れ齒なるにも拘らずなか〳〵の健啖にて、友人中第一の食通なり。昔は菓子のみ愛せしが、近年は酒をも愛し吾等と對酌しても決してまゐらず。性質は英邁なるに氣象は弱氣の方にて戰線に出動する事を好まず、背後より僕を激勵するを好む。思想は、左傾でも右傾でもなく、まづ老子の自然主義といつた處、趣味

は、多方面ならず、昔は娘や看護婦の油繪を描きたれど、段々寂を愛すふやうになりて、近來は平野水郷の平凡靜寂の情景を水繪にするを樂み、蓴菜、川魚、高野豆腐などいふあまり役に立たぬ食物がお氣に入り、旅は一人旅、宿へ着いてあんまとビール一本、これが無上の娯なりと聞く。

小杉未醒――體量十七貫、身の丈六尺に近い偉丈夫、美術家中屈指のスポーツマン、容貌は禪僧と俠客の同居、風采は武者修業、森川と反對に壯年にして既に準禿頭なれども。才智ある故、年中一分刈にして印象をごまかしおれり、健康は少しく良きに過ぎ、子寶多く遠からず孫の顔をも見られやうといふ倖せ者なり。酒は晩酌に二合或は三合、友を引ひて快飲せば今なほ一升二升を飲下す。而して大醉すれば、蛇味線を掻き鳴らし、或は木魚を叩きて、家庭教育の常盤津其他を發揮す。蓋し彼れの藝たる、すべて順序だちし修業を經ざるも、氣象の煥發に伴つて平氏生動し傍人をして破顔哄笑せしむるを常とす。性質は英邁、氣象も強氣なれど、行爲は決して鋭からず、多分青年期數多き女友によつて薫錬されし果なるべし。思想の傾向は國家社會主義と云つた處、趣味はかなり多方面にて文武併存、酒色併用、もし天命じて畫家たらしめずば、探偵家か大藏大臣になつて見度しと云ひし事あり。されど此人、畢竟僧性にして、葛藤を忌み、苛辣を忌み、森川と同じく閑寂を求め欣光して大往生を遂ぐるあらん。

倉田白羊――體量十六貫強風采壯重面貌圓くして明るく狩野派の猿に似ると云はれる。健康は數年前腎臟を犯されて以來振はざりしが觀音に歸依して絶對に酒を謹みし甲斐あつて最近稍以前の元氣に恢復し友人等をしてやうやく愁眉を開かしむ。性は重厚氣象は未醒よりは弱氣、森川よりは強氣行爲は直情、思想は孔孟、蓋し、氣節と禮讓を重んず。習慣は儒者たりし尊父の遺風ならんか。趣味は、廣からず、やはり未醒と同樣文武を好み、禪を慕ふ。畫生活は僕と同じく油繪一點張にして、わき眼もふらぬリアリスト。好物は入浴と、音曲と、遠眼鏡。

長谷川昇――體量十五貫強、風采は白羊と同型なるも少しく輕快、顔は稍方形で白皙、遊び上手の武士と云つた感じあり、本年不惑の年齡に達し、近く二兒の親とならんとす。健康は歸朝以來頗る順潮にして、晩酌二合、東京市の東西南北の料理屋及カフェになじみがありて、夜は概ね家に在らずと聞く。但し女性にはわりに淡泊で思ひの外弱氣なりと噂さる。性質は剛毅なれども氣象は未醒程强氣ならず、併し行爲のむしろ强氣なるは面白し、想ふにこは會津産の郷土色ならんか。思想は未醒、白羊等の東洋的なるに對して、昇さんは何？、――コスモポリタ

ンか？趣味は硬派の白羊に對せば軟派と申すべく、人前の武骨らしきに似合ず武に冷淡にて、優美華明の雰圍氣を愛し、好むで描く處も、則ち怡々蕩々たる美觀を映發する若き「裸婦」なるを見よ。彼れの好きなは葡萄酒に、將棊に、競馬。

桑重儀一――體重十六貫、風采は釘拔の如く、面貌は軍人、健康は、一枚肋と綽名される程の丈夫さ、酒は晩酌勿論二三合、時には朝酌、午酌もやり、更に描きながらウイスキイをちびり〳〵やつても一日醉せぬ不死身漢。性質は淡泊剛毅膽力あるも氣象は鋭からず、行爲も武骨ながら柔かなり、これ思の外に女に持てる所以とす。思想は未醒等と同じく東洋的、趣味は武に傾きて文事閑却、銃獵釣魚、旅行は彼の最も好む處。

（三月一五日夜）

二三の友

谷崎精二

私は生來狭量で氣難かしやである爲め、親しい友人と云ふ者が甚だ寡い。此の『狭量で、氣難かしや』である事を私は決して得意にして居るのではない。處世上不利益な缺點だから出來るなら直したいと思つて居るが、容易に直りさうもない。強ひて改める爲めには他の生活上の重要な主義信條を捨てなければならないらしいので、得る處に比べて失ふ處が多い。それで止むを得ない缺點として自分でも諦らめ、人からも許容して貰はうと思つて居る。

私の事をひどく饒舌だと云ふ人と、まるで寡言沈默の男だと云ふ人とがある。どつちも一面の觀察である。私は本當に心を許した親友の前だと、いくらでもしやべり續ける。だが氣心の知れない人たちの中に立ち交ると、碌に返事もしない程言葉寡なになる。そして談話の面白さと云ふ物をちつとも感じない。さうした譯だから十年の文壇生活をして居る間に私は通り一遍の交際を結び得た人は多いが、すつかり本心を打開けて語り合ふ友人と云ふ者が一人も出來ないで居る。機會さへ惠まれたならもつと親しくなつたであらうと思はれる人々が二三無いでもないが、強ひて此方から近づかうとする氣も起らない。私が

今親密に交つて居る友達と云ふのは、皆十數年前文壇に出ない頃から知つてゐた人々で、其の後共に文壇に出たと云ふだけのことである。

今から十三四年前、私が早稻田の文科の學生だつた頃、『奇蹟』と云ふ同人雜誌が發行される事になつて、私も其の同人の中に加はつた。廣津和郎、葛西善藏 舟木重雄、光川穆、相馬泰三、峰岸幸作などと云ふ人が最初の同人だつた。此の中廣津、葛西の兩君とは今でも親交を續けて居るが、他の人々とは此の數年來次第に疎遠になつてしまつた。と云ふのは此の兩君だけはずつと文壇生活を營んで居るのでいろ／＼仕事の用談もあり、話も一番合ふ爲めで、決して他の諸君と不和になつた爲めではなく、そして又文壇生活を營まない者を輕蔑するのでも決して無いのだが、やつぱり多年同じ目的を持ち、一緒の仕事を續けて居る人たちが、私としては最も懷かしい氣がするのである。

廣津和郎

は文壇の友人としてのみならず、此の人生で私に與へられた最も舊く、且つ親しい知己である。若し最初の戀人との交渉が我等の戀愛觀の動かし難い基礎となるとすれば、廣津との多年の交際が私の友人觀、乃至友情論の根柢になるだらう。私と彼とは性格も、趣味も、生活信條も、決して同一ではない。從つて互に其の缺點や、飽き足らない所を十分に知り拔いて居る。若し昨日や今日知合になつたのなら私は彼と親しくなれなかつたか知れない。だが十幾年の歲月が私を完全に彼に親しませた私は彼の兩親や兄弟を知つて居るし、彼も私の、今はもう世に亡き兩親を知つて居る。（何でもない樣だが友の兩親や、兄弟を知つてゐると云ふ事は、青年時代の生活に記憶の繫がりを持つて居ると云ふ事は、ひどく懷しさを增させる物である。）『死んだ親父がね。』と云ふ樣に話しかけた時、相手が其の死んだ親父の顏を見知つて居る場合だと、此方の話に身が入つてしんみりして來る。これは餘事だが、私の亡父は新內語りの加賀太夫に顏がそつくり似て居る。亡父の死後間も無く、或る時私は省線電車で神田驛から有樂町迄加賀太夫と乘合つた事があつた。丁度向ひ合つて腰を下して、じつと加賀太夫の顏を見つめて居る中に熱い淚がぼろ／＼私の頰を傳つて落ちて來た。此の話を後で廣津にすると、『さうさう、似て居るね。』と彼は云つてくれた。

氣難かしやである私は他人のちよいとした失策がかなり眼に着いて、ともすれば『Fault Finding』な態度を執りたがる。だが廣津にだけはどんな不快な事をされても怒る氣になれない。（無論故意に惡意を示された場合は別だが、そんな事はあり得

ない。）私はずぼらな事が大嫌ひだが、廣津にはどんなずぼらをされても『廣津なら仕方が無い。』と思つてしまふ。私にだつて人並の競爭意識や、嫉妬心はあるのだが、そして學生時代の友人で、略同時に文壇に出たゞけ、彼が一番私の競爭意識の對照となり得る筈だが、廣津の作品がひどく月評で罵倒されたりすると、自分の事の樣に癪にさはつて來る。（但し廣津の出來損ひの作品が其れ相等の評價を受ける場合は此の限りでない。）

廣津は十年前に、比べるとずつと人間が圓熟して來た。（此の點は私や葛西などゝ違ふ。私や葛西はおそらく誰が見ても十年前と同じだらう。善い惡いは別として。）ヒステリイと云ふ諢名をつけられた程、昔の彼は神經質で、よく不平ばかり云つてゐた。曾て相馬泰三が廣津の事をいつも荷車を引つ張つて步いて居る男だと評した。彼は其の荷車を友人の書齋へ無遠慮に引込んで梶棒を下すと、額の汗を拭きながら、『あゝ重い、重い。重くつてやりきれないよ。まあ、此の車の荷を見てくれ。おまけに道は惡いし、肩は張つて來るし。』と云つた樣に愚痴を云ひ續けるのである。（無論これは比喩だ。）

だが彼は此の頃すつかり腹が出來て、どんな人生の重荷でも易々と擔つて行ける樣な立派な男になつた。そして反對に私の方がひどく愚痴つぽくなつた。

『こんなに愚痴ばかり云つて居る人間も無いものだ。』

昔は廣津に會ふ度に私はさう思つたが、今では多分私の方が彼にさう思はれて居るだらう。其の私が十年前は『谷崎は豪い。どんな辛い事があつても他人に不平を云つた事が無い。』と廣津に云はれて居るものだ。

二三個月前、私は夜更の神樂坂で廣津に行き會ひ、ぶら〳〵一緒に步きながら話し合つた。一身上の問題で私はひどく煩悶して居たので、其れを彼に打明けて愚痴を云つた。

『君は氣が小さいからな。僕ならそんな問題が七つ位一度に起つたつて平氣だぜ。』

彼は私を勵ましてくれた後でかう云ひながら快活に笑ひ出した。他の男だつたら『こん畜生、大きな事を云ふ。』と私は思つたかも知れないが、今日の廣津は實際どんな人生の難關にぶつかつても、易々と切拔けられさうな度胸と落着きを持つて居るに違ひなく思はれた。係累は多いし、藝術社の仕事は順調でないし、彼としては隨分氣苦勞が多い筈だが、それでも彼は平然、泰然、悠然として、毎晩遲く迄愉快さうにカフエーを步き廻つたり、マーヂヤンをして遊んだりして居るのである。

小心な私には全くあの太つ腹だけは羨ましく思はれる。

葛西善藏

は廣津より少し後で知つた。初めて會つたのは多分學生時代だと思ふが、いつ、何處で、誰に紹介されたか、はつきり覺えて居ない。互に家を訪問し合ふ様になつたのは私が學校を出てから後の事である。

彼は酒に醉ふとよく其の頃の私の印象を語り出す。何でも彼は私を小生意氣な青二歳だと思つて居たのださうである。ところが或る時彼と、相馬泰三と、私と三人で、澁谷の小料理屋で酒を飲んだ。私が醉つて其の席上で何か唄をうたひ出した時の感じが非常に面白かつたので、其れから次第に私が好きになつたのださうである。實際其の頃の私はほんの青二歳で、早くから一家を構へていろ〳〵實生活の苦勞を積んで來た彼の複雜な氣持などはわからなかつた様に思ふ。今日葛西の作品に殆ど無條件で敬服して居る私も、其の頃はやはり彼の作品を正當に評價する事が出來なかつた。早稻田文學へ送られた彼の出世作『子を連れて』の原稿が掲載が遲れたので、私は中村星湖氏の許へ催促に行つた事を覺えて居るが、原稿を私は讀んで居なかつたし、さう優れた作品だとは豫期して居なかつた。

廣津は十年の間に人生觀、處世觀が次第に變つて來た樣に思はれるが、葛西の作品乃至生活氣分は十年前とちつとも變つて居ない，其れだけに彼とは何年音信不通の後で會つても昔のまゝの氣持で話合ふ事が出來る氣がする，彼が嘗て好きだつた事は今でも好きである，嫌ひだつた事は今でも嫌ひであるに違ひない。だからいつ會つても彼の氣持に此方の氣持を合せる爲めの何の準備をする必要も無い。『生活は苦痛だ。』と十年前に彼が云つたとすれば、現在もやはり彼がさう感じて居ると思つて話をして間違ひは無い。

酒を飲むと思ひきつて毒舌を弄したりするが、醉はない葛西は私の友人の中で最も善良なる紳士であり、最も信愛すべき男である，だが彼は案外氣が小さくつて、月評などで惡口を云はれると何年後になつてもちやんと覺えて居る。實作家であるだけに彼の生活は今後ともおそらく物質的に餘り惠まれる時期は無いかも知れない。だが彼の作品は今迄書いた物だけでも永く後世に殘さるべき價値がある事を私は信ずる。

宇野浩二

は早稻田で私の一級下だつたが、途中で退學してしまつたので、學生時代には會ふ機會が無かつた。私が學校を卒業して或る新聞社へ勤めて居た頃、彼と廣津と二人で逗子に間借りをし

て飜譯などをして居たので、私が其の家へ遊びに行つて、始めて廣津によつて紹介されたのである。

廣津は其の頃『宇野さん、宇野さん。』とやさしくさんづけにして彼れを呼んで居たが、實際さうしてやさしく庇つてやらなければならなかつた程、當時の彼は弱々しかつた。其の頃廿五六歳だつたから、身體の發達はもう停つて居た筈だが、胴や首筋は今よりずつと細くつて、とても十年後、今日の樣な快活な、元氣旺盛な禿頭紳士にならうとは思はれなかつた。

其の後二三年たち、私が牛込で一家を構へると、彼も神樂坂の下宿へ來たので、其の頃から彼と私との交際が始まつた。(尤も其の前彼が西片町に廣津と同居して居た時分もよく私は訪ねて行つたが、其れは大概廣津に會ひに行つたので、彼と二人で遊び歩いたりする事は殆ど無かつた。)

利口で、氣がきいて、交際上手で——宇野浩二の文壇の定評は其の邊の處へ落着くらしい。實際彼は溫順な、あたりの好い男である。馬鹿や無神經なら溫順な人もあるが、さうでなくつてあの位あたりの柔かな人は珍らしいかも知れない。多年の友達になると大抵二度や三度喧嘩の味を知らない事は無いが、氣難かしやの私が曾て彼と喧嘩らしい喧嘩をした事が無い。(葛西とは一度格鬪を演じたし、廣津とは腕力沙汰に及んだ事は無いが、激論を鬪はした事位はある。)さう云ふ點でどう見ても彼は感情の成熟した大人である。

此の五六年私は夏になると屹度彼と一緒に旅行に出る癖がついた。氣が向いたら盛に喋るし、疲れたら默つて居てもいゝし、何日顏を合せて居ても、彼なら私の我が儘を大概見逃してくれさうなので、一緒に旅をしても安心なのである。諏訪、別所、赤倉、秋田、松島、銚子、と私は毎年の樣に彼と相携へて旅に出た。たゞ去年の夏だけは私は彼と一緒に旅行しなかつた。

『今年は何處へお出かけです？』

去年の夏、或る雜誌社の人が彼を訪れてさう聞くと、『さあ、毎年谷崎が誘に來るので、もうそろ／＼相談がありさうなものだと待つて居るのですよ。』と彼が答へたと云ふ話を聞いて、私は彼に濟まない氣がした。一人で旅立つのも億劫だと見えて、彼はたしか去年は何處へも避暑に出かけなかつた樣に思ふ。

此の外に學生時代からの親友に詩人今井白楊、傳奇蹟同人峰岸幸作の兩君があつたが、數年前今井は銚子で溺死し、峰岸は郷里上州一ノ宮で病氣してしまつた。二人の手紙が二三本保存してあるので、時々雨の降る晩など私は其れを支那鞄の中から

取出して讀んでみる事がある。すると何とも云へず悲しくなつて、私はいつもぼろぼろ淚こをぼす。（人よ、若くして死せる友の手紙を保存するなかれ。）

それから加能作次郎、細田源吉などの諸君とも同じ學校の出身で、住居が近い關係からかなり打融けて話が出來る程に交際して居る。（細田君は狹窪の方へ越してしまつたので、其の後疎遠になつたが。）もつと機會が幸ひしたら、此の兩名とも今迄以上親密になれたらうと思はれる。

三上於菟吉も舊い友人である。三上は早稻田で宇野浩二と同級で、やはり中途で退學した。學生時代に故今井白楊に連れられて一度彼の下宿を訪れた事があつたが、親しく語り合ふ様になつたのは彼が矢來に居を構へる様になつてからである。

三上は物もわかるし、精力家で、かなり東西古今の書籍に限を通して居る。（例へば十八世紀の英文壇に現れた最初のドメスティック、ノヴエルである Richardson の pamera などは、早稻田や帝大の英文科に籍を置いた文壇の諸氏は、名前だけは無論知つて居るだらうが、讀んだ人は案外少ないに違ひない。だが三上はあの千四百ページからの大冊を夙に讀破して居る。）だが彼は其の旺盛な精力と、多彩な才能とを浪費し過ぎて居る――體が派手な生活が好きな男で、其の爲めに多作の必要があるのだらうが、そして其の事を自分でも最近何かの感想の中に記して居たが、もつと此の祭自重する必要がありはしないか。

亡友錄

放庵・未醒

空岳樓の傳言で交友錄を書かぬかと云ふ、生きて居る友達の事共は、モ少し脂の切れた後、爐邊の閑談に取つて置きたい、今、亡友を想ひ出す、亡友を語つて見よう」

〇

田岡嶺雲が本鄕の下宿に長居して、拂ひが滯まつた、兄は實業家の指折りで從兄弟に陸軍の將官、兄なる人の細君が下宿に來て、內々で拂ひをすます、あとで知つて嶺雲が憤慨して、忽ち

その金を取り戻した、おれの借金はおれが拂ふ、さう云つて拂つたには拂つたがそれは程經ての話、拂ふ程なら、そのまゝでよかさうにも思ふ。このまゝで置けぬのが嶺雲先生のかんしやく。

○

嶺雲は上に強く下に弱く、善くかんしやくを起すが起したあとに何も殘さぬ、かんしやくも上に向つて多く、下に向つて少く、私共のやうな年少には、つひぞ荒い言葉をかけたとも覺えぬ、肺を病んで日光で死んだ、死ぬ少し前に、何となくカフスボタンを吳れた、今以て大事にして居る。

○

日光で死んだ時に、始末をしたのは白河鯉洋、墓を日光の寺に建てゝ、嶺雲處士と刻した、處士らしい處士、支那の昔にもあんな處士は多くあるまい、蘇州學堂で教師をして居た事もあつた、漢文和譯は彼れが先鞭の如くに覺えて居る、東洋的、日本的な人であつたが、社會人間の問題で、今から見れば達見と思ふものを持つて居た、墓を建てた白河鯉洋は、此の嶺雲の何年忌の會をしやうと云ふ、下相談をした翌日死んだ

○

河豚は果して人を殺すか、嶺雲の何回忌かの相談會に河豚鍋が出た、桂月老が居たが、彼の老賢にして河豚を喰はず、私は始めて此の冒險をなす、鯉洋と今一人とは、臟物を燒いて喰つた、會散じて翌日の新聞に、國民黨代議士白河氏の訃が載せてあつて膽を潰した、彼れの死は、別れて二時間ほどの後と思ふ、膽を潰す、近年此位膽を潰したことはない。

○

「カリカチユールと云ふのは、人の容子の特長を誇張すればいゝのだな、僕だつて出來るよ、たとへば君の顏を、かうぢつと見て居る」

茅ケ崎の南湖院の病床で、獨步がさう云ひかけて、私の顏を見る、彼れの巧妙な座談は、病勢の進むと共に、時々諷を含んで來た、それを感じて、これに觸れることを迷惑に思つて、私は彼れの眼を睨む、彼れも言葉を切つて私を見つめる、すこしの間、その間に空氣が妙になり、互に好感を離れた、あとで思へば、これは死んで行く、年長者と、達者で殘る年長者との、つめたい眺望になつたのではなかつたか。

○

九州の私塾で、若い獨步先生はカーライルの英雄崇拜論を講じた、嶺雲の東洋的英雄色に比べて、獨步は西洋的英雄色を持つて居た、嶺雲に會つて水滸傳の話をした、讀んだとはないよと輕く云つた、彼れの常に讀んで居たのは橫文字の本である、」

獨歩は割に横文字は讀めず、風を引いて熱が出ると、彼れの手には水滸傳、しかしながら要するに獨歩は讀書家ではなかつた、そこが私から見て感心する處、彼れの歿年三十八、かたみにカフスボタンを貰つた。

○

一昨年水戸の友人が、私に金のカフスボタンを呉れると云ふ、近い内に死ぬつもりなら呉れてもいゝ、と云ふと驚く、嶺雲のかたみがカフスボタン、獨歩のかたみがカフスボタン、亡師五百城文哉のかたみがカフスボタン、かうなるとチト氣味よからず、生きて居るものからは貰はれぬ。

○

押川春浪酒を被つて汽車に乘る、車中に陸軍の士官が二人居て、女話の興に入る、胸には金鵄勳章從軍徽章其外いろいろ、彼等も亦酒の上で、女話は次第に惡化し行く、春浪が立つて行つて金鵄勳章を引張り、是は何で貰つたもんだ、女買ひの目印しかと云ふ、そこで士官が腹を立てゝ腰の刀に手がかゝる、いや僕には武器がない、此の左の手を切つてくれ、それを握つて戰はう、さあ拔けと云ふ、とゞ士官が折れて、おしまひは握手をして名刺を交換する、春浪武勇傳中の大出來、あまり春浪小說以上に春浪小說的ではあるが、あつた話で、此の時に傍に居て吹き出す人があれば、一場の醉つぱらひの芝居ともなるであらう、醉中の春浪は、竹馬に乘つて濠を飛び超すやうな離れ業を行ふ、稚氣あれども衒氣なく、覇氣あれども俗氣はなかつた、歿する年三十八。

○

獨歩三十八、春浪が三十八、今村紫紅が三十八、三十八は俊秀の人に要愼すべき年廻りでもあるか、それとも四十二と云ふ厄年は、近年人が性急になり、チとくり上げたのか、ともあれ若死は誰にも惜まれる、まだ殘された仕事があつたらうと思はれる、獨歩春浪は、あれで各々生得の荷を卸したやうにも又思はれる、もつと續くれば、一轉化を要したか、一轉化すれば更に妙であつたか、よくは分らぬ、紫紅の仕事は、私と同業故かも知れぬ、延びんとした時、一飛躍せんとした時に、忽然として消えたやうに惜まれてならぬ。

○

或繪師か親分紫紅の家を訪れて文展出品の繪の腹稿を話す、「此頃流行の磯節から感興を得た、岩をかき潮水之をめぐり、椿と躑躅を咲かせ、藤の花を垂らさうと思ふ」、「なるほど、咲いてからまる藤の花と、まだ足らないぜ、テヤテヤテヤはどうする」。

○詩歌文章は、若くして才氣喚發をなす、造形美術は、工人的手技を要するが故に、同じ處を何千度でも撫でゝ居る根氣を以て千を百にし、百を十にし、十を一にする底の、直ちに中心に術き入る天分を磨かねばならぬから、比べて見て若いうちでは完成せぬと思ふ、むしろ中年から繪事に入つてよろしく、中年で世を去つてはかなはぬ、紫紅の藝も、四十を越して大いに造詣する處あつたらうと思はれる。

○若い畫家の中に、一歩先へ出て、其上に或るチヤームあり、或る統率力あるもの、周邊に其の崇拜者を若干めぐらして居る、私が覺えても、かゝる例は二三にして足らぬ、他の方面にもさだめしある事と思ふ、今村紫紅も其一人、目黑黨(めぐろとう)と稱せらる五七人を常に衛星として居た、私共は、あだ名して目黑の貸元と云ふ、氣の利いた請負師の如き風骨にも見えた、同じく日本美術院の再興をなしたが、下村觀山老とは始終うまが合はなかつた、彼も亦上に強く下に弱き漢子である、さる家の賀宴に招かれて、金屛風に席畫を乞はれて、兩手兩足に墨を塗つて、屛風の上を這つて歩いたと云ふ話がある。

○年長の者の逝くは、靜かにその不歸の門出を見送る心がある、同年の者の忽然として世を去るは、目の前に大穴のあいたやうに驚かれる、いにしへの佛の發心などには、その邊の刺戟がかなり多かつたかと思はれる、紫紅は私に一歲の兄、琉球に旅して歸り路、下の關の夕方の新聞で彼れの死を知つて、まことに心を擊たれた、汽車ではよく眠られる私も、つひに一夜眠らで明かした。

○知人ではないけれども、菱田春草は腎臟病の爲めに眼を害して、たとへば竪長(たてなが)の絹地に向つて、筆を下さんとすれば、下さんとする所に一條幅三寸ほどの白線が橫はつて、仕事が出來ずなつたと云ふ、泣いても怒つても遣り切れぬ身のふしあはせであらう、紫紅は終りに近くなつて、狷熱腸を冒し、赤の色が見えなかつたと云ふ、入る日、出る月の双幅は、其の熾烈な赤の色調を以て、或る向きの批評家を喜ばした、實は赤色調を意識して染めたではなく、赤色が足らぬ足らぬと思つて、自然に出來た赤色調、自身にはまだまだ寒い色合ひと不足にも思つたであらう。

○靑木繁とは、彼れ十八、こちら十九の時、初めて不同舍で出

合つて、ひどく相許した。誇大妄想の兩少年、互に語る事を、そのまゝにしては惜しいから、兩方で記錄して置かうではないかなど、年上の者が聞いたら、可愛想な子供氣ちがひと思つた事であらう、かくて二三年、私は行儀の惡い遊びを覺え、彼れは頑固な童貞、私の藝は延びが惡く、彼れの進みは早く、その内かげて云つた事、兩方の耳にも入り、次第に遠くなり、次第に不愉快になる。

○

美術學校に通ひ、圖書館に通ひ、古事記に新らしい味をつけ、ウヴニシヤドを捻ねくり、蒲原岩野の象徵詩に共鳴する青木と、女義太夫を喜び、酒を飲んで角力をとり、勘當された請負師の倅と同居して居る私とは、まことに反りの合はぬものとなり果てた、私から見れば、いつまでもほぐれぬ天狗さまと思はれ、彼れから見れば　墮落書學生救ふに足らずであつたらう、其頃から彼も亦周圍に七八人の使徒を率ゐて居た、此の内に今に到つて大家となつた人もあるから彼れの力も人並では無かつたと思はれる、白馬會に出品して、新制定の白馬賞を第一に獲得し、博覽會に「わだつみのいろこのみや」を出品したのが、彼れの絶頂點必す美術の古今に亙つてナポレオンとなるのは吾輩だと眞面目に云つて居た男も、はかなく短かい命で、肺病の爲めに客死した。

○

體力の氣力に伴はぬは、むかしから見る俊才の不幸、青木とまだ親しかつた頃、或る日不同舍の書室で冗談に角力を取つた、いつのまにか負けたくなくなり、喧嘩のやうな、いや喧嘩よりはモツと變な氣持ちになり合つて、押し伏せては撥ね返され、絞められては振り解き、結句息の續く私に、一時間ほどの後に勝ちを取られた、嘔氣を催して青くなつて寢た青木を、今更のやうに驚いて介抱した、遂には不愉快な感情のくひちがひから、互に憎惡の心を抱くまでになつた際の、二人の終りを、此時に暗示したやうにもあり又、息の續かぬばかりに、世間にも勝ち續け得なかつた、彼れの末路が思ひ合はされるやうにもある、傲然として九州遊歷をなしつゝ、忍んで東京に出て來て、文展を見て行つたと云ふ話を、今でも寂びしく回想する。

○

長安の酒徒でもあり、氣の通つた親方でもあり、人の善い學者でもあり、とんだ新らしい人でもあり、又古臭い匂ひもあり、中澤臨川はカナリ複雜な性格を持つて居た、獨歩を見送り、春浪を見送り、三番目に見送られた、三人共通の點あり、各々仲がよくて、各々酒飲み、若し酒の病がなからうなら、三人共モ少し壽命が延びたであらう、醫者が留め、自身もよか

らずと思ひ思ひ、つひ盃を放ち得ぬ、酒のまぬ人から見れば、氣の長い自殺のやうにも思ふか知れぬ、紫紅もそれらに勝るとも劣るまじき酒徒であつた、或は彼等は、氣力を賴み、魂の生活力の强きまゝに、胃も腸もそのやうに强く、此位では何ともあるまい、此位はまだよからう、とひそかに賴みとしたかも知れぬ、獨步は醉ふてますます冴え、春浪は醉ふてますます子供の如くになり、臨川は好々爺となる、好々爺時々都々逸を謠ふ、馬鹿野郎と人を一喝する、それを友達が臨川の都々逸と稱へて、あまり氣にせぬ。

○

馬鹿野郎はしかしながら餘り善良な辭でもあるまい、此の都々逸は人に依つて通ぜぬであらうから、臨川居士と雖も、對手を見て謠つたかも知れぬ、初めて獨步の家で落合つた時、折ふし野口米次郎詩人が、日本に歸つたばかり、大さう評判が高かつたので遂ひ話題に上つた、えらい男だ、いやそのやうにえらくはあるまい、と云ふ程の事から、此の馬鹿野郎を喰つて、若くはあり、大きに腹を立てゝ、日比谷公園に連れ出して、決鬪を申込むと云ふ靑筋を立てた話もあつた。

○

デツドマスク、と云ふものを取る、あれは西洋人のやうな彫刻的な顏面でも、死相そのまゝでは、少しも其人を現はさず、却つて死相の醜を殘す、日本人の扁平な顏、低い鼻梁に於ては尙更の事、なるべくは取らぬが好いかと思ふ、臨川が死んだ翌日、賴まれてその顏を寫生した、始めは先輩の容貌を、少しでも似せて留めて見やうと思つた、やゝ久らして、其の顏が少しも平常の臨川を意味せぬとに氣付き、何か別の物體、しかも恐ろしい他界の姿、生物の我々と交涉なく、いや却つて生物の我々を脅威する物の姿のやうに見えて來る、醒めて賢く、醉ふてほしいまゝであつた、彼の臨川居士と、此の一塊の屍肉とは、まことにかけ離れた、異なつた物に見なされる、或は若しありし世のおもかげが何處かに見出されるとすればそれは亡き人の多くの方面の內、殊にこちらと合はなかつた方面、たとへば第三者ある時會話面白く、二人さしむかひとなつて、物言はぬ時間、氣まづき時間が多かつた、その時の心持ちなどこそ、おまへは他人だと云ふ如くに、聲なき屍の聲となつて、鉛筆持てる私を衝きやつたであらう。

○

伯林のカフエーで、郡虎彥とめぐり合ふ、郡が曰く、

「此間巴里のカフエーズヴニールで、山本が僕のカリカチユールをかいて、そつと君に見せたね」

「ウン」

「その時僕は滿谷など丶隣りのテーブルで、トランプをやつて居た」

「ウン」

「山本が、此男はどうだと小聲で君に云ふ、君は小鼻が少し張つて居るのが欠點だ、と云ふ意味のことを云つたね」

「ウン」

「僕の耳は並の人とはチト違はふのだ、あの時僕は、すぐ云つてやりたかつた、僕の棚卸しをやるなら、五キロばかり離れた處でやつて呉れ、とね」

○

昔話にある、義經さま見たやうに、鋭い男だと、私は一も二もなく降參した、とゞ彼れの頼み通りに、ヲヴレターと覺ぼしき一封を、シベリヤ道中のポケットに大事に預かり、云ひ付け通りに下の國のポストに入れた、其後手紙でも、會つても、彼れはそれについて、挨拶一つせず、無論それについてのロマンスの一端をも窺ひ知らしめず、さて久しうして彼れの訃を聞いた、小さな男、青白い緊まつた童顏、いつもポケットに仰山なわが樂の數々を入れ置き、いつも色々な小道具を遺して歩く、まゝな貴公子の俊才、瑞西で客死したと云ふ、さぞ寂びしかつたであらう。

○

此邊で筆を止める、皆天下知名の者ばかり、知名の者ばかりを友としたではないが、不知名のものは、モット細かく記さねば分らず、細かく記すにはそれだけの時と力とを要する、案ずるに、敢て文學藝術に限らず、何業にもせよ、其人に創造力なきは、單に其人品人格のよろしかつただけでは、傳はりかぬるか、傳はりかねても傳はり易くても、死んだ身に用なしともする、殘つたものから見れば、傳はりかぬる人に、實はなかなかいとしい人がある。

交友斷片

豊島與志雄

親疎さまざまの程度の友人達のことをぼんやり考へてみて、そのうちから、思ひ出すまゝの斷片的印象を書き綴つて見ることにする。隨つて、ごく親しい友人を書き落すこともあらうし、讀者には譯の分らない事柄もあらうが、或る時誰彼とどういふことがあつたといふくらいの程度の追想の一部で、勿論交友錄などといふまとまつたものではない。そしてこの追想は、十年ばかり以前のことから初める。

○

十年ばかり以前には、新關良三君と林原耕三君と私と三人で、よく牛肉を食ひながら藝術を談じた。三人落ち合つて、何處かに出かけてゆくのが面倒な時には、その下宿で牛肉を食つた。牛肉と葱と豆腐と酒。新關と私とは酒好きで、林原は餘り飲まない。林原がいつも女房役になつて、加減よく牛肉を煮てくれる。それを新關と私とは横目で見ながら、酒を飲み初めて、生豆腐をやつこにして食べる。鍋の肉が煮えかける頃には、私達はもう少しづゝ醉ひかけて、豆腐はなくなつてしまふのである。

「よせよ。豆腐ばかり食つて。」

「なに、肉も食ふよ。」

そこで私達は生煮の肉の方へ突進してゆく。

所が、林原は非常な養生家だ。生豆腐や生煮の肉なんかとても食へない。彼が肉の煮えるのを待つてゐるうちに、その肉は牛煮のまゝ私達の口の中に消えてしまう。豆腐はもう疾くになくなつてゐる。忙しげに醬油や砂糖や炭火の方へ氣を配つてる彼のためには、葱のむくろだけしか永遠に殘らない。しまひに彼は箸を放り出して歎息する。

「君等のやうな意地汚い奴とは、もう決して肉を食はない。」

それが私達にはまた面白いのである。

「さう怒るなよ。君はどうせ酒を飲まないから隙なんだらう。まあも少し面倒をみてくれたつていゝさ。」

そこで林原は益々憤慨して、飲めもしない白聚酒をやり出す。そして三人共醉つ拂ふことになる。

さて醉つ拂つてしまふと、新關はいきなり懷の金入を私の前に投出して云ふ。

「君のと一緒にして、いゝやうにしてくれ。どこか暖い氣持のいゝところへ行くんだ。」

林原までがそれに贊成する。

そこで私は、いくら飲んでも心底から醉つ拂ひはしないといふかどで、女房役の方へ廻されて、乏しい三人の財布を手に握つて、どの方面へ出かけたものかと、寒い冬の街路を頭の中に

描き出すのだつた。

○

六七年前までは、私は高瀬俊郎君と屢々酒を飲み歩いたものである。彼は有名な梯子酒で、夜の二時までも三時までも、凡そ酒を飲ませる家が起きてる限りは、私をつかまへて放さなかつた。

或る晩、やはりさうした彷徨の後、私達はすつかり醉つ拂つて、夜遅く街路を辿つてゐた。すると彼はふいにその電車通りから、薄暗い横丁へ切れこんでいつた。暫く行くと、とある家の前に立止つて、その表戸をどんどん叩き初める。

「僕の友人がゐるから一寸寄るんだ。」

然しいくら叩いても、家の人は起きてこない。

「馬鹿によく眠つてやがる。」

彼はあきらめて歩き出す。そして四五軒先に行くと、また立止つてそこの家の戸を叩き初める。やはり友人がゐるのださうである。

さういふ風にして、彼は四五軒おきによその家の表戸を叩いてゆく。もう二時頃で、町中はしいんと寢靜まつてゐる。どこも起きてくる家はない。とやがて、或る板塀の中に明々と光の見えてる家に出逢ふ。

「一寸待つてゝくれ。」

私にさう云ひすてゝ、彼は板塀を易々と乘り越してはいつてゆく。五分……十分……ふいに彼は私の前に、板塀の上から飛び出して來る。

「うまいお茶を飲んできたよ。……だが、あいつ、變な顏をしてぢろぢろ見るから、飛び出してきてやつた。」

はゝんと私は思ふのである。そして二人でからからと笑ひ出したのであつた。

○

或る時、新城和一君が風のやうに飛びこんで來て、下手な將棊を五六番やつて、また風のやうに飛び出していつた。

飛び出してゆく時、梯子段をとんとんと子供のやうに駈け下りて、そのはづみに玄關の障子につき當つて、立ち直りさま、ひよいと沓脫石の上の下駄をつゝかけ「さよなら、」といふ聲と共に、玄關に揃へてあつた他の二三足の下駄を蹴散らし、格子戸にごとりとつき當り、格子戸の敷居に躓き、そのよろけたはづみで、表の戸をがらりと引開け、戸と柱と敷居とに身體中でぶつかつて、あつと思ふまにもう戸を閉めて、ぷいと消え失せてしまつた。

「まあ―」といふ氣持で見上げる妻の眼付に、私はくゝつと忍

び笑ひで答へたが、心は嵐の吹き過ぎた後のやうに悄然としてゐた。

○

五六年前のことだが、芥川龍之介君と私とは共に、横須賀の海軍機關學校に教師をしてゐた。學校の運動場がすぐ海に續いてゐたので、隙な時間にはよくその海岸を散步した。

或るうち晴れた日の午後、私は芥川と一緒に海岸を步いてゐた。よく凪いだ海が干潮になつて、岩の片面に牡蠣みたいな貝類が曝し出されてゐる。

「君、」と彼は突然私の方を見返つた、「牡蠣が澤山あるよ。この牡蠣といふ奴は、取立てのを海水で洗つて食べるのが一番うまいんだ。食つてみようぢやないか。」

そこで私達は、手頃な石を拾つて、岩に密着してる貝殼を叩き破つて、中のぶよぶよした肉を取出し初めた。所が、色といひ格好といひ、どうも本當の牡蠣であるかどうか疑はしい。それでも彼は二つ三つ海水で洗つてすゝり込んだ。私はうまくとれなかつたので、一つ二つ口に含んだがすぐに吐き出してしまつた。

それから暫くして、教官室の方に歸つてゆく途中、彼はふいに潮を溜めて唾をぺつぺつと吐き出した。

「どうもさつきのは、牡蠣ではなかつたかも知れないよ。胸が悪くなつてきた。」

私は默つて彼のひよろ長い姿を眺めた。そして彼が食つたのが果して本當の牡蠣だつたかどうか、いくら考へても分らなかつた。

○

或る日私が用先から家に歸つて來ると、百閒こと內田榮造君が先程訪ねてきて、二十分ばかりしたら歸る筈だと云つたら、ぢやあまたその頃來ると云ひおいていつたとの、家人の話だつた。そして私が洋服を着物に着換へてしまつてる頃、のつそりといふ氣配で彼がやつて來た。

書齋に通ると彼はこんなことを話し出した。

「君が歸るのを二十分の隙つぶしに、自動電話に飛び込んでさんざん交換手と喧嘩して來た。五錢銀貨一つで、あとは何度も何度も番號がちがつてると云つて、でたらめのことを云つてゐたら、しまひに交換手の方で怒りだして、少し口爭ひをした後に、もういくら呼んでも出て來ない。面白い二十分を過したよ。」

それから彼は二十分ばかり雜談をして、またのつそりと歸つていつてしまつた。用なんか何もなかつたのらしい。

○

或る晩十時半頃、明るい街路を散歩してると、伊福部隆輝君にひよつこり出逢つた。彼とそつくりの顔付をした、まるまる肥つてる重い子供を、辛うじて兩腕に抱きかゝへてゐる。「やあ」と出逢頭の挨拶を交はしてると、後から彼の細君がつゝましく丁寧に頭を下げてるのが、初めて私の眼についた。

「どうしたんだ、今頃……」

「いや……そこの寄席に小勝が出てるもんだから、一寸聞きにいつたんです。」

「ふーむ、」と云つたきり私は彼等三人の姿を眺めた。そして、そこらでお茶でも飲まうかといふことさへ忘れて、そのまゝ別れてしまつた。

如何にも月の美しい晩だつた。

○

或る時或る所で、岸田國士君と落合つた。大勢の中だつたが、彼はつかつかと私の前にやつて來て、こんなことを云つた。

「弱つた、明後日までに脚本を一つ書かなくちやならなくなつて……。こんなのどうでせう。晩春……咽せ返るやうな晩春の庭、そして手入れも何もしてない曉闇といふ感じ……曉闇の晩春といふのが必要なんだ。その眞中に古い深い池がある。その池の中に……」

彼はその戲曲の筋を簡單に話しだしたが、その筋なんかよりも、彼の眼の方が强く私の胸に迫つてくる。近眼鏡の下から、大きな眼玉が飛び出して、ぎらぎら光つてゐる。晩春の庭の中の古池の主と云へる蛙の眼玉、それよりももつと力强く神秘的にぎらぎら光つてゐる。

戲曲の筋を話し終つて、「どうだらう」と彼は尋ねかけてきた。が、素人の私に意見のありやうはない。否何一つよくは分らなかつた。たゞ彼の眼玉を茫然と見つめたまゝ、自分のうちにも或る力强い創作慾が動いてくるのを感じた。そして口を噤んだまゝ、心の中で呟いた。

「どうだつていゝさ。君の眼玉がぎらぎら光つてる以上は……。」

○

或る晩、十一谷義三郎君と碁を打ち初めた。三番といふ約束だつたが、三番とも私が負けた。そんな筈はないので、も一番やらうと私は挑んだ。

「いや、もう止した。變に疲れちやつて……。」

彼は顏の筋肉一つ動かさないで、彫像のやうになつて、煙草を吹かしてゐる。

「も一番やらう。勝ち逃げは卑怯だ。」
「いやもう止した。」
少し猫背加減に坐つたまゝ、びくともしない。
「も一番やらうよ、さあ。」
「いやもう止した。」
私は彼に挑んでゆくのが面白くなつて、何度も勸めてみた。然し彼は「いやもう止した」を永遠に繰り返すつもりらしく、愉快不愉快を超越した沒表情な顏付で、猫背加減に火鉢へ屈み込んでゐる。しまひには私の方で精根がつきて、笑ひ出してしまつた。

○

或る日の夕方、山本有三君が威勢よくやつて來た。何處かで飯でも食はうといふのだ。所が私は、もう飯を半ば食ひかけてゐたし、〆切間際の原稿に追はれてゐたし、出かけるのが臆劫だつたので、とうとう私の家に坐り込むことになつた。そして、この美食家にたまにはまづい物を食はしてやれといふ氣になつて、夕食代りの註文をきくと、釜揚饂飩ならといふ返事だ。

その釜揚饂飩が來る間に、話のついでから、私は彼に書きかけの原稿を見せた。生れて第二作目の戲曲を三分の一ほど書いてるのだつたが、どうも思ふやうに書けないで氣持が焦燥だつたので、その方の專門家たる彼に見て貰つたのである。

彼は私の原稿を一通り見終つて、少しづつ欠點を指摘し出したが、しまひには全部いけないといふことになつてしまつた。
「どうも何だね、君の小說と戲曲とは、大學生と中學生との差があるね。」
私は苦笑した。そこへ、註文の食物が來た。そして彼は、釜揚饂飩と茶碗蒸と鯛の刺身と、妻の手料理の小鯛の鹽蒸とを、みんなうまいと云つてくれたし、酒まで大變いゝとほめてくれた。私は心外だつた。美食家の彼にそんなものがうまからう筈はない。然し彼はそれをみなうまいうまいとほめ立てゝ、一切殘らず平らげてしまひ、私の戲曲の方は、感服出來ないから書き直せといふのだ。私は不平の餘り、彼の審美眼と彼の味覺とに疑問を懷かうかとさへ思つた……が止した。實は得る所が多かつたので。

○

或るレストーランの二階、辰野隆君と山田珠樹君と鈴木信太郎君と私と、四人で晝食をしてゐた。この三人は立派なプロフェッサーで、私はその中に交ると、一寸變な氣がするのである。

「僕は教師が片手間なんだから、一寸うしろめたい氣がするね。」と私は、教師といふもの丶本質論が出た時に云つた。

「なに片手間だつて君は立派すぎるくらゐだよ。」と辰野が、吃りを超越した早口で云つてくれた。

「誰だつて教師は片手間さ、教室は書齋の延長の一端なんだからね。」と鈴木が、下唇の下の可愛い丶髯をぴんとさして云つてくれた。

「片手間で丁度い丶、それ以上になつたら大變だ。」と山田が、立派な髯をひねりながら——といふのは比喩で實際にひねりはしないが——云つてくれた。

そこで、教師の本質論は片がついてしまつたのである。

○

まだいくらもあるが餘り長くなるから止す。

友を想ふことは樂しいことだ。文字に書き現はすよりは、一人で想つてる方が更に樂しい。こんな雜文を長々と書き續けるのは面白くない氣がしだしてきたから、ペンをおいて煙草でも吹かさう。

交友五六人

平福百穗

僕が明治廿七年に東京へ來て、書生生活をした頃から既に三十餘年になる。考へて見ると自分の年を取つたのに驚かざるを得ない。幾多の故人となつた人、或は遠く離れて音信不通になつた人も有るけれど、今なほ交りを續けてゐる人に、先づ結城素明氏がある。

素明氏は江ッ子で本所に古くから代々酒屋をしてゐた家の長男で、年配も二つ上で、僕が田舍から出て川端玉章先生の畫塾に學んでゐる頃は、美術學校の豫科に入つてゐた。君も川端先生の門人である關係上いつしか親しくなつた。其頃の美術學校の制服は法官の被るやうな帽子や服裝をして、今から考へると頗る異樣であつたが、それでもあの服裝で市中を濶歩してる姿を見ると、僕には何がなし羨しかつた。それから三四年

たつて、美術學校で選科生を募集した。僕もこんな機會には入りたいと思つて、學資をくれる人の諒解を得て、こわごわ試驗を受けて見たらどうかこうか及第した。そこで早速あの變てこな制服を作つた。あながちあの服を着たいばかしで入つたのではなかつたが――さていよ／＼外出するとなるとさすがどうも躊躇される。よほど勇氣を出さなければ歩かれなかつた。先づ記念と云ふつもりで寫眞屋には入つて寫眞をとつた。今でもどうかすると其の寫眞が篋の底から出てくることがある。

素明氏はもう其頃既に他人の追蹤を許さない新しい傾向の繪を書いてゐた。其の交友も廣い方面に亘つてゐた。自然僕は君に兄事してゐた。よく本所の宅へ行つては夜更けてから下谷の寓居へ歸つた。色々自分の小さな不幸やら煩悶なんかもただ君にあつたばかしで忘れることが出來た。僕が學校を卒業してから一年餘郷里へ歸つて、再び東京へ出て來て自活の道を講ずる迄には、兎も角君の所に二年餘も食客としてころがり込んだ。

亡友平子尚氏（鐸嶺）などはこの結城君と殆んど兄弟の交りをしてゐた。平子氏は美術史家として他日名を成す前までは隨分君の世話になつた。蓬頭亂髮五尺九寸の平子氏と、それに五尺七寸餘の君と二人が連れ立つて歩くと、街を行く人がよく振り返つて見たものだ。

平子氏は僕と同庚で、伊勢の人で最初美術學校に日本畫を學んでゐたが、その中に洋畫が新設されると、こんどは洋畫に轉科した。隨分懶けながらそれでも何年か掛つて學校を出たが、後によくこれでも洋畫の免状を持つてゐると云つて笑つてゐた。奇行も多かつたが、其頃から考古學や史學などの考證に沒頭して、その方面に於ては稀なる天分を發揮して學界に嶄然と頭角を現した。法隆寺論など特に權威ある所説であらう。遺著佛教藝術の研究其他弘法大師不書不彫論等がある。談論風發當るべからざる概があつたが、友人間ではなほそれよりも遠慮なく唾を吹き掛けるのに恐れをなしてゐた。平子氏が三河島の藁屋の間借りをしてゐた頃、よく訪ねて行つた。云ふ迄もなく今とは違つてあの邊一帶に田圃の廣々とした中に、榛の木で圍まれた百姓家が散在してゐた。秋籟畫房なんかと名づけて相變らず吹きまくつてゐた。平子氏の身邊に始終離るべからざる重寶なものがあつた。白毛布一枚がそれで然も鼠色に汚れてゐた。客が行くと座布團がはりに自分の敷てるのを敷き延べる。一寸客が多いと一枚に擴げるから、よく悪口に狸の睾丸だと云つた。また其の毛布は寢る時は布團にもなるし、外出する時は頭からすぽりと被つて提布袋のやうな形になつて歩いてゐた。友達の家へ蟲を落して行つたなぞと云ふのも其頃のことであつた。然し

肺を病んでから非常に其の道に深くなつて、病牀で死ぬ迄は堆書裡に研究を續けることが出來た。

平子氏は又一面に評論の筆をとつた。明治三十三四年の頃岡倉覺三氏が、采配を振るつて前期の美術院が勃興した頃に美術界に壓倒的の革新の聲をあげた。その美術院の作風を朦朧派とか鵺的とか批評したのも君であつたと記憶してゐる。云ふ迄もなく素明氏などがその反對に主唱した自然主義の、無聲會の準同人であつた。無聲會には此他に川端門下の先進で、福井江亭や島崎柳塢や、故人になつた大森敬堂なども居た。後に石井柏亭も加はつた。僕は川端先生で習ひこんだ古い衣を捨てて、專ら新らしい道に付からうとしたのは、矢張り素明氏の跡を追うたやうなものである。

幾年も經つて行くべき道を各異にしてゐて、縱令陰では惡口を云ふことがあつても、會へば矢張り手をとつて喜び悲しみを分つ一人である。

僕は繪の外に唯一の樂しみとして、歌を作ることを覺えた。故伊藤左千夫翁が手ほどきをしてくれたのであつた。翁に近づくやうになつたのは、僕が再び上京して向島の結城氏の家に厄介になつてゐた頃、氏が紹介してくれたのであつた。その頃僕は歌を作らうと思はなかつたが、翁の晩年迄で足繁く、本所茅場町の無一塵庵まで通つた。翁は牛飼ひで、強い近眼の肥大漢であつた。「馬醉木（アシビ）」といふ歌を中心とした小さな文藝雜誌を發行してゐた。これは雜誌「アララギ」の前身である。平子氏や結城氏もその同人であつた。或る時翁を訪ねると薄暗いランプのもとでしきりに畫帖を出して繪を書いてゐた。僕を見るなり「僕も近頃繪を書くぜ」と云つて、いかにも得意さうであつた。床の間には又翁が書かれた歌一首が表裝されて掛けてあつた。僕がしきりに感心すると、「近頃なかなか書かされるよ」と、僕にも一枚やらうと云はむばかりであつたが、僕がねだらなかつたのが、如何にも物足らなかつたやうだつた。

それ以來翁の門人、齋藤茂吉、島木赤彥、中村憲吉、古泉千樫、石原純の諸君と相識るに到つた。土屋文明君は一高時代に翁の許で牛飼ひの手傳ひをしてゐた。茂吉君は近頃洋行歸りで堂々としてゐるが、左千夫翁の處で會つた頃は、久留米絣の書生風で、羽織の紐はいつも、紙撚であつた。時折り鹽煎餅の袋を抱へて、僕の下宿に繪を見に來たものである。無言のまま いつまでも繪を凝視してゐたりした。其後長崎醫專教授になつてから、大分ハイカラになつたけれど、依然としてネクタイを結ぶことも覺束なかつた。

赤彦君は大正三年頃諏訪から東京へ來て、アララギの汚ない編輯所に陣取り、極上の苦茗を啜つて幾日も徹宵苦吟してゐたことが思ひ出される。僕が大正八年に盲腸を病んで入院してゐた頃、一番心配さうな顔をして、話しもしかけずに默つて付いてゐてくれた。君が居る時は何だか安心したやうな氣がしてよく眠られた。僕に一つの年長者である。

憲吉君は僕よりも一まはり年が若い。先年京都へ遊んだ時、君と落ち合つて白河口から比叡山へ登つた。山麓の掛茶屋で、憲吉君には無くてならない飲料を求めた。荷厄介になるから一合瓶を二つ手拭に包んだ。一つは途中で仕末した。宿院に着くと接待の僧が一人ばかり、寝るまで付ききりに付いてゐる。膝をくづさずに窮屈な夕食をすまして、好物に親しむことを得なかつた君は、床の中にもぐり込んでから、ポケットへ忍ばしておいた物を取り出してグット傾けて息をついた。寺僧に酒好きでないことにされた報いで、その殘骸の捨て場に困つて隱し持つたまま下山してしまつた。とうとう琵琶湖の汽船の上までそれを持つて來て、初めて安心して、その一合瓶を湖中にほうり投げた。

鬪鐵氏などと同じく、正岡子規の門下で、伊藤翁の友であつた故長塚節氏とも、僕は親しく交はつた。自他に對して極めて嚴格で、僕が歌を初めた頃、左千夫翁には大に油をかけられたが、氏にはよく叱られた。或る時數十首を試みて、氏の批評を乞うたら、約一間ほどの長い手紙をくれて、「君の歌は一首も取れない。報告歌雜報歌に過ぎない。これは君の歌ばかりでなく、今の世間の歌が皆さうだ」と云はれた。それから暫くの間歌が出來なくなつたことがある。僕に二つの年下で、三十七歳で亡くなつたが、始めて會つたのは明治三十三年僕が結城君の厄介になつてゐる頃であつた。身體が弱いのを氣にして郷里の茨城にゐた頃から始終鐵亞鈴を握つてゐたさうで僕の會つた頃もやはり鐵亞鈴を離さずにゐた。斷食が身體を強健にすると聞いては進んでそんな事もやつたりした。學生帽をかぶつてゐたのも一つの思出の種だ。四十四年不治の病を得て、醫者は一年も六づかしいやうに言つたが、大正四年までそれから兎も角も五年間、其生を保ち得たのは、全く鍛錬された意志の力一つに依るものだつたらうと思はれる。

わが師友録

村松梢風

窪田空穂

窪田空穂氏は私を文筆生活に導いて呉れた恩人である。空穂氏と知り合ひになつたのは十二三年前で、其の人の甥窪田節三君は書を學んで私とは下宿屋友達だつたところから、私も空穂氏の許へ出入りをするやうになつたのだ。大正三年歐洲戰爭の勃發した年私は廿六歳の青年だつたが、一攫千金を夢みて百圓の旅費を工面し新占領地の青島へ押し渡つて一旗擧げる考へ、事成らずんば異國の果に放浪して數奇傳中の人とならん覺悟、悲壯？な決心をして空穂さんを訪問し暇乞に及ぶと、空穂さんは以ての外の不贊成で諄々として私の無謀を戒めた上「君は矢張り文章を書くのが一番物になりさうだ、一つ俺に騙される氣で委まる二年勉強して見ないか」と云はれたので私も又其の氣になり百圓の金を籠城費に充てゝ東京に踏み留まつた。すると不思議にも滿二年後に私の書いた物が初めて金に替つて中央公論へ載せられた。爾來星霜十年。何商賣でも十年やつたら先づ一人前と云へるさうだ。して見ると私の文筆生活も今年あたりでどうやら年期が明けるといふものだ。そこで近々空穂さんの處へ手土産でも持つて御禮に行かうと思つてゐる。がまた見樣次第では、あの時空穂さんが留めなかつたら私は支那へ渡つて大飛躍をなし戰時成金として今頃は鑛山に汽船會社の十位は持つてゐるかも知れないと考へると、うくわつに禮は申されぬやうな氣持もする。餘事は偖置き窪田空穂氏が國文學の組者と作歌の優秀とに於ては當代の巨匠として自他ともに許す處だが、私は此の人に和歌を教はらない。私は文章を見て貰つた。賣れもしない小説を書いては空穂さんの處へ持つて行つて其の場で讀んで貰つた。中央公論へ書くやうになつてからも一年ばかりは毎稿草稿の時一讀を乞ひ批評を聽いた上大概一二度づつ書き直して發表した。空穂さんの私に對して懇切なりしことは尋常師弟の比ではなかつた。それにも係はらず私は歌を作らさるが

故に、私を以て窪田空穗の門人たりと云ふ人は無い。空穗氏も亦私を門人として待遇はしなかつた。私の疎懶反つてそれを辱き事として嘗て一度も氏に對して「先生」なる敬語を用ゐたこともなく、近年は用がなければ年始の顏出しすら怠つてゐる始末だが、逢へば誰よりも親しく、心から慕はしく思ふ人は此の人を措いて他には無い。

國民文學同人

空穗さんの關係から當時の國民文學同人の人々とは皆懇意になつた。前田晁、松村英一、半田良平、尾山篤二郎、三津木貞子、白石實三、中村白葉諸家の如きは多少の濃淡こそあれ皆其の頃からの友達だ。松村と尾山は僕と同年の今年卅七だ。其の頃の若い者同士で殊に親しく交はつた。松村は空穗門下の高足として着實老成の歌風を以て一家をなし今では歌壇一方の雄となつた。彼は性來考古趣味を有し專門以外の雜書を多く讀んで寄席活動寫眞見世物等から祭禮黄色巾着切の類に至る迄市井の雜事を餘す所なく研究し博大の智識を以て我れ〳〵を驚かせたものだ。尾山篤二郎は金澤の産で夙くから名聲があつた。彼こそ現歌壇隨一の鬼才であろとは多くの人の許す處だが、才餘つて些か放縱に失するのが身に累をなし弱冠にして才名を謳はれた割合に近來不遇に落ちてゐる。矢張り同年の竹馬の友室生犀生の爲めに一籌を輸せられたかの觀があるのは皆友の我れ〳〵として遺憾に堪へない。前田晁氏は空穗さんの無二の親友である處から、ひいて私達後進は皆此の人の厄介になつた。前田さんの事は田山花袋氏も書かれたが、此の人甲州の生れでお國氣質の義俠心が強く、非常に親切で世話好きだ。空穗さんといふ人は何處迄も貴族的な藝術家肌で師匠としては無類の人だが、其の代り不精でずぼらで身の上相談をしてもまことに頼りがない。そこへいくと前田氏は若い者が困つたと云つて行けば何とか身の振り方を付けて呉れた。そこで空穗さんの門人でもさういふ厄介な問題だと師匠では埒が明かないので、何でも、彼でも前田さんへ持ち込んだ。「前田さんは人の世話をするのが一種の道樂なんだね」なぞと自分も世話になつてゐながらいゝ氣な事を云つたものだが、私も此の人の周旋で電報通信社へ編輯見習で入社して一年ばかり勤めた。其の後私もどうやら文章が賣れるやうになつてから前田さんと二人で箱根芦の湖畔の本陣へ行つて二た月許り滯在して原稿を書いたことがある。前田さんは酒が好きだから毎晩膳さきで一合飲んで食後に一時間程睡眠をとりそれから撤夜して机に向ふ。が凝り性だから反古ばかり出して三枚位しか進行しない。翌日顏を合せると「おい、昨夜

は新婚旅行が來て中てられたよ」なぞと丸々した林檎のやうな顔を睡たさうにして云つたりした。丁度其の時强羅の星の別莊へ來てゐた生方敏郎君を前田さんと私と二人で訪問した。私はそれが生方君に對する初對面だつた。

瀧田樗陰

電報通信社へ勤めて月給廿五圓貰つたが物價下直の其の頃でも廿五圓では妻子は養へない。妻子を國へ歸し本郷追分のボロ下宿へ十圓で止宿してゐたがまことに果敢ない境遇。其の頃田中貢太郎が中央公論や新小說へ物語を書いて獨自の家風を示してゐるのを見て私も一つ其の眞似をして見ようと思ひ立つて、琴姬物語といふ廿枚餘りの短編を二ケ月も掛つて漸う書き上げた。が原稿を賣り込み度いにも手蔓が無い。そこで運定め度胸定めといふ腹で其の原稿を中央公論社へ持つて行つて玄關へ抛り込んで歸つた。四五月經つと瀧田樗陰氏から端書が屆いて至急面會したいと云つて來た。本郷西片町の中央公論社の編輯室で初めて瀧田氏を見た。大正五年の七月初旬のことだ。瀧田氏は琴姬物語を非常に讚めて八月號へ載せると云つて原稿料を渡した上に、九月の特別號には百枚位の物を書くやうにと云つて吳れた。私はまるで熱病患者のやうにフラ／＼し乍ら追分通へ出たが、さて誰れに此の喜びを傳へよう……友達もあるが、先づそれよりも多年私の生活を目撃して痩せる程案じてゐる義兄と實の姉に報らせて喜ばせて遣らうと、つい眼と鼻の駒込林町の其の家迄腕車を驅つて乘り着けたのだつた。瀧田君とはそれ以來の交際で今年で丁度十年目だ。菲才の私が辛うじて世に出ることが出來たのは前に云つた窪田空穗氏の指導と瀧田氏の好意の賜物だ。されば瀧田氏も恩人には相違ないが永の年月ではさう／＼恩に着てばかりも濟せない。近頃では前借申込み以外の場合は滅多に頭を下げたいことに極めてゐる。それに瀧田君は名うての酒家だが私はづぶの下戸を來てゐるので比較的私的交際が親密にならない。顏を合せるが早いか原稿の話だ。原稿拔きで悠々と世間話でも談じる時が來ればなあと思つてゐる。

田中貢太郎

田中貢太郎と初て會つたのは何時何處であつたか記憶が無い。が多分中央公論社だつたやうな氣持がする。其の後私の方から茗荷谷の彼の僑居を度び／＼訪問して仕事の上の意見を交換するやうになつた。私達は直きに非常に親しくなつた。當時讀物作家として優に一家を成してゐたのは田中一人で、私が其の追從者だつた。其の前にも杉村楚人冠・松崎天民等が讀物を

書いて絶大の人氣を沸騰させたことはあるが、併し兩氏とも新聞記者の片手間で書かれる物も未だ雜文の態から脫しなかつた。それが田中貢太郎に至ると最早立派に看板を掛けたる讀物作家で、取材の奇巧と描寫の圓熟と相俟つて渾然たる作品の態を成し一新機軸を編出してゐた。彼の文章は俳句から出たものだと云ふか、落筆老質にして所謂俳臭を脫し更に餘程神經的なものだ。彼は自から酒中の仙を以て任じ土佐人の豪放[illegible]の性を具へてゐるが寧ろそれは外觀的で、實際は非常に神經質な男だ。故に其の文章もネバ〱として薄氣味の惡い程官能的で譬へばナメクジを見るやうな幻怪さがある。彼が怪談作家として成功したのは當然であろ、彼の作品は大正年代の特異の文學として後世の史家が興味を以て看るであらうことを私は確信する。私は多年彼と肩を並べて文を鬻いで來たお蔭で其の聞得る處少くなかつた。圖らずも近年讀物流行の機運到來して洛陽の才子競ふて是れに筆を染めるのは私共永年孤壘を守つて來た身に取つて此の上もない喜びだが、併し見渡す處僅かに一二子の文體[illegible]進を見るのほかは概ね題材描寫の何れも常套を離れず到底婦女子の娛樂物以上に出ずして而も甘んじてゐるかの如き觀があるのは甚だ不滿に考へられる。云ふ迄も無く讀物は先づ取材の奇巧を衒ふ。それは其の時々の思ひ付きではなく常に題材は直ちに作者の思想生活の方向を表示する位の特色を具へて居らなければいけない。署名を抹殺したら誰れが書いた物か判らなくなるやうな個性の乏しい作品では讀物の世界に於て殊に存在を認め難い。

松崎天民

大泉黒石が彗星のやうに現はれて「俺の自叙傳」を發表し洛陽の紙價を一時に高からしめた。彼の爲めに日比谷の松本樓で會を催した。其の時私は瀧田君から主賓の大泉を松崎天民君と同時に紹介された。爾來兩君とは多年親密な交際を續けて來た。大泉とは近年いはれもなく疎遠になつてゐるが、私は彼の有つてゐる不思議なる藝術的氣質と豐富なる想像力と縱横無礙なる文章とに對して常に驚嘆の眼を瞠つてゐる。偖松崎君であるが、彼は非常な善人だ。善人でそして苦勞人だから解つてゐて心が捩れない。私は一緒に旅行もすれば食べ物を食ひ廻つたり泊り込んでお花を引いたりしたものだが、幾日一緒に居つても愉快で暮せる人だ。田中貢太郎が云つたやうに彼は直情徑行の人で少しも虛僞虛飾が無い。極端に露骨な表現をする。此の正直さと熱情とが彼の生活の原動力だ。更に彼の特色を擧げると其の人間的の臭ひが顯著なことだ。どれ程大時の人由でゐる

崎天民が讃つて來ると忽ち周圍の空氣までが其の臭ひを感染して來る。餘り強烈だから好く人と好かない人とある。彼が原稿を書く時はいつでも一氣呵成で五六十枚の長篇も一夜のうちに出來上る。萬年筆の尖端唸りを發して原稿紙の上を亂舞する。考へつゝ書くのではなく歌ひつゝ書くのである。彼はたしかに一個の民衆詩人である。

泊鷗會の人々

泊鷗會といふ會は最初は各自が異聞珍説を持ち合つて來て話しをするのが目的だつたが、會が永く續いて自然話も種切れになつて來た處へ會員同志の親睦の度が加はるので近來は寧ろ座談は附け足りで一個の社交團體的色彩が濃厚になつて來た。會員は廿名餘り、馬場孤蝶氏を隱然たる盟主と仰ぎ、生方、田中、松崎を初め沖野岩三郎、松本泰、水島爾保布、畑耕一、佐々木味津三、松村英一、水木京太、岡野薫、野尻抱影、北野博美、福田辰男の諸君に私も仲間の一人である。ロシアで殺された大庭柯公、去年の夏死んだ安成貞雄、アメリカへ行つた佐々木指月等も會員だつた。此の人々は私が現在最も親しく交際してゐる友人だ。殊に馬場孤蝶氏は私淑してより久しい。が此の人の事は田中貢太郎が詳しく書いた後だから私は省略する。

佐々木指月

初めて佐々木指月に會つた時くらゐ私はびつくりしたことはない。第一に風采で驚いた。ルイ何世時代の放浪詩人が私の前へ飛び出して來たのではないかと怪しんだ。それから話しをして見ると更に驚いた。彼の趣味や人生觀は私などが思ひも寄らぬやうな事を考へてゐる。紐育の世間噺を聞いてゐると、其の不思議な世界の光景が彼の言葉の綾で織り出されて活動寫眞を觀てゐるやうにハツキリと眼の前に現はれてくる。

彼が十五振りで日本へ歸つて來たのは大正九年の夏だつたが、まる二年間滯在した後十一年の初夏の頃再び古巣へ歸る鳥のやうにサツサと紐育へ歸つてしまつた。彼は最早日本の國土では暮せない人間になつてゐる。さうかと云つて紐育の大道で立止つて太陽を拜む程一方では東洋的な心の持主である。何とかストリートの何とかいふ家の五階で金髮の女詩人と同棲してゐる佐々木の生活にはまだ澤山の矛盾や惱みがある筈だ。佐々木と交際した二年間に私は絶えて無い大きな影響を彼から與へられた。日本に於ける彼の眞の友達は——文壇以外の事は知らいが——私と、彼を私に紹介した窪田空穂の外には無いだらう。それ程私は彼と深く交はつたけれども、それでもまだ彼の

氣持は折り〳〵私に取つては不可解な謎だつた。併し、要するに彼は天成の詩人である。彼の人間其の物が最も優れた詩であるから、生活も言ふ事も全部が詩になつてゐる。詩は折り〳〵第三者に取つては不可解である。私は佐々木指月といふものを一個の詩として眺めてゐる。紐育からも年に三度位づつ便りがある。彼の其の私信こそは、彼が公表する文章以上に珍らしいものだ。私はそれを爰に發表する自由を有せぬことを遺憾とする。彼が紐育に居る間に——恐らく死ぬ迄居るだらうが——私は彼を訪ねて行つて其所で彼と一緒に一月でも二月でも暮して來度い。指月も來い〳〵と云つて寄越す。私が出掛けたらシアトル迄迎ひに出て、それから大陸横斷の無錢旅行をやらかさうなぞと云つて私を冷やかしてゐる。早晩彼國で逢ふ時はあるだらうが、また容易に其の時節が來さうもない。

畵友錄

正宗得三郎

僕は生來人懷しい方であつた。少年時代の記憶に村の同窓生達。女娘子と遊んでゐて夕暮になつても別れて歸す事がいやであつた。そして友人は、一心同體でなくつては友人と云ふものでは無いと考へてゐた。君子の交は淡しなどと云ふ事は好まなかつた。然し段ん〳〵人に接するうち、人なぞと云ふものはいゝことの事しか云へないものだと思つて來た。從て少年時代の思想はなくなつた。

友人にもよく逢つてゐても別に友人と思ふ程でなく、又逢はないでも心の輝きを感ずる人もある。

（亡くなられた富岡先生。）

これは畵友でなくつて、畵師錄に屬す可きものである。

翁に會つてゐる時は麻醉劑をかけられた樣だつた。其作品に接する以上に、耳は遠し口は薄し翁の談る言葉は半分位しかきとれない。聽音器でも殆んど後年はよく通じ得ない事が多かつた。それでゐて實際翁に向ふと風貌からして輝く魅力がある。そして面倒になると筆談になるのだが、それが素敵に面白

い。書畫一致で全く畫と書が一つになつて躍動する。墨が一滴紙に落ちると藝術品になるこれは魔術だと思つた。

私が武陵桃源に遊んだり、蓬萊山を看たのはその間である。先生は後年普通平凡の事は面白くなくなつて奇談に這入つた。日は一方が僅か見えてゐられた丈だが胸中の光明は輝いてゐた。そして考究的天性は終生止まなかつた。先生から稀に手紙が來ると、その日は何よりも樂しかつた。封筒の上書きから變つてゐる。先生の文字は愚考するに象形文字から來てゐるので、この文字は圖案とも解し得らるゝ。從て大篆、小篆もこれに連續してゐる。それが骨子となつて先生の字は畫と同じである。封の處などに茶旗など描いて這附けがある。文中文字の中に畫もある。翁は小兵で小指で押しても倒れ相であるが、座つてゐられると大きく室内が光いて見える。私は人間界に又現代によくもこんな人がゐらるゝものだと感心してゐた。先生が亡くなられてがつかりした。現世で生きた國寶が無くなつた。しかしあの風貌は忘れ得ない。私は先生に畫を學んだ事もない。翁は支那趣味で外國趣味は好んでゐられなかつた。先生に向つた時洋畫の事など話した事はない。先生に會つた時維新の文人墨客の事を訊くのも樂しみであつた。兎に角見てゐた丈で畫趣が湧く。先生そのものに魅せられてゐた。その爲め畫友錄の第一に置く由縁である。

○

私は段々出無性になつて旅行以外は大抵畫室にもぐつてゐる、何處に行つても面白くない爲めでもある。畫家として顔を會す人も多く二科會員中の數氏である。風流心のある人か、全く無い人が味がある。二科會知人の中で熊谷守一君は學校時代からの舊友で東洋的アナアキストの奇人だ。畫などどんな作を見ても面白がらないそれがすきだ。自分でも食へさへすれば畫を描かない。第一繪具管から繪具を出すのすら面倒だと云つてゐる。それによらず甚だ器用で時計など直す事は專門家以上だ相だ。これと反對に山下新太郎君は畫もよく描くが、話しもする。風流の話しもあり女の話しも仲々よく知つてゐる。親切で總て相談するのに最もたのみになる。有島生馬君は一寸賴山陽の感じがある。人に嫌はれるか好かれるか、才人で頭が鮮明してゐる。僕の永嘮は山下を訪ふたのと同じく長くなる。先達も病院に見舞に行つて遂ひ半日雜談した。その時又畫論が出たが、僕は何んと說明していゝか分らないのだが、チシアンやベラスケースはまずいとは思はないが、ラハエルの方が表現に思想的魅力がある。見てゐると、空想が湧く、それがたゞ一つの肖像であつても。何と說明していゝのだらふと言ふと、それはラエ

ハルは餘り有名な爲め今日日本では注目しないが、チシアン、ベラスケスより光々しいのだと答へたが、割合うまい言葉だと思ふ。嘗つて文士は勿論今畫家でこの返事を得る事は稀である。彼の畫は二科會中隨一である。彼の病氣を拂つてやり度い。石井柏亭君は僕と趣味を異にする點が愉快だ。藤川勇造君中川紀元君、横井君、僕が若し酒を酌み得る事が出來たら藤川、中川、横井と夜を徹するであらふ。惜い事にはいくら勉强しても下口で上達しない、とんと駄目である。從てこの人達からも見切られてゐる。然し酒席は嫌いではない。藤川は藝術の理解力と名人肌の人である。日本古來から名人肌の人があるが丁度あの名人肌の面影がある。坂本繁次郎君は死んだ青木繁、野口彌吉君又森田恒友君と同宿してゐた關係から知つたので舊友である。坂本は見かけと異つた分子が仲々ある。その點が深い。新藝術に仲々興味をもち、執着力がある、だまつてゐる樣だが僕と對座すると仲々しやべる。一種の表現形式それが珍である。

古い友人の事から連想すると、亡くなつた村上爲俊君を憶ふ。山本鼎君等と同窓で、一寸ひねくれてゐたが僕には記念的の人物だ。僕より一つ二つ歳上でもあり總母だつた爲めか莫迦にふさいでゐる時と又はしやぐ時がある、そのはしやぐ時はつけ元氣で沈鬱性であつた、然しよく往來して泊つたりしてゐた。今まで生きてゐたら、あいつどうしてゐるだろふと想ふ。巴里で偶然村上の中學同窓出の軍人に逢つた。郷里に隱遁して中學の先生をしてゐた相だつた。歸つた後文通もなしいうちに死んだ。安井曾太郎君は賢明で友人となつても間違がない。津田青楓君は京都で盛んに日本畫を描いてゐるらしい。東京より津田に適するだろふ。京都に行くと、富田溪仙君と一二度は往來する。富田君の閑居は下嵯峨の清町で、日あたりがよく、勝景の地を占めてゐる。家の建築は仲々凝つて風雅に出來てゐる。水若の庭から嵐山の裾尾を眺め得る。閑かにして日月の長さを知る樣だ。斯んないゝ處に住んでゐると畫など描かなくつもいゝだろふと云つてやる。禪坊主の樣な風貌の富田は大きな聲で笑ふが、日は何時もちかく、働いてゐる。小作によく佛作の軸が掛つてゐる。畫などまずくつてもいゝのだ、好い畫を描き度いのは慾心が多いので何んだつてかまはないではないかと云ふと、富田は自分もさうは思ふが描くとまずいのより佳い方がよいと云ふ。

富田に逢ふとさう云ひ度くなる樣な人だ。

これは畫友ではないのだが、郷虎彥君が伊太利で客死した事は實に悲惨に感ずる。可愛相の事をした、郷の歸るのを心待ちに待つてゐたのに。

竹馬の友學窓の友

生方敏郎

友人と言つても、善友あり惡友あり同鄕の友あり同窓の友あり、旅で知り合つて以來仲好に成つた友あり、會で落ち合つて結ばれた友あり、轉居して行つて御近所づから遂には親類附合のやうになつたのもあれば、勤め先きでの御同役如何でござるの挨拶から、以て今日に至るの友人あり、雜誌社にも幾度か關係し新聞社にも三度迄御厄介に成つた體で、學窓に在ること二十年に近く世間に交ることまた二十年に垂んとする敏ちやんこと生方君（それは何つちの名で呼ばれてもいいが）のことであるから、そして其上行き中りバツタリで誰とでも腹藏なく語り、誘はるまゝに誰にでもついて何んな立派な料理屋へでもお供し、盛んに御馳走に成つて壯んに喋くり、時にはズボラに過ぎて呆れられ、又時としてあんまり自分勝手をやりすぎて友を怒らす場合無きにしも非ずといへども、更に彼等をして和解せしめるの快手腕は恰も春風の氷塊を溶かすが如くであるから、今やその交友は天下に洽く、敏郎を支持し後援する同情者は、さながら希臘建築に於けるコロネードに似たり。もう恁う成つては誰が何と言つても確かなもので、和製のおまんまと味噌汁くらゐは三度々々必ず頂ける身分なのだ、と思ふと我ながら心丈夫だ。

恁ういふ多くの一味徒黨の中で、一番最初に私の仲好し帳に其名を登錄されたものは、豆腐屋の息子の柳ちやんだ。柳ちやん私より一つ年下だが私より力が强く且機敏で、戰ごつこをしても角力を取つても魚捕でも蛍狩でも、何をしても私よりは上手だつた。私はよく彼に泣かされたものだが、又直ぐ和解した。近年不沙汰に過ぎ、今何うしてゐるやら知らぬ。柳ちやんよ。健在なれ。

次は神官のお孫さんの範ちやんだ。宮澤範治君だ。彼も幼稚園から中學二年に成る迄一緒だつた。大仲好し。範ちやんは仇名を荒熊と云はれてゐた位强情で、常に三尺の兒童をして怖れさせてゐたが、字は學校一番上手で學問も優等、容貌も美し

く。一面勇敢にして一面柔和な人だつた。先年滿洲へ行くといふから、君の荒膽にして馬賊の長に成るのかと思つたら、警部に成つた。今年から滿洲の或大會社の社員と成つた。

二本松の梅ちやんは目下芝の金杉の方で人夫請負業の親方に成つてゐる。原澤組といふのだ。御用の有る方は遠慮なく申し込んであげて下さい。そりや氣前のいい長脇差の上州兒ですから。

金子仲三君はあの時分の町長さんの息子で、小學でも中學でも一緒だつた。思慮深く親切な生れ付きで、益友の一人だ。目下米國シヤトルにゐて貿易業に從事してゐるが、時々安全かみそりだのイヴアシヤープだのコーヒーだの石鹼だのブランケットだの、いろんな物を送つてくれる。此頃は文學や演劇のアマチユアに成つて、あちらで仲間を集めて短歌會を催したり、素人芝居をやつたりしてゐる。以上竹馬の友だ。

陸軍步兵大佐角田政之助。川合の中學の我々の中では單にマサと云ふ。又はビツグ角田とも云つた。沈着勤勉素朴な男で陸軍大學を出で英佛及び印度に遊び久しく參謀本部にゐたが、一昨年から朝鮮大邱の聯隊長に成つて行つた。

正木亞之。國の中學では一番の秀才で、中學二年の時に文藝倶樂部に喜劇「贋小判」を送り一等賞を得、更に新小說でも選外一等に入つたことがある。多くの讀書を私に促し熟達して文學の醍醐味を知るに至らしめたのは、正に彼で、私の喜劇「金の茶釜」の筋は全く彼の作「贋小判」から得たものだ。今は桐生の憲政會幹事か何かしてゐて、選擧の時には活動する。

角田松次郎。仇名松ぼつくり。一名スモール。今では普通人以上の大男のハイカラさん。英語と惡口の天才者とも云ふ可きほどの達者な男で、外國語學校の卒業。大阪の方で貿易業か何かしてゐる。私の妻の兄だが、筆はよく〳〵の無精者で大正年代に入つてから一度も手紙をよこさぬ。此點では流石の私さへ上には上があると感心してゐる。

その他中學時代の仲間でまだ生きてゐるのは、廣島の高師を出で青島にゐる伊藤光雄と東京帝大の工科を出た神保金衛くらゐのものだ。神保は非常に晚學な男で大學を出た時は多分三十を二つ三つ越してゐたらう。久しく行つてゐた北海道から出て來て復興院の技師に成つたことを去年新聞で見たが、まだ會はぬ。川合の中學分校での同級生は之だけだが、まだ下級にも上級にも今日まで交際の續いてゐる者がある。

次が明治學院時代の友人だ。少年時代の竹馬の友もいいが、之は寄宿舍で一つ釜の飯を食つた仲間だから味は又格別だ。つい十日ほど前に銀座の松喜で牛鍋をつついてゐると、後の人か

ら聲をかけられた。見るとそれはベボン館で寢食を共にした連中だつたので、嬉しくて堪らなかつた。其一人は寫眞器械問屋の主人の石崎龍彌で他の一人は法學士辯護士の牧田彌太郎だ。今こそ二人とも押しも押されもせぬ立派な紳士に成つてるが、寄宿舍へ入つて來た時分は十二三の少年だつたのだ。ああ、年月の經つのは早い、と今更乍ら感慨無量だ。

加藤俊雄は同級で寄宿でも同室だ。爾來二十有幾年、この男ばかりは尤も繁く往來してゐる。地震の五日目に「君は家族が多いから食に困りやしないかと思つて持つて來た」とて中野から二里の道を歩いて來たのもこの男だ。學校を出て間もなく、「藝者を買つてみようぢやないか」と二人がかりで勇を鼓して生れて初めて牛込の料理屋へ登つた時の對手も此男だ。彼は政治家出身だが、學生時代繪がうまく音樂の才もあり、去年はまた喜劇を幾編も書いて見せた。私が「一その事文士に成れ」と勸めるをもきかず、去年の夏安南へ外米買ひに行つてしまつた。

堀内貞澄は仙臺へ行けば有名なものだ。彼は職業紹介所長をはじめいろ〳〵の公職を引受けて忙しく働いてゐる。私たちと別れてから東北學院の神學部を出たので、今でも牧師のマネをもやつてゐる樣だ。溫厚で包容力の強い、それ故誰からも敬慕される。妙な男が友人の中から出たものだ。

伊東豐重。と聞くと浮世繪でも描きさうな名前だが實は東京電燈株式會社倉庫係長なんぞは十年前に任命されたもので、今も多分其係長だらう。算盤も上手、繪も上手、長唄に至つては本當に黑つぽいところがある。生得藝術家の傾向を有することは加藤俊雄と同斷だが、夙に一つ橋の高商を出て此會社で身を立てた。地震ちよつと前に會つたきり會はぬから、又其間に少しは出世したかも知れぬ。君の多幸を祈る。

恁う書いて行くと、まだ〳〵明治學院だけでも各方面に散らかつてる友人が、ずゐぶんある。友人の外に先輩もある。又早稻田の文科の同級生には東京にゐる者だけでも二十人もあり、文壇で知られてゐる者も可也有り、又他の方面に向つた者の中にも委しく話せば、とても面白い人物は澤山あるのだが、既にお約束の紙數を超過してしまつたから、殘念乍ら擱筆する。

舊友二人

宇野浩二

文學の方の友達、――などといふと、をかしく聞えるかも知れないが、私自身文學者なのであるから、それが最も普通の意味での友達なのである。即ち私の特に親しくしてゐる廣津和郎とか、谷崎精二とか、葛西善藏とか、三上於菟吉とか、直木三十三とか、江口渙とか、未だ何人も數へることが出來る、が、さういふ人たちのことは、今までにもいろんな場合に書いたし、これからも書くだらう、多分私などはもう餘り彼等に就いて書き過ぎた位であるから、こゝではわざと、親しくしてゐる友達のうちから、職業の違つてゐる人たちを何人か、相當の枚數になるまで書いて見よう。

その一人は上村誠一といふ、新潟醫專出の醫學士である。彼は私より二歳上であるが、中學の二年の時、同級生として初めて知り合つた仲であつた。後で聞くと、私より一年先に中學に入つたのであるが、一年間何とか炎とかいふ眼の病氣のために學校を休んでゐたのださうである。私が二年級の新しい教場に入つた時、他の者は悉く私たちと共に一年級から上つて來た顏見知りの者ばかりだつた中に、一人、教室の一番前の列の椅子に席をおいた、青色の眼鏡をかけた見馴れない學生がゐた、彼はそんなに前の列にゐながら、どうかするとボールドの字が見えないと見えて、それを筆記せねばならぬ時など、席から離れて、ボールドの近くに立つて行つて、その青色の眼鏡を片手で外しながら、見にくさうにボールドの字を眺めては筆記してゐた。餘程目の惡い男に違ひない、間もなく「あんま」といふ名前がつけられた程である。これが上村を見た私の最初の印象であつた。

いつ頃から、どんな風にして私は彼と親しくなつたか覺えてゐないが、私たちはその二年級の終の頃には可成り親しくなつてゐて、學校の放課後など、互の家に往來するやうになつてゐた。その時分には彼の眼はもう大分よくなつて、青色の代りに薄い黑色の眼鏡に變り、三年級の初頃からはもう私たちと同じ

普通の色の眼鏡になつてゐた。彼の履歴を聞くと、親の家は攝津の池田の在にあつて、そこでは長兄が後をとつて農業をしてゐる、次兄は東京で印刷業をやつてゐる、そして當時彼が中學へ通ふために寄宿してゐる家、――それは立派な眞言宗の寺であつたが、その寺の和尚は彼の四番目の兄に當るとのことであつた。その頃から彼は中學を出たら、醫學に志すのだといつてゐた。

だが、考へて見ると、彼のやうな平凡な學生も稀であつた。成績もいつでも中の上と定つてゐた。暴れ者でもなかつたが、といつて、教師に隱れて煙草をすふ位の悪戯も辭さなかつた。學課にも何が得意で何が苦手といふものはなく性質は陽氣でもなければ陰氣でもなかつた。滅多に人と爭ふこともなかつた代りに、これといふ凝り固まる趣味といふものも持たなかつた。中學生流のおしやれをすることもなかつた代りに、又彼等流の蠻カラを氣取るといふやうな點も決してなかつた。恐らく平凡とか、中庸とかいふことでは、この男は非凡人といふことさへ出來た。

中學を卒業後、彼も私も東京に來た。それから彼は次兄の印刷業をしてゐる人の養子になつて、その人の保護で新潟の醫專に學んだのである。その頃、夏休に彼が新潟から東京に歸つて來た時、私たちは一二度會つた切り、長い間消息が絶えてゐた。すると、今から七八年前の或日、私は町で或友人に會つた時、「上村が神田で開業してゐるのを知つてるか、」と聞かれた。私が知らないと答へると、その友人が、「ぢやあ、行つて見ないか、おさまつてゐるよ、」と誘はれて、私は初めて醫者になつた彼を見たのである。小川町の裏通に、そんなに見にくゝはない構への家だつたが、借家であるらしく、如何にも新米の醫者らしい恰好で坐つてゐた。當時私は九段の中阪に下宿してゐたので、彼の住居と餘り離れてゐなかつたから、自然彼の方からも來、私の方からも尋ねして、舊交を溫めるやうになつたのである。

聞くと、彼の養父に當る次兄は、その時から四五年前に墓に行つた、その養父が死ぬ時、彼には教育を仕込んだから、それを元手として素手で世の中を渡つてくれ、自分の印刷業の方の財産は、譯があつて全部弟(彼の三番目の兄)に譲るからと遺言した。そこで彼は彼の野邊送りを濟ますと、早々新潟の母校の病院へ歸つて、そこで三年間辛抱した末、八百幾圓とかの金を貯蓄して東京へ歸つて來た。それから東京でも暫くあちこちの病院に勤めてゐた後で、やつと獨力で開業する運びになつたのだといふことであつた。もつとも、これは一度にこれだけの

いきさつを彼が話したのではなく、何度にも斷片的に話したところを、私が綜合したまでのことであるが、私が驚いたことは、彼がさういふ經歷を非常に當り前らしく、而も樂しさうに經驗して來たらしいことである。現に、八疊の日本座敷を洋風に直した、貧弱な器械の並んでゐる診察室の椅子にもたれて、如何にも現在の職業を樂み、併せてそれの將來を樂んでゐるやうに見えることだつた。

果して、それから二年後、彼はその借家主の都合で立退を求められたのを機會に、すぐその近くに賣物に出てゐた下宿屋を買ひとつて、それを改築して前よりも一層大きな醫院の院長になつた。デアテルミイとか、X光線などの立派な器械がいつの間にか据ゑつけられた。「醫者なんて隨分金のかゝるものだらうね。君たちのやうに財産のあるものはいゝが、我々にはとても出來ない商賣だね」と私は或時彼にいつた。彼が養父から相當の財産を貰つてゐるのだらうと私はその時まで思つてゐたのだつた。「樂なもんか。みんな借金でやつてゐるんだよ」と彼はいつた。が、それもどうやらかうやら此頃やつと返したところだ、といふやうな話を聞いてゐた時、間もなく例の大地震に遭つて、彼は又元の無一物になつてしまつたのである。そして、地震後はしばらく市の救護所に勤めたり、親戚の家の一室を診察所に借りたりして、相變らず彼の好きな職業に勵んでゐたが、去年の春頃に以前の燒跡に新しく家を建てゝ、今は又地震前と同じやうに働いてゐる。今にデアテルミイやX光線の器械も据ゑつけられるだらう。

先にもいつたやうに、私は友人にも知人にも、彼ほど平凡な常識家を見たことがない。それと共に彼ほど自分の職業を愛し、それに滿足してゐるものを見たことがない。彼は二言目には、その家を四五階にして、病室を增やしたいとか、どこそこへ出張所をおいて、毎日時間を定めてあの邊の患者を見たいとか、さういふことばかりに苦心してゐるやうに見える。といつて無暗に金儲けを急いでゐない證據に、彼の所はどこの醫者よりも診察料や藥價は高くない。つまり彼の唯一の樂みは病人を見ることなのだ。そしてその病氣をなほすことなのだ。なるべく多くの病人を見、なるべく多くの病氣をなほしたいのだ。從つて彼のやうな深切な醫者は少ないだらう。そして二宮尊德のやうに業を勵み、家を富ますことが彼の目的に違ひない。今の世に平凡であること、彼のやうな人は非凡であると私が感じる所以である。

これが私の親友の一人である。彼の家は神田小川町一番地、外科、花柳病科、上村醫院といふのである。廣告しておく。

上村誠一と同じく中學の同窓で、阪口芳三郎といふ、東京高工の建築科を出た男がある。これは私の中學五年間に一番親しくした友人で、卒業後も二三年の間は屢々往來してゐた。その後五六年消息が絶えたが、此頃又往來してゐる。現在は大阪に住居してゐる。

阪口とは私は中學の一年からずつと一緒だつた。始終落第しさうな成績で、一度も落第しなかつた男である。數學がよく出來たが、英語が非常に不得手で、五年級の中頃になつて、初めて辭書の引き方を知つたといふので有名だつた。私が中學一年の時、器械體操の鐵棒の機械の傍で、一人ぼんやり立つてゐると「おいお前はうどんの食ひ逃げをしたことがあるか?」と突然私の背中を叩いて叫んだ男があつた。「ない。」と答へると「駄目な奴だな、面白いもんだぞ、一ぺんやつて見い。」といつた。これが同級生だつた阪口芳三郎の最初の印象である。今こそ二十何貫もあるといふ大男だが、當時は目尻の少し下つた、美少年だつた。

彼は大阪の南地で有名な大和屋といふ藝者屋の息子であつた。家の關係から、寺に預けられたり、教師の家に預けられたりして中學校に通つてゐた。藝者屋の子といふ觀念で考へられるところのものと、彼はすべての點で反對の少年であつたことは、初めて私に彼が話しかけた言葉でも分るだらう。武士道の讃美者で、聲の大きいのが特長で、三年四年と進むうちに柔道の選手になつた。少し滑稽な氣取り過ぎるところはあつたが、正直な、好人物であつた。家にゐる時に、柔道家好みの、紺の袴を穿いてゐた。家、――といつても、つまり先にいつたやうな譯で、教師の家か、寺かであつた。

が、少し長い病氣をした時には、彼はその宗右衛門町の大和屋に歸つて行つた。初めのうち彼はそれを內緒にしてゐたが、三年生の時分だつたと思ふ。私は彼が十日以上學校を休んでゐたので、初めて大和屋へ彼を見舞ひに行つたことがあつた。あの位の大きな藝者屋になると、まるで奇麗な女學校の寄宿舍のやうで、箱屋やおちよぼが大勢出入りしてゐる店の間を通つて、中の間から上に上ると御殿のやうな長い廊下の、片側は前栽になつてゐて、片側は幾つかに仕切られた座敷か居間かゞ長屋のやうに並んでゐる、中には障子が開いてゐて、內側に簞笥や鏡臺の並んでゐるのが見えたり、着物を着更へてゐる女の姿が見えたりした。凡そ二十間もそんな廊下傳ひに歩いたところで、離れになつた一間に我が阪口が絹の蒲團に埋まつて寢てゐるのだ。私を彼の部屋に案內したものも、彼の枕元に附添つてゐるものも、茶や菓子を運んで來たものも、それ〳〵違つた女であ

りながら、みんな十三四歳の、それでゐても一人前の熟せた顏をした美しい少女であつた。多分下地ツ子たちであつたのだらう。私は悉く夢のやうな氣がした。

その後、私たちが中學を卒業した年の夏、寶塚にあつた彼の家の別莊へ、二三日がけで二三人の他の友達と遊びに行つたことがあつたが、その時も四五人のさういふ少女たちがその別莊に來てゐて、一緒に遊んだことがあるが、それから又二三年後その頃一緒に遊んだ少女たちが南地何美人かに數へられて、大人の顏になつて繪葉書に寫つてゐたのを見て、私は驚いたことがあつた。

だが、彼は病氣が直つて、下宿の寺へ歸つて來ると、下地ツ子の少女たちに看病されたことなど夢のやうな顏をして、中學を卒業後は滿洲に渡つて馬賊になりたいなどといつてゐた。その時分の話に、私たちより一級上であつた鍋井克之君が、或時阪口に「今度家へ歸つたらお前の家の藝者たちの香水の壜から、少しづゝ香水を盜み溜めて、それを持つて來てくれないか、」と賴んだところが、間もなく二日分の水藥の壜に七分目位の香水を持つて來て鍋井に渡して、驚かしたといふ話がある。そんな風で、彼は見たところ、まつたく藝者屋の影響を受けないで成人して行つたやうに見えた。

中學を出てから、彼はどういふ考へでか、前にいつたやうに高工の建築科に入つた。が、卒業後は建築と全然方面の違つた北海道の或水產會社に入つて、漁船に乘つて樺太方面に出かけたり、北海道で養狐事業をしたりして、四五年の月日を送つたらしい。私が彼と舊交を溫めるやうになつたのは、この三四年來のことで、彼は此頃は習ひ覺えた仕事に復つたらしく、大阪に建築事務所のやうなものを友人と共同で經營してゐるが、傍ら實家である大和家の支配人のやうな役目に就いてゐるらしいのである。

元、大和家を始めた人といふのは、彼の叔母であつた。彼女には子がなかつた。ところが、彼の兩親が早世したので、彼の五人かの兄妹が悉くその叔母の養子になつたのである。その養母である叔母は今から數年前に死んでしまつた。そこで殘された彼の兄妹の間に財產爭ひのやうなものが起つた。といふのは、彼の兄が非常な敏腕家で、餘り敏腕家であり過ぎた爲に、養母の生前にも屢々彼女を蔑ろにしたことがあるので、彼女の氣に入らなかつた。で、彼女は自分の造つた大和屋を出來るならば、娘分である芳三郎の姉たち（二人）に讓りたかつたのだが、兄妹悉く養子の籍に入れてあつたので、當然その後繼者であるべき彼の兄が、色んな財產上の有利な名儀を自分のものに

してしまつた。で、養母は煩悶の中に死んでしまつたのださうであるが、結局大和屋の看板だけは彼も何とも出來なかつたので、最近、考へついて前の家のすぐ傍に新大和屋といふ藝者屋を經營した、元々敏腕家の仕事であるから、またゝくうちに舊大和屋をどんどん壓迫して、大繁昌してゐるさうである。

ところが、私の友人阪口芳三郎は前にいつたやうな氣性であつたから、以前は大和屋の財産何かに就いては少しも關係してゐなかつたのであるが、彼にとつては兄の新大和屋が、姉たちの舊大和屋を壓迫して、女たちの無智につけ込んで、養母の財産をいろいろな手段で少しでも多く我が物にしようとするのを、近頃見るに見兼ねたといふのである。で、彼は奮然起つて、姉たちの舊大和屋に加擔して、飽く迄兄と戰ふつもりになつた。——如何にして兄が姉たちの領分の地所をごまかし取つたか、如何にして兄が不屆きな藝者の養成法をしてゐるか、如何にして兄が當路の役人たちを買收してゐるか、——等、等、等と或日彼は私に訴へたことがある。語を次いで、「お前も小說家であるなら、正義のために、この俺の家の內幕を書いてくれないか。」と彼はいふのである。「兄貴の方でも色んな顏役や破落戶を手馴つけてゐるらしいが、俺の方だつて、なアに俺がいさといへば、いつでも命の十や二十投げ出す奴がゐるから、お前は少しも恐がることはない、筆を曲げずに堂々と書いてくれ。」と彼は持前の大きな聲でいふのだつた。「よし、俺も今にさういふ複雜な話が書けるやうになつたら、喜んで材料にするよ。」と答へておいたが、私はまだその約を果さない。

彼は私たちと中學同窓であつた、元の横綱大錦卯一郎君の唯一の親友であつた。東京での學生時代に、私も褌かつぎの大錦君とよく彼の下宿で落合つたものである。その頃彼は身心共に貧しい大錦に出來るだけの友情を盡してゐたさうだつた。そして、彼等の交際は一方が横綱になつた頃までもつゞいてゐた。ところが、或時阪口が大錦の家と、矢張り中學の同窓だつた畫家の靑木宏峰の畫室との建築を請負うたことがあつた。その時大錦の家に使つた、彼の朝鮮の持山から切り出した檜の木の皮が餘つたのを、それを靑木の畫室の外側に張りつける工夫をして、彼からそれを大錦に提供するやうに申込んだところが、大錦の方で口實を設けて斷つたことがあつた。そこで彼は眞赤になつて、「そんなけちな奴とは知らなかつた。よし、そんな奴は俺の友達といふ譯には行かない。」といつて、その時以來彼は大錦と義絶してしまつた。

私が彼に最も心をひかれる所以は、一見ひどく粗暴に見えながら、內心臆病で、神經質なところを包み得ない點である、亂

暴なやうに見えて、妙に思ひやりの深い、優しい心を持つてゐる點である。或時彼は私が酒の弱いのを慨して、「今度大阪へ來たら、その時は容赦しないぞ、頭を抑えつけて、口をねぢ開けて飲ましてやるから、」と彼はいつた。その後私は大阪へ行つたが、そのことを恐れて敢て彼に知らさなかつた。ところが、運惡く愈々歸らうとする晩に、ひよつこり町で出遇つた。すると、彼は町中に響けるやうな聲で、「こら、大阪に來てゐて、どうして知らさなかつた、」と叫んだ。それから彼は無理耶理に私を近くのおちややに連れて行つて、そこへ二三人の酒好きの友達を電話で呼び寄せた。しかし、どうなることかと私の心配した心配に拘らず、結局彼はその晩私に三杯以上の酒を强ひなかつた。そして、別れる時、「今度から大阪へ來たら早速知らさないといけないぞ、今度は初めてだから許しておいたが、この次には本當に酒漬けにするぞ、」と彼はいつた。「さうするか、又今度東京へ行つた時、お前の家へ子分を十人ぐらゐ引張つて行つて、飲み潰しに行くぞ。」

が、彼はいつの時でも、東京へ來ると、私の家へ來ることさへ遠慮して、大抵どこかの家から使をよこして呼びに來た、而もそれが夜分の時だと私の家の者に惡く思はれるとを恐れて、自分の名前でなく、前記上村誠一の名前で呼びに來るのが常だつた。考へて見ると、中學校の庭で、彼が初めて私を呼びかける言葉として、「お前はうどんの食ひ逃げをしたことがあるか」といつたが、彼自身どんなやんちやんな少年時代にも、實は一度もそんなことをしたことがないに違ひない。

これが私の親友の一人である。他は割愛する。

環境と文化との關係を論じて儒教の體系及び其革新に及ぶ

文學博士　市村讃次郎

右は本號の公論欄へ掲載の豫定にて既に校正を終へたるも頁數超過のため已むなく次號に繰延べたり。この旨筆者並に讀者の御宥恕を乞ふ(編者記)

渾然たる大修養文庫

澤柳全集

豫約募集

豫約申込期間
大正十四年六月十日限

豫約申込所
東京市神田區通神保町九番地
澤柳全集刊行會

東京市神田區通神保町九番地
合資會社 冨山房
振替東京五〇一番

東京市本郷區向ケ岡彌生町三番地
合資會社 文化書房
振替東京二五四七三番

東京市神田區表神保町二番地
株式會社 同文館
振替東京一三五番

文學博士澤柳政太郎先生が現代日本の教育界に濶歩せる一大巨人であることは何人も異論のないところであるが、以て博士の偉大なる全豹を盡すに足らぬ。先生は實に教育者たると共に卓越せる政治家であり、達識の文明批評家である。否更に渾然たる大人格者として一世

澤柳全集刊行會

東京市神田區通神保町九番地

の規範たり、また一代の大經世家として先憂後樂するところに博士の眞面目が存するのである。隨つて博士の述作は凡てこれ教育改造の天籟であり、經國の大文字であり、近代日本の豫言にあらざるはなく、その斷簡零墨にも貴重なる教訓と暗示が含まれてゐる。即ち「澤柳全集」は單にこれを大教育書として見るべきにあらず、實にまた大政治書　大思想書、大經世書、大修養書として萬人必讀、萬戸必備の名著である。全集第三巻に收めたる「孝道」の如きは、實に「明治大正の孝經」ともいふべく、その他「讀書法」といひ「學修法」といひ、皆これ一般人士の一大修養書たるべきものである。今や時危にして思想の動搖甚しき時、何人もその最愛子弟のために本全集を家庭に備へる用意がなければならぬ。

全集の刊行は、今や滔々として一世の流行であるが、而もその多くは軟文學に屬するもののみである。この際に於て「澤柳全集」の如き堅實なる一大修養書が、堂々たる全集となつて出現するに到つたことは、深甚なる感動を以て迎へらるべき事實であると共に、また所謂全集物の刊行に新しき記錄を作るものといふべきである。これ本會が本全集の刊行を企てた所以である。敢て天下有識の士に愬む。

顧問　德富猪一郎　上田萬年　高楠順次郎

贊助員　二千餘名士

編輯　吉田熊次　小西重直　長田新　三浦藤作

裝幀擔任　山本鼎

刊行責任者　冨山房　坂本嘉治馬　文化書房　曾根松太郎

本書内容

第一巻
實際的教育學
教育學批判
我が國の教育

第二巻
教師及び校長論
時代と教育
退耕錄
隨感隨想

第三巻
孝道

第四巻
ペスタロッチ
教育者の精神
公私學校比較論
心理學
普通心理學
心理學講義
倫理學
讀書法
學修法

第五巻
普通教育學
特殊教育學
政治道德學

第六巻
論文選集

要項

□本書体裁　全六冊　各冊菊版平均七百五十頁總紙數四千五百頁　高雅大今背皮最上特製

□刊　行　豫約者に限り頒布　第一巻大正十四年五月發行以下毎月一冊宛發行十月完結

□申込方法　豫約申込六月十日限　一時拂二十圓　毎月拂五圓五十錢　申込金五圓（最後の月の拂込金に充當）外に郵税を要す　詳細規程及内容見本申込次第進呈

法學博士 福田德三著

◇最新刊◇

流通經濟講話

定價六圓五十錢
送料十八錢

◇名著◇

國民經濟講話の續篇

體裁

四六版一一〇〇頁コロタイプ石版挿畫三十葉餘茶色リンネル製、背革張箱入美裝、總索引付、

本書の出版の仰首期待さるゝこと既に數年。世界的聲名を有する著者が推敲鍛錬多年の蘊蓄を傾倒して漸く會心の力作を完成され、世間大方の渴は今や遺憾なく醫さるゝこと、なつた高遠深奥の學理は玆に初めて平易解明、自在の靈筆を驅つて何人にも了解し易く、しかも莊重丁寧眞に著者の聲咳に接するの感がある。机上敢て一本を薦む。

東京神田
今川小路一ノ一

合資會社 大鐙閣

電話四谷四六五八
振替東京三三六一八



父母所生 （一幕）

室生犀星

人物。

父。　五十九歳。健康なる老人。

母。　四十二歳。ひ弱い美しさをもつてゐる女。もと小間使。

行種。　三十六歳。先妻の長男。官吏。

さと。　三十四歳。その妻。

しげ子。十四歳。行種の長女。母親に似てゐる。

正。　十二歳。（小間使はるの子。よそへ遣つてある。）

女中。

ぢいや。

植木や。

その他の人物。

時。
明治三十五年ころ。

處。
田舍、古い城下町。

第一景

情景

八疊の間。廻り椽。冬がまへの木二三本。厠の半景。――庭をへだてて茶室。正面凡て果樹園めいた廣い庭、杏、すもゝの花が咲いてゐる。名づけがたい薫りが花間にある。靜かな午後過ぎ。

八疊の間に荷づくりの品物が重ねられ、取亂されてゐる。鞄、行李など、――ぢいやそれらを搬んでゆくごとに部屋の中さびしくなる。………むしろ老人らしい靜かさの中、もの憂い足もとが見られるだけ。

父。（痩身。たけが高い。）へいぜいから心がけをして居ればいいのに、いまになつては何も彼もおそいぢやないか、とにかく掛ものは持つてゆくがよい。あれはかねになるから。

母。（どこか陰氣なところがある。）でもわたしが持つてゐてもわかりはしないんでございますから置いてまゐります。

父。おまへのやうに瀨戸ものばかりでは何の足しにもならないぢやないか。それよりか敷ものも持つて行くといい。ぢ

いやに包ませて置いたから、――わしにはいま何もいらないからね。

母。（沈んだこゑで。）ありがたうございます。しかし行種さんが入らしつたあとでわたしが何も彼もさらへて行つたやうに思はれるのがいやでございますから、もう澤山でございます。それにお茶棚の上の時計だけあれば何をいただいたよりか嬉しうございます。

父。（振りかへり見て。）お前は妙にあの時計が好きだね。時計と一しよにある茶棚も持つて行つたらどうだ。わしのおやぢの時分からあるんだ。それにおまへはたんねんに艶ふきんをあてたものだから、あんなにこつくりしたいいつやをしてゐる。（妻の返辭をまたずに次の間へ聲をかける。）ぢいや、ちよつと來てくれ。

母。わたしあれだけはいただきません。あれはおさとさんがちやんと此間ゐらしつたときに手でなでてまでゐらしつたんですから。あれだけはそのままにして置いてくださいまし。

父。（いたはるやうに。）わしにまかしてお置き。わしはおまへに何もあげるものはないのだ。永い間わしのめんどうを見てもらつたおまへに家一つさへ用意ができてなんだ。わしはそれをしよつちう考へてゐたがけふになつてみるとおまへに氣の毒でならん。わしにまかして置いてくれ。わしのあげるものは默つて持つて行つてくれ。

母。（なみだぐんで――。）でも、あとで世間の聞えもございますから。

父。（愛情のため昂奮。）世間なぞどうでもいい。わしの言ふなりにしてゐて呉れ。それでいいぢやないか。

母。はい。

ぢいや入り來る。

ぢいや。まだ何か外にすることがございますか。もう車は一臺だけは門の前へ出して置きました。

父。この茶棚を一つくるんでほしいのだが、繩きずのつかないやうに荷づくりをしてくれ。

ぢいや。はい。なるほどこれは奥さまが毎朝おみがきになつたものでございますのに、どうして荷づくりなさらないのかと先刻からおたづねしやうと思つてゐたのでございます。

父。一人で持てるかね。

ぢいや。なかなか重うございます。

母。わたしお手づたひしませうか。

父。だいぢやうぶだよ。これくらゐのものは！

ぢいや。（かつぎながら。）わたしがいつも時計をみにまゐるたびに、奥さまはこの中からおやつをくだすつたものですよ。當分おやつも頂戴できませんかな。

母。（さびしく微笑ひ。）つぎの方がくださいますわ。ぢいやさん。

ぢいや。（次の間で。）どうだか分りますものかね。

父這入つてくる。

父。（あたりを見廻して。）これですつかり片づいたやうだね。一臺だけ出てしまつたやうだから、こんどのでもうお終ひだね。ほしいものがあつたら遠慮なくさう言つてくれ。

母。わたしもういただきすぎるほどいただいたんですもの。何もあとにございません。あとでおさとさんが酷い女だとお思ひにならないかと、それがなんだか心配なんでございます。

父。そんなことは言はせはしない。みんなわしがこさへた品ものばかりだからね。全く行李がこちらへ引上げて來やう

なんて、まるで夢にも考へなかつたことだからね。おまへにすまないけれど……。

母。（はつきりと。）いいえ、わたしいつかこんな事になるだらうと、ときどきひとりで考へてゐましたから、こんどは大してびつくりしませんでしたの。ただ、旦那さまがきつとご不自由あそばさないかとそればかり氣になつてゐました。でもこれまであんまり樂をしてゐたものですから、ばつがあたつたのかも知れません。

父。（妻の微笑を見詰め。）わしもさういへばやはりこんな風になることを時々考へてゐないではなかつた。しかしそれを口にするのがいやでね。わしも行頽が來てしまつたら、茶室に炬燵でもしてこもつてゐるよ。老人らしくね。いまではまだ元氣はあつたが二三日くひものもうまくない……。

母。（身に沁みて聞く。）けふなんぞ何となく弱つてゐらつしやるのね。どうかもつと元氣になつてくださいな。おさとさんもお見えになることだし……これまでよりか賑やかになるんでございますから。

父。おさとに始めてつきあひをするんだし、根が他人だからね。わしはやはり一人で室にこもつてゐる方がいいね。わしはまる二十年といふものお前とふたりきりでじみに暮してきたんだから、もう賑やかなことはいやだ。

母。（庭の方をちらりと見て。）二十年になりましたのね。接木の杏がまああんなになつてゐるんですもの。まるでお祭の造り花みたいに咲きそろひましたのね。ことしは澤山に實りませう。

父。（同じく庭を見る。杏の花が西日を浴びて燃えてゐる。）ことしは寒肥えが利いたと見えて、花びらの厚いこと、まるで八重のやうだ。おまへのところへもわしはこつそりと持つて行つてあげるよ、ぶだうもだいぶ水を吸ひ出して花がたくさんついたやうだから、それも持つて行くよ。

母。……（默つてゐる。）

父。（覗き込んで……）人になんぞわかりはしないよ。こつそりと行くぶんにはね。

母。（うつ向いたまま。）それではお約束が、ちがひます。こんどおわかれしたら父とおあひしないことにお話しただやございませんか。

父。されはさうだが……

母。わたしたちはわかいひとたちのやうにはまゐりません。そのことはどうぞおまもりくださいな。わたしにしてもそれはつらいことなんですけど、これくらゐのことはがまんしなければならないと思ひますの。わかいひとたちならできさうなことでも、わたしたちは既うしてはならないんでございますからね。

父。（溜息、何となく恥を感じながら。）さう言へばわたしたちはこれからあとは何もできないな。おまへの言ふことはよくわかるが、しかしわしは何時かまたこれまでのやうな暮しができさうな氣がしてならん。こんな考へは子供じみてわるい考へだが、年をとると何だか考へが子供らしくなるものらしいな。

母。（父の顔を見詰めなだめるやうに。）その話はもうやめませうね。わたしたちはあんまり永い間暮してきたので、いまから考へるとあんまり呆氣ないほど靜かでございましたね。わたし何んだか二十年もひとところに睡つてゐたやうな氣がいたしますの。まるで睡りつづけてゐたやうにも思はれますの。

父。そんな氣もするね。しかしおまへはいま目をさましたやうな年ごろだから、わしに遠慮をしないでいいところがあつたら落着いてくれるとよい。わしはまるでおまへの若い時分をむりやり押しつぶしてしまつたやうなものだからね。わしはそれが一番氣にかかつてしよちゆ濟まないやうな氣がする。そして氣のついたじぶんはもうおまへは若くはない。わしはまるで何も知らないおまへをだましてゐたやうなものだ。わしはそれを何時かおまへにあやまらうと

思ひながら、つい何時の間にかけふになつてしまつたのだ。わしのことはわしが謝まるからがまんしてくれ。

母。（父の顔を見て泪ぐむ。）いいえ、わたしはまだこれまでに唯の一度もそんなことを考へたことはございません。不平や不服めいた氣の起つたこともありません。いつでも樂しくまるで二十の時分から今までを一と足に飛んで來たやうに思ひますの。そしてわたしは不思議にいつでも鐵砲を肩にかけて元氣よく山へゐらつしやるあのころのあなたばかりが目にちらついてゐますの。晩方いろいろな小鳥を入れた獵袋を提げてお歸へりになるのが、まだ行屋の松並木の下に見えるやうでございますの。そしてどんなにおねがひしても獵だけは仲々お廢めにならなかつたんですね。それがまるであの事があつてからふつつりと山へもお出でにならなくなりましたのね。わたしあの時だけはほんとうに嬉しうございました。鶫のことでしたのね。あんな鶫があんな季節はづれにお部屋に飛び込むなんて、ふしぎといへば不思議すぎますのね。

父。（想ひ出して。）いや、實はね、殺生はやめたいと考へてゐたものの、意氣地なもので何かのきつかけがないと思ひ切れないものだよ。あのときの鶫の左の足が折れてゐたのも可哀さうだが、しかし外にもつと厭なことを見たんだよ。あんなときに鶫が飛び込んだことも獵をやめる原因になつたが、それよりか最つといやなことを見たんだよ。それをお前に話をしやうと思つたが、わざと控えておいたのは、お前がまた弱つてしまふと思つたからだよ。

母。（考へ込んで。）まつたくわたしには知らなかつたことでせうか。

父。（憐れんで。）お前は知るまい——凧(たこ)のことだよ。あの前の晩わたしはあそこの家のまへを通つて、誰かぼんやり飴屋の前に佇つてゐるのを見たんだ。なぜそんなところにゐるんだと尋ねると、默つて佇つてゐて何もいはないんだよ。何かいたづらをしたのなら謝まつてやるから一緒におうちへお這入りといふと、おうちへ入れないから這入つて

やらないとあの子が剛情をとほすんだもの。ぢやあわしのうちへ來たらどうだといふと、何時までも此處にゐるんだと言つて動かないんだ。わしも手の出しやうがなくて默つて歸つたが、何ともいへない氣がした。あの子は一たい誰に肖てああいふ剛情な子になつたのだらうね。あそこのうちの風儀はよくない。しかしあの子はあんな鬆な子ぢやなかつた筈だがね。わしはその翌くる日に蜂が飛び込んで、片方の足がねぢ切れてゐるのを見て、すぐ飾屋の角にゐた正の小さい裾から覗いてゐる足を思ひ出したら、どうしても獄に出る氣がしなかつた。おまへには默つてゐたがわしはあれからなるべく町通りを歩かないやうに心掛けてゐたんだよ。

母。（落着いて聞く。）それはわたしも氣がついてゐました。あなたが町通りをゐらつしやらないくらゐのことは、わたしには分つてゐましたの。そして正がどういふものか心がねぢれてゐるのも氣がついてゐました。しかしわたしはあれが生れつきからああだつたと思ひません。あそこへ行つてから急にかはつたのでございますね。その證據にはお友だちと一しよに遊んでゐますと、わたしに會つたつて碌に口もきかないんですもの。どこへかふいに隱れてしまふか馳け出してしまひますけれど、自分ひとりきりだとわたしのそばへ寄つてきて、それはなつかしさうにしますの。あの子は何も彼もあんまり分りすぎてゐて、そんなことであんな小さい頭をつかつてゐるかと思ふと可哀想でならないんです。うちへ遊びに來たつてわたしのそばを離れないでゐるくせに、時計ばかりに氣を配つてゐるんですもの。そして妙に毎日なんて來たことがございません。きつとあなたもお氣がついてゐらつしやりはしませんか。

父。（じつくりと考へ。）さう言へば妙に隔日にくるやうだね。するとけふはやつてくる日なんだね。おまへがゐなくなることは知つてゐまい。まさか、あの子がどんなに敏感でもね。

母。毎日だとあちらの家へ知れるから隔日に來るんでございますよ。――それにこんどのことだつてみんな解つてゐ

て、默つてゐるやうですよ。それは此二三日ひまさへあれば還つて來てゐませう。そしてお庭へ出て居れば居るで居いてくるし、お部屋に居れば居るで隔れないやうなところがございます。一昨日あなたに牡丹の芽立ちをおねだりしたでせうね。

父。默つてどんどん手を引張つて先に立つてゆくから、一たいどこまでつれて行くつもりだといふと、ここでいいのつと言つて牡丹の前へ立たせるんだよ。これをどうするのといふと、掘つて頂戴つてきかないんだ。根のいいのを一株頒けてやつたがね。……

母。（悲しげに。）あれがやはり子供ごゝろにおかたみにいただいたんでございませうよ。あの子はあゝ云ふ妙なくせの子でございますから。

父。（はかなげにいふ。）何んでもさういふ心に殘ることを言ふ子だ。おまへにはまだ默つてゐたけれど、この椽の下を見てごらん。あの子がみんな集めておいたんだよ。あちこち庭の中を掘りかへして一つ一つ目じるしをして、紙包みにくるんであるんだよ。

母、椽の下を覗いて見る。紙包み七八つばかり並べられてある。

母。これをみんなどうするのでせうか？――あの子はどこにどんな草花の根があるかをちやんと知つてゐるやうでございますね。それがほんたうに悉しく知つてゐるんですからね。

父。（母の顏を見詰め。）これはおれがみんなおまへにあげるために、自分で掘つたらしいんだよ。

母。（急激に胸せまり兩手で顏を覆ふ。むしろ靜かすぎるくらゐに。）まあ……。

父。わしも始めは氣がつかなかつたんだ。だからおまへはこれをどうするつもりだといふと、大人のやうに突つていた

にわかるのといふんだ。

母。（紙包みを椽の上にならべる。）わたしこれだけはいたゞきますわ。（紙包みの一つを解く。株根二つ三つ轉がり出づ。）すゐせんでございますね。

父。（自分も別の紙包みをひらき乍ら。）すゐせんだよ。これは――紫苑の芽なんだな。よく知つてゐたものだね。あんな塀ぎわにあるのをよく覺えてゐたものさ。わしにも分らないところなんだが……。

母。それにあの子は妙にこんな草だの木だのが好きなんでございますね。（懐しさうに別の紙包みを開いて。）まあ、こんなゆりの根なんか深く埋つてゐるものをよく掘つてくれたのね。ありがたうよ。（さびしく笑つて見せ。）わたし何んだか涙が出てしかたがないんですもの。

父。（その弱々しさに釣り込まれ。……）この間から庭ぢゆうを走つてあるいてゐたが、これを集めるためだつたんだね。

母。さうお仰れば一昨日でしたか、爪の間一杯に泥をためてゐました。取つてあげると言つてもいゝつてきかないんですもの。このごろ妙に人なつこくなつて來ましたやうね。

父。まだすつかりは分らないやうだけれど、自分がなぜあそこの家にゐるかといふことを知つてゐるやうだ。――正が來るといけないから元通りにしておきなさい。

母。（あらたに思ひ出して。）わたしこれをいたゞいても、こんなものを植えることなんかできはしないんですもの。どこかの二階でもかりてお針でもして暮したいんですから。――わたし悠長（のんき）にこれを植えてなんかゐられないんですもの。（考へなほして。）けれどね、いろ〳〵な鉢を買つて來て植えてやりませうよ。みんな根がつきますか知ら？――。

父。大丈夫だよ。どこか小さい離れでもかりるといゝね。おもやと隔れたしづかなところがないかね。

母。さがして貰つてあるんですけれど……（氣がつく。植木やが庭づたひに來る。）こちらへ――かはまないんですから。

植木や。さつそくでございますが、けふ川向ひへ行きましてね。そして一軒だけ決めてまゐりました。六疊に三疊の離れでございますよ。奥さまのおすきな川も庭さきを通つてゐるんです。

父。そりやよかつたね。

植木や。そこで何でございますな、さきの分は門のそとまで出しましたが、まだ先刻の道路に石積みがゐるんで駐つてゐますから、一しよに出さうと思つてるんです。

母。いろいろありがたうよ。ぢあ一しよに出してくださいな。

植木や。もう何も積むものがございませんな。

母。ええ、何にも――。

植木や。（紙包みを見る。）そんなものまで持つてゐらつしやるんですか。（愉快さうに。）奥さまは草つぱでも大切になさるんだからな。そんなものでも馴染み出すと係は係で一番さきに思ひ出すものですからね。わたしなんぞこんどの家を建てなほすときに、うち庭の松の木一本でおやぢと大喧嘩をしましたよ。

父。どうして？――。

植木や。おやぢでは松の木を伐つてしまへといふんです。あれをあのままにしとくと家を毀さないと、動かせないものですからね。しかしわたしでは松の木はああして玄關の中へ取入れてもいいから、そつとしときたいんですよ。何しろ七十年もああして生きてゐるのを伐るなんて、碌なことがありませんからね。だから松の木を伐るくらゐなら一刻

わたしは手をかさないと、酒をくらつて言ひ通したんでさ、——するとおやぢも降參しこしまつてとうたう玄關の中へ取入れましたが、中々奥床しいものですよ。

父。（感心して。）あれは立派な松の木だよ。そりやいいことをした。松の木もよろこんでゐるだらうよ。

母。あなたらしくてほんとにいいことをなさいましたのね。

植木や。（精悍に。）あとでおやぢも却つてよろこんでくれましたよ。何しろおやぢばかりでも四十年の間梯子で手入れしたやつですからね。

母。ほんとにね。その離れにこれを植えるところがありますかしら。

植木や。（考へて。）ええと、何んでも七八坪くらゐの庭ですから大丈夫ですとも。わたしがみんないいやうに奥さまのおすきなやうに植えておきますよ。水植えにして一週間もしたら芽先きが樂しめるやうにしませうよ。なにしろこの陽氣でございますからな。（耳をそば立てて。）はアは、もうこちらへ遣つて來たんだな。先刻はまだ川向ひを練つてゐたんだが……。

芝居の町廻りする太鼓の音が乾いた喫かい遠くから近づく。

父。（耳を傾て。）芝居がかかるんだね。

植木や。いい芝居ださうです。しかしわたしたちは毎日芝居ごつこをしてゐるやうなものだから見たかありませんや。

父。芝居つていへば永く見ないやうぢやないか。いつか、——まだ、正のゐたころ行つたきりだね。

母。（しばらくうつとりと。）ええ、ほんとに永くまゐりませんね。

間。しばらくして。

植木や。おやあ、これをいただいて行つて植えておきませう。いづれまた。
母。いいやうに植えてください。
植木や。承知しました。

植木や庭づたひに去る。町廻りの太皷やや近づく。

父。(つくづくと。) ゆつくりした暮しだつたが、芝居も見るをりもあまりなかつたやうだね。
母。(依然うつとりして。)ええ、ございませんでしたね。
父。これからはひまがあるんだから、ときどき芝居を見に行くといい……。
母。いいえ、わたしそんな賑やかなところへ行きつけないものでございますから、もう行きたくございませんの。(耳を澄して。)町角をまがりましたのね。
父。だいぶ遠退いたやうだね。

太皷の音消える。

母。(氣がついて。)お茶でもいれませうね。
父。(庭をみる。) 日かげが木のあたまにしかささなくなつた。お茶でものむとするかな。

母、茶を入れにたつ。瓶かけで茶を入れながら……。

母。夕方近いんですから濃い茶をいれるのはよしませうね。
父。うすいのでいいよ。つかんことを言ふやうだが、このごろ非をあそこの家へやらなければよかつたと考へるやうになつたよ。かうしておまへが外へ出るやうになつたから、なほおまへのためにも一しよにゐてくれると心丈夫だと考

へてゐるんだが、どうもこの考へはもう遲いね。

母。（心から……。）ええ、わたしもそのことが胸一杯なんでございますの。惜しいことをしましたのね。

父。取り返しがつかないことをして了まつたな。なぜあのときあれをやつてしまつたかな。わしらはばかだつたよ。

母。（遠くを眺めるやうに考へ出す。）あのときも行種さんが入らつしやるんで、あはててあそこへ遣つたのですね。あのときは既う目ききが何だかこわくて、それに世間のこともございましたし……わたしはどんなにしても手離したくはなかつたのですけれど……。

父。（あやまるやうに。）わしはあのときは全くあはてた。そして無理にあの子をやつてしまつたが、あれはわしが惡かつた。おまへの味方を奪つてしまつたことは、何と言つても惡かつた。あのときは世間も怖しかつたが、行種の顔をみるのが耐らなかつた。それゆゑわしは行種のかへるまで茶室にばかりゐた。それにとなりや近所の噂までわしには恐かつた。人が何んにも言はない前にわしは用意しすぎて了つたのだ。あれはわしの一生のうちで一等わるいことだつた。いや、わしは一生のうちをまるでわるいことを仕通してきたやうなものだ。しかしおまへは默つて忍いてくれたが、いまになるとわしはわしをにくんでゐるよ。

母。けれどもああしないではどうしても納まらなかつたのですね。わたしはまだ若うございましたし……

父。わしはあんまり澤山おまへにあやまることだらけで、どれからあやまつていいかわからないくらゐだよ。

母。（手で制して）その話はもうよしませうね。お茶が冷へてしまひますからおあがりください。

父。（お茶をのみながら。）わしはまだおまへの泣いてゐたことをおぼえてゐるよ。まる一日。

母。（默つて泣く……）

間。夕方ちかい明りがくらみをおびてくる。

父。（喉の乾いた人のやうに。）おまへはなにも知らなかつたが、わしにもう何も彼も知つてゐた。――それがいまになるとわしはくるしい。わしはこれをお前に一度言つておきたいと思つてゐたんだ。

母。（默つて泣く……）

父。おまへはけふまで何ひとつわしに不平がましいことを言はなかつたね。何かわしに言ふことがないか。

母。（濕つた聲で）なにもございません。わたしたちは深い因緣がございましたのね。それだけですわ。そのほか何もいふこともないのですわ。

父。（ややしつこく）おまへはあきらめて因緣だといふが、ほんとに何かいふことがあつたら言つてくれ。それがどんなことでもわしはよろこんで聞くから。

母。いいえ、何んにもございません。

母、父により添ひ低いこゑですすり泣きをする。間。――庭づたひにぢいや入り來る。やや強い風が吹く。

ぢいや。（息切れをさせ。）すつかり積み込みましたから出してもようございますか知ら。

母。（身じまひをして。）ご苦勞さまね。もう出してくださいな。それから車力やさんは何人ですかしら。

ぢいや。（指折り。）ええと、一臺に二人づつですから都合四人でございます。途中に坂がございますから、あと押しがいるのでございます。

母。（押入れから紙包みを出し。）ではこれをご祝儀にね。ぢいやさんはあとよ。

ぢいや。わたしたちどうでもようございますが、みんなが喜ぶことでせう。

父。酒があつたらやるとよい。

ぢいや。（頭をふつて酔ふた人のまねをして見せる。）　あいつらはみんなふだんから酔つぱらひですからな。祝儀だけで澤山ですよ。酔はせたらさはぎでございますからな。

母。ではいいやうにね。

ぢいや。かしこまりました。

ぢいや去る。表に人ごゑがして間もなく荷車の音が遠退かる。

父。（荷車の音をききながら。）　ではもう鞄ひとつだね。

母。ええ、それから夜具が一包みございます。これは人力にだつて一しよに乗せられると思ひますの。

父。一緒にするといいね。

母。わたしもさう考へてゐますの。

父。（庭の方を見詰めながら。）もう今晩ぎりだね。おまへがここで泊るのもね。

母。（しみじみと。）ええ、やかましいと思つてゐましたけれど、もう家鴨の啼ごゑもきけませんのね。

父。けふは妙にしづかだね。

庭の奥から木を叩くやうな音がする。歇んでは起つては消える。ふたりとも耳をかたむける。

父。あの音は何だらうね。先刻からするやうだなが……

母。ええ。わたしも變だと思つてゐるんでございますが。

父。（起つて庭へ下り奥の方を見る。）　どうも北らしいな。いつの間にやつて來たのかしら。

母。（奥庭を見る。） 正らしうございますね。何をしてゐるんでせうかね。日がくれかかつてゐるのに……正や、正、何してゐるの。

木を叩く音歇む。

母。風が出てさむいからお家へおはいり。――わたし、ちよつと行つて見てまゐります。

母。庭の方へきえる。父、椽の上の紙屑をひらひ茫乎と佗しげに立つてゐる。風やや勁くなる。間。

母。（正の手をひいてくる。） だいぶ遅いんですから、もうおかへりなね。あちらのおうちでも心配してゐらつしやるやうだから。

正。（むしろ畸形的な感じ。痩せてゐる。手に竹の根の杖をもつてゐる。） おそくなつたつていいんです。ちやんとけふは左う言つてきたの。

母。（あやぶんで――）ぢや。どこへ行くつて言つて来たの。

正。（平気で――さうでない意味にも取れる。） ここのうちへ行くつて言つて来たの。いつかお母さんがけふごはんを一しよに食べると言つたでせう。さう家で言つたらそれならいいつて言つてゐた。

母。（想ひ出して。）さうね。ごはんを一しよにいただくことになつてゐたのね。（父の方を見て哀しげに。） わたしそれはちやんと覚えてゐたんだけれど、おまへのうちへわるいかと思つて黙つてゐたんですよ。ぢや、けふは一しよにたべませうね。

父。（さびしく。）わしもそれは気がついてゐたんだが……こちらへおいで、――お庭で何をしてゐたの。（正、父のそばに腰かける。）

正。けふはおそくなつてもいいんだ。

母。なにかご馳走しませうね。（父に對つて。）ほんとにいいあんばいに此の子が來てくれてよございましたのね。いいときにはいいことがちやんと定つてゐるやうなものですね。

父。お酒をつけてくれるだらうね。

母。（笑つて。）よろございます。ぢあ、わたし仕たくをしてまゐりますから、こちらの部屋にいたしませうか。

父。うん。しかしだいぶ暗くなつて來たやうだ。

母。ともしませうか。

父。わしが點火すよ。おまへあちらを早くやつてくれ。

母去る。父次の間から竹の臺のらむぷを取り出し、ほやを布で拭いてゐる。正、椽の下をながら薄明りに何かをさがしてゐる。

父。（ほやを掃除しながら。）おまへ庭で何を叩いてゐたのかね。

正。（椽の下から起き上つて。）木から縄を下げてそのさきに薪を吊し上げて叩いてゐたの。

父。（おかしげに。）劍術のけいこか。

正。いいえ。

父。ぢあ、ぶらんこかね。

正。（首がゆげた。）そんなものぢやない――。

父。ぢあ、何にをしてゐた。

正。ちよつと憎い奴がゐたものだから叩いてやつたんです。
父。（らむぷに火をともす。それを坐敷の眞中へ出す。）それは一たい誰のことかね。
正。（畸形的な感じが強い。）誰のことだか。
父。（正のかほを凝見める。正の顔ゆがんで悲しげに見える。間。）おまへはそんなに憎いことがあるかね。子供つてものはそんな考へをもつてはならないものだよ。子供はのんびりしてゐなければいけないからな。
正。（默つてゐる。羽織のひもをいじつてゐる。）……。
父。おまへのまはりのひとは皆いいひとばかりなんだから、そんなに憎らしいひとなんてゐないぢやないか。――決してそんなことをひとにいふものぢやないよ。
正。（突然にいふ。）僕うちへかへらうか知ら？――。
父。（吃驚りして。）ごはんを一しよにたべることになつてゐるぢやないか。そんな氣のまがつたことを言ふものではない。こちらへお上り。
正。（甘えてゐるのを匿して。）僕、此處でいい……。
父。（默つて正を眺めてゐる。）……。
間。やゝしばらくして父、正のそばへ寄る。
父。（老ひ嗄れたこゑで低く。）おまへは何か言ひたいことを言はずにゐるんだね。それでそんなにむつつりしてゐるんだね。さうぢやない。
正。（默つてゐる。）……。

父。けふはおこらないで機嫌よくごはんをたべておいで。お母さんにも機嫌よくしてゐるんだよ。そのわけはおまへはちやんと分つてゐるだらうからね。

正。（やつと。）ええ。

父。（しづかに。）けふはわしのうちへ行くと言つて來たんぢやないね。默つて來たんだらうね。わしはちやんと知つてゐるが、併しそれはどうでもいいんだがね。

正。（いつの間にすかされて了ふ。）え。默つて來たの。

父。さうだらう。何か考へ込んで。）これからそんなことをして來てはいけない。分つたね。

正（從順に。）わかつた。

父。おまへは先刻憎いやつを叩いてゐたなんて言つたが、あれは誰のことだかしやうじきに言つてごらん。わしはそんな人なんておまへのまはりにはゐないと思ふんだが、おまへとわしとの考へはちがつてゐるから、わしはそれを聞きたいんだよ。ね。ちよつと言つてごらん。

正。………。

父。わしにはそれは誰だか分つてゐる。（佗しげに。）あてて見やうかね。

正。（眼をみはる。）……。

父。（優しく。）これからあんな事はしない方がいいね。しないと言つてごらん。

正。（突然に。）僕はあいつらが嫌ひなんです。

父。（あまり突唐なのでびつくりする。）あいつらつて誰のこと？――。

正。(又突然に言ふ。) 椽の下に置いた僕の種子をどうしたんです。あれは大切なものですよ。あれを出して下さい。けふぢゆうに僕はいるのです。

父。(あまりの烈しさに茫然としてゐる。)……。

母入り來る。白い前垂れをしめ手をふきながら默つておぜんをならべる。床の間に正のぜんが供えられてゐる。

母。(正のぜんを指さし。) けふはここにして置きませうね。

父。(こころよげに。) それはよく氣がついたね。その方がいいよ。

母。正や、ごはんですよ。おあがり。風が出て來てさむいからお部屋へおあがり。

母、正のそばへ寄る。らむぷの灯またたく。裏の藪と樹に樹のさわる音がやや烈しくなる。父默つてらむぷを部屋のすみに移す。

正。(不機嫌に默つてゐる。)

父。(すかすやうに。) 椽の下に置いてあつた種子はね。あれはちやんとお母さんがしまつておいたんだよ。ね、いいかい、それでいいのだらう。

母。(温かく柔しげに。)正、ありがたうよ。あの種子はお母さんがいただいておいたよ。おまへがあれをわたしにお呉れのやうだからね。ありがたうよ。お母さんはおれいを言ひます。

正。(涙ぐむ。) それならいいんだけれど。僕、見えたかつたものだから……。

母。(あたまを撫でてやり。) あれはちやんと先刻植木やにたのんで植えさせておいたの。きつとみんなつくでせうよ。おまへは深切ね。さあ、ごはんをみんなで食べませう。

正。ええ。

父。（咳くやうに。）みんなで一緒にかうしてごはんを食べることなんか、もう二度とないだらうな。（自分のぜんの前にすはる。）

母。もうそんなことは言はないでくださいまし。

父。（わざと氣輕に。）よし、よし。正はここへ坐るんだよ。

正。（床の間の坐につく。）これでいいの。

父。それでいい。

正。（分つてゐるやうで解らないごとく。）僕、なぜこんなところに坐るのか知ら？――。

父。（だまつて微笑つてゐる。）………。

母。（ごはんをよそつて默つてゐる。）

間、みんなだまつて食事をする。風はげしくなる。

母。（給仕しながら。）ひどい風になりましたね。

父。（庭を見る。）………。風が出たやうだね。

――ゆるく幕。

第二景

前景の次ぎの間の茶の間。

古風な弓張提灯の箱等なげしに架けられてゐる。右手むかし風な武士家玄關に通ず。凡て板の間。――茶の間の

障子開け放たれ花樹ある廣大な庭が見える。左手に茶室の間の半景。よく晴れたる翠朝。

母。(爽々しい庭さきから這入つてくる。) いい天氣になりましたのね。すつかり奥庭の方が片づきましたよ。

父。(茶室の前の冬がまへの藁を取り除けてゐる。) すこし汗ばむくらゐだね。ほらこんなに蕾が膨らんでゐる。藁の中だから氣がつかなかつた。

母。(椿の木に寄つて。)蕾がはじ切れさうですね。ことしは陽氣がよかつたせいか、早く咲きさうでございますね。

父。こんなに暖くちや藁をかむつてゐては蒸されるくらゐだらうよ。

母。ええ、ほんとにね。——それからわたしけふ皆さんに會はなければならないでせうかしら。わたしほんとは會ひたくないんですけれど、しかしよく考へると左うもまゐりませんしね。

父、(同感して。) いやだらうがおまへが會つてくれなくては、ものゝありかも分らないしね。けふきりのことだから我慢してくれ。

母。(納得して。)ええ、あふことにいたしますわ。それからぢいやがよめ茶をすつかり摘みましたの。

父。さうかい。あれはすぐに芽を出すから二度くらゐ摘めるんだよ。

母。(何となくしんみりと。) ぢいやは永くつかつてやつて下さいね。もうそんなに用事もできなくなつてゐるやうですけれど、これはわたしからおねがひしますわ。

父。ぢいやのことなら心配しなくともいゝよ。多分、わしのうちからおとむらひの出るまで置いてやるつもりなんだ。わしのおやぢの時分からゐるんだからね。おまへが托まなくともそんな薄情なことをするわしではないよ。

母。どうぞね。いまもよめ茶を摘みながらせめて奥さまのごちさうに何んにもわしはできないけれど、このよめ茶を和

へておあげするんだと子供のやうなことを言つてゐるんですもの。あのひとも年を取るほど子供らしくなつて、いい人になつて來ますのね。それにわたし可哀さうに思はれますのは、ぢいや自身も何となく不安心らしく考へてゐるやうですわ。行稙さんがゐらつしやるといふことでね。――あなたからずつと置いてやると左うおつしやつたらきつと安堵しますわ。さうでないと、あゝいふ人の心をやきもきさせるのは、氣の毒でございますからね。

父。わたしからその事ははつきり言つてやつて置くからね。――しかしだいぶぼけてゐるやうだね。

母。年が年でございますから仕方がございません。

遠くに花火のあがる音がきこゆ。穏やかな日かげが老夫婦をてらしてゐる。

父。(そらを見て。) 開通式のお祝ひの花火らしいね。一たい幾日あがることだらうな。

母。一週間でございますて。

父。ぽんぽんあがる音が陽氣でいいが、けふはあがらなくともいいやうな氣がする。(苦笑ひする。)

母。みなさんは何時のでいらつしやるんでせうかね。

父。十一時だときいてゐるが、汽車の時間割なんてあてになるものか知ら?――おまへはまだ汽車を見たことがないね。

母。ええ。まだです。なんだか怖いやうな氣がして。平氣で乘つてゐられさうもございませんね。わたしなんかすぐ眼眩ひがしさうに思はれます。

父。大丈夫だとも。たいへんいいこころもちださうだよ。

父。茶の間にある汽車の時間割を取り眺める。

父。わしなんか見たつて解らないんだが、しかし十一時には間違ひはないんだ。何しろ鐵橋の橋杭の土臺だけでも一年もかかつたんだからな。毎日よいやこらせのうたを聞いてゐるうちにあゝいふ變なものが通るやうになつたんだからね。

母。みなさんもその汽車でいらつしやるんでせうね。

父。さうだよ。わしはこのごろ妙なことを考へるんだよ。あゝいふ文明めいたものが馳り出してゐると、わし等のやうな年寄りは何んだか早死にしさうに思はれてならない、――妙に急がされてゐるやうでね。だからわしは汽車の走つてゐる音響をきいてゐると頭がぼおとしてしまふ。……

母。わたしはあの音響をきくとあたまがいたみますの。けれどもそんな死ぬのを急がされるなんてことはございません。氣のせいですわ。

父。（眞顏になり。）おまへがゐなくなつたり行種がきたりして、すこしも落着く間もない隙間にわしはほろりと參るやうな氣がするんだ。なんだかものを食べても味のないやうな氣がするのは、心にはよくないと思ふね。年寄りといふものはやはりぽきりとやられてしまひさうだね。これは戯談だが……（にが笑ひを弱々しくする。）もしものことがあつたらわしはおまへに知らせていいか知ら？――わしは決してわるいことだとおもはないんだがね。

母。（考へて。）そのときはわたし來させていただきますわ。誰が何と言つても參ります。けれどもそんなことをお考へにならない方がようございます。

父。おまへが來てくれればいいよ。わしはやはり行種と一しよにゐてもおまへとゐるやうなわけにゆかないからね。

母。（しみじみと。）ええ。

ぢいや奥から手籠を提げてくる。」

ちいや。わづかだと思つてゐましたらずゐぶんございました。旦那さまの分まであるやうでございます。

母。ありがたう。（籠の中を覗いて見て。）いい匂ひがしてゐますね。（微笑ひ乍ら。）ちいやさんが料理してくれるの、まだ、ほんの芽先きね。

父。（のぞき込んで。）芽の若いほど柔らかいんだね。

ちいや。ええ。わたしが和えてごらんに入れますよ。毎ねん、この芽さきが一番早いやうです。去年は奥さまがお摘みになりましたね。正さまも入らしつて夕方からでしたけれどちやんとお晩には用意できましたやうでした。

母。あのときはまだぐいみの木のかげに雪があつたやうね。それにくらべるとことしはヨ程暖かいのね。去年は四月にはいつてから二度も降つたんですもの。お涅槃の日だつたか知ら？――

ちいや。（手を叩いて。）正さまがおねはんのおそなへの團子をもつてゐらしつたから、やはり四月の十五日ですよ。旦那さまはお風邪でおやすみになつてゐらしつたから。

父。さう、よくおぼへてゐるね。あのときは全くよめ菜で元氣がついたくらゐに思つたよ。

母。けれどもことしでお終ひになるのね。（さびしい顔をする。）

ぢいや。（わざと元氣よく。）たんとお食りなさいまし。

ちいや。（急に思ひ附いて。）先刻川向ひの方からお使ひでしてね。朝の間にたたみの裏がへしをしておいたとのことでしたよ。植木やさんが、きつと例の調子できつと言ひ附けたのでございませう。何でもやはり役所へ勤めになる方の持家ださうです。

母。（好意をよろこんで。）植繁ならなんでもまかせておけますね。そんなに汚れてゐなかつたのなら裏返しなんてしな

くともよかつたかも知れないのに。――。
ぢいや　その方がしかしさつぱりしていい氣もちですよ。
父　さうとも。
ぢいや。（きふに。）ときに何時のお着きでございます。
父。十一時だよ。
ぢいや。（日脚を仰ぎ見て。）まだ一時間はございませうね。
母。そんなものでせうね。
ぢいや。お荷物が大へんでございませうな。大勢さまだから。
父。たかが知れてゐるよ。（思ひついて。）それからぢいや、おまへのことは心配しなくともいゝからね。ゆつくりした氣もちでゐてくれ。わしがみんな飲み込んでゐるからな。
ぢいや。（主人の顏を見詰め。）ありがたうございます。
母。わたしに髮つてお世話してあげてくださいな。
ぢいや。承知いたしましてございます。それから先刻正さまと石屋の角であひましたら、まるでわたしをうまくだまして奧さまのおところをお聞きにならうとなさいましたから、わたしは存じませんと申し上げておきました。どうもう早やご存じのやうでございますな。
母。（不安げに。）あの子のことだから知つてゐるかも知れませんね。默つて訊ねたりなんかしないだけなほ知つてゐるやうでございますね。

父。(同様に。) さうだな。しかしどちらにしても知れるだらうからな。しかしあの子はおまへを尋ねてゆくやうなことはすまい。あの子はちやんとひとりでみんな合點してゐるからね。

母。え。多分ね。ですけれど……。

父。昨日もね、僕はどこへも行きたくないんだなんて妙にそんなことを仄めかしてゐたやうだよ。わしは深く話に立ち入らないでひとりで遊んでゐたほうがいいんだよと言つたら默つてゐた。

母。……(何となく鬱いでゐる。)

ぢいや。(きうくつにしてゐる。)

父。(ふと話頭をかへして。) ぢいや、おまへとおさととあまり仲がよくない方だね。この前おさとが來たときにも何だか變なふうだつたぢやないか。

ぢいや、え丶と、あれは一昨年の春のことでございましたつけ。いいや、杏のできてゐたころだから六月ころでしたかな。

父。行種の休暇だつたよ。

ぢいや。さうさう、まだ若い時分でした、なんでもあのとき詰らないことからお叱りを受けました。これはいやな話ですからね、よしませう。

母。(思ひ出していやな顔をする。) あの話はよしませうね。

ぢいや。ええ。

父。(何氣なく。) どうしてあんなに九疋もねずみの子がゐたのか、わしはあとで聞いて可哀さうなことをしたと思つたが しかしああするより外にしやうがなかつたんだからね。

ちいや。(思はず。)　みんな生きてうづうづしてゐたんですから　全く可哀さうなことをしました。しかしあれを生かして置いたつて何んにもならないんだから　若奥さまがあゝなさるよりか爲方がなかつたんです……みんな水の上を眼の見えない赤い奴が、ぷくぷく浮いては流れてゆきましたよ。それもすつかりで九疋でございましたからね。

母。(少しくきつとして。)　ちいやさん。

ちいや。(かしこまる。)　はい。

父。おさとはどこか氣の強い女のやうだ。おまへとはまるで反對のところがある。あの時も思ひ切つて可哀さうに捨ててしまつたが、ちよつとわしにもできんことだからな。

ちいや。氣のつよい方ですよ。わたしはどうしても川へながすことが厭だと申しますと、ご自分でどんどん行つてお捨てになつたんですものな。わたしはあゝいふ方を始めて見ましたよ。

父。おさとばかりではないよ。あの連中はみんな氣がつよくて叶はない。わしにはすこし重荷だよ。(ちからなく笑つて。)　ほんとだよ。

母。けれどもあゝいふ氣性でないと今どきは暮せないんでせうね。わたしあゝいふてきぱきした方に好きたんでございますけれど、あのときだけは厭な氣がしました。けれども美しく上品な方ね、さうおもはない、ちいやさん。

ちいや。(ためらひながら。)　あゝいふ美しさはきびきびして恐うございますな。しよつちう叱られさうでしてな。

父。(微笑ふ。)

母。(微笑はず。)

ちいや。それにどこかわたしなんかとお話しをしてくださらないやうで、それが氣がかりでございます。ちいや　ちい

や、つて言つてくだされればわたしは譯もなく働けるんでございますけれど、永い間奥さまから呼びならされてゐた學句に、ききなれないお聲で呼ばれるとわたしのことですから、きつと間のぬけたことだらけでございませうね。わたしそんなことを昨夜も考へとほしたんです。

母。（優しく。）それはね。ぢいやさん、きつと日が經つてゆくと慣れてしまふんだから、そんなに心配しなくともいいんですよ。

ぢいや。（頼りなげに。）さやうでございませうか。

母。きつとですよ。それにね、あの方もぢいやが年寄りだからよいやうにして下さるでせうよ。

ぢいや。よいやうに奥さまからも申し上げておいて下さいまし。

母。ええ。さう言つてあげませう。

ぢいや。（手籠を提げ。）ではこれを一つ料理いたしませう。

母。よいやうにね。

ぢいや去る　樹がくれに植木やと何か話しごゑがする。植木や來る。

母。きのふは色々ありがたう。片づきましたか知ら。

植木や。ええ。もうすつかり片づけました　きつと奥さまのお氣に入ると思ひますよ。前の川から庭へ引いてある水が大變きれいですから……これはきつと奥さまのお氣に入りますよ。

母。（うれしさうに。）いいところのやうですね。樂しみにして行きますよ。家の方もすつかり掃除してくれたさうでお禮を言ひますよ。

植木屋。（好意のため愉快に昂奮して。）もう何日だつておすはりになるだけになつてゐますよ。（父の方に向つて。）それから旦那、手洗鉢のやうなものはございますか。中廁のあれが御不用ならいただきたいんですが……もう手洗鉢さへあればすつかり揃ふんですよ。

母。（さへぎつて。）それはわたし買ふつもりなんですからいいんですよ。

父。あれはいらないんだから持つてゆくといい。なあにあれは使つてないんだから關はない。

植木や。ではいただかうぢやありませんか。ご不用だと言つてゐらつしやるんだから。

母。さうね。ぢあいただきませう。

植木や廁の中の手洗鉢を持ち出し繩で荷ごしらへする。

植木や。そろそろ入らつしやる時間でせうな。

父。（時計を見る。）もう間もあるまいよ。車だから早いだらうよ。

母。（植木やに茶を出す。）おひとつおあがり。

植木や。ありがたうございます。（奥庭に向ひ。）ぢいやさんお茶をいただかないか。何を摘んでゐるのか。

ぢいや入り來る。いたどりとあざみの芽をもつてゐる。

植木や。（見て。）あざみの芽だな。

ぢいや。これも和えると中々うまいもんだよ。

植木や。さうださうだよ。奥さま、憚さまですがちよつときうすをかして下さい。

母。（茶と駄菓子をもち。）いま入れてあげます。

ぢいや。おそれ入ります。
父。（立ち上つて。）茶室に火を入れて來やうか。
母。わたし唯今入れますから。
父。わしが入れるよ。お茶の道具もすこし持つてゆかないか。おまへの好きな夏茶碗があるぜ。きつとあとでほしくなるやうなものだよ。
母。（思ひ切つて。）あれに置いてまゐります。おつかひくださいまし。
父。さうか、ぢあ、この夏はあれをつかつて見やう。
父。茶室の方へ去る。ぢいやと植木や、茶をすすつてゐる。
ぢいや。いい天氣だな。これに家の中に事が起らないでゐると、申分のない結構な春だがなあ。
植木や。全くだ。
母。けれども植繁さん。わたし何だかさつぱりした氣もちにもなつてゐるんですよ。ここを去るのはさびしいんだけれど、べつに變つた暮しをするのがね。
植木や。（凝乎と何か考へて。）けさも出がけにおやぢが奥さまにはまことに申しやうもない事をしたと言つて、ご挨拶に出るのがつらいと申しましてね。おまへからいいやうにお侘びしておいてくれと言ひ附かつたんです。どうか惡くおもはないで下さい。
母。（眼を瞠つて。）わたしが何んでそんな古いことなんか考へるものですか。さう言つてくださいな。そりやわたしこちらへはおやぢさんのお世話で上つたんですけれど、そんな二十年も前のことなんか、みんな忘れてしまつてゐるん

ですよ。却つてこちらへ来たんでわたしはしやは世になつたかも知れないくらゐですもの。さう言つて下さいね。そしてあちらへ越したらお茶でもおあがりに入らしつて下さいつてね。

植木や。ありがたうございます。おやぢはそればかり言ひ暮してゐるんです。すまないと申しましてね。まだ奥さまの前でございますが、まるでそのときは娘さんだつたと言つてゐました。

母。（笑つて。）そんな話はするものぢやありませんよ。さうね。二十のときだつたから、――まだ庭の中に藪があつた時分でしたよ。

植木や。藪があつたんですか。――さう言へばうろ覺えにおぼえてゐますね。

ちいや。塀のきわからずつと家をとりまいてゐたのさ。いい筍が出たつけな。奥さまはまるでちひさくて、あそこのほら薬石の上へのぼつてやつと干しものをなすつたくらゐだつたよ。

母。（椽へに跳つて。）そんなこともあつたね。ぢいやさんがまだ山へ旦那様と出かけてゐたころだから、――それにいつでもわたしが一人ぼつちでひるのうちはお留守居なんですもの、何んにもすることがなくてお庭の日あたりのいいところでよく髪なんか結つたものですよ。ほんとにあのころはよかつた。ただぼんやりと日を暮してゐるのがね。二十年なんていふとずゐぶん永いやうだけれど、かうして經つて見れば早いものですね。

ちいや。こちらで踏ン張つてゐたつて向ふでずんずん經つちまひますから……。

植木や。ほんとだ。向ふぢや容赦しないんだ。あの杏だつて若木の間はみずみずしい奴がどつさり實つたんだけれど、あんなにぼけると、まるで實の皮がかさかさしてくるからなあ。わけてこちらさまには古い木ばかりだ。

ちいや。ことしは少し接木をしなくちやならない。

植木や。さうだよ。しまひに木の蘂まで古ぼけてしまふから、いまのうちに生かしとくなら接木をした方がいいんだ。ぢいやさんのやうな年ぢやまるきり接木も間にあひはしない……（笑ふ。）

ぢいや。（まじめに。）全くだ。なにもかも腐る方題だから、――。

母。（戯談めいて佗しくいふ。）わたしなんかも接木はだめなほうね。こんなになつちや――（ふしぎな美しさがひらめく。）それにあんまり靜かに暮しすぎましたからね。

植木や。（媚びずに。正直にいふ。）奥さまなんか女のいやみらしい垢を拔いちまいましたからさつぱりしてようございますよ。

母。（解らずに。）それはどんなことになるの。

植木や。（笑ひながら。）どう言つたらいいかな、つまり世間にすれないやうな柔和なところが美しく見えるんですよ。ねえ、ぢいさん。

母。植繁さんはあひかはらず面白いことを言ふのね。あんまり永く家ん中にゐたから顏いろがわるくなつたといふ意味なんですかね。

植木や。いやそんなふうにお取りなすつちやあいけません。

ぢいや。植繁はへらずぐちを叩くね。

植木や。おれはほんとのことを言つてゐるんだよ。

母。（自分の頬に手をさわり。）いつそもつとおばあさんになつた方がいいと思つてゐるの。まだわたしは中途半端なんですからね。」

植木や。（何となく默つてゐる。）

ぢいや。（默つてゐる。）

　門の前に車の音がする。人聲も交つて騷々しくなる。

母。（やや固くなり。）みなさまが入らしつたやうね。

植木や。ええ。

母。（ぢいやに向ひ。）茶室の方へ知らして下さいな。

　ぢいや去る。母と植木や玄關の間へ出てゆく。父、ぢいやと連れ立つて出て來る。

父。ちやんと十二時だね。

　玄關の間へ出てゆく。ひと寄り話しごゑや挨拶を交す聲が起る。正、奧庭から出て來て玄關の間を覗いてゐる。—

—ぢいやと植木やと荷物を搬ぶ。

行稱。（洋服を着てゐる。）みんなが面白半分に乘るものですから、ずゐぶん込みましてね。しげ子など嘔氣がすると言ひ出してこまりました。

父。何しろ大へんなお祭さわぎだからな。しげ子かい。大きくなつたね。お祖父さんのところへお出で。（しげ子はためらはずに祖父のそばへ行く。頭をなでながら——。）この前に會つたときはまだこんなに、（手で存丈を計り。）小さかつたんだが、こんなに大きくなつたかな。これからおぢいさんと一しよなんだよ。

行稱。この前來たときはまだやつと歩んよができる時分だつたからな。

しげ子。でもわたしどこか此處のうちに覺えがありますわ。

行種。さうかね。しかし十年も前だからそれは氣のせいだよ。

しげ子。（あたりを見廻し。）あそこに茶室があるでせう。あれなんかちやんと覺えてゐるんですもの。

梳木や。（行李をかつきながら。）お嬢さまは覺えがいいんですよ、きつと。

行種。さうかも知れない。――おさとはどうした。

ちいや。（玄關から這入つて來て。）お荷物の片づけをしてゐらつしやいますよ。こちらの奥さまと――。

行種。（聞はず。）おはるさんとかい。おまへいいやうにしてやつてくれ。

ちいや。はい。（去る。）

父。（變にまぶしい顏をしてゐる。）

行種。（ずきずきと……）先刻こちらへ這入つて來たときに、しげ子くらゐの男の子がゐたのは誰ですか。……間、（正、姿を消してゐる。行種、氣がつく。）まだ見たこともない子ですが。

父。（當惑してあいまいに。）どこか近くの子だよ。あれが可愛がつてゐるものだからね。

行種。さうですか。

行種、庭や家の内部を鋭どく見まはす。

父、ひしひしと何ものかを感じる。

行種。もとの通りですね。わたしは何時でもここへ來て暮らすことばかり考へて、働いてゐたやうなものですよ。國の方に土地や家があるといふことは、ずゐぶん心丈夫なものですからね。

父。これからおまへの好きにしてくれた方がいいよ。けれどもわしだけは食はしてくれないとこまる。（わらふ。）

行種。（いきいきとして。）あなたくらゐはらくをさせてあげますよ。坐敷はあひかはらず落ち着けさうですね。（坐敷の方へ行く、父、尾いてゆく。）——あんまり明るすぎるくらゐだが、しかしここはわたしの部屋にしときますよ。

父。夏は日がささないから大へん涼しい部屋だよ。

しげ子ひとりぼんやりと疲れて立つてゐる。正、奥庭からこれを眺めてゐるがしげ子は知らない。

行種。（茶の間へもどつて。）何しろ家が古いからすこし普請をしなければならない——（ひとり言のやうに言つて。）此處なんぞ家がゆがんでゐる……。

父。ここの家はあと二十年くらゐは持つんだよ。ゆがんでゐてもそれなりで固まつてゐるんだ。いまどきの下手な大工の手にかけるよりそつとして置い方がいいからな。おまへなんぞは家のあたひはよく分るまいよ。

行種。（冷かな笑みを浮べ。）こんなに古ぼけてゐるんだから、雪でもどつと來た日にや一と耐りもないと思ひますよ。

父。（不愉快げに。）一昨年の雪だつてぴりつともしなかつたんだから、雪の心配はいらないよ。

行種。さうですかね。しかしわたしは手入れをしますよ。このままでは住みごこちがわるうござんすからね。

父。（うつちやるやうに。）どうでも好きにするさ。

おさとと母と入つて來る。

おさと。（行種に向ひ。）いろいろお世話になりましたよ。

母。いいえ、ちつとも氣がきかないものですから。

行種。おはるさんには未だ御挨拶もしませんでした——そののちはお變りもなく……こんどは又いろいろお騷がせしてしまひまして。

母。(美しく。) いいえね、へいぜいから手入れがとどかないものですから、お庭なんか荒れてお氣に入らないでせうが、これからどうぞよいやうになさいまし。おさとさんも入らつしやるやうですから。

行種。(尊大に。) 先刻からも父に言つてゐるんですが、家なんか、わけてここなんぞ古くなつてゐますから、これは普請をしないでは持たないだらうと思つてゐるんです。古い家には時々かなめや土臺のめんどうを見てやらなければなりませんからね。

母。(初めて氣がついたらしく。) 古いには古うございますけれど、まだこのままでもよございます。それにむかしの材木はしつかりしてゐますから。

父。(加勢を得たやうに。) 手入れをし出したらきりがないよ。しかしそのままにして置いたら、ちやんと持てるだけ持つてゐるものだ。釘一本でも柱にしがみついて壽命のくるまでは腐りも曲りもしないものだよ。

行種。(おほやうに笑つて。) その壽命がきてゐるんです。お父さんなんかかうして住んでゐてはわからないが、わたしのやうに外からやつてくるものには、それが分るんですよ。まアちよつと見てごらん、この茶の間なんかまるでどこでこたへてゐるか分らないくらゐ危ないものさ。

おさと。さうですね。雪でもふりましたら危なうございますね。(おさと、茶の間の柱にさわり見る。)

父。(しづかに。) おまへは着く早々家のことばかり言ふが、古いものほど念入りにつくられてゐるんだよ。おまへには煉瓦なんかで積んだ異人屋敷みたいなものが好きなんだらうよ。そんなに家へはいるなり苦情をいふものぢやないんだ。

行種。べつに苦情はいひはしないんです。唯、あんまり古ぼけてゐるからそれをどうして持たせるかといふことを、お

話してゐるだけですよ。

父。(默つて怒つてゐる。)

おさと。(話頭を換えやうとして。)　わたしかうして來てみますと、樹なんか多くてせいせいするくらゐですわ。そんな家のことなんかよりよ程ようございますね。(母を見て。)　これまでお手入れはたいへんでしたらうね。

母。もう無性ばかりしてゐるものですから、ずゐぶん汚してしまひました。さあ、お庭へ行つて見てゐらつしやい。(しげ子の手をとり。)　おばさんがあんないをしてあげますよ。

しげ子。ええ、お母さま、行つてもいいんですか。

おさと。ぢあ、お母さまも一しよにまゐりませう。せつかくおばさまがああ言つてくださるんですから。——わたし、ちよつと行つてまゐります。

行種。ずゐぶん廣いよ。

三人、奥庭へ去る。父ぢつと床の前に坐つてゐる。行種たばこをふかしながら暫らく無言でゐる。行種、何か言ひたげに折々父の方を顧みてゐる。

行種。ぢいやはずつとまだ置いておくんですか。もうかなり老齢のやうぢやないんですか。

父。ぢいやはまだつかつてゐたいんだよ。

行種。(躊躇らひ。)　しかし最つと若いものの方が用にたつぢやないですか。ああしてゐるのを見ると、やつと歩いてゐるやうですね。(氣のないふうに。)　でもお父さんにご用がおありなら仕方がありませんが……。

父。(ぶつきら棒に。)　わしには年寄りの話し對手がいるからな。おまへのやうにすぐ家の中の整理をするのはまだ早

だ早いよ。

行種。（何となく白けて。）べつに整理するわけぢやないんですが……しかし、話し對手には、あの、おはるさんが入らつしやるぢやないんですか。（何か思はくありげに言ふ。）

父。（怒りを隱して、）あれは今日こちらをおまへだちに引繼ぎをして立つことになつてゐるんだ。おまへだちから言はれない前にね。

行種。さうですか。入らつしやつてもいいぢやありませんか。わたしは別にそのことに就いて何も言つたことはないと思つてゐるんですが……

父。どつちみちあれは自分から身をひいてゆくんだから……それにお前だちの方から苦情は出ないうちと思つてね。それが一番穩當なやり方だからな。

行種。（ふくれて。）お父さんは少し惡考へがすぎますね。わたしたちはまだ何もおはるさんのことで、口をきいたこともないのに、妙なふうにわる考へをなさいますね。わたしの考へでは家の中の取締りをしていただいたりしたいと思つてゐたんですよ。それにお父さんもさびしいだらうと考へましてね。

父。（悲しく昂奮してゐる。）口さきではどうでもいへるものだよ。この間の手紙には自分は靜かにくらしたいから在來の人をみんなどうにかしたいと書いてよこしたぢやないか。わしはその通りにしないつもりだつたが、あれは自分から行先きをこしらへて、笑つて出てゆくことに決めてゐるんだ。お座なりのことはいまになつてはお互ひに言はない方がいいね。

行種。お父さんの氣はだいぶ曲つてゐますね。それではわたしは何も言はないことにしますよ。手紙でべつにおはるさ

んのことを諷刺すつたわけぢやないんです。そんな必要はありませんからね。

父。（むしやくしやして。）わしはおまへが來てから、だいぶ氣短かになつたやうな氣がする。つまらないことは言ひ出さないでくれ。默つてこの家をわたせばいいぢやないか。

行種。（落着いて。）しかしお父さんはひとりで怒つてゐらつしやるんですよ。僕が何も言ひ出さない前に、先廻りをして邪推してゐるんですからね。

父。わしはむかしからおまへだちと氣が合はないんだよ。それだけだよ。

行種。さうですか。

父、席を立つて茶室の方へゆく。庭にゐた三人かへつて來る。

おさと。お庭へ入らつしやいましよ。そりや清々していい氣もちだから――それに、すつかり杏やすももが咲きころつてゐてきれいですよ。

行種。さうかい。見てくることにしようかな。

しげ子。ずつと奥へ行くと既う誰がゐるんだか分らないくらゐですわ。ほんとに廣いんですもの。

母。（柔しく。）これからお遊びになるのに都合がよござんすね。

おさと。からだのためにもよいと思ひますの。それに野菜だつて何だつて作れるやうでございますからね。これまでなぜお作りにならなかつたんですか。

母。（どぎまぎして。）つい無性なものでございますから。

行種。これからわたしが作つてやるよ。下らない樹なんか伐つてしまつてね。あれぢや陰地ばかりで仕方があるまい

よ。第一陰の地面といふものは惡いものだ。

母。きつといゝやうになりませうね。いろいろお考へになつてゐらつしやゐますから。

おさと。宅はなんでも一年ぢゆう毀したり建てたりすることが好なほうでございますからね。

母。(微笑する。)

行種。それからつかんことをお尋ねするやうですが、こちらをお發ちになるやうですね。(狡猾に。) そんなことをなさらなくとも、ずつと入らしつて父の世話をやいていたゞきたいんですが、どうしてそんなに急にお立ちになることを決めたんです。父からきいて今もびつくりしたくらゐなんです。

母。(年甲斐もなく赧くなる。) すこしからだを休めたいともぞんじましておねがひしたんでございます。べつに深い意味があるんぢやないんです。わるくおもはないでくださいまし。

行種。これはわたしからおねがひするんですが、もうしばらくいらつしつていたゞけないでせうか。(妻に向ひ。) そして貰つた方がみんな都合がいいんだがな。

母。いいえ、わたしもうよそさまを借りるやうに決めてゐますし、それにお許しも出たやうでございますから身勝手でございますが……こんどはかへらしていただきます。

おさと。(わざとらしく。) わたくしどもが參つたんで行らつしやるんですと、なんだかわるいことのやうに思はれてならないんでございます。わたくしどもはゐらしつてくださいますとほんとに心丈夫なんですけれど

母。(けんそんに。) いいえ、決してそんな譯ぢあございません。以前から考へてゐたことなんですからどうぞわるく思召さないでください。

行穂。（この話から身を引いて。）　庭を見てくるよ。

　行穂、庭の方へ去る。おさと座敷の方へ行く。

おさと。ちよつと着がへをいたしますから。しげ子も入らつしやい。

しげ子。ええ。

　母にあいさつしてしげ子去る。植木や玄關から出てくる。

植木や。臺所の方のものはともかく繩だけといておきましたよ。中はこちらでさはるのもなんですから。

母。ごくらうさま。

ちいや。（荷受の紙片を示す。）　これに印判がいるとあちらで申してゐますが。

母。あちらでおたづねしてください。お座敷にいらつしやるから。

　ちいや、座敷の襖をあけやうとする。

おさと。（鋭いヒステリツクな聲で。）　いま着がへをしてゐるんですよ。ちよつと待つて下さい。

ちいや。はい。

　ちいや、植木や、堅くなる。何となく威壓を感じてゐる。間もなくおさと出てくる。

ちいや。（恐縮して。）　どうも濟みません。これに印判をおねがひしたいんでございます。

おさと。（やや靜まり。）　さう、着がへをしてゐましたものだから。

　ちいや、おさとから荷受の紙片を受取つて去る。

植木や。お勝手のものは台所へ搬んでおきました。

おさと。さう、どうもいろいろ。

母。それから少し勝手の方をお引繼ぎしたいんでございますが。

おさと。どうぞおねがひいたします。ではご一緒にまゐりませう。

母とおさと、玄關口より台所へと去りながら、玄關口でいふ。

おさと。この梯はいつでもここにおかけになつてゐるんですか。大へんな埃りでございますね。

母。むかしから左うしてかけてあるんださうです。それからここから二階へあがるんですが、物置同樣にしてゐるものですから……どうぞ上履（うはばき）をおはきなさいまし。よごれてゐますから。

姿、見えずなる。二階へあがる音きこゆ。

おさと。たいへん暗うございますね。雨戸がしまつて居りますね。

母。いつも開けたことがないんですの。古いがらくたばかり這入つてゐて滅多に見たこともないんでございます。

行穂。お母さんは？——。

しげ子。（姿は見えず。）台所の方へいらつしやいました。おばさんが品物のある所をあんないしてくださるんですて。

話しごゑ聞えずなる、……行穂、奥庭から這入つてくる。座敷の方を見て聲をかける。

行穂。さうか。——着がへをするかな。

行穂、座敷へ這入る。姿見えずに。

しげ子。（敏感に。）このおうちに男の子がゐるやうね。先刻お庭へ出たでせう。あのとき裏門のところからいきなり這入つて來て、わたしたちを見て、あはてて又裏門から出て行つたのよ。わたしと同じくらゐの子よ。わたし、こ

このうちの子ぢやないか知らと思つたの。

行種。(考へながら……。) おばさんが何か言つたかね。

しげ子。いいえ、何んにも。けどお母さんがね。あれはどなたですとおたづねになつたら、あの子つて誰のことですかつて知らなかつたやうよ。だからお母さんがね、いま庭から出て行つた子供のことだと言つたの。おばさんは氣がつかなかつたやうよ。

行種。おばさんはへんな顔をしてゐただらう。

しげ子。ええ、ずゐぶんへんな顔をなすつてゐらしつた。あの子、ほんとうは誰れなの。

行種。知らないね。

しげ子。わたしたちが着いたときにも玄關先きにゐたのよ。すぐ見えなくなつたんですけれど……。

行種。どこか近所の子供だらう。

行種、着がへをすまして出てくる。同時に茶室の方から庭づたひにおさとと母とが出て來る。

母。いつも大概茶室にゐらつしやるんです。あそこが大へん氣に入つてゐるやうですから。

おさと。いろいろ有がたうございました。でもずゐぶん古いお家ですねお二階なんぞもう一ト間くらゐできさうですわ。

母。ええ。

二人、茶の間の敷石の上に立つ。

おさと。すつかりあんないしていただきましたの。

行種。お父さんは?。

母。茶室にゐらつしやいます。

おさと。何かあなたが言つたんぢやないんですか。こちらへ入らしやらないといふと、わしはこゝが一等氣に合つてゐるんだよと素氣なくお仰いましたよ。

行種。べつに何にも言ひはしないよ。どうしたんだらう。

母。（不安げな氣もちで。）お茶でも立てゝゐらつしやるんでせう。わたしちよいと失禮いたします。もうそろそろお暇したいと思ひますから。

行種。まだいゝぢやありませんか。

母。少し荷物もまだ殘つてゐるものですから。

おさと。では又あとで……。

母、茶室の方で父と何か話しながら奥の間へ行く。父、出てくる。

行種。わたしはあそこへ手頃な家を二軒ばかり建てたいんだ。あんな杏なんか伐つてしまつてね。

おさと。その方がようございますね。お父さんが入らつしやいました。

父。おまへはせいぜい庭でもつぶして貸家でも建てることを考へた方がいいよ。

行種。それは話だけなんですよ。まだ建てるとも建てないとも決つたわけぢやないんです。

父。（昂奮してゐる。）だが、わしの生きてゐる間は、庭だけはそつとしておいて貰ひたいよ。わしは庭の中でこれまで暮してきたやうなものだからね。杏やすももの木はみんなわしの茶飲み友だちだつたんだからね。わしはおれらが片手で持てる時分から育てたんだから、どの枝は何年かかつてどれだけ太つたかといふことをちやんと知つてゐる

んだ。だから當分、當分だよ。それもわしのゐる間はおまへの手にふれて貰ひたくないのだ。

行種。お父さんのやうに大切にしてゐたら毛蟲に食はれるくらゐが、落ちですよ。みんな根元がくさりかけてゐて、蟻の巣だらけで漸つと生きてゐるやうな態ぢやありませんか。

父。根元はくさりかけてゐてもしんはぎりぎりに生きてゐるんだ。おまへだちの生涯が二度つづいてもあれは枯れはせんよ。わしは毎日あれを見てくらして來たんだから、あれらがどんなにまだこたへるかを知つてゐるんだ。

行種。（興もなく。）さうですか。わたしは別に伐るとも言ひはしないのにあなたは一人で怒つてゐるのだ。

父。（異常に亂れた心もちの錯雜したありさまで。）おまへが庭へ出ると、杏やすももや梨などが、みんな嫌がつてふるへてゐるやうだよ。あんなものでも分るところはちやんと解つてゐるらしく、しかもおまへが地面の工合や建ものののことを考へてゐる間に、あられは地面の下でこまかい根をくみ合せてぶるぶるやつてゐるんだ。人間にはときとしてそれが分りかねるが、わしのやうにあれらを植え付けまでしたものには能くわかるんだよ。

行種。（昂奮して。）お父さんはどうかしてゐますね。あんな杏やすももに神經なぞあつてたまるものですか。くだらないこつた。

父。（烈しく。）古い杏の根元のくさりかけたところを見なさい、あかいぼろぼろな土のやうなものが流れてゐる。あれは木の言はゞ血のやうなものだ。あれは老ひぼけて疲れてゐる證據なんだ。おまへにはそんなものはてんで眼につかないだらう。

行種。くされば赭くなるに定つてゐますよ。わたしは古い木はきらひです。

おさと。（横合から。）いいかげんになさいましよ。失禮ですから。

行種。お父さんはむかしから分らないところのあるひとだよ。わたしはべつにおねがひしますつてこちらへ來たわけぢやないんだ。

父。（みじめに逆上して。）おまへたちに何が分るのだ。おまへたちに分るものは新しい家とか、地面の上べだけだ。地面の中のことや樹のことなんぞ夢にだつて分つてゐないのだ。わしはここで五十九年もくらした。そしてどこに何が生えてゐるか、それが何年かかつてけふまで育つて來たかを毎日見てくらしたのだ。

行種。（怒つて。）そんなことが今の世に何になるものですか。百姓だつてそんなことは知つてゐるんですよ。

ぢいや、茶室から鞄一つ、植木や夜具の包みを背負つて、玄關口へ消える　玄關口に俥のつく音がする。

父、百姓の知つてゐることは育てて刈ることだけだよ。育ててばかりゐて刈ることをしないわしたちには、百姓なんかの知らないおじひがこもつてゐるんだ。これはおまへたちにどんなにしつこく言つたつて解りはしないがね。まだ三十代の人間になにがわかるものか。

行種。（投げ出すやうに。）ぢや分らないことにしておきませう。もうこんな古くさい話はこりこりだ。

父。（氣がついて玄關口をじつと見ながら……）いまに分る時があるよ。

おさと。あのとほり氣短かなものですから、どうぞお腹立ちのないやうにしてくださいな。

父。（默つてゐる。）

行種。わたしはこんな古い家なんかをあてにして來たわけぢやないんだ。唯、國の方で住みたいだけで來たんですよ。こんなにお父さんからがみがみ言はれるくらゐなら來なければよいと思ふんだ。

父。（默つてゐる）

ぢいや、這入りかけ父の方へ近づく。低いこゑでいふ。

ぢいや。ただいま、お發ちになります。奥さまでは默つてゐてくれるやうにとお仰るんでございますが、それも何んですからと存じまして……。

父。(嗄れたこゑで。)さうか、そして荷物はみんな手落ちなく搬んでくれたのか。

ぢいや。ええ。みんなすつかり濟みましてございます。ぢあ、またあとで……。

ぢいや、あたふたと去る。父、何となく間くなつてすぐ出られないやうな氣もちで立つてゐる。

おさと。わたしお見送りいたしますわ。しげ子、おばさんが、お立ちだから一しよにゐらつしやい。

しげ子。ええ、いますぐよ。

おさと。いそいでゐらつしやい。

二人、玄關口へ出てゆく。父、悲しげに立つてゐる。

行種。(默つて頑なに座つてゐる。)

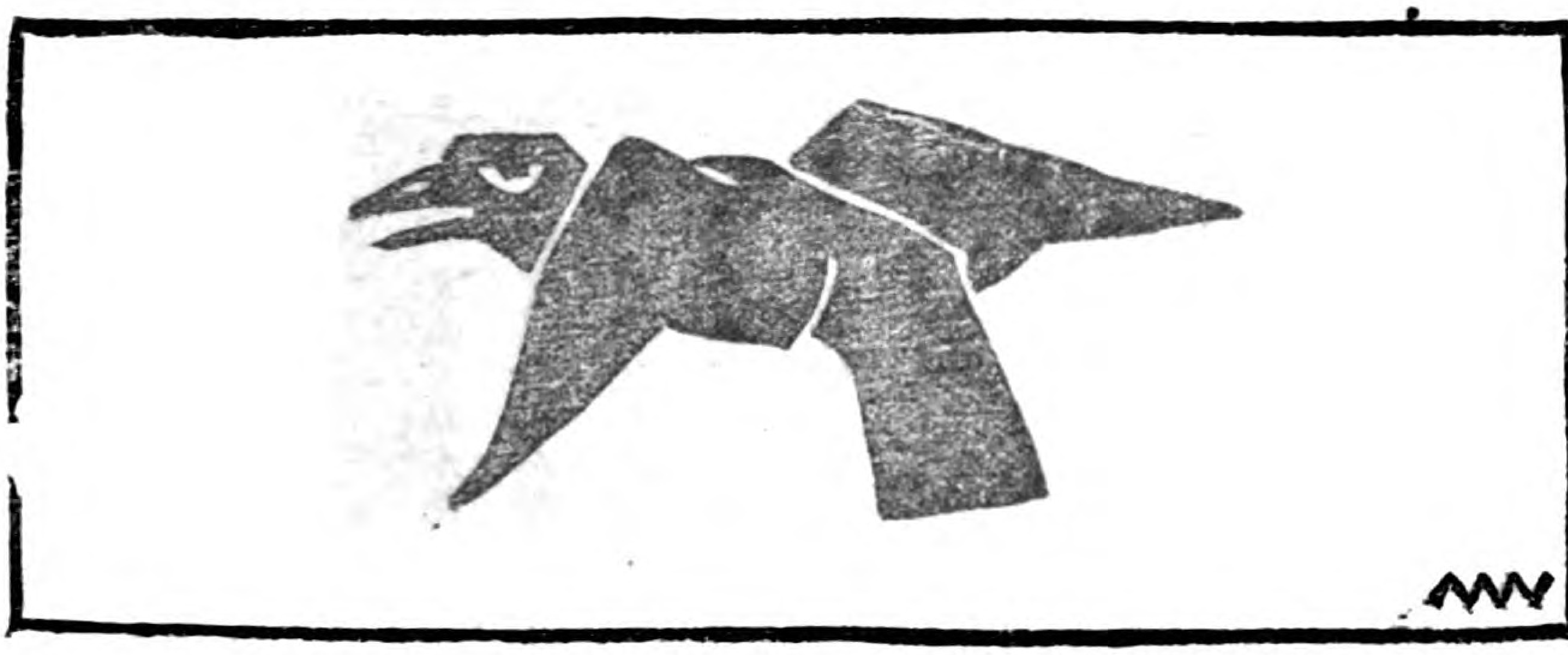
玄關さきでみんなあいさつをする聲が一と渡りつづく。

しげ子。(美しい低いこゑで。)さよなら。

母。(泪ぐんだこゑで。)またお會ひしませうね。みなさん、さよなら。

俥のわだちの音がする。間もなく門のそとへ消えてしまふ。父、默つて茶室の方へちからなく歩いてゆく。日のかげ茶室の障子に樹と花とをうごかしてゐる……。

——幕。



影と影

正宗白鳥

街上

白木屋前の雜沓の街衢だ。

電車が、車掌臺へまでも溢れてゐる客を乘せて通つてゐる。何臺もの自働車が詰めかけてゐる。荷馬車が留まつてる。自轉車が留まつてゐる。

止れ、進めの文字が、濁つた空氣のなかに廻轉した。目まぐるしい。そして、生命の危險が感ぜられた。

そこを横切らうとして、目を八方へくばつて躊躇してゐるうちに、彼れは、今まで考へ續けてゐたことを忘れてしまつた。

やうやく隙間を見つけて線路を踏越えてから、ふと切れた思想の絲をつなぎ合せやうとしたが、それは無効であつた。

「大切なことらしかつたのに」

彼れは痒い所に手の屆かないもどかしさを感じてゐたが、ある呉服屋の店頭の、色つぽいメリンスの布片を見ると、ふと思出して「何だ詰らない」と、獨笑ひを洩らした。

彼れは、この羨ましい街上で、寒中に甲斐の國御嶽の峽谷へ獨りで遊覽に行つた時のことを思出してゐたのであつた。その時ある茶店へ寄つて焚火に當つて休息してゐると、日記帳らしいものが側にあつたので、何氣なく開けて見た。

「今日は××の用事で甲府へ行く。途中で、若い婦人が母親らしき老女と連立つて行くのに追付いた。衣服を端折つた彼女の、メリンスの腰卷の裾さばきの美しさに、わが心恍惚たり。われは戀の焔に燃えたり。……直ちに結婚を申込まんと思へり」

「何だ詰らない、こんなことだつたのか」

彼れは、それ／＼に飾られた店から店を見ながら京橋の方へ向つて歩いてゐたが、淋しかつた山國の冬景色が頻りに目の前にちらついた。そゝり立つた奇岩怪石や、枯草の中を潜つてゐる雪解水のかすかな泝などが、彼れの耳目に觸れてゐた。

彼れが銀座のあるカツフェへ寄つて足を休めたのは一時間も經つてからであつた。彼れは、コヽアを飲んだり西洋菓子を食つたりしてゐたが、足の疲れのほかに、心の疲れをも著るしく感じてゐた。腦髓を鋸で切られてゐるやうだつたり、頭の上に重石を載せられてゐるやうだつたりした。「この殘酷な鋸や重石がおれの身にばかり向けられるのはどうしたものだ」と、彼れはおのれに向つて質問したが、この頃こんな六ケしい疑問をいろ／＼に出すたびに、浮んで來る答へがいつも一樣なのであつた。

「一つの重大事件をつくつてそれに熱中しろ。頭の中でのみさまぐ\な思ひが鬱積してゐるから、その重荷に堪へられなくなるのだ」

「その通りだ」彼れは答へに對して首付いた。

彼れは、山國の峽谷を、獨りで歩いてゐる時には、都會のカツフヱなどの光景を今其處に身を置いてゐる如くに描き出し、カツフヱなどにゐる時には、田舍の淋しい光景を丹念に描き出してゐるやうな癖があつた。さういふ無用な努力を止して、一つの重大事件に熱中しようか。雜沓した電車の交叉點を突拔ける時のやうな心構へを、一つの實行に現はした方がいゝのではあるまいかと、彼れはいつもの答へに動かされては考へた。

「おれがやつゝける重大事件の目標はやはりあれだな」と、彼れはわれ知らず興奮して胸を轟かすとゝもに、あたりを見廻した。側の食卓では、數人の青年が、昨夕觀た伊太利オペラの噂をしてゐた。

「春の夜に音樂を聽いたり踊りを見たりするのは面白いことになつてるんだな」と、彼れは青年同士の話に耳を傾けて、自分の重大事件を暫く忘れてゐたが、彼等はオペラの事から話を轉じて、社會組織の不合理やその改革の必要を、互ひに熱烈な語調で論じだした。近年雜誌の上で讀み、知人の口からも聞かされてゐることなので、別段珍らしくはなかつたのだが、今日はその改革説の論鋒が異様な鋭さをもつて彼れの胸に響いた。

「さうしたら、世の中が樂園になると云ふのか」

彼れは、樂園の正體を思ひ浮べることは出來なかつたが、自分の頭腦や身體がこれつきりで、行留りになつてしまふとは思つてゐなかつた。この壁を突破つたなら、向うに廣いいゝ世界が擴がつてゐるやうに思はれてゐた。

が、彼れの狙つてゐる重大事件は、社會の改革でも革命でもなかつた。……彼れの師父であつて、精神上にも物質上

にも彼れの過去を支配して來た乙村茂通をこの世に無いものにすることであつた。が、さう思ふと直ぐに、神の如き威力と慈愛とをもつてゐる乙村の老顔が眼前に現はれて、全身に戰慄を覺えた。

「兩親に死別れて宿無しの浮浪人になつてゐた時のおれを拾取つて、饑え凍えをさせず人並みの教育を授けて、一本立ちで口過ぎの出來るやうにして與れた乙村だ。縋るにも足をそちらへ向けては寢られない譯ぢやないか。」

「……それは月並の理窟だ。仕來りの人情だ。おれは宿無しの浮浪人で、洋食屋の埃箱の喰餘しの肉でもあさつて、露命をつないでゐた方が、もつと自由で、おれの頭腦ももつと手強くつて晴々としてゐたかも知れない。……それはどちらでもいゝとして、現在、あの人の投げた網の中を飛出ることも出來なくなつてゐる。おれに見込みがあると昔云つてゐたが、よくおれを自分の型に仕込んだものだ。××よ。それはいけない、かうしろと云はれゝば、おれは盲目的にさうしなければならなくなつてゐる。……そして、あの人はおれの腹の底まで見抜いてゐるやうだから溜らない。末娘のます子さんにおれが思ひを掛けてゐるのに氣づいて、穩かに警戒して、おれには、あの人から見ておれ相應だと思はれる現在の女房を見つけて與れた。謹直で女戀しかつたおれは喜んで頂戴した。……こんなことを云つたつて果しがないが、現に何、おれは、常住座臥に監視されてゐるあの人が世界から消えてしまつたら、おれの目は冴々して來て、おれの頭上の重石も取除けられてしまひさうに思はれるんだ」

「そんな馬鹿なことがあるものか。十億萬人の健全な人間に訊いて見るがいゝ。此處を出ると、お前の足はまづ病院へ向ふのが身の爲めなのだ。第一お前の知慧と力とで何であの人に刃向へるものか」

「おれは、あの人に教はつたすべてのものを逆に利用するのだ」

がう思ふとゝもに、彼れは、神殿に忍込んで御神體に手を觸れた冒瀆が、足が竦み手が掉れたと同じやうな氣持になつた。

やがて、カツフエを出ると、街上は夕暮れの賑ひを見せてゐた。彼れは、目に觸れる勤め人らしい人間の顏色や足取りに、一日の疲勞を察した。そのなかにまじつて、食麵麭やビスケツトなどを、家庭への土産として買つて、おとなしく家へ歸りかけたが、ある呉服屋の店頭の廉賣の小切れを見てゐた一人の女の横顏を見ると驚いた。それは、乙村の長女で、丸谷といふ學校教師の家に緣付いて、すでに子供の二三人も生んでゐるみち子であつた。一度行過ぎてからまた引返して、その女の側へ寄つて、「ヤア」と聲を掛けると、みち子は懷こい笑顏を見せて、店頭を離れて、「どちらへいらしつたの?」

二人は並んで歩いた。

「いゝ所でお目に掛つた。ちよつとあなたにお話したいことがあるのよ。これからわたしの家へ寄つて下さらない?」

「今夜はいけません。打遣つとけない用事があるんですから。……お話は此處で承る譯には行きませんか」

「さうですね。……大したお話ぢやないんですけれど」彼女は彼れの顏に注意を拂つて、「先日實家の父があなたの事を心配して、わたしからさう申上げて呉れと云つてゐましたの。」

「へえ、先生が?」彼れはドキツとした。

「あなたはこの頃はお勤めにいらつしやらないんですつてね。それによく家をお明けになるぢやありませんか。以前のあなたにも似合はない、どうしたんですね」

「嘘です。……家内がそんなことを云つたんですか。彼奴大嘘吐きです」

「そんなひどいこと仰有るもんぢやないわ。……父は奥さんから聞いたとは云つてゐませんでしたよ」

「ぢや、誰れの口から先生のお耳に入つたんでせう。……まさか先生が獨りでさうお極めになつた譯ぢやないでせうね」

「どうですか。父はあなたの事と云へば、何でもよく知つてゐますのよ」

「しかし、私は一月の末に一週間ばかり甲州から信州の方へ雪見に行つたゞけで、不斷はそんなに家を明けやしませんよ。あなたから先生へさう仰有つて下さいな」

「でも、父にそんな言譯なぞなさらなくつてもいゝのよ。父は、あなたが御自分の身をあやまるやうなことをなさる氣遣ひはないと信じてゐるんですから」

「ぢや、先生は私のために何を心配なさるんでせう」

「それはこんな所では申上げられませんわ。……どうしても今日はわたしの家へ寄つて下さる譯に行かないんですか」

「人に聞かれて惡い、秘密を要することなら、あなたのお宅よりも、こんな雜沓した所で承る方がいゝぢやありませんか。私達のあとを隨けて内所話の立聞きをする人はないんですから」

彼れはさう云つて周圍を見廻した。顔は平凡で身装も質素な彼れと彼女とに目を留めてゐるものはなかつた。

「たとへ誰れにも後を隨けられてゐなくつても、歩いてゐちやしみ〴〵お話が出來ないぢやありませんか」

「どうしてです？私はお宅へ上つて窮屈に坐つてる時よりも、かうして道を歩いてる時の方が、自由に話が出來て、あなたの仰有る事も身を入れて聞いてゐられさうに思はれますよ」

「わたしの家ではなぜ窮屈にお思ひになるの？」

「いや、あなたのお家ばかりぢやありません。この頃は自分の家にゐてさへ、私は窮屈に思はれてならなくなつたのです」

「それは變ですわね。それで、しよつちう外を歩いてゐらつしやるの？」

彼女は戯談らしく云つたが、彼れは眞面目で、

「まあ、さうです」と答へた。

「なぜ御自分の家を窮屈にお思ひになるの？一日のお勤めをすましてお歸りになつて、心でも手足でものび〱とお伸しになるための家庭ぢやありませんか。奥さんとの間にこの頃何か氣まづいことでもおありになるの？」

「それも少しはあるでせうがね」

「わたし、そのことであなたにゆつくり承りたいと思つてゐるんです」

「そのことで？……おや、家内がいゝ加減なつくり事を先生やあなたに申上げたんですね。みんな嘘です」

「出拔けにそんな大きな聲をお出しになつて見つともないぢやありませんか。あなたも今日はどうかしてらつしやるわね。わたしがまだ何も云はないさきに、奥さんを嘘吐きだなんて……」

「惡ければ私が謝りますが、家内があなた方に御訴訟したことは、私が被告となつて承らなくつてもよろしいんです。自分の家でも窮屈だと私が云つたのは、家内との間が氣まづいためばかりぢやありません。自分の家にゐると、先祖代々の御神靈が眼玉を揃へて私を監督してゐるやうに思はれて爲様がないんですよ」

「眞顔で、そんな呆けたことを云つてらつしやる。今住んでらつしやるお家は借家ぢやありませんか。それにあなたは御先祖のお位牌さへ祭つてゐらつしやりやしないでせうのに」

「ところが、位牌もないし寫眞もないのに、關ヶ原の落武者以來の祖先の亡靈どもが、此處がおれ達の落着き場所だ。おれ達の末孫の家だといひさうに、ずらりと面を並べてゐるんですからね」

「隨分氣味の惡いお家なのね」

「なに。氣味の惡いつてことはないんですが、窮屈で困るんです。あなたのお宅には御先祖がのさばり出りやしないんでせうね」

「わたしの家では老母が、お佛壇を大切にして忌日命日には忘れないで追善供養をしてゐますから、御先祖も安心してゐて、人騒がせに佛壇の外へ出たりなんぞしないんでせう。あなたも佛壇をお貰ひになつて、御先祖をそのなかへ祭込んでおしまひになるといゝんですよ」

「そんな大人しい御先祖ならいゝんですがね。黴の生へた面をして私なぞの生血を吸ひに出て來るんだからたまらない」

彼れの語調があまりに眞面目なので、彼女は戲談としての受答へは出來なくなつた。そして、「わたし此處でお別れしますから、近いうちに一度いらつしやいましな」と云つて、ひとりで停留所の方へ行つた。

彼れは無用な饒舌を悔いた。あの女の口から乙村はじめ皆んなに、冷かし半分の吹聽がされるだらうと心がゝりがした。「これだから知つた人間に會ふといけないのだ。おれといふ人間の頭腦の中を覗かれるからいけないのだ」

それから、彼れは一時間ばかり、何處かしら歩いて家へ歸つた。頭の中で、旅行先で見聞した風景や人物を思出したり、殘虐な計劃に心を沒したりしてゐたのだが、電車や自働車に轢殺されもしなければ、警官に捕縛されもしない

で、無事に家庭の閾をまたいだ。

大勢の老若男女が絶え間なく動いてゐる中を、何の障礙もなしに通抜けて、自分の家の前へ何時かしら來てゐたことを、彼れは不思議な事として考へた。

その夜

その夜、晩餐をすましたあとで、彼れと彼れの妻とが對話をした。

「あなたは大變疲れてゐらつしやるやうね」

「さうかも知れない。また旅行でもして來るかな」

「御自分一人で勝手に旅行なさるのもいゝでせうけれど、旅費はどうなさるの？」

「さうだなあ」

「それに、社の方だつて、さうたび〳〵休暇は呉れないでせう。……あなたは昨日も今日も社へ出勤なすつたの？ 何だか怪しいわね」

「疑ぐつてるのか、先日の旅行だつて、おれの方から繪葉書の一枚も出さなかつたので、お前はおれは東京の外へ出て行つたかどうかさへ疑つてたが、おれもさう信用がなくなつちや爲様がないね」

「旅から音信がなかつたばかりぢやない、あなたの旅行の話が辻褄が合はないんですもの」

「それで乙村へ訴へに行つたのかい。おれ一人が面白いことの有りつたけをしてゐるやうに思つて、乙村に愚痴をこぼしたのだらう」

「ぢや、あなたは今日乙村さんへお寄りになつたんぢやないの？」

「彼家へ寄つて小言を喰つたと云つたら、お前は喜ぶんだらうな。乙村の大將も聖人とか人格者とか云ふ者かも知らないが、お前や世間の人とさう違やしないよ。おれが旅行するのを娯樂のためだと思つてる。それで、家の生活をかまはないで、借金までして旅費をつくつて出掛けるのを不都合だと思つてる。おれがカツフエへ行つたり、藝者の呼べる料理屋なんかへ行つたり、たまに芝居を觀に行つたりすることさへ、乙村の親爺は、おれが不都合な遊蕩に耽つてると思つてる。だけど、おれにはカツフエも藝者遊びも旅行も、棺の前のお通夜や教會の禮拜や、會社の勤めと同じことなんぢやないか。吉原での讚遊びも會社での算盤いじりも、おれには同じ程度の苦痛なんだ。肉體的の快樂を追つて狂奔するのは、不道徳だ、人間の墮落だと、乙村の大將からよく教はつて來たものだが、それが本當なら、おれなぞは不道徳や墮落から免疫されてるやうなものだ。あの爺さん、他人の藝者遊びを氣にして墮落呼ばゝりするのは、自分で藝者なんかに對して淫らな興味を有つてるためなんだよ。………」

「勝手な理屈をつけたつて駄目よ。それで、あなたは乙村さんへ寄つたんですか」

「寄るものか。………あの家へは寄りやしないが、途中でみち子さんに行會つたのだ」

「みち子さんに？………それで分りましたよ。みち子さんが云つたんですね。わたしが乙村さんのお家へ行つてあなたの事を告口してゐたつて………あの人は、以前から、わたし達の家庭にいけないことがあると、みんなわたしの所爲にするんだからひどいわ。あんないゝ兩親に、なぜあんな意地の惡い女が生れたんでせう」

「いや、あの人は親によく似てるよ。顏付が年を取るほど母親に似て來るね。おれがはじめて乙村の家へ引取られた時分に、あの人のお母さんは、今のあの人くらゐな年齢だつたが、丁度あんな顏してゐた。聲も似てゐる。それにいろんな

ことが似てゐる。儉しくつて服裝も身分不相應にかまはないで、物の遣取りの義理をよくして、そのかはり理窟つぽかつた。他所の家へ行つても、部屋の隅の埃なんかによく氣がついたんだよ。みち子さんだつてさうだらう」

「だからわたし、あの人きらひよ」

「嫌ひなら遠慮なく嫌ふがいゝ。しかし、お前も次第にお母さんに似て來るんだらうな」

「だからどう？」

「おれは、この頃お前の前にゐると、お前のお母さんの前にゐるやうな氣がして、爲樣がないんだよ」

「何をとぼけたこと云つてるの？　わたしまだそんなお婆さんぢやないことよ」

「みち子さんよりは十も若いんだからな、……そんなに年齡が若くつて氣が若くつて、容色がいゝんだから、乙村の爺さんに愚痴をこぼしたりなんかしなくつてもいゝぢやないか。あの人がおれ達二人を結びつけたにしたつて、それで、あの人自身は何時までもおれの心を支配することが出來る氣でゐるにしたつて、おれの方でもう心變りしてるんだから駄目だよ。……お前も性の合はないおれには疾つくから飽いてるんだらうのに、飽いたことにすまいと無理に努力する必要はないぢやないか」

「ぢや、お互ひに早く別れた方がいゝと仰有るの？」

「おれは今お前の身になつてさう云つたゞけなのだ。おれ自身はどちらでもいゝやうなものだ。……放蕩の味ひの分らない人間には家庭の味ひも分らないのだらう」

「それは逆さぢやないの？　放蕩する人には家庭の純潔な樂みは分らないんですよ」

「どちらにしたつて相手は女だ。どちらにしたつて相手に心を迷はされるやうでなければ本當の樂みも味ひも分りや

すまい。……お前もおれから得られないものを求めたつて駄目だよ」

「だから、お互ひに早く別れた方がいゝと仰有るの？」

が、彼れの方から率直に云つても、かういふ話は簡單に終らなかつた。彼れの妻は女らしい拘泥を現はして、彼れに突つかゝつた。一しきり騷立つた後では、彼女の口も心も疲れたらしく、やがて、家の中には平生よりも靜寂な空氣が漂つたが、彼れは横になつたまゝ、近所の物音や人聲に耳を留めてゐた。呼鈴の鳴る音や、水のこぼれる音や、笑聲などが聞えて來たが、それが初春の夜のやうにのどかで、頭に重石を置かれてゐるやうに疲れてゐる彼れを睡眠に誘つた。宵のうちのトロ〳〵とした假睡は、彼れに取つては、苦娑婆の中で、たまに惠まれる幸福であつた。その假睡の中には、先祖の亡靈も妻の顏も、煩つたい乙村老人の姿も入つて來なかつた。

暫くして寒さを覺えて目を醒した彼れは、家の中に誰れもゐないのに氣がついた。時計だけが音を立てゝゐたが、もう十二時に近かつた。眠足りないので、半ば夢心地であたりを見廻してゐたが、さうすると、何代目かの先祖らしい面をした男が、人間の形した黑い影となつて、そこに坐つてゐた。

「私が寢てゐた間、さうして私を守つてゐて呉れたのですか」と、彼れは、不機嫌な寢呆聲で訊いた。

「お前を守るも守らないも、此處がわしの家だ」聲は幽かであつても熱意が籠つてゐた。

「死んだ人間の家はお墓の外にはない譯だ。靈魂は不滅か知らんが、靈魂がそんな黑い形をして子孫の家へ坐込むのは不思議でなりませんよ」

「それが不思議なら、この世にもあの世にも不思議でない物は一つもないのだ。わしを黒い影だと云ふが、お前だつてお前の女房だつて、わしの目から見りや黒い影だ。昔のうち、お前とお前の女房と黒い影同士が睨合つてゐたのを、わしは見たり聞いたりしてゐたのだが、昔わしやわしの女房がやつてゐたのと同じことなんだから呆れたよ」

「御先祖の威光で、何時までも子孫の側へ來て監視してゐちや困りますよ。天國へでも地獄へでも早く行つてゐて下さい」

「お前はわしを追拂はうと思つても追拂へまいよ」

「私は御先祖や、乙村の爺さんが、日向(ひなた)を歩いてゐる時の私の影のやうに、しよつちう私に附纏つてるから、こんなに頭が重くつてならないんだと思はれます。……だから生れ代りたいんですよ。アダムのやうに人間第一世になりたいんです」

「お前はまだ眠足りないので夢を見てゐるな。神は自分の形に似せてアダムをつくつたと云ふぢやないか。……お前が生れかはつても、新しいアダムが新しい重石(おもし)を頭に縛りつけられて生れるだけだ。……わしだつて生きてる間にはお前と同じことを考へてゐたこともあつたが、無用なことだつたよ。……だから、お前も無用な事に心を浪費しないで、女房の歸つて來るのを待つて穏かにお茶でも飲んで、お前が買つて來たビスケットでも一人で嚙つておとなしく寢床に就くがいゝ。……お前はわしが先祖の威光で餘計な干渉をするやうに思つてゐるが、わしには干渉も監視もする力はないんだ。いつもお前達の云ふことやすることを見たり聞いたりしてゐるだけで、靜かに寢ろと忠告するくらゐが勢一杯なんだぜ」

さう云つて、黒い影は、おれも寢るから、お前も寢ろと云つてゐさうな樣をして姿を消した。彼れは、眠氣のまだ去

切らない目を見開いてあたりを見たが、そこへ、忍びやかに表の戸が開いて、しよんぼりした妻の姿が現れた。彼れの目には、かの黒い影も妻の姿も同じくらゐな存在をもつて映つた。

「何處へ行つてたのだい」彼れは不斷の聲で訊ねた。

「ちよつと買物に」と、彼女は黒い影よりも幽かな聲で答へた。

「お茶でも入れて飲まうか。瓦斯へ湯沸しをかけてくれ。おれがビスケットの罐を開けよう」

さう云ふと、彼女は稍々勢ひづいた。あたりの寢鎭まつた家の中で、二人はお茶を飲みビスケットを噛つて、眞夜中に及んだ。

しかし、かの黒い影が家の中の何處かで寢てゐることを知つてゐるのは、彼れ一人であつた。

街上

翌朝、二人がまだ寢床を離れないでゐるところへ、乙村からの使が表の戸を叩いたが、それは、彼れに用事があつたのではなくつて、彼女に至急來て呉れといふのであつた。彼女は、何の用事だか分らないなりに、氣にかゝつたので、大急ぎで身仕度をして、朝餐も食べないで出掛けた。

「わたしが歸つて來るまで待つてゝ下さいね」と出がけに言置いた。

彼れは、寢床の中から妻の後姿を見送つてゐたが、乙村の急使が自分に關係のあるとは豫感されたので胸騷ぎがした。

「もうあんな人を恐れるには及ばない」と、心に力を入れたが、一刻一秒と時が經つにつれて、云ひやうのない恐怖を覺えた。それで、ぢつとして妻の歸りを待つてはゐられなくなつて、手早く身仕度をして戸外へ飛出した。

電車に乗つて下町の方へ出て、賑かさうな町を當てもなく歩いた。いゝ加減歩疲れてから一先づ家へ歸ると、自分が放散らかして出た家の戸締りがちやんとしてあつて、妻の姿は見えなかつた。雨戸を少し開けてよく見ると、自分の寢床も敷きつ放しのまゝで、家の中の物に何も手がつけられてゐなかつた。「ぢや歸つて見たらおれがゐなかつたので、あはてゝまた飛出したのだな」と、彼れは推察した。そして、自分で湯を沸かして茶漬を食べて、遅れ馳せながら出勤しようとして戸外へ出たが、社へ出て知人に出會ふのは危險であつた。

乙村老人に對する彼れの反逆が、老人にすでに見抜かれてゐて、老人の警戒の手が社の方へも伸びてゐさうに思はれてならなかつたので、彼れの足は、社の方角から外れた方へ向つた。

電車が喧しく通つてゐる。自働車も荷馬車も次から次へと通つてゐる。

止れ、進めの通行整理の文字が廻轉してゐる。目まぐるしい。彼れは雜沓した街上を、知らない人の間にまじつて通るのが、身體の危險を感じながらも、心の負擔が輕くつて却つて氣樂であつた。

が、昨日みち子に出會つた呉服屋の前を通つてゐると、意外にも、彼れの妻がその店頭で小切をいじつてゐるのを見つけた。

「オヤ」と、彼女の方から聲を掛けて、急いで此方へ寄つて來た。驚きと喜びとに度を失して、人目を憚る餘裕のないやうだつた。

「お前、こんな所へ來てゐたのか」

「わたし、あなたをどんなに捜したか知りやしない」

二人は並んで歩いた。

「お前は乙村におれの事を何とか云はれたのだな。おれには大抵察しがついてゐるんだが、……」

「それは家へ歸つてから話しませうよ」

「大事な話なら、街上(まち)を歩きながら聞いた方がいゝんだ。……さあ、云つて見ろ」

「そんなに目の色變へて心配しなくつてもいゝのよ。わたしが側に隨いてれば大丈夫。しつかりしてらつしやい」

「氣休めを云つてるな。……乙村の爺さんはおれの計劃をみな知つてると云つたらう。それでお前を呼んで警戒されたのに違ひない」

「計劃つて何の計劃?」

「お前までも白ばくれてゐるな。おれを逃がすまいと思つて。……おれは何處をうろついてゐても決して逃げやしないよ。完全に逃げられる所はないんだから。……だけど考へて見ろ、こんな哀れなことが世にあることか。おれは自分の頭の中で安心して勝手な事を企んだり考へたりする自由さへないんだぜ。あの老人に逆らふ自由さへおれにはないんだ。かうして歩いてるうちだつて、老人はおれの頭の底までも覗いてゐるんだから。……」

「そんな馬鹿な事があるものですか。乙村の先生は神樣ぢやなし。たゞの人のいゝお爺さんぢやありませんか」

「さう思つてるだけ、お前はおれよりも仕合はせだ。お前の目には、家の中に出たり隱れたりしてる影さへいつも見えないんだから。……」

「人間は誰れしも變な事考へないで、あたり前な事考へてゐたらいゝぢやないの?………わたしが此處で待つたから

よかつたけど、さうでなけりや、あなたは何時まで街上を歩いてゐでせう。」

「埃と物音が渦を卷いてゐてもいゝ。おれの頭腦に何も考へさせて呉れない所がおれの安息所だ。…………さあ、もつと歩かう」



贈り物

廣津和郎

一

お靜が彼の卓子の側に來た時、大貫安彦はから聲をかけた。

「君の家は何處？」

「小石川ですの」

「小石川では僕の家と方向が同じだな。どうだい、送つて行つてやらうか？　タクシイで」

「ええ、送つて行つて頂戴」

「よし、送つて行つてやらう」ひとりで三本飮んだビールの醉で、大貫は元氣よく云つた。彼はこのお靜の視線が先刻から、始終自分の方へ注がれてゐるのを感じてゐた。「おや、この女は始終俺の方を見てゐるぞ。ひよつとすると、この女の心が俺の方へ向いてゐるのかも知れないな」——だが又一週間もすると、他の男の方へ向

くだらうに』彼はそんな事を心の中で呟きながら、時々お靜の方へ視線を返してゐた。——このカッフェの定連である大貫は、多くの女給の心が、いろいろの客の方へ、始終動搖してゐるのを知つてゐた。時々彼の方へ厚意のある眼を投げる女が出て來る事がある。けれども、それきり彼の方で捨てて置くと、大概一週間ぐらゐのもので、彼に投げてゐたと同じ視線を、他の客の方へ投げるやうになる——そんな事が度々あつた。そこで、このお靜の視線を見ても、彼はそんな風に思つて、微笑してゐた。

ところが、彼女が偶然彼の側を通りかかつたので、不意に彼は聲をかける氣になつてしまつたのである。

『それぢや、十時にこの店を出ますから、數寄屋橋で待つてて頂戴』

『よし、數寄屋橋で……』

彼女は何氣ない顏をしながら、他の客の方へ行つてしまつた。

誰かに似てゐるな、とその後姿を見ながら考へたが、一寸思ひ出せなかつた。誰かに似てゐるな、と長くのばした髮の毛を、物を考へる時の癖で、五本の指を松葉搔のやうな形恰にして、ごしごし掻きながら、彼は知つてゐる女の顏をあれやこれやと思ひ浮べてゐたが、その中にふと思ひ出せて來た。『何だ、三州家の榮だ。繪はがきで見た三州家の榮だ！』この藝妓を彼は實際には見た事がなかつたが、その繪はがきになつてゐる顏が、さう思へば、お靜に何處か似てゐた。細面の、所謂美人タイプの顏の形、殊にその眼がよく似てゐた。鼻は少しお靜の方が高過ぎるかも知れないが……『兎に角、考へて見ると、このお靜といふ女は相當の美人に違ひないな。かうしたカッフェなどには稀らしい女かも知れないな』と改めてその美點を發見でもしたやうに、彼は尚も時々彼女の方へ視線を送つてゐた。——この女をタクシイで送つて行く、と考へると、多少の微笑が浮ばないでもない。始終カッフェを歩きまはつてゐる癖に、ついぞ

度さういふ眞似をした事のない彼には、多少の好奇心がないでもないが、併しそれと同時に探りたい氣がしないでもない。

『兎に角、たまにはそれも面白からう』と彼は微笑しながら、自分に云ひ聞かせるやうに心の中で呟いた。

大貫はこのカッフェの隨分長い前からの客だつた。恐らく他のどの客よりももつと古くからの定連だと云つてもいいかも知れない。彼と彼の相棒の新進小說家の加藤三郎とが、このカッフェに來るやうになつてから、もう五六年になるだらう。加藤が文科大學生で大貫が美術學校の學生だつた時分からの定連だつた。その五六年の間に、加藤は大學を出て、小說を書き出して、相當にその名を世間に知られて來るやうになり、大貫も秋の展覽會で相當に注目を惹くやうになり、そしていつか互に妻帶して、一家を持つやうになつてゐるのに、それだのに二人はこのカッフェで落合ふ事を止めなかつた。大貫は巢鴨の奧から、加藤は青山から、それぞれ每晩銀座まで出て來る。――つまり二人は學生時分からの習慣で、腹の底からの都會青年になつてしまつてゐて、銀座通を步くといふ事が、生活の一部になつてゐると云つても、誇張ではないらしいのである。加藤は彼一流の自己是認の主張から、ブウルヴルをぶらつく人といふ意味の佛蘭西語に匹敵すべき言葉――自分等の都會彷徨が必然的なものであることを是認するための言葉を工夫してゐた。けれどもギンブラといふ通俗語を用ふのを嫌つた彼は、未だに適當な言葉を探し當てずにゐる……

その晩も、實は大貫は加藤の來るのを待つてゐたのだつた。ところがどうしたわけか、彼の相棒は姿を見せなかつた。そこで所在なさにビールを三本飮んだが、ビール三本位が丁度手頃の酒飮みである彼は、ひとりでそれ以上を飮む氣にはなれなかつた。――九時頃まで加藤を待ちあぐんだ揚句、たうとうそのカッフェを出た。彼の出て行くのを見たお靜は、『それぢやね』と云つたやうな眼付を追つかけるやうに彼の方へ送つた。

二

三月末の霽れ切つた好い晩だつた。彼は尾張町の角から、夜店の並んだ舗道の上を京橋の方へぶらぶら歩いて行つて、又同じ道をぶらぶら戻つて來た。ほろ醉氣分の頬にかすかに觸れる風が氣持がよかつた。電燈と埃とにぼうとなつてゐる人込の中から、いろいろな女の眼が、行交ひに彼の眼と觸れ合つた。けれども、一時間をさうしてぶらつくには、さうした舗道が短か過ぎた。彼は時々時計を出して見たが、なかなか十時にならなかつた。

そこである喫茶店でソーダ水一杯を命じて、それをゆつくり時間がかかるやうに飲みながら、やがて十時になると、彼は數寄屋橋に行つた。――橋の欄干にもたれて、自分がかうして女を待つてゐるのかと考へると、胸がこそばゆいやうな氣がしてならなかつた。

お靜が來たのは間もなくだつた。數寄屋橋の橋の向う側――彼が欄干にもたれてゐたとは反對の側の方を通りながら、顔だけ此方へ向けて、『もつと向うで、もつと向うで』といふやうな合圖をした。そこで彼も此方側を、お靜の行く通りに歩き出した。お靜は有樂町の停車場の方へ曲つて、停車場の前から、あの小さな事務所が澤山ある、八百官横丁の方へ小刻みな早い足取りで折れて行つた。そして小さな事務所の並んだ小暗い蔭まで來ると、立止つて彼を待つた。彼が近づくと、

『お愛さんが、數寄屋橋から大塚行きに乘るのよ。それであたしいつも一緒に歸るんでせう、だもんだから困つちやつたのよ。――一寸日比谷まで用があるからと云つて、あすこで別れて來たんでせう。さうしたら、變な顔をして見送つてゐるんですもの』

そんな事を息をはずませながら云つた。
『さうかい、そんなに困るかい？』と大貫は一寸からかひたいやうな氣がして云つた。
『それやあ困るわよ。――見つかつたら、それやあ口が煩いんですもの。それにお愛さんといふ人、それは口が輕いのよ。それだから直ぐみんなに知れちまひますもの……』
『…………』
何といふ事なく頬笑んでゐる大貫の側に、お靜はぴつたり身を寄添ふやうにした。二人は一寸の間默つてその八百屋横丁をそのまま歩き出した。大貫は加藤が前に一度、あるカッフェの女と散歩した話をしたのを聞いた事があつた。
『つまりこんな感じのものなのかな』とその時の加藤の話を思ひ出しながら彼は考へた。
『もうお愛さんも、電車に乘つた時分だらう。數寄屋橋まで引返して、タクシイに乘らうぢやないか』
八百屋横丁を通り抜けて、日比谷から大手町の方へ行くあの濠端の電車通に出ると、お靜がそこを濠端づたひに右手に歩いて行かうとするので、大貫は立止つて云つた。
『もう少し歩きませうよ、ねえ』お靜は街燈の光に、その白い顔を眞正面に照らされながら、彼の顔を見て、につこり笑つた。莫迦に綺麗に見えた。藝妓がするやうな淡紅色の薄絹を、ふうわりとその頸に卷いてゐた。――その趣味は少々苦手だと大貫は考へた。けれども、そんな風に薄絹を頸のまはりに卷いた女と連れ立つて行くといふ考が、一種の興味を誘はないではなかつた。
『これも亦一興』そんな風に彼は思つた。
『けれども、歩いてゐたら遲くなりはしない？』

『構はない事よ、そんな事……』とおつ被せるやうに、少し邪慳に云つて、それから急に、甘へるやうな調子になつて、『あたし嬉しくつてよ。あなたとかうして歩けるなんて、思ひも寄らなかつた事よ。——あたし先からあなたの事を思つてゐたのよ』

『……』

『だけど變なものねえ、こつちで思つてゐると、その氣持があなたにも自然に通じるのねえ——逢つて下さるつて仰有つた時、ほんとうに嬉しかつたわ、夢かと思つてよ』

『……』

大貫は並んで歩いてゐる女の顔にちらりと眼を呉れた。彼は少し呆氣に取られた形もあつた。『この女は冗談を云つてゐるのか知ら』と初めは思つた。この女の視線が始終自分の方へ注がれてゐるのを知つた時、この女の心が自分の方へ傾いてゐるのかも知れないと云ふ氣なしてゐたが、併しこんなに明らさまに、女の方からかうした事を云ひ出すものだらうか？——そこで次に彼はかう考へた。

『この女は男を男とも思はないコケツトなのだらうか？ 出鱈目な、放縱に馴れた女なのだらうか？ 結局ただの氣紛れから、俺に挑みかかつてゐるのだらうか？』——かうした物の云ひ方を女の方からされた經驗のない彼は、さう思ふと一寸どぎまぎした。だが、さういふ女だとなれば、さういふ女に對する覺悟も出來る、そこで彼は再び自分の側を並んで歩いてゐる女の横顔にちらりと眼を呉れた。

『ねえ』と彼女は又云つた。『あたしね、ほんとの事を云つてよ。あたし出戻りなのよ。あたしM呉服店にゐた事があるのよ。それからそこの店員の人と結婚したのよ。——立派に正式に結婚したのよ。いつかあなたに寫眞を見せるわ。——

だけれど、氣が合はないんでせう。ほう何とか云ふわね、性格が合はないとか何とか、つまりそれなのよ。それだもんだから、たうとう別れてしまつたのよ。それから暫くうちに遊んでゐたんですけれど、退屈でせう。それだから小遣取りかたがたあの店に出てゐるのよ』と云つて、急に大貫の顔を窺き上げるやうにして、「だから、あたしお金の事なんかであなたに御迷惑かけるやうな事は決してないわ。――うちの事は兄がちやんとしてゐるのよ。兄はあたしがああ云ふ處に出てゐる事を好まないんですけれど。うちにゐても退屈な上に、何だか唯厄介になつてゐるのも悪いやうな氣がしてね、それで自分の事は自分でしたいと思つてゐるのよ。――ねえ』そこで言葉を切つたが、いきなり情熱的な調子になつて、くるりと大貫の方へ顔から身體を振向けた。「だから可愛がつて頂戴ね』

丁度人通は杜絶えてゐた。電車の影も四五丁先にしか見えなかつた。月は好かつたけれども、濠の縁を歩いて行くと、六七間先は青みかゝつた夜の色の中に包まれてしまつてゐて、物の形がはつきりしなかつた。――大貫が情熱的に自分の方へ顔と身體とを振向けた女の脣が、何かを求めるやうに顫へてゐるのを感じたけれども、彼は態とそれに氣がつかない風をした。そして歩きつづけて行つた。お静は彼の無感覺を物足らなく思つたらしく、暫く無言になつて歩きつづけたが、やがて再び快活な調子になつて、

『あたしね、あなたの前にもう一人好きになつた人があるのよ。――その人とあなたとたつた二人つきりよ、ほんたうに好きになつたのはね。その人といふのはね、それは可笑しいのよ、云つて見ませうか？』

『ああ、云つて御覧、どんな人だい？』

『おほほほ』と彼女は自分の考に自分で吹き出しながら、『笑つちや厭よ。それやあ可笑しいのよ、

『笑やあしないよ』

『ぢやあ云つて見るわ。——あの巖谷小波さんよ』

『巖谷小波？』と大貫は鸚鵡返しに思はず相手の言葉を繰返さずにゐられなかつた。そして續いて彼はお靜と同じやうに吹き出した。『あのお伽話の巖谷小波？』

『ええ、さうよ。……だから笑つちや厭だと云つてゐるのよ』

『だつて巖谷さんといふ人は、もう五十以上の人ぢやないか』

『ええ、さうよ。——だけれどね、それはずつとずつと昔の話なのよ。あたしが十二の時なのよ。あたし雜誌に出た小波さんの寫眞を見て、すつかり好きになつちやつたのよ。それで、あたしそれを切拔いて、始終蟇口の中に入れたり、手箱の中に入れたりして、時々出して見てゐたのよ。お嫁に行くまで……あたしが十九の時まで、大切にして納つて置いたわ。その中にどうしたのか失くなつてしまつたの……』

『あはははは』と大貫は大聲に笑つた。『それぢやあ、本物の巖谷小波は知らないんだね？』

『ええ、でもたつた一度見た事があるのよ。M呉服店にゐた時分、何かの展覧會があつた時、巖谷さんが來た事があるのよ。あれが巖谷さんだつて聞いた時、あたしひとりで眞赤になつて、逃出してしまつたわ』

『あははは』と大貫は再び聲を出して笑つた。——こんな事を云ふこの女は、これは單純なのかな、と彼は考へた。すれつからしと思はれる程、臆面もなく物を云ふが、その臆面のなさが、すれつからしから來てゐるのではなく、この女の善良と單純とから來てゐるのかな？——さう思ふと、この女の總てが、善良と單純とに見えて來た。タクシイで送つてやらうと云つただけで、直ぐ自分が彼女を愛してゐるやうに極め込んでゐるといふ事は、單純でなくして何であらう？ それに十二の時から巖谷小波の寫眞を切拔いて、しまつて置いたといふ。巖谷小波と云へば、少年時代、大貫は

どに取つても、なつかしい人だつた。雜誌などに出る綺麗な寫眞は、少年達に取つても、忘れがたいものだつた。それをお靜は切拔いてしまつて置いたといふ。

『そしてその澁谷小波と俺とが、今まではんたうに好きになつたたつた二人の男だといふのは……』此處まで考へて來ると、大貫は今までとは違つた意味で、又をかしくなつて來ないではゐなかつた。『單純を通り越して、これは何事だらう。——この女はもう二十二三にはなつてゐさうだが、まるでお伽話見たいな話ぢやないか』

『此方へ行つて見ませんか?』とお靜は凱旋道路を、宮城前の方へ歩き出した。『ねえ。あたしあなたの事を、その中、機を見て、兄に話すわ。あたしの兄つて、それは解りがいいのよ。乾度解つてくれてよ。さうしたらうちに來て頂戴ね、うちに……』

『佛しね』大貫は初からさういふ風な女の言葉には、一度も返事をしたいのか、女に氣の毒で堪らなかつたが、ひとり極めに餘りに單純に極め込んでゐる女の心持を、こはす事が出來ないさうな、へんな遠慮見たやうな氣持になつてゐた。が、此處まで來ると、默つてゐるのも惡いやうな氣がして來た。それで云つた。『僕は結婚してゐるんだよ。僕には家内があるんだよ』

『知つてるわよ、そんな事』とお靜は引つ奪るやうに大貫の言葉を遮つて、『そんな事みんな知つてゐるわよ。あなたたつて加藤さんだつて、奥さんがあるつていふ事は、お店で知らないものはない事よ。……だけれど、そんな事どうでもいいぢやないの。奥さんがあつたつて、好きな人は好きなんだから仕方がないわ。……ねえ』

お靜は急にそこで再び立止つて、さつきと同じやうに、顔から身體をくるりと彼の方へ、情熱的にふり向けた。——

廣い砂利の敷かれた自動車道路には、二三台の自動車が、競走でもしてゐるやうに、ぶうつと音を立てて、二人の側を

驀進して行つた。が、その徑には何も通らない。松の小枝だの、宮城の濠のが、月光の中に薄ぼんやりと黒く見えるばかりで、六七間先は、青みがかつた夜の色の中に、物の形がぼやけてしまつてゐる。――ビール三本の酔が醒めかゝつてゐる大貫には、三月末の夜更の風が、へんに肌寒く感じられて來た。『輕く接吻してやるかな、一つ』彼は心の中で呟いた。『だが、まあ、待て待て。――そいつは考へものだからな』

そしてやはりお靜の態度に氣のつかないやうな風をして、歩き續けて行つた。

お靜は彼の無感覺に、今は物足りないどころではなく、少々苛立つたやうな様子で、しばらく又默々として歩いたが、併し、不愉快を持續的に感じつづける事の出來ない性質を、この女は持つてゐるのかも知れない。間もなく、又も快活を取り返して、そして喋り出した。

『四月になると、お店で暇が取れるのよ。四日ぐらゐ。さうしたら、鹽原に行きませうね、鹽原に』

『……』

『これまでにあたしもお小遣を溜めて置くわ。あたし鹽原がそれは好きなのよ、ね、連れてつて頂戴ね。――あなたなんか鹽原をよく御存じでせう？』

ところが、名所嫌いな大貫は、寫生旅行の目的地に、鹽原を撰んだ事は未だなかつた。だから、彼は鹽原を知らなかつた。――がそれに答へる代りに、彼はかう訊いた。

『鹽原に何か思ひ出でもあるのかい？ 先の旦那さんと一緒に新婚旅行でもしたのかい？』

お靜は上眼で一寸彼の顔を睨む眞似をした。『知らないわ』とでも云つたやうに。が直ぐにつこりして、

『ええ、白狀すればさうなのよ。でもそんな事どうでもいいわ。――ね、ね、鹽原に行きませうね。鹽原にね』

『……』

『ねえ、あなた』と彼女は、そこで又ぴたりと立止つて、廣い砂利路の上に、見渡す限り、人影も自動車も通らないのを見すますと、いきなり彼の方へ、三度目に、顔から身體ごとを振向けて來た。ねえ、あなた。』

先刻(さつき)よりも少し大膽になつて、彼の胸に肩を凭せかけて來た。仰向きに、彼の方へ突き出した唇が、わなわなと震へてゐた。

今度は素知らぬ風(ふう)の出來ない形になつた。そこで彼は、仕方がなしに、不得要領に、女の肩に手をかけて、一寸顔を覗き込むやうにした。その微かな接觸に、お靜は身體中を昂奮させて、彼の胸にぴつたり顔を押しつけて、そして呟きつゞけた。

『何處かにつれてつて頂戴、何處かにつれてつて頂戴……』

『今夜かい？』

『ええ、今夜。――ね、あたしもうどうなつたつていいわ。芝の祖母(おば)さんとこに泊つて來たと云へば、兄は何とも思やしないわ。――思つたつていいわ。ね、ね』

『まあ、まあ……』

この突然の女の昂奮に、大貫は少々度を失つて來た。それでなだめるやうに、お靜の肩を叩きながら、『まあ、まあ……』と彼は繰返して云つた。――一體これはどうしたらいいだらう、と彼は考へた。この女が單純で、率直で、彼が持つてゐるやうな教養もなく、又彼が知つてゐるやうな道徳もなく、いきなり此處までぐいと突き進んで來たその形が、彼に或可憐さを感じさせないではなかつた。だが、併し、その餘りの率直と單純さとは、又彼に纏こを恐れるやう

な魅力を與へなかつた。――何だか、大きな間隙が感じられた。そして戀の相手に對するやうな心持に彼をならせないと共に、又遊び女に戯れるといふやうな無責任な心持にもならせなかつた。――一瞬の氣紛れで、彼を引かれてはやり切れない、さう云つた感じがした。

そして何にも増して、彼の心をいつぱいにしたのは、このお靜に對して、自分の心持が、氣の毒だといふ事だつた。

「ねえ、ねえ」と彼は女の肩を再び輕く叩きながら云つた。「何と云つたらいいかな。君は餘りに氣が早過ぎるよ。――いいかい、僕はタクシイで送つてやらうとは云つたよ。だけれどね……困るな、何と云つたらいいかな、つまり君は人を少し早く信用し過ぎるよ」

「……」

「ねえ、氣を惡くしないで聞いてね。僕は無論、君を嫌ひぢやないよ。好きだよ。……だから、タクシイで送つてやるといふ約束はしたんだが、併しそれだからと云つて、そこまで君のやうに思ひ込んで……信じ込んでしまつては……」

「……」

お靜の肩がぶるぶると顫へた。大貫の胸から、彼女は顔を上げた。彼女の顔が青ざめて、緊張してゐるのを見ると、大貫はへんに淋しく、一寸悲しいと云ふ氣持さへして來た。「困つちやつたなあ、困つちやつたなあ」と彼は腹の中で考へた。

お靜は大貫の顔をじつと見つめた。が、大貫の言葉の意味が解ると、いきなり袂に顔を當てた。――大貫は彼女を自分が侮辱でもしたかのやうにはらはらして來た。が、どうもしようがないので、佇んでゐた。

ツウリングの空車が來たので、大貫がそれを呼び止めて、お靜を無理にそれに乘せたのは、それから暫く經つてから

だつた。——自働車の中でも、二人は口を利かなかつた。あの快活なお靜が、すつかりしよんぼりと默り込んで、自分の横に腰かけてゐるのを、大貫は何の慰めようもなかつた。

傳通院の側で、お靜が下りた時、彼はほつとした。

三

翌日の夕方、大貫がその銀座のカッフェに出かけて行つた時、加藤が先に來てゐて、片隅の、二人がいつも腰かけるテーブルに陣取つてゐた。

『やあ、失敬、昨夜は用があつたので、來なかつた。——君は隨分待つてゐてくれたつてね』

『ああ』と大貫は返事をして、加藤と向ひ合つて腰を下ろしながら、食堂全體を見まはして見たが、お靜の姿が見えなかつた。『來てゐない』と彼は腹の中で云つた。昨夜の事で來ないのだらうか。あれで悲觀してしまつたのだらうか。——昨日思つたよりも、お靜がもつと單純で、もつと善良な女に彼には思はれて來た。自分がさういふ單純な、善良な女を失望させ、悲觀させてゐると考へる事は、彼に取つて愉快な事ではなかつた。

けれども、やがてその話を加藤に向つて話し出した時には、飲友達と冗談話をする時の、あの明るい、快活な顏をしてゐた。

『昨夜はね、君が來ない間に、滑稽な事が持上つたんだよ』と擽つたいやうな顏をして、笑ひながら、『少々弱らされちやつたよ。實際最近になく、てれされちやつたよ』

『どうしたんだい、一體？』

『君が來ないだらう。君が來ないので、一人で飲んでゐたんだがね、あのお酌がね、始終俺の方ばかり見てゐるんだよ。それでね、つい冗談を云つてしまつたんだよ、タクシイで送つて行つてやらう、と』

『ふん』

『そこで數寄屋橋で待合せたんだがね、それからが大變なんだよ。タクシイに乘らずに散歩しようといふんだよ。止せば好かつたんだが、つい一緒にあれから濠端に出て、凱旋道路の方を散歩したわけなんだがね、もうお酌がひとり極めに極めてゐるんだ。「自分の方で好きだと思つてゐると、それがあなたにも通じるんだわね」と云つた調子でね』

『なるほどね』と加藤は微笑しながら點頭いた。

『それで俺は默つてゐたんだよ。返事のしようがないからね。――さうしたら、君、とても滑稽ぢやないか。自分は今までに好きになつた人が二人あるつていふんだ。一人が俺で、俺の前に、巖谷小波が好きだつたつていふんだよ――』

『巖谷小波？』

『ああ、巖谷小波さ』

『そいつは又……』加藤は呆氣に取られたやうに眼を瞠つて、大貫と顏を見合はせたが、『へえ』と云つて、そしてぷうつと吹き出した。

大貫も何だか矢鱈無性にをかしくなつて來て笑ひ出した。二人は暫く顏を見合はせてくつくつ笑つてゐた。

『何でも、十二の時にね、雜誌で巖谷小波の寫眞を見て、それを切り抜いて、始終肌身離さずに持つてゐたといふんだよ。十九の時とかまで。――十九の時に一遍結婚した事があるらしいんだがね。――つまり、さういふ事を、すつかりひとり極めにして、べらべら喋いで、ひとりで喋つてゐるやうな女なんだよ』

『なるほどね』

『そして又こんな事も云ふんだよ。自分のうちは兄がちやんとしてゐてくれるから、自分は生活に困つてはゐない。唯店に出てゐるのは小遣取りだけだ。――だから、お金の事であなたに御心配かけるやうな事は、決してないわ、つて』

『いゝぢやないか、君、なかなか。――とても可憐なものぢやないか』

『可憐でない事はないがね、併し何と云つても、トテツもないからね。……さうしたら、君、これから何處かへつれてつてくれ、つていふんだよ。俺に女房なんかある事なんか知つてゐるけれど、そんな事はどうでもいゝ、自分は何とも思はない。今夜何處かへ連れてつてくれ、つていふんだよ』

『ふうん――』と加藤は感嘆したやうに云つた。『つまり餘程單純なんだね』

『あゝ、單純なんだよ。初めはこれは餘つ程すれつからしなのかと思つたが、默つて聞いてゐると、單純で善良なんだよ。――一種の天眞爛漫つて云つたところがあるんだよ。いや、少し天眞爛漫過ぎるかも知れないがね。――悪い奴にかゝつたら、あんなのは誘拐でも何でもされてしまふからね。――そこで、更に何、俺は弱つてしまつたよ。弱つたどころではない、あんまり一本氣なんで、どぎまぎしてしまつたよ。それで、どうしても、何處かへ連れて行く氣になれないだらう、それだものだから、『そんなに人を信用し過ぎちやいけない』つて云つたんだよ。俺は唯タクシイで送つてやると云つただけなんだから、そんなにひとりで極めてしまつてはいけないつて云つたんだよ。さうしたら、君』と大貫はへんに悲しい顔をして、『袂で顔を隱して、すつかり默り込んでしまつたよ』

『……』

加藤はビールをコツプに注いで、それを口に持つて行きながら、聞いてゐたが、一口ぐつと飲み込んで、コツプを卓

子に置いて、

『そいつは少し可哀さうだな。——何とかもう少し方法はなかつたものかな？　俺なら可愛がつてやるがな、さういふ女だつたら』

『いや、併しその調子でこれから長い間くつついてゐられたら、やり切れないからな』

「だけれど、君、そんな女つて滅多にゐるもんぢやないよ。そんな單純な愛し方で、そんな風に我々を愛して來る女なんて、人生で滅多に打つつかるものぢやないよ。話の樣子だと、無智なところや、教養のないやうなところはあるが、それだけ君、純粹で、無邪氣で、何しろ素敵に明るいぢやないか。俺なら愛してやるがな。それにお靜といふのはなかなか美人だよ』そこまで云つて、初めて氣がついたやうに、加藤は食堂内を見まはした。『さう云へば、今日は見えないやうだね』

「あゝ、ゐないらしい』と大貫も誘はれたやうに、又食堂内を見まはして見た。

『可愛さうに、悲觀して來ないんだね。——益々、君、可憐なものぢやないか。折角、さう云つて來たものを、冷たく突つ放す奴があるものか。……ほんたうだよ、さう滅多にそんな幸福つて來るもんぢやないよ』

さう云はれて見ると、大貫はそんな氣が滿更しないでもなかつた。——なるほど、ああ云つた女に滅多にこの世の中で出會ふもんぢやないかも知れない。出會つたところで、あんなやうに何の疑もなく、こつちの胸に凭れかかつて來るもんぢやないかも知れない。彼は學生時分から、始終東京中を飲んでまはつてゐた。けれども、あんなやうな女に、あんな風な態度で打つつかつて來られた事は、さうして飲み歩いてゐる間に、一度もなかつた。モデル女との多少のいきさつ、獨身時代に藝妓との多少のいきさつ、そんなものがない事はなかつたが、併し、それは世界の男の普通のいきさつ

に過ぎないだらう。いきなり、端的に、向うからこんな風に來た女といふものは、確に生れて初めてだつた――彼は妻の事を考へた。妻との生活に、別段不愉快も不服もない。と云つて、考へて見ると、平凡、無味、單調でない事もない

『さう云へば、惜しくない事もないな』

『惜しいとも、君』と若い小說家は、壓伏するやうな調子で云つた。惜しいとも。女が愛して來るなんて、實際珍しい事だよ。そして此世の中で、最も可憐な事だよ。そして君、さうした女の愛に酬いてやるといふ事は、不道德でも何でもないよ』

『…………』

二人はそのカッフェを出て、それから銀座通をぶらぶら步いた。昨夜と同じやうに春の微風が、ほろ醉の大貫の頰にひやひやと快かつた。『愛してやるかな』と大貫は腹の中でお靜の事を考へてゐた。『併し面倒はやつぱり面倒だな。あの調子で、單純に、一本氣で來られたら、此方の氣持が始終、へんに急がしく、おちつきを失つて來ないとは限らない氣がするな。……併し可憐な事は可憐だな。あんな事は滅多にないに違ひないな。……併し……』

昨夜と同じやうに、行交ひに澤山の女の眼が、彼と視線を交はして行つた。

『贈り物でも送つてやるかな』と彼はショウウヰンドオに並んでゐるいろいろなものを見て考へた。『何か送つてやるかな。せめての慰めに……』

この考が、彼を一寸微笑ませた。

『ねえ、結局俺には面倒なんだ、そこまで行くのは』と加藤に向つて、『初めはいいに違ひないが。あの單純には直ぐ飽

きが來るに極つてゐるからね。氣持がへんに分裂でもして來たら、結局面白くないからね。――それで、一つ何か贈り物でもしてやらうと思ふんだが、どうだらう？』

『そいつも惡くないね』と加藤は直ぐ贊成した。『さうしたら乾度喜ぶよ。――此方でも或關心を持つてゐるといふ事の證據になるからね。さうしたら、侮辱されたといふ氣が先方でしなくなるからね。――君が突き進んで行く勇氣がないなら、相手を侮辱してはゐないといふ心持の證據だけは、やつぱり見せる方がほんたうだな』

『何を送つてやらうかね』と云ひながら、大貫は考へた。指輪、帶、髮飾……けれども、さう思ふと、彼の頭には自分の經濟狀態が浮んで來た。彼は相當に畫壇の注目を惹きかけてゐると云つても、若い洋畫家の常として、彼の描いた繪が、さう無暗に賣れるわけではなかつた。彼は故郷の親父からの仕送りを受けてゐるので、それで月々の妻との生活、繪具代、それから彼の散歩代ぐらゐには事缺かなかつた。けれども、臨時にいくらかの金を工夫しようと思ふと、五十圓と纏まつた金は、彼には骨だつた。――どうせ送つてやるならそんなに見つともなくないものを送つてやりたい。お靜の身につけてゐるものを見ると、多分彼女の家を助ける必要がなく、收入がみんな自分の小遣になるためだらう、女給としては、かなり立派なものばかりのやうだ。――それだから、どうせ送るなら、多少彼女が貰つて心から喜ぶやうなものにしたい……

『それにしても、何を送るにしても、大分高いな』と彼は困つたやうな顔をして云つた。『そいつあどう都合したらいいかと考へてゐるんだがね、まさか親父に送つて貰ふわけにも行かないし』

加藤はそれを聞くと、一寸思案するやうな眼付をしたが、

『君、いい事があるよ。いい事と云つて、一寸君には面倒なんだがね、君一つ本の裝幀をしてくれないか。今度僕の短

稿集が出るので、これの裝幀が未だ決つてゐないんだがね、君が裝幀してくれると、その事を本屋に云つてやれば少しは裝幀料を出すと思ふがね。——それをやつてくれるといいんだがな』

『やらう』と大貫はそれは好都合だと思つたので、元氣に云つた。『君のなら、やつても愉快だし、やり榮えがあるし、喜んでやらう』

四

そこで大貫が友人の本の裝幀料で、お靜に帶か何かを買つてやつて、それでこのだらしのない短篇が終つた事にする方が、この物語にケリがついて、作者も氣が樂なのだが、さういふ風に事柄がはこんで行かなかつた。

大貫と加藤とが、銀座街頭で、本の裝幀について約束してから、三日目の正午頃、本屋の番頭が、巣鴨の奥に大貫をたづねて行つた。こんなに早く裝幀料を本屋からとどけたといふことは、加藤が特に本屋にその交渉をしたものに違ひない。

十五疊の畫室とその他に附屬的な日本室が二間ついてゐる小さな家に、大貫夫婦は女中もなく暮してゐた。前の晩、夜更しをして、裝幀の圖案を書き散らしてゐたために、一體朝寢の大貫は、その日は尙の事遲くまで眠つてゐた。本屋が來たといふので、初めて寢床から離れた程だつた。

どてらのまゝ、畫室に出て行つて見ると、二十五六のいかにも番頭らしい男が、そこの椅子に腰かけてゐた。

『加藤先生からお話がありましたが、今度は裝幀を先生にして頂く事になりまして……』椅子から立上つて、そんな風に挨拶をした。

『やあ』と大貫は不得要領な挨拶をして、それから自分も番頭と向ひ合つて、椅子に腰を下ろしたが、丁度その時、彼の細君が、紅茶を持つて、帳場に這入つて來たので、彼はどぎまぎした。

が、その一番悪い瞬間に、何も知らない番頭は『薄謝』と書いた紙包をふところから取出して、それを大貫との間に挾まつてゐる卓子の上に置いたのである。

『ほんのお禮のおしるしですが、どうぞ』

『やあ』と再び不得要領な返事をしながら、彼は紅茶をテーブルの上に並べてゐる細君の眼をちらりとぬすみ見た。細君の眼は紙包の上に流れたが、そのまゝ盆を持つて奥に引つ込んで行つた。

『しまつた。かう見つかつてしまつては仕方がない』と大貫は腹の中で呟いた。

間もなく番頭は歸つて行つた。そこで大貫は態と細君の眼の前で、その紙包を開けて見た。五十圓出て來た。

『まあ、加藤さんの本の裝幀料ですの、それ？』と細君はにこにこしながら云つた。

『ああ』

『五十圓とは随分奮發しましたわね。あたし裝幀料なんて、何も呉れないかと思つてゐましたよ』

『莫迦云へ。たゞで物を描かされて堪るもんか』

さう答へながら、大貫は腹の中で、この成行に苦笑してゐた。『番頭の奴、悪い時に出したもんだ』と考へたが、今更どうもしようがなかつた。

『ねえ、あなた、繪具は今十分ありましたわねえ』

『ああ、あつたよ』

『それぢやねえ、このお金あたしの方へ預つて置いていいでせう？』

『ああ、いいよ。――どうするんだい？』と仕方なく彼は云つた。

『あなたの襦袢の胴や何かを先から買はなければならなかつたの、それからいろいろ……』

何も彼もやぶれかぶれだ、と云つたやうな氣になつた大貫は、さう云つた細君の言葉に打つつかつて行くやうな調子で云つた。

『俺のものは何も要らない。お前のものを買へよ。――臨時收入だから、すつかりお前のものを買ふがいいよ』

『えツ？』細君は眼を丸くして、大貫の顔を見てゐたが、やがて喜びに顔を輝かして、『ほんたう？』

『ほんたうだとも。誰が嘘なんか吐くもんか。――前からその豫定だつたんだ』

『まあ、うれしい』と細君はその金を手に持ちながら、一寸考へるやうな眼付をした。『あたし何を買はうか知ら。買ひたいものがいろいろあるのよ。傘ももう古くなつたし、下駄も買ひたいし、でも、何だか惜しくもあるわね』

『下駄なんかいつだつて買へるよ。何か纏まつたものを買へよ、帯でも指輪でも……』

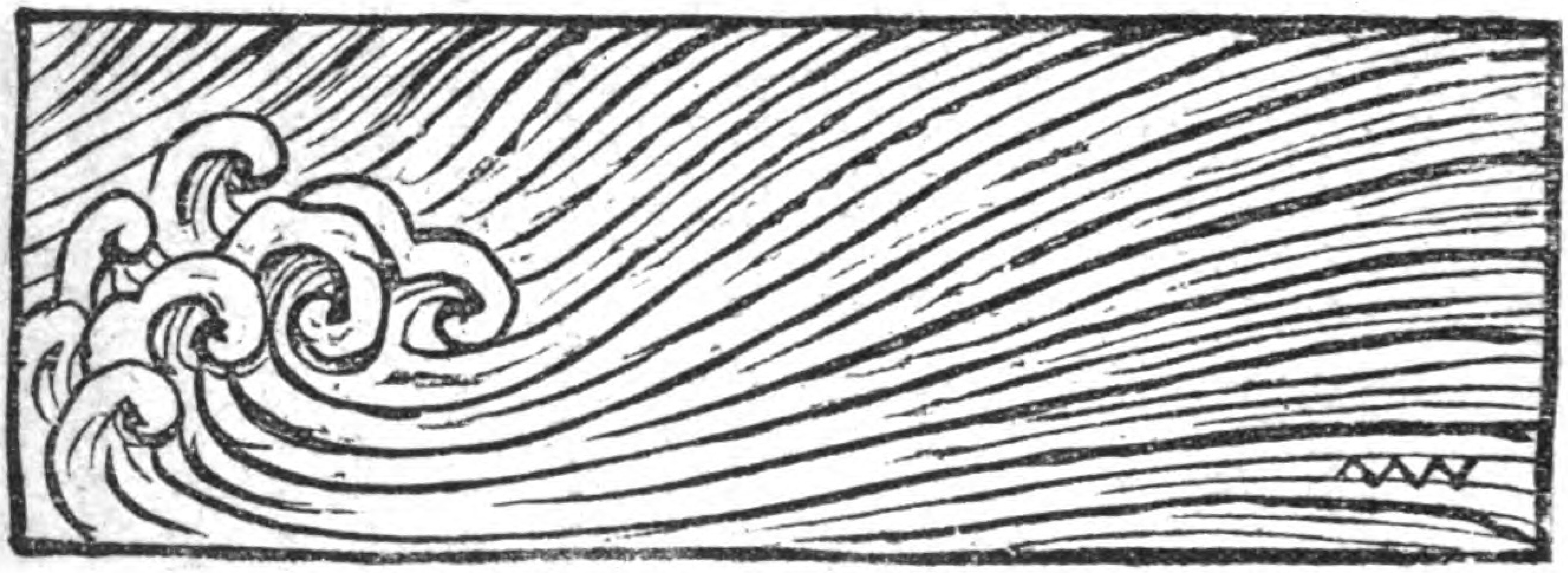
『紀念になるやうなものを』と口に出かかりさうになつたのを、大貫は嚙み堪へた。お前に買ひそくなつたものを、細君に、と思ふと、一寸皮肉な、やけばちな快感が感じられて來た。

『指輪なんか要らないわ。それぢやあ、あたし腕時計を買ふ事よ。今までの時計は母に買つて貰つたんだけれど、もう器械が駄目で、直しにやつても、直しにやつても狂つてしまふんですもの。――あたしニツケルの器械の好いのが欲しいわ』

『腕時計なんか好いだらう』

それから夫婦は飯を食つて、夫婦揃つて銀座に出るなどいふ事は滅多にないのが、家に鍵をかけて、出かけて行つた。――二人は尾張町で電車を下りて、人込の中を天勝堂の方へ歩いて行つた。

が、その時は、大貫はもう腹の中に、先刻感じたやうな皮肉や苦笑を感じてゐなかつた。彼は結婚してから、自分の力で、細君に纏まつたものを買つてやつた事が一度もなかつた事を思ひ出してゐた。細君の持物で少し目星しいものは彼女が結婚の時持つて來たものだけだつた。――お靜への贈り物といふ事が動機となつて、初めて自分の細君に物を買つてやるやうになつたといふ考も、今は彼には別段不調和にも感じられなかつた。良人に初めて腕時計を買つて貰ふ喜ばしさに、いそいそとしてゐる細君を、彼は好い心持になつて眺めながら歩いて行つた。



第二の出產

近松秋江

お悅が大學病院の物療科の病室に運ばれて、ひとゝほり專任醫員達の診察が繰返されて行はれた後、寢臺の端に掛けられた病床日誌には、腸狹窄症及び疑似腦炎症といふ病名が記載された。中野の方の市外から、自動車に乘せられて遠い道を連れて來たので、その晩には熱も一時三十八度近くまで昇つたが、それは翌日になつて殆ど平熱に復してしまひ、博士達の保證したとほり、身體を動かしたゝめにも容態には格別の障りもなく、病勢は極めて遲々としてではあつたが稍々回復に向つてゐた。

宇治は、全く不意打ちを喰つたやうに、四五日の間といふものお悅の病氣騷ぎ、それに伴つて俄に母乳を絕たれた乳兒の始末の爲に打つ通しに氣を張り詰めてゐたのが、さうして母子をそれ〴〵の病院に預けてしまつたあとは、いくらか氣が緩んだのとゝもに疲れも伴つて、その翌日から自分も少しく發熱を覺えた。それとゝもに前日來のごつた返へしてゐた騷ぎに引換へて、家の中が急に伽藍としたやうに寂し

くなつてしまつた。彼は女中を促督して家の中を幾度も奇麗に拭き掃除さしたり、いろんな者が下んでに引掛けて寝た夜具などを縁側の日向に乾さしたりした。九月もまだ初旬のことゝて、明るい秋暑の日が赫々と前栽の植込みを照してゐる。半月ばかり前に秋を迎へる樂みにとて植えた斷腸花や芙蓉がちやうど今時分になつて、いづれもいひ合はしたやうに花を開いた。宇治は、この頃俄に感ずる朝夕の涼氣に、疲勞のほかに輕い風邪心地も加はつて、藥餌に親みながら、座敷に端居してそれ等の花を見てゐると、頻りに感傷的な氣分になつて來るのであつた。そして、どうかするとその紅淡色の小い秋海棠の花が、二三日前に、自分で小兒科の病院へ持つていつて着せてやつた秋の七草の染模樣のあるモスの單衣を着た小い乳兒の姿のやうに聯想させられたりした。あの芙蓉は植木屋に頼んだ時には淡紅色の花の咲くのといつておいたのを、生憎それがございませんので、これは白ですけれど、そのうち又見附けて紅いのを持つてまゐりますといつてゐた。いくら秋暑といつても、もう、繁つた木蔭などには佗しいやうな涼けの立つ日影の隈の出來てゐる薄暗い垣根に、ぽつと白い大輪を開いてゐるのを見てゐると、それが遊の花のやうにも思はれる。大學病院にいつてゐるお悴がもしか死ぬのではないかといふやうな氣がしてくる。自分を餘り大事にしてくれない、自分に對して不信義至極なことを父親に背き送つたりする、物解りの惡い女であるが、死ぬと思へば氣の毒でもある。そしてもしそんなことになつたら、否應なく母乳を離したばかりの乳兒を、これから先き男手に引取つて、どうして育てゝいから。自分がその厄介に困るよりも、まだひと誕生にもならないうちに實母に死別した子供が追々物心の附くやうになつて、どんなに悲しい思ひをするであらう。そんな感傷的なことを、考へるともなく思つてゐると、今度は又淡紅色と綠をぼかした地に秋の七草の染模樣の友禪の單衣に小さいちやんちやんを着て、胸のあたりを牛乳で汚してゐる子供が、病院の寢臺の上にえんちやをしてゐる寂しい顏が眼に浮んで來る。七月の末頃やつと這ひはひが出來だしたと思つたら、瞬く間にそれが達者になつて

十日ばかりも立つうちには、今奥の三疊の鏡臺の處で抽斗を引出して掻きまがしてゐると思つてゐると、もう八疊を這つて來て、今度は茶の室の茶簞笥の抽斗や戸棚を手の屆くところは片つぱしから掻き探した。そんなに自由に這つてゐたのが、ぷつりと母乳を離れ、母親の手から知らぬ者の手に渡されたので、急に元氣がなくなつたやうになつて、家に居る時分には愛すと面白いほど笑つてゐたのに、どんなにしてみても少しも笑顏を見せなくなつた。産湯をつかつて、はじめて産婦の枕頭に持つて來て寢かした時から、顏は父親の宇治とちがつて、丈の詰まつた、額など母親の惡い處に似て角ばつてゐたが、眼の切れと顏の中高なところなど父親にそつくりであつた。夏の間日中は決して外に出さないやうにしてゐたのと、此の頃の身體の調子が違つたりした關係で、顏が少し細つて、色が白くなつたゝめに、黒眼がちの眼尻のあたりが一入冴へて來た。

宇治は、そんなことを思ふともなく、庭前の斷腸花の小さい淡紅色の花を見てゐると、むら／＼と牛込の小兒科の病院にいつてその子供の顏が見たくなつてくるのであつた。そして、輕微な熱のあるのを推して、よく出掛けていつた。牛込まで往くと、そこから本郷の大學病院までは近いので、ついでにお悦の處へも見にいつた。

お悦は入院した時には、もう腦の方の症狀はいくらか峠を越したところで、博士達はそれよりも腸の方の症狀に對する危險を感じてゐるのであつたが、それでも入院後暫く經過を診た後で脊髓の血精檢査をした結果によると、やつぱり明かにその時分流行してゐた眞性の腦炎であることが分つた。しかし、今となつては、その方の病勢よりも腸の方の疾患により多く複雜な不安が存在してゐるのであつた。發病後一週間ばかりして初めて大學からエム博士の來診を仰いだ時に、博士は精密なる科學者の態度で先づ腦部から胸、それから腹部と、順々に診察をしていつた時、腹部がひどく膨脹し

てゐるのを見て、ふつと行き留つたやうに、そこに診察を停滞さして、頻りに小頸を傾けながら幾度となく腹の膨脹部を撫でゝ診てゐた。四ケ月ばかり前の六月頃から月經を見なくなつてゐることは、掛り醫からこれまでの容態を雜と話した中にも博士に告げたことであつたが、博士の不安はそれとは違つたものであるらしかつた。

「これは可けない。……」と、博士は幾度も獨言をいひながら、もの〻二十分間くらゐも腹部の其の點に愼重なる診察をしてゐた。

今、博士からさういはれるまで、素人には誰れにも氣の附かなかつたことであるが、なるほどさういはれてみると、腹の膨脹してゐるのは、單に妊娠してゐる爲ばかりでもなかつた。その位地も大部違つてゐるのであつた。

「こゝは何時からこんなになつてゐたんです？」博士は顔を上げて訊れたが、傍に附いてゐる者には、誰もそれを明瞭に答へうる者がなかつた。主治醫にも初めて氣の付いたことであつた。

「昨日の晩ケイ博士に二度目の御診察をして頂きました時にはまだそんな兆候は認めませんでした。」主治醫は說明した。

「それから貴方も今までまだ一度も診なかつたんですね。」エム博士は訊いた。

「えゝ、左樣でございます。」

博士は又しても小頸を捻りながら、

「どうも此處が良けないなあ、…………痛かあないかなあ。…………痛いと云はないですか？」

博士は又顔を上げて傍に附いてゐる者の方を見た。

さう訊かれてみると、六時頃ケイ博士の診察のあつた後、昨夜から病人は腹が張つて苦しいことを時々訴へてゐたの

であつたが、附添の看護婦などもそんなにひどいことゝは思はなかつた。

それで、一とゝほり注意深い診察の了つた後エム博士のいふのは、からであつた、――もつとよく、血液なども検査した結果でなければ十分精確なことはいへないが、頭の方の病気はやつぱり脳炎らしい。たゞ脳炎であるとすれば時々起き上らうとしたり、手を動かして騒いだりするのが脳炎だけでは説明出来ないことになるが、それは或は平常の性癖が病中自然に表はれるのかも知れない。しかし頭の方は今ではもう問題ではなくなつた。問題の中心は腹の方にある。こんなに腹が張つてゐるところを見ると、もつとひどい腹痛を訴へなければならぬ筈であるが、それを訴へないところをみると、まだ痛みは緩慢なものと思はれるが、どうかすると腸の捻転の心配がある。それがもし杞憂であつて、単に騒ぎに止まれば却つて好いことになるが、もし不幸にそんなことになると、自分が責任を以て診察する以上、十分に注意して万一の準備をして置かなければならぬ。それには、もう一人誰れか外科の専門家に来て診てもらはなければならぬ。――といふのであつた。それから又エム博士の紹介状を以て博士の同僚である外科のエス博士の来診を乞ふた結果、どちらにしても、もし腹部の手術を行はなければならぬことが出来した場合には、自宅では、とてもそれを完全に行ふ訳にはいかないから病院に入院した方がいゝといふことになつたのであつた。

すると入院以来の経過によると、幸ひにして腸の捻転ではなかつたが、腸の狭搾症は、診察の結果、今度の脳の疾患に先立つて、随分古くからある痼疾であつた。彼女は平素から便秘の癖が強かつた。それが既に腸の健康でない所以であつた。脳の方は、発病当時三四日は全く夢中であつたのが、それでも一週間二週間と経過するうちに、少しづゝ確かになつて来た。それでも記憶が朦朧としてゐて、朝と昼とが分らなかつたり、食事をしたか、しなかつたかといふやうなことを忘れたりした。初めの一日か二日は殆ど絶食にしたあとで、段々流動物から食物を進めていつて専ら腸の方の大事を取つてゐ

たのであつたが、腹の張つてゐたのも一日々々と緩解していつたのは好かつたが、ともすると診察の結果では今までは姙娠と定まつてゐたのが、さうでなくつて子宮内に別な異狀が生じてゐるのではないかといふやうな疑ひが起つたりした。さうすれば腦の疾患と腸の痼疾とのほかに又新に婦人科の病を發見したことになるので、病人自身の難澁はいふまでもないことであるが　そんな煩雜なる病人を背負はなければならぬ負擔の容易でないことを思つて、宇治は私かに心に歎息を漏らすことがないでもなかつた。しかし、それは、單に金錢上の負擔の輕からざることの迷惑とか、又この先き何時になつたら快癒するか分らない、――それとも死ぬかも分らない病人を背負つて、今はまだ小兒科に預けてゐるが、漸つと、それも爲方なく母乳を離したばかりの乳兒を男手に抱へて、どうして育てゝいくかといふやうなことではなく、野蠻人と相距ること餘り遠くないやうな、無智で粗野で不作法な人間を父親や弟妹に有つてゐたり、又發病前からの彼女自身の、宇治に對して、粗略であつたり不信實であつたりした行爲の爲めに、この際病人に向つて遺憾なく表はされねばならぬ彼の赤誠と好感と同情の發露を妨げてゐることであつた。彼は、自分に對して無理解な敵意を抱いてゐるやうな、父親や弟妹に取卷かれてゐたり、自分を呪つた手紙を父親に書いたりするやうな不信實で、無智な病人をさうして治療しなければならぬことに不快な矛盾を感ずるのであつた。それで、入院後一週間ばかりの間は、經驗に富んだ專任の看護婦や此方から附添はしてゐる女中のほかに、傍に附いてゐる弟の慶吉の顏を見るのが不快さに、宇治は毎日缺かさず中野の郊外から樣子を見に往つたにもかゝはらず、あんまりお悦の病室を訪れることに氣が進まなかつた。母子を二ヶ處の病院に入れて、それを支持しなければならぬ宇治は、その經費を捻出するだけでも、決して迂濶しては居られなかつた。何方にいつても、病室で、ゆつくり無駄な時間など費して居られなかつた。それゆゑ肉親の兄弟を病人の傍に附けておくことは、宇治にとつては安心ではあつたが、彼女の發病を以つて全で宇治の責任であるかのやうに誤信してゐるお悦の

肉親の顔を見ることは堪へやうもない不快であつた。宇治にしては、もし自分に扶養しなければならぬ責任のあるものとして、自分の老母や兄弟が重患に罹つたとしても、これ以上のことは出來ないと思ふくらゐ、彼れ自身にしては出來得る限りの手を盡して、さうして大學病院にまで入れてある以上は、お前たち好きなやうに勝手にしろと、父親や弟妹にお悦を投出して置くやうな氣になつてゐるのであつた。それでも姉の發病以來ずつと附つきりで看護に努めてゐた摩吉に對しては、宇治もその骨折りを認めぬこともなかつたが、彼の粗野で無智で禮儀のない行爲は、何時までも宇治に不快の感じを起さしめずにはゐなかつた。。宇治は、摩吉等の顏を病室で見るのが、厭でいやで堪らなかつた。さうして今後お悦の病氣が全快しても、彼女の偏執な性癖が依然として發病前のとほりであつたり、そんな、性質の香ばしからぬ弟などが附いてゐる上は、彼等の方で、かねて希望してゐるとほりにお悦を實家に離縁してしまつた方が双方の利害から考へても、又前途の長い子供の將來を考へても、宇治の死後に後患を潰さない所以であると思つた。宇治も、不意に天から降つて涌いたやうに母親の手から無理にも引離さなければならなかつた乳兒のことを思ふと、それを、今後一生實母から離してしまふことを想像すると、實に斷腸の思ひがしたのであつたが、段々日數を經る間に、彼れ是れと愼重に利害を考慮してみると、長い一生涯實母の慈愛を身に染み一つ知らないで過させる無慈悲と、實母はあつても、そんな實母の弟妹の爲に子供が將來どんな惡い影響を受けるかも知れぬといふ氣づかひとを計較してみると、今、生牛盲目的な、センチメンタルな憐憫の情に打勝つことが出來ないので、自分の死後にまで長く憂ひを遺す方が、遙かに子供の爲に無慈悲であるか分らないと思つた。宇治の覺悟した決心は、母子が居なくつて、女中一人を對手の、孤獨な瞑想的の日を重ねて居る間に、段々重い物體が深い水の底にでも沈んで行くかのやうに纏められて來た。しかし、それには自分と殆ど同じ程度の重要さで、お悦の意見をも聽いてみなければならぬと思つた。今重病の床に就いてゐる彼女には、

無論そんなことは一切口外しないことにしてゐたが、平常から彼女が時々口に出してゐたところから察すると　宇治との間に出來たその子供を、母親らしい責任を以つて養育して行くことは、彼女にとつて可なり氣苦勞な負擔であつた。

宇治はそんなことから思つてもお悦の病氣が本復する時を待つて、その問題を解決することは餘り困難とも思はなかつたが、彼女の婦人科の方の症狀が明瞭にならないのが、その問題を一層複雜にした。

普通の姙娠であるか、或は子宮内部の異狀であるかは、病院の醫員のいふところによると、一度レントゲンにかけて診ねば十分に分らないといふことであつた。そして、それをするには身體が、もつと元氣を回復してからでなければ手が下せなかつた。いつも忙しい宇治は、直接醫員から、そんなことを聞くことも出來なかつたが、附添の看護婦の話で、それを知ることが出來た。宇治は、それが病氣であつても又普通の姙娠であつても、どちらにしても厄介なことであると思つたが、むしろ巧妙な外科手術によつて治療することの出來る程度の病氣であることを心に念じてゐた。子供の將來のことを思ふと、たつた一人だけよりも、男でも女でも、生涯の伴侶として、もう一人弟妹があつた方が寂しくなくて好いと思ふのであつたが、そんな重患でゐて姙娠してゐるのは、一層苦痛であらうと思はれたし、もし姙娠であつても、それが滿足な結果で出産することは殆ど覺束ないことであつた。それよりも尚ほ面倒なことは又一人出來たために、双方の關係が、今までに倍して一層ほぐし難いものになることであつた。

一方大學病院にゐる病人を包んでゐる周圍の空氣が低氣壓を釀してゐるやうな、憂鬱で、不快なものであつたのと異り、小兒科の方に居る子供の方は、宇治にとつて感傷的な舞臺ではあつたが、感傷的は感傷的にしても、お悦の發病以來溜まつてゐる宇治のいろんな不愉快な氣持を、たとひ刹那的にでも慰めてくれるのであつた。生まれて十月ばかりの

間といふもの、たゞの一日も母親の乳を離れて寝たことのない子供を、さうして他人の手に任かして置くことは、宇治にしては胸を挫ぐやうな辛さであつたが、一時さうして置くのが乳兒の發育の爲に好い結果を齎らすことを思ふと、涙ぐましい感傷的な氣持ちは仰へてゐなければならなかつた。

その醫院では、院長も看護婦もよく氣を附けてくれてゐるらしかつたが、つい五六日前に口入れ屋から頼んだばかりの十八になる少女を附添はして置くことは、ひどく不安であつた。宇治は内外のことをたつた一人でやつてゆかなければならないので、家を留守にして病院へ寝に行くことは出來なかつたが、それでも自分の風心地が少し心好くなつて、此の間中の疲れがいくらか回復したら、子供の處へは偶にいつて寝てやりたいと思つてゐた。

さう思つてゐるうちに、九月初旬の陽氣の悪い時分のことゝて、子供の病人が多くつて、間數の少ない小兒科の醫院は入院患者で滿員になつてしまつた。宇治はある日醫院を見廻りに行くと、昨日まで六疊の一室に一人でゐた子供の病室に寝臺が二つ並べられて、前日まで隔壁を仕切りにして次の六疊に居た病兒と入れ込みになつてゐた。その病兒は宇治の子供よりも前から六疊に入つてゐたのであつたが、腎臓が悪いのだとかいつて、なかなかの重態であつた。

それで、宇治が入つて來たのを見ると、病兒の母親は同室したことを辯解した。

「昨日貴下がおいでになつて、お歸りになつた後で、俄に、長くはないから暫く此方と一緒になつて居てくれつて院長さんからのお話しで一緒になりましたんですよ。貴下の方のお嬢さんは御病氣ではないんですし、私の方の子供は病氣なんですけれど、決して傳染をする氣使ひはないと院長さんも、それは自分が責任を以て保證すると仰有るんですから、さぞお氣味がお悪いでせうけれど、どうぞそれだけは大丈夫なんですから御安心なすつて下さいまし。いづれ院長さんから委しいお話しをなさると思ひますけれど……」

その病兒の母親は、まだ三十に少し前と見られる、大柄の、東京育ちらしい、不斷の言葉づかひもすゞしい妻君であつたが、小官吏か何からしい夫と始終泊りつきりで介抱に來てゐた。その病兒の室の前を通つて、宇治は何時も縁側づたひに奥の八疊へ入つて行くので、そこを通るたびに頭だけ下げてゐた。彼女は、宇治の返辭をも待たず、又立てつゞけに話るのであつた。

「同室にするのでも一應宇治さんにさう仰有つてからでないと、宇治さんに惡かございませんかと、院長さんにさう申しましたんですよ。……それでも院長さんの仰有るには、なに宇治さんの方だつて、何も初めから一人一室の御約束をしてゐた譯ぢやないんだからと仰有るもんですから。……内の子はこの通り三十九度から四十度の熱のことがありますけれど、症の知れた病氣で、決して傳染はしないんださうですから。それは院長さんも、自分が責任を以つて保證するからと仰有るんです。……」

宇治は、その妻君の一人で話しつゞけることを、唯「はあゝゝ」といつて、聽いてゐるだけであつたが、まさか傳染病患者と同室さするやうなことは院長が爲まいと思つてその點には別に不安を抱かなかつたが、隨分煤けた、普通の住宅づくりの古い建物であつたが、廻り縁になつた八疊で、そこに一つだけベッドを置いてある間は、子供を遊ばすにも自由であつた。宇治は、そのうち自身の風邪心地がさつぱりしたら、此處に來て泊まつていかうと、もう此の間から、それを自分一人の心の中で、いとせめて慰安に思つてゐたのであつた。彼は、お悦が病氣する前に、女中などの居る處で、子供を愛しながらよく戯談をいつてゐた。

「でこちやん、お父さんが死ぬ時には、お前を一緒に伴れてゆかうか。……お前が死んだらお父さんも一緒に死ぬよ。」實際宇治は、以前戀してゐた女に對しても、これほどとは思はなかつたくらゐに、今子供を愛してゐるのであつた。

彼は此の間中の苦さや痛心を經ずと、一人の胸に堪へながら、どうかすると眞夜中にふと眼が覺めて寢床の中に仰臥しながら二ケ處の病院に預けてある子供のことを彼れ是れと苦勞しながらも、あの隣室の病兒のやうに兩親が晝夜附つきりで油斷なく介抱してゐるのをみると、つい此の間雇入れたばかりで、氣心の知れない、それもやつと十八といふ、たつた小婢一人を附けて置くのが不安でもあり、無慈悲のやうでもあつた。幸ひにして自分の方の子供は別に病氣といふのでなく、たゞ母親の病氣の爲に急に離乳をしたゝめに、それが、牛乳なりお粥なりの人工的の食餌に馴染むやうになるまで、預けて置く譯であつたが、もしかしたら片親には死別の悲みを見なければならぬやうなことがあるかも知れぬ。そんなことも知らずに人手まかせに扱はれてゐるのが、宇治には堪へられない憐れさを唆つた。子供は夜中に高いベッドの上で眠つたまゝ動いて、そこから下に轉げ落ちた。そんなことは一度や二度ではなかつた。宇治は後でそれを聽かされて、はつと思つた。そのことをいつて看護婦長に異狀はないだらうかと訊くと、もう、三十をいくつか過したらしい老練さうな彼女は、微笑しながら、

「大丈夫でございますよ。人樣の大事なお子さんをお預りして居るんでございますから、十分氣を附けて居ります。」と、東北訛りの言葉で安心させるやうにいふのであつたが、それには十分信用が置けるにしても、二十日ばかりも病院に居つた後、退院間際になつて、つゞけて居る好い女中のないために、此方から遣つておく附添ひの者が度々人が變つて、三人めの者が往つてゐた時に、同室の病兒の母親は、一度宇治が入つて往くと、又いきなり言葉を掛けて、「旦那、今まで來てゐた三人の中で今度の附添ひの人が一等好い人ですよ。あんな人なら本當に安心して任かして置かれます。もうこれからは　あの人に定めてお置きなさいましよ。それは何から何までよく氣を付けて、お孃さんを大事にしてゐますよ。昨夜だつてねえ」と傍にゐる中年の女を振向くやうにして、「殆ど半分は夜中寢ないで面倒を見て、鳩ぽつぽや繼

さんかゝさんを唄つたり、お嬢ちやんを負んぶして自分に御飯を食べる時にでも、此方のお膳が低いもんだから、おんまり俯向くと、背中でお嬢さんが、さぞお窮屈だらうと云つて、自分の膳をそつたやうにして御飯でも食べてゐるくらゐに、それは細かく氣を附けてゐますよ……今度の人に、ずつと附添つて居つておもらひなさいまし」

病兒の母親は一人飲込んで、宇治に向つてさういつて話した。丁度その時、附添ひは子供を負つて何處か外へ遊びに出ていつて居なかつた時であつた。それで宇治も、我が意を得たやうに、

「えゝ、私もそのつもりで居るんです。」

「あんな人たら、ほんとに御安心ですわ。……此のおますさんもよく落しましたが、お嬶さんだつて、お嬢ちやんを何度も縁臺から落したんですよ。」

病兒の母親は又いふのであつた。おますといふのは初めから一週間ばかり附添はし置いた若い女で、お嬶といふのはもう二十六になる、夫の有る婦人で臨時に雇入れた者であつた。宇治は、そんな話を聞かされると、感傷的(センチメンタル)な戀心が堪え難いほど、いとほしく募つて來るのであつた。

「はあ、さうですか。」と、心配さうに颯と顔を染らして、しばらく呆れた口を力なく開いたまゝでゐたが、

「この縁臺の上から、眠つたまゝ轉げ落ちたんぢや隨分非道いですなあ。可なり高さがあるんですから。そんなに度々落ちて、よく何ともなかつたなあ。……脳でも悪くしてゐないかなあ。」宇治は喞(かこ)つやうにいつた。

「いえ、そんなことはありませんでせう。轉げ落ちたといつても、いつも都合よく蒲團の上に落ちるんです。……ほかの人が其方側の縁臺の下に一枚蒲團を布て寝てゐるでせう。その上に落ちるんです。ほゝゝゝ。」病兒の母親は笑ひながら、

「さうすると、おますさん、自分はぐう〳〵よく寝入つてゐるところへお嬢さんも眠りながら轉げ落ちて來るもんだか

ら、びつくりした眼を覺まして毎時も大騒ぎをするんです。……でもあの人、年が若いから夜はそんなに何も斯も忘れてしまつて、ぐう／＼寝てしまひましたけれど、お孃さんを可愛がるにはよく可愛がりました。舐めるやうにしてゐましたよ。……その次に來たお醴さんといふ人は氣のきつい人でした。自分にも四つとかになる子供が一人あつて、遠くの方のお國のお母さんの處に預けて置くんだとかいつてゐました。自分にも子供があるといふのに、お宅のお孃さんは、病氣ではなくつても、よく夜分にお泣きなさるでせう、そして、あんまり泣くのが酷くなつて、つい他の病人の附添ひにうるさがられたりすると、お孃ちやんは、どうしてそんなに泣くんですよといつて、それは隨分ごつ／＼いひましたよ。此の間も自分が風邪をひいて氣持が悪いといつて寝てゐた夜なんか、てんでお孃さんのことなんか好い加減にうつちやつて置いて、自分の身體ばかり大事にしてゐましたよ。……そんな時にはねえ、わたしもたゞ見てはゐませんでした。こちらも、こんな病氣の兒ですから行き屆きませんけれど、出來るだけ氣を附けて上げるやうにして居りました。」

宇治は心から感謝するやうな表情になつて、二三度輕く頭を下げるやうにしながら「いや、さぞ、いろ／＼お世話になりましたことでせう。私も氣心の知れない他人にまかせつきりにして置くことは實に氣づかひで。それに行き屆かない者を附けて置くことは、病院にも餘計厄介を掛ける譯なんですが、何しろ私一人で四方八方に私を使はなければならないんで、溜りませんよ。これでも臨時に、今ちやうど五人人を雇つてゐるんです。私も時々貴方がたのやうに來て泊つてやりたいのですけれど、まだそこまで屆かないんです。」宇治はこぼすやうにいつた。

病兒の母親もともに顔を曇らせながら、

「ほんとに貴方も大抵ぢやございませんわねえ。……それで、あちらの御病人はいかゞです？」

「ありがたう……生命だけは大抵大丈夫のやうですけれど、まだ一向捗取りませんので……」

「ほんとにねえ。……お母さんがそんなだといふことを少しもご存知ないんですから、お嬢ちやんがお可哀さうですわ。」

こんなことを、同室して後には時々話すことがあつたが、それから病室を出て宇治が、院長の診察室の方へ顔を出すと、院長は、彼の顔を見ると、

「あゝ宇治さん、一寸貴方に……」と、院長は、さも濟まないといつたやうな表情をして、昨夜九時頃になつて、不斷からの出家である家の男の兒が急に氣候あたりから、なか〳〵の重態になつたので、退引ならず室を都合して頂からなければならぬことになり、その方に隣室を空け、止むを得ず宇治の方の八疊を半分使ふことにした事情を詫びた。院長は明晰なる語調で、

「そんな譯で、甚だ、事後承諾をして頂かなければならぬのは誠に相濟まない次第ですが、何分私の處も此のとほり手狹なものですから……………入院さしてくれといふ患者はその他にも幾らもあるんですが、みんな斷はつてゐる次第です。しかし、昨夜來たのばかりは、どうしても斷はる譯にゆかない家の兒なもんですから、……急病ではありますが、決して傳染病ではありません。傳染病患者は私の處では一切入院させないことに定めてあるんですから……貴方の方へ同室さしたのも、時々四十度からの熱があつて、これも重患は重患ですが、腎臓炎で、決して傳染の黴菌のゐないことは私が責任を以つて保證します。」

院長は凛然とした言葉の端々にも、入院患者を受付けるやうになつて、まだ極めて日が淺く、諸般の設備が不行き屆きであること、病室の手狹なことなどを明らさまに謙遜していふのであつてみれば、宇治の方では無論院長の計らつたことに不滿を抱く理由もなかつた。それのみならず院長は、そんなにまで辭を盡して事情を釋明しなければならぬのか

と、宇治は心の中で却つて氣の毒にさへ思つたくらゐであつたが、それはさうであるとしても、今まで廣々と廻緣などの附いた八疊一室を使つてゐたのに、さうして他人と同室することになると、秋雨にいとどしく陰氣な、薄暗いその室が一入窮屈で陰氣で堪らなかつた。宇治は自分の風邪ごゝちさへ全快したら、こゝへ來て子供の傍に泊まるのを樂みにしてゐたのであつた。そして自分にも神樂坂や寺町あたりの夜の街の賑はひを見て、少しは、心苦ばかりつゞく自分の心を慰めたいと思つてゐたのであつた。

醫院を一歩出て電車通りを横切つて向うの横寺町の方へ上がつてゆくと、四季の草花を賣つてゐる店があるので、宇治はもう此の間から何か草花の鉢を一つ大學の病院へ持つていつてやらうと思つてゐた。そして子供の病室へも一つ何か置いてやらうと考へてゐた。自分が時々來て泊まるやうならば何にしようか、……その草花屋にも丁度季節のもの丶秋海棠だの芙蓉などの花鉢を並べてゐた。宇治は其等の花をもつと多く借家の庭に植へたいと思つて、好い鉢を五つばかり取りのけさしておいたのであつた。その紅芙蓉の鉢を子供の座敷に置いてやつたら、いくらかそこらが明るくなるであらうと思つてゐた。宇治は、子供の母親がまだ病氣にならぬ前から自分の傍へ子供を寢かしたかつたが、それをするには、まだあんまり小さ過ぎた。今に四つ五つになつたら、自分の傍へ寢かすのを樂んでゐるのであつた。醫院の病室に草花の鉢など置いて、そこに寢泊りしたい希望も、そんな隣室の病兒と同室することになつては、もう出來ないことになつてしまつた。

院長に會つたり、病兒の母親とそんな話をしてゐるところへ、一寸そこまで出てゐた子供が附添ひの女中に負んぶされて歸つて來た。

「そら、お父さんがゐらしつた。」女中は背中の子供に聲を掛けたが、母親のまだ何事もなかつた時分、家にゐて、よく笑

つて見せたにも似ず、こゝへ來てからは、どんなに愛しても一度も好い顏をしなかつた。また一向性根のない乳兒にも何となく、樣子が違つて來たゝめに、心が引立たないのであらう。無心の子供にそんな思ひをさす可哀さが、また親心をして感傷的にならしめるのであつた。

宇治は、

「おゝ」といつて、子供の顏をぢつと覗き込んで、「どうした？」と、指先で輕く頰をつゝいたが、子供は笑ひもしなかつた。たほもじつとその浮かぬ顏を見てゐると、宇治は溜らないほど慘めな氣持がして來た。たとひ院長が責任を以つて保證する傳染性の患者でないにしても、とにかく膿瘍を並べてゐるのは時とすると四十度の高熱を發する病兒である。それに反して自分の子供は、突然の離乳その他の事情の急變からいつも氣嫌の好くない顏をしてゐるが、少しの病ひ氣もなく、眼は常に變らず切れるやうに涼しく澄んでゐる。この何物にもまだ汚されてゐないやうな乳兒を、この滿暗い陰氣な、侘しい病室に置いておくといふのは、宇治のセンチメンタルな親心にしては、まるで牢獄の中に置くやうな慘めさを感じた。宇治は咄嗟の間に、いつそ今日すぐ退院さして連れて歸らうかと思つた。自宅は二三日前に母親を大學の病院に入れてから後は、自分と女中と二人きりで、家の中はこの間中の騷ぎに引換へ、殊に水の退いた後のやうに淸々して廣々とかたづいてゐた。初秋らしい爽かな日影は、病人のあつた不幸な家にも差してゐた。

宇治はいろ／＼心に迷いながら、又院長の室に入つて、そのことを打明けて相談すると、院長も當惑さうな顏をして、

「……それは、貴下の方で、病室を一緒にしたといふことに就いて氣持ち惡くお思ひになるといふなら、それは別問題ですが、………今連れて行かれるといふことは、非常に私にしても婦長にしても殘念なんです。離乳から、初めは少量の牛乳にして、これから段々食餌に慣らすやうにしてゐるのが極めて順調に行つてゐる所なんですから。そこを連れて往かれ

ては吾々の折角の苦心が何にもならない。それに家庭に連れて行かれても、今の所まだ、とても素人の手にはうまくやつていけませんよ。」といつて、院長は堅い確信の色を浮べて説くのであつた。その利害は宇治にもよく解つてゐた。たゞ宇治のセンチメンタルな氣持ちが何となく忍びないのであつたが、院長にさういはれると、彼は又理性的な判斷に立ち返つて、

「いや、よく分りました。それは、私の方でも此方へお預けして置く方が自宅へ連れて歸りますよりも、どんなに安心だか知れません。なるべくならば一ケ月でも二ケ月でも御厄介になりたいくらゐに思つて居るんです。」

宇治は快よくさういつて、子供はやつぱり當分そのまゝにして置くことにした。そして、同室の病兒の母親にも何分よろしくと挨拶をして廊下に出た。廻り縁を取り卷いた狹い庭はこの間中の秋雨つゞきに黑く濕つて、金魚を放した大きな水槽のまはりには萩が今を盛りに咲き溢れてゐた。何を見ても宇治には、それ等がみんな不幸な感傷を喚るのであつた。

それで宇治は、少しでも子供を陰鬱な病室に置かないやうにするために、自分の時間を都合しては、出掛けていつて子供を外に連れ出すやうにしてゐた。天氣の好い日はいふまでもなく、暗い秋雨の降りつゞく日には、その爲に又家に凝としてゐるに堪へられなくなつて、雨が降れば降つてもやつぱり雨を冒して出掛けていつた。子供の母親が大學の病院に行つてからは、宇治は毎日午後から兩方の病院を見舞はつて來るのを日課のやうにしてゐるのであつた。ある日、もうこの間から買つたまゝ草花屋に預けてある野菊の鉢を持つて附添ひの婦に子供を抱かして自動車に載せて母親の病室に連れて行くと、病人はそれでも少しは元氣が附いて來たと思はれて、子供の來たのを見ると、仰臥したまゝ、その名を呼んだが、子供はもう、親といふことを忘れてゐて、病人の窶れた樣子を見ると、わッと泣き出した。

宇治は夜自宅に獨り寢てゐて、ふと眼を覺まして百日せき病室に居る子供のことを又しても思ひ出して、附添ひの者が自身は寢呆けて前後を忘れ、寢臺から轉げ落しはせぬであらうか、もし落して頭を打ちはせぬであらうかといふやうなことを、いろ〳〵氣にし出すと、とても落ち着いて安眠することは出來なかつた。それでも又思ひなほして、今二人の者を病院に入れて置き、この上にもし自分が神經衰弱などになつて働くことが出來なくなると、それこそ一層困ることになるのだと思つて、つとめて放膽的になつて、夜は平常の無事な時よりもよく眠つた。

そんなにして堪えがたい焦燥の日が幾日かつゞいて、それでも子供は、院長の注意により牛乳からだん〳〵おまじり、それから柔かい粥といふやうに稍々人間らしい食餌に馴染むまでに漕ぎつけた。院長は何時も屈托のない人で、宇治の顏を見るたびに、

「大變に成績が好いです。」といつてゐた。

お粥を食べるやうになつてから、一週間ばかりして、百日せきの注射を三度完全に濟ました上で、子供は退院してもい〻といふことになつた。

そのうち月が變つて十月になつた。お悦の病氣は一日々々と惡い方ではなかつたが、まだ、なか〳〵退院といふところまでは遠かつた。毎日見舞つてゐる宇治には病勢が進んでゐるのか、退いてゐるのか分らないくらゐ遲々としてゐるのであつた。

「どうですかな？」と、宇治がドアを押して入つてゆくと、専屬の看護婦は、

「別にお變りはございませんです。」といつてゐたが、寢台の柱に掛けてある病床日誌を取つてみると、入院以來もう一

ケ月餘になるが、體溫は、あれからずつと通常であるし、食欲も亦た順調に進んでゐるのであつた。

「まだ、今日は幾日といふ日のことが確かでございません。それを段々にお教へしてゐるんざいます。」東奥の方の生れで、クリスチヤンの看護婦はそんな口調でいつた。

腹の方の張つてゐるのも長い間に少しづゝ和らいで來たが、婦人科の方は果して姙娠であるか、子宮の病氣であるかまだ不明であつた。宇治は、主任醫のエム教授に一度會つて樣子を訊きたいと思つてゐたが、いつも自分が多忙であるのと、又教授の方でも常に多忙であらうと察して、その機會をつくることも出來なかつた。それに宇治は、エム教授に限らず醫者には疑はず信頼する方で。生半素人が病氣のことなど、彼れこれ訊いてみたところで、病が重くなつて、素人の手に叶はない場合には、やつぱり醫者に賴らなければならぬことを思ふと、一切萬事專門家に生命を委ねて、素人は敢えて、訊いて効なきことを、かれこれ言はぬ方が可いと信じてゐるのであつた。エム教授にはそんな次第で、入院後十日ばかりして偶然廊下であつたことのあるきり、絕えて會ふことがなかつたが、助手の掛り醫には偶に病室で出會ふことがあつた。しかし、そのいふところも大抵看護婦から每時聽いてゐるところと同じことであつた。

そのうち、病人にも健康な者にも快適な十月の月も段々老いて來た。宇治もその頃になると、初の間は、ひどく往きにくい路のやうに思はれてゐた大學病院へ往くのが每日の習慣になつて、いつも午後からそこまで往つて來なければ夕飯時の腹加減も好くないといふやうになつた。日脚の段々詰まる時分のことゝて、二時頃までかゝつて日課にしてゐる職業上の用事を果たすと、すぐ洋服に改めて出掛けて行くのであつたが、夕方には子供が早く眠るので、その前に風呂に入れて夕飯を食べさすことまで宇治が自分で見てやるには、どうしても遲くも五時までには歸つて來なければならなかつた。東京の市中の方に出ると、今までの習慣では、何處かへ道草をしなければ氣の濟まなかつたものであるが、今は夕暮

れ時に歸りを急ぐ電車が乘り切れないほど、來る電車ごとに滿員であつたり、待つてゐる電車の來やうが遲かつたりすると、もう堪らないほど氣が氣でなかつた。大學の病院を出て來ると本郷の區役所前から電車に乘つて、春日町で乘換へ、それから水道橋で下車して省電で戾つて來るのであつたが、春日町で電車を待つてゐる間、宇治は、うすら寒く頬を吹いてゆく秋風を身に感じながら佇んでゐると、そこに開いた公設市場の八百屋の店頭には、さながら闌けゆく秋を眼に見るやうな、蕭殺の街衢の灰、焦茶色の栗、燻縮色の柿、眞紅な林檎などが、色とりどりの秋を飾つてゐる。宇治は、つくづくと秋の深いことを思ひながら、何となくその秋を樂むことの出來ないやうな不幸な氣持ちに毎時も胸を塞がれてゐた。

病人は、五十日ばかりも入らなかつた風呂にも入つていゝといふことになり、食餌も殆ど通常に復して、もうそろそろレントーゲンにかけて内部を透視しても差支へないといふまでに元氣は回復して來た。看護婦が附添つて初は廊下くらゐを歩いてゐたのが、天氣の好い日には病院の構内を少しづゝ歩いた。

發病の頭初、傍の素人の眼を最も驚かしたのは胸部の疾患であつたが、それも漸次に回復して、エム教授をして、その胸の疾患よりも此の方が重大であるといはしめた腹部の病状もつゞいて順調に復して來たところで、もう一つ最後に取り殘されてゐる疑惑は婦人科に屬することであつたが、入院以來今までの診斷によると、多分姙娠ではなさゝうだといふことを聞いてゐた。それも宇治は、エム教授や助手の醫員から直接に聞いたのではなく、看護婦が、エム教授やその助手達とドイツ語交りに話してゐる言葉の端を聞いて傳へるところを又聞いてゐるに過ぎなかつた。

「姙娠でないとすれば外科の手術さいますが、大抵もうその方の御病氣は知れてゐるんさいますから、御心配なことはございませんさいます。いづれ先生達が好いようになさいますですけれど、もしさうさいましても、その方は別にお

急ぎになることでもございませんのですから、此の御病氣が一度すつかり回復なすつて、又出直して手術をなさいますことに、いづれなりませうと思ふんございます。」

看護婦はそんなことをいつてゐた。宇治は、降つて湧いたやうな病難騒ぎで、今までに、單に金錢ばかりではない、隨分自身の精神を過勞してゐるのであるが、やつと腸の疾患と腹部の痼疾とが少しく快くなつたところで、又姙娠にしても或はさうでなくて他の婦人科の疾患であつて、その爲に又新なる治療を施さねばならぬやうなことがあるとしても、それは何處までも徹底的に醫師の手に掛らなければならぬことであるが、もう此の上多大の經費と人手とを要することは宇治にしては過重の負擔であつた。それにも係はらず彼は、婦人科の疑問がなるべく姙娠でないことを望んでゐた。はじめて、どうも姙娠ではないらしいといふことを看護婦から聞いた時に、さうすれば又も一つ余計な病氣があるのかと思つて、うんざりしたのであつたが、それでも姙娠であるよりは、まだ好いと思つてゐた。

「どうもさうではないらしいお話でございます。……奥樣御自分でも、姙娠ぢやないでせうといつてゐらつしやいます。」看護婦がさういふのを聞くと、宇治もその氣になつた。實際姙娠であるとすれば、宇治は、それがどう考へてみても不思議でならなかつた。尤も今生まれて育つてゐる子供が、だん／＼大きくなつてゐるのを見てゐると、宇治は時々、自身が生ひ先きの短い年齢であることを忘れて、自分の亡き後になつて、親もなく兄弟もない、たつた一人きりでは、子供がさぞ頼りない思ひをするであらうと、どうせ小さい内に父親に死に別れねばならぬ不幸を見るのであつても、せめて孤影相弔する弟妹がも一人あつたら、自分が達者で居る限り育てゝ置いてやるのだ、といふやうなことを思はぬこともなかつた。が、それにしては、欲をいへばもう一年くらゐ後であつても好かつたのだ。上の子がまだ立つことも口を利くことも出來ぬ間に、もう後が出來ようとは僅に幾度考へてみても不思議で堪へられなかつた。そんなことのあらう

筈がないのだ。それでも尚ほ事實妊娠であるとすれば、妊娠くらゐ偶然のことはなく、又それくらゐ無意味なことはないのである。たゞ習慣的に子供が生まれるのを目出度いなどといふのは、宇治には、どうあつても考へられないことであつた。

婦人科の方のことは、そんな譯で十分身體の健康の回復するのを待つてゐたゝめに、一ケ月ばかり疑問のまゝでゐた。そのうち、もう十月もあと一週間ばかりといふ時になつて、多忙の爲に中一日置いて、ある日宇治が病院を見舞ふと、看護婦は、

「昨日やつと婦人科の先生に診ていたゞきました。」といつてゐたが、その結果は彼女もまだ知らなかつた。宇治も、どちらにしても、それが重い負擔であることは、もう免れられない運命であるので、強ゐて訊かうともしなかつた。わづかに一日でもいゝから、そんなことは訊きたくも知りたくもなかつた。それでも、やつぱり氣にかゝるので、

「どちらでせう？病氣でせうか、妊娠でせうか。」

「さあ、どちらでございますでせうか。まだ何とも伺ひませんのでございますが……」といつて、看護婦は小頸を傾けるやうにしてゐた。

「今日後ほど先生がお見えになりました時訊いて置きませう。……それとも今お訊きしてみませうか。」と看護婦はいつたが、宇治は、

「いや、また明日でも參ります。今日は少し急ぎの用事がありますから。」といつて、彼はドアを押して、急いで病室から出た。そして少しも早く郊外の自宅に歸つて子供を風呂に入れてやり、自分もゆつくり休息したかつたのだ。

その次の日又いつてみると、看護婦は委しいことを將目から聽いてゐた。

「産科の先生の御覧になりましたところによると、たゞ普通の妊娠で、何處にも異狀はないさうでございます。……ですから、どうぞ御安心なさるやうにとのことでございました。お目出たいのでございます。結構でございます、御病氣もお癒りになつてお産がおありになるのでございますから。」

看護婦は至極尤もなことをいふのであつた。が、宇治はそれを聞くと、その瞬間はつと失望を感じて、體中の血が凝結したやうな氣がした。何が目出度いどころか、全く餘計な物である。初は妊娠と覺悟してゐたものが、發病に引きつゞいて入院後それが疑はしくなつて來たので、宇治は心中に、やれ〱と思つてゐたのであつた。妊娠でなくて婦人科に屬する病氣である場合のことを考へても、それは容易ならぬことであるにはちがいないが、それでもまだ妊娠よりは始末が好いと思つて諦めてゐたのであつたが、何の異狀もない妊娠であると聞くことは、宇治にとつては實に絶望的のことであつた。第一あんな流行性腦炎に罹つて頭腦の機能が遲鈍になつてゐるうへに、腸炎の腸狹窄症を並發して絶食狀態から、流動物の期間が二週間も續いて、營養の衰へてゐる母體に宿つてゐる胎兒に健康な子の生まれる筈がない。宇治は、お悦の發病以來そんなことを思つてゐたので、もし妊娠であつた場合にしても、どうせ母體の健康上中止といふことになるのであらうと考へてゐた。彼が素人考へにそんなことを思ふまでもなく、愼重なエム教授が、その邊のことに手落のあらう道理もないと、すつかり信頼し切つてゐるのであつた。それが、たゞ普通の妊娠で何處に異狀もないと聞いては、素人考へにしては、どうも不思議で堪らない。

「エム先生はそれで何と仰有つたのでせうか？」看護婦に向つて、宇治は訊ふた。

「エム先生には、あたくし、お目にかゝりませんのでございますけれど、毎日此方の病室を診ておまはりになる先生からのお話しでございました。いづれエム先生からのご傳言でせうと思ふんでございます……そのうち先生にお眼にかゝることがあつ

たらお話しもするけれど、與様の御病氣は大變良くおなりになつたんださうでございます。姉娘も普通の姉娘で何處にも異常もないから、どうぞ御安心なさるやうに。……それで、そちらの御都合で、何時でも好い時に、もう御退院なすつてもよろしうございますから、そのおつもりでといふお話しございました。」

「あゝ、さうですか。」と、宇治は、何度訊き返へしても看護婦が同じことをいふので、それ以上に口を利く力も拔けたかと思ふほど失望を感じた。宇治が素人で考へるまでもなく、エム教授にしても又婦人科の先生にしても、無論姉娘中止の止むを得ざる場合までも考慮に入れて診察をしたにちがひない。それにもかゝはらず、普通の姉娘で、何處に異常もないといふのであるから、結局エム教授の藥石が立派に効を奏したのである。もう此の上は出産は免かることの出來ない運命と覺悟しなければならぬ。宇治は、地に伏して悔むも返らず、天に向つて訴へんとするも訴ふるに處なき、深刻なる情を感じた。心證にも記憶にも遺つてゐないやうな、ちよつとした、愼みのない性欲から、そんな、如何ともし難い大事實が發生して來たのであることを思ふと、人間の出生といふことは全く無意味なことである。そんな無意味なことの爲に子は親にとつて三界の桎梏となるのである。それくらゐなら、むしろ四五年前までの獨身時代の方が、どんなに氣樂であつたか知れない。その時分には又その時分で、屢々忌むべき悪疾に惱まされることがあつて、しかも、さういふ時に限り、たゞ偶然の性欲の不謹愼から、快樂の報償としては實に過重に失する悪疾に惱まされたのであつた。宇治は、これを思ひこれを思ふて、人間の生存について手も足も出せないやうな恐れを抱いた。そして、自分などとはあまり遠く隔絶してゐる人間であると思はれた釋迦の出家とか、やゝ近いところで西行の妻子を棄てゝ出家したことなどが、決して奇矯な行爲でなく、むしろ當然であるかの如くに考へられた。

お悦が、六十日近くも入院してゐた病院を退院して戻つたのは、それから四五日立つてからであつた。そして、段々月が重なるせゐでもあらうが、病氣は回復したといつても、頭腦の働きは、發病以前に比べても、又先の姙娠の時分のことを思つてみても、比較にならぬほど遲鈍になつて、聲も高い聲は出なくなり、言葉尻の呂律もよく分らなかつた。やうやう自分の用が足せるくらゐのもので、廢人同樣であつた。宇治はそんな母體に宿つてゐる子供のことを思ふと實に前途が暗澹として來るのであつた。それで、いつもかけ違つてばかりゐて、滅多に會ふ機會のなかつたエム教授を、お悦の退院後四五日過ぎてから、お禮かた〲私邸に訪問して直接病狀について訊いてみた。

門前に訪客の自働車が待つてゐて、客と一緒に丁度これから何處かへ出掛けようとしてゐる所であつたエム教授は、快く應接室で會つてくれた。教授は、待ち受けてゐたやうに、

「いかゞですか。その後別にお變りはありませんか。」と向うから訊いた。

「えゝ、別に變りはございません。今のところ食欲など極めて好い方でございます。いろ〱御心配下さいまして、有難うございました。」宇治は丁寧に禮をいつて、それから自分の見る所について、輕く教授の意向を訊いてみた。

と、教授は、それを打ち消すやうに、少しく早口にどもりながら、

「あのまゝでいゝ、あのまゝでいゝ。姙娠中止をしない方が好い。」といつて、それから又少しく言葉を落着けて

「中止といふことになると、普通の出産よりも、どうしても出血が多くなるから母體がそれだけ余計に疲勞することになる。……あのまゝにして置いた方が好い。」

「あゝ左樣でございますか。いづれその邊のことも私共素人が心配するまでもなくお考へ下さいましたことだらうとは

思つてゐましたけれど、……どうかと思ひまして。……」

「いや、大變に好くお癒りになつたのです。初から思ふと、良くなり過ぎるほど好くなりました。腦炎に腸狹窄に、それから妊娠と、この三つですから、私も一時はひどく心配しました。思つたよりも、ずつと好くなつた。非常に良くなりました。もう大丈夫です。」教授は又すこしくどもりながら言葉を強めていつた。

「お蔭さまで、助かりました。……それから食欲などは申分ないと思ひますけれど、只今のところ、まだ言葉尻などが少しく分りにくかつたりいたしますが、あれは段々に直りますでせうか。」

「えゝ、段々直ります。そのうち分娩して身體が輕くなれば追々に直ります。」

「あゝ、左様でございますか。…………それから、こんなことをお訊ねするのは、少しく無理な質問かとぞんじますが、あの通りの病氣中に胎内に育ちました子供が、好い鹽梅に普通の出産でありましても、段々に成長してから、たとへば白痴になるとか、腦を患ふとかいふやうなことはないものでございませうか。」

「さあ、それは。…………まあ、大きくなつて見なければ、それは分らないが、大抵大丈夫だらうと思ふんです。さう大して熱も高かつたといふのでもないしするから、新陳代謝がひどく行はれたといふこともないから。…………あんまり胎兒に影響はないでせうと思ひます。」

教授は、最後の言葉を、はつきり斷案を下すやうにいつたが、又言葉を更めて、

「子供よりも今のところ母體の方が大事、母體の健康を十分回復することが、何より肝腎です。……多分子供には影響ないでせう。」

宇治は、それでいくらか安心して教授室を辭して戻つた。

それから十一月十二月の二た月は瞬く間に立つて、また年が改まつた。出産は早くつて二月の末か三月の初めだらうといつてゐた。本來大事とりの宇治は、重患の後の出産であるので、大事のうへにも大事をとつて、それにエム教授の注意もあつて、今度のお産には産婆だけでなく婦人科の醫者にも診てもらつた方がい丶といふことであつたから、何處かの病院で出産さしたいと思つたのであるが、もう去年の九月と十月との二ケ月を大學病院で暮したうへに、今度又出産の爲に病院へ行くとすれば、殆ど年中病院へ入つて居なければならぬ。それも爲方がないとして、しかしながら、いくら大事を取るにしても、精確に何時とも豫知することの出來ない出産を、幾日も前から病院に入つて待つてゐる譯にもいかないし、いくら、去年の重患以後殆ど廢人同様のお悅であるにしても、彼女が家に居ると、ゐないのとは、宇治が一寸東京まで用事で出掛けて往くにも留守の心配が助かつた。それに東京の方の病院では萬止むを得ざる場合でない限り、往復にも可なり厄介であるので、やつぱり平素から掛り附けの村松醫師が直な人物で、氣が張らなくつてい丶のと、近ごろ産院を經營してゐるので、出産はそこへ行つてすることに豫定してゐた。それで、毎月一度づつ來診してくれる産婆のほかに、村松醫師にも、もう八ケ月の時分から月に二三度くらゐは來て診てもらつてゐたが、重患の後の出産であるにも係はらず、醫者も産婆も妊娠は極めて順調で、胎兒も健康であるといつてゐた。

それでも、段々日數の重なるにつれて氣になるので、宇治は、一日のうちに何度といふこともなく、お悅の顏を見るたびに、

「どうだ、まだ大丈夫かねえ、出さうにないかえ？」といつて訊いてゐた。その度に彼女は、

「まだ大丈夫でせう。」と、口の中で返事をするのであつた。妊娠は順調であるといつても、彼女はまだ、いつまでも苦

葉の語尾など十分に舌が廻らなかつた。

そのうち、早くて二月の末か三月の初といつてゐた二月の中旬も過ぎて二十日間近になつた。宇治は、茶の室の火鉢の傍にぼんやり坐はつてゐる病人じみたお悦の顔を見て、

「どうだ、まだか。また大騒ぎをするやうなことがあつては、私の方が參つてしまふ……もう出る時分ぢやないか。」

と、氣づかはしさうにいふと、彼女はいつものとほり舌のよく廻らない、口の中で消えるやうな語調で、

「もう、あんまり遠くはありませんねえ。」といふのであつた。それが、何時になつても同じことなので、

「さうか、そんな氣持ちがするか。」宇治は重ねてくどく念を押すやうに訊いた。

「えゝ、そんな氣持ちがします。」

「さうか、それぢや二三日中に村松さんへ行くことにしよう。」といつて、彼は、ちよいと立つて、茶簞笥の上の壁に掛つてゐた、商人が年玉に持つて來た柱暦の、もう幾日も日の過ぎたまゝになつてゐるのを千切つて、日を見た。

「明後日――二十一日は佛滅だ。その次の二十二日は大安となつてゐる。」

「おや二十二日が好いでせう。」お悦もいつた。

「まあ、日なんかどうでもいゝやうなものゝ、何も佛滅の日を選んで行くこともない。それでは二十二日として置いて、ともかくも村松に、もう一度その前に來て診てもらはう。」

それから翌日醫者を呼びに遣つて、村松醫師は、いつもの午後の外診の序に立寄つてくれた。そして一とゝほり診たあとで、何時の時でも、事を輕く觀過ぎる傾のある村松醫師は、

「まだ早いです。……　……そりやあ今からでも私の方へおいでになるなら、なつても構ひませんが、たゞ一人乘りと

してゐて窮屈なさるだらうと思ふ。ナニそれに、奥さんはもう、これが始めてのお産といふのではないんですから、少し痛み出してからでも間に合ひますよ。痛み出したら、早速私の方へその事を知らして下されば、私の方の準備もさして置きますし、私が直ぐ來て手當てをしますから、さうして置いて私の處へお出で下すつても十分間に合ひます。」

宇治は、村松醫がさういふのを聞いてゐて、素人考へに少しく不安であつたが、

「はあ、痛み出してからでも、貴方の處まで連れて行くことが出來るでせうか？」

「えゝ、大丈夫ですよ。」と、醫者は、例のとほり極めて氣樂にいふのであつた。

それでもまだ宇治は甚だ不安を感じたが、醫者のいふことであるから、さうかと思つて、それではもう暫くしてからいよ／＼といふ間際になつて連れて行くことにして、明日往くことは中止にした。

それから又三日四日、宇治の忙しい日は、ほかのことを忘れてゐる間に消えるやうに立つてしまつた。そして廿五日の朝であつた。お悦は四時頃から、腹がしく／＼痛みを覺えた。けれども、今までにもそんなことは時々あることなので、それが出産の前兆であるとは思はなかつた。毎朝その頃になると女中に添寢をさしてゐる子供が一としきり眼を覺まして泣き出すので、女中は二人とも床を離れて牛乳を沸かしたり子供を賺かしたりしてゐた。そして、お悦が度々便所に立つては寢床の置炬燵に凭れて太息を吐いてゐるのを聞いて、

「奥さんは、何だか苦しさうだ。もう産れるんぢやないだらうか。」と、彼女等は互に囁き合つてゐた。

二階に獨りで寢てゐる宇治は、階下にそんなことがあるのも知らずにゐた。彼は冬でも先のうちは、もつと早く離床してゐたのであつたが、近ごろ毎月一度づつ風邪を引いて寢るのが恐しくなつて、この頃は朝はゆつくり離床する習慣

になり、八時頃まだ床の中に居るところへ、お悦が階段をそうつと匍ふやうにして上つて來て、襖の外から、勢のない低聲で、

「これから村松さんに往きませうか。」といつた。

その時まだ、醒めきらなかつた宇治の頭はその聲にすつかり冴えてしまつて、いきなり床の中から、

「出さうなのか？」と聲をかけた。

「えゝ、何だか出さうな……」

「ぢや早くしなければ……」と、いひ〳〵宇治は、むくり衾を蹴つてはね起き、着物を着て、階段を驅け下りて來て女中を呼び、

「おまへ、これからすぐ俥を呼びにいつてくれ。それから、そのついでに村松さんにいつて、これからすぐに參りますからその用意をして置いて下さいと、さういつて來てもらはう。」

と、一人の女中を出しておいて、茶の室の六疊に取つた寢床の上に起き上つて炬燵に凭れかゝりながら、面を顰めて、腹を抑へてゐるお悦を見て、

「どうかねえ、間に合ふかねえ？」宇治は、氣づかはしさうに幾度も訊いた。

「大丈夫でせう。」お悦は聲を出すのも大儀さうにいふのであつた。

宇治は、自分は醫者でもなく、又お産をした經驗もないけれども、こんなに腹を抑へて、痛みを訴えてゐる産婦を、假ひさう遠くない處とはいひながら、それでも十五六町以上はある距離の處へ人力車に載せて連れて往くのは、どんなものであらうかと、心配になつて來た。

彼は、用事を一つしかけておいては又手を留めて、お悦の傍に来て、

「大丈夫かねえ、間に合ひさうか？」と、訊ねた。

「大抵間に合ふでせう。」彼女の方でもその度に同じことをいつてゐた。

「どうも六ケしいものだなあ。」宇治は心配さうに一と口いつて置いては、何かしらあちこち動いてゐた。まだ顔も洗はずに居た。そこへ門の外から、

「今日は、伸がまゐりました。」と聲をかけた。外はしめ〳〵と湿つて寒い朝であつた。

「やあ、御苦労。今直ぐ出るから、一寸待つて、」宇治はそちらへ言葉をかけた。

お悦は何時の間にか、これでも自分で着物を更めて、また寝床の上に座はりながら机燵に凭れて苦しさうな額を顰めてゐた。そして、もう一人の女中に子供を背負はして、つひそこまで鼻紙を取りに遣つた。

宇治は又座敷の方へ入つて、

「おい、荷物はどれを持つて行くのだ？」と訊くと、

「その行李を持つて行くつもりです。」お悦は微かに返事をした。

見ると、不断子供の着替などを突込んで置く粗末な竹行李に持つて行くだけの物は一と通り用意してゐる。

「これを持つて行くのか。あんまり行李が粗末おやないか、私の、あの柳のトランクにしやう。」それは、お悦が大學の病院にも持つていつてゐた物であつた。持つて歸つてから形付ける間もなく、やつぱり三疊の納戸に置いたまゝであつた。

そのうち鼻紙を買ひにいつた女中が戻つて来ると、お悦は、いそいで、その鼻紙を取つて、ついでに自分で外套と襟巻とだけを持つて玄關まで出して置いて、そのまゝ玄關脇の廊下の行留りにある便處に入つた。

宇治は行李を入れ換へるのに少しく手間お取れることを思つて、又玄關まで出ていつて、
「車屋さん一寸待つてゐてくれ。今日は村松さんまでお產をする者を連れて行くので・・」
「あゝ、左樣でございますか、どうぞ御ゆつくりなすつて。」
そんなことをいつてゐるところで、宇治は、すぐ脇の便所の中でお悅がひどく苦しさうな聲を出して唸つてゐるのを耳にした。それで便所の入口を覗いて、
「おい、どうしたのだ?」と訊くと、
「もう出さうになつた。」と、やつと苦しさうな聲を洩した。
「出さうになつた?!………そら見ろ、私が言はないことぢやない。……それは大變だ。」
さういつて宇治は便所の中に身體を入れると、お悅はもう、そのまゝそこにへたばりさうになるのを、宇治は兩脇に手を差入れて、抱き上げるやうにしながら、便所の中から連れ出さうとしたが、彼女は、便所を跨ぐことさへもやつとであつた。
宇治は、お悅の身體を支へながら、自分の豫ねて憂慮してゐたことが、不幸にしてまさしく的中したことを思ふて、頻りに嘆聲を洩した。
「だから、云はないことぢやない。あの村松の藪醫者め!」
さういふ內にもお悅は、宇治に扶けられながら、緣側まで一足二足步み出たが、とても堪へられさうもなく、
「あゝ、もう出る〳〵。」と、苦しい聲を發した。
「出る?!……………困るなあ。」宇治もお悅と同じやうに唸る聲を發した。「こんなことになりはしないかと思つた

から、此の岡村松へ往くといふのを、あの村松の藪醫者めが、まだ早いといふもんだから……醫者のくせに、産婦が腹が痛み出してから、連れて來てもいゝといふ奴があるものか。」

宇治がそんな小言をいひながらも、又二足三あし縁側を歩いて、やう／＼、お悦の寢床のある六疊の障子際まで廻つて來たところで、彼女はもう一寸も足が先きへ出なくなつてしまつた。そして、そこに立ちすくんだまゝ、切なさうに、

「あゝ、出た／＼。」と苦しい息を吐いた。

「出た？……」宇治は絶望的な聲を發しながら、心の中では、何といふ災難に、かう度々出遭ふことであらうかと歎息した。そして、

「確乎してゐないといけないよ。」と、お悦に氣勢を添えながら、彼女の身體を支へたまゝ、足許の方をじつと覗てゐると、そこへ生々しい胎兒がぬる／＼と、着物の裾から滑り落ちて來て、冷い縁側の板の上に、ことりと音をした。それは、たゞ動物の胎兒といふよりほかに、とても人間とは思はれぬ不氣味な物であつた。不淨な液體がぬら／＼身體中に附着いてゐる。今まで居た母の胎內から、はじめて外界に出て來ると、そこは菰の上といひたいが、それよりも冷たく堅い板の上であつた。そこへ後頭部を打ちつけて落ちて來たので、呱々の聲をも立てずに、たゞ微かに「くう」といひながら、顏を顰めて、無明の手足を蠢めかしてゐた。——それは、縁側に取入れてある手洗鉢にも薄氷の張つてゐるほどの冷い朝であつた。

宇治は、慘憺たるその光景に先づ胸が潰れたが、此の場合自分が弱い氣を見せてはならぬと思つた。そして直ぐにも、冷い板の上から胎兒を取り上げてやりたいと思つたが、お悦を支へた兩手を離すことが出來なかつた。あんな重患の時母親の胎內に居つたうへに、何の因緣でか、かうして堅い冷い縁側の板の上に音のするほど後頭部を打ち附けて落

ちて來た不幸なる胎兒の生命は疑はしいものであつた。そして、そんな小さい動物の一命よりもお悅の健康の方が大事であつた。

彼女は動くことも蹲むことも出來ず、やつぱり棒立ちにそこに突立つたまゝ、緣の上に落ちて來た胎兒の方を、氣に懸るやうに、そつと頸を捩ぢ向けて見てゐた。

「大丈夫だよ。お前が確りしてゐないといけないよ。」

宇治は時々さういつてお悅を勵ました。彼がさういひながらその次の瞬間に本能的に注意して見たのは胎兒が女であるか男であるかであつた。

「あゝ又女だ。」宇治は口に出していつた。

「よし／＼女でいゝ／＼。」

それは、かうして文字の上に書き表はされた所を見れば何秒かの時間が經過してゐることになるが、事實は凡て同じ瞬間であつた。それから宇治は、お悅を扶けてやつとのことで、閾一つを跨いでそうつと寢床の上に連れて來た。彼女は蒲團の上に尻を置いたまゝ身を横にするのも大儀さうに、そのまゝ炬燵に凭れかゝつたまゝ苦んでゐた。

その時醫者に使にいつた一人の女中は生憎まだ歸つて來なかつた。も一人子供を負つた女中は、あまりに急劇な珍事の出來にこれもまるで釘付けにされたやうに家の中に突立つたまゝ、お悅を支へた宇治の手の空くまで見てゐるよりほかはなかつた。そして、宇治が、お悅の傍を離れて緣の上に蠢いてゐる胎兒の始末をしようとする瞬間、彼女は、すぐ奧の間に入つていつて襁褓の洗つたのを取つて來て、「これにでも。」といつて、宇治に渡した。

宇治はそれを緣の上に擴げて、その中に、ぬる／＼した不淨なものゝ附着いてゐる胎兒を兩掌に掬ひ取つて包んだ。

そしてそれを障子の内の隅の方に置いとくと、すぐ玄關に飛んで出て、
「俥屋さん、もう子供が出てしまつた。その俥を持つてすぐ村松さんを迎へにいつて下さい。」
玄關の土間に突立つて先刻からの騷きを知つてゐた俥屋も驚いたやうに、
「それは大變です。え、かしこまりました。」と、いつてそのまゝ外に飛んで出た。
宇治は、生々しい胎兒を拘ひ上げたまゝまだ洗ふこともしなかつた兩掌をさつと手洗鉢の水で洗ひ落して又座敷の方へ戻つて來ると、緣側から座敷、夜具などは不淨な下りもので、そこら中足の踏み場もないまでに慘怛たる光景を呈してゐた。女中の背中に負ぶさつた、まだ何にも解らない子供までが疊の上に斑々と流れてゐる眞紅な物を見て、驚いたやうに不思議さうな眼を瞠つてゐた。子供にこんな處を見せて小さい神經を刺戟さすのは良くないことだと思つたが、爲方がなかつた。
お悦は炬燵に凭れかゝつたまゝ、まだ身動きすることも出來なかつた。
「どうだね、ひどく痛むか。」
「えゝ大分痛みます。」搾るやうな聲を出した。
「ひどく下りものがするか？」
「えゝ、出てゐます。」
「困つたなあ！」と、頻りに吐聲を洩すばかりで、宇治は何から手を下していゝか途法に暮れて座敷の中をあつちへいつたり、此方へ來たりするばかりであつた。ふと氣が付いて見ると自分の着物の裾から足袋はべた〳〵に汚れてゐたが、そんなことに構つてゐられなかつた。そしてそこに突立つたまゝ村松醫師の俥を ひたすら叫つてゐた。あれほど大事

に大事を取つて、やつと重患後の姙婦を今日まで無事に過させて來たにも係はらず、單へに村松醫師の輕卒な處斷から、とゞの詰まりやつぱり自分の憂ひてゐたとほりになつたのだが、いくら悔んでも取り返しの附かない腹立たしさであつた。

「村松の藪醫者奴！此方が三日も前から入院させようといふのに、まだ早い、痛み出してからでも間に合ふなどと吐かすもんだから、たうとう又こんな事になつてしまつたのだ。……去年の九月の初めお前があんな大病に罹つて夜の中からもう間違つたことを云つてゐるにも係はらず、朝になつて女中が心配して、旦那樣にお知らせしませうかと、玄關まで送り出して訊くと、なに、大した事はないから知らさなくつても可いといつて、笑つて歸つたと、私は女中に後から聞いた。既に病人が違つたことを口にするまでになつてゐるのに、何んで大した事ではないんだ。そして、あの大騷ぎをして、二ヶ月も大學病院に入院して、やつと良くなつてどうぞ無事にお産をするやうにと神佛に祈るやうな氣で、私の性分で大事の上にも大事を取つて、これほど精神を勞してゐるのに、少しもその甲斐がないんだもの。お前や子供よりも自分の方が先きへ患ひ附いて死んでしまふ。」

宇治はさういつて一圖に慨嘆の聲を發した。

「何だ醫者の癖に、産婦が陣痛を起してから連れていつても間に合ふなんて、輕卒にも程があるぢやないか。去年の重患の時にエム先生は、用意が空騷ぎに終はるやうなことがあつても、それは結局仕合せなのであるから、自分が責任を以つて診る以上何處までも大事を取らなければならぬといつて病院に連れていつたのだ。そして折角エム先生の心配で癒つたものを、又こんなことにしてしまつた。」

宇治は、座敷一面疊の上といはず、蒲團の上といはず、生々しい血液の斑々として流れてゐる凄じい光景を眼にする

につけ倍々昂奮して來るのであつた。
「もうあの藪醫者めには、一度ならず二度までも懲々した。これつきり頼まない。」彼は一人で腹を立てゝゐた。
そこへ持つて來て陽氣が今朝は又意地の惡いほど寒かつた。宇治はそんなことをいひながら座敷の中をあつちこつちしてゐるばかりで何處から手を附けていゝやら分らなかつたが、先刻座敷の障子際に布片に包んだまゝ放棄つてあつた胎兒の處へ又行つてみた。母親が重患の最中に胎内に居つたといふだけでさへ、宇治は悲觀してゐるのに、堅い縁の上に後頭部を打ち附けて生まれ落ちて來たのであるから、どうせ、今にそのまゝ干着いてしまふものであらうと思つた。
それでも、まだ生きてゐるかどうしてゐるかと覗いてみると、胎兒は襁褓の中で蟲のやうにしく／＼鳴いてゐる。
「死にもしないな。寒いだらうに……」といつて、宇治はその時やうやく氣が着いて瓦斯ストーブの近くに持つて來て置いた。醫者が來たら怒鳴りつけてやらうと思つて待つてゐたが、そんなに思つて待つほど醫者の來るのが遲いやうに思はれた。
宇治はもう靜つとしてゐられないで、何度となく門から先の方まで出て見たが、なか／＼俥は戻つて來なかつた。さうして又家の門に入つて來ては、お悦に聲を掛けて、
「どうだね、ひどく痛むか。大丈夫かね。確りしてゐないといけないよ。」と勵ました。
それから又ストーブの近くに寄つていつて胎兒をそつと覗いてみた。まだ蠢いてゐるところを見ると死んではゐないやうである。
「本當に飛んでもないことだ……これがもう一寸でも早かつたら便所の中へ産み落すところぢやないか。……又もう少しく遲かつたら、きつと途中で俥の上で産み落すにちがひない。何だ醫者の癖に、産婦が腹が痛み出してから連れ

て來ても間に合ふなんて、そんな輕卒なことをいふ醫者があるものか。もし途中で俥の上でゝも産んだら大變ぢやないか。二人とも生命に關はるところだ。」

宇治は又そこに突立つて、同じことをいつて怒つてゐた。

そこへ門の外で俥が留つた音がしたので、彼は急いで玄關に走り出た。村松醫師も急いで俥から飛び下りて來た。

「や、おいそがしいところを大變です。………お宅へ上がる間もなく、もう出てしまひました。………それも緣の上に落してしまひました。ひどく頭を打つたやうですが、どんなものでせうか？」宇治は、顏を顰めながら、まだ玄關から上りもせぬ醫者に向つてさういつて溢した。

「なに、大丈夫です。構ひませんよ。」村松は靜にいひながら、外套を脫ぎ棄てゝおいて産室の方へ急いで入つていつた。

そして脈膊や胸のあたりを一應診察してみたが産婦には何處にも異狀はなかつた。

「えゝ何處も何ともありませんよ。」村松醫師は宇治の方を見ていつた。

「あゝさうですか。………あのとほり赤ン坊を包んだまゝ置いてあるんですが、どんなものでせう、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。そんなに御心配はありませんよ。」醫者は笑ひながらいつた。

「今日は又このとほり格別に寒いんですから、凍え死ぬやうなことがありはせぬかと思つて。」

「そんなことはありませんよ。」といひながら、

「まあ、こつちを先きにして置いて………」と醫者は急いで産婦の方の處置をしてゐた。

そんな次第で産湯を沸かしてゐる間もなかつた。

それから産婦の方の始末がひとゝほり形付いたところで、

「さあ、こちらはこれで先づよろしい。それから赤ちやんの方だ。」といつて、醫者は、やつと、繦緥に包んだまゝ座敷の隅に放棄されてゐた胎兒を取り上げた。

「おゝ、これは好い具合に又臍の緒がひとりでに切れてゐる。………なか〳〵こんなにうまくいきませんよ。」といいながら、じいつと新しい手拭に包んで盥の中に浸けた。

「大分長く寒いめをしてゐるから、少し長く暖めてゐなければ。」といひながら、醫者は石鹸を使つて頭から脚の方まで全部を奇麗に洗つたあとで尚ほ暫く湯に浸けてゐた。

「おゝ、これは、なか〳〵下脹れの好い縹緻だ。」

宇治も傍から盥の中を覗き込んだ。先刻緣の上に落ちた處は、とても、これが人間の子とは思はれぬほど不様であつたのが、さうして湯を使はしてみると、始めて、やゝ形が整つて來たのも不思議であつた。

「どうですかな。頭を打ち付けて、そのうへ長い間打つちやつて置いたりしたのですから、駄目ぢやないでせうか。」

「そんな氣づかひはありませんよ。」村松醫師は少し語を強めて又笑ひながら云つた。

それでも宇治はまだ全く危惧の念を拭ひ去ることは出來なかつた。初めから無目的に生まれて來た子供は、將來の完全なる發育も甚だ疑はしいものであつたが、不幸なるその子はもう生まれる時から、そんな偶然な機會によつて冷たい板の上に逆さまに落ちて來たのである。彼は醫者の村松がいふやうにさう樂天的に考へてゐられなかつた。考へ樣によつては、何處までも〳〵惡い因緣が附き纏つてゐるものゝやうに、宇治には考へられた。平常迷信的のことはあんまり

意に介しない方の宇治であつたが、何時も自分では大事の上にも大事を取りながら、ある不可抗力のやうな運命に呪はれてゐるやうな氣がしてゐた。そして胎内にゐた時分母親が腦の疾患を患つたり、頭を打ち附けて產まれて來たりした結果、假ひ成長しても、今に腦に缺陷のある子供になることが豫定された運命であるやうに思はれてならなかつた。

（おはり）

緣談窶（續篇）　里見弴

右作者より三號分載の希望にて既に中篇の稿を送り來りたるも、後篇の完結するを待ちて纏めて公表するの讀者に對して一層便宜なるべきを思ひ六月號に割愛したり。この旨作者並びに讀者の御諒恕を乞ふ。（編者記）

中央公論大賣捌所

同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪　市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都　市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市　富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれは一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあべし。

取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豊國通信社　日本廣告社
信賴社　金蘭社　一星社

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三三〇五番なり

一郵劵代用　は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらされは雜誌發送せず

　一金二圓以上五圓迄　金七錢　（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必す返信料を要す

大正十四年四月廿日印刷納本
大正十四年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ内三〇二（當分不通）
牛込　五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社　秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.